

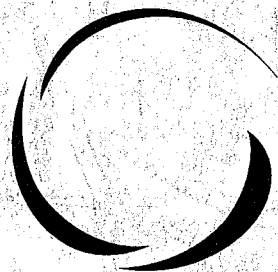
C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト

海原 治

(元内閣国防会議事務局長)

オーラルヒストリー

〈上巻〉



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

目次

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト 海原治 オーラルヒストリー〈上巻〉

【第一回】	略歴の誤りを正す	1
	伯父・父親のことなど	3
	中学四年で一高へ	8
	東京帝国大学に学ぶ	14
【第二回】	内務省入省——大臣官房文書課勤務	24
	斎藤隆夫の肅軍演説を聴く	33
	入営——第十一師団歩兵第四十三連隊	35
	経理部幹部候補生になる	44
	資材調達で朝鮮出張	52
【第三回】	内務班の初年兵教育を正す	63
	区処と指揮	72
	本土移駐——決戦準備	81
	戦争終結——復員業務に専念	88
【第四回】	海原隊の解散・結婚	92
	三カ月の交通課長	102
	生活課長として——闇市・テキ屋対策	115
	盟友・小佐野賢治との誓い	117
	国警企画課長——警察法改正に着手	124
【第五回】	警察法の改正——「法律の刑事」として	130
	アメリカ視察でマッカーサーを「批判」	139
	秘密裡にダレス特使と会食	144
	警察予備隊の創設——人事を担当する	155
	旧内務官僚VS旧陸海軍	164
【第六回】	自治体警察の連絡調整に当たるとして——東京警察管区本部警備部長	171
	共産党の武力闘争の実態	175
	保安課長の職務とは？——保安庁保安局	184
	任務至上主義の弊害	188
【第七回】	敬礼を巡る「陸」と「海」の対立	195
	「陸原」と呼ばれて	197
	池田・ロバートソン会談——公電を暗記する	199
	歴史の「語り部」として	204
	敬礼を巡る「陸」と「海」の対立	215
	「陸原」と呼ばれて	219
	池田・ロバートソン会談——公電を暗記する	223
	歴史の「語り部」として	231
	敬礼を巡る「陸」と「海」の対立	233
	「陸原」と呼ばれて	241
	池田・ロバートソン会談——公電を暗記する	253
	歴史の「語り部」として	260

- ・ バッジ・システムの受注競争 109
- ・ 岸・佐藤vs.河野一郎——F104の後継機を巡って 117
- ・ 「上林山お国入り事件」の顛末 124

【第十五回】 133

- ・ 事前協議とは何か——ラオス問題 135
- ・ キューバ危機とCIA情報 144
- ・ 三次防と「照顧脚下」 152
- ・ 日米安保協議会の実態 160

【第十六回】 169

- ・ 「三矢研究」と「三矢計画」 171
- ・ 松野頼三長官の「大人事」 181
- ・ 悪事に加担せず——政治と防衛庁 186
- ・ 非現実的な国防論 193

【第十七回】 201

- ・ 海原清平の「二十五日会」 203
- ・ 自動延長か固定延長か——安保改定問題 207
- ・ 旧海軍派と「久住レポート」 215
- ・ 「有事駐留論」を排す 220
- ・ 反響を呼んだ『科学の驚異』 226
- ・ 日米間の技術格差——国産化問題 230

【第十八回】 237

- ・ 兵器の国産化と「武器輸出三原則」 239

- ・ 「巻き込まれ論」と朝日新聞 244
- ・ 官房長更迭の一部始終 249
- ・ 国防会議事務局とは？ 255
- ・ 予算先取りの「沖縄配備」 264

【第十九回】 273

- ・ 情けない日本の政治家たち 275
- ・ 「中曽根構想」を潰す 281
- ・ 「新防衛力整備計画」を解体する 289
- ・ 「大綱」から「中曽根趣味」を除く 296
- ・ 三島由紀夫と陸幕の関係 301

【第二十回】 307

- ・ 大臣の三つのタイプ 309
- ・ 「重要法案」を巡る攻防戦 313
- ・ 勇退・留任、退官の真相 318
- ・ 一兵卒の評論家として 325
- ・ 誰が日本を滅ぼしたか 332

- ・ あとがき 340
- ・ 資料 341

〈速記〉 丹羽 清隆

海原 治(かいはら おさむ) 略歴

- 1917年 2月 大阪に生まれる (本籍 徳島県)
- 1938年10月 高等文官試験行政科合格
- 1939年 3月 東京帝国大学法学部法律学科卒業
- 4月 内務省大臣官房文書課
- 1940年 1月 高知県地方事務官
- 2月 入営 歩兵二等兵
- 1945年 8月 主計大尉
- 9月 高知県渉外課長
- 1946年 8月 警視庁警視
- 1948年 8月 国家地方警察本部警視 総務部企画課長
- 1951年 6月 国家地方警察警視正 東京警察管区本部警備部長
- 1952年 8月 保安庁保安局保安課長
- 1954年 7月 防衛庁防衛局第一課長
- 1957年11月 外務省在アメリカ合衆国日本国大使館参事官
- 1960年 2月 防衛庁長官官房考査官
- 9月 防衛庁防衛審議官
- 12月 防衛庁防衛局長
- 1965年 6月 防衛庁長官官房長
- 1967年 7月 内閣国防会議事務局長
- 1972年12月 退官

海原 治 オーラルヒストリー

第1回

開催日：1998年10月5日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

御厨 貴(政策研究大学院大学教授)

飯尾 潤(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第1回 質問項目

今回は、まず、先生のお生まれから大学卒業のころまでのお話を伺いたと思います。それ以後のお話を伺う上での、いわば背景になるような事項です。それについてお話をいたくなかで、関連した事項についてご質問させていただきたいと思ひます。

- ① 先生は大正6年(1917年)のお生まれで、本籍が徳島県ということですが、先生に関する記事では徳島でお育ちになったとか、大阪でお生まれになったとかいろいろな説があるようです。ご両親・ご親戚、友人や育った環境など、お聞かせ下さい。
- ② ご親戚という点では、伯父にあられる海原清平氏(徳島県選出衆議院議員<大正9年~昭和3年>、政友本党、のち自由民主党総務)が大野伴睦と親しかったということ、ご著書の中に書いておられます。海原清平氏について、ご記憶にあることをお聞かせ下さい。
- ③ 先生が小学生のころ、大正から昭和に変わっています(1926年)。先生の小・中学生のころは、昭和恐慌のころに当たっていますが、その当時、何か印象に残っていることはありますか。小・中学生の目から、どのように周りの世界を見ておられましたか。
- ④ 先生の高等学校時代のことについて伺ひます。世は満州事変を経て、軍の力が強くなり、一方で農村の不況は深刻で労働争議も増加し、学生の共産主義運動も盛んな時代でした。もっとも多感な高等学校の学生として、どのような学生生活を送っておられましたか。また、特に親しかった人、影響を受けた人などはおられますか。
- ⑤ 昭和14年(1939年)、東京帝国大学法学部法律学科をご卒業になっています。当時日中戦争も長期化の様相を呈してきたところで、戦時色が強くなってきています。東大でも河合栄治郎の著書が発禁になったり、平賀譲が総長になって「平賀肅正」を始めたのも、このころでした。先生が学生生活を過ごされたのは、どのような時代でしたでしょうか。ご記憶にある教授、友人、エピソードなどがありましたら、お願いいたします。

略歴の誤りを正す

海原 ……今日の分は一応資料を用意して参りました。言葉だけではちよつといけませんのでね。今日お話しすることの参考です。まず、伯父の海原清平のこと。ご存知の方がほとんどだと思うんですけども、幸い書いたものがありましたから持ってきました。しかし、間違っていることがいっぱいあるんです。ご質問に私のことについている書いてありますが、それだけではないということの証拠に持ってきたわけです。今日一回やってみまして、話の密度の点はそれからということにいたします。私はいま全然閑ですから、いつでも参ります。

伊藤 それでは一番最初にお生まれのところから。

海原 そうですね。そこから入っていかなければいけないですね。どこで生まれたかですね。二説ある(笑い)。先ほど言いかけてましたけれども、いかに活字が嘘を書くかです。書かれますと何ともならないです。海原清平より前に、私のことからいきますか。

私の生まれは大阪なんです。本籍地は徳島なんです。なぜそんなことになっているかということをご説明しなければならぬですね。まず、順序としまして、そこから入りましょう。

「『現代日本人物事典』の海原治の項目と『陰の主役』のコピーを参照しながら」上は事典なんです。大部なものですよ。なぜこれを知ったかと言いますと、私は評論家をやっていましたから、講演である

ところに行ったら、私の経歴書が回っているんです。見たら、これを引用しているんです。それで、私はこの事典を買ったわけです。そこに「線を引いて訂正して」ありますが、それだけ違いがあるんです。

この『現代日本人物事典』は旺文社ですからね。こんなに厚いものですよ。読んでみたら、そこに印をつけましたけれども、これだけ間違いがある。しかし事典に載ったものは、もう訂正不可能なんです。執筆者「名」が書いてあるでしょう。知らせてみても、もういまさら何ともならないですね。諦めるよりしようがない。そこで話を聞きに来られた方には、これは間違っていますからと言って説明したわけですからね。下の方「『陰の主役』」は、この前、後藤田(正晴)君の会のときに言ったんですけれども、この行政通信社も間違っている。

上「『現代日本人物事典』」を、まずご説明します。一番上に「徳島県鳴門市生れ」と書いてある。鳴門は本籍地があるだけなんです。なぜ本籍地がそこにあるかというと、私の祖父、海原憐平と言いますが、これが徳島の地方裁判所の判事をやっています、辞めてから、弁護士をやっていたわけです。その淵源で徳島県に因縁があるわけです。

伊藤 先祖からというわけではないんですか。

海原 先祖から、そのまた先はどうも徳島らしいんですけども。祖父は割合有名だったんです。徳島の地方裁判所の予審判事をやっていました。予審判事としては日本のトップレベルだという話になって、明治の初めに三人留学をする候補者に選ばれたんです。明治の初めの頃ですから、アメリカに行くというのは大変なことですね。しかし母親にアメリカ行きを反対されたんです。それで憐平は米国に行か

ないで、淡路島とか徳島のあたりで終わったわけですよ。

そして、辞めてから弁護士の開業をして、私の親父が手伝ってました。その弁護士時代に、ひとつの非常に有名な判決があるんです「徳島小学校遊動円棒事件のコピーを示す」。この判決は日本で初めて公法人の損害賠償責任が認められたということで、判例集には必ず出ています。その頃は弁護士でなくても、法廷で補助ができたんですね。私の親父は憐平の補助をしていたわけです。それが徳島との因縁です。

そして伯父の海原清平は、そこ「『神戸新聞・デイリースポーツ社報』(昭和四十四年七月二十五日付)のコピーを示す」に書いてありますように、神戸新聞に勤めていまして、政治部長をやっていました。が、床次竹二郎さんにかわいがられて、それから後は鳩山一郎氏のところに行くわけです。「鳩山一郎の懐刀」と言われていたようですよけれども、そういう関係で政治家になるわけです。代議士で徳島から二回出ました。それで院外団との関係も出てくるわけですが。戦後、地元から出てくれという話があつて、私に相談があつたけれど、私はやめなさいと言つたんです。「もう伯父さんの時代とは違う。いまさら伯父さんのような、昔の政友会、民政党の人間が出て行っても何の役にも立たないからおやめなさい」と言つて、私がやめさせちゃつたんです。

私についての間違つているところを指摘しますと、「徳島県鳴門市生れ」というのは間違いです。大阪で生まれています。番地も書いてあります「大阪府西成郡中津町下参番と書かれています」。

それから五行目に「国警企画部長」と書いてありますが、こんなポストはないんです。国警は国家地方警察本部の略で企画課長です。それから「防衛庁に移り」ではなく、これは「保安庁」に移つたんです。

その三行下ですけれども、「第三次計画」となっていますけれども、「第二次」です。「三次」は官房長になっていましたから、発言しないんです。

そのまた二行下に「シベリアン・コントロール(文官統制)」と書いてありますが、これは訳が間違いです。シベリアン・コントロールということについての訳は、正しいものがわかりません。辞典を引きますと、政治支配、政治統制、文官支配、文官統制、と四つぐらい訳があります。もともとシベリアンという言葉が日本にはございません。憲法の「大臣はシベリアンでなければならぬ」ということの解釈について、法制局がまことに珍しい定義をしました。「旧職業軍人であつて、極端な国家主義思想を持たないものをシベリアン」と消極的な定義をしているんです。こんなことはありません。アメリカでは大統領の下の各省長官には民間の人々も任命されます。そのシベリアンが定義できませんから、ましてやシベリアン・コントロールなんというものは定義できません。有斐閣の『新法律学辞典』を引きますと、「文官統制の原則」としてあり、また「文官優位の原則」とも呼ばれ……となっています。「政治が軍事を支配する」というのがシベリアン・コントロールの意味ではないかと思つていますが、その適訳がないんです。別に文官のほうが武官よりも偉くないでしょう。ところが文官統制とか文官支配と言われています。

それは、私が体験したことですけど、ある日私の警察の後輩が来まして、これは内局ではなく、陸幕に勤めていたんですが、その男が私に「私は騙された」と言ってます。「なんでだ」と聞きますと、「保安庁はシベリアン・コントロール、文官が武官を統制し支配するんだ」と聞いてきた。しかし来てみたら武官が威張つている」と言うわけで

す。「それはお前さんの考え方が間違いだ」と言っただけです。

昔の陸軍では、ご存知ないと思いますけれども、一般に、軍人、軍犬、軍鳩、軍馬、それから軍属だったんです。軍属、即ち文官は最低だったんです。旧陸軍では犬や鳩や馬よりも下だったんです。兵隊は一銭五厘で来るわけです。当時の葉書は一銭五厘ですからね。

その次に「自衛隊はオモチャだ」と言ったと書いてある。こんなこと、私は言ったことないですよ。だって、保安庁、防衛庁について、オモチャとは言えないでしょう。これは、保安隊、自衛隊というのは武力である。武力とは何か。突き詰めれば人間と弾薬、この相乗積が武力だ、防衛力だ。弾が大事なのに、その弾を無視したのが旧帝国陸軍である、と言っただけです。帝国海軍もそうだったんですがね。では、今の自衛隊はどうか。同じだ。「弾がなければ、自衛隊、保安隊と言っただけ、それはオモチャの兵隊と同じじゃないか」ということは言っただけがあるんです。「弾がなければ」と言っただけです。それが落ちちゃってね。その前提が落ちれば、大変な条件が落ちるわけです。それで「自衛隊はオモチャ」となる。私はだから、これですいません。いろいろ言われましたけれども、そんなことは言っただけありません。「弾がなければ」と前に言っただけです。

その次は、「航空疑獄問題に関わったとされ」とある。まずこの航空疑獄なんて、そんなものはないですよ。何を言っているか知りませんが、ロッキード、グラマンだと思っただけです。おそろしく、これは。「航空疑獄」なんていう言葉はないです。それに関わったとされていますが、全然関わっていません。だから、航空疑獄というのは何を言っているかわからないです。これを書いた人、仙道さんだけはわかっていてるでしょう。

その次は「国防会議事務局長に左遷」と書いてある。「左遷」ではありません。栄転だと言っているんです。なぜか。私のあと、二代続いて、元事務次官が来たんです。前次官が来た。だから私は、次官になるのを通り越して行っちゃったんです。これは左遷とは言わないでしょうね。

そして、その次です。「退職後、海原政治経済研究所を主宰する」と書いてある。こんなものを作った覚えはないです（一同笑い）。作るうという気持もないし、作る能力もないですね。皆さん笑っておられるけれども、作ればいいですよ。誰も助けてくれなかった。私はいま問題になっている「天下り」はできなかったんです。私も、誰か世話してくれるかと思っただけ、誰も世話をしてくれない。

当時、田中角栄さんが総理でしょう。そして私の友人の後藤田正晴君が官房副長官です。辞めるときに後藤田君のところへ行っただけ、「辞表を出す」と言っただけ、「海原、いまでも満員だぞ」と、こう言うんです。満員で何かなと思っただけ、私の就職先がないとのこと。「仮に言われても俺は受けないよ」と言っただけです。

その後で総理のところへ行っただけ、「お世話になりました」と挨拶したわけだけども、そうしたら田中（角栄）首相が「海原君、辞めてどうする？」と言っただけです。「いま後藤田君がどこも満員だと言っただけ。私は評論家でもやります」と言っただけです。私の旧軍隊の体験——第一線部隊と師団司令部の旧軍隊の経験と、戦後の防衛関係では事務的にはずっと中心を歩いてきたので、この二つの体験を踏まえて、防衛問題を中心とした評論家をやりますと言っただけです。「今の日本を見てみると右も左も極端な、しかも実体を知らない人々が評論をやっておられる。これは非常に危険だと思う。そこで私はたまたま旧軍

とそれから新しい防衛庁の経験があるので、その体験を踏まえた防衛問題を中心とした評論をやってみたいと思う」と答えますと、「大丈夫か」と言われた。「大丈夫かと言われても、やってみなくてはわかりません」と申しました。

だから、こんな「政治経済研究所」なんて立派なものを作れたらよかったですと考えますよ。

伊藤 まあ、よく架空のことが書けますね。

海原 それを知っていただきたい。そのために持ってきたんですよ。事典でしょう。これはちゃんと「仙道」と名前が書いてありますから、この人が事典に書くなら、取材に来るはずですね。電話でもいいですよ。ところが全然連絡がない。これが困るんです。今の一般のマスコミに関係する、活字にいろいろなことをお書きになる人たちが、自分で調べないで風説をそのまま受け入れているのは、困ったことですね。もう一つが下のものです。この「コピー」の前に、「大正六年四国徳島生まれ」と書いてある。これは『陰の主役——日本を動かす十七人』という行政通信社から出た本に書いてあるんです。森さんと有馬さん「の著」。私以外の人は錚々たる人ですけどもね。それを見て私もびっくりした。

これによると、大正六年はいいんですけれども、四国徳島生まれとなっている。それから「徳島中、一高、東大法学部と秀才コースをたどって昭和十四年内務省入りした」と書いてあるでしょう。一高、東大は通りましたが、徳島中を出ていません。ところが、「官房副長官から四九年の参議院選で徳島地方区で出馬して落選した後藤田正晴は、中学から内務省まで、海原と全く同じコースをたどっている」と書いてある。いい加減なものです。その次です、問題は。

伊藤 今のところはどうかですか。

海原 全部間違っています（一同笑い）。だって私は、中学は東京ですよ。

飯尾 後藤田さんは水戸高校ですね。

海原 水戸高校で、一高じゃないですよ。あなた方はご存知だけども。「この二人の内務官僚は地元では早くから囑目された存在で、『お前が県知事になったら、おれは国会議員になる。お前が国会議員になれば、おれは県知事だ』、誰がこんなこと言いますか。言う機会がないものね。その次、「と、立身出世をすでに少年時代から誓いあっていたエピソードが現在でも残っているそうだ」となっている。こうなると、何をかいわんやですね。

しかし皆さん方だって、私の説明を聞かないで、この本を読めば、ああそうか、あの二人が仲がいいのはそうかと、思うでしょうね。このお陰で、得したか損したかわかりませんが、申し上げたかったのは、要するに活字があてにならないということですね。

この「活字はあてにならない」ということの例として、これはお手元にありますか。朝日新聞の例です「朝日新聞九四年八月二十五日と同月二十九日の新聞のコピーを示す」。わが朝日新聞がこういう大きな間違いを報道するのです。これは土井たか子さん、それから村山富市さんがシンガポールに行ったときの献花ですが、まず、どこに献花したか。お二人が花を捧げた碑の名前が違っています。しかも、これは相次いで行っているんですよ。八月二十五日と八月二十九日。土井さんが花を捧げたのは「日本占領時期死難人民記念碑（血債の塔）」と書いてあります。現地では「血債の塔」と言っています。ところが村山さんが捧げた塔は「日本占領期殉難人民記念碑」なんです。三つ違う

でしょう。「占領時期」の「時」がない。それから「死難」という字が「殉難」と書いてある。それから「記念碑」の「き」が違う。「紀」と「記」。たった四日の違いですよ。しかも同じ朝日ですよ。なぜこういうことがあり得るか。

飯尾 前の写真を撮った人が後の記事を書いていますね。

海原 これは同じ朝日で、四日おいて名前が変わっているということに注目していただきたい。シンガポールの支局長は同じでしょう。だからおそらく随行で行った人が書いたんでしようけれども、塔の名は、下にちゃんと書いてあるんですからね。英語と漢字と両方で書いてある。なぜ間違えるのでしょうか。なぜ間違うかわかりませんが、間違っているぞということ朝日の上のほうへ連絡しました。いつか訂正が出るかと思っただけでも、とうとう出ませんでしたね。訂正するほどのこともないのでしょうか。四日違いで名前が違っちゃっているんですからね。

私は、これは向こうの人に失礼だと思っただけです。華僑総会が作った塔です。日本軍によって占領されたときに、日本軍がスパイ容疑で華僑を虐殺したんです。その数はわかりません。五千人、一万人、一万五千、二万という四種類の数字がありますよ。日本がシンガポールを占領した直後に最初にやったのがスパイ狩りです。というのは、華僑がいろいろと情報を送るといって、軍事占領としてはやむを得ないかも知れませんが、連れてくるのは別として、裁判なしに処刑したわけです。容疑者を全部、下の方では浜に並べて機関銃で銃殺した。上の方では崖の上に座らせて銃殺した。死体は海の方は海に流した。上の方は崖下に全部落とした。それで、裁判も何もやっていませんから、何人かわかりません。そこで、五千、一万、一万五千、

二万という数字がある。私がある旧軍の将校、関係者に聞きましたら、さあ、二万人ぐらいは殺したかも知れませんが、と言っているんですね。

華僑総会が、その犠牲となった人々の霊を慰めるために、この碑を作ったわけです。その碑を作るという話を聞いて、日本政府は必死になつて抑えたんです。何とかひとつ勘弁してくれと。高さが百メートル前後の、そんな塔を建てられて、未来永劫、日本人はそういうことをしたということを記念にされたのでは、われわれの子孫に対して申し訳ない。日本軍がやったことについては何とでも弁償する。あなた方の気の済むようにするから、ひとつ塔を建てることは勘弁してくれと言った。

この塔は、どこにあるかご存知ですか。行ったこともありませんか。あれはほとんどの日本人は知りませんよ。それはここに公園と書いてありますけれども、海のそばに市役所がありますが、その市役所のちようど真ん前です。小さなサークルがありまして、そのサークルの中に建っているのです。

私は、土井さんを昔から知っていました、たまたま毎日新聞の主催でシンガポールでシンポジウムがあったときに土井さんと一緒になつた。その時、私は土井さんに「土井さん、シンガポールの市内に建っている高い塔、何か知っていますか」と言ったら、「知らない」と言うから、「見に行つてらっしゃい」と言ったら、「何か教えない」とおっしゃいますから、「いや、私が言ったのでは駄目なんだ。あなたがあな自身を目で見てくるのが大事なんだ。ホテルの前にはいっぱいタクシーがあるから、タクシー拾つて行つてらっしゃい。タクシー代出します」と言っただけです。そうしたら、土井さんは「タクシー

代々私だつて持つてゐるわよ」と言つて、憤然として行つたんですがね。さすがにびつくりしてしまいましたね。この塔の下にちゃんと由来が書いてある。日本の占領時期に無数の華僑が行方不明になつた。その無数の華僑の霊を弔うためにと書いてある。そういうことですから、日本政府が必死になつて、勘弁してくれと言つても聞かないです。

それから私はいつも講演の時に言うんですけれども、彼らは「恩も恨みも絶対に忘れない」。これが基本的なものの考え方ですからね。恨みは韓国では「ハン」ですね。「恩も恨みも絶対に忘れてはいけない」というのが彼らの考え方なんです。日本人は「一切を水に流す」という考え方ですよ。島国に育つたからそうなつたんでしょう。「外国には、流す水がありませんよ」と言つてゐるんです。しかも「日本では」教えないでしょう。シンガポールでは小学校の教科書で教えてゐる。確か、五年生の時ですかね。日本がかつてこの島を占領して、そして名前を「昭南島」と改めた。その時にこういうことがあつたんだということ、小学校で教えてゐるんですからね。向こうはみんな知つてゐるわけです。こつちから出かけていく若い人は誰も知りませんからね。一体そういうことでは日本は周りの国々との付き合いはできませんよ、ということをやつてゐるんですけれどもね。

同じことは韓国についても言えるわけです。中国についても言えるわけです。日本人が何をしたかということを教えないんですね。私は現職の時に旅行会社の幹部とか、それから外務省、航空会社の人に言つたんです。「外国に行く間に飛行機の中で、日本と向こうとの関わりがどうであつたかということ、どこが作るかは別として、書いたパンフレットを渡す、そのことが必要ではないか」ということを言つたんです。みんな、「それはそうです」と言つてますが、誰もやらな

いです。そこが問題でしょうね。もういっぺん言いますが、シンガポールでは全部小学校で教えてゐる。日本では誰も教えてゐない。さあどうなりますか。「国際人」とか「国際国家」とかいうことをしきりにおつしやる政治家が考えて、やるべきことじゃないかと言つてゐるんですが。

伯父・親父のことなど

海原 さて、海原清平に参ります。ご質問にありましたから。

ここ「『神戸新聞・デイリースポーツ社報』」に書いてあることに、間違いがあります。

伊藤 社報なんですね。

海原 これはたまたま私が向こうで神戸新聞の人からもらったんですが、後で「デイリースポーツ社報」編集したんですね。「忘れ得ぬ人々」という連載の⑧番となつていますが、昭和四十四年七月二十五日付ですね。これに海原清平が政治部長兼通信部長。それから一番下の終わりから五行目ですか、「彼の実弟海原守もわが社の経済部員で海原兄弟が在社」と書いてある。守が神戸新聞に一時いたことがあるんですね。それから「清平のオイ(守の長男)海原治」、私ですね、「……は内閣国防会議事務局長」と書いてありますが、その頃なんです。

その海原清平について間違つてゐることが結構あるんです。三行目の真ん中の右手のほうですが、「海原は大正末期の『尾上菊五郎売血

事件』と書いてありますが、これは「血」ではありません、「売勲」ですね。「に連座して」とありますが、連座はしておりません。強いて書くなら「関連して」なんです。「一時政界第一線から退いていた」。別に退いていたわけではありませんが、相手にされなかつたですね。そういうことがあります。それから下から二段目略歴のところ、「海原林平」、「林」と書いていますが、「憐」という字なんです。

それから「質問表に」、いろいろ海原清平のことについて言えと書いてありますので言いますと、この上から二段目のところはずっと名前が出ていますが、いろいろと付き合っていたんですね。特に親しかつたのは、大野伴睦さんです。海原清平が鉄道参与官かなにかやっていた時は、大野さんは院外団だったんですよ。後になって大野さんが代議士になった時は伯父が「同交会」、院外団にいたんです。それからいろいろ名前が出ていますが、私の知っている限りの中で特に親しいと思うのは、大野さんと益谷秀次さんですね。益谷さんとはよく飲んでいましたね。私もお供して飲む場所に行つたことがあります。そういうことでこれを見ていただくと、だいたい海原清平の略歴がわかると思います。

実は困っている時には、「二千坪の土地に自邸『清香園』を新築した」と書いてありますが、伯母の判断で一種の料理屋をやっていたね。旅館みたいなものです。さて、その伯母との関係ですけれども、こんなことは別に速記したりすることはないですけども、伯母は新橋の芸者をやっています、その時に三人の男が口説いたそうです。一人は財界の人ですね、名前は言いませんけれども、もう一人は有名な歌舞伎役者。それと伯父なんですね。この三人が同時に、後の「海原はる」、その芸者に言い寄るわけですね。これは私が直接伯父の清

平から聞いたんですけれども、伯父はこの顔を見たらわかりますように、ごつごつして醜男ですからね。「俺は一所懸命お前のことを思つて通っているのに全然応じてくれない。俺が醜男だからだろう」と言つて、泣いたというんです（笑い）。それを見て伯母は感激したということになっているんですけれどもね。昔の言葉で言うところ「深草少将百夜通い」というのがありますね。小野小町を口説く深草少将。「深草少将はもつと美男子だったはずだ」と、私は伯父に言つたんです。「伯父さん、自分でも醜男と思つているけれど、あなたは深草少将とは似ても似つかないけれども、やはり深草少将だった」と言つたら、「そうだ」ときた。そんな男でした。ですから、とにかくそういう馬鹿げたことがあるわけです。伯父がはらはらと涙を流したら、さすがの伯母もその気心に感心したというんですけれども、これも嘘か本当かわかりませんね（笑い）。

同交会の関係、これが当時の清香園です「写真を示す」。伯父の家ですが、ちゃんと庭に池がありまして、小さな川を引き込んでまして、隣が菖蒲園なんです。だからきれいな菖蒲を作っていました、それも年に一、二回人を集める。それは菖蒲の時ですが、その写真に後藤田君と平井学君の顔もあるんですよ。その前にいるまわりの連中が同交会の院外団ですよ。それから中央にいるのは石井光次郎さんですね。

伊藤 堀切ですか。

海原 堀切の菖蒲園のすぐ隣のところです。今はここには何もありません。三年前、私は懐かしくて女房と一緒に رفتんですが、もう何もなくなっちゃっている。

伊藤 建物や何かですか。

海原 ええ。だいたい池もない。それからこの辺は全部、池なんかも

埋めて売ったんでしょね。いい眺めだったんでしょね。それから、これが胸像の細かい写真です。胸像のできた時に来てくれた人々が、これ「写真を示す」ですね。これは鳩山薫さんが真ん中にいますけれども。

伊藤 そうすると結局、銅像は造ったわけですか。

海原 造ったんです、もちろん。

伊藤 反対されたという話がありますか？

海原 それは徳島の話。これは胸像ですから。徳島は立派な銅像ですよ。

伊藤 その胸像はどこに造ったわけですか。

海原 庭です。これは書いてありますように、お世話になったということで、教育にも熱心だったんですけれども。

御厨 共立女子学園後援会とありますね。

海原 ええ。後援会。もう今はありませんけれどもね。

伊藤 これ「胸像」は今はどこに。

海原 もうありません。今はこれ全部ありません。誰かの家にあるんでしょう。その前に座っているのが鳩山薫さんです。

伊藤 この胸像自体もないですか。

海原 もうないです。どこかの子どもの家にあるんです。もうその辺全部、宅地にしまして、行ってみて、多分この辺だということになっているんですよ。昔の面影はゼロですね。

伊藤 そんなに古い昔の話ではないですよ。

海原 ないですよ。しかし、あの辺は新興住宅で全部埋めた。土地ブームか何かがあったでしょう。もう全然趣なし。堀切菖蒲園も昔よりはちよっと小さくなっていますね。がっかりしたんです。これが胸像

の写真ですね。要するに鳩山一郎さんとの関係があり、先ほど申しましたように鳩山一郎の懐刀ということだったわけですよ。

伊藤 ああそうですか。僕はちよっと『鳩山日記』を出版するんで、いま準備しているところなんですけれども、薫さんの日記も一緒に出すんです。

海原 日記の話になりますと、海原清平は本当に細かく日記を付けていました。まあ、いくら宴会があっても、夜帰ってきても欠かさなかったですよ。伯父が死んだあとで、同交会の連中が伯父さんの日記を出したいと言って来たんです。伯母の所へ行った。そうしたら伯母が、それは治さんに聞けと言います。それで私のところに来た。それで私はちよっと読んでみた。そうしたら、あまりにも生々しいんですよ。誰が来て、どうした、ああしたと書いてある。これは駄目だと言った。「生きている人が生きている時に、こんなものが出たら絶対駄目だ」と、私は反対した。「伯母さん、そんなものを出したって、結局マイナスのほうが大きいからやめなさい」と言ったんです。そうしたら伯母もわかったということで、出していないんです。それはまあ当時いろいろなことがあったでしょう。だからまあ、全部実名で書いてあるんだから。

伊藤 それは日記は実名でしょう。

海原 どう言ったということ、そんなものはどうでもいいですよ。例えば大野伴睦がこう言っていたけれども、これはこうだったと書かれるとね。それも正しいかどうかかわからないですよ。本人がそう思っているだけかも知れない。

伊藤 日記というのはそういうもんですよ。

海原 いやいや。もうそう言ってしまうえば、先はないですけども。

私はまあそういうのが嫌なものですからね。だいたい日記というのは人に見せるものではないと思う。自分のためのものではないか。せめて、自分の親戚とか何か親しい人。それは公にするようなものではないはずだと。ましてやこの伯父さんの日記は、もう事細かに書いてあるしね。全部ほとんど生きているんだから。みんな政治の世界で活躍している人だと。だからマイナスが大きいから、伯母さん、それはやめたほうがいいと。

伊藤 今だったら面白いかも知れない。

海原 それは面白いかどうかは別として、良くないですよ、それは。今となつては何ともならないことです。そういうことでして、海原清平の關係はそんなことでいいですか。

伊藤 影響をいろいろ受けられましたか。

海原 その影響というのは私にはわかりませんが、いろいろとあつたと思いますね。

伊藤 やはり政治の世界というものの外れのほうを……。

海原 外れと言うか、別の目で言いますと、電話一本で時の総理と話ができるのは伯父ぐらいでしょうね。呼びつけましたからね。池田（勇人）であろうが誰であろうが。その頃はやはり院外団、同交会というものの力も結構あつたわけです。それは昔の一種の応援団なんですからね。その同交会の連中、その後ちよつと性質も変わりましたけれども、同交会の連中は選挙の時にも大変に役に立つ。それから、普段からの地元との連絡もありますから、そういう意味ではいわゆる政治的にも力がありましたね。

前の議員宿舎が最初は木造でできていました。それで伯父が電話をかけると総理も来ましたよ。また、それが一種の虚勢にもなるんです

ね。「俺が行くから」と言うのと、「いや、私のほうが行きます」とかいうことで、そうなると、「うん、そうか」となるわけですね。それは伯父自身も虚勢を示したい。その辺のところは全部、その中に出てくる。

だから伯父が死んだ時はちよつと池田内閣の時で、改造の最中だったんです。芝の青松寺で葬式をやったんですが、私は息子でもないんですが、後でも出てきますけれども、まるで息子みたいに思われているわけです。だから伯母の隣に私が立っていますよ。写真を持ってきてもいいですけれども。そういうところで、海原清平の葬儀は、ちよつとその改造内閣の途中ですけれども、わざわざ池田さんは改造の仕事を中断して焼香に見えました。そういうことで、うるさい奴だし、同時に面白い男だということでも付き合ってくれたんでしょうね。

ここに「一日一升」酒を飲んだなんて書いてありますが、これは嘘でして、私の知る限り、コップで一杯、昼、夜と飲んでいましたね。夜は二杯です。あの歳ではもう一升なんて飲みません。これは一升飲んだ「ときもあり」と書いてありますが、それはあるかも知れないです。それで伯父がけつこう人気があつたのは、若い方はご存知ないけれども、一時、国会で飲酒禁止になつたことがあるんです。その時でも伯父だけは、私が行きますと、茶碗で酒をついでもらう。常磐屋が食堂をやっていましたけど、「海原の昼の一杯は薬だ、酒ではないんだ」と言われていました。またそれがまかり通つたんですね。野党の人ともけつこう付き合っていましたから、許してもらえた。だから泉山三六の武勇伝の頃ですよ。女性代議士が酔っ払つてね。それで、酒は御法度。二、三カ月御法度でしたかね。その時でも私が行きますと、ちゃんと海原清平専用の土瓶から、必ず冷やです。しかもコップ一杯

しかやらないです。理由は、これが全部のひとつの目安になる。これがないとどこまで行くかわからない。だから昼一杯、夜二杯。それが伯父の決まりですね。だから「一日一升」というのはよほど昔のことでしょうね。

伯父のことを言えというので、こういふふうにし上げております。後の話になりますが、私が警視庁の課長になった時に、どういふふうに見られたかということをお話しします。先輩が一人、それから同期の者が一人、私のところに来まして、「海原、今度お前は警視庁の課長になった」と言う。最初は交通課長です。その後、生活課長、次に経済一課長。その二人は、善意なんです。「海原、言いにくいことだらうけれども、伯父さんを警視庁に入れるな」と言うんです。私に面と向かって。私は二人に同じことを答えました。「それは伯父、甥の間で、しかも、僕は伯父が好きだ。来るなどは言えない」と言っただけです。「ただし、私以外の部屋には行くなと、それは言おう。何かいろいろ頼まれるだろう。その時は私のところまで来い。しかし他の部屋には絶対に行くなと言おう。それだけは約束する」と言っただけです。そういうことです。先ほどご質問があったので言いますとね。それは院外団の連中に見れば、いろいろなことがあつたら、「先生お願いします」と言うでしょう。そうすると、「おう」と言うんですね。

しかも私が伯父の息子のように見られていますので、そういう時に「今回はどうもおめでとございます」と挨拶に来る人が、「今度息子さんが」と、こう言うんですね。名前が変わってますからね。「海原」なんていうのは滅多にないですから。だから「おめでとございます」と言った時に、「あれは俺の息子じゃない」と言えはいいんですよ。

すよ。言わない。「うん」と言うんですよ。ほとんどの人が私を海原清平の息子みたいに思っているけれども、違います。それははっきりしておきたいですね。私は甥であつて、息子ではないと言うんですが、大野伴睦さんの回顧録でも息子になっていますからね。大野さんはわざわざ括弧して「海原清平の甥であるが養子である」と書いてある（笑い）。これが『大野伴睦回顧録』に出てくるわけですよ。後で、またその時に話しますけれどもね。これでもう何ともなりません。私はいちいち断るわけにはいかないでしょうが。大事な時だけは、「いや、私は、あんな不肖な親父は持っていない」と断るんですけれども。

プラスかマイナスかと言われたら、それはやはり両方ですね。特に町のあるちゃんとか、今のあんなちゃんではなく、昔のテキ屋だとかなか、けつこう伯父のことを知っているものだからね。ああ、海原さんのあれだとか言つてね。だからプラス・マイナスどつちかで、プラスの面もあるしマイナスの面もあるして、差し引きすればゼロでしょうね。あるいはプラスのほうが多いかも知れません。何となしに敬遠される面があつたから。そういう価値を入れますと、それはプラスです。

伊藤 本当のお父さんは……。

海原 親父は守ですね。これがまた、ちよつと皆さん方にはおわかりにくいと思うんですけれども、大阪陸軍幼年学校に昔入つたんです。その頃、幼年学校は二つあつた。東京と大阪と。東京も大阪もなかなか難しいんです。それで、徳島中学を出てから、大阪の陸軍幼年学校に入った。ところが入って、すぐやめちゃうんです。俺は軍人の商売は嫌だと言つて。その時だいぶ仲間が「おい、海原、なぜやめるんだ」ということで止めたらしいですよ。その仲間というのは名前もいろいろ

ろと聞きましたけれども、だいたいみんな中将にはなっていますね。大将になったのもいますけれどもね。昔ですから。しかし俺は軍人に向かない、あのまま軍人になつては駄目だということで飛び出した。そして先ほど言いましたように、海原憐平の法律事務所の手伝いをしました。だから、この「遊動円棒」判決の時なんか、やはり親父が中心になつてやつたんですね。それから親父は大町桂月に惚れたんですね、大町桂月ばりの文章をよく書いていた。その文章で、海原清平の演説の原稿は、ほとんど守が書いたようです。私の親父がそう言いましたし、伯父もそう言いましたからね。だから一言で言えば、私の親父・守は清平の弟ですけども、事実上の秘書兼相談役みたいなことをやるんですね。ですから、もう定職無しです。昔の言葉でルンペンという言葉がありましたか、それなんですよ。

伊藤 最近あまり聞かないですね。
海原 今は使わないもの。最近ではジョブレスとか。昔はこの言葉が流行つたんですよ。

ですから、私は入学したのは赤坂の中之町小学校。それから卒業も中之町小学校なんですが、その間は関西に行つて、グルグル回つていゝるんです。神戸にもいたり、それから香櫨園、今の夙川です。そこにもいゝましたしね。変わつていゝるでしょう、小学校の入学と卒業とは同じ中之町小学校なんです。

御厨 その間ずっと他を回られたんですね。

海原 震災の年がありますね。その年に関西に移りまして、それから小学校の五年でまた帰つてくるわけですから。その間は関西、いま言いましたように神戸や夙川のほうで小学校に行つたんです。そういうことをやつていました。それで私の第二人は全部同じ中学、高等学校、

大学を出ていゝるんです。私は親父に言つたんです。何で子どもが三人もいゝるのに、皆同じ所へやつたんだと。誰か一人は弁護士商売をやるかと思つたんじゃないでしょうか。これは聞きませんでしたけれども。私の想像ですけれどもね。

伊藤 では、お父さんは弁護士になられたわけですか。

海原 それが駄目なんです。弁護士試験を何回受けても落第したんです。ところが、先ほど言いましたように、その頃は弁護士の補助、介添えが認められた。そういうことでその頃は伯父の手伝い、秘書みたいなもので、定職無しなんです。

伊藤 それが大阪だつたわけですか。

飯尾 大阪でお生まれになつたというの？

伊藤 さっきの話からどうしても大阪が結びつかない。

海原 それは、一応そこまで話しまして、これから申し上げようと思つていゝるようなつもりで……。実話ですからね。「事実小説よりも面白い」なんです。海原守、私の親父が弁護士海原憐平の代理として大阪のお袋の家に差し押さえに行くわけです。その頃大阪の難波に『一方亭』という料理屋がありました。大阪の『一方亭』、これはわりに有名な当時の料亭でして、百畳敷きの大広間があつた。それで、江戸のお相撲が来ると必ずそこへ泊まつたような、難波の『一方亭』なんです。二、三代前の大阪の市長、大島靖君が私の親友なものだから、大島君が助役の時に、「僕の母方が難波の『一方亭』をやつていたんだ、調べてくれ」と言つて調べてもらつたんですが、結局わからない。もうすっかり向こうも変わったものですから。難波の『一方亭』の話はお祖母さんからも聞きましたね。

それで親父が行ったのは、いま言いましたように、母方の祖父は汽船の船長をやっていたんです。徳島と大阪との往復をする阿波共同汽船か何かでしょうね。その船の船長をやっていたんですね。目に一丁字もないものですから、連帯保証したんですね。その補償の取り立てをやったのが海原守なんです。海原憐平の代理として。それで、海原守が『一方亭』に差し押さえに行くわけです、執行に。その玄関へ出てきたのが母親です。

伊藤 それを差し押さえたんですか(笑い)。

海原 まあそういうことですか。その時、母はまだ高等小学校だった。こんなこと話していると、いつになったら終わるかわかりませんけれどもね。先ほど言ったように、落語のつもりでお聞きになるのは別としまして。だから、おっしゃったように、高等小学校在学中の母を差し押さえちゃった。それで、徳島へ連れて帰るわけですね。徳島では「守さんが嫁さんをもらったそうだ」と評判なんです。とても嫁なんかもらえると思わなかったんですね。

伊藤 では、新居は大阪だったわけですか。

海原 またあつちに親父が移るわけですよ。出生の時は私は大阪に移っているわけです。連れて帰って結婚して、どうやら私の生まれた時期と親父が知り合った時期を見ますと……。私もあとで、法学を勉強しましたからね、調べてみると、届け出前に身もついているんですね。今の言葉で言うと、何と言うんですか。普通は届け出したあとで、同棲が始まって、子どもが生まれるわけですが、私の場合は届けがちょっと遅れたわけです。

伊藤 同棲ですか。

海原 そんなことなんです。そういうことから、大阪で生まれるわ

けですね。忘れませんが、大阪の記憶と言えば当時、北野中学がすぐ目の前に移ってきました、今で言うと中洲というのがありますが、ちょうど中洲のガード下です。今はガードがありますから。聞かれた時は、私は中洲のガード下で生まれましたと言っています(笑い)。大阪との因縁はそういうことなんです。

中学四年で一高へ

伊藤 東京においてになったのはいつ頃なんですか。

海原 そこまでは調べて来ませんでしたね。

伊藤 だいたい。

海原 さあ、いくつぐらいでしょうね。私が三つぐらいの時ですかね。三つか四つですかね。

伊藤 それからはずっと東京なんですか。

海原 ところが、そうではないんです。幼稚園も東京です。中之町小学校の付属幼稚園。それから小学校の一年の夏、七月頃に移るわけです。移った先が神戸市長田区、長田神社のすぐそばですがね。ここにしばらくいましてね。二年ぐらいいましたか。それから今度は大社小学校、夙川に移りまして、二年ぐらいいいて、それで今度はまた東京です。

だから小学校の思い出となると、中之町小学校の先生の言葉がもう終生忘れません。日比野槍之助という難しい名前の、難しい先生でし

たが、この人の言葉で頭に入っていますのは、「日本人は自分のことになると、一所懸命になる。みんな小さな家に住んでいるが、床の間の柱を磨いたり、縁側を拭き掃除したりして、自分の家となると、小さな家であっても一所懸命手入れする。一步表に出ると、全くそういう気持ちはどこかにいっちゃっている。難しく言うとか徳心がない。どうしてだ。それではいけないんだ。家の中をきれいにするように、公徳心をもっと養わなければ（当時は難しく、それを涵養という言葉を使うんですね）、公徳心を涵養しなければ駄目だ」と言われた。それだけ頭にあるんですね。

もう一つは私が野球をやっていたものから、よく言われたんです。「野球は駄目だ。野球は胸に悪い」と。小学校で私はガキ大将になって、野球をやっていたんです、ピッチャーやキャッチャーを。その二つしか覚えていませんね。

伊藤 中之町小学校というのは牛込中野町小学校ですか。

海原 いやいや。赤坂です。ちょうど乃木神社の下でしてね。その後いろいろ名前が変わるわけです。乃木国民学校になったり、檜町小学校になったり、今は赤坂小学校で統合されました。そのころは中之町小学校。その中之町小学校の付属幼稚園というのは、これは由緒ありまして、北白河の宮様のお子さんが通っておったと。そのことを誇りにしてしましてね、「お前たちは宮様の来られたところの幼稚園にいるんだから、誇りを持って」とか何とか言われたわけです。それで、楽しかったですけれどもね。その日比野先生の教えをどうしてか、覚えてるんですね。「日本人は公徳心がない。自分の小さな家を一所懸命、柱を磨いたり、縁側を拭き掃除し、から拭きする。そういうことを表でもやらないといかんだ。ところが一步表へ出ると、みんな

道に物を捨てている。情けない」と教えられました。

それから今度は夙川に移ったでしょう。それで、覚えているのは夙川というのは甲子園のそばなんです。ご存知ですか。

飯尾 私は神戸出身で、それこそ長田の生まれです。

海原 ああ、そうですね。私は大塚町ですね。それで、長田神社によく遊びに行きましたし、私は小学校で野球チームを作りまして、やったんですけれども。その話はおいておきまして、夙川ですね。夙川の思い出は三つあるんです。一つは今の高校野球ですが、当時は中等野球です。その頃、神港商業——今は何と言うんですかね。ここに山下というのがいた、一塁手で。後で慶応の名選手になる。これがスラッガーなんですね。山下のホームランを見に甲子園に行きました。ベイブルースのホームランを見るようすからね。もう夏になると真っ先にですね。

それから、そのころは甲子園のすぐ前に浜がありますけれども、まさに青松白砂でした。そこでよく映画、活動写真を撮っているわけです。チャンバラなんか。これが第二番目。第三番目はあそこに夙川という川が今でもありますが、これが水深がせいぜい深いところでも十センチぐらいですかね。きれいな川でした。そこへ初夏になると小さな鮎が上がって来るんですね。

飯尾 夙川に鮎がいるのを捕ったわけですね。

海原 ええ。タマ（たもあみ）を持って、すくいに行きましたね。それをお袋が佃煮にしたりして、親父が酒の肴にしました。これは記憶しています。他は何もないですね。生い立ちと言われましても。

飯尾 その頃はお父様は神戸新聞にお勤めですか。

海原 いたはずでしょうね。と思いますね。それもはっきりしていな

いんです。ということは、全然そういうことを聞きませんからね。どういうものでしょうか。今度これ（『神戸新聞』）を一所懸命見つけ出したんですよ。何かないかと思って。話だけではないからね、頼りになるもの、新聞ならいいと思つたところが……（笑い）。

それで、東京に帰つてきましてから、五年に入りました。私の弟、妹なんかもやはり大井町から赤坂まで通つたですよ。中之町小学校まで電車に乗つて。

中学に移りますが、なぜ私が第一東京市立中学校に入ったかというのと、先生はやはり府立一中を受けると言うんですね。親父は絶対駄目だという。あの頃は府立一中、四中、これがいちばん一高に對しての入学率がいいんですね。十五人入つたとか十人入つたとか競争しているわけですよ。その頃は、わが中学はできたばかりですから、「一高に」入るか入らんか、というところですね。「父親は」第一中学がいろいろ言う。というのは、校長が四宮先生。二代目の校長で、徳島の人なんです。徳島には四宮さんの親戚が結構多い。親父が言うには、あそこは自由主義だと。ランドセルで背広です。ネクタイをしましてね。カバンではない。ランドセルだと姿勢がいい。カバンだと、どうしても体が曲がる。とにかく自由主義で四宮先生の教育方針がいい、あそこはのびのびするから、あそこへ行けと言う。それで第一中学へ行つた。第一東京市立中学校なんです。

第一中学の四年から私は一高に入るわけですが、第一中学に入りまして私が教えられましたことは、四宮先生もおっしゃったんですが、それよりも初代の校長さんが成田千里（なりたちさと）先生で、後に東京都の教育委員長になりますが、この成田千里さんが年に何回か、講堂に全員を集めて講演された。「お前たちは第一中学だ。市立一中

と言つてはいけません。第一東京市立中学と言え。府立の学校は全部府立何中だ。違うんだ。お前たちは第一中学の生徒である」。これを教えられましたね。そして、至大至剛の精神を言われた。孟子の教えですね。これほど大きいものはない、これほど強いものはない。この「第一」と「至大至剛」、これを徹底的に教えられました。成田先生の教えは面白いですね。どの世界へ行つても「第一」とならないといけない。泥棒になるなら石川五右衛門以上になれと言うんですから。

伊藤 その頃も野球をやっていたんですか。

海原 中学ですか。中学はもうやりませんでした。日比野先生の教えを守つたのです。野球をやると胸に悪いと。しかし、高等学校ではまたやりましてね。ただし、これは本物ではないです。糸まりという球を使ったもので。糸で作つてあるんです。だから飛ばないんです。それで対級試合をやるんですけどもね。その後、素人野球はずつとやりまして、警視庁に行きましても警視庁で各署対抗野球試合を復活しましたし、防衛庁でもクラブを作つてやりました。その点は日比野先生の教えを破つたわけですけどもね。要するに選手にはならなかつたのです。

伊藤 中学の時は運動はやらなかつたのですか。

海原 中学は、あそこはバスケットが盛んです。長田君をご存知かもしれないですけども、日本代表になりましたね。第一中学は特に東洋一の体育館を造つたんですから。それからプールがありますしね。屋内遊技場なんかはまさに東洋一ですね。ですから、非常に「至大至剛」でした。

伯父の言つたことを何か言えと「質問表に」書いてありましたから言いますと、まず私が伯父に言つたことがあつて、「代議士といえ

「国士だろう」と言ったんです。「国のことを思う人だ」と。

それに入る前に、学校のことを言うのを忘れていました。学校のことを申しますと、一高に私は四年から入ったんですけれども、四年から入らなくてはならない理由があるんです。そこで、また逆戻りになります。それは海原清平が民政党から狙われたんです。先ほども申し上げましたように、鳩山の懐刀と言いましたね。そこで売勲事件に行くわけです。これは連座と書いてますね。連座ではないんです。売勲事件に関係したんですね。関係して狙われた。なぜ狙われたか。それは六代目菊五郎に勲六等を、伯父が言わば運動してとったんです。そのことが問題になりましたね。私が中学校に在校中ですが、なぜそういうことをやったかという、たまたま伯父は俳優協会の会長をやっていたんです。だから六代目菊五郎とか、いろいろ知っているわけです。市川さんのほうもね。ある酒席で、六代目から「海原先生、威張っていても、私にはとても勲章ももらえないでしょう」と言われたのです。

その頃のことは私にはわかりませんが、まだ昔の名残が残っています。歌舞伎役者は「河原乞食」と言われてました。いまなら当然、六代目菊五郎は文化勲章ですが、その頃はそうでなかった。そこで伯父が六代目から、「あなた、会長で威張っているけれども、私に勲章ももらえないでしょう」と言われたのです。すると「なにっ!」となったわけです。そういう男なんです。「よし」と言った。それで、どう動いたか。総理の田中義一を口説いた。「わかった」と。そうしたら「枢密院議長・原嘉道さんを口説け」と言われた。それで「わかりました」ということで、また原さんのところへ行っただけです。そして、また説得したんでしょうね。その二人がOKしたので勲六等がも

らえた。

その勲六等はいまどうなっていると思いますか。新橋に『三島』という小さな料亭がありました。ビルの中に併合されて、今はどうなっているのか知りませんが、私が『三島』に行って、たまたま何かの関係でその話をしたら、その女将さんが持つてきました。「海原さん、これがその時の勲六等です」と言う。というのは正妻ではないんです、持っているのは、『三島』の女将から、「海原さん、これがあの時の勲六等です」と言われた。ああそうかと。私もしげしげと見ましたけれども。新聞に、「海原元代議士、六代目菊五郎に売勲」、これは大きく出ましたね。私の中学校の二年の時でした。びっくりしました。売勲事件、賞勲局総裁天岡さんの売勲事件に引っかけられたんです。

「海原を引くくれ、鳩山を狙え」——容疑は、北海道と青森の山林払い下げ事件だったんです。清平とその弟の守（私の親父）も引張られたんですが、結果は無罪、証拠不十分で免訴になりました。免訴になったのが昭和五年十一月一日です。これは朝日新聞にも免訴と出ていますがね。証拠不十分で免訴ですね。起訴猶予ではなくて、免訴なんです。要するに政治的目的で引張られたのでした。私が伯父から聞いた話をしますと……。検事が調べる。帰ってきて警視庁の房に戻りますと、後ろ手に縛られて、入り口の柱のところへ結わえ付けられる。そうすると眠くなって、ついうとうとして前かがみになる。そうすると手が痛いですね。ハツと目がさめる。痛かったと思います。翌日、また検事のところに行ったら、「どうだ、少しはこたえたか」と言われた。「なにっ」とやったそうですよ。

それで、私が警視庁の課長になった時に、多分この男じゃないかと

思った人に、「君か、伯父をいじめたのは」と言った。「とんでもない」と言っていましたけれども、だいたいその人だと思おう。そういうことがあります。だから、これは連座ではないんです。それは鳩山を狙った。鳩山を狙って、海原を突けば出るだろうということですね。一切何も無い。そういう時代ですからね。

そこでその話も前座になるわけですが、「伯父さん、代議士は国士だろう」と、さつきちよつと言いましたけれども、「代議士は国民を代表した国士だ」と私が言った。「なに、国士って、お前何を言っているんだ。それは書生論だ」と言う。そして、伯父の言ってくれたことがその後もずっと忘れられないんです。

「国会の廊下で仲間に会う。肩を叩く。おう、元気かと言う。その肩を叩く、その手の意味がわかるか」

「ああ、伯父さん、それは元気かということだろう」

「違う」

「どういうことですか」

「お前、早く辞めろ。それは死ねか、落選しろか、どっちかだ」

「まさか、そんなこと言ったって」

「お前、それは知らないからだ」

それは政友会・民政党の時代は、いわゆる二大政党時代ですからね。これが現在に関係してくるんです。多くの人が二大政党になったらいいと思っっているからです。二大政党の対立の時代は、市町村の中で、はっきりと分かれているのです。もう番地で支持者が分かれている。本来なら政友会の代議士は政策で民政党と争って、それで政策で相手を倒して出てくる。そうならないといけない。それができないんです、事実上。政策で勝負をして、勝って出てくるなんていうことは言いや

すいけれども、言い得て妙であるけれども、不可能だ。ということは、結局仲間を倒すしかない。当時、中選挙区ですからね。変遷はありましたが。仲間を倒すより手はないんです。自分が出世するためには。それから、「代議士というのは法律を作っていればいいと思うのは大間違いで、やはり出世したい。参与官、今で言えば政務次官になりたい。だから、そのためにはお前早く落ちろ、死ね、ということになるんだ」と言うんですね。「まさか」と私は言っただけですけどね。その後の世の中を見ていると、わかりますね。

そのことを裏書きしたのが、お手元のコピーです「尾崎行雄と芦田均の言葉のコピーを示す」。そこに書いてあるのと同じことを、伯父が私に言いました。これは書いたものですが、一人は憲政の神様ですね。一人は芦田さんですから、これほどはつきりしたことはないでしょう。尾崎さんが言われたのは、要するに日本では政党は成り立たない、できない。日本にあるのは徒党である、と言っておられるでしょう。そこなんです、問題は。尾崎さんは、それを『敗戦の反省』の中で言っていますね。徒党ではない。ばくち打ちの中のある「親分子分の関係」がいまだに支配している。同じことを伯父は言いました。そういうもんだと。これを直すには時間がかかる。

それをさらに遡りますと、高等学校になります、高等学校の先生というのは非常にユニークでしょう。

飯尾 そのお話の前に、高等学校に中学四年でお入りになったというお話をされましたが、その話は……。

海原 それは、あえて飛ばしたんです。また、そんなことを話すと長くなるものですからね。いいですかね。後で、適当に削っていただければ。

それは長くなるだけでなく、事實はちよつと恥ずかしい話なんです。ルンペンとも関係ありません。伯父が六代目の売敷事件でやられたでしょう。それからガタツと収入がなくなるんです。当時、大井に住んでいましたけれども、それまでは「門前市をなす」ような状況ですよ。いろいろ頼み事があるから。ところが、伯父がそういうことになって刑務所に引張られたとなると、ガタツとなる。そうなるのと、とたんに収入がなくなる。私の親父は伯父にくっついていたでしょう。当然収入がなくなりますよ。ですから私は中学三年の時に、もう月謝を払えなくなる。正直、情けない話ですが。

それで、四宮校長先生に「私は退学したい」と言った。「海原、辞めてどうするんだ」と言われるから、「新聞配達でもやります」と言った。

「新聞配達をやったって、いくら稼げるか。今そういう状況なら、お前、頑張つて四年から一高へ入れ。四年の一年間は、なんとかして凌げ。四年から入ったら、家庭教師を紹介してやる。そうしたら、家庭教師で結構稼げる」と言われました。

それは、第一中学は当時裕福な家庭が多かったです。だから、お前は四年から入れと言われ、私にとっては四年から一高に入ることが絶対的な至上命令でした。それは私の問題だけではなくて、一家の問題なんです。だから勉強しますわね。一家の運命がかかっていますから。それで、まあ一応入ったわけです。そうしたら、すぐ学校が世話をしてくれました。三人か四人はいつも（家庭教師の口を）持っていました。その頃は週三回が二十円、週二回が十五円というのが相場でした。ですから三人、四人持ちますと、土、日はかけ持ちですよ。

その頃の物価を言いますと、本郷の下宿屋の、安いところは朝、晩

食事つきで一カ月十五円でした。ですから、一応最低限の生活はできるわけです。

伊藤 それを三つぐらいやると、お金は六十円ぐらいになりますか。じゃあ、初任給ぐらいのものですか。

海原 そうそう。六十五円ぐらいでした。食事をご馳走になる。それは大きいですよ。土、日はかけ持ちするでしょう。

飯尾 そうすると、昼、夜と食べられる。

海原 そうそう。

伊藤 僕らだつて、そういうことで喜んでいたんですから。

海原 だから、私にとっては四年から入ることが至上命令なんです。

その前は佐藤紅緑さんの『あゝ玉杯に花うけて』、これを熟読していましたからね。豆腐屋の小僧チビ公が苦学して一高に行くでしょう。だから一高に憧れていたわけです。そんなことがあります。それで四年から入ったということです。

そこで、学生生活についてというご質問があるんですが、私の是一般の学生生活ではないわけです。毎晩出て行くわけです。しかし楽しかったですね。やはり一高時代というのが、考えてみると一番楽しい。昔の旧制高校の三年ですね。

御厨 どういう方がご一緒でいらつしやいましたか。

海原 一高の時の一緒の連中では、平井学君。ひよつとしてご存知かも知れませんが。私は文乙、ドイツ語です。平井君は文甲ですけれどもね。これは建設省で、官房長の時に妙な事件に引っかけた。

これは一つ、ご説明いたしましたでしょう。その平井君と、もうひとり山本幸雄さんが内務省にいました。当時の国警長官は柏村信雄さんです。河野一郎さんが柏村さんに話して、山本幸雄さんと平井学君の二人

が建設省に行くわけです。

山本幸雄さんが次官を辞めて、三重県から選挙に出ますね。その時の選挙資金に関係してくるのですが、橋梁建設業者二十一社から選挙運動の政治資金をもらうわけです。一社三〇万円でしたかね。当時のお金で六三〇万円です。平井君がそれを受け取って、山本幸雄さんに渡したわけです。それが問題になるわけです。

これはもう何ともならないでしょう。だから裁判になりましたね。その時の裁判長が、執行猶予つきの実刑判決を出し、双方ともに控訴するということになって、一審で決まっちゃった。それで後は一応、河野さんが就職の世話をしました。

平井君と私と二人が揃って、四宮先生の私邸に挨拶に行った。その時に言われた言葉が一生忘れませんが、私は講演の時にいつも使うんです。今でも使っていますが、四宮先生は、「明治維新の時に、なぜ薩摩、長州、薩長がみんな出世したか。明治政府の主要なポストを占めたか。それに比べてわが阿波藩、誰も出世していない。なぜだ」と、こう聞くんです。なぜだと聞かれても、こっちはわからない。「それは、薩摩、長州の連中は、仲間の中で将来ものになりそうなやつを複数担ぐ」と言うんです。この複数が大事なんです。一人や二人だったら、途中で挫折したり病気になるって、死ぬかも知れない。複数を担ぐ。「みんながわっしょい、わっしょいと言って、仲間を担ぎ上げて、それが上に行ったらみんながぶら下がる」と言うんです。まさに薩摩の芋です。「それと比較すると、わが阿波藩はどうだ。土佐もそうだ。みんなが寄ってたかって、足を引っ張ったり、頭を叩いたりしている。これが、わが阿波の共通のマイナスだ」と言う。

それは理由があるんですよ。その阿波の人は吉野川の流域で藍を栽

培しましたね。化学染料が入って来る前は藍が絶対必要でした。その藍を栽培して、それを担いで京都へ商売に行った。それで、京都で小商人が商売して金を儲ける。帰ってくる時に京都の美女を連れて帰るわけです。ですから阿波では、商人は二号を置くのは当たり前なんです。二号も持てないようでは駄目だということです。そして阿波浄瑠璃なんです。遊芸が京都から伝わってくるわけです。仲間同士はどうかという、足を引っ張ったり、頭を叩いたりして喧嘩ばかりしている。だから伸びない。「薩摩、長州も阿波もみんな似たようなものだ。違うのはそこだ。それが大違いだ。だからお前たちは団結しろ」と言われた。これが本当に終生の教訓でした。その後、見ていると、まさにその通りですよ。

話は飛びますが、私はそれを防衛庁時代にやりまして、防衛庁の記者クラブの諸君に、「まだ明治維新が終わっていない」と言ったんです。「どういうことか」と言うので、「いま日本の政治は、長州ばかりじゃないか。岸、佐藤、参議院は重宗、三人とも長州だ。今の日本の政治は三人の長州人に支配されているじゃないか」と言ったら、それが伝わった。それは伝わることを覚悟した上で言ったんですけれども。こっちもどうせそれは、新聞記者に話したら全部伝わるものと思わないといけませんからね。それは後でお話しますが、そういうことは心得ております。

しかし、その校長先生の訓示を深刻に感じました。私は後藤田君の応援演説に使いました。「中学の校長、四宮先生を皆さん知っているでしょう。こういうことを言われた。その通りだった。そんな百点満点の人間はいないんだし、好き嫌いもあるだろう。しかし、そんなことを言っていたらとても駄目だ。みんなお互いに仲間の中で複数を担

ぐことが必要である」ということを言って応援して回つたです。

ところが、先ほど言いかけてやめましたのは、三木さんと後藤田君の争いがありましたね。あの時、ある財界人が私に「海原さん、徳島では桜は咲きませんか」と言うんです。何を言っているのかと思つたら、やはりその喧嘩を言うんですね。私は両方に話した。「みつともないから、週刊誌の材料になつてゐるし、ここで握手をしたら」と言つた。三木と後藤田が手を結べ、ということをそれぞれご本人に話すると、ご本人はOKするんです。ところが問題があるのは、どつちが先に言うかですよ。

三木さんが、「海原君、それはわかつた、やるよ。しかし、誰がそれを言い出すんだ」と言う。だから私は三木さんに、「それは先生、先輩でしょう」と言つた。「俺は何も関係ないよ。俺は昔から政治家だ。後藤田君が後から来たんだ」と言うんです。というのはちよつと説明しなければいけませんけれども、後藤田君がまだ政治に出る前は、三木さんは時々、在京の徳島出身の役人を招待してくれたんです。新橋へ時々行つたですよ。みんな、仲間で。亀長君も入つていましたけれどどもね。「あなたは昔、そういう徳島出身の官僚の面倒見たんだから、あなたのほうから、後藤田君な、と言つて手を出して下さい」と言つたら、「駄目だ。俺は昔からおる。後から来たのは、君、後藤田君だ」と。「それはそうです」しかありません。

それで今度は私は後藤田君のところへ行って、「俺はいちおう三木さんに言つてきた。三木さんがこう言つた。それもそうだと思うけれども、まあ、お前からよろしくお世話になりますから、と言え」と。すると、「それは言えない。何も俺は三木さんに恨みはない」と言つ。駄目ですよ。

それから、その下の家老どもを口説いたが駄目ですね。自分の親分と向こうの親分とが一緒になつては困るんですよ。親分同士喧嘩させることによつて、その家老どもの存在価値がある。そういう体験を持つてゐるんです。だから私はもちろん政治とは関係しません。伯父から言われたこともありますしね。

そういうことで四宮先生には大変いろいろ注意を受けました。その時まさかと思つたんですが、見てみると、やはりそうですね。今の政治がそうでしょう。政党はあり得ない。みんな徒党である。その通りですよ。政策なんか何もありませんから。あいつが好きだ、嫌いだですよ。

改めて学校時代で先生が言ったことを思い出しますが、第一高等学校の時の論理学の先生の言葉をご紹介します。「君たちはいざれわかることだが、国会は法律を作るところである。そうすると国会の委員会の議論等はことごとく論理的に、みなまともな議論が展開されると思うだろう。大間違ひである。速記録を読んで見ろ。およそ非論理的な言葉が飛び交つてゐるだけである。そういうところである」ということを言われました。論理学の先生、須藤新吉先生です。後になつてわかりましたが、その時はまさか、と思うわけですよ。

昔の思い出話をしますと、漢文の先生が「何を言つたんですが、だいたい高等学校の一高の先生というのは、みんな『社会学』を教えてくれるんですね。

その最たるものが丸山先生というドイツ語の先生ですけれども、この先生は、誰かが社会問題の話に水を向けるわけです。滔々とそれをやるわけです。例えば今の政治をどう思いますかと言つと、すぐ、乗つてくるわけです。それでドイツ語の授業が半分飛んじやうわけです。

それで、「半分飛んだぞ、またしゃべった」と言われる。先生もそれを期待しているんですね。ことごとく、そういう人間学を教えてくださいましたね、私たちの高等学校の先生方は。感謝しています。

そういう先生がいっぱいでしたね。ですから第一高等学校の、私たちがいた頃の三年間では、そういう人文学というものを教えられましたね。例えば、先ほどのお話、もう一度付け加えますと、「なぜ中国で孔子が出たか、孟子が出たか。それは世の中が乱れに乱れたからだ。乱れに乱れたから、ああいう人が出た。わが日本は、あれまで乱れないから、いいのが出ないんだ」と。なるほどそういう言い方ができる。ということは、私たちは、私は特に独法ですから、弁証法です。テーゼに対するアンチテーゼがあり、正・反・合というのを教わるでしょう。何かわからないけれども、なるほどそういうものか、という感じはわかりましたね。

そこで総合しますと、私の高等学校時代というのは、ヨーロッパではヒトラーが出てきたり、フランスで人民戦線の結成が出たり、大変な時ですよ。それからヒトラーが国家元首になった時は私たちはまだ在学中ですが、『マインカンフ』なんかもわからないなりに読んでみたりしたわけです。国民投票をやって、彼が元首、フューラーになるんですね。その時のことを調べてみますと、すごいですね。念のため調べてきたんですが、国家元首になるのが昭和八年八月十九日ですね。この時の得票は四、二七〇万票のうちの八九・九%、約九〇%の三、八四〇万票とっているんです。そういう時代ですから、やはり私たちはドイツ語で、ヒトラーというのはどんな男だというのは知りまますよね。なぜ、こんなになったかということを含んで議論しましょう。そういう時代ですね。お隣のフランスでは人民戦線が出てくる

わけですね。それで、人民戦線内閣ができるわけでしょう。ですから、まさに隣合いの独仏が競い合って別の道を行くのです。

そういう状態ですから、ここにも書いてありましたように、いろいろな研究が盛んですよ。その中で、わがドイツ文学系統は警視庁の特高に睨まれました。ドイツ文学研究会というのは危ない。マルクス主義だという。私はフォイエルバッハの“Das Wesen des Christentums”というのを読みました。そんなの読んできるとやられるぞ、と言われた時代です。現に私の一年上の連中は数人、特高に引張られたですからね。そういう時代なんです。だからその頃の時代を見ていると、一体世の中はどうなるか、ということを考えましたね。もちろんどちらが良い悪いなんてわかりませんよ。ただ、非常に狂乱怒濤の時代であることはわかりました。それから先生方がいろいろなおつしやる。ですから、それなりのいろいろなもの考え方ができました。私は先ほど言いましたように、家庭教師のほうで忙しいですからね。夜のほうのお付き合いはほとんど無しです。毎晩家庭教師に出かけているんですから。

その頃私は非常に真面目でして、ピューリタンみたいでした。酒は“きちがい水”だと思っていたんです。あんなもの、金を払って飲むものではないと思っていたんです。同時にタバコもいけないと思っていました。なぜ、私は酒とタバコを始めたかと言いますと、軍隊に入りました。後で話が出ますけれども、師団司令部で約二百名ばかりを経理部長代理で預かるわけです。そうしますと、部長代理がいつも難しいことばかり言っているのは駄目ですよ。土、日は一緒にあって、肩を抱いて歌を歌い酒を飲みかわします。体質的に合ったのかも知れないですね。けっこう酔わないんですよ。酒を飲

んでいる間に今度は当時、兵隊が「ほまれ」という煙草を吸っているでしょう。「何だそれ、一本寄せ」と言ってもらって、煙草を始めました。だから私も酒も煙草も軍隊に行つて初めて覚えたんです。学生時代は、いま申しましたように、酒は「ぎちがい水」である。そんなものわざわざ金払つて、飲んでいるんじゃない。煙草も健康に悪いということ、やらなかつたですよ。

そんなことですから、友達同士のお付き合いは、昼間だけしかないものですから、野球になるわけです。それで、先ほどの糸まりの話が出るわけです。各クラス対抗戦で、私はキャッチャーをやりました。ピッチャーとは今も付き合っていますけれども、新日鉄にいた浜口君です。むかし開成中学のピッチャーをやつていて、なかなかいいピッチャーでした。二人とも大学に行つて、法学部で一緒に野球をやりました。各高校対抗の野球をやるんですが、一度優勝しました。

一言で言うと、世の中、いろいろなことがありますけれども、楽しい時期でしたね。

伊藤 左翼思想の影響はなかつたですか。

海原 左翼思想というのは、私は感じませんでした。そんなものは危ないぞと言われただけで。しかし理屈を言えば、共産主義思想もいじやないか、と思ひました。生産手段は全部国家が持つ。働いて共有でやつて、できたものは平等に分ける。こんなことができれば、これに優ることはない。しかし、それはできないだろうと思ひましたね。それは不可能だと。世の中の制度としてマイナスも出ますしね。いろいろそういう点は夜、寮へ帰つてきてから、寝室で議論になりますけれどもね。私は共産主義というのは理論としては正しいかも知れないけれども、実際の社会においては、これは実を結ばないだろうと思う、

ということをやつたんですが、いや、そうでもない、ああでもないそれは大変なものですよ、その頃の夜は。十二時過ぎたつて平気なものね。明日は教室に出て、黙つていればいいんですから。私は、しかしお勤めがありますから、家庭教師の先生役がありますから。ただ、その意味ではわりに身がまともに持てましたね。

御厨 その頃は将来何になろうというふうに思つていましたか。

海原 高等学校時代ですか。それはやはり知事になりたいと思ひました。行政官。会社に行くか、役人になるかですが、私は会社に行つても、とても金儲けには向かないと思つたんですよ。役人になりたいと思ひました。親父もそう言つてましたし……。役人になるには当時は大蔵省か内務省か外務省か、この三つの選択になるわけです。外務省は特別の語学の研修が必要ですし、大蔵省も、どうもあそこで金の勘定するのは嫌だと思ひまして、それよりは知事がいいと。それは海原清平のやり方を見ていて、気がついてきますからね。行政官というのは面白いな、という感じがあるわけです。なんとなく感じていたわけです。それから、もっと教育制度を改善し、教育費は国家が負担するようなこともできるんじゃないかということも言つていました。そこで、役人になりたかつたんですよ。

その頃、今の通産省は商工省でした。やはり役所と言へば、大蔵省、次が内務省。内務省は警察を持っていますからね。ところが平井君も私も、「お互いに内務省に入つても、警察はやめような」と言つていたんです。人をふん縛るところはどうも向かない。「お互いに向かないな」と言つていた。しかし、そこへ行つちやつたんで、世の中ままだならんものです。友人に秦野(章)君がいます。秦野君は警視總監もやつたし、法務大臣もやりました。独学で日大を出て、上がつて行

東京帝国大学に学ぶ

った。だから私よりも五つぐらい上ですけれども、今でも付き合っています。「友人は」と書いてありますが、今でも付き合っているのは、平井君とか、後藤田君とか、秦野君、大島靖君（元大阪市長）になります。それ以外の親しい人は死にました。もう八十を過ぎますとね。私が一番若いんです。早生まれで四年から行きましたからね。今は満八十一歳八カ月です。仲間は二つか三つ上ですね。付き合っている友人というものは数少ないです。それがご質問に対してのお答えです。

伊藤 それは一高、東大を通じての友達ですか。

海原 一高から知っているのはもう平井君だけです。

飯尾 亡くなられた方で、特に親しくしておられた方は？

海原 それが……。軍隊で死んだのもいますしね。

伊藤 また、そういう時代でしたね。

海原 帰ってきたら、あいつ戦死したというような話を聞きますしね。新聞記者の友人では、毎日放送の副社長までいった富田君というのがいたんですが、最後はがんで死にました。これなんかは軍隊で知ったのです。私の世代は軍隊仲間が一番親しいですね。生死を共にする仲間ですから。しかも経理学校が満州の新京でありまして、そういうところで一緒になって、どこに行くかわからないでしょう。共に死のうではないか。歌の文句ではないですけども、そういう時代ですからね。高等学校と軍隊、この二つがいちばん友人としての親しみが最後まで残りますね。何でも言える仲だから。これは隠しようがないから。

伊藤 一高から東大へという時、一高と東大はずいぶん違うわけですか。その生活が。

海原 性格は違いますね。一番違うと言いますか、わかりやすい点を申しますと、高等学校時代はみんなマントでした。朴鹵で。だから真冬でもカラコロン、カラコロンと裸足で歩く。あれは「貫一・お宮」ですよ。熱海のお宮の松なんて言っても、もう誰も知らないでしょう。一月十七日という記念日でしょう。「お宮の日」にはおでん屋で飲むとかなんかやるんです。

冬になって、東大にマントを着て行っただけです。誰も着てないです。みんな外套ですよ。去年までみんなマントを着て通ったのに、ありゃつ、と思いました。これはいけないのかと。格好悪いですね。慌てて私は外套を買いに行っただけですよ。外套が欲しかった。忘れもしません、十カ月賦で十五円。毎月一円五十銭です。さっき言ったような生活をしていますからね。一高時代はみんなマントで来ていたのに、東京帝国大学になると外套を着る。そういうところですね。

大学時代になりました、大学の先生については、私は本当にいい時期に入ったと思うんです。みんな先生が立派な人で、穂積重遠先生が民法で、刑法が牧野英一先生。それから末弘徹太郎先生が労働法です。私はそれぞれの先生についてひとつ申し上げますと、穂積重遠先生は、法律社会では比喩は禁物だと言われ、黒板に「天網恢々疎にして

漏らさず」と書くんです。これは天の網だから疎で漏らさないんだ。人間の網は、疎では誰も捕まらない。だから天網の話と人網の話は違うんだということです。これは第一時間目は、みんな先生方の訓示ですね。それが大事なんですよ。あとは毎年同じかも知れませんが、最初、最初の時間というのは、みんなそれぞれ、人生哲学みたいなことをおっしゃいます。覚えているのはそれしかないです。はあ、なるほどと思いました。

牧野英一先生は「君たちは法律書生である。法律を勉強する際の最大の過ちは、概念を規定することに夢中になることだ。概念の規定は不可能だ。だいたい文字というものは便利で不便利だ。概念は規定できない。しかしこれは便利なものなんだ。どう便利か。机の引き出しだ。物を入れて整理しておくにはいい。それだけのことだ。その概念を事細かに拘子定規にきちっと決めようとしても、それは不可能である。なんとすれば、その決めるべき文字自体が曖昧だからだ」と。ああ、なるほどと思いましたね。その通りだと思いましたね。

それから当時、天皇機関説の問題があるんですが、私は官沢（俊義）先生が何を言われるか非常に興味を持ったんです。あの先生は一言も言わない。条文を読んだだけです。これは、もし官沢さんが機関説を言えば、法学部は壊滅しますね。だから言わなかったと思うんです。言わせなかったのかも知れない。それはわかりませんが、私は官沢憲法はどうなるかと思つて、本当に期待を持って行つたんですが、一言もありません。

非常に人生の参考になつたのが、末弘徹太郎先生の講義です。労働法は必須科目、随意科目、選択科目とあります中の随意科目なんです。随意科目では「優」をもらつても勘定されないんです。だから、末弘

先生が最初なんと言つたか。「君たち、講義は聴きにきてくれ。しかし試験は受けるな」です。労働法は随意科目だから仮に「優」をとつても、甲乙丙の「甲」ですね、「優」には勘定されない。「だから君たち、無駄な努力はするな」。先生の立場で言うと、「君たちのわけのわからない答案を、下手な字で書いてあるのを苦労して読むのは、これは苦痛である。だから講義は聴きに來い。試験は受けるな」と言われる。とたんに好きになりましたね。

また牧野先生が言つたことは、「悪法といえども法なりである。ところが往々にして悪法は法にあらざると言う人がいる。またそう言う人のほうが受けがいい。それをやつては駄目だ。悪法といえども法なり。法を改正するにはそれだけの手続きが必要なんだ。みんなが勝手にこれは悪法だと言つていたらどうなるか」と。はつと思ひましたね。これは別のたとえで言いますと、野球の試合で「審判を殺せ」という言葉、*"Kill the Umpire"* というのがあるんです。審判を殺せ。じゃあ、殺してどうするんだと。そういうことです。裁く人は必要である。「悪法といえども法なり」というのを牧野先生は教えられた。

さらに末弘先生が言われたのは、「論理的に物を考えることは実際には不可能だ」です。「君たちの大部分は社会に出るだろう。法律専門家になるのは少ないだろうけれども、一つの事件について、これを論理的に解明するなんていうことは人間はできない。一つの案件が目の前にくる。そうすると、とたんに弁護士と裁判官は、勘とか自分の体験から、これはどうだということ判断し、あとはその結論の方向に論理的に持つて行くだけだ。そうなるもんだ」と言われます。「だから、そうならないように努力しろ」と教えられました。

これは後で、なるほどと思うことがあります。私は警視庁で課長に

なりました。最初は交通課長、次に経済課長をやるんですが、その経済課長の時に、五人の係長に質問したんですが、新米のデカ(刑事)と古参の練達のデカとどこが違うかと聞いたんです。そうしたら、末弘先生と同じことを言ったですね。表現は違うんですけどもね。新米のデカは、これがホシ(犯人)だと思ったら、これがホシだという前提で、ずっと証拠を集める。そしてホシだと言う。これが新米のデカだ。老練練達のデカはどうするか。これがホシではないか。海原が犯人ではないかと思ったら、いや、海原は犯人ではないんだという線で調べていく。ところがどうしても疑いが消えない。消えないので最後にこれがホシだとなる。この違いがある。新米の刑事と、老練練達の刑事の違いはここだと言いました。末弘先生の言ったことと同じことなんですね。

伊藤 研究も同じだな。

海原 主だった先生方の言ったことをご紹介したんですけども、本当にいいことを教えてもらったと思いましたがね。私にとりましては、高等学校とか大学の先生方の言ったことが、その後の人生で非常にいい参考になりました。参考というよりも、道しるべになりましたね。だから私にとっては非常にありがたかった学生生活です。

後を続けますと、大学の時代に高文受験があるんです。これが大変なんです。当時、機関説がありました。その最中ですよ。三年の時に高文の試験で筆記が通った。私は法律学科、後藤田君は政治学科です。有名な「神ながらの道」を説いた先生が口述の試験官におられます。寛克彦先生です。私も先生の本を読みました、全然わからないのです。「神ながらの道」、清明心。わけのわからない図解がしてあるんです。これが憲法の本かと思った。何度読んでもわからない。そ

れで、私は美濃部(達吉)さんの発売禁止になった『憲法撮要』という本があるんですが、これを古本屋で買ってきまして、美濃部さんの憲法で勉強したんです。これはわかりやすい本です。天皇機関説。ついでに言いますと、昭和天皇が機関説でいいじゃないかと言われたそうですけれどもね。

寛克彦先生の「神ながらの道」がわからない。口述試験の先生ですから、ひよつとして当たるかも知れない。当たったらどうしようかとは考えたんですよ。もうその時はあきらめるしかありません。自分でそう決断したんです。

その口述試験が第一日の午前ですけれども、午前七時半までに集合です。そのおしまいのほうの番ですけれども、一人あたりの時間が長いです、これはひよつとして寛先生かと思っただですよ。だいたい五分が基準なんです、口頭試問は。二〇分前後かかっています。これは寛先生じゃないかと思っただ。それで、入って行きますと、先生が二人座っておられる。あつ、寛先生だ。ちょうど寛先生があなたの位置「自分の前」に座っているわけです。その隣に行政法の野村先生が座っておられます。

これが私の人生にとっての大変な時だったんです。「憲法第一条に『大日本帝国は万世一系の天皇、これを統治す』と書いてある。その統治とはどういうことですか」と聞かれます。「ああ」と思っただすね。まず時間をかせごうと思っただ、「はい、それは天皇陛下が国政を統べ治められることでもあります」と言っただ。そうしたら、寛先生は何と言われたと思いますか。「私は言葉の意味を聞いているのではありません。法律的な意味を聞いているんです」。こっちはもう汗いっぱいです。ハツと思っただ、「天皇陛下が行政、司法、立法の

三権を統べ行なわれることを言います」と言っただけです。すると次の質問は、「神を祀ることは統治に入りませんか」と聞かれた。ああ来たな、と思ったです。「忘れていました。祭祀、神を祀るということは、大変に大事なことであります。昔は祭祀すなわち統治でした」と言った。そうしたら、算先生が「昔は昔として、今はどうですか」と聞かれる。参ったですね。これが私にとっては、ひとつの転機でしたね。

飯尾 どうされましたか。

海原 ここが私のとっさの判断ですね。思い切って、向こう岸に跳んだんです。とたんに算説です。本は一応読んでおりましたからね。「先生のご質問の趣旨がわかりました。統治というのは清き、明き、直き心（清明心と言われていましたからね）、それを広めることであります」と、こう言っただけです。算先生は教室に入っただけで、黒板に向かつて「いやさか」を三回やってから講義を始めたという先生なんです。

「神ながらの道」です。本を見てもわからない。これは僕は理解不可能だと思って、さつき申しあげたようにギブアップしたんですが、ここで身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、ではないけれど、思い切り跳んだんですよ。「清明心、それを広めることが天皇の統治であります」と言った。さあ、その次の質問は何だと思えます。「その心はどこにありますか」です。私は「それはみなみな心の中心にあります」と答えました。「ああそうですか」と先生は言われました。

そして算先生は私が苦労しているのに同情したんでしょうね。「あなたのおっしゃりたいのはこういうことですね」と言われ、算先生が全部しゃべってくれました。そこまで行くのにだいぶ時間が経って

ますからね。

ちよつと端折って要点だけ申しあげたんですけれど。いろいろ行きつ戻りつしたあとで、先生が講義してくれましたので「はい、その通りであります」と答えたら「よろしい」と言われました。それで席を立つ時に、チラッと野村先生の方を見ただけです。副として座っているから。どうかと思ったら、頭を軽く下げて合図をして下さった様に思いました。ああ、助かったと思つて、外に出たんですが、考えてみると、木に竹を接いだようなものです。初めは立法・司法・行政の三権を行使することであり、と言っていたんですからね。それをいきなり清明心にしたのです。これは落第だと思った。野村先生が会釈してくれたけれども、あれは慰めてくれたんだろうと。

その後、もう十二時を過ぎていまして、東大に行つたんです。東大に行つて食堂で様子を聞いてみたら、算先生におつかつた人はみんなやられているんですよ。中には、問い詰められて「わかりません」と言つた人がいる。僕のように跳ばなかった。算先生はどう言つたか？「あなたは東大三年で何を勉強しましたか」と言われたと（笑い）。そういう時代です。非常に厳しかったと同時に、私が苦労して、急に変わった、「転向」したということはご存知だと思つてくれればね。その努力を買ってくれたんでしょうかね。「わかりません」と言つて、「あなたは何を勉強したか」と言われた人がいるのを聞いて、私も安心しました。そういう人がいるのなら俺は大丈夫かな、と思つた。これが私の東大の最後の思い出ですね。この時はほんとうに冷や汗をかきましたね。切羽詰まつて、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、ということですか。私がなまじっか算先生の本をあまり読まなかつたから良かったのかもしれない。一応は読んだんですからね。難しいこと

はわからないので、寛先生だったら諦めるということでしたが、命びろいをしました。

以上が学生時代のいろいろな体験を整理したものです。中学、高等学校、大学を通じて、いろいろな先生に出会ったということと、それぞれの先生方がみんないいことをおっしゃっておった。それが後の、私の人生行路の道標になったという気がします。

伊藤 一高は全寮制ですね。

海原 一年、二年は寮に入っていました。二年の時に寮と学校が本郷から駒場に変わったんです。家庭教師をやっていたでしょう。本郷だったところへでも行けますけれど、駒場に引っこ込みますと、往復が不便ですので、三年になった時は家から通学しました。三年の時は三河台に住んでいました。

伊藤 三年になったら、もういいわけですね。

海原 許可が必要でした。理由を書かなければいけない。私は一年、二年の間は全寮制でもありますが、場所が本郷ですから、わりあい足の便がいいわけです。それが駒場に移りますと、渋谷からちよつと入ったところですが、あの往復がまた馬鹿にならない、家庭教師の先生にとっては。それで改めて思い出しますが、学生時代のひとつの大きな思い出は「二・二六」です。これはちよつと三年の卒業試験の日なんです。いま申しましたように、私は三河台に住んでいたので、朝、チンチン電車に乗って渋谷から行くという予定で通りに出ました。雪が積もっていて、電車が来ないんですよ。六本木の隣の三河台から電車に乗って行こうと思ったんです。青山一丁目に出て、そこから渋谷に行くというルートですが、電車が来ない。いつまで経っても、どっちにも電車が動いていない。おかしいな、何か事故かなと思って、

決心して歩き出したんですよ。三河台から駒場の一高まで徒歩で行ったんです。一時間かかりました。駒場に着いたら門が閉まっているんです。そうしたら、寮生が十人ばかり来ているんですね。「今日卒業試験の日じゃないか」と言っただけです。そうしたら、「いや、何か大事件があったらしい」と言うんですよ。寮生と外部との接触が一切止められた。学校は閉鎖されたと言うんです。「だって、今日は卒業試験じゃないか」と言ったら、「いや試験は延期だ」ということです。何かあったか知りません、その時は。「そうか、じゃあ今日は何もないんだな」と言うと、「何も無い」と言う。そうか、ということでも、また歩いて帰ったんです。

伊藤 その頃は井の頭線はなかったんですか。

海原 井の頭線はありませんね。あの頃は渋谷からのチンチン電車で駒場まで行きました。とにかく、交通機関が一切ない。

伊藤 渋谷からは歩く以外にないんですか。

海原 三河台からずつと斜めに行きますから、渋谷には出ません。途中近道がありますから、斜めに行くわけです。

飯尾 それは歩いて行かれた時ですね。電車の時は渋谷を通って行くわけですね。

海原 はい、そうです。三河台の家に帰ったら、ラジオがいろいろ喧しいわけです。当時はラジオしかありませんからね。つけていると、いろいろ注意があるわけですけれど、山王下に『幸楽』という料亭がありました。ところが最初に決起部隊の本拠だった。そっちの方面に向けて、畳を上げて、万一の場合に備える必要があると言います。その日はないんですが、その日の午後か二日目でしょうね。何かあった、だんだん聞いていると反乱があったことがわかります。三河台から『幸

『樂』は近いんです。行ったら兵隊が立っているわけです。

その後はご存知のような経緯なんですが、特にわからなかったのは、最初は「決起部隊」だったんですよ。二日半したら「反乱部隊」になっちゃった。「兵に告ぐ」が出ます。なんでこんなに変わるんだと思いましたね。小型戦車、装甲車が出てピラをまきました。「兵に告ぐ」というアドバルーンも出たし、ピラもまかれた。『幸楽』に行ったら、ずいぶん見物人が来ていました。

先ほど申したように、ヨーロッパではナチス・ドイツ、ヒトラーの台頭がある。フランスの人民戦線の台頭がある。大騒ぎしている頃でしょう。それが全部響いてきますね。それから国内では天皇機関説をめぐって国体明徴運動が起こる。いろいろなことが起こった時代ですね。

だから、どう言ったらいいでしょう。何を体験したかよくわかりませんが、後になってみると、ああそうか、ああだったか、こうだったか、となるわけです。

伊藤　そういう中で、法学部はやはり入学試験があるわけでしょう。その準備もしなければならぬと。

海原　その通りです。それからご質問に平賀総長の問題がありました。これは総長になられたのが十二月ですから、私たちが卒業する四カ月前ですから、全然影響がないですね。とにかく高等学校の時は大学に入る。大学に入ったら高文の試験がある。そして卒業試験。そして卒業の時に、優をいくつ取るかによって内務省の場合は配置が違います。ですから、昔の内務省をご存知ない人には説明が難しいんですが、高文の成績と大学の成績で優秀な者が内務本省、その次が厚生省、それから地方県庁と別れるんですね。

当時、内務本省の中で、三人が徳島なんです。平井、後藤田、海原。

徳島から三人内務省に入ったということで、一寸した話題になりました。後藤田君と知り合ったのは、入ってからです。彼は土木局で、平井君が行政局の地方課、これがトップですね。高文の成績は後藤田君が一番良かったんですかね。その辺のところは本人には聞いていませんけれど、そういう話でした。

今度の『外交フォーラム』で、猪木（正道）さんが河合（栄治郎）さんのことを書いていますね、昨日見ましたが。そういうよそのことに気を取られる暇がないですね。例えば法学部であれば、機関説か、寛克彦の「神ながら憲法」か、そういう目先の問題の方が大きくて、隣で何が起きているかなんて、全然、少なくとも私は関心がなかったですね。余裕がなかったです。

ついでに、もう一つ、私の人生にどうの問題があったんです。海軍の「短期現役」を志願するかどうかということです。『短現』の始まった年ですからね。私たちは第二期に該当します。同じ年でも、陸軍に行くことみんな二等兵です。海軍に行けば中尉さんでしょう。どちらに行くか、海軍がいいに決まっていますよね。私も海軍を受けようと思った。それで四宮校長に話したら、経理学校の大須賀中将は昵懇だから言っておくと言われ、お願いしますと申しました。

そうしたら、これがまた人生の一つの転機なんです。ちよとどの受験日に、卒業試験の日が重なります。私は一年と二年とで五科目ずつしか受けていません。家庭教師があつたもので、それだけしか受けられなかったのです。（卒業の）最小単位は十八科目です。三年が八科目なんです。それで「優」の数を増やすためには、三年の時には少し余裕ができましたので、十科目ぐらい受けようと思った。一年、二年は五科目ずつなのに、三年の時に一挙に十科目受けようとした。

その増えた二科目は、西洋法制史と日本法制史です。この二科目については先生の講義を聞かなくても、当時は前の年の講義の記録（ガリ版刷り）を売っているんですよ。それを買ってきて読んでいればわかるわけです（笑い）。私は単位を増やすために、日本法制史と西洋法制史を受けることにした。ところが、この二科目の試験の日と、海軍の「短現」の試験の日と重なっちゃったのです。土曜日の午前と午後ですよ。どうします？ 内務省に行く時の自分の成績を良くしようと思えば受けなくてはいけない。受けたって、別に「優」になるとは限りませんよ。しかし可能性はある。それとも海軍に行つて将校になるか。将校の方がいいですね。大学の「優」の数がどうあろうとも、最低はあるんですから。

それで海軍の方へ行つたんです。午前中は身体検査。午後が口頭試験。そうしたら身体検査の最後の時に、お前は痔だと言われた。しかも痔瘻であると言われた。全然自覚症状がないんですよ。「私は自覚症状はありません」と言つたんですが、「いやお前は完全な痔だ。海軍は痔は駄目だ。お前の痔は重度だから、入院、手術を要する」と言われた。「はっ？」と言つた。もうしようがない、「はっ？」ですよ。それで終わりです。それから午後の試験は間に合わない。経理学校は、今のがんセンターのあるところですよ。築地から本郷に行くのに時間がかかります。一年間苦労したのに、午前中はもちろん駄目。ほんとうに目の前が真っ暗になりましたね。海軍は駄目、大学の二つの科目も駄目。いくら考えてもしようがないですね。

翌日、四宮先生の私邸に挨拶に行つたんです。「いや、大須賀さんから連絡があつた。待つていたら来なかつた。調べたら痔で落ちた。痔ならあらかじめ連絡すれば良かったと言われた」と言つ。私は、「い

や自覚症状がありません」と言つたんです。「そうか、とにかく落ちたんだからしようがない」「ご心配かけました」ということで校長に挨拶をしました。

一週間後、今度は陸軍の徴兵検査があつた。本籍に帰らなくても寄留地でできたんです。だから赤坂の区役所で受けました。フリーパスです。最後の軍医のところまで、「私は実は一週間前に海軍の短期現役を志願しました。痔瘻だと言われ、しかも入院して手術が必要であると言われました」「なに、お前が痔だ？ 海軍の軍医はいい加減だ」です（笑い）。笑い話ですけど、当人にとっては笑い話では済みませんよ。「ようし、合格」となった。しかし、甲が第一乙になりましたね。

それで翌年入営するわけです。この事実が後に尾を引くんです。というの、私は後年防衛庁に行きました。防衛庁の時代に、私は「非常に『海』に冷たい、『空』にも冷たい。海軍はあれは海軍ではない、陸軍である」と言われもしたし、書かれもしました。「あれは陸軍」だと言つた。その原因として、「あいつは旧帝国海軍に恨みがある」と言う（笑い）。そういう話になつてしまつたのです。この恨みの問題を証明したのは、福田篤泰氏が大臣の時ですね。評論家を集めて会食をした時に、私の前に海軍出身の評論家が二人座られました。しばらくしてから、「時に海原さん、何か旧帝国海軍に恨みがあるそうですね」と言う。「短現」でふられたという話ですよ。そういうことになつていくわけです。

海軍はアウト、陸軍は合格ということになりました。こんなことは、当時の事情を体験した人でないとわからないのです。海軍の「短現」が評判が良くて、志願者が多いものですから、どんどん落とすんです

よ。落とそうということをやっている。陸軍はできるだけ探ろうということですから、何でもかんでも男であればいい。そういう時代ですね。以上が私の高等学校、大学時代、内務省に入る一歩手前までのことです。何か質問でもあれば……。

伊藤 その大学時代はどこにお住まいだったんですか。

海原 三河台です。

伊藤 三河台はお父様と一緒で。

海原 一家です。家族一緒です。今、『青野』という有名なお菓子屋さんがあるでしょう。あそこのちようと裏です。当時の電車通りの裏です。表通りではありません。三河台町三番地です。

御厨 これで終わりますが、昨日の東京新聞に出ておられましたね。

齋藤隆夫のことを、今度ご講演なさるといふ話が……。

海原 それは齋藤隆夫さんの演説を聴いてから、私が入営したからです。それは内務省時代の話になるわけです。そのことを……。草柳大蔵さんの本があるでしょう。あの文藝春秋の文庫版が出る時に、あとがきを頼まれたんです。草柳さんは出石町で青年たちの塾の塾長をやっているんですね。そこから話があって、生で齋藤隆夫さんの演説を聴いた人、ということでは私が参ります。生で聴いた。なぜ聴けたかという、これは内務省で私は文書課にいましたから。文書課庶務係というのは、国会との関係もあつたわけです。ですから公務員として、傍聴する席があるんです。

御厨 なるほど、それで聴かれたんですね。

海原 そういうことです。ちょうど私が入営のために徳島に発つ前の日、二月二日です。その話をしますと、私はあれを聴いて感心しました。政治家にこういう人がいる。私の伯父とはだいぶ違いますからね。

こういう立派な人がいる。こういう政治家がいるなら大丈夫だと思っただんですね。これだけのことを言つてのける人がいるのなら大丈夫だな、と思いました。

それで徳島で二月十日に入営するんですが、幹部候補生（志願）の資格を持った者に対しては、担当将校が面接するんですね。参考資料を送るんでしょう。その時に質問が出ました。「海原は齋藤隆夫の演説を知っているか」「知っております」「どう思うか」と。あなたならどう答えますか。私が答えたのは、「私は齋藤先生の演説を生で聴きました。私は齋藤代議士は、国民が知りたいと思うことを、国民に代わつて質問されたと思います」。こう言つたんです。「ああそうか」、それだけで済みました。後は何も言わなかつたですけれどね。

その後ですよ、問題は。あんなに変わつちやつて。私は本当に、この人は立派なことをおっしゃるなと思ひ、これはいいと思つた。しかしこれだけやつて大丈夫かと。いままでのことを見ますとね。青年将校と称するものがある。青年将校にも二通りありますけれど、その時の青年将校というのは、少佐とか中佐の連中ですね。陸軍省とか、参謀本部のその連中が一体収まるだろうか、ということは思いましたね。齋藤隆夫さんの演説についての草柳さんの解説を読みますと、初めは陸軍大臣も、軍務局長も、齋藤さんならあのぐらいのことを言うだろうと言つていたんですね、控え室で。そういう空気だったんですね。あれだけ言つても当たり前だと。ところが、けしからんということになって、突き上げが始まった。それで世の中が変わつていくわけですね。最後は除名になる。これが日本の歴史ですね。

御厨 どうもありがとうございます。

〈以上〉

海原 治 オーラルヒストリー

第2回

開催日：1998年11月12日

開始時刻：14時00分

終了時刻：17時00分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

飯尾 潤(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

牧原 出(東北大学法学部助教授)

第2回 質問項目

今回は、先生が内務省にお入りになり、さらに軍隊に行って復員されるころまでのお話を伺いたいと思います。それについてお話を伺うなかで、関連した事項についてご質問させていただきたいと思います。

- ① 内務省同期入省（昭和 14 年）には後藤田正晴さんがおられますが、その他に先生の同期あるいは先輩・後輩として、特に親しい方、関係の深い方々としては、どのような方がおられますか。
- ② 内務省入省後、先生は文書課に配属になり、約 1 年後高知県に移られます。先生が入省されたころの内務省の様子はどのようなものでしたか。また、何か当時の記憶に残るエピソードのようなものはありますか。
- ③ 昭和 15 年（1940 年）1 月、高知県に移られた後、2 月に入営されています。最初は歩兵二等兵から始めておられますが、高知県に移られたときのこと、入営前後の事情などをお話してください。
- ④ 先生は入隊後満州に駐屯され、経理部幹部候補生として物資調達に北朝鮮に行かれた体験や、本土防衛のため帰国されたときの資材調達にまつわる（敗戦直前）エピソードなどをご著書の中で述べておられます。約五年に及ぶ長い軍隊経験ですので、繰り返しになるとは思いますが、改めて順を追ってお聞かせ下さい。

内務省入省

——大臣官房文書課勤務

海原 「軍隊時代の資料がないことについて話し始めている」……写真も自分で現像して焼きつけて、引き伸ばしたんです。そんなものが全部来ないんです。だから軍隊時代のことは几帳面に書いておいたんですが、何も来ないんです。何故来なかったかは、ああいう時ですかね。師団長の荷物も来なかったんですから。私は参謀長と一緒に大阪の中部軍司令部に先行したものですから、後を頼むと言って出発しました。頼んだ相手はしつかりしていたんですが、汽車の（車輛の）割り当てでゴタゴタしたのです。

私たちはずいぶんいろいろな資料を集めていましたが、作戦準備のための物資は全部置いて行く様な配車を関東軍司令部がしたのです。後に来る部隊のたを考えたのでしょうか。自転車にしましても、円匙にしましてもいっぱいあったのです。そういうものを全部持って来させようと思って、私は先行して、釜山から電報を打った。内地はこういう状況だから、全部持って来いという電報を打ったんです。全く無駄でした。

というのは関東軍が部隊の移動に対して、配車を制限したんです。貨車を寄越さないんです。私は経理勤務班長をしていましたが、その二百名ばかりの部隊に対して、兵隊が寝るだけの貨車しか来ないんです。だから重要ないろいろな品物は持って来られなかったんですね。そんな状況での移動ですから、私の私物の入った軍用行李は到着しま

せんでした。いろいろ几帳面に書いておいたんですがね。

伊藤 残念ですね。

海原 残念なんですけれどね。

ところで、密度の関係になりますが、どの程度のお話をしたらいいのでしょうか。第一回速記録を読みますと、余計なことをいろいろしゃべっているなと思います。

伊藤 いや、余計なことをしゃべっていただけはいんです。

海原 それならばいいんですが（笑い）。一応準備してきましたが、これから先、例えば今日は、軍隊時代のことを順を追って話すと書いてあるでしょう。

伊藤 その前に内務省の話……。

海原 斎藤隆夫代議士のことは、しゃべっていると長くなるんですが、斎藤隆夫氏の演説を聞いてから東京を発ち、徳島の部隊に入営したのです。

伊藤 そのお話は、この前ちよつとかがありましたね。

海原 その内容について、実は言いたいことがあるんです。

伊藤 おっしゃってください構いません。

海原 時間がかかって大変ですよ。

飯尾 それは十分ございますから。

海原 ゆつくりと言っても、月一回のペースでしょう。いつこれが終わるのかと思うんですね。私もいま健康が悪いわけではないですけど、仲間が死んでいきますからね。いや、本当なんです。だから、この調子でいいのかと一寸気になります。後藤田君は何回やったんですか。

伊藤 二十七回ですね。

海原 月一回ですか。

伊藤 大体、そうですね。

海原 そうすると二年ちよつとですね。

伊藤 そうですね。

海原 彼は私より二年六カ月上ですけれど。

伊藤 じゃあ、まあ大体いいんじゃないですか（笑い）。

海原 月一回というのはちよつとスローペースかなと思ったりしているんですけどね。今のところは大丈夫ですけれど、だんだん周りがいなくなりますから、心配になりますね。どうしたらいいかと思つて。

今日お話をすることですが、例えば私のいた師団、それが属している第五軍、これが関東軍では、対ソ作戦の最先鋒だったんですよ。それをお話するのに、私たちがどういう場所にいたかということの説明が必要です。そうしますと、それだけでも実は時間を取られてしまいます。恐らくみなさんはどなたも「湿地」というものをご存知ないと思います。

伊藤 言葉は知っていますが……。

海原 みなさん方は、「湿地」というと湿ったところと思うでしょう。とんでもないんです。いろいろな湿地があるんです。湿地の中で参謀が死んだこともあるんです。そういうことをしゃべっていると、それだけで時間がなくなってしまう。

伊藤 いいですから、もう始めましょう。

海原 いや、どういふふうにお話ししていいか。適当に、それはもう結構だということを書いていただければ……。

伊藤 もう少し聞きたい時には質問をします。

海原 はい。いろいろと用意はしてきたんですがね。私の家のすぐそばに「コンビニ」があるものですから、家にも小さなコピー機がありますが、「コンビニ」に行きますとカラーが取れますからね。まずこれをお分けておきます。「地図や資料を配布する」。これがないとお話しても駄目なんです。

伊藤 カラーじゃないですか。これもローソンでおやりになったんですか。

海原 いや、これは違います。これはセブン・イレブンです。ローソンにはカラーはないけれど、セブン・イレブンにはカラーがあるんです。

これがないとお話ができないんですよ。例えば私がどこにおったかと言いましてもね。このついでに、これもお渡しします。これが今日お話しする、私のいたところです。

伊藤 この前のお話で、昭和十四年に大学をお出になって内務省にお入りになるわけですが、その時ははずれ軍隊に入るといふことは決まっているわけですか。

海原 それは、この間お話しした中で、最後に出てきますが、海軍の「短現」をふられまして、陸軍に取られたわけです。ですから、もう決まっているわけです。

伊藤 それで内務省にお入りになる。内務省にお入りになって、後藤田さんはご一緒なわけですか。

海原 内務省に入った時に一緒になるんです。

伊藤 他にはどういふ方がいらつしやいましたか。

海原 学校時代から知っているのは平井学君なんです。彼は高等学校からですから、一番古いんです。その後は、内務省に入ってからです。

本省で後藤田君と一緒にいるわけです。それから軍隊時代の付き合いもあります。一緒に内務省に入りましたのは三十四人でしたが、内務本省と、厚生省と、各都道府県とに別れました。都道府県に行った連中は、その時はわからないですね。

伊藤 そうですか。

海原 はい。三代くらい前の大阪の市長をしました大島（靖）君は私の親友ですが、彼は群馬県に行つたのです。

飯尾 大島さんは同期でいらっしゃるんですか。

海原 同期なんです。彼とは本当に仲がいいんです。そういうことで、友人には学校時代、内務省、軍隊とあります。大まかに言いますと、そう分かれるわけです。

伊藤 内務省で、そういう状態で、同期というのはかなり意味がありますか。

海原 私たちの期はわりにまとまりがいいと言いますか、一緒に入ります、後でお話ししますが、軍隊に行きましたでしょう。そういうことがあるものですから、特別にまとまりがいいんですね。「十四年会」というのを作っていました、これが一時、雑誌や何かに書かれましたが、別にどうということはないんです。ただ集まって、私と後藤田君とかでお話をするだけですけれどね。その「十四年」の仲間があるわけです。その会も、去年で終わります。幹事役が死にましたから。

伊藤 おっしゃりたいことはよくわかりました。

海原 私にとつていろいろと意味がありましたも、みなさんが聞かれても別に何も関係ないわけでしょう。

伊藤 なくはないですよ。

海原 なくはないのか、あるのか、そういうところを今日お聞かせし

ようと思いますが。その話はいらぬとか、遠慮なくおっしゃって下さい。そう言っていたかもしれませんが、老人が昔話をしますと、どんどん出てくるんです。

伊藤 いいじゃないですか。こちらはどんどん出したいんですから。

海原 話しているうちに思い出しますよ。それを話したら、これも話さないといかんと思ってしまうわけですね。駄目ですよ、だから。

飯尾 出てこない人が多くて困っているの。

海原 いやあ、今日も出てくる前に女房に言われたんです。そんな、あなた昔話をしても、今の人は全然興味ないんだからって（笑い）。

牧原 そんなことはないですよ。

飯尾 何回も出てこれると思いますが、取り敢えず学校時代、軍隊時代を別にしまして、入省の頃に特に親しくなられた方として、後藤田さんと親しくなられたわけですね。その辺りの状況をお話したいです。

海原 平井君、後藤田君ですね。そのとき親しくなったのでは、死んだのが多いんですよ。

飯尾 それは結構です。

海原 例えば岡田典一と言うのがいまして、これは文科じゃないんですよ、医者なんです。それで高文を受けて通った。これは大変なシヨックですよ。医学部の学生が高文を通ったというので、何だ法学部は、ということになりますね。岡田典一と言うんですが、「オカテン」と言われていました。この岡田君が、しかもパージの関係をやらされました。そんなお話をしますと、留処がなくなりますので割愛します。

飯尾 そういう時、目ぼしい方とどういふふうにしておられたかというの、今なかなか資料がないもので、それをお話しいただきたいん

です。

海原 どういうふうにしておられたと言われても困りますが。

伊藤 では、内務省にお入りになって、最初どういふことをなさるわけですか。

海原 最初どういふことって、要するに見習いですよ。

伊藤 見習いですが、具体的にはどんなことをなさりましたか。

海原 もう始まっているんですか？

伊藤 始まっていますよ。何でも速記ですから。

海原 何でも速記ですか。「速記しないでくれ」というのも速記になつていきますからね（笑い）。私は、大臣官房文書課の庶務係でした。何をやる係かと思いましたが、当時は帰化とか国籍の離脱とかがありましたね。内務大臣がこれを許可するんです。それが私なんです。帰化とか国籍の取得とか二重国籍の離脱ですね。それは内務大臣の権限ですが、実際にやっているのは私なんです。私と、前からいる古い属官と言いますか、この二人がやるだけなんです。

伊藤 見習いの段階でそれをやるんですか。

海原 そうなんです。大臣官房文書課の庶務係というのは、結構そういう意味では面白かった。庶務係の主任としては国籍の離脱・取得の關係の他に、改姓名ですね。それも入っています。そのとき初めて私は、後でいろいろと世の中で問題になる水平運動、いわゆる部落の存在を知りました。

伊藤 何ですか。

海原 それは、例えば海原という名前ならどこかとわかるんですよ。都会ではわかりませんが、その地方では、海原という名前はその部落だとわかる。そういうものは地方では動かせないんですね。特に高知

とか奈良とか、いろいろなところには、昔からの歴史があるんです。

そうすると、海原という名前はその一族だとわかるんですよ。そこで、いろいろなプラスとマイナスが出てくるんですね。マイナスの場合は、特に結婚の場合に障害になるんですね。そういうのを初めて知りました。もう一度言いますが、「内務大臣これを許可する」という場合の内務大臣は、私なんですよ。

伊藤 それは、姓を変えたいわけですか。

海原 そうなんです。名前の方はいいんですが、改姓の方になるとやがましいです。ずっと規則があります。昔からの例規というのがありまして、なかなか改姓は認めないんですよ。ところが結婚の障害になって、どうしても変えたいということなら、ちゃんと知事からの上申が出てくるんですね。都道府県知事から、これはこうしてくれということとちゃんと上申がある。それを受けてやるわけです。しかし、たった一人の判断ですよ。俺が内務大臣か、と思うんですけれどね。

伊藤 気持ちがいいじゃないですか。

海原 この前の速記の時に、「将来の希望で私は役人になりたいと思つていた」と言つたけれど、知事になりたいと思つただけでね。本当の見習いにそんな権限があるとは思つていなかった。一見習いが内務大臣の代わりで、これは許可すべきだ、許可すべきではない、とかやるんですよ。

飯尾 それも、とにかく独断で決めてしまえば終わるわけですか。

海原 ところが、その前に例規というのがあるんですが、例規が整理されていないんですよ。それで私は、今までの改姓に関する例というのを集めました。それは入営の時までずっとやりまして、それをまとめまして、ゲラ刷りの最初の版を見て校正して、それを置いてきたん

です。後はどうなったか知りません。

飯尾 後の方はそれを見てやっている。

海原 やってるはずですよ。今の自治省ですね。人事院かもしれませんけれどね。内務省に入った時には例規集がないんですよ。記憶が何かで、あの時はこうでした、ああでしたと言うのです。そんなことでは駄目だ。仮にも、何度も言いますが、「内務大臣がこれを許可する」だから、内務省にはちゃんとしたものがないといけないと思いましたが。それで、例規集を作るんです。

ところが役所では、例規集を作るとなると、みんながいちやもんをつけるんですね。ああでもない、こうでもないと言う。責任は取らないくせに、誰かが何かをやろうとすると、ああだ、こうだと言うのが役所の図式ですね。

飯尾 当時からそうだったわけですか。

海原 そうです。

伊藤 ああだ、こうだは、どこから出てくるわけですか。

海原 それはいろいろなところから出てきます。

伊藤 庶務係ですか。

海原 その当時は、地方局も警察局もあるでしょう。土木局、神社局もあります。そういうところから、こういうことをやっているとなると意見や要望が出てくるわけです。当時は内務省に神社局があった時代です。この前申し上げましたように、高文の時に笈先生に祭祀を聞かれましたね。そういう時代であって、いろいろな人のいろいろな考え方があるのです。

伊藤 でも、要するに属官の人はずっと長いこと同じ仕事をしているわけですよ。

海原 理事官ですね。それは生き字引です。そういう人が各局に一人

はいます。後でお話ししますが、人事の問題で、私たちが高等官に任命してほしいということを人事課長の町村金五さんに陳情しましたが、そのことについて私が下調べに行ったら、人事課の古参の理事官からピシヤツとやられましたよ。それは、「海原さん、昭和四年に入った人は四年、昭和五年に入った人は五年ぐらい、みんな見習いをした（見習いは本省とか厚生省とかありますね。都道府県も）。それだけ勉強して初めて高等官になれたんですよ。あなた方は内務省に入ってから十カ月しか経っていない。それで高等官に任命しろというのはとんでもない」と言われました。その時に彼が言った言葉にびっくりしましたが、「そういう資格のない者、経験のない者を、軍隊に行くからという理由だけで高等官にするというのは、任官大権の侵犯だ、干犯だ」と言うんです。任官大権を犯すものだ。へエーと思いましたが、それだけですね。そういう時代なんですね。任官大権と言っても、その理事官だけです（一同笑い）。しかし、その理事官が判を捺すと、それが内務大臣まで行くわけです。それが日本の官僚機構でしょうね。

伊藤 その国籍の変更とか、姓名の変更なんていうものはそこで終わりなんですか。それとも、内務大臣が……。

海原 私が起案してOKして上に行けば……。

伊藤 上というのは、どこまで行くんですか。

海原 次官どまりですね。それは次官が代決しますから。代決というのは結構多いんです。「代誰々」と書いて。だから、私がこうだと言えはそうなるんですよ。

伊藤 それが駄目ということはないわけですね。

海原 ないわけです。

飯尾 上は毎日毎日、山ほど書類が上がってくるのでいちいち見ないですね。

海原 それに関して言いますと、特に二重国籍の離脱ですね。これは申請が来たら出すようになっていっているんですよ。ノーとは言えないです。形式的条件が揃っていればね。都道府県知事から上がってくるでしょう。そうしたら翌日OKしていいんですよ。それを私が「これはもう要件が備わっているんだから、翌日OKだ」と言ったら、「海原さん、それは駄目です」と言うんですよ。理由はわかりますか。これはクイズですよ。それは、仮にも内務大臣これを許可することだから、内務大臣というのは偉いんだということですね(笑い)。その重さ、重みを示さんといかん、と言うんです。

伊藤 重さが日になるわけですか。

海原 そうそう(笑い)。だって、これはノーと言えないじゃないですか。だから来たら明日出したらいいのに、「それは駄目です。それでは、出された方もありがたがらんですよ」と言う(笑い)。はあ、そんなものかと思いましたが。そういうのは結構ありますよ。今では例えば、東京で言えば区役所の窓口がそうですね。当然許可しなければいけないのを、受けとって、すぐOKしませんよ。預かるんですよ。預かって一週間くらい置かれますな。それからOKですよ(笑い)。一種の歌舞伎ですね。

伊藤 庶務係は今おっしゃったようなことですか。

海原 それから、内務省関係の法律政令の審査関係があります。内務大臣がこれをOKするかどうかについての連絡係です。法令審査委員会というのができていっているんですが、その庶務をやっているわけですから、内務省関係の法令は全部わかるわけです。そこへ見習いを一人は

置くんですね。いろいろな局のやっていることを勉強させるのでしよう。

私を感じたことは、当時いろいろな局がありますが、例えば警保局、警察ですね。それから地方局、これは一般行政ですね。全然感じが違うんですよ。大学を出て内務省に入った。その時はみんな同じですよ。それが地方へ出て鍛えられて、その後には局が上がってきますと、ガラッと違いますな。

伊藤 雰囲気が違うんですか。

海原 キャラクターが違ってくるんですよ。人格ではないんですが、まあ人格の一つかもしれないけどね(笑い)。それは、例えば警察の方、警保局は、「おお、そうか。わかった。ご苦労」と、一種のめくら判ですよ。良きに計らえ、です。地方局は、事細かにやるわけです。うるさい頭のいい人が揃っていますから。名前を言ってもいいんですけれどね。だから、文書を警保局に持って行くのと、地方局に持って行くのでは、とてもそれは違いますね。

やかましくないのは土木局です。河川とか、道路とかを扱います。後藤田君がそこにいました(笑い)。困るのは神社局です。これはある程度の知識がなければ駄目でした。神社がどういうものであって、官幣大社とは何かを一応知っていないと話が通らないわけですね。意地悪い事務官が質問したりするから(笑い)。ですから、同じ内務省と言っても、いま申しましたようにそれぞれの局によって、いる人の人柄は違いますね。こんなに変わるものかと思いましたが。それが私が官房文書課で見習いをして感じたことでした。

伊藤 それで、翌年高知に移られるまで、その同じ部署で見習いをするわけですか。

海原 そうです。それに、官房文書課の庶務係には、いろいろな雑用がくるんですよ。そういう意味では内務省の仕事がわかって良かったですね。私の先輩では柏村さんもおられますし、いろいろ有名な人もおられます。

伊藤 そこで、どういう上司にお会いになるわけですか。

海原 上司は石井さんという文書課長がおられました。この方は戦後弁護士を長くしておられました。人格者です。当時は官房の文書課長、人事課長、会計課長、これが局長クラスの優秀な人々ですね。そういう人々から私たちは見習いとして勉強する機会を与えられました。私が世話役になって月一回食堂で、先輩と食事をしながらいろいろな話を聞きました。その幹事をやっていました。そこでいろいろなことを教えられました。およそ内務省の役人はどうあるべきだということをですね。これは非常に役に立ちましたね。

伊藤 それは精神的なことですか。

海原 具体的なことです。例えば卑近な例を言いますと、最近いろいろな汚職事件があるでしょう。あれなんかを見ていますと、どうしてもあなるのかわかりません。私たちの時には、例えば具体的に「お前たちはすぐ地方へ行く。県へ行く。そうすると、年が若いのに、何も経験がないのに、知識もないのに大事にされる。警察署長にもなったりもする。それに溺れてはいけないんだ。まず自分を養え」と言われました。

その時に言われたのが、「先憂後楽」ということですね。難しい言葉ですが、そんなことは当然できませんけれど、国民の先に憂えて後で楽しむんだと。もう一つは、「絶対にただ酒を飲むな」ということですよ。それは、今のいろいろな官僚の汚職につながりますがね。

伊藤 ただ酒を飲まないというのは非常に難しいことじゃないですか。海原 それはそうですね。「人にご馳走になったら、必ずおごり返せ。それはもちろんおごった人は金持ちである。おごられたお前は金がないだろう。でもそれなりの返礼ができるはずだ。だから、ただ酒を飲んではいけません。これを厳しく言われましたね。

伊藤 同じだけ返したら大変ですよ。

海原 そんなことはとつてもできませんよ（笑い）。何らかの形で返せと、そういうことを言われまして、なるほどと思いました。こういうことを聞いておれば、何も起こらないんですよ。絶対にただ酒は飲むな、ご馳走になったらおごり返せと。また、「お前たちは天皇の官吏だ」と言われました。国家公務員じゃないんですよ。それは行政法でも教えられましたが、官吏は無定量の勤務に服さなければいけないのです。余分に働いたからとか勤務時間外だから、全然ないですよ（笑い）。無定量の勤務ですからね。そういうことを教えられました。

伊藤 役所で、いわゆる属官の人たちと見習いというのは、なかなか難しい関係じゃないかなと思います。

海原 難しいと言いますか、それぞれの受け持ちの仕事によって違ってくるでしょうね。一応はルールが決まっていますから、こうなっているものだといいことで、お互いに心得ていますよ。

伊藤 向こう「属官」もですか。

海原 向こうもです。ですから、ある意味では大事にされますね。言うなれば、陸海軍で言えば士官候補生ですよ。その士官候補生と幹部候補生とがどう違うかということを具体的に言いますと、私たち幹部候補生になりますと、徽章が付くんですよ。幹部候補生の星型の徽章には座金がついているんですよ。ところが陸軍士官学校卒の士官候補生

は座金がないんです。星だけなんです。たまたま私も連隊で体験したんですが、古参兵はそれを知っているわけですよ。幹部候補生の上等兵には敬礼しないですよ。ところが士官候補生の上等兵には敬礼するんですね、古参兵が。そういう差別があることがわかりましたね。だから同じ上等兵でも、陸士を出ている者に対してはピツとする。幹部候補生には全然しないです（笑い）。厳密に言えば規律違反なんですよ。しかし、そういうことに文句を言いませんしね。言ってもしょうがないし、下手に言うのと、「何だ」と言われるから（笑い）。そういうことで、物事の表と裏とがありましたね。

その話が出ましたから言いますが、私は陸軍礼式令の問題点を発見したんです。例えば、本科の将校と各部将校とに対して敬礼の仕方が違うのです。私は経理部でしょう。経理部というのは「主計さん」と言われていましたが、主計と言うと、金の勘定をしていると思われるんですね。月給を払ったり。そうではなく、後方関係を全部やっているんです。アメリカ式に言うところとG4なんです。後方を全部担当しています。ところが、一般的には「主計さん」という言葉で、金の勘定、俸給旅費の支払いをする、そういうものだと思っている。

伊藤 帳簿付けですね。そういう感覚があるんですね。

海原 さて、礼式令に何と書いてあるか。「各部将校に対しては、部隊の敬礼は行なわず」と書いてある。どういふことかわかりですか。

伊藤 各部というの、要するに歩兵、砲兵とか……。

海原 いや経理部とか軍医部とか。

伊藤 部の付くものですね。

海原 本チャンじゃないものです。いわゆる本科ではない。それに対しては、「部隊の敬礼はこれを行なわず。ただし」と書いてあるんで

すよ。「ただし、部隊を指揮している各部将校はこの限りでない」と書いてある。そうしますと、私は経理部で経理勤務班という二百名ばかりの部隊を預かっていました。私が一人で歩いていきますと、「各部将校に対しては部隊の敬礼は行なわず」ですから、小隊を指揮している少尉は部隊に対して「歩調とれ」とやらないんです。ただ、隊長一人が敬礼する。私が部隊を指揮していますと、こっちは中尉ですから、私に対して「歩調とれ。頭、右」という部隊の敬礼をやるんですよ。そういう差別があった。

私は無礼講の席で、師団長の鷹森中将に文句を言ったんです。これはおかしくありませんかと。私は師団司令部におりましたから馬が配当されまして、私は馬に乗っている。馬に乗っている将校というのは、一般の歩兵部隊では大体中尉以上です。そうしますと、私が馬に乗って行きますと、部隊を連れている少尉が「歩調とれ」とやるわけですよ。それで敬礼しようと思ったら、胸に経理部の印がついているでしょう。これを見ると「歩調やめ」となるんですね。そして自分だけ敬礼をするんですよ。これが礼式令の規定です。

私は師団長に、「こういう礼式はおかしくありませんかと言った。」「各部将校に対しては、部隊の敬礼はこれを行なわず」と決めているのは、これは明治の考えで、今は各部将校が現実に軍の戦力になっている。現に私はこうです。どう思われますか」と言ったら、「お前の言う通りだ」と言う。私は、「それなら陸軍省に上申して下さい」と言っていますよ。「よしやる」と言って、上申してくれたんです。礼式令を直せという意見です。しかし、陸軍礼式令を直すというのは大変なこと、結局どうなったか。鷹森師団長の上申書は、陸軍省の担当将校の机に入っていた。そういうことです。こんなことを話していて、

お役に立つのでしょうか？

伊藤 差別というか、見習いとしてのお行儀と言いますか、こうしなければならないようなことはどうですか。

海原 それはありましたね。先ほど申しましたように、ただ酒は飲むとか、おこつたらおごり返せとかの心得ですね。

それから、ある先輩の課長から、「お前たちは一等切符をもらつているようなものだから、いわゆる見習いとして特別扱いされるんだから、そのことをよく心得ておけ。それに驕つてはいけない。と同時に、そういう扱いをされているんだということを知っていないと、とんでもない間違いになる」ということを言われましたね。なるほどなと思いました。

伊藤 それはよく言われることですが、高等官食堂と、そうではない方があるようですが、見習いはどっちに入るわけですか。

海原 一般食堂にちよつとした衝立を置きまして、そこにたむろしていただきます。

飯尾 見習い食堂みたいになってるわけですね。

海原 大きな食堂にちよつと衝立があつた。

伊藤 つまり中二階みたいなものですね。

海原 そうそう。中二階じゃなくて同じフロアですけれどね。そういう扱いでしたね。それから、そう多くはありませんからね。大体、みんな知り合うわけですよ。

伊藤 本省には何人くらいいましたか。

海原 何人でしたかね。八人くらいでしたかね。調べてくれば良かったんですが。

伊藤 いや。正確でなくてもいいんですよ。そうすると、今おつしや

つたような上司の方々からの教育というのは、その八名だけが受けるわけですね。

海原 そうですね。厚生省では厚生省であるでしょうね。

伊藤 そうでしょうね。しかし地方に行った人は地方でやる以外ないわけですが、それはもう見習いが一人とかですよ。

海原 各都道府県に一人ですからね。

伊藤 ですから、それは集団で、ということはないわけですね。

海原 一緒に入った仲間では、内務本省で見習いをしたということが非常にありがたかったですね。いろいろな人と知り合いましたから。

伊藤 少なくとも、その八人は同期だということと結束があるわけですね。

海原 結束と言いますか……。

伊藤 競争なんですよ。ね。

海原 そこ辺が難しいところですね（笑い）。

飯尾 それで先ほどの、昼ご飯に幹部を呼んで話を聞く会というのは、昔から代々されているわけですか。それとも海原さんが提案されたんですか。

海原 いや、前からやっていたようです。それは先輩から聞きますから。

飯尾 では、文書課の庶務の人が幹事をやられるわけですか。

海原 そうです。官房文書課の庶務係というのは、そういう雑用を引き受けるのに適しているんです。

飯尾 そういう形でしておられたわけですね。

伊藤 その見習いの時代は、宴会とか、そういうことはどうなんですか。

海原 宴会はまずないですね。要するに昼飯で集まって、それから文書課長さんが年末に食事をしようと言う、それくらいですね。宴会はありませんね。

伊藤 それで翌年の一月に、もう高知に移られてしまおうわけですね。短い期間ですが、いろいろ思い出に残ることを次々とお話してください。

海原 これはまた、先ほど時間外にお話ししましたが、どの程度の密度でお話しすれば……。

伊藤 いやいや、かなりの密度で順番にお話してください。思い出す限り。

海原 独り善がりになります。

伊藤 いいですよ。ここは独り善がりも何もありませんから。

海原 一応、こうやって整理はしたんですけれどね。なるべく脱線しないようにと思ひまして。

伊藤 なるべく脱線してくださいよ。

飯尾 どうぞ順番に。

海原 順番にですか。今日は戦争体験まででしょう。

伊藤 間に合わなかったら、この次にしますから。

齋藤隆夫の肅軍演説を聴く

海原 内務省時代は先ほど簡単に聞かれましたが、何が思い出にあるかということですかね。私の整理したことで言いますと、まず第一が

新聞記者と役人との付き合いの仕方ですね。これを勉強しました。

飯尾 もうすでにあつたわけですか。

海原 ありました。それは、官房文書課には、見習いの上に事務官が二人おるんです。この二人の事務官は官房の勤務ですから、いい人が来るんですね。いわゆる出世の見込みのある人ですね。

伊藤 全体が見通せるということですね。

海原 ある日、六月の初めですが、私は事務官室に入って行った。二人事務官がおるでしょう。その一人がおられまして、ロッカーの整理をしているんですよ。

飯尾 事務官室というのは、事務官は個室があるわけですか。

海原 あります。官房文書課事務官というのは偉いんです。

飯尾 事務官で、もうすでに個室があるわけですか。偉いわけですね。

海原 官房文書課事務官は特に偉いですよ。

伊藤 それは一人ずつ部屋があるんですか。

海原 いやいや、二人で一部屋です。その時は、たまたま一人でした。その一人の事務官がキャビネットの整理をしているんです。役所でキャビネットの整理と言えば、当然これは転勤でしょう。ですから、私は「事務官、おめでどうございます」と言っただんです。そうしたら

「うん？」と言うんですね。「いま書類の整理をしておられるけれど、どこにご栄転ですか」と、こっちは聞いた。そうしたらその時、また「うん！」と言って、「ああ、そうだ。君にも言うておいた方がいい。まあ、そこに座れ」と言うんですよ。「いや、僕は栄転ではないんだ」と言われます。「ああ、そうですか。どうも失礼しました」と謝りま

した。普通、キャビネットを整理していると栄転と思うから「おめでどうございます」と言ってしまった。そうしたら、僕は栄転ではない

と言う。「どうしたんですか」と聞いたら、「いや、実はこれは君にも参考になるだろうから」と言われたんです。

徴用令というのを聞きになったことありますか。国家総動員の法令ですね。その徴用令の発令、決裁の前なことなんです。その事務官は内務省でその方面の担当なんです。国民徴用令の案を机の上に置いておいたんですね。ちよつとトイレかどこかに行つた。帰つて来たらそれを新聞記者が読んでいた。「あつ、それは」と言つても、もう駄目なんですな。それで事務官が、親しい付き合いがあるから信頼して、「これはまだ極秘だから、君、見たんだからしやうがないけれど、そのつもりで扱いは注意してくれ」と言つた。そうしたら「わかつた」ということでした。しかし、その事務官が机の上に書類を置いて出ていた間に、もう一社の人が入つて来ていたんですね。さつき誰がおつたということを知り、その人にも事務官は連絡したんですが、その翌日、新聞に記事が出るんです。A紙は、徴用令の要項成る、ということを書きにしてしまった。B紙は、それをまとめたような想像の原稿にしたんですね。その箇条書きになっている新聞を平沼（騏一郎）総理大臣が見た。「何だ！」ということになるんですね。「どこで漏れたか。責任者を処分しろ」ということになる。ということ、私が「おめでどうございます」と言つた事務官は、満州国に飛ばされるわけです。そういう時に、私は何も知らんものだから、「おめでどうございます」と言つてしまつたんです。

その時に、事務官が私に言つたことは、「君、役人と新聞記者との関係というのは非常に微妙だ。大事なものなんだ。だから、どういふふうにつき合うかは、その人の判断によるんだ。ついでには自分はどういふことになつたけれど、その書いた男とは長年の付き合いで信頼し

ておつた。これから先は君の判断だが、新聞記者にしゃべつたら、ひよつとしてそれは記事になるということを感じておいたほうがいいと思うよ」と言われたんですね。これが見習いの最初にぶつかつた問題でしょう。ああ、と思ひましたね。

それを後で私も体験するんですが、まさにその通りですね。私はその事務官から、「役人と新聞記者というのは持ちつ持たれつの関係だし、役人が独り善がりになつてもいけない。だから新聞社に友人を持つことは必要だし、意見も聞くことも必要だ。しかし、新聞記者にしゃべつたら、それは記事になるかもしれないということだけは考えておけ。そう僕は思う」と言われまして、これは私の対新聞記者との付き合い方の基本になりましたね。これがありました。人によって、適当にぼやかして書いてくれる人と、事細かに書く人とあるんですね。

伊藤 事細かに書いたということが一番……。

海原 それはそうです。そのものズバリ書いたということになりますから。想像推定の原稿ではないですから。平沼総理が烈火の如く憤つて、「どこだ、調べろ。責任者は厳罰だ」と言われたということ、その事務官が満州国へ転勤になつた。これが、私が見習いで四月に入つて六月のことですから。最初に体験して、こういうものかと思ひましたね。

伊藤 その飛ばされた事務官は、その後どうなつたんですか。

海原 また帰つてこられました。しかし、その後をずっと見ていますと、やはり主流を外れましたね。先ほどもちよつと言いましたが、大勢入ってきますから。何か罰点がありますと、やはり遅れますね。どれがどうなるかということ、その時の問題ですが、役人のいわゆる出世街道と言いますか、だんだんといろいろなことがあつて整理され

ていく。

伊藤 失点になるわけですね。

海原 そうですね。それは完全な失点ですね。総理大臣が烈火の如く憤って、けしからんということだったんですからね。気の毒です。この方は、私はできる人だと思っただけですけれどね。そういうことがありましたから、これは私のその後の役人生活にとっても絶対的な、具体的な教訓になりましたね。

ですから私は、新聞記者に話をしたら、それは漏れるかもしれない、漏れてもしようがない、そういうことを覚悟しようということ自分をなりに考えました。そのかわり、記者との付き合いは大事ですから、私は各社少なくとも一名の人とは非常に親密な関係になりましたね。だから怪文書に後で書かれましたけれどね。海原は朝日の誰、毎日の誰とかと親しいと書かれましたけれどね。そういうことで、見習いになった時に目の前で見た事件の教訓は、一生大事でした。

伊藤 非常に面白い話でした。

海原 新聞記者との付き合いは大事だということはつくづく思いましたね。

もう一つの思い出話は、先ほど申しました、先輩を囲んでの昼飯会ですね。ここでは一人一人毎月違う人が来るわけです。その時に会計課長をしておられたのが灘尾（弘吉）さんです。後の衆議院議長で、もう過去の人になりましたが、その灘尾さんが言われたことですね。「君たちは内務省に入って、これから行政官としての生活を送るわけだ。ところで」と言われたんですよ。「『明哲保身の術』」というのを知っているか」と言われます。ひよっとしてご存知ですか。その頃はまだ、こういう中国の漢文の言葉がしきりに使われた。私は内容は知

りません。灘尾さんは「君たちは役人として一生を送るわけだけれど、『明哲保身の術』を知ってるか」と言う。誰も知らんですよね。「明哲保身」というと、辞書を引きますとちゃんと書いてありますが、世の中の体制というものをわきまえて、そして身を処することなんです。世の中の体制がどうなるかをよく見通し、流れに逆らわず、自分を安全に保つ処世法」、これが辞書の訳です。

これを言われてまして、その具体的な例を言われたわけです。「大体役所では全部会議で物が決まる。その会議で真つ先に発言する奴はみんなから叩かれる。だから最初に発言する奴は馬鹿だ」と言われるんです。「ではどうするか。しばらくじっと様子を見てみると、まあ十五分か二十分経つと、どっちの方向に事が決まりそうかわかる。そうしたら、その時に発言しろ」と言う（笑い）。「決まりそうな方向に発言しろ。それまではじっと控えておれ。それを繰り返すと、『あいつは非常に控え目で、真つ先に物をしゃべらないけれど、いつも正しいことを言う』ということになる」と言われました。これが「明哲保身の術」であると言われましたよ。

私は、なるほどそうかと思っただけですね。そうかと思いましたが、待てよと思った。これが私の親譲りの天邪鬼なんです。反骨精神でまじかっただと思えますが、私はおかしいと思った。会議というのは、いろいろな人が集まって、それぞれの意見を出し合う。そして、どのプランを取り、どのマイナスを我慢するということを決める。それが会議だろう。それを、会議ではいつも人のしゃべるのを聞いておつて、どっちの方向に行きそうかという時に、そっちの方向の意見を述べるという。それではあまりにも自分がないではないかと。よし、と思いましたが、俺はこんなの賛成しないと。それがまずかったですね（笑

い)。それで真つ先に意見を言いました。真つ先に意見を言うことやられますわね。やられていいわけですよ。それで通しました。しかし結論として、やはり「明哲保身の術」の方が良かったかなと思います(笑い)。

簡単に打ち切りますが、新聞記者との付き合いと、役人としての処世のあり方、これを見習いの時に習いましたね。これはそれぞれについて、私なりの結論を持って、それで良かったと思っています。

伊藤 二つ目のほうは、それに従わなかったでしょう。

海原 従いませんね。

飯尾 灘尾さんは本気でそう言っておられたわけですか。

海原 本気で言っていた。あの人は真面目な人ですからね。そこでは私は発言しませんよ。「灘尾さん、それは私は反対です」なんて。そんなことは言ってませんよ、いくらなんでも(笑い)。いま申し上げたのは考えです。そうかな、そうかもしれないんですけど。しかし、それではいつも自分がないでしょう。いわゆる体制順応型ですな。それも一つの生き方かと思いましたが、やはり親父の血を受けていますから、親父の教育のおかげですが、孟子さんが悪いんですよ。「千万人といえどもわれ行かん」と言うから(笑い)。なまじっか、そんなことを頭に入れておるものですかね。その二つですね。それがご質問のあった見習い時代に体験したことです。

その他は、先ほど申しましたように、いろいろな内務省の仕事を覚えてきました。警察へ行くのと地方局関係に行くのとでは違う。ああ、こういうふうな人間というものは変わるんだなと思いましたね。

伊藤 見習いの机はどこにあるんですか。

海原 それは一般と同じです。

伊藤 事務官室というのはあるんでしょう。

海原 事務官室はありますが、文書課の庶務係というのは、庶務係長が部屋の奥にいました。古参の、いわゆる「特進」の人。そこに一つの机をもらっているわけですよ。見習いはみんなそういう扱いでしたね。

伊藤 普通の属官と同じですか。

海原 同じです。大きさもまったく同じです。役所は階級に応じて机の大きさが違いますが、文書課では違います。内務省にはいろいろな局がありました。理事官を大事にしましたからね。先ほども言いましたように、ほどほどお互いに分をわきまえて付き合っていました。

内務省というあれだけ広い組織ですと、理事官的存在は必要なんですね。軍隊で言いますと特務曹長、准士官ですね。そういう人がいないことには、士官学校を出たての少尉ばかりじゃ駄目なんです。そういうことで、いわゆる「特進」の人と見習いの人がいいたと思います。伊藤 やはりそういう人たちというのは生き字引で、何でも心得ていると。

海原 そういうことですね。

伊藤 貴重な存在ですね。組織があれば、そういう人はいないわけにはいかないんでしょうね。

海原 必要でしょうね。特に昔は、今からはとても想像できないでしょうが、昔からどういう例があったかということが大事なんです。大石内蔵助ではありませんが、勅使の接待についての典例ですね。

飯尾 それは理事官のみなさんが、先例は知っているわけですね。聞いたら何でも知っているわけですね。

海原 それを担当する者と、そうでない者とは、一応明らかに分かれ

ていましたね。

そこで、これも先ほどちょっと話しかけましたが、第三番目の思い出として申し上げたいのは、「任官」の問題ですね。これは、私たちの期が一番たくさん軍隊に行つたわけです。ちょうど時勢が変わつてきましたから。それで後藤田、平井、私、全部行きますね。どうも、このままだんだん戦局が拡大していく。それで軍隊に行く。もし戦死をした場合、見習い、属官で死ぬわけだから寂しいじゃないか。海軍へ行った連中は入つてすぐ、もう立派なマントに短剣でしょう。彼らは高等官になつていく。そういうことも考えます。それで四く五人が集まつて、「兵隊に行く者は、ぎりぎりの時に地方事務官にしてみらおう。任官をお願いしようじゃないか」ということになつた。私は官房文書課ですからね、「海原、お前交渉しろ」と、たぶん後藤田君がそう言つたと思うんですけどね（笑）。

こつちもしようがない、同じ官房ですからね。他所の仲間は人をまつたく知らないでしょう。「わかつた」と言つて、私は人事課の吉井さんという理事官の方、一番古参の物知りです。そこへ言つて話したんです。こういうわけだと話した。「私たちは今度軍隊へ行く。軍隊へ行くと、生きて帰るか死んで帰るかわからない。だんだん戦局が拡大しているから、戦死の確率というか、公算というか、そういうことも考えなければいけない。ついては、ひとつ内務省からはなむけとして、私たちを任官させてください」と言つた。「うーん」と言つて、しばらくしてから言つた。その言葉が先ほど言つたことですが、「海原さん、あなた方の先輩方は昭和四年入省者は四年間、五年組は五年、それだけ長いこと見習いで勉強した。見習いというのはそういうものなんだ。そういう過程を経て、初めて地方事務官になれたんです。あ

なた方は何ですか。去年来たばかりで、十カ月しかまだ見習いをしていない。言わば未熟者である。そんな未熟な人が軍隊に行くということだけで高等官になる、それは駄目です。任官大権の干犯になります」と言うのです。

飯尾 そういう相談に行くのは、理事官のところにおいでになるんですか。

海原 そこが一番根つきですから。それが私の考え方です。いきなり上へは行かないわけです、絶対に。今で言う根回しですよ。私は前から同じ官房ですから知り合いですね。それもあつて行つたわけです。様子を当たりに行つたわけです。それで、平井君と後藤田君に、「こういうわけだ、これは真正面から行つたのではとても駄目だ。さあ、どうするか」となつたんですね。

相談して、よし、今度いよいよ軍隊に行くという時に、人事課長をお客に呼んで、「いろいろお世話になりました」ということで、そこでもういっぺん陳情してみよう、ということになつたんですよ。どうせ、「だめもと」ですよ、駄目でもともと、ということに話がまとまつた。そして、一月に人事課長に、「いよいよわれわれは軍隊に行きますから」ということで、昼食の時にお礼を言つて、「ついては」ということでその話を出したんです。町村金五さんは、「うーん」と真剣な顔して聞いておられて、誰々が残っているんだ、誰々が行くんだと言うから、こうこうです、と言つたら、「そうか」と言つて、「考えてみよう」と言われたんですね。駄目とはおつしやらない。

その結果、人事課長が諸般の情勢を考慮されて、私たちは一月の末に地方事務官に発令されるんです。それは私たちだけでなしに、私たちの後の人々も逐次任官すると思つたんです。ところが、後の人はぜ

んぶすぐに軍隊に行ってしまったものですから、私たちだけなんです。昭和十四年入省の私たちだけが、そういう特例になってしまったんですね。

飯尾 後の人は見習いをする暇もなく、行ったんですね。

海原 そうです。陸軍も海軍もですね。海軍はもちろんすぐ行きますけれど、陸軍もすぐ行っちゃった。だから、それに関連して町村さんが「中曾根君が内務省なんて言うけれども、あれは内務省に入つてすぐ海軍へ行っちゃったんだから、彼は内務省ではない」と言われています（笑い）。

そんなことでしたね。私たちはこれが機になって、後で入る人々も逐次任官していくと、それがせめてもの内務省の賤別だということになると思つてやっただんですが、結局は駄目でした。しかし、そういうことで任官するわけです。

町村さんは、『大霞』という内務省関係の機関紙に、現実に私達が、地方の都道府県で課長をやったように書いておられます。しかし、課長をやったのは後藤田君だけなんです。私と平井君とは二月十日入営ですから、赴任しません。私は高知県、平井君は千葉県の地方事務官に発令されましたが、それぞれ一応挨拶に行つただけです。勤務はしていないです。後藤田君だけは福井県で三カ月勤務しましたが、平井君と私とは辞令をもらっただけでした。

伊藤 それは、何が違つていたんですか。

海原 それは入営の時期が違うんです。後藤田君も私も同じ徳島で、しかも留守部隊は同じなんです。たくさん新兵を採つた時期ですから、入営を二回に分けているんですね。二月に入つた私たちは満州に行くわけですよ。後藤田君たちは四月に入つたんです。四月に入つた

連中は南方に行くわけです。それで彼は台湾に行くわけです。

そういうことで、入営の時期如何によつて派遣されるところが違います。後藤田君は事実上、三カ月近く課長をやりましたね。私と平井君とは課長をやっていません。地方事務官という名前をいただいただけで、それぞれが発令された先の県庁に行つて挨拶して、こういうことで発令されましたが、軍隊に参りますという挨拶をして、それぞれ入営したということです。しかしこれが大変にありがたかつたのは、兵隊になつてからの扱いが違ふんです。

ところで、町村さんは「任官の強訴をした」と、「強訴」とされていますが、強訴じゃないです。陳情したんですよね。ところが、「後藤田、平井、海原の三人が強訴に来た」とされています。「何とかありませんか」とお願いしたんです。懇願したんです。だから私はいつも声を大にして、「私達は人事課長を脅迫するような性悪な人間ではない、陳情したんだ。町村さんは、温情溢れる人で、よしわかつた、ということだ任官したのだ」と申しております。しかし、「強訴」と感じられたのでしょうか。

その後がまたあります。休職になるでしょう。それは二年で期限が切れるんです。私は軍隊に五年六カ月行つていました。みんな長いでしょう。私はまた人事課の吉井さんに話しまして、「休職は二年で切れる。入営していると措置はできないけれど、身分が継続するようにお願いします」と言つたんですよ。その時はすぐ「わかりました」と言われました。だからその日が来ますと、地方事務官は「復職を命ず」として、同日付けで「休職を命ず」です。そういう辞令がずっと続きました。それは除隊するまでです。だから、ずっと身分はつながつた。これはありがたかつたですね。

伊藤 どの役所もみんなそうしたんですかね。

海原 でしょうね。どういふふうに扱ったか、他のことは知りませんが。先ほど言いましたように、後の人のためにいい先例を残したいと思っただけですが、私たちだけで終わりました。昭和十五年以降はそんな余裕がなくて、みんなそれぞれすぐ行ってしまった。申し上げようとする程度ですかね。これでもう一時間経ってしまいました。

伊藤 お話し足りないことはございますか。

海原 私の方で申し上げたいと思うのは、もう一つ残っているのは齋藤演説です。これが最後の内務省の話になります。

これは昭和十五年二月二日ですね。この齋藤隆夫さんの演説を生で聴けたんですよ。それは何故かと言いますと、官房文書課の庶務係の仕事としましては、国会事務局との連絡があるんです。

伊藤 でも、その時は地方事務官じゃないんですか。

海原 それは関係なしです。官房文書課の庶務係は、国会との連絡担当で、向こうもちゃんとしてくれるんです。

飯尾 それ「地方事務官」はもう発令されているんですか。

海原 発令されています。

飯尾 仕事は前の通りしておられたわけですか。

海原 仕事はもう終わりですよ。

伊藤 いえ、地方事務官では何もしていないわけですね。

海原 何もしていません。官房文書課も終わりです。一月三十日で終わっていますから、あとは暇なんです。ちょうど宙ぶらりんの時期ですね。

それで帝国議会に公務員傍聴席というのがあるんです。そこへ行くわけですね。私も国会との関係をいろいろやっていましたから、顔

馴染みの人もいますしね。そこで齋藤隆夫先生の演説を生で聴けたんです。

伊藤 今までの話の中で、国会との関係があったなんていうことは、何もお話に出ていませんね。

海原 それは落としていました。国会事務局との連絡は、下の方の連絡ですが、文書課庶務係の担当です。

飯尾 法案を伝達したり、こよりで綴じて、とかそういうことをしておられるわけですね。

海原 そうです。千枚通しで穴をあけ、こよりで綴じる。よくご存知ですね（笑い）。

飯尾 いや、今でも結び方が悪いと法制局から突き返されるとか。

海原 そんなことですね。何でこんなことをするんだらうと。もつと要領のいい書類の処理法があると思いましたがね。とてもそんなことは恐れ多くて言い出せませんからね。また、こよりは自分でやらないでいいんですよ。こよりの作り方は習いましたが、たくさん作ってあります。文書の綴じ方は、千枚通しで穴をあけてですね。

さて、齋藤隆夫さんの演説になるわけですが、齋藤隆夫代議士は、前にも肅軍演説をやっていますね。その肅軍演説は、昭和十一年五月七日です。ですから、齋藤隆夫先生が質問演説をやるとなると、みんな緊張するわけですよ。「あの先生がやるんだから」という期待もあるんですよ。

飯尾 齋藤さんの演説があるというのを聞いて、聴きに行きたいとお考えになったのでしょうか。

海原 それはもちろんそうです。そういうことはちゃんと連絡してくれますから。先ほど言いましたが、国会の方からも「齋藤さんが質問

をするよ。これは是非聞いたほうがいいですよ。席はちゃんと用意しておきますから」と言うので、取ってくれるんですよ。ふだんはちゃんと席に薄い座布団が置いてあるんです。

それで、この齋藤さんの演説を聴きましたが、本当にこのとき私は感心しましたね。一時間半から二時間近くになりますが、もう満員で、座る席はないんです。立ったままです。その演説「のコピー」を用意してきましたから、後では是非見ていただきたい。これは、簡単にどうだこうだということは申し上げられないですよ。

それからこれは、草柳大蔵さんが文藝春秋から出した『齋藤隆夫、かく戦えり』です。その要点だけ持って来ました「資料を配る」。

伊藤 私も持っていますよ。もし、コピーするものがありましたら、こちらに予めお持ちくださいよ……。

海原 はい。今度からそうします。これがその時の演説の要旨です。その齋藤さんが演説するというので、非常にみんなが緊張しましたのは、その前に肅軍演説をやっていますからね。これが演説の触りです。後で読んでいただくことにしますが、これを生で聴いていました私が感激したのは、これだけはっきり軍部に対して質問をする政治家がおるといふことですね。こういう政治家がおる限り大丈夫だと思います。と同時に、これだけ軍に対しての批判をやって大丈夫かと。この二つが私の率直な感想でした。しかし、こういう齋藤さんの演説を聴いて、ああ、この人がおるなら大丈夫だと思っに入営するわけです。ところが、入営後に世の中の様相が変わるわけです。

徳島の第四十三連隊というのは留守部隊で、幹部候補生の資格がある者についての予備調査がありました。将校が聞くのですが、その時に私が聞かれましたのは、「君は齋藤演説を知っているか」です。「は

い、私は生で聴きました」と言った。そうしたら「あれをどう思う？」と言う。これがまさに調査のポイントでしょうね。私は、「私は齋藤代議士は、国民が知りたいと思うことを、国民に代わって質問されたと思います」と言っただけですよ。「そうか」と、それで終わりでしたね。それ以上追及はありませんでした。私もホッとしたんですけれどね。

先ほど言いましたように、これだけ言って大丈夫かなと思っただけですけれどね。「政府はどうしようとしているんだ。何を言っているんだ。わけのわからんことばかり言って、八紘一宇だとか何とか言っているが、これまでの内閣が何をしたか。今度の内閣は事変を処理するための確固たる政策があると言っけれど、それは何なんだ」と。ズバリそのものを彼は聞いたわけです。それを聞いた後での、当時の軍の最高首脳の連中のことを、草柳さんが書いていますね。

陸軍大臣も軍務局長も、齋藤さんならあの程度のことは言うだろうと、みんな言っているんです。ところが、いわゆる青年将校、この時は陸軍省や参謀本部の少佐、中佐クラスが、「これは聖戦を侮辱するものである」ということで突き上げるわけですね。その後はみなさんご存知の通りです。「政党内閣が政党内閣を葬った」と草柳さんは言っておられますが、そういうことでしょうか。とうとう除名でしょう。だから、ああ、と思いましたけれどね。これは軍隊に行く前の、最後の私にとつての人生の教訓でしたね。まさか、ああいうことになると思いませんでした。

伊藤 だけど危ないとは思いませんでした。

海原 それは思いましたね。

伊藤 齋藤さん自身もちよつと危ないと思っ……。

海原 もちろん、それは覚悟の上でしょうね。私は第一高等学校の卒業試験の時に「二・二六」でしょう。ですから節目、節目の時期に関係があるんですよ。そういうことで事変の処理がどうなるか、ということが心配ですが、そんなことは海原二等兵にとっては関係ないです（笑い）。そんなものは、満州に行きまして、浮世のことは一切関係なしです。私は親父から、「自分ができることは、関係のあることは、心配してもいいけれど、心配してもしようがないことは心配するな」と言われてました。何ともならんことを、ああではないか、こうではないかと思ひ煩うこと自体がナンセンスだ。それで身体を傷めたりしたら、なおさらそんな馬鹿なことはない、と言われましたからね。私もそう思っていますから。後は野となれ山となれです（笑い）。

入営

——第十一師団歩兵第四十三連隊

伊藤 二月に入営されるわけですよ。その入営されたのは第十一師団ですか。

海原 第十一師団の歩兵第四十三連隊です。

伊藤 この前、三連隊と書かれていましたが。

海原 四十三連隊です。この地図がお手元にないでしょうか。ここに虎林（こりん）を書いておきましたが、これがわが第十一師団歩兵第四十三連隊のいた場所です。

伊藤 第十一師団の司令部はどこにあったんですか。

海原 それも虎林です。十一師団はここにおつたんです。師団は連隊三つからできていますから、その一つが四十三連隊です。

伊藤 その四十三連隊も虎林にいたわけですか。

海原 その小さな部隊が前線に出ていますけれどね。虎林が第十一師団司令部の所在地です。歩兵第四十三連隊も、師団司令部のそばにおつたわけです。

伊藤 ここに移られるまでの間、徳島で初年兵教育があるわけですか。

海原 ないんです。徳島はただ入営するだけです。徳島の留守隊に入りますね。そうしますと、満州に行くか、それとも内地に残るか、二つに分かれるわけです。一部は内地に残るわけです。何故わかるかと言いますと、入営の日、まず行った二月十日が歩兵第四十三連隊の留守隊の入営ですが、初年兵は全部宮庭で「上着を脱げ、シャツをとれ」と言われて裸になるわけです。徳島というところは寒いですよ、極めて晴天の日でしたが。裸になった上半身を、軍医がずっと見て回ります。それだけです、身体検査は（笑い）。それで終わり。

伊藤 それで分けるわけですか。

海原 それで終わりです。よっぽどおかしいのは「医務室へ行け」となる。せいぜい十人か十五人くらいですね。後は全部「上半身裸にして」と命令されて、整列している前を軍医がずっと歩いて行く、それだけです。それが入隊の時の検査でした。そして内務班に行きますね。そうしたら寝台があります。その寝台の枕の上に帽子が置いてある。戦闘帽が置いてある者は外地へ行く。普通のきちつとした帽子が置いてある者は内地だと、そう言われました。そうしたら私の寝台の枕の上には戦闘帽があるわけです。「あつ、これは満州だ」と思いましたね。

その前に、高知県の知事さんのところへ挨拶へ行つた。そうしましたら、「海原君、君の行くところはここだ」と言つて、知事室にある大きな地図で教えてくれました。虎林というところだと。

伊藤 わかるんですか。

海原 知事はもう知っているんですね。「君たちが行くところはここだ。気候その他、大変に厳しいところだから、くれぐれも身体に気を付けて」ということを言われまして、「ありがとうございます」ということです。お昼は部長方が壮行会をやってくれました。当時ですから「日の丸」にみなさん寄せ書きをしてくれまして、「武運長久を祈る」というようなことで名前を書いてくれました。それをいただいて、それから徳島へ行つたんです。

伊藤 連隊の留守部隊に入つて、何日もないわけですか。

海原 十日に入りまして、一週間後ですね、二月十八日に徳島を出ました。

伊藤 その一週間は何をしていますか。

海原 その間は兵隊としての一応のことをやりましたね。

伊藤 非常に初歩的なことを教えるわけですか。

海原 昼間は体操をやったりしました。分隊、小隊という訓練もやりました。兵隊になるための見習いですね。心づかいでしょうか。それを習いました。

伊藤 虎林に行くまでのプロセスはどういうことですか。

海原 いま申し上げましたが、二月十八日に徳島を出まして、丸亀の民家に分宿するわけです。私たちは五人で一軒の民宿でした。それから翌日、坂出で輸送船の船底に積み込まれました。この民宿をした家も全部控えてあつただけけれど、先ほど申しましたように記録があり

ません。忘れられないのは翌朝早く出かけます時に、あの頃よくああいうものがあつたと思ひますが、紅茶にちよつとウイスキーを垂らしてもらいまして、ウイスキー入りの紅茶をご馳走してくれました。これがこの世の最後かと思つたですね（笑い）。なかなか美人の奥さんで、「みなさんご苦労ですが」と言つてね。あの頃で、ウイスキーを垂らした紅茶を出してくるなんて、よっぽどいい家だつたんでしょうね。それに感激しましたよ。

それから船に乗るわけですが、ところが、私たちは輸送船の船底に入れられました。若い方はおそらく言葉をご存知ないと思いますが、蚕棚と言ふんです。ご存知ですか。せいぜい三尺くらいですよ。しかも私たちは機関銃隊ですから、馬も一緒に乗っているんです。目の前の大きな船倉に馬がずっといるわけです。私に与えられた蚕棚のところから真正面を見ると、馬の大きなお尻がある。だから俳句の芭蕉じゃありませんが、「のみしらみ馬の尿するまくらもと」とあるでしょう。ああいう感じですね。目の前に、馬の大きなお尻がある。

飯尾 馬も内地から全部運んだんですか。

海原 その年初めて馬も内地から、いきなり持つて行つたんですね。

それまでは一応内地で慣熟訓練と言ひますが、それをやった後で持つて行きました。その年初めて人間も馬も、冬いきなり持つて行つた。

これも一種の試行錯誤の訓練でしょうね。ですから、肝心の坂出からの出航の時は、何もわからないんですよ。静かになつたなと思つたら船が動いていた。だから出征兵士を送るので港にはいっぱい人々が来ていたと思ひますけれど、何もわからない。蚕棚の中に横になつたまま懐かしの故郷を後にしたわけです。坂出から出航したのは十九日ですが、朝鮮に着きますのが二十三日ですね。羅津（らしん）に着

く。

伊藤 羅津に行く船に乗っていたんですか。

海原 これはずっと瀬戸内海を通って、北上して羅津に着くわけですね。

飯尾 陸上ではなくて、海上でかなり満州に近いところまで行くんですね。

海原 そうですね。それから後は鉄道で行くわけです。その羅津に上陸した時のことで覚えておられますのは、夕方でしたが、冷たいんです。おそらくマイナス十度か十五度でしょうね。そしてみんなが寒いと言っていると、列車に乗るまでの間「耳をこすれ、手を揉め、足踏みをしろ」と、そういうことをやるわけです。それを覚えています。

それから列車に乗って虎林まで行きますね。普通の三等車は四人掛けでしょう。やはり兵隊の知恵ですね。二人は足の下に寝るんです。そうすると二人、上で横になれますね。結構下に寝ると楽なんです。

飯尾 ゴロゴロしないわけですね。

海原 そうそう（笑い）。別に汚くも何もないんです。着るものはいっぱいありますからね。外套なんか置いて、下に二人寝て、上の座席に二人、そういうことで虎林まで行きました。

伊藤 どれくらい時間がかかるんですか。

海原 二日くらいかかりますね。あちこち止まりますから。それで、虎林で下りて、私たちは四十三連隊に行くわけですが、その時ちよほど除隊する連中とすれ違いました。こつちが乗って行った列車に、除隊兵を乗せて帰って行くわけです。除隊する古参兵の連中が、「おい、しつかりやれ」とか言うんですよ。みんな喜んで帰って行くんですね。そういうことを体験しました。

そして兵舎の前に着きますと、私は第二機関銃中隊なんですが、「中

学校以上卒業した者は一步前へ」と言うんですね。「その次、専門学校以上を卒業した者、もう一步前へ」。人事係の准尉がそう言うわけです。そうしておいて、第何分隊と区分けをするんです。一分隊、二分隊、三分隊と区分けするんです。

飯尾 中隊の中にいろいろな人が入っているのを区分けするんですね。
海原 大隊砲と機関銃と分かれる。身体の大きい奴は大隊砲に行くとか、いま言いましたように、一応それぞれ分隊ごとに学歴に応じた配分をするんでしょうね。それで「中学校以上、一步前へ」と言われて出たら、今度は「専門学校以上、一步前へ」となるわけです。そうすると並び方が変わりますね。そうしておいてから、分隊を編成する。そういうことで分隊が決まるわけです。私は第二機関銃中隊の第一分隊に配属された。後で四番銃手ということになりますが、四番銃手というのは正射手です。それがお話の材料になりますね。こういうことで満州に行くわけですね。

伊藤 その一つの分隊というのは何人でできているわけですか。
海原 これは一般の小銃隊と機関銃隊とで違いますけれど、機関銃中隊の分隊は銃手が四人、弾薬手が四人、分隊長が一人。合計九人ですね。分隊長は伍長とか上等兵ですね。伍長勤務上等兵です。

伊藤 機関銃というのは重機関銃ですか。
海原 重機関銃です。軽機関銃はありません。重機関銃です。重機関銃のお話が出ましたが、重機関銃といっても、この重機関銃には引き金がないんです。銃というと引き金があるかと思うでしょう。ないんです。おそらくご存知ないでしょう。これがまた独特なんですね。日本人的発想ですね。引き金があるかと思うでしょう。ずっと防衛学界の方もやっておられますから、当然ご存知なはずなんですがね。

伊藤 いや、知らないですよ(笑い)。

海原 ここで意地悪い質問をするんですが、この九二式重機関銃というのは、私は本当に優れた武器だと思えますね。引き金がない。

伊藤 発射はどうするんですか。

海原 これはひとつ防衛庁で、誰かにお聞きください。

伊藤 ボタンを押すとか(笑い)。

海原 引き金ですと、指が飛んだら終わりでしょう。そこで考えたんでしょね。押し鉄で撃つんです。機関銃の銃尾のところに、二枚の鉄片がついています。ちょうど親指の形をしている。これを押すんです。これを押せば、圧搾空気の関係で弾が出るんです。ということは、指が飛んでも、身体はどこかでボタンを押せば弾が出るんです。そういう発想でしょうね。独特の発想ですね。

この九二式重機関銃というのは、きちんと最初照準してカチッと銃を止めますと、後は放っておいていいんです。なまじつか後ろで目標に当てようとしますと、機関銃の自然の振動を押さえることになりまますから駄目なんです。目標に照準を定めたら、後は自動的にドンドン弾が出るようなリズムで放っておけばいいんです。ですからよく言われましたが、ボサツとした奴が銃手としては優秀だと言うんです。ボサツとした奴です。照準して、後は押すだけなんです。後は自然に銃が上下しますからね。ボサツとした奴の方がそのままやっているでしょう。それをなまじついろいろなことをすると、おかしくなる。私は射撃では中隊一でしたよ、ボサツとしていますからね。照準した後は自然にガスがやってくるんですよ。なまじついろいろなとやろうとすると、おかしくなる。

伊藤 上手、下手というのはあるものですか。

海原 上手、下手というのは最初の照準のところでしょう。きちんと照準ができていけば、そのまま後は放っておけばいいんです。自然に銃が振動しますから。それに合わせてやっていたら弾は当たってくるんです。

飯尾 でも、機関銃ですから、ある程度弾道があつて、それを考えなければいけないので、ある程度学歴のある人を使つたということですか。

海原 さあ、そこはどうでしょう。わかりませんけれどね。それほど弾道ということでもないですね。距離が何百メートルしかありません。大砲と違いますからね。しかし、これは歩兵が一番信頼した武器でした。私たちがいた虎林というところは、行ったのは二月の末ですが、真冬ですと零下三十度、三十五度です。そういうところになりますと、軽機関銃ではいわゆる「ツツコミ」ということになりまして、うまく作動しないんです。ところが重機関銃は絶対大丈夫でした。不凍液を塗りましたね。ですから当時の歩兵が一番信頼した武器なんです。頼りにしていた。大隊砲なんというのは数が少ないですし、あんなものは当たりませんからね(笑い)。小銃じゃ駄目でしょう。軽機も駄目でしょう。重機はグアーツと出ますから。そうになると、真つ先に敵が狙うのが重機関銃です。だから重機関銃の銃手というのは百パーセント戦死なんです。そういうことも聞かされましたね。

ノモンハン事件の翌年ですからね。これがまた大変われわれにとっては大事なことでした。関東軍が徹底的にやられたということは口コミで入ってきますからね。「精鋭関東軍が去年のノモンハンでは完膚無きまでにやられた」と。連隊長で自決をしたのが何人おるとかわかつてくるわけでしょう。そうなりますと、ノモンハンというのは満州

の反対側ですからね。もしこちらで起こったらどうなるかと、嫌でも考えるでしょう、人間である以上。

ですから、不寝番に立った時とか、あるいは厩当番になった時、特に厩当番になりまして、満天の星を眺めながら当番任務についていますと、考えるのは「生と死」だけです。「ああ、俺も今まで苦労して大学を出て内務省に入って、こんなところに来ちゃったな」と思う（笑い）。もし、今年ドンドン、パチパチが始まったらどうなるかなあ……。

それが良かったと思うのは、みんな自分でそういう問題を抱えていましたね。それぞれが自分なりに「生と死」という問題に答えを持っていた。逃亡しようと思っても、行くところがないんですよ、ソ満国境では。特に冬は凍死しますしね。逃げるところがない。そこで運命というものと自分との関係を考えさせられましたね。そんなことで軍隊生活というものは、すべての人にとって人生の試練だと思っんです。申し上げるのを忘れましたが、特に機関銃中隊は馬が大事です。私は馬なんか触ったこともなく、そばに行ったこともない。ところが、馬が絶対ですからね。毎朝起床ラッパで起きて、厩へ飛んで行って、馬を表に引っ張り出して、馬が敷いておった寝藁を表に出して、掃除をする。それから、あの大きな体をブラシでマッサージするわけです。最後は後ろに回って肛門を拭いてあげるんです。そういうことをやって、ようやく朝のお務めが終わる。それから朝食になる。馬なんていうのは初めてでしょう。機関銃隊ですから、馬を頼りにしなければならぬ。乗馬の訓練は、まず、裸馬なんです。いきなり裸馬に乗るというのは、相当な度胸、勇気が要りますね。乗った方がいいが、走り出したら途端に落ちたことがある。馬場の中ですけれどね。ああとと思

っているとドスンと落ちてしまう。そういうことで、生まれて初めての体験をさせられました。

馬は、われわれが夜寝ている間に馬糞をいっばいするんですよ。そういうものを表に出す。熊手が一応はあるんですが、形だけなんです。六つくらいしか置いていない。早く行った奴が取るでしょう。熊手を取れなかった奴がうろうろしていますと、古参兵から怒られるんです。「お前たち手を使えないか」と言う。「何！」と思うでしょう。しょうがない、素手で馬糞なんかも掴むんです。幸いなことには凍っていますからね。カチンカチンに凍っていて臭いも凍つてますからね。ただ、それが後で班内に帰ると、そのとき付いておったやつがわーっと臭う（笑い）。

中隊の中はベチカです。ベチカで暖かいですからね。表で付いた馬糞の破片がどこから融け出すと、「初年兵！」と怒られるんですよ。こんなことを話していると切りがないですけれどね。みんなは初めてのことで面白いかもしれませんが、そういうことを体験しましたね。馬の手入れをして、初めて自分の飯が食べたのです。

伊藤 馬にどうやって銃を引かせるわけですか。

海原 それは、重機関銃を、脚、銃身、そういうものに分解するんです。それを部分的に乗せるわけです。分解搬送です。

飯尾 車ではなくて、直接馬の背中に乗せるわけですか。

海原 ええ。分解搬送と言います。引っ張るのは砲だけです。大隊砲、歩兵砲とか野砲ですね。機関銃は馬に乗せる。弾薬手は弾薬箱を一つ背負いますが、これも乗せます。

伊藤 その馬は、訓練された馬なんですか。

海原 もちろんそうです。私たちが行く前にちゃんと先輩がやってい

ますから。馬の方がむしろいろいろなことを知っていますよ（笑い）。馬というのは賢いものですから、絶対乗った人を踏みませんね。私も訓練の途中二、三度落とされましたが、将校になってからも、友達と一緒に、馬が下手だと駄目だからというので乗馬の訓練に行きました。騎兵部隊から馬を借りてやるんですが、パツと行くと濠があるでしょう。跳ぶと思うからこっちは身構えますね。途端にピュツと馬が止まっちゃうんですよ。そうしたら乗っていた人はストツと落とされるんです。そうしたら「馬は」上でじっと見ていますよ。お前大丈夫かという顔をして動かないで見ている。絶対馬は自分が乗っけておった奴を踏みませんね。それは言われているんですが、やっぱり怖いですね。落ちた時に馬に踏んづけられたらどうなるかと思うんですよ。いや、馬は賢いもんです。聞いてはいましたが、犬と共に賢いですね。そういうことで、私達兵隊の生活は結局馬の世話で終わるわけです。

伊藤 機関銃の手入れもあるわけでしょう。

海原 もちろんそれはあります。磨くわけですが、手入れも分解しないといけませんしね。実弾射撃があるんです。これは必ずありますし、実弾射撃と言っても、内地と違って裏に山々があるから、そこへ行つてパツと撃つわけですよ。撃ちっ放しですね。葉莢はちゃんと整理しないといけない。

伊藤 どうなるんですか。「葉莢は」後ろに飛ぶでしょう。それを拾うわけですか。

海原 そういうことです。それが一発ないと大変なことなんですよ。

伊藤 あれは大事なものですか。

海原 そうなんです。だから今の自衛隊でも大事にしていますね。また使うかなんかですね。あれは真鍮ですから、貴重品なんです。一

発ないというために、大隊全員で出て探すんですよ。だからそういう体験を持った者が、警察予備隊に入って米軍の訓練を見た時に、葉莢の撃ちっ放しでしょう。私の友人ですが、坂本君というNHKにおつたのが見に行きまして、びっくりしていましたね。これは旧軍の経験があるものですから。昔は葉莢を血眼になって探したのに、米軍の訓練は撃ちっ放しですよ。

伊藤 それで、あれを拾いに基地に入って撃たれるという事件がありましたよね。そういうことですか。

海原 そうです。こういう体験をした者と、全然知らない人では話が通じないんですよ。

伊藤 だからお聞きしているんですよ（笑い）。

飯尾 着かれて、そういう生活を始められたのは、だいたい三月頃ですね。

海原 二月の末ですね。二十六日頃です。

飯尾 それから、冬だったのがだんだん春になっていく。

海原 二月の末で、まだマイナス二十五度です。

飯尾 そういうところでしたら、分解するといってもカチカチで素手では持てないですよ。

海原 分解は手袋をはめたままです。お話ししようと思っていたのが、凍傷の問題なんです。浴場は連隊の中央にあり、風呂から中隊までの距離はせいぜい五百メートルもないですね。

伊藤 五百メートルもあるんですか。ずいぶんありますね。

海原 端から端まででは四五百メートルですかね。歩いている間に手拭いがピンとなってしまう。それはマイナス三十度の寒さのためです。体験者でないとはわかりませんね。

そこで、後でもお話が出ると思いますが、私たちの部隊は、冬季の戦闘に備えるために特別の任務が与えられており、師団對抗演習もやりましたね。山下奉文司令官が見に来たりしました。初年兵に対しては、軽い凍傷にかからせるんです。体験させるんですね。『面洗器』と言っていました。洗面器ですね。軍隊ではひっくり返して『面洗器』と言っていますが、それに水を張っておきまして、手を水につけると言われる。しばらくすると、そのうちにしびれてきて感覚がなくなる。少し白く変わっています。その時は大丈夫ですが、凍傷にかかった指を戻す時に慌ててはいけません。凍傷にかかった指をすぐに温めたりすると火傷をしますね。時間をかけてゆっくりと戻さなければいけない。そういうことも体験させるわけです。ですから冬季の演習訓練で一番心配されたのは凍傷です。連隊単位の演習をやりますと、凍傷患者が出ますね。

そういう苦労もありました。とにかく兵隊は先ほども言いましたように、ノモンハンの翌年でしょう。それが常に頭にあるわけです。こちらの方面で始まったらどうなるかと考えますね。だから訓練にも自然と熱が入ります。自分の命と引き換えですから。

そういう中で三カ月訓練しますと、一応一人前になるんです。一期の訓練と言いまして、一期は三カ月。三カ月の訓練を終えますと、そのまま戦場に行ける。そういうことになっています。例えばその間に、防毒面、ガスの訓練もやります。ガスの訓練をやる時には、防毒面の中に呼吸弁というゴムがありますが、これがあるとなかなか呼吸が難しいんです。取ってしまえば平気なんです。初年兵は全部弁の付いている防毒面をかぶりますね。ところが傍らに付いている分隊長のは弁を取ってあるんです。だから平気なんです。それで訓練を指

導するわけです。それは訓練する立場ならそうでしょうが、いろいろなことがありますね。実弾射撃に行った帰りに「ガス降下」と言われると、とたんにみんなガスのための防毒面を付けます。その防毒面を付けた上で分解搬送するわけです。そういうきつい訓練もやられました。

もう一つ、一番こたえましたしたのは、虎林付近は湿地なんです。東洋一の湿地帯と言われていました。湿地の地図がありますが、さあ、その湿地が問題なんです。湿地というジメジメしたところと思われるでしょうが、これにはいろいろな種類があります。『野地坊主』という水草の塊があちこちにある。その頭を踏んで渡って行くんです。湿地と言いましても、重湿地、軽湿地、中湿地とありまして、しかも途中まで水があつて、そこにいったん水草の層がありまして、人間が乗るとふわふわして、重い人が乗ると裂けて下へ落ちてしまう。下は底無しなんです。そういうのもあるんです。これはゴム湿地と言いますが、その間に入って落ちたら全くアウトです。ところが、下がそういう水草で根が張っているものですから、大丈夫だと思つて、胸の辺まで水があつても歩いて行くと、ドスンと穴があいて裂けて下に落ちてしまう。下へ落ちたらそれで終わりです。地形偵察に来た参謀も死んだことがある。そういうところを、先ほど言いました重機関銃の重い銃身を持つて歩かないといかんでしょう。これが大変なんです。

ふつう湿地と言いますと、その辺のジメジメした土地と思うでしょうが、そうではないのです。そういうところで戦闘訓練をやるというんですから、これまた大変なんです。弾薬箱を背負ったり、機関銃の銃身を背負ったり、脚を背負ったりして、しかも防毒面を付ける。そういうことまで全部できるように、三カ月の間に訓練される。それが

私たちのいた第五軍の戦闘任務なんですね。満州国内に湿地がありません。対岸のソ連の方にも同じような湿地があるんです。その湿地をどう踏破するかということが、私たちにとっての大変な任務だったので

す。
当時の作戦計画がいかにいい加減であり、「希望の作文」だったかを示すものがあります。この湿地につきまして、こういう記述があるんです。

「夜間に始まるソ連内の湿地機動は、夜のうちにこれを終え、そして黎明までに是が非でも固い土地に取り付くことが必要である」。何キロという広さですよ。そういう想定になっている。それで湿地訓練が非常に大事だと言ってやるんですからね。

飯尾 じゃあ暗い中で明かりをつけずに、相手側の岸の崖のところまで着け、ということになっているんですか。

海原 ソ連領内の湿地も、満州領内と同じような湿地だと書いてあるんです。とてもそんなに行けませんよ。これが軍の作戦計画なんです。

伊藤 その湿地のところに国境があるわけですか。

海原 川の中央です。

伊藤 ウスリー川の中央に国境線を引いてあるんですね。

海原 川の一番深いところの中心を結ぶ線が国境です。私たち第五軍の第十一師団はその湿地帯を突破して、敵の陣地に取り付いて、それから作戦計画ではハバロフスクの方に行くようになっていっています。いったい、それが何日でできるかの問題ですね。

伊藤 しかし、先ほどのお話ですが、湿地帯というのは冬になれば完全に凍ってしまうわけでしょう。

海原 凍るんです。凍りますとカチカチになって、「野地坊主」のと

ころが全部障害物になってしまっています。だから戦車でもなかなか通過は難しいです。

伊藤 落ちることはないわけですよ。

海原 落ちることはないです。凍っていますから。そこで軍の計画では、作戦実施に支障のない時期に機動する。攻めるとすると六月から七月中旬、それから九月から十月の二つの期間しかない、と書いてある。

伊藤 そのときは凍っていないわけですよ。

海原 凍った時は駄目なんです。戦車も。

伊藤 逆なんですか。

海原 だからそこです、問題は。凍った時の障害物は凍ったデコボコの「野地坊主」その他、凍っていない時は湿地の底無し沼ですね。そういうところで師団の二万名近い部隊が移動するんですから、これは大変なことですよ。よくそんな作戦計画を立てたと思います。

そこで、大体どんなところかおわかりだと思えます。だから何度も同じことを申し上げるんですが、「湿地」というと一般の人はその辺のちよつと湿ったところだと思われるでしょうが、そんなものではないんですね。

飯尾 それはかなり広範な湿地になっているわけですよ。あたり一面そういうところですから。鉄道なんか敷いてあるのは、そこに何か土盛りか何かしていたんですか。

海原 もちろん土盛りしていません。ところが軍の作戦は、実際の事情というのをいっさい考慮せずにやっているんですね。

飯尾 これを見ると、先方のソ連領内には鉄道で移動できますが、こちらの満州領内はできないんですか。

海原 いや、ソ連領も同じですよ。

飯尾 ソ連領も一緒ですか。ただ、こちら側をこういふふうに移動できるとすよね。

海原 よくわかりませんが、飛行機の偵察では同じようなものだと書いてある。この湿地についても同じようなものだと書いてある。そも、湿地についてもこれだけあるんです。「資料を配付する」。ご参考までにどうぞ。ここまでお話しした上で、これを読んでいただくとうまくわかると思います。

伊藤 この重湿地というのは、川や湖とあまり変わらないわけですね。

海原 変わりませんね。しかも先ほど言いましたように、それぞれ性質が違いますからね。ただ水があるのと、中間に水草の帯があるのとでは違いますしね。それからどういう土質なのか。泥なのか、砂なのか、あるいは粘土みたいなものなので全部違う。

伊藤 湿地でないところの方が少ないみたいな感じですね。

海原 それを全部十把一からげして湿地作戦とか言ってるわけですよ。特に第五軍、私たちの師団は、湿地作戦のベテランにならないかんというふうなことです。そんなことを言ってもしょうがないでしょう。

佐道 「湿地訓練の基本は湿地に馴れ親しむこと」と書いてありますね（笑い）。

海原 それですね、問題は、そういうことを平気で書くんですからね。いかに中央の関東軍とか大本営の参謀連中がいい気なものか。第一線の苦労なんか全然知らないですから。優秀な参謀方は何をしていたかと思うんですけれどね。私が防衛庁で大きな顔ができましたのは、満州でそういう体験をしていますからね。相手は全部参謀連中でしょう。

「君、機関銃を撃つたことがあるか」と聞いたたら、終わりですよ。「湿地を知っているか」と聞くと、「はあ？」と言う。「君たちは不能な命令を出しておったんだ。そんなことは誰でもできるんだ。第一線はどういうところか知っているのか」と言うと、終わりなんですよね（笑い）。

それが、私についての悪口のもそもその原因です。私は一兵卒の声を代表して、参謀に物申しておったんです。本当に私は腹が立ちますね。湿地の「し」の字も知らない人が、湿地作戦はどうだこうだと言いますし、それに慣熟しろと言う。何を慣熟するんだと言うんです。

伊藤 実際に落ちて死ぬ人も出るわけですね。

海原 年に何件かあります。しかも落ちたらそれつきりなんです。上の層が下を覆いますから。参謀が落ちた時も、死体は取れなかったんですから。馬でもそうです、重湿地では。

伊藤 逆に言うと、人間より馬の方が危ないでしょうね。

海原 危ないでしょうね。ことに脚が弱いですからね。このあいだ競馬で安楽死させられたのがありますよ。武豊さんの乗った馬が。馬の方が危ないです。滑ると、途端に骨を折りますね。だから、そういう湿地帯では馬なんか当てになりません。

飯尾 そうすると、さっきの物を馬に乗せるといふのは、なかなか不可能ですね。

海原 作文は簡単ですが、じゃあそれで動いてみると言われたら、動かせんね。

飯尾 そもそも人間が運べないから馬を運んできたわけですよ。

海原 そうそう、おっしゃる通り。あなたのように考える参謀がおればよかったですけれどね。だけど日本の参謀はそうではなかったで

すな。

飯尾 これによると、参謀の方は「一週間以内に鉄道を敷設し」とか書いてありますね。

海原 本当にそういうことができると思っていたんですよ。いかに馬鹿げたことをですな。

佐道 「軽武装遊泳が教え込まれた」と書いてありますが。

海原 教える人がおるんですよ。それは一言で言いますと、全部机上の空論なんです。こっちはしかも無尽蔵な力があるんですよ。独り相撲を取っている。敵はどうだというと、わからない(笑い)。相手は十人力なのか、五十人力なのかわからないんですよ。それに打ち克つものは大和魂だということになる。それが旅順以来の陸軍の伝統ですね。精神論です。それに懲りないことが、私は困ったことだと思うんですけれどね。敢えて昔のことを言っていますのは、昔がそのまま今に生きているということです。

伊藤 相変わらず今でも同じようなことをしている。

海原 自衛隊の幕僚の物の考え方ですね。その一番いい例が、海上交通の確保、シーレーンの安全の確保という議論ですね。これは、鈴木(善幸)総理大臣がワシントンで言って、日本の公約になっているでしょう。何もしていませんよ。できませんよ。私は不可能だということとを、ずっと昔から言い続けている。それをいまだに「海上交通の安全の確保をやれ」と言う。そんなものなんです。だからこの間も申し上げましたが、「名月をとってくれろと泣く子かな」です。背負っている子どもが、十五夜のあの月を取れと言う、それと同じ状況だと思っただけです。

飯尾 やはり盤に水を張って取るしかないですね(笑い)。

海原 そういうことですね。笑っておられますが、それをまともに考えている。ある意味での信仰ですね。それが怖いんですよ。

飯尾 なかなか上官がそういうことを信じていると、口ごたえが難しいですね。

海原 そうですね。ですから、私の後で私みたいに物を言っている人はいませんね。それが寂しいんですが、まあ私もあと何年生きているかわかりませんが、後は野となれ山となれです。

伊藤 しかし、ソ連側から考えても同じことですね。向こうから攻めようと思つた場合……。

海原 そうです。ただし、終戦の時に攻めて来たのは、ここではありません。虎林というよりも虎頭のところです。そこへ入つて来ました。しかし、間を突破しているんです。極めて彼らは論理的ですから、車の行けるところに来ている。日本はそうではないです。湿地を通過して行くんですからね。こんなところは、向こうは通らないんですよ。

伊藤 それはどうしてそんなことを思つたんでしょうね。

海原 それは私に聞かれても(笑い)。

伊藤 参謀に聞いてみないと(笑い)。

海原 だから、何故そんなことを考えたのか。まあ、しかしそういうことを考えるのが日本人の特性ですか。

それで言っておきましょう。司馬遼太郎さんがいいことを書いています。「日本の陸海軍の参謀は、詰め将棋に熱中した」と言っただけです。詰め将棋というのは盤のほんの一部分でしょう。これはどうやったら詰まるかと、そればかりをやっていたのが日本の参謀であると書いておられますよ。その通りですね。そんなことではなく、盤全体の勝負を考えないといけないのに、詰め将棋に熱中するのが日本の参謀であ

る。これはもうしようがない、そうなんですから。

飯尾 詰め将棋の、詰めるところにおられたわけですね。

海原 そういうことですね。私は身を以って体験しましたからね。いかに馬鹿なことをやったかということですね。

飯尾 それはしかし、司令官クラスも薄々はこれはかなわんと思つてやっていたわけですか。

海原 さあ、これは司令官であつた人に聞かないとわかりませんけれどもね。私は瀬島（龍三）さんがいま言っていることを見ると、あの人は全然そういうことを感じませんね。

飯尾 参謀の方はわかつていない。ただ、現地の司令官は兵隊たちを使つてやつておるわけですよ。

海原 それは、日本人の社会の問題になるんですが、要するに司令官は、参謀が一所懸命考へてやるのだから、それに任せるべきであり、いわゆるめくら判を捺すのがいいとされます。その一番いい例とされるのが、日露戦争の時の大山（巖）さんの態度ですよ。大山元帥が見玉（源太郎）参謀長に、「今日は少し騒がしいけど、何かあるのか」と聞く。大砲の音ですね。そういうことを言つたという。これは誰かが作つた話でしょうけれどね。そういうふうには、軍司令官は今日どんな作戦が起つているか知らないでいいんだというわけです。「あの音は何だ」ということを参謀長に聞いた。そういうものだという妙な軍人の一つの偶像、理想像が描かれましたね。だからノモンハン事件だつていい例ですが、あれは服部（卓四郎）と辻（政信）がやつたということになっていますが、そうじゃないんです。それは関東軍司令官以下が全部でやつたんだということを、司令官が言っていますよ。それなら全員がおかしかったということになるんですが。その辺のと

ころがわかりませんけれど。まあ、一般にはノモンハン事件は辻参謀が一人でやつたということになっているけれども、そういうことはあり得ない。参謀長以下全員の合意した作戦であつたとなれば、全部が責任を取るべきでしょう。関東軍参謀の全員が、本来は予備役編入になるべきなんです。

そのことに私が気が付きましたのは、戦後間もない時です。アメリカ大使館の方から、日本の近代史を勉強しているハーバード大学の学生が来ているから会つてやつてくれと言われて、いいですよと言つて会つた。ずいぶんいろいろな人も会いましたが、その学生さんが最初に質問したことは、「関東軍でノモンハン事件の責任者であるはずの服部とか辻とかいう人が、しばらくしてまた大本営の中枢に返り咲いた。どうしてこういうことが起こつたか」ということです。どう答えられますか。私はなるほどと思つた。今まで考えたことがなかつたんですがね。「私はそれについては深く調べていないけれども、私の感じから言うと、日本人の社会では、いわゆる閥を作る。同志とか、気心の知つた連中が意気投合すると、数人で一つの閥を作る。それが全軍を支配することになる。その連中は大体において優秀だ。そこで、ノモンハンでああいう失敗をしたということについて、どう見るかです。ああいう失敗をしたのだから、二度と同じ過ちは繰り返さない。その過ちがプラスに影響するという考えが多い。その時に助けとなるのがいま言つた閥、仲間だ。だから本来なら服部とか辻は、当然他の人がそうであつたように、予備役に編入されて然るべきだ。ところが、あれはできるからと言って、一時ちよつと二人とも妙なところに行きましたが、すぐまた異動した。そして日本の陸軍の作戦の中心を担当した。それは私の判断では、仲間意識が大きいものだと思う。

それから失敗は成功のもと、二度と同じ失敗を繰り返さない、そういう理論付けとの二つじゃないかと思う」と言ったら、「ああ、そうですか」と言われましたがね。他に考えられますか？

伊藤 さっきの内務省の左遷の話と比べてみると、同期の連中というのは同志であると同時に競争相手であるということですから、罰点が付いたんじゃないかというふうには、その服部さんや辻さんについては思うんですが……。

海原 これから先は完全に私の想像ですが、罰点を付けるだけの器量がないんですよ、客観的な能力が。あいつはできるんだという先入観があるんですよ。そのできる奴が間違えたんだ。じゃあお前代わりにやれるかという、それはできない、となる。その辺からおかしくなるんですね。だから私は何故あんな人がずっと最後まで大本営におったのか、参謀の作戦中枢におったか、どうもわからんですよ。しかし、いま申しました仲間意識、「引き」ですね。それとそれなりの力があったんでしょう。それしか説明のしようがないと思います。

伊藤 積極的な説明はちよつと難しいように思いますね。

海原 「バツイチ」とか「バツ二」とかよく言われますが、賞罰が明らかではない。そんな人々は引退させればいいんですよ。他の人がやったらもつとまぐいきそうだと私は思うんですが、そこが違うんですね。それは「引き」でしような。

飯尾 やはり、それは内務省と軍隊との違いですかね。内務省は結局のところ、みんなが競争していて、ということですね。

海原 そうですね。選別されますね。

飯尾 軍隊の方は早い時期にそれが固まってしまつて、みんなが閥のトップにぶら下がっていくんですかね。

海原 そうでしようね。そこで、この話はしましたか。四宮校長先生の話は……。阿波の人間の話ですが、あれと同じことですね。長州、薩摩の人間は、仲間の中で物になりそうな奴を複数担ぐ。そして、それを上に上げておいて、みんなはぶら下がる。ところが、阿波の人間はそれをしない。どうするか。足を引っ張ったり、頭を叩いたりしている。だから駄目だと、こういうことを四宮先生が言われていましたね。

飯尾 組織としては、阿波の人間と似ている内務省の方が良さそうに見えますけれどね。

海原 と思いますけれどね。いわゆる組織論とか何とかになりますが、これはやはり客観的な情勢とか、その時のそれぞれの人の持っている持ち味とか能力に関係してくるんでしようね。

経理部幹部候補生になる

伊藤 わかりました。それで、幹部候補生になられることになりましたね。それはどんなプロセスで、どういうふうなことで受けられるんですか。

海原 これは資格がある者が受けられるんです。

飯尾 三カ月でしたら、六月頃にはワンラウンドして……。

海原 幹部候補生になりましたのは、八月一日です。

飯尾 では訓練している最中に、そういうものになっていくわけですか。

か。

海原 幹部候補生を命ぜられ、そして階級を与えられるんです。八月一日に「一等兵の階級を与う」です。

伊藤 幹部候補生になった途端に……。

海原 一等兵を命ずではなく、一等兵の階級を与えらるという階級付与なんです。十月一日に上等兵の階級に進み、甲種幹部候補生を命ぜられました。伍長とか軍曹とか、あれは全部階級付与です。伍長に任命ではないんです。軍曹の階級で新京の学校に入り、卒業した後に見習士官になるわけです。これは見習士官に命ぜられるんです。だから幹部候補生時代は、全部階級を与えられるんです。ややこしいですね。どうしてこんなことになっているのか知りません。

伊藤 幹部候補生になるということは、試験があるわけですか。

海原 もちろん試験があるんです。幹部候補生にも二つあって甲種と乙種とがあるんです。甲は甲幹と言いますが、甲種幹部候補生は士官適任です。乙種幹部候補生は下士官適任です。そういうふうに分かれます。これも試験です。筆記試験と面接と両方ありますね。

伊藤 一番最初の段階ではどういうふうには選抜されるわけですか。有資格者というのはどうなりますか。

海原 有資格者というのは、甲種乙種両方合わせまして採用しますね。そして途中で試験をやるわけです。その試験の結果、甲と乙に分かれるんです。私たちの場合は夏八月に演習がありました。七月末頃に試験を受け、十月一日に甲幹となりました。

伊藤 それは教育の最中ですか。

海原 そうです。幹部候補生教育の最後の方ですね。

伊藤 幹部候補生の教育というのは、どこがやるわけですか。

海原 それは各連隊でやっています。それから師団でやるのと両方あるんです。連隊にも幹部候補生教育隊というのがありますし、私たち經理部幹部候補生の教育は、師団が担当しました。しかし、身分は連隊にあります。

一つの例を申しますと、当時は甲になりますと五年、乙だと三年、これが一応の期間だと言われていました。同期の一人は家庭の状況でどうしても早く帰りたいかったです。普通は甲幹になりたいんですが、彼の場合は乙幹になりました。そこで師団の試験の時に、わざと落第するような答案を書いたんですね。それが問題になり、結局その男は幹部候補生を免ぜられました。一兵卒になりました。しかし早く帰りましたよ、三年半で。そういうことがありました。

伊藤 いろいろな運命がありますね。

海原 こういふことは、複雑に個人の生き方と関係してきますからね。お話してもおわかりにならないと思うんですが。その男がどんな答案を書いたのか。私と同じ連隊で、いま身分が問題になりましたが、歩兵四十三連隊の幹部候補生教育隊にあるわけです。その隊長は陸軍士官学校を出た人ですね。私はこの教官のところと呼ばれて、「この男はこういう答案を書いた。お前どう思う」と聞かれました。「お前とは親しいようだから」と。私が見ましたら、本当によくこんな答案を書いたと思うような答案を書いているんですね。例えば、師団の經理部長は、建築業務については師団長ではなく、陸軍大臣に直隸しているんです。陸軍大臣ですよ。師団長ではないんです。

飯尾 建築だからということですね。

海原 任せると勝手なことをやられる。全軍の規格を統一しなければいけないから、勝手なことをやらさんということで、陸軍大臣に直隸

しているんです。建築について経理部長は……。その質問が出まして、「何故師団の経理部長は建築業務に関して陸軍大臣に直隸しているのか」と。それに対してその男は、「海軍大臣に直隸しては困るから」と書いてあるんです（一同笑い）。

飯尾 よくしかし、そういうふうに書かれましたね（笑い）。

海原 笑っておられますけれど、これは反軍思想でしょう。「海原候補生は、この男と親しいようだが、どういう心境で彼が書いたと思うか」と私は聞かれたんです。私は弁護しました。それは、「この男は優秀である。だから白紙を出しても甲に通ると、みなが言っていた。しかし彼は家庭の事情があつて早く帰りたい。甲になれば五年、乙になれば三年と言われていたので、彼は早く帰りたい。その早く帰りたいという一念が、こういう答案を書かせたんだと思います」と言つたら、「うん、そうか」と言う。

その次ですよ。「貴公が内務省の人事課長で、志願者がこういう答案を書いたらどうするか」と質問するんです。参りましたね。私は必死になって弁護しましたが、結局その男は幹部候補生を免ぜられませんでした。そういうこともあるんです。これは、なかなか今の平静な場所です。申し上げても、とてもおわかりいただけないと思いますが、本当に優秀な男です。それがそんな答案を書くんですよ。

飯尾 これは思い詰めた末のことなのでしょうね。

海原 夜、演習しますね。夜間四時間以上の演習をすると、「小夜食」というものが出るわけです。いろいろ出せるのです。それを説明しろと言う。夜間演習で四時間以上になった時には支給できるという規定があり、それを書くべきですが、その男は何と書いたか。「あんばん、あんまき」と書いたんです（一同笑い）。

書かれた相手はどう思いますか。だから、師団の方では怒って、これは勤め先に通報する、軍法会議だと言つたんです。ところが連隊の高級副官は非常にいい人で、戦死しましたが、この人が庇つてくれました。身分は連隊にありますから。そこでこの男は幹部候補生を免ずる、というだけで終わった。軍法会議その他もなくなりました。そんなこともありました。とうてい考えられないですね。「海軍大臣に直隸させてはいけません」と書くんですから。

伊藤 よく頭が働きましたね（笑い）。

海原 ですから私が申し上げたいのは、人間というのは置かれた環境によつて変わるといふことですよ。とてもふだんでは想像もできない行動、言動がありますね。いや、軍隊ではいろいろなことを体験しました。何からこんな話になつたのでしょうか。

伊藤 幹部候補生を命ぜられた時、最初に連隊で教育を受けたんですね。

海原 いや、経理関係の仕事については、師団で受けました。

伊藤 初めから経理の場合は、師団で受けるんですか。

海原 経理の場合は、師団の各連隊の有資格者を集めまして、師団司令部が教育を担当しているんです。ただ身分は連隊なんです。

伊藤 主計ということはどこで決まるんですか。幹部候補生の中で主計ということば。

海原 それは最初経理部を受ける時からです。本科の幹部候補生になるかどうか。

飯尾 それはまず、どこを受けるかと言つてくるわけですか。

海原 そうです。

飯尾 私は経理部を受けますと、こういうふうにおっしゃって、海原

さんは経理部を受けられて、通られたわけですね。そういう順序になるわけですか。

海原 私は、予備役の将校になるのでも、軍隊に来たのだから、ひとつ飛行機をやるうと思っただんですよ。シャバではできないことをやるうと。それで航空課を志願したんです。しかし、この時には専門学校以上を出た者は全部経理に回されました。それは部隊の大増員の時です。すから、人が足りないんです。主計将校は先ほど言いましたように、金の勘定だけではないんです。経理部というと、全部後方をやりまから。作戦参謀は本官がいますが、後方補給関係をやるのはいないんです。そこで経理部の将校が足りなくなり、専門学校以上を卒業した者は、全部経理部に回りましたね。その中から、例えば私の友人で、法務部に回った人がいます。それは判事の資格があるからで、法務官が足りないためです。そういうことで、専門学校以上の学歴のある者は、全部経理部です。

伊藤 師団で主計の幹部候補生というのは何人くらいいたわけですか。一緒に教育を受けられたのは。

海原 あの時は、そうですね、正確には覚えていませんが三十名くらいいましたね。

伊藤 そんなものですか。そこで教育を受けたら、その師団の中で？

海原 師団で教育を受けて、今度は新京の経理学校に行くわけです。東京で言いますと牛込に経理学校がありました。ああいうところに行くわけです。

私は経理部になれば、東京に帰って来れると思っただんですよ。ところが、大増員をしたものだから、東京の経理学校が満杯になってしまったんです。そこで満州に新しく作ったんです。言うなれば、満州の

経理学校ですね。本来は、そこは経理部の下士官候補者教育隊だったんです。新京の真ん中の児玉公園にいいところがありました。ところが臨時に在満と在支との経理部幹部候補生を教育する中心になったんです。ですから私は東京に帰って来られないで、新京で教育を受けました。

飯尾 八月一日に、まず幹部候補生に命ずると言われて、師団の方で教育を受ける。それでどれくらい師団で訓練されたんですか。

海原 それは一カ月くらいですね。

飯尾 それは訓練に良い時期になって、みんなが沼地を歩いていそうな時には師団におられたんですか。

海原 いや、沼地を歩いたのはまだ初年兵の時です。私が申しましたのはその翌年です。幹部候補生教育隊に入りましたのは昭和十六年です。

飯尾 じゃあ、その翌年ですか。

海原 はい。入営したのが昭和十五年二月で、新京に入校しましたのが十六年二月なんです。翌年なんです。

伊藤 四カ月教育ですか。

海原 二月一日に入りまして、六月二十日に卒業していますから、五カ月ですね。

飯尾 その前の年の八月に経理部付きになられたんですね。

海原 前の年の七月は、経理幹部候補生の試験を受けた時です。そして各連隊から、師団司令部に通っていました。

飯尾 そういうプロセスがずっと間をおいてあるわけですか。

伊藤 その間はまた訓練なわけですか。

海原 そうなんです。それで、師団の秋季演習になりますと、幹部候

補生だけで一つの小さな部隊を作らされる。それで特別の教育を受ける。そういうことですね。

伊藤 それは師団で、ですか。

海原 師団で全部集めましてね。

飯尾 じゃあ、その時は機関銃の銃手ではなくなっているんですね。

海原 なくなっています。銃手は、幹部候補生になるまでです。一期の間にずいぶん私は太りました。入隊の時は十四貫五百です。それが十九貫になりました。

飯尾 どうして太られるんですか。

海原 それは適当に運動するでしょう。三食食べるでしょう。何も考えないでしょう。朝起きて夜寝るまで言われる通りでしょう。頭を使うことがない。そういう生活だと、やたらと体が太ってきますね。

伊藤 よく絞ると言いますが。

海原 絞られているというか、太るんです。絞られて太ったわけですね。ですから、私はそういう意味では旧陸軍に感謝しているんです。機関銃の銃身を分解搬送で担いだもので、この頸骨の五つ目がちょっと曲がっているんですが、それ以外はおかげさまで、今でも骨がしっかりとっています。帝国陸軍に感謝するのはそれだけです。

伊藤 体を鍛えてくれた。

海原 はい。何からこんな話になっちゃったのか。どんどん聞いていただいているんですが、そういうことをお話ししていると全然先に進みませんからね。

伊藤 いえ、進まないところはこの次に……。

海原 まだ湿地訓練のところですね。

伊藤 もう少しお話をしていただけませんか。

海原 それで、これを読んでいただいて、またこの次ご質問いただければ……。湿地訓練の資料も置いておきますから。

伊藤 先ほど昭和十六年二月とおっしゃいました。二月に新京の経理部幹部候補生学校入隊ということですが、これは正式名称ですか。

海原 これは正式には、新京の陸軍主計下士官教育隊なんです。しかし、それが臨時に幹部候補生の教育隊になったんですね。満州第六二部隊という名前にしていました。

伊藤 海原さんがお出になった学校の名前は何と云うんですか。

海原 それは新京の経理部幹部候補生教育隊ですね。

伊藤 隊ですか。学校ではなく。

海原 学校ではありません。隊です。

伊藤 そこで教育を受けるわけですが、教育の内容はどういうことですか。

海原 これはあらゆる部門ですね。作戦までやりましたから。軍事関係の基礎ですね。ですから、一般の作戦から、例えば戦術の質問が出まして、正解を出せと。戦術まで習いました。それから経理の具体的な作戦給養をどうするかということですね。金銭給与はどうするか、そういう専門の部分ですね。それ以外には、いま申しました軍の作戦行動についての将校として必要な知識、それを与えるということですね。

伊藤 戦闘があつて、兵士の将校たちが全員戦死したら、主計の将校といえども、これは専任であれば指揮官になられる。

海原 もちろんなります。

伊藤 やはり作戦の教育も受けなければならぬということですね。

海原 そういうことになっているのに、先ほど言いましたように礼式

令では差別している。今で言えば差別ですよ。おかしいじゃないかと私が申しますと、鷹森中將は「海原中尉の言う通りだ」と言う。無礼講の席でして、「海原来い」と言われ、前に座って酒飲みながら、「師団長が賛成されるなら上申してください」「よし」となったのです。

飯尾 それでちゃんと上申されたんですね。

海原 そうですね。その息子さんが名古屋の方におられまして、数年前にお目にかかりまして、お父さんは立派だと誉めたんですけれどね。この人は陸大を出ていないんです。陸大卒を示す徽章、俗称は「天保銭」を付けていない、いわゆる無天組でした。しかし中支で非常に有名な部隊長でした。第十一師団は、初代の師団長が乃木（希典）さんで、関東軍でも重要な師団でしたが、その師団長になられた。いい方でしたね。師団長は陸軍大臣に上申を出すと言って、ちゃんと出してくれたんです。何とかなると思っていたら、なんと陸軍省の担当の将校の机の引き出しに入っていたというんですからね。これが日本の官僚組織のひとつの断面ですね。

伊藤 経理というのは実際の配置になれば、先ほど後方全体とおっしゃいましたが。

海原 それは師団司令部ですね。師団司令部には経理部の将校が大勢いて、それが後方関係を全部やっています。部隊に行きますと、連隊におりますし、大隊にも付きますね。そういうところでは二つの仕事があります。金銭の給与と、食事の献立です。この二つが主です。ですから私たちもいろいろ献立を作られました。カロリーで言いますと、ふだんはせいぜい三、〇〇〇くらいですが、演習の時は四、五〇〇くらいのカロリーを食べさせる。献立表を作りましたね。そういうこともやるんです。ですから何をやるかは、それぞれの部隊が置かれて

いる環境によって違いますね。

伊藤 そうすると、経理部将校の部下は……。

海原 部下は全部主計の下士官です。幹部候補生もいます。乙種の幹候です。それから兵隊。

伊藤 兵隊は……。

海原 兵隊は普通の兵隊さん。そこは一般の部隊と変わりません。師団司令部には編成上経理勤務班というのがあり、五十五名が定員なんです。それが師団司令部には付いていますが、私は師団長に話しまして二百名に増やしたんです。五十五名では何もできませんから、二百名に増やしました。トラックが十一台ありまして、乗用車も一台ある。そういうもので後方の輜重みたいなことをやります。補給関係を全部やる。そういう時の兵隊は、一般の兵隊と同じです。

伊藤 いわゆる輜重というのと、どう違うんですか。

海原 輜重ですか。輜重にもいろいろありまして、自動車の輜重と、私たちの場合は馬の輜重ですね。先ほどちよっとお話ししましたが、車を引っ張っているでしょう。輜重車というものには、せいぜい二五〇キロくらいしか載らないんですよ。ほんのちよっとなら載らないんですよ。それにも馬が一头付くでしょう。馬に食べさせる物を考えないといけない。そうしますと、馬を主体とした輜重部隊というのはあまり能力がないんですよ。この辺のところはどうも一般の方はわかりにならないでしょう。

飯尾 食べ扶持も持って行かなければいけないんですね。餌を載せれば、あまり載せられないんですね。

海原 大きな大八車に、乾草というのはでかいでしょう。だから、いっぱい嵩があるけれど実際は小さいですね。それから乾草だけでなく、

穀物も要りますね。いろいろありますから、あの車に載せても大したことないんですよ。おっしゃるように、自分の食べ物を持って運んでいるんです。だから、日本軍の従来の輓馬とか駄馬の輻重は、輸送能力はあまりありませんね。私たちの行った時には、自動車の輻重が始めたばかりです。師団によって違いますが、十一師団は駄馬師団でした。

飯尾 その輻重の指揮も執られたんですか。

海原 これは別です。これは輻重兵連隊というのがあるんです。

飯尾 輻重兵連隊と経理部との関係はどうなっているんですか。

海原 全然関係ないです。

飯尾 でも、経理部は物を集めてこななければいけませんよ。

海原 しかし、それは何で集めるかということは、例えば極端な話をしますと、民間のそういう輸送車で集めてもいいし、どうしてもいいわけです。

伊藤 そうすると輻重が運んでいるのはそういうものではなくて……。

海原 ほんの一部分です。むしろ、作戦間のそういう物資輸送を担当するのが輻重部隊だと思っただけです。

伊藤 ではいざ戦争が始まったら、兵器、弾薬の類を運ぶだけで、食糧は？

海原 食糧も運びますが。

飯尾 それは短時間の食糧しかなくて、輻重では、長期に部隊をもたせるだけの補給はできないわけですね。

海原 できません。能力がありません。その辺で、ちよつとまだいろいろと申し上げようと思ったことに関係がありますのは、この辺が湿地帯でしょう。私はこれを干拓しようと思った。経理部長と相談しま

して、面積も当時のものに書いてありますが、それは「現地自活」ということを中央からしきりに言われましたので……。『現地自活』もいろいろ内容が違ってしまっていますね。兵隊が食べる野菜を作るのと、米まで作るのと、豚や馬などを飼うのといろいろあるわけです。さあ、そこで私が考えたのは、現地調達と言われても、野菜の栽培にしても耕地がないでしょう。そこで、この湿地の軽いところを満州国政府と話をして、借りました。

飯尾 こういうところには住民というのはいらっしゃいますか。

海原 います。

伊藤 その住民が住んでいるところには耕地があるわけですか。

海原 あります。

伊藤 軍隊はその外側にいるんですね。

海原 そういうことですね。虎林の県には三千人くらい住んでいましたかね。

伊藤 そんなに規模が大きかったですか。

海原 そこで私が満州国に掛けあって、相当広い土地、ちよつと数字は覚えていませんが、これを借りまして、そこに満農を二十家族くらい連れて来まして、そこへ住まわせて、開拓させたんですよ。

伊藤 それはやはり兵隊さんがせずに……。

海原 そこで、師団長と参謀長と意見が分かれるわけです。同じ軍人でも考えが違うかということの一つの例ですけれどね。参謀長は生粋の軍人的な素質の人なんです。なかなか頭のいい人ですけれど。参謀長はそういう干拓事業は、経理部がお金を出して満人を雇ってやるべきであり、兵力の使用は駄目だ。兵力の使用はまかりならんと言う。これが参謀長。

ところが師団長は、兵力の使用はよろしいと言うんです。先ほど言いましたように、中支で苦勞しているでしょう。だから師団長は湿地を干拓するのに兵力を使ってよいと言ひ、参謀長は経理部がお金を出して、満農、満人を雇つてやれと言うんですよ。師団長は、作戦のために濠を掘るのも、湿地の干拓のために濠を掘るのも同じことだ、それは訓練になると。だから兵力を使ってよろしいということになる。さあ、どうしますか。師団長と参謀長で意見が違ふんですよ。この時が一番激しい意見の対立でしたね。

たまたま師団の湿地訓練があつた。湿地に各部隊が野営するわけです。その間にいろいろなことを教えるわけです。十日くらいやりませんが、その野営演習の時は、師団長とか参謀長とか上の人は暇でしょう。やっているのは部隊ですから。それで私は経理部長に、「ひとつ今日、師団長に湿地の干拓計画をご説明ください」と言った。それはなぜかという、参謀長がその時いないんです。前線に行つてしまつています。二日間、参謀長がいないことを知つたものですから、経理部長に、「お暇でしたら、この機会に干拓計画をひとつご説明ください」と言つたら、「よし」と言つて、師団長の天幕へ行きました。ちやんと図面も用意しました。私の経理勤務班には召集の人がたくさん来ていて、専門家もおるわけです。それに頼みまして書いてもらったのです。干拓計画を作つたんです。それには兵力を使用することを予定してあります。私がお供して、経理部長が師団長に説明するわけです。どうせ暇ですからね。そうしたら師団長は「うん、うん」と聞いておられた。「よくできている、これはいい」と言うんですよ。その時に私が「師団長、念のために申し上げますが、漏れ承るところによりまして、参謀長は兵力を使うことには必ずしも賛成ではないように伺つ

ております。そういう干拓作業は、経理部が金を出して満人を雇つてやれということのようですが」と言つたら、「いや、それは構わぬ。兵力でやれ」と言われた。要するに濠を掘るのは同じことだと言うんです。

伊藤 司令官はそう言うんですね。

海原 ということで、参謀長不在の間に話をまとめちゃつたんです。そして、一応書類を用意しますということで、参謀長の欄は空欄にして、師団長の決裁をもらつてしまつたんですよ。参謀長が帰つて来た後で「経理部長、ひとつ参謀長に話してください」と言つたら、「海原中尉、君が行つて来い」と言われた(笑い)。

こつちは経理部長が話してくれると思つた(笑い)。ところが「海原中尉、君が行つて来い」と言うんです。しょうがないですね。私もそう言われた以上は行つて、恐る恐る、「実は参謀長不在の時に、たまたま師団長がお暇で、『経理部長に話しに来い』ということをお言われましたので、こういうことで決裁を得たんです」と言つたんです。そうしたら「何!」と、声で怒つたんです。しょうがない、決裁しているんですからね。ピンタを食らうかと思つたけれど、「そうか。師団長がOKされたのか」「はい、師団長はよろしいと。干拓のための濠を掘るのも、戦車濠のために濠を掘るのも同じことだと言われました」「ん、そうか」と「判を捺した」。そういうことがあつたんです。

ところがそのお返しに来ましたのは、その次の年、夏です。ちやうど一般の人が演習に行つてゐる時に、動員担当の将校が私と同じ官舎にいまして、「海原さん、今度除隊ですよ」と言いに来たわけです。「えっ」と言つた。そうしたら、中央から指示が来て、私ともう一人清水君(これは同期なんです)、これを含めて、「経理部の将校が全

員召集解除ということになりました」と言う。「本当か」と喜ぶと、「ただ、いま参謀長が不在で、まだ決裁をもらってないけれども、師団長は決裁されている。だからまず間違いない」と言う。それはありがたい。いよいよ日本に帰れると思つて、その晩清水君と一緒に、一里離れた町のおでん屋まで飲みに行きましたよ。

そして翌日、参謀長が帰つて来た。参謀長のところに、動員担当の将校が行つたら、「何だ、これは。全部除隊、召集解除か?」と言われた。「はい」と答えると、途端に「駄目だ」と言う。師団長は決裁しているんですよ。その時に参謀長が言ったことは、「これが全部除隊、召集解除になったら、師団の戦力はどうなるんだ」です。それは仲間は全部で六人ばかりですが。担当の将校が「陸軍省からの通知で、この時期の者は一応全部召集解除ということでありませう」と言った。「駄目だ。これとこれとは絶対駄目だ」と言うんです。私と清水の二人を参謀長が線を書いて消してしまつた。参りましたね。

しかし、これも結果的には良かったんです。召集解除で一度帰つて来ましても、また他のところに行きましたから。どこへ行つたかわからない。だから結果的には私たちは元の師団に残つておつたから、まあ無事に帰つて来られたんですがね。その時は、しかし久しぶりに召集解除で祖国に帰れると思つて喜んだのを、バン、バンとやられた(笑い)。いろいろなことがあるんですよ。

伊藤 師団長が決裁したのに駄目なんですか。

海原 だから、おかしいじゃないかと言つたんですね。先ほども言いましたように、師団長が上だと思つたんですけれどね。参謀長がいなくても、私のほうはOKだつたでしょう。これだつて陸軍省から通知が来ているわけですから。それでも駄目なんですね。「師団の戦力を

どう思っている。同期を全部替えるのは駄目だ」です。師団長が決裁していても駄目だつたんです。ですから、師団長と参謀長との関係というのは非常に難しいものですね。一般的には意見が対立しますと、飛ばされるのは上の方なんです。それが陸軍の人事の一種の伝統です。伊藤 それがあるので踏ん張つちやうわけですね。

海原 そんなことがありました。だから、たった二つの例しか申しませんが、全然結果が違ふんですね。そういうことがありました。

伊藤 いま「海原中尉」になつておられましたか、任官した時から、どういふふうになつていくんですかね。

飯尾 陸軍二等兵から急に中尉になられた……(笑い)。

海原 いやいや、そんなことはないです。まず、昭和十六年二月一日に教育隊に入隊しましたね。この時はまだ下士官です。

伊藤 まだ下士官と言つても、その前は二等兵だつたんですか。

海原 二等兵から一等兵、上等兵。それは半年くらいの間ですね。

伊藤 どんどん上がっているわけですか。

飯尾 訓練している最中に上がつてくるわけですね。

海原 そうです、三カ月くらいで。それから先ほど言いましたように、幹部候補生になりますと階級を与えられるわけです。そこで甲種幹部候補生になりますと、軍曹の階級を与えられる。

伊藤 伍長を飛ばし、ですか。

海原 伍長はその前に済んでいます。

飯尾 伍長になられて、幹部候補生になつて軍曹になられたんですね。

海原 そうです。それで入校しまして、六月二十日に卒業しましたね。見習士官の発令が七月二十日です。

伊藤 じゃあ曹長は……。

海原 曹長は見習士官ですね。七月二十日、これが見習士官なんです。それから少尉になるのが、昭和十六年十一月一日です。

資材調達で朝鮮出張

飯尾 学校卒業して、しばらくは見習士官ですか。

海原 七月二十日に見習士官ですね。八、九、十、十一月と、それから主計少尉になるわけです。

伊藤 その時は連隊に所属しているわけですか。

海原 その時は師団司令部ですね。この新京の学校を卒業して帰って来てから、しばらくは連隊にいましたが、身分が師団司令部に変わるわけです。

伊藤 そうすると、もう連隊ではなくなる。

海原 なくなるんですね。師団司令部です。それまでは歩兵第四十三連隊の所属であって、勤務を師団司令部とする、そういうことです。それが今度見習士官になった時に変わるわけです。

伊藤 そうすると、人事や何かも師団司令部で、連隊とは関係なくなるわけですか。

海原 なくなります。全く関係がなくなります。宿舍も師団の将校官舎です。

伊藤 師団司令部には経理部というものが……。

海原 管理部というのもありまして、司令部の世話をすることがあります。

それから部では、経理部、兵器部、軍医部、そういうのがあります。それから本チャンの方では参謀部があります。そういうふうになっているわけです。

伊藤 その師団が展開している範囲というのは、先ほどの虎林を中心に……。

海原 はい、部隊は警備区域内に展開しています。

伊藤 連隊はいくつかのところに分けていますか。

海原 連隊も全部まとまっているのと、一部があちこちに出ているのと分かれています。十二連隊、四十三連隊、四十四連隊、この三つが歩兵の連隊です。その他に砲兵の連隊もありますし、工兵、騎兵の連隊もある。そういうような連隊で「師団」は編成されています。

それをあちこち配備してあるんですね。虎林駐屯地区と書いてあるところに。大体、一個中隊とか一個大隊が出ているわけです。

伊藤 この鉄道沿線ですね。

海原 それからずっと上の方にもありますね。これは非常に入り混じっています。一応、虎林駐屯地というのが十一師団の守備範囲ですね。それから、軍の直轄部隊も来ているわけです。

伊藤 軍というのは関東軍ですか。

海原 いや、第五軍です。師団の上に第五軍がある。その司令部は東安にあります。その上にまた、牡丹江の方に方面軍司令部があります。その上に関東軍があるわけです。軍の直轄部隊と言っても、関東軍直轄部隊と、第何方面軍の直轄部隊と、第五軍の直轄部隊とに分かれています。

伊藤 そうすると、かなり現地に行くと、いろいろなものが入り混じっているわけですか。

海原 そういふ軍の直轄部隊に対しては、「師団はこれを面倒をみる
こと」になっているんです。

伊藤 給与面や何かですか。

海原 そうです。後方面です。その時に「区所」という言葉を使いま
す。指揮下ではないんです。区所部隊。そういうふうに入り組んでい
るわけです。ご存知のように指揮系統というのは難しいですからね。
指揮下、令下にあるかどうかということですね。

伊藤 何で、そう入り組むんですかね。

海原 これは、何で、と言われても……。もうそういうふうに分かれ
ておつて、将棋の駒のように自由に組み合わせてやろうと思つてい
るんですね。カチツとしたものだけですと、動かしにくいんですね。で
すから、いろいろその時その時の理由はあるんでしょうが、非常に複
雑ですね。

伊藤 それで中尉になられたのはいつ頃ですか。先ほどのお話では、
海原中尉ということでしたが。

海原 中尉になったのは、昭和十八年九月十日です。それで大尉にな
つたのが、終戦の年の二十年八月二十日です。これはいわゆる「ポツ
ダム大尉」とは違ひまして、本当に期日が来てなつたんですけれどね。

伊藤 結構期間がありますね。

海原 あります。

伊藤 本土防衛のために帰国されたのが二十年四月ですから、十六年、
十七年、十八年、十九年と、かなり長期間をだいたい虎林のあたりに
いたんですか。

海原 そうですね。

伊藤 同じところですか。

海原 はい。それで虎林におつた間に、関東軍特別演習が起るわけ
です。今日はそのお話までいくと思つたけれど、とてもできそうにあ
りませんね。「朝鮮に行つておつた」と言いましたね。

伊藤 朝鮮に行つて来いという話ですね。それでわざわざ（地図の）
清津に印が付いているわけですね。そこまでお話を聞きましょうか。

海原 「関東演習」というのが発動されましたのは、昭和十六年の七月
です。「関東演習」もどの程度お話しするかですが、関東軍特別演習を
略して「関東演習」と言っています。これが大きくは、まず対ソ作戦を
やるのか、それとも南方作戦をやるのかということで大本営が分かれ
るわけです。意見が分かれますね。だから、その時の作戦課の人が書
いている本でも、どっちとも決まっていないうんです。その間に、いわ
ゆる独ソ開戦がありますね。それが絡んできますが、結局は一応、大
変な動員があつて、関東軍の総兵力が人員は七十万、馬が十四万頭、
飛行機が六百機という勢力に増えるわけです。簡単に言いますと、倍
くらいに増えたんですが、それだけの大動員をやつたのが「関東演習」
なんです。

それが、いま言いましたように、本当にソ連とやるのか、それとも
南に行くためのごまかし、陽動作戦か、意見が分かれるわけで
すが、どうもこれははっきりしません。しかし結論としましては、情
勢によつては対ソ作戦をやるんだという考え方が、当時の作戦課では
強かつたようですね。それが南方に行くわけです。そういうこと
で、「関東演習」が発動された時には、師団では対ソ作戦、ソ連に侵
入するんだという判断なんです。

そういう時に、みな大変でしょう。私は学校から帰つて来たばかり
で何もすることがない。新京から帰つたばかりですから。そうしたら

經理部長に呼ばれまして、「貴官はこれから朝鮮の清津に出張して、木舟六隻、偽装網その他、必要な作戦用資材を調達して来い」と。そういう命令です。

そこで私は、「学校では、関東軍の部隊が朝鮮に越境することは固く禁じられておりました」と言っただけです。そうしたら「そんなことはわかってる。部隊は戦争に行くんだ。お前は内務省におったから、それくらいのことではできるだろう。」「はい」です。作戦用資材と言つてもわからないですよ。それは各係に聞け」と言っただけです。

本来は作戦準備ができてはいるはずなんです。ノモンハンの翌年でしょう。ちゃんと作戦計画では、いつでも出動できるようになっているわけですから。それに、第五軍、特に十一師団というのがこの方面の最重要作戦を担当するわけですから、作戦準備はちゃんとできているはずなんです。それなのに、何で木舟六隻なんかを朝鮮に買いに行くのか。しかも、それも発動機付きだと言っただけです。それは、要するに司令部の要員がウスリー江を渡るためなんです。

それから先ほど馬の部隊と申しましたが、馬勒(ばろく)とか水勒(すいろく)とかありますね。戦用品は一組しかない。それでは作戦ができませんよ、それだけでは。だから麻のロープの代用品が必要ですね。そういうものがいっぱいあるわけです。とにかく、お前の判断で買って来いと言っただけです。

それから偽装網が、兵隊個人用とか、特定の車両用の物があります。後は何もありません。だから物を置いた時に、それを偽装する網もないんです。それで經理部の高級部員村中少佐が考え出して、「清津ではイワシ網の漁業が盛んだから、イワシ網の古い物があるだろう。それを買って来て、切り刻んで偽装網として配給しろ」と言っただけです。

よ。そこで私一人で、まだ見習士官の発令がありませんから軍曹の階級で、清津まで行くわけです。

伊藤 それは正式の命令をもらつて行くわけですか。

海原 もちろんそうです。私は、經理部長に「それは違法ですから、憲兵に捕まったら困るから、命令書をください」と言つて出してもらったんです。それをもらつて行つたんです。一人ですよ、現金をださず持つて。

伊藤 現金を持つて行くんですか。

海原 手付けを置いてきますからね。

伊藤 この二本「『戦史に学ぶ』」だと手付けを払つたと書いてありますね。どういうふうにしてお金を持つて行つたのかなと思つたんですが。

海原 それは凶囊に入れて行くんです。手付けですからね。百万円の買物をするのに、十万円ぐらい置いていけばいいわけですからね。

伊藤 それにしたつて、すごい札ではないですか。

海原 それよりも私は、そんなものを火事場泥棒みたいに、どさくさ紛れに買いに行かないといけない、というのがおかしいと思つたんです。でもしようがない。それで行つたんです。それから先は、その本に書いてありますけれど。

伊藤 部隊がウスリー江を渡る時は、舟で渡るわけですか。

海原 それがわからないんです。それは工兵の担当ですから。一応、作戦用の資材として工兵隊には渡河の舟はある。それでは足りないんです。おそらくその舟は、司令部の要員が渡るのに使う。湿地なんて歩いていけませんから、河を行こうとしたんでしょうね。だから発動機付きの木舟六隻を買って来い、ということになるわけです。

伊藤 それはどれぐらいの大きさの舟なんですか。

海原 それは長さ十五メートルぐらいですかね。

伊藤 そういう物は運搬するのが大変じゃないですか。

海原 湿地に置いておくんです。

伊藤 いえ、清津で買ってからです。

海原 それはまた後で話します。私は、だから二回出張したんです。最初に行った時は買い付けに行った。それから幸領と言っていますが、輸送手続きのために、工兵隊の将校と一緒に出かけました。行ってすぐに輸送までできませんから、野戦鉄道司令部に行って、配車の手続きをして、誰々が何日に乗ると。その時にまた幸領に行くわけです。だから二回行っているんです。その本には二回目を書いてありませんが、二回目は工兵隊の将校、大尉も一緒に行きました。

伊藤 それを書いてなかったものですか、あれっと思っただんです。どうやって運んだのかな、と。

海原 貨車をもらうのが、またなかなかうるさいんです。配当をもらうのが。

伊藤 配当をもらうというのは、どこでもらうんですか。

海原 それは羅津です。清津と羅津は近いですからね。羅津には朝鮮軍の師団司令部もありますから。

伊藤 関東軍の人が、朝鮮軍の管轄下に入って、その師団に頼んで……

海原 いや、師団には頼まないです。師団を通り越して頼む。師団に言うとうるさいから、師団に内緒ですよ。野鉄司令部と直接交渉をやる。

伊藤 野戦鉄道ですね。

海原 そうです。師団に行くとうるさくなりますからね。それは文句を言うでしょう。だから師団には内緒ですよ。そういう苦労があるわけです。たつた一人で出かけて、しかも本に書きませんでしたように、行ったら、最初は相手にされないでしょう。それでしようがない、名刺を刷ってもらったんです。「高知県事務官 海原治」と書いて、その高知県を消して、満州第四一〇部隊と書いて、主計軍曹と書いたでしょう。そうしたら相手は、これは召集だと思っただんです。あの辺では、地方事務官というの偉いんですよ。知事の次ぐらいですからね。ご苦労さんです、と言われる。組合長が会ってくれたんですけれどね。

伊藤 それは漁業組合に行っただんですか。

海原 そうです。漁業組合です。狙いはイワシ網ですから、イワシ網の古い物がありませんかということですからね。それから舟もそうでしょう。だから組合長です。

前の日に、着いてすぐ行ったら受付の女性が、「ちょっとお待ちください」と言っ、「誠に悪いのですが、いま大変ご多忙ですから、お目にかかれませんか」と言うんです。見たらわかりますよ。そんなにご多忙かどうか。こっちは下士官の「ごぼう剣」を吊っている奴が行っているんです。それが組合長に会わせると言っても、適当にあらわれることはわかっていますから、そこで宿屋はどこで泊まったらいいか聞いて、その宿屋に行っただけですね。その目の前に名刺印刷があっただんです。

伊藤 良かったですね。

海原 良かった、運が良かった、ラッキーでした。あつ、これだ、と思った。もし名刺がなければ、宿屋で紙をもらいまして、自分の手書きで書くつもりだったんです。何かこれは手形みたいな物を出さな

いと駄目なんですね（笑い）。そうしたらちようど宿屋の前に、名刺印刷と書いてありましたからね。その頃ですから、すぐはなかなかやってくれないんですよ。だから特別にと言って頼み込んだんですよ。それでやったんですね。

本当に、私がわざわざ行かなければ作戦ができない。偽装網がないというのは困りますね。つまり個人の鉄帽用と、ちよつとした物はあるんですが、後は何もないんですよ。ところがこういう湿地帯を横断して、ソ連に行くんでしょう。偽装網がなければ何もできませんからね。そんなことで苦労しました。

いかに作戦計画がずさんかということがしみじみわかったわけですから、防衛庁に行つてから、絶対に幕僚さん方の作文だけを信用することはしない、そうしたんですね。同じですから。今の防衛庁もそうじゃないですか。その一番の問題点は弾薬です。これは後でお話しますが、全然戦うことを考えていませんからね。

伊藤 今ですか。

海原 史学会としてひとつ取り上げてください。

伊藤 この当時は、弾薬は大事でしょう。

海原 その当時は、弾薬は大事ですよ。私は中隊長に「五分で弾がなくなりません。後はどうしますか」と質問をしたら、「そうか、五分で終わります。後はお前、その帯剣で突っ込むんだ」と言うんですよ。これが帝国陸軍の最後迄の姿です。大体、ソ連の戦車に、あんな「ごぼう剣」で突っ込んでどうなるんですか（笑い）。

伊藤 それは、機関銃隊はそうだということですか。

海原 機関銃の弾を連続して発射すれば、五分で終わりですから。

伊藤 じゃあ、なるべく発射しないようにということですか。

海原 ですから帝国陸軍は、旅順以来、弾には関心がありません。それは司馬遼太郎さんの本の随所に出てきます。あの人も戦車隊にいましたからよく知っているわけです。どうしてかわかりませんが、弾が一分間に何発出るかということ計算すれば、すぐわかるんですから。

伊藤 それは、要するに製造すれば簡単なことだということですか。

海原 いや、製造よりも、いかに日本人というものが物事を概念で処理するかですね。「一会戦分」という言葉を使うんです。「会戦」というのはどういうことですか「資料を配付する」。これはご参考までに。私は機関銃中隊の銃手ですから、何分間の射撃ができるか考えるわけです。ところが、日露戦争以来今日まで、トップは弾のことは全然考えないです。私は兵隊ですから、何分間の射撃ができるかということを考える。昔は「一会戦分」という言葉を使うんですが、その「一会戦分」が何発かという認識が、司令官にはないんです。

そこでそれを受け継ぎまして、昔のことは別として、池田（勇人）さんが総理の時に、林敬三統幕議長がまだご存命でした。私も出ていた国防会議懇談会ですが、池田さんが、「いま自衛隊はどのくらいの戦力があるんだ、何日戦えるか」と聞いた。そうしたら林さんが、「一カ月半は戦えます」と言うんです。全然弾のことを知らない。絶対に戦えない。それはなぜかと言うと、米軍からもらった弾薬の基準表の読み方がおかしいんです。間違っているんです。何発の弾で何分射撃できるかではないんです。それは私の本にも書いておきましたけれど、昔の陸軍は「会戦分」で処理した。その「一会戦分」というのは何発かということを考えない。それと同じで、今の自衛隊では、「戦闘備蓄」という言葉を使うわけですね。その「戦闘備蓄」というのは、第一線の部隊について言っている言葉ではないんです。アメリカからも

らった補給用の数字は、ワシントンでの補給の日量なんです。それをそのまま、日本の第一線に適用するものですから、おかしいんです。そういう言葉でもって物を見るんですね。「戦闘備蓄」とか、「補給日量」という言葉に人々は騙されているんです。その事が細かく書いてあります。

昔は、例えば「〇・八会戦分」だと計画されますが、一体、「一会戦分」の弾薬はどれだけか。重機関銃を見ますと、二三、〇〇〇発でしょう。一分間五〇〇発で撃つとすると、四十六分でしょう。弾は四十六分でなくなるんです。さて、「一会戦」というのは何日の戦いでしょう。それで日本は戦ったわけです。だから到る所で弾がなくなりますから、玉砕になるわけです。弾がなくなったから、玉砕、突撃すると言っているんですね。ここなんです、問題は。

私は戦力というのは、弾だ、弾だと言っているんです。ところが「一会戦分」という言葉を使うものですから、「会戦」というのは相当長い間の大きな戦争だと考えるでしょう、そこに問題があるんですね。

伊藤 四十六分なんです。

海原 四十六分で終わりですよ。それで一つの会戦が戦えますか。一日に五分撃つても、十日で終わりでしょう。どうして日本の軍人、参謀は弾を考えないのか。それがノモンハンの時にはつきり出ているんですから。ソ連の一分間の射撃の弾と、日本の会戦の数と比べてみたらとんでもないですね。ノモンハンの後で軍は研究委員会を作りました。その時に、近代戦の、いわゆる火力について間違っておったということがちゃんと書いてあるんです。

今の自衛隊がそうです。私は現職の時から弾だ、弾だと言っているんですけど、誰も聞かないですね。当分はそんなことはないから大

丈夫だとは言っているんですけどね。そもその基礎がおかしい。駄目ですね、これは。それで「弾がなければ、オモチャの兵隊と同じだ」と私は言ったんです。その「弾がなければ」というのが落ちまして、私が「自衛隊はオモチャの兵隊だ」と言ったと。そればかりが独り歩きするわけです。どうして前提条件を落とすのかと言うんですけれどね。たまたまお話が出たので申し上げましたが、これはまた改めて申し上げます。そういうことで、軍の作戦計画は全部単なる「希望の作文」であつたということですね。実体の認識がなかったのです。

伊藤 机上の空論ということですね。そういう参謀になっているような人たちも、実際の戦闘訓練を受けた人たちですね。

海原 そのはずですね。しかし、いかに言葉だけで遊んでいるかということは、あの有名な瀬島さん、今でも参謀と言われているでしょう。あの人の本にどう書いてあるか。自衛隊のやるべきことは、要するに敵に上陸をさせない、水際で敵を撃滅することだと。そんなことはできませんよ。そういうことを平気で書いておられる。だからあの世代は何ともならないですよ。旧軍の参謀であつた人は、頭がそういうふうにならなっています。その一番の代表が、「海上交通の安全の確保」だと言っているんです。旧海軍の関野英夫さんに言わせると、私なんかは大陸国の作戦を言っているものであつて、海洋国家の軍備を語っているのではないと言いますが、いったい「海洋国家」というのは何かと言うことです。先生は史学会で会長をしておられるでしょう。

伊藤 飾りですよ。

海原 いや、会長さん、しっかりしていただきたいんですがね。だから私は本当に、どうして皆さん方は実体を検討しないで、言葉だけで遊んでいるのか、それがわかりませんね。それがまたいいと思ってい

るんですから。「不可能を可能にする」「二と三を足して八〇にしろ」と言った昔の考えが、今でも生きているんだと言っているんです。後は野となれ山となれと、この頃はやけつぱちですけれどね。

伊藤 それももっと現実にはつきりしたのが、たぶん敗戦前夜のことになると思うんですが、時間がだいぶ過ぎましたので、この次は昭和二十年のことになりますね。

海原 本土防衛作戦です。

伊藤 本土防衛作戦ですね。この本でちよつと読ませていただきましたが、漫画みたいな話ですね。

海原 完全に漫画ですよ。それが漫画であるということなせ認識しないかと、私は言うんです。私は誰とでも、どこでも討論するからどうぞ、と言ってますが、いまだかつてないですよ。わたしはどこでも、テレビの前でも講演会でも対談をしましょう、と言っているんですけれどね。反応はありません。

伊藤 もう話しても負けるからと。

海原 それがかかわらないんですね。私は日本テレビで週二回、五年六カ月間お話をしていました、対談のお呼びはありませんでした。私の三代後で国防会議の事務局長になった伊藤圭一君がNHKの人に、「なぜ海原を呼ばないんだ」と聞いたんです。そうしたらNHKの担当者が「あれは駄目だ」と言うんですね。それは「海原が出て来ると、他の人が嫌がる」と言うんですよ（笑い）。ですから私はNHKには呼ばれませんね。

一回呼ばれましたのは、飛行機のことです。木村（秀政）さんたちと話した時だけです。ASW、対潜作戦の話です。六人ばかりで三時間ぐらいやりましたか。私の話は聴いたんですが、それで終わりです。

伊藤 討論にならないわけですね。

海原 ASWに関する討論には呼ばれないんです。どういうことかという勉強だけに私を呼んだんです。問題点はこういうことだと思う、と私は話したんですが、それで終わりですよ。

伊藤 わが方には、ぜひ引き続きおいでいただくようお願いします。
海原 皆さん方に、こんなお話をしているのか。私はこれが最後のご奉公だと思つていますが……。

伊藤 どうぞよろしくお願いいたします。

海原 どの程度の密度でお話ししたらいいか。

伊藤 今の密度で。

海原 そうすると、どのくらいかかるかわかりませんが。

伊藤 それはよく考えます。進行に応じます。

海原 月二回ならいいんですが、いろいろ進行中のももあるんですよ。だからどうしたらいいのか、もっと簡単にやれと言うのなら簡単にやりますが。

伊藤 取り敢えずは、今のペースでお願いします。

海原 今は大丈夫だと思えますけれどね。今日は内務省での新聞記者の話、明哲保身、任官の強訴、斎藤演説、それから軍隊のことにちよつと入りましたが、こんなことでよろしいんですか。

伊藤 結構でございます。

海原 今日の私の目論見では、ノモンハン事件をもっと詳しく申し上げようかと思つたんですが、お話しする時間がなかつたですね。

一言だけ言いますと「資料を配付する」、この最初の七行でおわかりになると思いますが、日本の方は距離を測りまして、鉄道沿線の基地から二〇〇〜二五〇キロというのを、一つの物差しにしているんで

すね〔略〕距離が伸びれば伸びるほど困難性が倍加し、特にその付近一帯が広漠不毛地である時は、大兵力の使用は不可能に近いものとしていた。』

伊藤 補給の、ですか。

海原 補給を含めた軍の行動ですね。これを測って、ノモンハンまではどれくらいだからと言ってやっているわけです。そんなものは全然問題にならなかったんです。日本の参謀は、先ほど言いましたように、詰り将棋で、ここはどうしたらいいだろうということしか考えないんです。それで距離を測って、自分の思うとおりに敵が来ると思っているんです。それが外れると一体どういうことになるか、というのがノモンハンなんです。これはお読みください。そういう画一的というか、白紙戦術が間違っていると思うんです。白紙ですから、実際の状況が何も無いわけですよ。だから自分の好き勝手に軍隊を動かして、相手の方も自分の思うとおりに来ると決めているんです。私は独り相撲をとるのが日本の参謀の特色だと言っているんです。もしそれが間違った時にどうなるか、ということ全然考えないんです。ということ、この次は本土作戦ですね。

伊藤 本土作戦の中心にお話をいただいて、またこの続きの質問を作ってお送りします。終わらなければならぬということではありませんので。今日はどうもありがとうございました。

〈以上〉

海原 治 オーラルヒストリー

第3回

開催日：1998年12月10日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

飯尾 潤(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

牧原 出(東北大学法学部助教授)

第3回 質問項目

今回は、先生の軍隊時代のご経験の続きと、復員されたころのお話です。それについてお話をいただくなかで、関連した事項についてご質問させていただきたいと思います。

- ① 前回、入営されて関東軍時代のお話を伺いました。主として満州時代のご経験が中心でしたが、満州時代の印象に残るお話で、思い出されたことがありましたらお願いします。
- ② 敗戦直前、本土防衛のため帰国されたときの資材調達にまつわるエピソードなどをご著書の中で述べておられます。非常に興味をひかれるお話ですので、ご著書と繰り返しになるかとは思いますが、改めて順を追ってお聞かせ下さい。
- ③ 軍隊時代、印象に残る人物や、その後も交流が続いている人物はいますか。
- ④ 略歴によると、先生は昭和 20 年 9 月に高知県渉外課長になっておられます。翌 21 年 8 月に警視庁に移られますが、復員当時の状況と、高知県の課長になられた事情などをお聞かせ下さい。また、敗戦直後の国内状況等、印象に残っていることをお願いします。
- ⑤ 昭和 21 年 8 月に警視庁警視となられます。内務省は地方局系と警察の大きく二つに分かれています。警察に行くことになった経緯はどのようなことでしょうか。先生のご希望があったのでしょうか。また、戻られたころの内務省、警視庁の様子はどのようなものだったのでしょうか。

内務班の初年兵教育を正す

海原 これまで二回終わつたんですが、こんな調子でいいですか。

伊藤 二十回でも三十回でもやりませんか（笑い）。もう、お嫌になつたらやめてくださつても結構ですが。

海原 いや、嫌にはならないですよ。この前の「速記録」を女房に見せたんです。そうしたら、「こんな昔話をして、どうなんでしょう」と言っていました。

伊藤 奥さんも初めてお聞きになつたようなことがあるんじゃないですか。そうでもないですか。

海原 ちょっとありますね。

伊藤 面白い、と言いませんでしたか。

海原 今は速記はとっていないでしょう（笑い）。実は女房との因縁も満州なんです。

伊藤 それは後で伺います（笑い）。

海原 ですから、いろいろな曰く因縁がありましたね。

伊藤 今日のご質問の最初は、関東軍時代の言い残しなんです。

海原 それは二つぐらいあります。

伊藤 いや、三つじゃないですか（笑い）。プライベートのことも触れてください。

海原 いや、それは私の問題ですからね。

伊藤 でも、せっかく言い始めたことを引つ込められるというの……

……

海原 それは、速記をしないなら言いますけれど。

伊藤 いや、速記したつていいじゃないですか。

飯尾 プライベートとおっしゃつても、時代の鏡でございますから。

海原 活字になると、それこそ女房に怒られますから。

飯尾 活字になる時は、ちゃんといたしますから。

海原 それなら始まる前の雑談ということで……。師団の経理部長は四人ぐらい替わつたんですが、その一人からある日写真をもつたんですよ。何ですか、と言つたら、「いや、お前の女房の候補だ」と言うんですね。その写真を机の上に置いておいたんです。私は経理勤務班の隊長で、独身宿舍に入っていますからね。そうしたら経理勤務班の召集の人がいるでしょう。二人ばかり有名な者がいて、一人は田中均一さんと満州国の官吏をやつていた。もう一人は福永満八さんと言つて建築設計の方の権威です。この二人が部屋に遊びに来まして、「この写真は何だ」と言うから、「いや実は、これは女房にどうだと言われて経理部長からもつたんだ」と言いましたら、「おやめなさい」と言うんですよ。「美人じゃないし、隊長には、私たちが先に復員するから、三國一の花嫁を見つけます」と言うんですよ。「ああそうか、ありがたい、じゃあそうしてくれ」と言つて、写真を置いておいたんですね。

それから後は人情話になるわけですが、だんだん見ていると、醜女・不美人でもないんですね。あまり愛想は良くないんですが。どうしてこれがそんなに良くないのかな、と思つたりしたんですね（笑い）。だんだん情が移つて来るんです。そして、その間は省略しますが（笑い）、婚約するわけです。

飯尾 お会いになる前ですか。

海原 その後です。それは本人はよく知らないですよ。それは仕事が絡むんですが、父親は哈爾濱（ハルビン）にいたんです。哈爾濱の日満製粉の専務をやっていたわけですよ。

伊藤 奥さんになられた方のお父さんですね。

海原 ええ。経理部長で来た人が、新京の倉庫長時代に父親と付き合っているんですね。女房の親父というのは、俳句の方で満州では一流だったんです。日本では二流ですが。飯田蛇笏さんの門弟で、「韃靼」（ダツタン）という句誌をやっていました。それでいろいろな付き合いです。その親父が、第十一師団の経理部長になった人に、「部下が多いだろうから、適当な人を頼む」ということで写真を預けた。そういう経緯なんですよ。

伊藤 実際に結婚なさったのはだいぶ後なんですか。

海原 もちろん帰って来てからです。

伊藤 戦争が終わってからですか。

海原 そうです。

伊藤 では、その時にまた伺います。

海原 それは長いんですが、脚色すれば小説になるんですけれどね。

その話の方が面白いかもしれませんね。

伊藤 もしよろしかったら、お続けください。

海原 いや、速記になるから困るんです。

伊藤 奥さんに見せなければいいですよ。

海原 いやいや、もう汗が出てきました。そんなことがあるんですが、軍隊時代の収獲というのは女房で、それは高知で終戦処理をやっていた時の話になるんです。

私が召集解除になる前ですが、「彼女は」母親と二人で引き揚げて来たんです。「彼女の」親父は向こうに残っているんです。協和会の幹部をやっていましたからね。しかも女房と女房の母親の二人が帰れたのは、会社の社員で非常に心配してくれた人がいまして、最後の哈爾濱仕立ての列車の切符を持って来たんです。親父は反対だったらいいですね。自分が残るんだから、娘も女房も残るべきだと思ってい

るわけですが、部下が、「今後どうなるかわからないから、とにかく奥さんと娘さんは内地に帰しなさい」ということで、切符まで買って来たんですね。なかなか難しかったんですよ。それで女房と母親とは列車に乗ったわけです。その列車は、終戦を奉天あたりで聞いているんです。ところが、その列車は哈爾濱仕立ての国際列車なものですから、朝鮮の京城までずっと来たんですね。新京の関東軍司令部の将校の家族の特別列車は、朝鮮との国境で押さえられちゃった。それより後の列車なんです。しかし「彼女とその母親の乗った列車は」民間の国際列車だということで、ずっとそのまま京城まで来たんです。京城に女房の姉が嫁いでいたので、そこに行つたんです。終戦の知らせは、後から考えると、奉天あたりで聞いているんですね。民間列車はずっと来た。ところが、その前に出ている軍の列車は押さえられた、ということなんです。

それで、京城に落ち着いて、それからいわゆる閩船で日本に引き揚げて来たんです。あの頃は闇ですよ。政府の引き揚げ船なんか待つていたら全然駄目です。だから小さい船で出航するのがあって、金を出し合つて雇つて帰つて来るわけですね。

伊藤 どこから帰つて来るんですか。

海原 京城からずっと釜山まで来るんです。まだそこは動いています

からね。それで引き揚げて来たんです。

伊藤 高知の部隊時代「注・師団司令部の經理勤務班隊長」だというお話でしたが、高知に引き揚げてこられたんですか。

海原 それがまた、小説にすると面白いでしょう。どこに帰って来たかという、実家の親戚が香川県の観音寺にいます。高辻というのが実家の親戚ですが、そこに落ち着いたんですね。そこに女房が帰って来ていたんです。そのことは「私は」全然知りませんよ。私は、たまたま高知県休職地方事務官であつたので、私の高等学校の後輩の根本君（亡くなりましたが）と、料理屋の女将と三人で、根本君の官舎で晩飯を食べていた。その時に女房の話になるわけです。「どうしているか」と話していた時に、玄関に入つて来たのです。

これは言い忘れましたが、終戦の年の天長節の日に哈爾濱神社で式を挙げようということまで約束していたんです。私が哈爾濱に行きましたのは、満人の苦力、干草刈り入れの苦力を集めるためで、その連絡のために行つたんです。その時に、四月の天長節の日に哈爾濱神社で式を挙げよう、という話をして帰った。

それで虎林に着く。そうしたら、そこに当番が馬を持って迎えに来ているわけです。列車が着いたのは真夜中ですが、「隊長殿、師団は動員です」と言うんですね。大騒ぎになっていたんです。すぐ司令部に来てくれということになって、司令部に行つて、その晩は部隊の移動計画を作るのに徹夜ですよ。

伊藤 その移動は、本土へ、ということですか。ちゃんと話がつながりますね。それじゃあ「婚約は」キャンセルになつちやつたわけですね。

海原 キャンセルにしないといけないでしょう。そして、私は参謀長

と先行します。私たちの師団が四国に移るについて、参謀長に各部から一人ずつ付いて行くわけです。それで私は命令されて、参謀長の随行に入るわけです。牡丹江で列車を乗り換えるんですが、私は牡丹江から哈爾濱に電話をしまして、親父を電話に呼びだして、「これから私たちの部隊は移動する。だから当然、結婚の話はご破算だ。もし結婚させたいなら、八月頃までにお嬢さんを内地に帰しなさい」と言つたんです。方法はいろいろあるだろうと。そして俳人ですから、「私はどこに行くかわからないけれど、一応は日本に帰る、だから餞の俳句を詠みなさい」と言いました（笑い）。そうしたら何か言っていました。

そんなことがあつて帰つて来たんです。そんなことを高知で、料理屋の女将と、私の後輩の根本君に話していた。「あれもどうなったか、生きてるか死んでいるかわからない」という話をしている時に、これが小説なんです。玄関をガラツと開けて、私の女房とお袋が入つて来た。その前に、二人は私の部隊に行つたんですね。海原大尉のところ。私は經理勤務班の隊長をしていましたから、一宮（いづく）というところの農業会の倉庫が私の部隊の本部なんです。そこに訪ねて行つたんですね。

それについては、たまたま丸亀に行く部下もいましたから、観音寺の高辻健二郎という人のところに知り合いが来ている、との電報が入つたので、調べて来てくれと頼んだのです。誰がおるかよくはわかりませんよ。電文が乱れていますから。とにかく私の知り合いが満州から引き揚げて来ている。その将校が行つてみたら、今の女房と母親なんです。たまたまその男も哈爾濱に出張した時に、その家でご馳走になつたりしているんです。「一緒に行きましょう」と言つて二人

を連れて来た。私の部隊本部に行ったら、隊長はいま県の課長の宿舎で会食しているというので、部隊のトラックでそこに来たわけですね。ちようど、「あれはどうしたかわからん、生きてるか死んだかわからない」という話をしている時に、「こんばんは」と玄関に入ってきたんです。これは芝居みたいでしょう（笑い）。こつちもびつくりしましたね。その晩は根本君の官舎の二階が空いていますから、そこに泊めたんですね。

翌日になって改めて、こんな事になったからということ、お袋が「あの話をご破算だ。もう一切何もなくなつた。無一文の引揚者だ。だからあの話はもうなかつたことに……」と言つたのです。これが向こうの切り札だつたんでしような（笑い）。それに対して、「ああそうですよね」と言えば良かったんですよ。ところがそう言われると、「いや、そんなことは……」ということになるでしょう。

「もう一切無一文で引き揚げて来た。こうなつたら、あの話をご破算ということに」と言うのです。これが、一切を決めました。こういう、いろいろな話があるんです。ですから人間の一生というのはわからないと思ひます。

伊藤 それで結局、いつどこで結婚されたんですか。

海原 それはしばらく根本君のところに預けておいて、高知で部隊が解散することになりますね。私の部下に、どこかこの二人を収容する場所を見つけてくれと頼みますと、一宮（いっく）というところに大きな神社があり、そのそばの農家の納屋の二階を借りまして、そこに二人を収容したということです。それが運の尽きでしたね。これは脚色すると小説になるでしょう（笑い）。

伊藤 では高知でご結婚なさつたんですか。

海原 はい、高知で結婚しましたが、結婚式は無いです。

伊藤 それはまた後で根ほり葉ほり聞きますから。

海原 いや、その時に、「そうですね、あの話はないことにしましょう」と言えば良かったんですよ。それを、そう言われた時に、「いやいや、まあそんなことは」となっちゃいましたから。余計なことを言つたものだ、とずっと後悔ですね。もう何十年も一緒ですから、しょうがないですけれどね。そういうことでございます。

伊藤 はい、わかりました。

海原 さて今日はこの前の続きですが、何か言い残したことと言われましたね。二つ申し上げたいと思うんです。一つは、初年兵時代の内務班と言いますが、隊舎の中の教育の問題です。これは昔、『真空地帯』という小説がありましたね。割に有名になりましたが、兵隊の苦勞の話です。この『真空地帯』的なこと、そう言われるようなことが実は内務班にあるわけです。その話と、もう一つは、私がこの前、いかに軍の中央が作戦計画で現地を知らなかつたかということを示し上げましたが、それを裏書きする話がありますので、その二つを申し上げたいと思ひます。

最初は、軍隊の内務班です。内務班というのは兵舎の中における教育で、これは主として下士官、伍長とか軍曹の担当になるわけです。どんな訓練があつたかという、ピンタだという話がありますね。要するに私的制裁で、殴るわけですね。時の村田孝生という第四十三連隊の連隊長は、そういう私的制裁をしてはいけないと唱導し、部隊長訓辞の貼り紙に大きく「私的制裁の禁止」と書いてあつた。ところが、その貼り紙の下で私的制裁が行なわれるんですね。これを私は体験しましたので、まずその話をします。

幹部候補生については、部隊でも幹部候補生隊というのができましたが、中隊でも幹部候補生班というのができました。それで六、七人のひとかたまりになって、教育をされるわけです。その幹部候補生の教育の時です。まだ真冬です、二月末から三月初め頃です。防寒帽を被った時に敬礼をしますね。その時の指先はどこに置くかということ。班長が質問したのです。普通の兵隊の帽子、戦闘帽を被っている時には、庇のつけ根から指二本のところに指先を置きます。防寒帽を被っていると、庇はないですね。耳を覆うものがついていますからね。適当に答えれば良かった。ところが、陶久君という真面目な男が、「わかりません」と答えました。その途端です。その班長、軍曹が「なに！ 防寒帽を被った時の敬礼の仕方で指先をどこに置くか、それがわからないようで、お前たちはそれでも幹部候補生か」と言うわけです。そう言った途端に、バーンと来たんですな。これは一発や二発殴られることは当たり前ですから、何とも思っていない。そうしたら、その班長が、二発、三発殴った上、スリッパ——上靴と言っていました——を取ったんです。上靴と言っても、普通の兵隊靴の上を切ったものなんです。だから靴底には金具が付いているんです。それで殴り始めた。

私は、これはあまりだと思いましたから、「班長！」と言って飛び出して、「それはやめてください」と言ったんです。そうしたら「なに！」と言って、私の顔をじっと見たんです。しかし、私が中隊長よりも宮中席次は一階級上だという話はもう伝わっているでしょう。従七位と、この前申し上げましたが、中隊長よりも一階級上だという話があるものだから、「なに！」と言ったとき、私にはビンタが来ませんでした。それでやめました。ですから、その陶久君は上靴で数発や

られたんですね。いま申しましたように、革靴でしょう。底に金具が張つてある。それも当たったかもしれないね。顔がバーツと膨れちゃいました。

その教育はそれで終わりましたが、私は収まりません。けしからんと思つた。連隊長は私的制裁の禁止と書いてある。防寒帽を被った時に敬礼の指先がどこにあるか、それが答えられないからといって何だ、と怒ったわけです（笑い）。それでどうしたか。中隊の人事係に准尉さんがいて、川端さんと言いましたが、その人のところに行きまして、「実はこういうことがありました。大体、連隊長は無意味なビンタを取ってはいかんと訓示しておられる。その下でこういうことがあつた、放つておけない。私は連隊長に直訴します」と言つたんです。これも従七位だからですよ（笑い）。そうしたら人事係の川端さんが、「いや、それはいかん。そういうことをするもんじゃない」と言う。「いや、いいんです。こんなことは許せない。およそ天皇陛下の軍隊でこういうことが行なわれているのは、そのこと自体許されないと。私は幹部候補生を免じられてもいいから、とにかく直訴します」と言つたんですね。そうしたら最後に切り札で准尉が言いましたのは、「もしそれをやったら、中隊長も当然責任を問われるぞ」ということでした。それから口説くわけです。「今後いっさい、そういう無意味な制裁はやらせないということを、俺が約束する。それで勘弁しろ」と言うわけです。そこまで言われるなら、「ああそうですか」ということで手を打ったわけです（笑い）。

しかし、そういうことがあるわけですね。その殴られた男は顔がゴムまりのように膨れましたよ。それから四、五日治りませんでしたね。手だつたらいいんですけど、編上靴の靴底で殴るんですからね。

それからこのビンタに関しては、初年兵がようやく寝られるということで、就寝の点呼の後で寝ますね。しばらくすると「初年兵は全員起床」と古参兵が言う。何だと思ったら、ペチカに入れるための石炭のバケツ——炭バケツと言っていました——と、燃え滓を入れるバケツとの二つがペチカの前に置いてあるんですね。それを不寝番が整理するんですが、炭殻を入れるバケツに煙草が二本入っていたんです。

「これは初年兵がやった」と言うんですね。初年兵がそんなことをするはずがないでしょう。これは古参兵がやったに決まっています。それなのに「誰がやったか、潔く出ろ。出ないと制裁を加える」と言うんですね。初年兵がやるはずがありませんよ。消灯ラッパが鳴って点呼が済んだら寝るだけですからね。だから誰も出ません。そうしたら「誰も出ないな。よし、全員向き合え」と言っ、初年兵同士を向かい合わせる。「お互いに相手のビンタを取れ」と言う。こちらは訳がわかりませんけれど、そう言われたらしようがない。それでこうやる「向かい合った相手にビンタをする」でしょう。形だけでやっているとお前たちの気合いが入っておらん。そんなものはビンタじゃない。さすっているだけだ。殴れ！」と言うんです。しようがない、そういうことが行なわれた。

そうしますと、殴っている音というのは、上が吹き抜けて続いているわけですから、下士官室に聞こえるわけですよ。それから週番の将校もいる。当然何が起こっているか聞こえるはずですね。本来ならそこに来て、「何だ」と言っ止めなくてはいいかん。それがいわゆる「真空地帯」なんですね。そういうことで「鍛え」と称するしごきですね。これは、『軍人勅諭』が悪いんですよ。あの『軍人勅諭』の中に、「およそ上官の命は朕の命令と心得よ」と書いてあるでしょう。だから一

日でも早く上になった者は天皇陛下の名代で殴るわけです。そういうことがありました。これがいわゆる「真空地帯」としていろいろ書かれた一端ですね。しかも、それは上が知っいても抑えない。これはやはり一種の訓練だと思っっているんでしょうね。そういうことで仲間同士で鍛えられていいんだ、という認識があっただんでしような。そのことを、この前申し忘れました。

もう一つは湿地のことをこの前だいぶお話ししましたが、その湿地訓練ですね。それだけの重要な任務を持つている部隊に何も戦備がなかった。私たち第十一師団の上の、第五軍の参謀の稲田さんという人が書いています。

区処と指揮

伊藤 第五軍というのは第十一師団の上にあるんですね。

海原 上です。すぐ上にあるんです。その上に牡丹江の方面軍があります。その上が関東軍です。

伊藤 関東軍まで、まだ大分あるんですね。

海原 師団は歩兵連隊を三つ持っていますね。師団が、三つの連隊の上にあつて、その上に軍があるんです。私たちの場合は第五軍です。その上に牡丹江の方面軍があつて、その上に関東軍があるんです。だから軍参謀と言っても、いろいろあるわけです。そして日本の大本営があるでしょう。多くの階層に分かれてるんです。

伊藤 稲田さんというのは、何というお名前ですか。

海原 名前ですか「調べる」。稲田正純。有名な方です。ご存知ですか。

伊藤 インタビューをやったことがあります。

海原 いつ、どこですか。

伊藤 もう大分前ですが。

海原 有名な方です。稲田正純少将です。この方が書いています。この方は第五軍の参謀副長だった。この方の書かれたことを読みますと、「七月十日〔関特演〕が発令された直後ですが、関東軍司令部に顔を出すと、作戦参謀から『何をボヤボヤしているのですか』とどやされた。今にも飛び出さんばかりの勢いである。数日前、第五軍正面を視察したところ、大湿地を突破すべき数個師団（その中心の一つが第十一師団ですね）のために、わずか一条（一本）しか道路がない。その旨を述べたところが、参謀は『なあに、タナボタですよ。ソ連の抵抗などは問題でない。とにかく行けばよいのですよ』と一笑に付して、真面目に言い分を聞こうとしない」

と書いてあるんです。この調子なんですよ。これは稲田さんがちゃんと書いているんですからね。関東軍参謀がそうでしょう。そうなるのと、大本営の参謀はもつと輪をかけたことになりますね。

「関東軍の作戦計画は可能と希望とがアンバランスである。東綏正面の急襲突進も、イマン正面の湿地の克服もその実行は極めてあやしいものであって、後者の湿地の突破作戦のためには、初めから考え直す必要があった。到るところでこの調子で、計画は地に足がついていなかった」

と書いてあります。これが問題なんです。第五軍の参謀副長が、

「駄目だ、やれと言ったって道路も一本しかないじゃないか。東洋一の大湿地帯だ、どうするんだ」と言っているのに、どうしてそれが通らないんですか。わからない。関東軍の参謀は机の上で、いわゆる白紙戦術でやっている。そんなことは簡単ですよ。この間お見せしたように、夜中の間に湿地を突破して、明け方にはソ連の陣地にまでたどり着ける、そう思っているわけです。

これを強調しますのは、全部これだからです。今日お話しします本土作戦もそうです。その前にノモンハンがあったでしょう。ノモンハンであれだけやられているんですから。それを言葉の上では一応反省しているんですから。「今まで火力のことを考えなかったのはまずかった」と言っているんですから、直せばいいでしょう。直さない。これは会長さん「伊藤氏」に伺うんですが、どういうわけでしょう。

伊藤 大本営参謀の人に聞いてみないとわからないですね。元大本営参謀という方もいらつしやるわけですから。

海原 私も知っていますけれどね。私が軍隊に行った時には「参謀」というのは偉いと思いましたが。参謀肩章といって、立派ですよ。背広を着ておられる今の姿と、昔の制服を着て参謀肩章を付けているのでは違いますよ。参謀肩章を付けていたら、その方はもう寄り付きがたい。いい体格をしていますしね。

伊藤 第十一師団だって、もちろん参謀肩章を付けていた人はいるわけでしょう。

海原 参謀長のほかに参謀が三人いるんです。作戦参謀、情報参謀、後方参謀。それに参謀長を入れますと四人ですね。

伊藤 先生のような部員の方は、その参謀の下にいるわけですか。

海原 私は経理部で、経理部長がトップなんです。経理部長は師団長

の直属です。参謀部というのがありますね。それから経理部がある。

軍医部、兵器部という部があるわけです。ですからアメリカの兵制で言いますと、第一部、第二部、第三部、第四部とありますね、あれと同じです。全部上にぶら下がっている。しかし、参謀というのは全部やりますから、全部ホンチャン（正規将校）ですね。それが三人いるわけです。作戦参謀、情報参謀、後方参謀。

伊藤 経理部はどうなっているんですか。

海原 経理部長は、ひとつ横なんですね。立場では師団長の下に、参謀長、経理部長、兵器部長と並ぶわけです。病院に行きますと、病院長の下に外科部長とか内科部長とかがいますが、あれと同じです。

伊藤 参謀部と経理部との関係は？

海原 横です。全部師団長にぶら下がっているわけです。

伊藤 そうすると、後方参謀なんていうのは具体的なことをやる場合は、経理部と交渉しなければならぬわけですね。

海原 いろいろやらなければならぬ。例えば、その辺は人の関係になつてきますが、ある秋季演習がありました。それまでは師団演習は三日から五日かかりますから、その間に補足糧秣と言いまして、いろいろな野菜を積むわけです。兵隊は携帯糧秣だけでしよう。これは乾パンとか、せいぜい梅干を持っていただけですね。ですから補足糧秣というものをあちこちに積むわけです。ある年の秋季演習の時に、高級参謀の染矢半治さんという方（この方は無事に帰つて来られた。いい方ですが、亡くなられました）が、「海原、今度は実戦を想定した演習をやる。だから毎年やる補足糧秣は積まない。兵隊は携帯糧秣だけでやる」と言うわけです。「それはいろいろと問題もありますが」と言つても、「いや、そういう演習も必要だ」とおっしゃいます。こ

れは高級参謀ですから「わかりました」と言つて、その演習には野菜を用意しなかつた。

そうしたら演習が終わつてから、別のことで参謀長のところに書類を持って行きましたら、書類はそちのけです。サツとサインした後で、「海原中尉、お前、野菜を食べないと血液はどうなる」と言うんです。「参謀長がおっしゃるのはアルカリ性か酸性かということですか」「そうだ」「それは酸性になります」「酸性になったらどうなるんだ」と言うんですね。

これは演習の間に軍医部長から聞いているんですね。わかりますよ。ネタもとがわかります。「今度は補足糧秣は積みませんでした、野菜は用意していません。野菜を食べないと人間の血は酸性になります。

しかし今度の演習については染矢高級参謀が補足糧秣は一切積まない、実戦相当でやるとおっしゃいましたので積みませんでした。私たちはそのご指示に従つただけです」「うん」。それで終わりです。自分の直接の一の子分がそう言っているんですからね。染矢さんは隣の部屋におるんですよ。参謀長のところは割に狭いんですよ。それで仮設の建物ですから、ドア越しに聞こえますよ。そこに三人座っている。染矢さんはまた一番近いんですよ。だから大きな声で「染矢参謀がそうおっしゃいました」と言つたんです。「なにっ!」と。そういう関係です。軍の中の関係というのはなかなか外の人にはわかりにくいですね。区処と指揮がわからない。

伊藤 今の話は区処なんですか。

海原 染矢参謀は区処ですね。私に対する命令は経理部長しかできないんです。その例を申し上げますと、ある年の冬です。冬季演習がありました。師団の演習の前に連隊でやるわけです。連隊では、連隊演

習の前に大隊の演習をやりませう。そういうことで逐次師団演習まで持
って行くんです。ある連隊の冬季演習の時に、凍傷患者がいっぱい出
たんです。立派な防寒靴を履いているんですが、凍傷患者が出た。そ
れについて、私は他のことで参謀長のところに決裁をもらいに行きま
したら、書類はどうでもいいんです。「海原、お前はこれから新しい
新品の防寒靴を履いて、雪の中を歩いて、何時間ごとの状況を調べて
持って来い。三時間後にはどうだ、六時間後にはどうだ」と。という
のは、要するに凍傷患者が出たからですね。その原因は靴が良くなか
ったからだ。防寒対策が十分でなかった。それは靴が悪いんだ、とい
うことですね。「海原中尉は今から新品の靴を履いて、何時間ごと
にどういうふうに湿度が中に染み込むか、自分で体験して調べて持っ
て来い」と言うんです。私が「ご意図はよくわかりました。私はその担
当ではございません。私は一般の食糧とか物品とかを担当しています。
衣料の面の担当は佐々木中尉であります。参謀長がそういうご意図で
あることは、これから帰って経理部長に報告いたします。そうしたら
経理部長が然るべく処置されると思います」と言ったら、黙っちゃう
んですよ。そういうものなんです。だから参謀長といえども直接命令
はできないんです。私は経理部長の部下ですからね。

伊藤 今のお話の最初に、決裁書類をもらいに行ったということだ
が……。

海原 回覧するものですね。

飯尾 相議（あいぎ）ですね。

海原 相議です。それは何でも最後には参謀に行くわけです。全部に
関係がありますから。だから書類は関係ないんですが、私の顔を見た
途端に、よしいつに言っつてやれ、ということでしょうね。だから普

段から睨まれていたんですね（笑い）。そういうことですから、なか
なか区処と指揮というのは難しいんです。「私は経理部長の部下でご
ざいますから、参謀長がそういうご意図であることはすぐ経理部長に
申し上げます」と言っつたんです。それに対しては批判できないでし
う、「うん」と言うわけです。岡田さんという人でしたが、この人
は工兵連隊長から参謀長になった人なんです。そして参謀長時代に少
将になりました。それだけ頭のいい人で、戦後も無事におられました
ね。その岡田参謀長は工兵連隊長時代は非常に短気な人で、将校をよ
くぶん殴つたという。ひどい時には椅子でぶん殴つたという話も聞い
ているんです。そういうことを聞いていますから、こつちも口ごたえ
をするのは勇気がいるんですけれどね。そこは先ほど言いました宮中
席次がありますからね。

飯尾 やはり最初に直訴して地方事務官になられたのは大きかったん
ですね。

海原 それはこの前も申しましたが、体験してみないとわからないで
すよ。軍隊の中があんなふうになっているとは夢にも思いませんでし
た。

伊藤 入る前は、ですね。

海原 ええ。それからこの前話しましたが、湿地の干拓計画。経理部
長は賛成したでしょう。経理部長に、「参謀長に話してください」と
言っつたら、「お前行って来い」と言われた（笑い）。しかし、そうい
うことがいろいろありますね。

伊藤 それは官僚組織であれば……。

海原 それは官僚組織によく似ています。それはずっと後のことにな
るんですが、私が防衛庁で、ありがたくない「天皇」というあだ名を

いただきましたが、そういうことに原因があるんでしようね。というのは、私は、絶対に判を捺しませんからね。それは昔の軍の経験がありますからね。ですから、やかましいんです。

伊藤 「これはどうだ」とやるんですね。

海原 そんな言い方はしませんよ（笑い）。「これはどうなっているんですか」と言うんですよ。いま伊藤さんがおっしゃったように、「これはどうだ」というのは、参謀が言うことで、「これはどうなっているんですか」と極めて丁寧に聞くんですよ。

伊藤 その方が怖いですね（笑い）。

海原 慇懃無礼ですね。でもそれが、一般的に言つて、日本のいろいろなところの指導原理になつていような気がしますね。はつきり物を言えはいいんですが、言わないんですよ。しかも言わないで、おいて、後で実はこうだと言うんですね。それは一番いけないですよ。事前に言え、と私はずいぶん皆に訴えたんですが、やりません。これは日本という島国に育つた生活環境のせいですかね。和辻哲郎さんの有名な『風土』という本がありますね。あそこに書いてあることは本当に立派だと思いますね。あの風土ですね。これは余計なことでしたが。

本土移駐

決戦準備

伊藤 それで、今のお話の続きで、いよいよ本土に移駐されるということなんです、その先遣部隊としておいでになるわけですね。

海原 先遣部隊といいますか、打ち合わせですね。

伊藤 その時には参謀長がいて。

海原 それに各部から代表が一人ずつ付くわけです。

伊藤 そうすると先生は経理部から。

海原 経理部の代表ということになります。

伊藤 経理部の位置というのはどうだったんですか。経理部長の下はどうなっているんでしょう。

海原 経理部長の下に科があるんです。庶務科、衣糧科（衣類と糧秣です）、経営科（建築のほうです）、主計科（これはお金の方です）、そういう科があるわけです。

伊藤 科があれば科長がいるわけですね。

海原 科長は通称です。あるのは官制名だけです。例えば村中という人は高級部員少佐。この人が事実上牛耳っていましたが、村中少佐が衣糧の科長ですが、衣糧科長という言葉は使いません。経理部の部員、村中少佐なんです。しかし担当は、衣糧科とか経営科とか主計科とか庶務科に分かれているわけです。

伊藤 でも長がないわけですか。

海原 いません。だからアメリカ式に言えばスタッフですね。

飯尾 みんながスタッフなんです。これも経理部長に付いておられるわけですね。

伊藤 経理部長もそうなんですか。

海原 経理部は部なんです。その部長はいますが、部長の下はないです。

伊藤 あとは区分けだけですか。

海原 そうです。そういう組織なんです。

伊藤 そうすると序列はあるわけですね。

海原 序列は、部長とか科長ではないんですが、任命の階級に応じてです。

伊藤 そうすると海原先生の場合は？

海原 衣糧科の先任部員となりますね。衣糧科長は村中少佐。

伊藤 それは科長とは言わないわけですね。

海原 言わない。通称科長と言うわけです。

伊藤 通称科長の次が先任なんですね。

海原 そういう発令人事なんです。全部、部員です。だから海軍とは違うかもしれません。

飯尾 官名があつても職名がない方式なんですね。

海原 そういうことです。ですからわかりにくいですよ。

伊藤 そうすると、参謀長と各部からの代表が打ち合わせのために日本に來たわけですね。

海原 各部から一人。経理部から一人、軍医部、兵器部、もちろん参謀部からも行きますよ。参謀長の随行で行くんです。

伊藤 これはどういう経路で來られたんですか。

海原 普通の経路で、鉄道を使って釜山まで來ます。釜山からまた連絡船で來ましたね。それで日本の国内線です。特殊な経路ではありません。後藤田君が台湾軍の司令部から東京に連絡に行った時には、あそこは離れていますから、軍用機で行ったのです。この話はお聞きになりましたか。飛行機の選択を、予定していたものを変更させたんです。それで助かったんです。私たちの場合は、そういうことはないんです。利用するのは一般の交通機関です。それで参謀長以下五、六名が一緒に來たんです。それについては、野戦鉄道司令部が便宜を圖つ

てくれますから、座席は確保してくれますね。それで大阪の中部軍司令部、これは大阪城内にありましたが、そこに行くわけです。

伊藤 まず大阪に行くわけですか。

海原 はい。そこで軍の作戦計画を見せてもらうんです。本土防衛作戦計画です。そこで初めて、自分たちがどこに行くかわかるんです。それは大阪に行くまでわからない。部隊は日本本土、四国に移駐するというだけです。まあ、参謀長あたりは聞いていたんでしようが、

これについても話があるんです。私たちが命拾いをしましたのは、第十一師団の客観的な価値は、精銳関東軍と言われていましたが、その精銳関東軍の中でも最も精銳と言われていたんです。最精銳の部隊であると言われていた。私が聞いた時には、これは沖繩に行くはずだったんですが、師団の参謀の古川さんはレイテに行くと言っていた。それは大本営の作戦会議で、第十一師団を南に持つて行くということで、レイテに行くということで、大体話が決まりそうだった。そうしたら関東軍担当の参謀、名前が出ていますが朝枝参謀という方です。この方はソ連から一番後に引き揚げて來ましたが、もう亡くなりました。たかな。その朝枝参謀が「第十一師団は関東軍の中でも最も軍司令部が頼りにしている師団である。だから、これを引き抜くことは賛成である。だけれども、一応関東軍司令部に断つて連絡をした上で発令すべきであろう」と言った。大本営の話で決まれば、すぐ命令がかかるわけです。連絡はしません。ところが第十一師団は一番重要な正面を担当している。これを抜いたら後に穴が空く、大変なことなんです。そこで一応関東軍司令部に連絡をした上で発令して欲しい、ということ。朝枝さんが言ったんです。そうしたら、なるほど、それもそうだと。なったわけです。それで大本営が関東軍に連絡したら、「それは困る。

十一師団は一番重要なところの担当で、急にそんなことを言われても後が保証できない」ということで、隣にいた九師団が持つて行かれた。こういうことなんです。

ですから、そのまま仮にレイテに行っていたら、二万数千名のうち引き揚げたのは七四五名ですから、もう（私は）いないですよ。沖縄に行っても駄目ですね。だから、どっちに行っても駄目だった。だから、その時たまたま朝枝参謀が、「十一師団を抜くについては、新東京の関東軍司令部に連絡をした上で発令すべきである。持つて行くことには賛成である」と言っただけです。それで関東軍に連絡をしたわけですね。いままでいろいろやっているわけでしょう。最重要正面で、いろいろな蓄積もあるわけです。それをごっそり持つて行かれたら、関東軍司令部としては責任を持つてん、というのは当たり前でしょうね。そういうことで助かったんです。

伊藤 でも結局は……。

海原 最後は本土防衛で取られたんです。それは最後は本土決戦ですからね。

伊藤 あちらはどうでもいいということではないでしょうね。

海原 そういうことでしょね。だから、あの時代はちよつとこのことで生死が紙一重ですね。私の軍隊時代の戦友で堀武定君というのがいますが、これがあつちこつちに持つて行かれましたが、全部免れているんです。サイパンに行く予定だった。サイパンの部隊付きに発令された。行こうと思つたら船が出ない。それで行かなかつた。そうしたら全員戦死でしょう。そういう人もいるわけですね。あの時代は本当にちよつとしたことで生死が分かれましたね。

そういうことが助かつた連中の人生観を決めているでしょうね。で

すから私については、後で話が出ると思いますが、どこという思い込みがないんです。どこでもいいと思つたんです。大体、後藤田君の後で保安庁に行つたでしょう。その時に行つてみましたら、みんな、あんな、越中島に行きたくはないんですよ。何かわけがわからなくて。軍隊か軍隊でないかわからんし、アメリカ軍の傭兵みたいな格好をしているし、わけがわからないことをやる。そんなことは嫌でしょう。

それを象徴するのが、ある省から来た局長さんです。その局長さんが二年ぐらい勤めて帰る時に、新聞記者に言っている言葉があるんです。「里子が実家に帰るようなものだ」と。事実そうでしょうね。そういう気持です。みんな一年か二年すれば引き取つてくれると思つているでしょう。私もそう思つていたんですよ。私は後藤田君の後に行ったから、二年したら誰か来るだろうと思つていたんですよ。こんなところでねえ、と思つていたんですよ（笑い）。実際、そういうことで、みんな帰つて行く。こういうふうにあちこち戻つたら駄目だ、誰か残らないといかん。どこにおつても、月給は同じじゃないか。それは警察におつた方が生活は楽ですよ。

当時、警察から移つて来た連中はみんな気の毒なんです。地方では偉いですね。若手でも課長ですから、車があるでしょう、機密費があるでしょう、捜査費が。それから結構な官舎がある。それが防衛庁に来ますと、全部なくなつちゃうんですから。だから減給何万円、禁固何年、なんて言うんですよ。

それは、現に警察から来た私の後輩がおるんです。そのお母さんが家に来ましたよ。本人は死にましたけれどね。何をしに見えたのかと思つたら、北海道にいたんです。北海道の警邏交通課長をやつてい

たんです。北海道では偉いのです。「何か落ち度があったんでしようか」と言われます。「どうしてですか」と聞いたら、「北海道ではこういう生活でした、ところがこっちに来てみたら、仕事は非常に大事な仕事らしいけれど、その生活はまことに哀れです」と言うんですね。「何か落ち度があったから、そういうことになったんでしようか」と家にわざわざ訪ねて来ましたよ。参ったですね。これが当時の一般の人の気持を代表しています。

そういうところですから、こっちも早く帰りたいです。誰も後に来る気がないんですね。しかも、私は昭和十四年入省ですから。十六年入省に大勢いるんです。高橋幹夫君、内海倫君もそうですね。あの連中の誰かが来ると思っていたんです。そうしたら何と、「海原は防衛が好きだから帰ってくる気がないんだ」という話が霞ヶ関周辺に流れている。そういう話が越中島まで伝わってきたんですよ。別に好きじゃないですよ。しょうがない。みんな、そんなに逃げていたんじゃない駄目だと。みんなぐるぐる替わっても、「制服」の方は替わらないわけですね。内局の文官がそんなにぐるぐる替わったら駄目なんです。だからしょうがない、どこにおっても月給は同じだと。俺は追い出されるまでここにおると。ついに追い出されましたけれどね(笑い)。

そういうことで、ずっとおったわけです。別に私が防衛が好きだからじゃないですよ。誰もやる人がいない、嫌がつてみんな袖にするから、それじゃいけないと思っただけです。軍隊から無事に帰って来ましたから、これは拾いものだと思った。

伊藤 やはり一種の死生観ですね。

海原 オーバーに言えばそういうことですが、どこか行くところがあつたら私も行きましたけれどね(笑い)。警察では、後藤田、平井、

私が同期に入りまして、同じ徳島の三人がいいコースにおりましたからね。考えてみましたら、最後は競争になるわけですよ。誰かを蹴落とさないといけないでしょう。同期では一人がトップに行きますと、あとは適当に動く。どうせ最後でそうなるのなら、あの後藤田と喧嘩しても駄目だと思った(笑い)。それで残ったわけですよ。

伊藤 それで大阪に着かれて、そこで初めてどうなっているかということがわかるわけですね。

海原 それまではわかりませんでしたね。ただ私自身は大東亜戦争の勃発を聞いて、対米英戦ということを知って、これは駄目だと思いましたが。同じく哈爾濱にいた師団の参謀で、師団の研修会で絶対にアメリカには勝てないと言った人がおるんですね。これはだいたいぶ物議をかもしましたが。そういうことで、井上(成美)さんと同じように客観的に物を見る人がおったんですよ。しかし、それは本当に一握りというか、わずかなんですね。後の人はみんな「行け行け」ですよ。万歳万歳で。そういう時になると体制順応ですな。下手に一人や二人が言ってみても駄目ですね。井上さんが南方に、形は榮転、同期で初めて艦隊司令官になりましたけれど、第四艦隊というのは何かというと、船は何もないんです。南洋方面の警備担当でボロ船があるだけです。「あれは開戦反対論だ。あんな者がいてはまずい」ということで、開戦の年の八月に出されるでしょう。そんなことで、結論を言うと、正論というのは往々にして少数論、時には単数論ですね。これを支持する人がいないと駄目ですね。

伊藤 大阪からどうなったわけですか。

海原 大阪で私は経理部長のところに行きまして、こういうことになりました、とお話をしたんです。そうしたら「こ苦労」ということで、

「まずこれが作戦計画だ」と。初めて本土決戦計画を見るわけです。伊藤 それは全体の計画ですか。

海原 そうです。これを少し読め、と言ってもらうんです。大変だと思いましたがね、これを見て。というのは、十一師団は一応四国に配置すると。四国に配置したのは、あそこは牽制的な部隊が攻めて来る。あるいは直接的に来るかもしれないけれど、必ず牽制的な部隊が来るに違いない。主力は九州か関東かどちらかだろうと。場合によっては、裏の方から長野に攻勢をかけるかもしれないと書いてありましたね。それに対して、十一師団は全部応援に行くんですよ。そうなっているんです。そこが問題です。いくら関東軍の最精鋭師団でも、はるばる引き揚げて来た一個師団、これを米軍が九州に来たら九州に、関東に来たら関東に、それぞれ移動させる、と書いてあるんです。しかもその前提が、「一般交通機関が途絶している中」と書いてあるんです。どうですか、一般の交通機関が途絶している時に、どうして二万の部隊が移動できるんですかね。しかし驚かないのは、そういうことは満州で体験していますから、作戦計画はこんなものだと思っただけですね。それまでは、私たちのいろいろな情報では、戦力があるような話があったんですね。温存しているんだと。いや米軍が攻めて来ても大丈夫だと。これは対内宣伝ですか。対内謀略の気がしますね。

飯尾 そう言っていたわけですね。

海原 そう言っていたわけですね。ところが計画を見たら、「何だ」と思いました。交通途絶の中で、どうして四国から関東地方や九州に行くか。これで駄目だと思った。これは四国で戦死だと思いましたよ。経理部長は「ご苦労さん」と言うわけです。「君たちの部隊は引き揚げて来て四国に行くが、四国方面の準備は完了している」と言うわけ

です。これは早とちりかもしれませんが「準備」の意味ですよ。これは後でわかったんですが、宿営の割り当てです。一応部隊は高知に行つて展開するんですが、こちらは「準備」というと、当然本土決戦準備でしょう。そのための準備ができていると思うでしょう。何もありません。それが中央では参謀次長が御前会議で言っていますが、「今や着々と、各地方において各部隊が本土決戦のための準備を整えております」という言葉になるんですね。作文です。

伊藤 十一師団が展開するのは大体高知が中心になるんですか。太平洋に面した一番の拠点で……。

海原 あそこには小さな平地がありますね。山を背景にしていますから、あそこが四国地方の抵抗のための一つの拠点になると判断したんでしょう。その通りですね。

伊藤 四国には十一師団だけなんですか。

海原 いや、動員師団がありますから、高知県内に三つできました。それは十一師団のような完全な師団ではないんです。それを言いますと、三人集まつてようやく一人前なんです。例えば、鉄帽（兜）を持つている者は他に何もありません。銃を持っている奴は銃だけなんです。だから三人兵隊が集まつて、ようやく一人前の兵隊になる。ところがわが十一師団、これは「錦部隊」と言っていました。錦部隊は完全装備ですからね。編成表通りの装備を持っているわけです。だから地元の人は見たらわかりますからね。地元で動員した部隊は、何も無いのもいるし、鉄砲しか持っていないのもいる。この「錦部隊」は戦力を持っているということになるわけです。三人寄つて一人前なのが、あの当時、本土で編成された師団の実態です。海軍の方では船がないでしょう。水兵さんが全部陸に上がっているんですね。それが

高知に来て、山の中で塹壕を掘っているんです。海軍の戦力はゼロです。それが本土防衛の時の帝国陸海軍の実態ですね。

伊藤 四国は一つの軍になっているわけですか。

海原 軍司令部はあつたんです。第五十五軍司令部がありました。その上に大阪の十五軍司令部、そういうことになっているんですが、四国は一種の独立軍ですね。四国防衛軍みたいになっているんですね。

伊藤 大阪から現地へまず行かれたんですか。

海原 私ですか。私たちは大阪で話を聞いて、ああそうですかということ、今度は普通寺に師管区司令部というのがあつたんです。

飯尾 それは四国の司令部ですか。

海原 四国の後方関係の司令部です。そこに挨拶に寄って、そこで同じことを聞かされる。そこで見てみると、参謀どもが碁を打っているんですね（笑い）。君たちの準備は完了しているということ聞いて、高知に行くわけです。

伊藤 一応高知に行くわけですね。

海原 行ってみて、驚くわけですね。全部絵空事です。よくあんなことで中央の司令部が存在したと思います。先ほどから申しましたように、高級司令部というのは現地を何も知らうとしないんです。知つてもしようがないのかもしれない。諦めの境地かもしれないですね。同情的に言えば、なまじっか現地を知つたら何かしなければいけないでしょうが。何ともしようがないとすれば、こういう譬えを言うこと怒られますが、お経の文句のように、「色即是空、空即是色」ということで諦めた方が楽ですね。そういうことだと思えますよ。そうでないと、あまりにも馬鹿にしている。そして、私たちが後で苦勞するんですが、そういうことで応援してくれませんでしたね。

伊藤 上の方は、ですね。

海原 上の方というか、全部ですよ。だって、五十五軍司令部があり、大阪の中部軍司令部があり、その上に大本営があるでしょう。全部です。しかも、そういうところははいくら突ついても駄目なんです。だから全く虚しい感じでしたね。

伊藤 それで、いっぺん虎林に戻られるわけですか。

海原 もう戻りません。虎林はそれつきりです。どうしてですか。

伊藤 本隊が来るんですね。

海原 私たちは準備しまして、その後で第十一師団は三つのルートに分かれます。釜山から直接坂出に来るのもあれば、裏日本に行くのもある。それから博多に行くのもある。そういうことで分かれて行くんです。だから移動命令が四月一日に発令されますね。それが一カ月ぐらいかかって内地に来るわけです。

伊藤 その時はまだ日本海は大丈夫だったわけですか。

海原 大丈夫ですね。

伊藤 潜水艦が途中でやられるというようなことはまだないんですね。

海原 潜水艦が時々出沒しまして、だいたい船がやられました。幸いにも十一師団の部隊の移送には影響がなかった。

伊藤 完全武装で、もちろん糧秣とかも持って来るわけですね。

海原 それは携帯糧秣を持って来ます。それから地元の司令部でも用意したものであるでしょうね。それは私は知りません。来るまではみんな大丈夫なんです。来てからも大丈夫ですね、寝るのは。だから宿営の準備はできているということです。

飯尾 来るのを待っておられたんですね。

海原 そうです。どこの小学校の講堂に泊まれとか、どこのお寺に泊

まれとか、そういうことですね。しかしそれだけです。地図の上で、ここに泊まれ、ここに泊まれと配当しただけです。いい加減なものだと思わなくてはね。今でも腹が立ちますよ。そういうことを言うと、全部のことですからね。そういう人たちを恨んでもしょうがないから諦めたんですけれどね。作文だけは立派にできています。これが困るんですね。その作文の集積が大本営の御前会議での報告になるわけです。

伊藤 要するにトーチカとか、そういう物を作るのは……。

海原 私は高知で、まず高知県庁に挨拶に行っただけです。それは私が入る前は高知県地方事務官でしょう。ですから、まず知事さんのところに挨拶に行つて、「今度帰つて参ります、私は先発で参りました。お世話になりますが、よろしく」ということですね。向こうも、一応高知県の事務官ですから、ちゃんと待遇してくれました。私がお願ひしたのは、車を一台貸してくださいということ。そうしたら知事の予備車があるんですね。それを借りまして、高知県内の予定の場所を回つてみたんです。それでがっかりしましたね。何もないんです。海岸にトーチカもない。砲座もない。そこで迎え撃つんですよ。しかも軍の命令は、八月までに一切の準備を完了せよとなつている。そのため、木材が幾らとか全部数字が書いてあるんです。

それで二つ例を申し上げますと、一つはセメントです。これはもう絶対に陣地を造るために必要ですね。セメントが千五百トン必要で、それを受け取れ、という指示が来ているわけですね。作戦命令について経理部長が指示を出している、部長指示と言うんです。それを持って私は浅野セメントの土佐工場に行つた。立派な会社です。そこに行つて、「これだけセメントをください」と言つただけですね。そうした

ら「大変お気の毒ですが、割り当ての配給証明書が要ります」と言うんです。簡単に言うと配給の切符ですね、それを持って来ないとお渡しできませんと言うんです。しかし、倉庫にはセメントの製品がいっぱいあるんですよ。あのセメント袋にいっぱい詰まっている。「しかしこれは軍命令で、私たちは満州から引き揚げて来たんだから、その切符はいずれそのうちに来る。こちらでも手配するけれど、いずれ来るから、それまでの間は師団長の借用証書で実物を渡してくれ」と頼んだんです。「駄目です。事情はまことにお気の毒ですが、ちよつとお待ちください。私の方にもこういう命令が来ております」と言つて見せられたのが、憲兵司令官からの通達です。「たとえ軍の部隊の要求であつても、正式の割当証明書がない場合には、絶対にセメントを渡してはいけません。これに違反する者は軍刑法をもつて処断せらるべし」と書いてあるんですね。「私どもにもこういう通知が来ております」「なるほど」となるわけですね。それじゃあ無理を言つてもしょうがない。「師団長が借用書を書けばよい。いずれ切符は来る」と思つたんですが、駄目なんです。だから、すぐ電報を打ちましたよ、大阪と東京の参謀本部と陸軍省に。しかし、いくら催促しても駄目です。

飯尾 どういうわけですか。

海原 それは私に聞いても駄目です。いまだに謎です。いまだかつて、私が防衛庁でいろいろな人に聞いてみても、誰も説明しません。そのとき富永陸軍次官が現地の視察に来たんです。富永次官というのは、軍人としては非常に恥ずかしい行動をしたと思うんですが、台湾で特攻部隊を送り出すでしょう。「諸君の後には俺が行くんだ」と言つた人でしょう。それが陸軍次官ですよ。どういう状況になつているか見

に来たのです。それに対して師団長大野中将が直接談判した。「セメントの割当証明が来ない。これがないと部隊ではセメントがもらえない。それでは陣地ができない。八月までに陣地を造れと言っても無理だ」と言っただけです。こつちも電報を打っているんですよ。全然駄目なんです。何の応答もない。あの件についてはこうするといふ返事もなし。しばらくはどうしろ、ということもない。放ったらかしです。

そうなるこつちは、八月に米軍が来るということですから必死ですな。そこで私は浅野セメントの工場長のところに行っ、何かいい智恵を出してくれと言った。そうしたら、「石はあります。石炭を持ってらっしゃい。石炭を持って来たならセメントを焼いて上げましょう」と言う。しかし、その石炭も配給品でしょう。セメントが来ないんだから、石炭も来るはずがないでしょう。こんな人を相手にしていたら、こつちは野垂れ死になる。玉砕だと思いましたが、手分けをして、四国中でどこかに石炭がないか調べさせました。そうしたら、わが徳島の徳島市のすぐ南に生比奈という町がある。そこに炭坑があるんです。石原鉱業がそこで石炭を掘っている。それがわかつたわけです。しかも幸いなことに、三井三池のような、いわゆる深い炭坑じゃないんです。道路と水平で、ちよつと上がったところなんです。だから素人が掘ろうと思えば掘れるんです。それで准尉をやつて偵察させたら、「どうぞ、お国のためだから。兵隊さんがトーチカを造るためにセメントがいる。そのセメントを手に入れるための石炭なら、どうぞお掘りください」というわけです。どこに手続きをしなくてもいいんです。これは助かりましたね(笑い)。

そこで私は、海原隊の隊長ですから、二個分隊を出しまして、その

付近に宿営させて、石炭を掘ったんです、二十四時間。それでその石炭を見本に持って、セメント会社の工場長のところに行きました。そうしたら調べてくれて、「これは熱力ローはあります。しかし燃やすと粘結しちゃう」と言うんですね。石炭にも粘結するのと、非粘結と二つあるんですね。この粘結する石炭は、セメントを焼くのに向きません。だからこの石炭を、粘結しない石炭と交換しなさいと言う。これまた頼みに行かないといけないですね。善通寺に四国軍需管理部というのがありまして、これは民間向の機関ですが、そのトップが内務省の出身の人なんです。そこに私は頼みに行きまして、こういうことだと話しましたら、すぐ話がわかつて調べてくれた。そうしたら、北九州から徳島の火力発電所に石炭を持ち込んでいます。あの頃は火力発電ですからね。それが非粘結炭であるということがわかりましたから、それと物物交換、等量交換をやりようと思つたら、わかりましたということ、協定が成立するわけです。

そこで、私たちが徳島の生比奈で掘った石炭を持ち込みますね。それを渡し、それと同じ量の石炭を香川県の多度津で受け取るんですね。しかし積み降ろしをする能力がありませんから、また海原隊の分隊を出すわけです。それで機帆船で北九州から来るのを多度津で受け取つて、それを降ろして貨車に積み込んで、高知に送つたんです。それで、ようやくセメントが手に入ったんです(笑い)。笑い事ですけど、やっている連中は必死ですよ。

伊藤 海原隊というのは、経理部ですよ。

海原 経理部の経理勤務班。経理勤務班というのが師団経理部に付属しているんです。編成定員は五十五名なんです。五十五名では何もできませんから、師団長に話しまして二百名に増員してもらつたんで

す。そういう部隊を持っているわけです。だから私の部隊のトラック十一台には〇のなかに大きく「ケ」と書いた印を付けて、それが自由に使えるわけです。兵隊も私の部下がおりますからな。

伊藤 トラックのガソリンは大丈夫なんですか。

海原 それは配給を受けます。

伊藤 それは切符が来るわけですか。

海原 そうです。その辺がどうなっているのかね（笑い）。そういうふうに融通の利くところと利かないところがあるんですね。だから内地でそういう苦労をしましたから、これは外地は大変だと思いましたね。

伊藤 そういうことでセメントが手に入ったと。

海原 石炭を掘って、それを交換して、それを浅野セメントに持ち込んで、ようやくセメントをもらった。それを部隊に配給した。それでトーチカを造ったり、砲座という据え付けの大砲の土台を造ったりした。

伊藤 大砲なんかは満州から持って来たわけですか。

海原 師団で持って来たものもありますし、内地でもらったものもあります。大砲よりも、まず大事なものは陣地です、トーチカですよ。砲座は簡単なものでいいわけです。とにかく防ぐものがない。後で、よくできたと思いましたがね。師団長の大野中将さんの回顧録を読みますと、「我々が自力で石炭を掘った」と書いてあるんですね（笑い）。「自力で石炭を掘った」と言っても、それを実現するまでどんな苦労があったかトップは知らないですね。驚きましたよ。それを戦後、四国の自衛隊で講演して、私たちは満州から引き揚げて来たが、石炭は自分で掘ったんだと。そのためにどんな苦労があった

かですね。

それは自分でやりましたからいいけれど、もう一つは木材です。県の林務課というところがあつて、その課長のところに交渉に行ったんです。技師ですが、その課長が僕を窓のところに案内して、「海原さん、あの山、それからこっちの山、それからあつちです。後は全部地図でお示しします」と言う。「ちよつと待ってくれ」、あの山の木材と言つてもね。

飯尾 立ち木でもらったわけですね。

海原 立ち木です。立木（りゅうぼく）と言うわけです。立木でもらつたつて、それをどうやって伐るか、運ぶか、製材するか、能力はゼロですよ。そう言つたら、私たちの方には軍から、「立木でいい」という連絡が来ていると言うんですね。

飯尾 何立方メートルということに来ていたんですね。

海原 二八万六〇〇石です。そんな「木を伐り製材する」能力はゼロでしょう。だから材木は諦めました。そして、それぞれの部隊が配当された警備区域を持っていますから、その中で適当に調達しろと指示した。それしかありませんよ。しかしこれは本当に、何度も同じ台詞になりますよ、お話しすると皆さん笑われるんですけど、その場になると大変ですよ。だって敵は八月には来るんですよ。しかも軍の命令で、退がってはいけな、と書いてあるんです。後退することを許さずと。もつとも、後退しても行くところがないですけれどね。ですから本当にひどいものだと思いますね。これが我が大日本帝国の精鋭、皇軍の実態かと思ひましたね。一言で言えば大変な苦労をしたんですが、それなりに勉強にはなりましたね。ああ、こういうものだという事。それが後で、防衛庁でいろいろと役に立つわけです。現

にそれに似たことがいっぱいありました。今でもあるでしょうね。

その本土作戦の準備につきましては参謀次長が報告していますね。それが全くいい加減なものなんです。

伊藤 御前会議ですか。

海原 そうです。繰り返しますが、ああいうことを平気でおっしゃるんですね。

伊藤 でも天皇は、侍従を九十九里浜に行かせて、できてないじゃないか、と言われたんですね。

海原 そうですね。ところが「いまや軍は着々と」と言って参謀次長が報告しているでしょう。それは昭和天皇は偉いですよ。ちゃんとツボはご存知なんです。それは後で出て来るといふか、アツツ島で玉砕しましたね。その後で侍従武官長が書いていますが、何ということだ、と憤慨しているんですね。

伊藤 それで十一師団としては、八月の段階ではどうなっていたんですか。トーチカを造り砲座を設定できていたわけですか。

海原 一応の準備を整えていたということですね。野戦陣地みたいなものです。陣地とは言えませんが。そこなんです、問題は。米軍が攻めて来るのなら、そんな野戦陣地では駄目ですよ。事実、サイパンがそうでしょう。全部そうなんです。

サイパンのことを申しますと、あそこは晴気という参謀が見て、一キロあたりに三・三門の軽砲を配置するから大丈夫だと言った。どうして三・三門の大砲でいいか、根拠はわからないんですよ。それを参謀総長東條まで信用したんですからね。だから「サイパンは絶対に大丈夫だ」とみんな言ったんですから。その根拠は一キロあたり三・三門の軽砲、それだけです。その大砲にどれだけの弾の準備がある

か知らない。それから時々、今でも瀬島さんなんかが言っていますが、「水際撃破」です。できません、そんなものは。水際がどんな状況か知らない。サイパンがそうですからね。それに対して服部作戦課長や東條参謀総長は絶対に大丈夫だと言っているんです。この辺の自信がどうしてできるのかは、本当にわかりません。それを考えると迷路に入りますね。それは今日も申し上げようと思っただけですが、まず原理原則を知らない。「彼を知り、己を知る」ということは基本的な問題でしょう。これは孫子が二六〇〇年ぐらい前に言っていますから。これは当たり前ですね。喧嘩しようと思ったら、相手の力を考えますね。どうしてもそうです。向き合った途端に力を測るでしょう。ところが、おかしなことに、岡村さんという立派な方ですが、戦史の教官です。その岡村さんの本を見ると、「彼を知り、己を知る」という孫子の言葉を教えていなかったというんです。陸大で教えていない。私はおかしいと思うんですが、そう書いています。ですから、要するに頭がないんですね。「彼を知らず、己を知らず」でしょう。

それで私が言うのは、日本軍は独り相撲なんです。どんな相手に対しても常に勝つと思っている。それは今でも残っています。そこで中曾根防衛庁長官が、「公空公海で敵を撃破する」と言っているんですね。今の『防衛白書』もそうです。敵というのはどのぐらいの敵なのか、こっちはどのぐらいの力か、誰にもわからないんです。独り相撲なんです。これは私は危険だと思って、言い続けているけれど、防衛庁では誰も関心を示しませんね、残念ですが。私が現職の時に、陸上自衛隊でそういうことをしきりに言うものですから、どういうウォーゲームをやっているか、白紙戦術について聞いたんですよ。北海道にソ連が攻めて来る。その前にどのぐらいの艦砲射撃、爆撃があるか。

何と、数百トンですよ。とんでもない。そういうことでやっているわけです。

もっとひどいのは、航空幕僚監部の作戦計画ですが、非常にいい結果になっているわけです。私は前提を聞いたわけです。これを聞いてびっくり仰天しましたね。申し上げても、みなさん「まさか」と思われるでしょうが、敵が攻めて来ますね、不意急襲する。敵の不意急襲を受けても、「地上の通信施設、後方支援関係、これには被害がないものと想定する」と書いてあるんです（一同笑い）。文章を持って来てもいいですよ。その写しを取ってありますけれどね。敵が空襲するのに、地上の通信施設、後方施設の被害は一切ないものとする。それならね……。これも私は帝国陸海軍の遺伝だと思っているんです。それは高木惣吉さんの本を読みますと、海軍大学校での演習の時に、我が方の艦隊と敵の艦隊との遭遇戦ですね。我が方の艦隊は、油が切れるんです。何日分と決まっていますからね。そうしたら、何と統裁官が「洋上補給したものと認む」とした、と書いてあるんですね（一同笑い）。そういうことでウオーゲームが継続された。高木さんはそう書いておられます。海軍大学校でもそういうことをやっているわけだ。こっちの方が簡単にやられちゃうんですよ。それでは演習にならないから、こっちの方は洋上補給したものと認むと。簡単に言えば、力は無尽蔵ですね。

どうしてそうなるかですが、私は人間というものは、そういう追いつめられた状況になると、そういう心理状況になるということでしょうね。それしか理由は説明できませんね。あの優秀な参謀方が、そんなことで済ましていることがおかしいんです。しかしノモンハンの体験があるにも拘わらず、そのノモンハンの体験を一つも参考にして

いないのが服部さん、辻さんでしょう。そのほか、「ノモンハンの作戦は辻が全部やったんだ」という批判に対して、その時の参謀長や司令官が、「いや違う、我々が全員でやったんだ」と言っているけれど、そうしたら全員が馬鹿ですよ。

「馬鹿」と言っただけじゃない。この間の速記録に「馬鹿」と書いてあって、女房に怒られましたね。この間初めて、こういうことをやっているんだということで見せましたら、「馬鹿」なんていう言葉を使っただけじゃないと言われたんです。

伊藤 「無能」と言え、とか（笑い）。

海原 ふつう「馬鹿」という言葉がわかりやすいですものね。

飯尾 そうしておられて、後で直されれば……。

海原 それでも程度がありますからね。しかし、そうとしか言いようがないですね。

戦争終結

——復員業務に専念

伊藤 八月にその状態で終戦を迎えるわけでしょうが、戦争終結というような動きは、いつ頃からお感じでしたか。

海原 その動きは全然知りませんでした。私たちは当面の問題に忙殺されていますからね。私自身のことを言いますと、私の部隊の問題と、私自身の問題がある。高知の師団司令部は海岸近くの鉢伏山に陣地を持っていますが、私は経理勤務班という部隊を持っています。これは

ちよつと離れた一宮(いづく)というところに展開していました。その隊長室は、ちよつと引つ込んだところに洞穴があつたんです。そこが私の隊長室に予定されていたわけですね。そういうところを用意するとか、私の身の回りのことをやるのが精一杯でしたね。だから中央でどうであるとか、全く関心がなかつたですね。ただ、「八月十五日に放送があるから、ラジオを聴け」という指令は来ました。それで私も一宮の海原隊の本部、本部と言っても倉庫の守衛さんがいたところ、そのラジオで聴きましたが、雑音が入っていてわからないんです。しかし、要するにこの時期にこういう放送がある、天皇の直接のお言葉が出るということは、ここで終わりだなと感じましたね。後で聞いたら、ここで戦いは終わりだということになつた。

その時の感想を時々聞かれますが、ホツとしたということですね。やれやれ、ということですよ。それしかないですね。今までの苦労は何だつたかと、後で思いましたけれど、そんなことよりも何よりも、そうか、ついに終わったか、という解放感ですね。これが八月十五日の放送を聴いた後の偽らない心境ですね。虚しさはそれから出てきますね。これは何だ。こんなことになることは、もつと前にわかつていたじゃないかと思えますね。しかし、あくまで最後の時まで、ここで討ち死にするんだと、後退は許さずということ、その気でいましたよ。また、その気でないよ、あんなに一所懸命できませんね(笑い)。もうそれしかないですね。それが一切要らない、心配要らないとなつたら、ああそうか、ということですね。

伊藤 では、次に復員業務の話をしてください。

海原 復員となりますと、中央で計画しますね。それから、それぞれの部隊に応じて違ってくるわけです。私たちの部隊、例えば私がどう

なるかということについては、まだわからないわけです。ただそのうちに、まず部隊を解散することになりますから、兵隊を帰さなければいけません。それから兵隊の解散の手当のために、下士官とか将校が残りますね。そういうふう順番にやりました。だから、ほかの一般のことはわかりません。第十一師団では、まず兵隊を帰す、その後で下士官を帰す。

伊藤 兵隊には、それまでの給与とか……。

海原 もちろん全部渡すわけですね。

伊藤 それから家に帰るまでの交通費とか。

海原 それも全部支給するわけです。被服とか、ですね。ただ、その辺が整齊と行なわれたかどうかは地方によつて違います。例えば海軍航空隊がいました。徳島にもいましたが、この最後はすごいものですね。特に航空隊はいろいろの中で採めましたからね。高知から飛行機に乗つて、高松まで飛んで、そこに飛行機を置いて帰った奴もいるんですからね。それから航空隊というのは結構いい給与があるんですね。ウイスキーなんかいっぱい持っているんですよ、特別な給与で。そういうものを持って帰るとか、闇で流すとか、地方によつていろいろありました。でも一番ひどいのは、高知の航空隊では、飛行機に持てる限りのものを積み込んで香川県まで飛んで、そこで飛行機を降り出して帰った奴がいると。徳島の航空隊でも、そういうことがあつたんですね。

これは、後で徳島に自衛隊の航空隊をつくるんです。それを私が引き受けたわけですが、その時に地元で言われたことは、敗戦の時の惨状から、あの帝国海軍の最後は何だ、帝国海軍ですらあんなものだ、ましてや今の自衛隊は、ということになるわけですね(笑い)。だから

ら設置反対だと言うのに対して、私が口説きまして、結局あそこに航空隊ができましたけれど、そういうことがありましたね。ですから部隊の解散の時の状況は、全部地方によって違います。高知の部隊は割合に整齊と解散できました。

伊藤 まず一般の徴集した兵隊を帰して、そして下士官を……。

海原 その前に一応兵器の収集があるんです。これは米軍との関係がありますから、各部隊ごとに兵器を収集します。そしてその明細書を作るわけですね。そういうことをやった後で、まず兵隊を帰します。

伊藤 その時にはもう米軍は来ているわけですか。

海原 まだ来ていません。米軍が来たのはもうちよつと後ですから。

伊藤 米軍が来た時に、その目録付きで兵器を引き渡すと。

海原 兵器は引き渡しません。

伊藤 渡さないんですか。じゃあ、兵器はどうなっちゃうんですか。

海原 兵器は集積しまして、目録を作るわけです。私は部隊でそれを行いました。十一師団の分ですね。それから県に帰って、それをやるわけです。ですから私が一人だけちよつと早く召集解除になったのは、そこなんです。これは私は高知県の事務官で入っていますでしょう。

高知県には四個師団いましたね。この兵器の目録を作ったりしなければいけませんね。米軍の部隊は二十四師団の十九連隊が駐屯して来るということがわかりますね。そこで県知事が早く私を指名して、召集解除してくれということで、私が一人だけその中では召集解除になりました。ですからいろいろな事情がありますから、その地方、地方によって違うでしょうね。私の場合は、部隊の方で兵器をまとめて、今度は県に行ってそれを引き受けて、ということですから。

伊藤 仕事はつながっているわけですね。

飯尾 引き渡して、受け取られたということですね。

海原 そうそう（笑い）。引き渡しが一番多いところの十一師団の分は私が引き渡した。後の三個師団の分は、大して分量もありませんけれど、これはその人がやったものをそのまま受け取ったんです。

飯尾 それは倉庫か何かに積んで置かれたんですか。

海原 いや、全部野積みです。それを今度は米軍の各部隊が現地で引き受けるんです。

飯尾 では、「米軍は兵器を」県から受け取るんですね。

海原 そうです。そういうことで、まず陸海軍の部隊は県に渡すんです。その県から進駐軍に渡す、そういう段階です。私はその段階で、自分で目録を作って、それをまた引き受けて、米軍に渡したわけです。こういうことですから、その意味では非常にスムーズでしたね。

伊藤 高知で九月にはもう涉外課長ですか。

海原 これはそうなっていますか、初めは課長じゃないんです。これは私が考え出して、軍需物資処理本部、それから進駐軍受入本部、二つの本部制を作ったんです。そして本部長は知事になってもらいました。私が次長ということをやったわけです。そうした方が仕事がしやすい。県の、その時の課ではとても駄目なんです。だから二つの本部制を作って、本部長は知事、副本部長が私となりました。

伊藤 それは両方とも次長になったわけですか。

海原 そうです。それで、ふた月ぐらい仕事をしたんです。

伊藤 では部員はどうしたんですか。

海原 部員は、復員してくる人々を全部取ったんですよ。現在の県の人間ではない。どんどん復員してくる兵隊を、話して、私の部下にしたんです。理由は、陸海軍の軍隊にいましたから、そういう仕事に慣

れていますね。統率に慣れてる。それから物がわかるでしょう。そこで復員してくる人々を一切、半年ぐらいの間は俺のところに寄せせという事で、私の部下は全部復員軍人でした。兵隊さんです。これは成功しましたね。一般の県の職員ではわかりませんよ、何が書いてあると言つても。

伊藤 それで糧秣なんかはどうなつたんですか。

海原 糧秣はほとんどなかつたですね。あるものは、武器とか弾薬とか、そういう食べられないものです。資材、円匙とか十字鍬（鶴嘴）とか、そういうものです。そのことについて面白い話をしますと、弾薬の処理があるでしょう。それが進駐米軍の主な任務ですね。砲弾はピカピカですよ、真鍮でできているから。あれを全部海に投げ捨てると言ふんですね。私は軍政部に掛け合ひまして、「これはもつたない。何とか流用したい。真鍮製だから」と言つたら、火薬を抜け、と言ふんです。信管ですね。これは簡単なんです。しかし、知らない人は怖いと思つていますね。ですから火薬を抜き取るための簡単な器具がありますが、それを作りまして、当時は労務者を集めて、それに教へまして。

伊藤 日雇い労務者ですか。

海原 そうです。何か所かに砲弾の集積所があるんですね。そこで抜き取つたんです。火薬を抜き取つた薬莖はよろしいということで、全部こつちがもつたんです。

伊藤 火薬はどうなるんですか。

海原 火薬は集めて焼却するんです。

伊藤 火薬はもつたないな。

海原 火薬はもう使いようがないですからね。ところがある日、高知

の東に物部川という川があるんですが、その河川敷で火薬が爆発したと言ふんですよ。そういう連絡があつた。「これはしまった、抜き取つている時に手元が狂つて事故でも起こしたか、それは大変だ」と思いました。私は知事代理ですぐ飛んで行きました。そうしたら何が起こつたのか。当時のことですが、黒色火薬というのがあつたんです。これを日雇い人夫が四人ばかりで賭けをしたんですね。これを十字鍬（鶴嘴）で殴つたらどうなるか、爆発するかしないかという賭けをしてるんですね。それで河原で、石の上にそれを置いて、ガシャーンとやつたんですね。バーンとなつた（爆発した）んです。私は一時間後ぐらいに現地に行きましたけれど、初めてそういう現場を見ましたが、もの見事に体が真っ二つになっていました。半分飛んじやつていますんですよ。それは石の上に火薬を置いて、打つて、爆発して、それでちようど半分……。あんなに人間の体は切れるものですかね。半分残つているんですよ。半分がないんですよ。これならば、こつちは関係ないと思つたんですけれどね。そういうことがあつた。馬鹿なことをするなと思ひましたけれどね。土佐の人は気が荒いんでしょうけれど、賭けをしたんですね。知事代理でお悔みを言つたんですが、どうお悔みを言つていいか（笑い）、誠にとんだことになりました、と。今は笑い話ですが、その話を聞いた時には、これはしまった、と思ひましたね。私に変なことでも抜き取りのことを考えたものだから、手元が狂つて爆発したのではないかと思つて、高知からそこに行くまでに四、五〇分かかりますが、頭の中は痛かつたですね。しかし行つてみたら、河原に半分人間の体が残つていて、どうしたんだと聞いたなら、こうだと言ふので、ああそうかということ、それは誠にお気の毒なことで、と。

さて、そこで葉莢は助かるわけです。それで何を作ったか。これは商工課に頼みまして、払い下げをして、作った物が洗面器とドアのノブ、この二つなんですよ。だから終戦直後の高知ではピカピカのそういう物があつた。

飯尾 それは全部払い下げて作つたんですか。

海原 それは全部商工課に頼んだんです。だから今から考えると、私も一口掛けておいて、何かやればよかつたんですけれど、そんなことは一切やらす、その処分は商工課で。そうしたら商工課では洗面器とドアのノブを作つて、これは大変評判が良かったんですね。あれで儲けられたはずですね(笑い)。そんなことがありました。

伊藤 当時、隠退蔵物資という話がありましたね。

海原 それはもつと後です。

伊藤 でも結局その元は、軍が持つていたいろいろな物資ですよ。

海原 はい。それは地元でいろいろな勢力があるでしょう。そういうところが隠しちゃうわけです。山の中の洞穴とか、いろいろありましてね。そういう隠退蔵物資の話がありました。これまた影響があります。私は後で警視庁に行つて交通課長になるでしょう。警視庁に行つて交通課長になって、一体警視庁の管内に車が何台あるのか、誰もわからない。車の台数もわからないで、自動車交通行政がやれるのかということ、私が考えて、ナンバーの切り替えをやるわけですよ。これは警視庁の予算ではできない。都の予算でやらなければならぬ。それも掛け合ひまして、ナンバーを全部切り替えたんす。それで初めて、警視庁管内に車が何台あるかわかつたんです。その時も軍の隠退蔵物資で、あつちこつちで払い下げとか、適当にもらつてゐるんですよ。そういう物が全部出て来ました。ですから、隠退蔵物資が問

題になるのは、その翌年ぐらいからですね。

飯尾 一年ぐらい寝かしておいてから出て来るわけですね。

海原 その間はいろいろなルートで出て来るわけですよ。その面有名なのは世耕(弘一)さんですね。

伊藤 世耕さんの問題がありましたね。

海原 彼が隠退蔵物資で騒ぎましたね。それは全部そういうことです。何からこういう話になりましたかね。

伊藤 軍隊の解体のところからですね。

海原 何度も申しますが、その地方地方で非常に状況が違つてきますね。その意味では高知は割合に整齊とコトが運んだと思います。進駐した米軍ともうまく行きました。ただ米軍の方は、各部隊、中隊ぐらゐに分かれて監視するわけです。そこで一つ問題が起りましたのは通訳です。要するに、各部隊ごとに付けないといけないわけですね。昔の軍の機構で復員管理部の方に話が行つてゐるんですね。

途中は省略しますが、ある日、募集された通訳二十人ぐらゐと、各部隊の代表が一緒のところ顔合わせをするわけです。私が県側の代表、向こうはレンス大佐という連隊長が来ている。お互いに向き合つて話をしてもらうわけです。そうしたら十五分ぐらゐして、先方から一斉に言われたことが「言葉が通じない」ということなんです(笑い)。英語らしいことをしゃべつてゐるけれど、何を言つてゐるかわからんとやうですね。困りますね。通訳を選んだのは私ではありません。旧軍の復員関係です。調べてみたら、何と集まつてゐるのは中学校の英語の先生なんです。田舎の中学校の先生では、会話はできません。発音だつてあやしいでしょう。英語と米語も違いますね。例えば材木でもlumberといふかtimberといふかで違いますし、ましてアクセシ

トは全然通じない。だから、お互いに顔馴染みになってもらおうと思
って一対一でやらせても、全員駄目だと言うんですよ。「わざとこ
うのを選んだか」と言われた。わざと選んだかと言われても、県で
選んだんじゃないんですね。復員局で選んだんですから。それでご破
算になった。

それでどうしたか。私が考えて、これは駄目だと。しかし通訳は必
要ですね。どうしますか、会長さんなら……。

伊藤 公募するしかないでしょう。

海原 公募するって、高知みたいところでどこにいますか。

伊藤 でも四国あたりはどうですか、移民で戻って来た人とか。

海原 おっしゃる通り、それなんですよ。それはアメリカの二世、三
世が、結構高知には多いんです。高知とか和歌山に。それはこの前申
しましたが、内務省の文書課にいたでしょう。帰化とかをやっている
でしょう。その時に、高知とか和歌山から来るわけですな。二重国籍
の離脱。日本の国籍を放棄してアメリカ国籍だけにしたいとか。これ
は高知は、今で言えば帰国子女が多いと。それで警察に頼みまして募
集したんです。そして、カナダの二世とかアメリカの二世に来てもら
って、仕事をしてもらった。これは非常に評判が良かったですね。

特に良かったのは、進駐軍のトップにいるレンス大佐に付いた人で、
カナダ帰りの感じのいい日本女性なんです。この人の英語がまた非常
にいいんですね。それを連隊長が非常に可愛がるわけです。それで後
で助かるわけですからね。そういうことがありました。だから、通
訳を選ぶことから始めて始まるわけです。

伊藤 その時は、まだ何とか本部の次長なんですか。

海原 その本部でやって二、三カ月して渉外課にまとめたんです。こ

れは、本部ということではなかなか一般の人もわかりにくい。本部次
長というより、一つの課を作ろう。当分仕事も続く、ということでは
外課にしたいんです。

伊藤 その段階ではアメリカ軍との交渉が主になるんですか。

海原 軍需物資の方は大体整理しましたから。一応整理しましたが、
まだ日本国内の整理は残っているんです。翌年私は警視庁に替わりま
すが、その時にもまだ完全には終わっていません。ちよつと
二週間ばかり赴任延期をしまして、その間に全部まとめました。完全
には、警視庁に替わる年の八月末に、軍需物資の処理が形の上ではま
とまりました。後任に来たのが、私と内務省同期の町田君で、これに
頼むということでした。ですから、軍需物資の処理は、全部は終わ
っていません。

伊藤 やはり大量の物なんですね。

海原 それから、いちいち引き継ぎというのはうるさいんですわ。向
こうも職務上点検しますからね。高知県内でもあちこちにありますが
ら。一カ所や二カ所ではありません。百ぐらいあるでしょうからね。
そんなことで、すぐには終わりませんでした。

伊藤 もちろん陸軍もあるし、海軍もあるわけですね。

海原 そうですね。

伊藤 それで渉外課長になって、それは一年足らずですね。その間に
はどういう事柄があったわけですか。

海原 そうですね、渉外課長の間はいろいろなことがありました。小
さなことです。例えば進駐軍からの物資の要求がありますね。これ
が一つの仕事ですが、PDと略して言うんですね。これは、Procurement
Demandの略なんですね。アメリカの方は、このPDさえ出せば、地元

の自治体が手配してくれると思っっているんですね。

その代表的な例を一つ言いますと、ある時、課員がどうしましよかと相談に来たのが白足袋です。十一文ぐらいの白足袋を六足、翌日の十時まで用意しろと言うんですね。向こうの方は、PDさえ書けばいいと思っっているんですよ。そんなものをPDで要求することが間違っっているんですね。しかし、来たわけですから、しょうがない。どうしましよかと言うので、私は「これは男物の神主の足袋を探せ」と言っただけです。女物はありませんよ。向こうは女物と書いてあるんですが、そんな女物も男物もわからんでしょう（笑い）。要するに土産にしたいんでしょう。十一文となると、女物にはまずないですな。男物ならあるかもしれない。その文数はどうでもいいから、男物の白足袋を集めろと。それは神主さんのところへ行けど。警察しか、そういうふうには動けませんからね。それで警察に頼んで集めてもらって翌日届けた、それで済んだんですね。そういうことで、いろいろなことがありますね。いま話しても笑い話ですが、その時にはそれを履行しないと命令違反になるんです。そういう時代ですね。

その時代のことを知っただくために、もう一つ言いますと、アメリカの将校方の宿舎として、鏡川という川の橋のたもとに二軒、日本式の旅館があるんです。『友の家旅館』と『臨水館』です。『友の家』の方が格が上なんです。こっちが高級将校の宿舎、『臨水』の方が一般将校の宿舎と割り当てをしていたんですね。ある日『臨水館』にいる将校、これは軍医さんですが、帰って来て風呂に入ろうとした。そうしたら宿屋の女将さんが、「今日は風呂はありません」と言った。「なぜだ、風呂は毎日焚くことになっっているはずだ」と言っただ。そうしたら女将さんが、「進駐軍の軍需物資、弾薬の処理——海の中に捨

てますから——のために、船が全部徴用されて薪が運べません。そのために薪がないんです。そこで今日、お風呂はありません」と言っただんですね。そうしたら、その軍医部の将校が「おかしい、進駐軍の軍需物資の処理のために一般の人々に迷惑を掛けてはいけないという命令が出ているはずだ。そんな薪がないなんていうことは、あつてはならないことだ」と言っただ、上に報告するんですね。そうしたら上の少佐が怒るわけです。

そんなことは私は勤務時間中は知らなかつた。家に帰っただけです。高知からだいたい一里ありますが、砂利道を自転車で通っていたんです。その一宮神社の傍らの家におりましたら、夜十時頃になつて課員が来て「課長、大変です。すぐ来てください」と言う。その時来た人は大町君と言いまして、後に南国市の市長になつた人です。今は替わつていますが。その大町君が「課長、大変です」と言っただ。「何だ」と聞いたら、進駐軍が騒いでいますと言う。そうかということ、二人で自転車で行くわけです。そして『友の家旅館』に着いた。そうしたら将校がみんな軍装しているんです。

道々、どういうことか聞いているから、大体わかつたんですが、県の経済部長が呼び出されて、これでは駄目だということで、経済部長は朝倉という小学校の営倉に放り込まれた。そこで今度は警察部長が呼び出されて、それが仕事をしています、という話なんです。私が『友の家』に行くと、全部明かりが点いているんですね。私が着いたことを言いましたら、ペーローという少佐、これは軍政局のトップですが、これが完全な軍装で拳銃まで付けて出て来ました。一体何が起つたのか聞いたら、こうだと言っただ話ですが、要するに、進駐軍の軍需物資処理のために、一般の人々の生活に影響を与えてはいけないと

いうことは嚴重に指示してあるのに、進駐軍の弾薬の処理のために船が取られて、そのために薪が来ていない、けしからん、ということでした。そこで、その事情を聞くために経済部長を呼んだ。ところが、その経済部長さんがちょうど新任なんです。それで新聞記者との宴会をやっていた。高知はご存知のように酒どころでしょう。そこでいい気になって飲んだんです。その宴会場から新しい経済部長さんが呼ばれたんですね。そうしたら、もう酔っぱらっている。「友の家」の親爺は私はよく知っていますから、後で聞いたんですが、実はあの経済部長さんはご酌酩だから、台所で水で顔を洗ってもらった。それから少佐に会ってもらったと言っています。ところが、フラフラしているのはしょうがないですね。顔を洗ったくらいでは。それでペーロー少佐が「今から進駐軍の命令を伝達する。気をつけ (Attention)」と言ったんですね。そう言ったって駄目ですね。これは大変でしょうね。そうしたらペーロー少佐が命令違反であるということで、ジープに乗せて朝倉小学校の倉倉に押し込めた。今度は代わりに警察部長が呼ばれた。その時は古屋さんという警視庁で後に私の仕えた人ですが、その古屋警察部長が呼び出されて、「警察力で薪をトラック四台分集めろ」と命令されたのです。今、薪を集めている最中だと言っていますね。ああそうですか、ということなんですか。

飯尾 それで、おいでになってどうなさったんですか。
海原 もう警察の方がやっている最中で、何もしません。事情を知らされただけのことです。しかし、私の出番となる後日談があります。地区司令官のレンス大佐が、経済部長の顔を見たくないと云うんです。ところが県会が始まるんですね。それが迫っていた。県会には経済部長は出ないといけないでしょう。しかし新任で、まだ司令官に会って

いない。会わせないといけないでしょう。何とか面会をしたいというわけです。そこで私が通訳のカナダ婦りの女性に頼んだんです。何とかお前さん頼んでくれと。彼女が頼んだけれど、駄目なんです。あの男の顔は見たくないと云う(笑い)。さあ困ったですね。県会はまだ翌週に始まる。司令官は病氣ということで会わないですね。そこで私が考えたのは、病氣のお見舞いということにしまして、その通訳さんと呼んで、お見舞いに鶏を持って行く。これは知事からのお見舞いだ。私が部屋の前まで行くから、お前さんは襖を——旅館ですから引き戸なんです——一尺くらい開けておいてくれ。そして中に入つて、「これはミスター海原が代理で来て、知事からのお見舞いだ」と言ってくれと。そうしたら「海原はどこにおるか」と言うだろう。そうしたら、「あそこにいる」と言ってくれ、と打ち合わせまして、渡したわけです。

そうしたら打ち合わせ通りやってくれた。そしてレンス司令官がこっちを見たわけです。そうしたら「入れ」となったわけです。入りましてから、そこで私は知事が書いたお詫びの手紙、こういう経緯で申し訳ないということを用意していましたから、それを「知事からです」と言つて司令官に渡したんですね。「そうか、読んでみる」ということになった。それで後でOKになるんです。それで経済部長は、晴れて県会に出られるわけです。そういう話がいっぱいあるんです。

警察部長はよくやってくれましたが、その後があった。これから毎朝、『臨水館』の前に乗用車を六台配備しろと言っていますね。六台というのは、当時の高知県内で最大の数でしょうね。営林局等からの協力を得ました。

伊藤 それは乗用車ですか。

海原 乗用車です。どうして乗用車なのか知りませんが、そういう命令が出た。ただ、それは二日で終わりました。そんなことがあったんですよ。そういうことが占領時のことですね。先ほどの白足袋の話にしても、それを聞くのは夜でしょう。売っていませんよ。ありません、とは言えませぬね。時間があれば無理だとは言えますけれど、夜に来て、明日の十時までと言う。翌朝帰るんですね。お土産なんですよ。こつちもたぶんそんなことだと思いましたが、男物の白足袋を用意させたんですけれどね。それに類する話はいっぱいある。別に悪意ではないんですが、善意の誤解と言いますかね。PDさえ書けば日本は何でも用意してくれると思ってるんですね。そういうことでした。

伊藤 結局、高知に駐留している軍の幹部とはある程度は親しくなるんですね。

海原 なりました。すっかり親しくなりましたね。その話に関連しますと、まず彼らは愛媛から入って来たんです。その時私は、営林局の乗用車を用意して、私は別の車に乗って、県境まで迎えに行ったんですよ。私が渉外課長的なものでしたから。そこで愛媛県から来た部隊を迎えるのです。そして県境に近い町で昼飯をとるわけです。乗用車を持って行きましたが、それは要らんと言うんです。好意はわかっただけです。しかし我々は軍隊で、現在軍事行動中だから乗用車には乗らない、と言うんです。全部ジープで来ているわけです。ああなるほどと思いましたが。一種の状況偵察を兼ねているんですね。

そして、窪川という町で昼飯を食べる。私は宿を用意しまして、将校用、下士官用と中を区分して指図していた。そうしたら向こうの将校が三人ぐらい傍にいますね。一言も話しません。一応私が段取

りを付け終わったら、その一人が少佐でしたが、いきなり全くきれいな日本語で「あなたは非常に優しい人ですね、親切な人ですね」と言ったんです。びびくりしましたね。はあーっと思えました。完全な日本語ですからね。これは情報将校だな、と思いました。今まで黙って、日本語がわからない顔をして、私がどういうふうの手配するかということをしつと観察していたんですね。

しかし、そういうことで、私自身は非常にいい印象を持たれていましたね。それで「ミスター海原」ということで、何でも言いに行っただけです。そんなことがありますから、先ほど言いました葉莢の処分が民需に使いたいと言ったら、わかったと言うわけです。ですから高知県のその系の時代は、そういう意味では楽しかったですよ。トラブルはなかったです。

先ほど迎えに行ったのは軍政関係ですね。後から連隊が来ますが、連隊長は汽車で来たわけです。それで高知駅に迎えに行くわけです。知事と総務部長と私です。そうしたら向こうが勘違いしたんでしょうね。その時には「リエゾン・セクション」という名前を使っています。だからね。当時、中央に終戦連絡部という渉外の機関がありました。その地方のプランチだと思っただんじやないでしょうか。県の知事の下だとは思っていませんでした。渉外課長という名前が、その時に役立つたんですね。

それでいろいろ折衝があるんですが、最初に何と言ったと思いますか。「俺はあのお城に住みたい」と言うんですよ（笑い）。「あれがいい、あそこは非常に眺望がいい、景観がいいようだからあそこに住む」と言うんですね。私は笑うのを噛み殺して、「いや、あそこは住むところではありません、中はこうなっています」と言ったら、「あ

あそうか」ということでした。それで良い家を探したら、アメリカから帰った人がいるんですね。その人の家は大きくて、しかもそこには電気製品がいっぱいあるんです。電気冷蔵庫もあるわけです。そこを借り上げて、そこに連隊長に住んでもらうことにした。そんなこともあるんです。あの城に住みたいと言うんですから（笑い）。

ことほど左様にいろいろなことがあったということですよ。

伊藤 あまり犯罪はなかったですか。

海原 犯罪はなかったですね。ただ一件か二件ありましたのは、兵隊のレイプ、強姦ですね。これも私が感じたことですが、強姦か和姦かという区分があるんですよ。何だと思えますか。あれは強姦ではないと言うんですね。その理由は、もし強姦であるならば女性が抵抗しているはずだ。ところが相手の男に何の傷もないということは、抵抗はジェスチャーであって、実態はレイプではない、和姦である、というわけですね。そんなものかと思いました。これは解釈ですからね。そういうふうに違うのか、と思いましたが、そういうことはありました。しかし、そう大きな事件はありません。そういうものが一件か二件あったぐらいですね。ただ酔っぱらった兵隊を日本人が濠に放り込んだとか、そういうことはありました。これは犯人不明ですからね。

伊藤 やはり売春宿などは作ったんですか。

海原 いや、あそこでは作りませんでしたね。私は警視庁に来て、それがあつたのびつくりしたんです。高知ではそういうものは特別に作りませんでした。

伊藤 でも、いわゆるパンパンというのは存在したんでしょう。

海原 それはあります。それは事実です。昔から高知にも廓、遊郭がありましたから、そこが事実上そういう施設の代用をしたんでしょう。

高知では、映画にあるでしょう。

飯尾 『陽暉楼』とか。

海原 そうそう。

伊藤 米軍はキャンプという形でいくつかの場所にいるわけですね。

海原 さきほど言った朝倉小学校、そういうところに入りましたね。比較的、進駐軍に関連した犯罪件数は少なかったんじゃないですかね。いま思い出しても出てこないということは、良かったんでしょうね。何かあれば両方から引つ張り出されますからね。

伊藤 その一年間というのはつらい時代ですか。それとも、それほどのことではないと。

海原 いや、つらいということないですね。うるさいと思うことはありましたけれどね。例えば、軍需処理担当の一人の隊長さんは日本酒が大好きでして、その男に一升瓶をいつも持たせておくということが、私の対抗策でした。その時に私がやったことは、知事以下、酒の配給については、涉外課長の私の権限にしました。本数を月に何百本と決めまして、それを配給するには海原が判を捺さないといかんと。

伊藤 それは絶大な権力じゃないですか（笑い）。

海原 絶大な権力です（笑い）。それを利用しましたね。いろいろなことがありました。話が飛びますが、その時私の官舎の前には、今の宮崎県知事の松形（祐堯）君です。彼は高知の営林局にいました。私の家には、亡くなりましたが有吉（久雄）君という旧海軍がいました。内務省昭和十八年採用です。これと気が合って、高知の独身クラブみたいなものを作りまして、数人で夜な夜な外出するわけです。有吉君は私の家に下宿させていたわけです。松形君はその仲間でした。当時、知事の公選の前ですから、その若い仲間が、私を知事候補に担

ぎ上げましてね（笑い）。まあ、そういう時代ですよ。私も面白いから、よしやろうと言ったんです（笑い）。それについては、松形君と有吉君がいろいろ準備しまして、印刷機械は軍需物資でもらったやつがある、あれを使おうとかいろいろやるわけです。こっちもいい気になって、「よし、やる」と言ったんですね。

ところが思わぬところにマイナスがあつたんです。被選挙権の年月が五カ月ばかり足りないんですよ。年が足りない。ですから私は立候補の資格がないのです。もし資格があれば、そこで最年少の知事になったかもしれないですよ。若い連中がそれぞれ手分けをして、営林局の連中は、「よし、海原をやろう」と。警察も「よし」と。だからたぶん当選したと思うんですね。

伊藤 人生の岐路でしたね（笑い）。

海原 この前申し上げましたように、内務省に入ったのは知事になりたいと思つていきますからね。だから、ああ、これは思いがけないところで知事になれるかもしれないと思つたんですね。

伊藤 ちょうど翌年の八月に警視庁に戻つてこられるので、この警視庁の話から次回ということにしたらいかがでしょうか。時間もちょうどいいところですので。

海原 私はいいんですが、長くなり過ぎると……。

伊藤 いえ、いえ。三十回でも五十回でもやりますので。

海原 私は正直に言つて、昔を思い出さずにはいけません。やはり話をするに ついては一応整理するでしょう。日にちも間違つたらいけないと思つてね。この間の速記録でも、間違つたことを直しているのを直しておきましたけれど。もう一度自分を見つめ直すことができますね。ああ、こんなことをやったか、あんなことをやったかということですね。私

にとつてはありがたいのです。ただ、先ほども言いましたように、女房が、こんな昔話をしている、それでいいんですかと言う。

伊藤 お見せなさらないように。

牧原 一番最初にお話しになったことの関係で、ご結婚されたのは、召集解除の後ですか。

海原 もちろん後です。召集解除されて、ちよつとしてからですね。

飯尾 では涉外課長になられた時分ですか。

海原 その前後です。まだ課長ではなかつたと思います。

飯尾 時期は？

伊藤 結婚記念日を覚えていないとまずいじゃないですか。

海原 九月頃じゃないかと思うんですが。

飯尾 ちよつと本部の次長をしておられて、進駐軍が進駐して来る時分ですか。

海原 そうですね。先ほど言いましたように、私の部下の一人が観音寺の方に行くので、高辻という人のところに寄つてくれ。知人が帰つてくるかもしれない、と頼んだのですが、いきなり来たんですからね。私の部隊のトラックに乗つて、「こんばんは」と入つて来たんです。ちよつとその話を料理屋の女将さんと私と私の後輩の三人でやっている、その時だつたんですからね。これは一つの劇ができるな、と思ひましたね。

伊藤 今度の速記録は奥さんには見せられませんね。

海原 今度は見せませんけれどね。

伊藤 まあ、違つているじゃないですか、と言われたり……。

海原 今日本土決戦まで行けると思つて用意してきたんですが、本土決戦まで行けませんでしたな。

飯尾 本土決戦というのは？

海原 いや、大体は申しましたが、まあこんなことですか。

飯尾 本土決戦でまだおありになればお伺いしますが。

海原 例えばアメリカの上陸計画なんていうのは去年ぐらいに新聞に出ましたが、それは皆さん方ご覧になっていますか。なかつたら今度持って来ます。

佐道 もしよろしければ是非お願いします。

海原 それなら持つて来ます。

ところで、今までご質問にお答えしてきたんですが、こんなことでもいいのか気になっていますが。

伊藤 十分に満足しております。本当にありがとうございます。

海原 私としては話を聞いていただくこと自体でありがたいと思っておりますから。誇張はありませんので、そういうことだということを是非知っていただきたいですね。ただそれが今、後で出てきますが、防衛庁でもいろいろお話をする機会があつたんですが、何のプラスにもなっていないですね。それがちよつと淋しいですね。それは弾の件です。

飯尾 先ほどの話ですが、第十一師団は、弾薬も満州から持つて来たんですか。

海原 いや、弾薬は持つて来ません。

飯尾 では、四国の善通寺にある弾薬を使われたんですか。

海原 そういうことです。

飯尾 それは十分な量があつたんですか。

海原 その時は知りません。

飯尾 後で真鍮の盃の数を考えると、それなりにあつたわけですか。

海原 そういうことですね。ただその時は、真鍮が何発だということは一応調べたはずなんですが、もうその時の記録はないですね。

飯尾 それはご自身の感覚でも、意外とたくさんあるという感じでしたか。

海原 いやそうは思いません。本土防衛師団は、「〇・七会戦分」ぐらいしかありませんから。それで行きますと、野砲は何発とか計算できるかもしれませんが、それだけだつたかどうかわからないですね。そつちには関係していませんから。それは全部兵器部の関係なんです、集めた時は。ところがそれを処分するとなると、全部復員してからです。

飯尾 それを課長さんとしてされたわけですか。

海原 そういうことです。それで最後になりましたが、私は石炭を掘つて良かったと思ひますのは、鉛製造の会社に石炭を持ち込みました。徳島に「鳴門鉛」という鉛を作っている会社があり、そこも石炭が必要なんです。

飯尾 鉛を煮るのに、ですね。

海原 そうなんです。それで私は交渉しまして、何かと交換してくれと言つたんです。何と交換したと思ひますか。クイズです。鉛自体ではないです。

飯尾 砂糖ですか。

海原 そうです。ブドウ糖。あの頃は純粋な砂糖はないんです。ブドウ糖なんです。それをごっそり手に入れまして、復員する兵隊に全部土産に渡したんです。一人五〇〇グラムぐらいです。これは喜ばれましたね。東京では夜店でブドウ糖を売つていたんですよ。そういうこともありました。だから石炭を掘つたということは、決して無駄では

なかったんです（笑い）。先ほど、どういう復員をしたかと言われましたね。あの時には言いませんでしたが、復員の兵隊にはみんなお土産にブドウ糖を持たせたんです。

伊藤 これは大事なことですな。

飯尾 基本的に十一師団は徳島に帰る人が多かったわけですか。

海原 そうです。だいたい徳島とか、四国が多かったですね。

飯尾 出身地の近くで召集解除したことになりますね。

海原 そうです。近くの出身が一番多かったですからね。これは喜ばれましたね。私もちよっと大きいのを持って行きましたけれどね（笑い）。ブドウ糖は結構あの頃は貴重品でした。

伊藤 そうでしょう。糖分がとにかくないんですから。

海原 しかし、それぐらいいいだろうと。苦労して、自分たちが石炭を掘ったわけですから。誰にも迷惑を掛けていない。感謝するとすれば、あの石炭を掘らせてくれた石原鉱業ですな。「どうぞ、どうぞ、ご自由に、お国のためですから」と言われて。だから、いろいろなことがあったということですね。プラスとマイナスがあった。それが人生だと思えますけれどね。どうも勝手なことを言いました。

伊藤 どうもお疲れさまでした。

海原 いや、私も楽しんでるんです。

伊藤 そう言っていただけとありがたいです。

〈以上〉

海原 治 オーラルヒストリー

第4回

開催日：1999年1月14日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

飯尾 潤(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

牧原 出(東北大学法学部助教授)

第4回 質問項目

前回は、先生の軍隊時代のご経験の続きと、復員され、高知県で仕事をされたころのお話をうかがいました。今回はその続きと、主に警察に入られたころのお話を伺いたいと思います。それについてお話をいただくなかで、関連した事項についてご質問させていただきたいと思います。

- ① 終戦後の高知県時代について、前回お話しになっておられないことで印象に残っていることがありましたらお願いします。
- ② 昭和 21 年（1946 年）8 月に警視庁警視となられます。内務省は地方局系と警察の二つに分かれています。警察に行くことになった経緯はどのようなことでしょうか。先生のご希望があったのでしょうか。また、戻られたころの内務省、警視庁の様子はどのようなものだったのでしょうか。久々に東京に戻られて、どういう印象でしたか。
- ③ 警視庁交通課長のお仕事をされながら、内務省解体の動きについて、何かお感じになったことはありますか。また、内務省解体についてどのように思われましたか。
- ④ 昭和 22 年 4 月の総選挙について、印象に残っていることがあればお聞かせ下さい。
- ⑤ 昭和 23 年（1948 年）8 月、国家地方警察本部総務部企画課長になられます。そのお仕事の内容についてお願いします。自治体警察と国家地方警察に分かれた当時の、日本の警察制度の改革について検討していたとも言われていますが、その具体的な内容についてはどのようなことでしょうか。
- ⑥ 前の質問とも関連しますが、昭和 24 年（1949 年）12 月末、3 ヶ月に及ぶ米国警察制度視察に渡米されています。その視察について、行程、内容、印象に残っていることなどお願いします。
- ⑦ このころ先生は、『ニューズウィーク』のパケナム氏と知り合い、パケナム氏からハリー・カーンを紹介されたということインタビュー等で話しておられます。その経緯等について、繰り返しになるかもしれませんが、もう一度お願いします。

海原隊の解散・結婚

海原 ……私は、どうも評論家をやった癖がありまして、二回同じことを言うんですよ。いっぺん言っただけでは駄目でしょう。だから時間をおいて、もう一回言うんですね。本当は三回ぐらい言わなくてはいけないんだけど(笑い)。速記録を読んでいますと、同じことを二回繰り返し返しているんですね。後で消さないといかんと思うんですけど、どうも癖は直りませんね。役人を辞めてから、ずっとおしゃべりをするのが商売だったものですから。一回では絶対にわからないんですよ。先生方にはご経験があるでしょう。本当は三回ぐらい言わないといけない。だから、ちよつと間をおいて二回必ず繰り返し返すんですよ。それが出ているんですよ。

伊藤 癖ですかね。

海原 癖ですね(笑い)。

伊藤 講演の時というのは、テーマを一つしか言っただけじゃない。あまりいろいろなことを言うと、全然相手に通じないということがありますね。

海原 私は評論家商売で、講演と言いますと一時間半から二時間ですね。そうしますと五つぐらい話しますね。それぞれについて同じことを二回ぐらい言うわけだから(笑い)。どうも読んでみますと、駄目ですね。

それからもう一つお願いというのは、プライベートな雑談が速記に

なっているんですよ。あれは後でカットしていただいて……。

伊藤 それは後で全部やりますから、そんなに心配しないでください。何でも全部記録しますので。

海原 後藤田君の本にありましたけれど、共産党の「五十一年綱領」というのがありますね。あれは、「綱領」自体については本人はしゃべっていないんですね。そちらにありますか。なければこれを置いていきますから、複写していただければ。この本(『日本の安全保障』)は、安全保障調査会という読売新聞の堂場(肇)君がやったプライベートな団体で出したものですけど、その最初の本は私が全部書いたんです。私の名前はどこにも出ていませんけどね。私が書いたということは、知る人ぞ知る、なんです。

というのは、一橋大学の大平善梧さんもよく批評されました。これは七〇年安保に備えて書いたものなんです。この第一巻目は私が全部書きました。毎年出しましたが、二巻目も半分私が書いたんです。第三巻目は、私が三分の一を書いた。第四巻目からは私は関係なく、全部ほかの人が書いたんですね。朝雲新聞社で出したんですけどね。

伊藤 一九六六年版というのが最初の版なんですか。

海原 そうなんです。これは七〇年安保に備えて、ということですが、読売新聞の堂場君が安全保障調査会という任意団体みたいなものを作りまして、週報のようなものを送っていたんです。そこでこれを出そうということになりました。誰か書かないかということから、僕が書こうと言ったんです。それなら頼むということで、書いたんです。私の名前はどこにも出ていません。

伊藤 これはどういふところに配ったわけですか。

海原 それは日本共産党の国内革命的なものと、もう一つは自衛隊と

いうものについて書いたんです。配布したのは、堂場君の関係ですから、調査会で定期的に旬報か週報で出したんですね。その旬報に執筆したのは、陸上自衛隊の第二部の諸君なんです。それは私が紹介してね。いろいろな情報が入ってくるでしょう。どこもそれを利用しないものですから、表に出していい一般的な情報を……。新聞は書きませんから、そういうものを情報関係者のプライベートな寄稿という形で。堂場君がそれをまとめたんですね。これは非常に評判が良かったです。それに、共産党の「五十二年綱領」が全部出ているんです。ですから、それを複写していただいて。

伊藤 「全文は資料編参照」と書いてありますから、全文があるんですね。

さて、この前は高知県時代のお話を伺いましたが、何か漏れていることがございましたら……。

海原 二つばかりお話ししたいと思います。もう録音に入っているんですか。ここは国会の委員会と同じで、雑談も全部速記されますから（笑い）。それは「速記を止めて」と言うと、その「速記を止めて」まで入っていますから（笑い）。

伊藤 入るんですよ。どうしても入るんです。

飯尾 国会と違いますので。

海原 久しぶりに昔の政府委員になった感じになりましたね。共産党の「綱領」は今度のことに関係がありますから、置いておきますので。これが一つです。

それから、いろいろと私が言っていることで、ご参考になると思う資料を用意してきました。私は高知が第二の故郷で死に場所ですから、いろいろな地名を申しておりますが、高知をご存知の方おられますか。

伊藤 一度ぐらい行ったことがあります（笑い）。

海原 そこで地図を用意して来ました「高知県の地図のカラーコピーを配布」。この地図は「高知県」という地図帳から取ったんですが、地図の上の方に小さな赤丸が書いてありますね。ここが一宮（いっく）で、私の隊の本部だったところです。その下の大きな赤丸が鉢伏山（はちぶせやま）という山で、ここが十一師団司令部があったところです。わが海原隊は上の一宮というところです。そこに農業会の倉庫がありまして、そこにおったんです。結婚して、最初、官舎をもらうまではここにおったんです。

「一宮」と書いて「いっく」と読むでしょう。おそらくみなさんもお存知ないと思うんですが、尾張一宮（おわりいちのみや）、関東地方でも「いちのみや」でしょう。「いっく」という呼び方があるんです。「宮（く）」です。佐渡にも「宮（く）」があるんです。どこから来ているか。京都からなんです。ご存知のように紀貫之が高知に行きましたね。ですから高知には京都の文化がたくさん入っているんです。京都の文化が佐渡と高知にあるんです。

伊藤 佐渡は流されたからですね。

海原 そうそう。それでこの「宮」を「く」と読むんですね。初めこれは「いちのみや」ではないか、と言うと、いや「いっく」と言います。「宮（く）」というのは「家」だと言うんですね。それが頭にあります。たまたま講演旅行の時に佐渡に行きましたら、あそこも「く」なんです。だから京都から北と南に分かれて行ったんですね。

鉢伏山が師団司令部なんですが、その司令部のことについて、この間だいたい質問がございましたから、表を持って来ました「師団司令部職員録のコピーを配布（資料1）」。これが終戦直後の時の師団司令

部の組織です。経理部部員とあるでしょう。それがこれだけ「十六人」いるんですよ。この中で現役は二人しかいない。水野さんというのは部長代行ですが、それと坂本という大尉です。この二人だけがいわゆるホンチャンで現役なんです。後は全部予備役将校です。だから、いかに予備役将校が当時の陸軍において主流を占めていたかということ。参謀部は上にありますが、これだけしかないんですからね。

経理部は将校が十六人います、ホンチャンは二名しかいない。経理部にそれだけ将校がいるということは、いかに後方関係が大事であったかということの証明になりますよ。その十六名いる将校の中で、経理学校出身の本当の職業軍人は二人しかいないのです。

それに関連して申しますと、偕行社の発行している月刊誌があり、これに「最近国軍の軍紀が乱れている、団結が弱まっている。その理由は予備役将校が多いからだ」という記事があったんです。それで私は鷹森師団長のところに行つて、「こんな記事を出しては駄目だ」と言つたんです。事實はそうかもしれない。陸軍士官学校出身者で全部を固めるのと、われわれ予備役将校が一緒になつたのでは違うけれど、士官学校出だけで務まるはずがないでしょう。それで偕行社の雑誌にこういう記事が出るのはまずいと思う、と言つたら、「その通りだ」と言うわけです。そして、師団長から偕行社の雑誌の編集局に抗議を出すということがありました。

いかに帝国陸軍が威張つていても、われわれ予備役将校が支えていたかということの証明になります。いろいろ司令部の機構をお尋ねになられましたので、どこかに資料がないかと思つていたら、この表が出てきたものですから。

こういうことで全部が師団長の下に付いているわけですね。参謀長

とか経理部長とか。私たちは、この前も質問がありましたけれど、経理部長の直接の部下だった。ですから参謀長に「海原、こうして来い」と言われても、「私は経理部長の部下ですから」と言えるわけですね。伊藤 この「部附」というのは何ですか。

海原 それはわからないんですが、そういう名称なんです。要するに任命は「官」なんです。どう言つたらいいでしょうか。内閣審議官というのがあるでしょう。審議官というのと、その審議官が何をするかは別ですね。「部附」というのは、審議官でどこに付いているかという勤務場所の呼び名ですね。

伊藤 具体的な仕事はその人によつて違うわけですね。

海原 そうです。経理部部員、主計将校というのは、金銭経理をするというのが一般の人の認識なんですよ。

伊藤 まあそうですね。

海原 史学会の会長をしておられる先生ですらそうですね。ましてや一般の人は、主計という金勘定で月給を払うものだと思つけれど、とんでもないですよ。後方関係を全部やつていた。昔の経理部部員の任務の重大さを大いに宣伝することになるんですが、それが一つです。

それから高知のことは、今日のことに関係がありますが、もう一つ申し上げたいのは、この間、新聞に出た決戦の地図を持って来ると言いましたが、あれよりも帝国陸軍のものがありませんから、これ「九州および関東方面決戦構想図」を持って来ました。アメリカがこう考えたというよりも、大本営がどう考えたかということです。「図のコピーを配布（資料2）」。

そこに大本営の「九州決戦構想」がありますね。アメリカがこう攻

めて来るだろうと想定していますが、一番右に「四国攻撃」と書いてある。必ず米軍は四国には攻めて来ると大本営は判断していたんですね。

伊藤 約二個師団ですね。

海原 そこで、私たちの師団が高知に持って行かれた。しかし、万一米軍が九州に来たら九州に、関東地方に来たら関東へ移動するということは申し上げましたね。それは、こういうことなんです。これが当時、昭和二十年七月における大本営の判断です。

伊藤 移動すると言ったって、どうやって移動するんですかね。

海原 それはこの前申し上げましたけれど、「注」が付いています、「一般の交通機関途絶の中を」と書いてあるんですよ。二万人の兵隊がどうやって動けますかね。それが帝国陸海軍の参謀の考えだということです。

こういうことを言うともた怒られますが、この前「馬鹿」という言葉で女房から文句を付けられました、安心しましたのは「馬鹿な大将、敵より怖い」という表現があるんですよ。これを私は発見しました。それまでどこにあったか覚えていなかったんですが、終戦の時に殺された森師団長の言葉なんです。それが「馬鹿な大将、敵より怖い」です。これを私はある旧軍人から聞きまして、宣伝したんです。本にも書いたんですが、だから「馬鹿」は引つ込めませんから（笑い）。『新潮45』に書いたんですけれどね。「馬鹿な大将、敵より怖い」と言ったのは、森師団長ですが、この人はいろいろなことを言った人です。柔軟な人です。いま相撲をやっていますが、相撲について「勝負は土俵の外にあり」と言った。名言ですね。そういうことを言った森さんの言葉で、「馬鹿な大将、敵より怖い」。これを、戦後ある大

会社の社長さんにご馳走になった時に言ったんですよ。そうしたら、その人が言ったことは、「海原さん、それは会社も同じだ」と言うんですね（笑い）。

伊藤 どこでもそうでしょうね（笑い）。

海原 馬鹿な大将はしようがないですね。殺すよりしようがないでしょう。でも殺せません。ヒトラーがそうでしょう。東條がそうでしょう。ムツソリーニがそうでした。馬鹿な大将、敵より怖い。近衛師団長の森さんまでが「馬鹿」という言葉を使っているんですから、私は引つ込める必要はないと思いました。「阿呆」とか「間抜け」とか言ったらいいとおっしゃいましたけれど（笑い）。それを『新潮45』に書きましたら、後日談があります。私が知っている旧軍の人から電話がかかってきまして、「あれは良かった、あなたの『馬鹿な大将、敵より怖い』というのは、その通りだ」と言う。旧大本営参謀がそう言っている。要するに馬鹿が多くないと、ああいうことはありませんよ。この二つを追加しておきます。それから今日の予定に入るわけです。

伊藤 二十一年八月に警視庁の警視になられるわけですね。

海原 その前に、これこそ本場に「速記を」ストップしておいてください。この前、伊藤さんが言われたけれど、結婚記念日を覚えていないと（笑い）。その弁明ですが、これは止めておいてください。

伊藤 いや、いいですよ。

海原 どういうことかという、まず第一に女房の親父は満州におるんですね。ハ爾濱で生死不明だった。私の両親は安芸というところがあります、そこに疎開させていたんです。そこに私の部下の幹部候補生の下士官の家がありまして、一軒空いていたものですから、その

家に私の両親がいた。しかし私の両親がおつても、女房の方はお袋だけ帰っているでしょう。親父は生死不明でしょう。そういうことですから式は挙げられませんね。だから式を挙げない。式を挙げていますから覚えがないんですよ、まず第一に。

それから第二には、その代わりに海原隊の解散式、将校が五、六人います。その解散式と、今度こういうことで女房をもらうということと併せて、一同で晩飯を食ったんですね。その場所が手結(てい)というところなんです。ここはいま国立公園になっていますが、手結に港があつて漁港です。そこに非常においしい魚料理が出る旅館があるんです。その旅館兼料理屋で海原隊の解散式を兼ねて、私の女房の披露をやったんですね。その当時、物が無い時ですが、この辺には物があるわけです。それから、この前申し上げた県の課長の根本(祐彦)君。これが私の二年後輩ですが、いろいろと手配してくれました。それで手結でささやかながら、割ににぎやかな日本式の宴会をやったわけです。

問題はその帰りなんです。女房、いや花嫁は、お袋とほかの関係者と一緒に別の車で帰ったんですね。後から私と根本君と、もう一人部隊の人間の三人は別の車で行ったんです。その私たちの乗った車がエンコしちゃうんです。当時の自動車でしょう。ちょうど南国市に後免(ごめん)というところがありますが、その手前の野市(のいち)町の辺りでエンコしちゃうんです。動かない。連絡方法がない。鉄道電話とか警察電話が利用できるんですが、そこまで行く方法がない。しようがないから、花婿の私と親友の根本君と、二台目の車の中で一夜を明かすんです。花嫁は先に帰っちゃったでしょう。

そんなことですから、とにかく滅茶苦茶なんです。新居と言っても、

一宮神社のそばの農家の納屋の二階でしょう。私たちが入るまでは、下に牛がいたんですから。そういうことですから、まわりが惨憺たる状況なんです。第一に女房の親父の生死も不明であるということになると、式どころじゃないんですね。前回も言いましたように、避難民が引き揚げて来て、収容したようなものなんです。だから先ほども言いましたように、官舎をもらうまでは、一宮のそばの百姓家の納屋の二階にいたんです。そういうことで、したがって結婚記念日もいつかわからないし、記憶がない。そういうことですね。

伊藤 そもそも結婚記念日がないような話ですね。

海原 ないんです。いつの間にか同居を始めたということですか。そういうことでご了解を願います。これからはまた「速記を」お願いします。

伊藤 いや、今までのもちゃんが入っていますから(笑い)。この東京に移られるというのは、内務省人事でパーンと来るわけですか。

海原 それはパンと来るんですか。

伊藤 何の予告もなしですか。

海原 何もありません。何の予告もないどころか、その前の話があるんです。発令されたのが八月三日でしょう。その二カ月ぐらい前に知事会議があつたんです。吉富さんという知事さんが知事会に出て、帰つて来て私は呼ばれました。「海原、お前を大阪の警察の刑事課長でくれという話があつたけれど断つた。いま進駐軍関係の軍需物資の処理もやっているし、まだ終わっていない。それだから断つたけれど、心得ておいてくれ」と言われますから、「私は別にどこに行きたいという気持はありません。知事さんの下にずっとおります」ということを言明したんです。それが二カ月前なんです。

ところが八月三日、ちょうど土曜日です。これは忘れません。その時は官舎に入っていました。官舎の裏に小さな庭があるんですね。そこにサツマイモを植えていたんです。当時は自活ですし、夏ですからその手入れをしていた。そうしたら、そこに電報が来たんです。「警視庁交通課長ヲ命ズ」と。へえ、と思いましたがね。いきなり電報が来たんです。知事さんは、「お前は当分おるな」と言うから、「私は知事さんがおられる限り高知におります、どこへも行きたくありません」と言っただけでしょう。

それで、さっそく知事の所在を探したんです。そうしましたら、ちょうど会計検査員が来まして、その会計検査員の人々を知事が料亭でお昼時に接待していたんです。ですから、そこへ私は行きました。「知事さん、こういう電報が来た。あなたは当分替えないと言っただけじゃないか」「おかしい。お前は当分高知にいるんだということで話をつけてきたはずだ」と言われ、「すぐ照会する」となったのです。しかし、もう発令が出ているんですからね。いきなり「警視庁交通課長ヲ命ズ」ですよ。

飯尾 辞令が電報になって来たわけですね（笑い）。

海原 それだけじゃないんですよ。当時はそういう慣例があったんですかね。警視庁だからかもしれないませんが、迎えに警部補が来たんです。**伊藤** それは何日か経つてからですか。

海原 その三日か四日後です。すぐ迎えに来た。これをもてなすのがまた大変ですね。まだ書類の引き継ぎの整理ができていないでしょう。だから知事さんに赴任延期の電報を打ってもらったんです。どのくらいでしたか、二週間ぐらい延期してもらいました。

伊藤 後任者は……。

海原 後任者は、私と同期の町田（充）君が来ました。

伊藤 その人に引き継ぎをしたんですね

海原 そうです。というのは、まだ全部終わっていません。それから大急ぎで書類の整理を始めた。まさか自分が替わると思わないうでしょう。「当分、お前はここにおつてやってくれ」と言われて、「はい、やります」と言っているんだから、のんびり細部の整理をやっていたんですね。そこへいきなり来たでしょう。だから区切りを付けないといけない。後に来た町田君は何も知りませんからね。同期だと言つても、そういうことは。確か十日か二週間の赴任延期をしてもいいました。

飯尾 その間、迎えに来た人は……。

海原 その間、高知県内を案内したんですけれど、狭い県でしょう（笑い）。しょうがないんです。そういうことで、当時内務省というのは、まさに電報一本です。長官になられましたけれど、私が仕えた人などは、東北地方の県に着いたとたん別の県に行ったという話です。内務省はそういうところです。ですから、本人の意図なんか予め絶対に聞かないですね。

伊藤 これで警察系統になってしまうわけですか。

海原 そうなんです。そこでまた話があるんです。私の前任者は山田正雄さんという方です。この人は後で保安隊に入つて「制服」になりましたけれど、第二部長にもなりました。山田さんが出て、どこかの県に行つたんでしょう、そのあと二カ月空席だったんです。警視庁交通課長は、いくら暇だといつても空席というのは珍しいんですけれど。後で聞きましたら、警視庁には格がありまして、よそ者はふつう採らないんです。いわゆる見習い、警視庁で見習いをした人間を採るわ

けですな。その時には巡查なんかをさせるんです。交番で勤務させる。あのころは、例えば鉄道省に入った人は切符切りまでやらせたんですね。そういうことで、警察に入った人は、街の交番の勤務までやらせるわけです。その間に仕事を覚える。それから上司は、どういう男か見ている。観察期間があるわけですね。それで合格したら採用されるわけです。そういうことが警視庁のしきたりだったらしいんです。

私たちの時は、ほとんどが軍隊に行っちゃったでしょう。だからそういうことがあり得ないんです。そこで空席だったんですね。しかし私に白羽の矢が立ったのは、誰が言ったのか知りません。知りませんけれど、これもまた因縁話みたいになるんですが、進駐軍の薪の話をしましたね。その時に警察部長の古屋（亨）さんの話をしたでしょう。その古屋さんは内務省の先輩なんです。昭和九年採用です。その古屋さんの官舎が、私のいた渉外課の事務所ですぐ裏なんです。私は、もとの営林局の建物ですけど、一階を渉外課にしました。そして二階、三階に軍政部がいたんです。その方が何かと便利ですからね。

伊藤 同じ建物の中にいたわけですか。

海原 そうです。軍需物資の処理と、進駐軍関係の事務とを一箇所です。やりたいたいと思いましたが、営林局の建物が空いていましたから、これはいいやということ、一階にわれわれが入って、二階、三階は「アメさん」。同じ建物におったわけです。万事、連絡がいいわけです。そのすぐ裏に警察部長の官舎があったんです。古屋さんの奥さんはケーキを作るのがお上手で、時々私は差し入れをもらったりしていたんです。ですから、これは私の完全な想像ですが、古屋さんが、「海原というのが高知におる、そしていろいろなことをやっているぞ」ということを言ってくれたんじゃないかと思うんです。それでいきなり電

報が来たんですね。警視庁に行ってみたら、先ほど言いましたように、前の課長がいなくなつて二カ月ぐらい空いていたんですからね。結構、課長が空席では困るポストなんです。

ですから、どうしてお前行ったんだ、と言われてもわからないんです。古屋さんにも確かめていませんから。後で私は古屋さんに仕えませうけれどね。埼玉県から警視庁の保安部長で来ますから。いろいろな因縁があるんです。

その因縁話の一つが、私が米軍との交渉に当たりますね。会話は全部自分でやっていたんですよ。それは冒頭お話ししたように、私は家庭教師をやっていたでしょう。教える相手は中学の三年、四年の連中で、専門学校の試験準備の英作文とか英語をやるわけです。だからずっと英語を教えていたわけです。そして私は軍隊に入りました時に、将校になつてから、家からいろいろ英文の読み物、当時は研究社に英語選集のようなものがありました。それを送らせたり。それから私はドイツ語ですから、独法関係の本を送らせて、満州でも英語とドイツ語は一人でやっていたわけです。そんな事情があつて、英語も受験英語の程度はできたわけです。それで、前回は申しましたが、通訳を集めてやらせたら話を通じないわけでしょう。それで私が話すと、結構通じますからね。だから重要な時は正式の通訳を入れましたが、それ以外は自分でやりました。それは後まで続くわけです。

だから人生を振り返ってみますと、何がどこで役に立つかわからんです。高等学校時代に家庭教師をやっていた。高等學校三年、大学三年で六年間、やめてからも一年間ちよつと英文を見ていましたからね。六年ばかりは受験英語程度の英語を教えていたわけです。そのおかげだと思ふんです。話してみたら、お前の英語でいいと言う。そ

れにもう一つ付け加えますと、最初に私は「俺のイングリッシュはブロークンだ」と言ったんです。そうしたら、「お前、それは言っちゃ駄目だ」と言われましたね。ブロークンなのは当り前だと言うんですよ。「お前たちは閉鎖された島国で英語を習ったんだ。英語を教えた先生方があれだから、お前たちがフルーエントなイングリッシュをしゃべれるはずがない。だからブロークンは当り前だ。それをブロークンだと思っただけじゃない」と言われたんです。

その時ちょうど台湾から高砂族の人が来まして、NHKのラジオ番組に出た時に、ずいぶん流暢な日本語をしゃべるんですよ。それは、何となくおかしく感じましたね（笑い）。あの連中が、あんなきれいな日本語をしゃべるかと思うとおかしな気になりましたね。それを思い出して、「ああ、俺はブロークンでいいんだ」と思った。そう言ってくれたのは、アメリカの将校ですよ。「自分でブロークンと言っただけじゃない。お前の英語で十分通じるから、間違っていたら直すから、どんどん自分でやれ。そのほうがお互いの意思の疎通にいいんだ」と言われたんですね。ですからそれ以来、私は全部自分でやっているんです。そういうことがありました。

三カ月の交通課長

伊藤 警視庁警視というのはどれぐらいの階級なんですか。これも階級なんですよ。

海原 階級です。警視庁警視と言いますと、軍隊で言えばどう言えばいいですか、警視は課長クラスですね。軍隊で言いますと士官です。少尉クラスですか。高等官の一番下ですね。その下が警部、それから警部補です。

伊藤 それは下士官になるわけですね。

海原 そうです。だから警部とか警部補が特進の人の上ですね。その上に警視があるわけです。署長は警視です。

伊藤 課長も警視なんですね。

海原 そうです。交通課長は警視です。交通課というのは広くて、今の交通部と違っていて、燃料の配給もやっていたんです。それが大変なんです。それから事業免許もやっていた。運輸省あたりの交通事業の免許関係もやっていた。そういうのを全部やっていましたから、課員も二百人ぐらいいましたかね。その燃料の配給をやる警部がいます。主任は警部なんです。優秀な人でした。この警部さんの机の前には、朝七時頃から長蛇の列です。その時の燃料の配給は大変ですからね。そういうことまで交通課ではやっていたんです。

伊藤 課の下に係があるわけですね。

海原 組織論になりますけれど、庶務係とか、燃料係とか、事業係とか、交通係とか分かれているんです。交通係というのは白バイですね。交通規制をやる。ただし、その時の警視庁の白バイの台数は何台だったと思いますか。終戦直後ですが。

伊藤 何十台というレベルですか。

海原 六台です（一同笑い）。

伊藤 もっとも、車の数も少ないでしょう。

海原 少ないんですけど、結構車はあるんですが、それはまた後の

話にします。六台でどうしているかというのと、六方面に一台ずつバラバラに取り締まりをやっているんです。私はそれをやめさせて、二台ずつ三班、三台ずつ二班、どちらにするかを決めさせて、結局二台ずつ三班を作った。それで一台行くでしょう。すると、連中は行ったと思うでしょう。その後にもまた来るわけです。だから、イタチごっこみたいなものですけれど。一台で六班やったら、一日一台の取り締まりですから駄目です。行っただと思っただらまた来た、というふうにしないと取り締まりの効果はないわけですよ。

それから白タクが横行していたんです。私は白タクの横行を聞きましたから、各ハイヤーの営業会社の社長を呼びまして、どうも白タクが多いようだからやめさせてくれということを書いて、まず確約を取った。その後で私は競馬の府中へ行っただんです。行ってみたら全部白タクです。それを全部調べて、帰って翌日、また会社の社長を呼んだんです。「昨日私は見えました。こんなことではダメではないか」と言っただんです。そんな時代です。

警視庁で課長に発令されて高知から出ますね。それまで私は米軍相手の仕事をしていましたから、四国四県の中は進駐軍の車に乗せてもらったんです。それはしかし、ありがたいような気がたくないうな。だって、満員ギョウギョウの時代でしょう。こっちは日本人のくせに進駐軍の専用車に乗っているわけでしょう。それで高松まで行きましたけれどね。そういう恩恵がありましたね。それから今度は本州に行く、そこからはもう全然駄目なんです。

伊藤 天国から地獄ですね。ご家族も一緒に行っただんです。

海原 ええ、家内と一緒に。それから警視庁から迎えに来た警部も一緒です（笑い）。この警視庁から迎えに来た人が、途中の主要なところ

に連絡しているんですね。だからそれは手配をしていて、通してくれるわけです。そんなことで東京駅まで無事に着きました。官舎は現在の衾町です。これは、いま私が住んでいる目黒ですが、そこに警視庁の官舎が十数軒あつたんです。その一号官舎が、私に割り当てられた官舎です。まず駅に迎える車がビュイック。古いですよ、年式は。でもさすがにビュイックですね。それに乗って東京都内を走ると、ガラガラですよ。今の目黒通り、車なんかほとんどいませんね。あんなにかい通りを、目黒駅から坂を上って行きまして、着いたのが一号官舎。こんな広い通りを造って、一体どうなるだろうと思えました。今は大変ですね。

それで一号官舎に入ったわけです。二階建ての官舎でした。その周囲に十二軒ばかり課長官舎があつたんです。そこに後で後藤田君も来ましたし、中曽根君もしばらくいましたしね。朝出勤の時はバスが一台出るんですよ。バスの運転手さんの官舎もありまして、それが八時半頃定刻に出て、みんな一緒に行くわけです。そういう生活が始まるわけです。

警視というのは、言わば高等官ですね。陸軍の階級で言うと、少尉か中尉ですな。しかし、もう一度繰り返しますが、燃料の配給もやっています。事業免許もやっています。それから一般の交通整理もやっています。この三つの違う仕事を全部やっていたんです。今で言うと、交通部長プラス運輸省の関係でしょうね。そういう仕事でした。さあ、そこで交通課長三カ月の仕事が始まります。

伊藤 三カ月ですか。

海原 なつた時に、保安部長の塩谷（隆雄）さんは、「三年やってくれ」と言われたんです。「わかりました」と言いました。それが三カ

月で生活課長に替わるわけです。そのとき私は文句を言ったんです。塩谷さんは後に消防総監になるわけですが、塩谷保安部長に、「塩谷さん、あなたは私に交通課長を三年やれと言ったじゃないか。どうして三カ月で生活課長に替わるんですか」と言ったら、「三カ月も三年も三は同じだ」と言うんです（笑い）。というのは、生活課長をやっていた小杉（平一）さんが栄転する後に移るんです。そんなことで、私の異動は全部突然ですね。私は生活課長をやった後で、今度は国警に替わるんですが、この時も突然、後藤田君から言い渡されるわけです。これは後で話しますけれど。予め事前に相談されることは一切なしです。また、それで良かったと思うんです。

伊藤 大体、内務省人事というのはそうなんですね。

海原 そうなんです。内務省というのは、先ほども言いましたが、電報一本で全部替わりましたからね。

伊藤 軍隊と同じですね。

海原 浮き草稼業、とこの前申し上げたと思うんですが、まさに浮き草稼業です。そういう役所だと思っっていますから。

知事になりたかったわけですが、なれなかった（笑い）。しかもなるチャンスがあったんですけど、歳が足りないもので（笑い）。その時に私の官舎の前におった松形（祐堯）君の話をしましたが、今でも宮崎県知事をやっていますよ。何期目ですかね。三年ぐらい前に女房と二人で招待されて、あそこのきれいな花を見ましたけれど。

「いつまでやっているんだ」と聞きました。「昔の王様じゃないかと。三期も四期もやれば」「いや海原さん、問題はそこです」と言っています。「辞められない」と言うんですね。辞めるとなると、後任の問題があるんですよ。松形が辞めるとなると、後を誰にするかということ

で争いになる。松形がおる限りはあれでいいじゃないか、となるわけです。松形君自身も、前の黒木（博）さんが妙な事件に引っかけた、結局無罪ですが、黒木さんが変なことで辞めて、その後に急に松形君がなったわけです。そういう意味では、非常にラッキーな人です。私は高知以来の友人で、電話一本で話しますが、「もういい加減に辞めたらどうだ」と言っているんです。「いつまでも王様じゃ困るだろう」と。

ご存知のように、空港の拡張も全部彼がやったんですね。それまでは宮崎県は新婚旅行のメッカと言われていた。それで空港を拡張したわけです。ところが新しい事業をやりましたね。シーガイアというのを。あれがいま大問題になっています。あれをどうするか見当がつかないんですが、外国の船を係留するような大きな波止場を造るとか。そういう企画になっているようですが、そういうことをきちんとしてから辞めたいと思っているようですね。時間がかかるでしょうね。余計な話になりましたが、私のおった内務省では本人の意思なんか聞かない、電報一本です。そういうことで交通課長になったわけです。

伊藤 交通課長は、では三カ月ですか。

飯尾 何をされましたか。

海原 そんなんです。初め三年と言われておって、私もそのつもりでいたんですが、何をやったか整理しますと、三つか四つになります。

まず第一に申し上げたいことは、婦人警察官を活用することを考えました。私の前の山田課長の時に、婦人警察官の採用が決まったんです。婦人警察官を採用して、しかもそれは一応交通課が預かっていたんですね。交通課で預かって交通の指導とか防犯の指導をやらせていたらいいんです。ところが、あまり仕事をしていないんです。私が

来てみまして、これはもったいないと思った。みんな立派な人たちです。応募してきた人たちが結構良かったものですから。私がまず考えたのは、九月から交通安全運動が始まるんですね。これにまず使おうと思った。どういうことをやったか。日劇とか新宿の劇場とか、渋谷の劇場、映画劇場で、休憩時間に、制服姿で交通安全運動の宣伝をやらせたんです。これは評判が良かったですね。やっている方も気持ちがいいんですな。あれば、休憩が五分とか十分とかあるでしょう。その間に婦人警官を出しまして、交通安全運動の取り締まり、普及教育をやっているということで、啓蒙、PRをやってもらいました。これは非常に評判が良くて、彼女たちも大いに仕事ができました。それをきっかけに各署でもやり始め、それから防犯関係や少年少女の指導もやってもらった。ですから婦人警官の活用、これが今でも記憶に残っています。

第二は、ナンバープレートの切り替えをやりました。まず私が交通課長になりまして、いったい警視庁の管内に車が何台あるんだと聞いたら、わからないんですね。

伊藤 わからないんですか。

海原 これは当時の事情を知っていたために敢えて申しているんですが、何台あるかわからないんです。それはこの前の質問にありましたが、隠匿物資があるんです。軍が持っていた車が勝手に払い下げられたり、ですね。例えば有名なあるお菓子屋さんも、トラック一台もらっているとかですね。トラック一台もらっている代わりに原料の何かを配給したとか、いろいろあるわけです。そういうことがあるものですか、あちこちに軍の隠匿物資があるわけです。

私が交通課長として交通取り締まりをやっている担当係長に、「い

ったい何台車があるのか」と聞くと、「わかりません」と言う。「何台車があるかわからないで、警察行政はできないじゃないか」と言うのと、おっしゃるとおりだと。おっしゃるとおりだけれど、わかりません。そこで私が考え出したんですが、ナンバーの切り替えです。いま持っているナンバーを全部新しいものにする。これをやりました。これは警視庁の予算ではできないんです。都の予算なんです。だから都に掛け合わなければなりません。それで私は都の方と話をしまして、OKになってナンバーの切り替えをやるんです。

この時に問題になったのが、どういうナンバーを付けるかなんです。それで一番から五〇〇番までは、今までの番号をそのまま新しい番号として認める。その他は従来のものは認めないと。それで三〇、〇〇番台は外国人、四〇、〇〇番台は官庁ナンバー、一般の営業用は七〇、〇〇〇以降と決めました。そして韓国人が二〇、〇〇〇番台と決めました。

そういうことでやったら、とたんに文句が出たのが韓国人ですね。なぜわれわれは二〇、〇〇〇番台なんだ、三〇、〇〇〇番台にしないかという。「だってあなた方は自分で第三国人と言っているじゃないか。第三国人と言っている以上、日本人でもない、外国人でもない、だから二〇、〇〇〇番台にしたんだ」と言っただけです。それが一つです。

それから四〇、〇〇〇番台が問題になったんです。これは私の交通課長室での会議で、係長たちが必ずしもすぐ賛成と言わないんですよ。だからなぜだ、と言った。官庁用ということがわかっていけば、それだけ効果も発揮するだろう、警察の取り締まり対象として。四〇、〇〇〇番台が嫌だというのは、それは君たちが酒を飲みに行く時に目立つから嫌なんだろうと言っただけです。そうしたら、そうだと言うから、

理由がある時にはちゃんと車で行けと。門の前に堂々とつける。どうもまずいという時には、百メートル手前で降りろ。そのぐらいきちんとした態度が必要だ。そうでなければ取り締まりはできないはずだと言ったら、誰も反対しませんね。それでついに四〇、〇〇〇番台もOKになるわけです。それで警視總監のところに行つて、こういうことで四〇、〇〇〇番台を決めました。いいですね、と言ったら、いいと言ふからやっただけです。それが問題になるのは二年後です。料飲禁止で、四〇、〇〇〇番台がずらつと新橋、赤坂に並ぶわけです。それを新聞が写真に撮るわけですね。中にはわざわざ新聞記者がハンカチを上に乗せて、それを撮っているんですね。新橋のどこ、と書いてあるんです。そんなことがありました。だから四〇、〇〇〇番台が後に問題になった元凶は私です。

その時になぜ九万までにしたかという、昭和八年ぐらゐの時に、一番車が多かつたんですが、そのときにも九万台なかつたんです。だから九九、九九九まであれば大丈夫だと思つたんですね。これは物の見事に外れましたが。それからしばらくずっとやっていて、それでご存知のようにナンバーが変わるわけです。これが交通課長としてやつた、婦人警官の活用の次の仕事です。

飯尾 これは東京だけでやればできたわけですか。ほかの県ではそれはしないこともあり、全国一律のナンバーではないんですね。

海原 全国一律ではありません。しかし、全国に影響があつたのは、右側通行か左側通行かです。当時は各軍政部ごとにバラバラだったんです。東京から大阪まで東海道を車で行きますね。そうすると、静岡県内になると右側通行になつちゃうんです、アメリカ式に。

東京憲兵司令部から呼び出しがあつたのです。言ってみたら、担当

将校が、「右側通行に改めろ」と言うんですね。ちよつと待つてくれと言つたんです。「それは大変な問題だから、私はいろいろと考え調べることがある。いまずぐと言われてもOKとは言えない。一週間猶予をくれ」と言つて、一週間の猶予をもらつて、一週間後に私は結論を持つて行つて「ノー」と言つたんです。東京憲兵司令部、当時は日比谷の角にありました。

どうしてかと言うと、占領軍最高司令部の高級将校の奥さんから、東京に來ると、「左側通行だから危険だ、直させろ」という話が出たというんですね。問題は、そのご婦人が誰かなんです。私のことが『文藝春秋』に出ていまして、そこに読売の堂場君が書いていますが、堂場君の書いたものを読むと、そう言つたのはマッカーサー夫人だ。私はそうじゃないと思うんですが、とにかくトップの奥さんが運転して、とても危険だと言つた。だから全部直せと言つた。それで私に、憲兵司令部の担当将校がそういうことを言うわけです。私は、ちよつと待つてくれと言つた後で、一週間後に正式に答えを持つて行つた。そうしたら、憲兵司令官の前で対決になるんです。私は「ノー」と言う。参謀長は「やれ」と言う。

私が「ノー」と言う理由は、まず第一に、今まで左側通行でやつてきた。左側がいいか、右側がいいか、これについては学説は何も根拠がない。しかし、あなた方が一番親しいイギリスはどうだ。今でも左側通行だ。郵便ポストも赤いし（笑い）、通行区分は左側通行だ。だから右側がいいか左側がいいかわからない。理論的な根拠はない。慣習上、そうなっている。

第二に、仮にこれを右側通行にしたらどうなるか。それは電車の停留所を全部替えなければいけない。車だけを変更しても駄目だ。大変

な金がかかる。戦争に負けた日本にそんな金はない。主として、その理由ですね。停留所がらみです。そういうことで私は反対した。そうしたら憲兵司令官は、私と参謀長の二人の話を聞いていて、さすがです。司令官はすぐ「ミスター海原の方が正しい」と言って、終わりです。その機会に全国的に左側通行に統一されたんです。それまでは場所によって違うわけですよ。

伊藤 それは困りますね。

海原 当時は車が少ないから良かったんですね。沖縄だけは本土復帰までずっとアメリカ方式だったんです。

伊藤 あの切り替えも大変でしたね。

海原 その時に私は、これはちよつと嫌なことなんですけれど、本庁の方がけしからんと思った。本庁の責任者の名前は言いませんが、「どっちかに決めてくれ」と言うんですよ。そんな言い方はない。私は断固「駄目だ」と言った。「大英帝国の通りだ」と言った(笑)。それで、その通りになりました。これが交通課長三カ月の間の一つの出来事ですね。

伊藤 さっきのお話の、車の登録を試みたら台数がわかったわけですか。

海原 わかりました。何台ということとはちよつといま記憶がないんですが、せいぜい三万台ぐらいではなかったかなと思うんですね。

伊藤 でも管内に三万台ぐらいはあったんですね。

海原 はい。これはうる覚えみたいなものですから、調べてみないとわかりませんけれど、そういうことでした。それはナンバーの切り替えですね。最初の婦人警察官の活用。そしてナンバーの切り替えでは韓国人、朝鮮の人を二〇、〇〇〇番台にしたのでだいぶ文句を言われ

ました。俺たちになぜ三〇、〇〇〇番台を寄越さないんだと言われて困りましたよ。公の仕事はその二つですな。プライベートなことを言いますと、各署の対抗野球試合を復活したんです。

飯尾 各警察署ですね。

海原 そうです。それはなぜかと言うと、私が赴任する前ですが、渋谷事件というのがありました。これは一般の新聞では報道されていませんが、渋谷の警察官と中国人との間の乱闘乱射事件があったんですよ。そういうことで、警視庁の管内が非常に殺伐としていました。これは何とかせんといけないと思いました、みんな殺伐としていますから、まずお互いの親睦関係が必要だと。そのために野球を一つやろうじゃないかと。それで各署対抗の野球を復活させました。昔、あったものです。問題は優勝旗をどうやって出すかということです。予算がないですからね。だから、どこから寄付してもらわなければならぬ。どこかの会社に頼むと、これまた問題を起こしますね。そこで百貨店協会がいいと思ったんです。

百貨店協会には、たまたま高島屋の村田君という人を友人の紹介で知っていたものだから、彼に頼んだんです。実は今度、各署の野球試合を復活させたい。優勝旗がある。予算はない。済まないけれど、百貨店協会を出してくれないか。そうしないと、いま経済取り締まりがうるさい時だから、個人に頼めない。百貨店協会ならいいだろう、と言ったら、わかりましたということでした。その後で、なるほどと思っただけですが、村田君がその話を協会に出したら、ノーになっちゃった。百貨店協会でも、関西と関東の争いがあるんですね。なぜ関西系の高島屋の村田さんがそういうことを警視庁の課長から頼まれたか、ということになるわけですよ。そこで中でゴタゴタしたらしいんです

けれどね。これは困ったな、と思ったんですよ。

結論は、高島屋が「私のところだけでやります」と。百貨店協会としては出せませんと。それなら、きちんとした材料費から加工費から見積書を出してくれと。ただし、金は出してないから大部分は高島屋の負担でやってもらうことになるかもしれない、と頼んだんです。それで優勝旗が入った。そういう経緯があつたんです。

伊藤 では幾分か払ったんですか。

海原 幾分か払ったんですよ（笑い）。幾分かは払ったけれど、実費以下でしょうね。実費の半分ぐらいじゃないですかね。その時には、ああそんなものかと思いましたがね。同じ東京で百貨店をやっている、出身がどうだとか後から出てきたとか、そんなことがあるんですね。なぜ高島屋さんがそんなことを斡旋しないといかんか、ということになったと言いますよ。そのとき私は初めて、ああなるほど世の中はうるさいものだと思つたんですよ（笑い）。交通課長三カ月はそのぐらいいですね。あつという間に過ぎましたね。

伊藤 そうでしょうね。

海原 それから交通取り締まりの関係で言い忘れましたが、交通安全運動をやるといふから、日劇の屋上に近いところが上がつてみた。そうしましたら当時、有楽町駅でみんな降りるでしょう。ダーツと斜めに横断して行くわけです。銀座四丁目の手前のところ。降りた人は全然、横断歩道も何もないんです。全部斜めに出ている。これはいかんと、思つて、交通課の庶務係の警部に言つたんですが、道路に柵を作らせると。もちろん警視庁の予算でできません。都がやるわけですね。都も予算がないと言ふ。それで地元の商店に話をしると。お客さんは全部斜めに渡つている。それならショーウィンドーの意味がない

と。お客さんは街を歩かせることが必要だと。だから店の前に柵を作るとは、同時に客寄せにもなるんだということ、若干の寄付を認めて、残りの金は都が出すということ、で、「やれ」と言つたら、都はやつてくれました。それで初めて日劇の前の道路に柵と言いますか、それができたんですね。それで、あちこちで真似をしてやつてもらつたんですけれどね。それぐらいで、結構三カ月は済みましたね。

伊藤 九十日ばかりですからね。

海原 結構楽しかったですよ（笑い）。今まで全然知らない仕事でしたからね。

生活課長として

—— 閻市・テキ屋対策

伊藤 それで交通課長から生活課長へ、というのは……。

海原 保安部にも三つ課がありまして。

伊藤 やはり序列があるんでしょう。

海原 序列というか、まず生活課という名前でしたが、これは経済取り締まりでした。それから交通課というのは交通取り締まり。もう一つ保安課というのは、風紀の取り締まりです。保安課長はいわゆる特進の人でした。ですから保安課の仕事と、経済取り締まりの中の食糧関係とは密接に関係がありますけれど、風紀点検・料飲の許可は全部保安課なんです。それを全部まとめて、保安部と言つたんです。保安部長の下に、交通課、保安課、生活課と三つありました。そういう編

成でしたね。私の前の生活課長は小杉平一さん、この人は昭和十一年「採用」、三年先輩でした。

伊藤 すいません、最初にお聞きしておきたいんですが、生活課長であつたのはどれぐらいの期間なんですか。

海原 私の生活課長の期間ですか。経済一課長を入れて一年九カ月になります。

伊藤 今度は長かつたわけですね。

飯尾 二十一年八月に交通課長になられますね。それで三カ月ということでは十一月ですね。

海原 それから翌々年の八月に企画課長に替わるわけですね。十一月に生活課長に替わりますね。それで二十三年八月四日に「国警の」企画課長に替わりますね。

飯尾 では企画課長になられる前までは、ずっと生活課長だったわけですか。

海原 二十二年の八月に生活課を二課に分け、経済一課長になります。

伊藤 今度は少し落ち着いて仕事ができたというわけですね（笑い）。

海原 何しろあの時代ですからね。当時、一番風当たりが強いところですね。経済取り締まり、これも課員が二百名ぐらいいましたかね。

これは食糧から物資から全部やっていましたからね。そこで翌年になつて、大変だということで、課を二つに分けたわけですね。それで経済一課と経済二課にしたんです。経済一課は庶務と食糧と渉外関係、それを私がやる。そして二課が物資、そこに後藤田君を呼んだわけですね。生活課が経済一課と二課に分かれる。そして後藤田君が二課長で来たというわけです。そのことは後藤田君の本にも書いてありましたね。

飯尾 ですから生活課長になられて、今度は経済一課長に転じられて

いるわけですね。

海原 そうです。仕事が半分になりました、生活課を経済一課と二課に分けたんです。ですから内容はほとんど変わらない。

飯尾 それは年が変わって一月頃ですか。

海原 一課と二課になったのは、二十二年の八月です。私としてはずっと経済をやつたつもりですから、分けていませんが……。

伊藤 そこでのお仕事はどういうものですか。

海原 これは実際大変な時代なんです、昔の年表を調べてみましたら。私が生活課長になりました、塩谷保安部長さんに言つたんですが、「私は交通課長ということではいろいろ考えていた。やることもいろいろある」と文句を言つたんです。しかし小杉君の後もないから。「十一年」の後の「十四年」ですから、簡単に言えば三年ブランクがあるんですね。普通なら適当にその間に人が入ってくるでしょう。ところが先ほど言いましたように、途中で軍隊に行つたりしているものですから、うまくつながらないわけです。そこで「昭和十一年」の後に、「十四年」が行つたということです。

それで生活課長になつて一週間ぐらいいですか、係の警部が来まして、「あさつて、二日後に鶯谷で聞の取り締まりをやる」と言うから、「ちよつと待ってくれ」と言つたんです。これは前課長の時に決めてあります、と言うんですね。それで、こういうことをやっているんだと言つたら、鶯谷で、朝午前五時頃から駅の前の広場に大変な闇市ができると言うんですね。これを徹底的に取り締まりますと。今まで二回ぐらいいやつたけれどあまり効果がないと言うから、ちよつと待ってくれと言つたんです。まず現場を見たいということで、翌日、部下の警部を二人連れて見に行つたわけですね。

そうしたら午前五時頃ですが、すごいものです。当時の鶯谷の駅前
に大きな広場があるんですが、大きなろうそくを立てて闇をやってい
る。私はずっと見て回ったんですよ。

伊藤 それは制服で行ったんですか。

海原 いやいや、私服です。そんなところに制服では絶対に行きませ
ん。行ったら、やられますからね。私服で行って、終わってからそこ
の人に聞いて、ここの責任者は誰だと。誰々がいまおると言うから、
ちよつと呼んでくれと言った。それで、その人に私は名刺を出したん
です。私は警視庁のこういう課長だと。今度からこういう闇の取り締
まりをやることになった。ついては、今日（その日）の十時に責任者
を五、六名私のところに寄越してくれと言ったんです。付いて来た警
部が止めるんですよ。課長そんなことをしたら駄目だと。名刺なんか
出すなど言うから、「まあいい、俺が自分でやるんだから」と言っ
たら、向こうは「はい」と言っ受けて取るわけです。

そうしたら、十時に私の警視庁の部屋に六人ばかり来ましたよ。み
んなすごい格好をしているんですな。軍隊の払い下げのオーバーみた
いなものを着たり、「頬に」傷があるのもおるし。そこで私が言った
ことは、「今朝現場を見て来た。今度僕は交通課長から替わった。あ
なた方がやっていることは闇じゃない。闇というのは、あくまで闇で
あるべきだ。何だ、あの鶯谷の現状は。あれは公然たる警視庁という
取り締まりの権威に対する挑戦である。こういう「公然たる挑戦」に
対しては、われわれは黙っておれない。だから、こちらは断固たる処
置をとる。そういうことで、仮に僕が殺されたとしても、何代か後ま
でやるだろう。徹底的にやるから、帰って君らの後ろにいる親分に言
ってくれ。警視庁は断固として挑戦に応じる」という交戦の宣言をし

たんです。「君たちに答えを求めようとは思わない。君たちの後ろに
いる責任者にそう言ってくれ」と言った。「わかりました」と言っ
て帰ったんですね。そうしたら、とたんに翌日からなくなったですよ。

伊藤 本当に闇になったわけですね。

海原 どこかに散っちゃったんですね。そうしたら警部が言いました。
「ああ、こういう方法があるんですね。もちろん、これで闇はなくな
らないけれど、やっていることが今までは公然たる挑戦行為であつた
ものが、それが普通の闇になった」と言っただけですね。

伊藤 闇がなかったから生きていけない時代ですからね。

海原 闇のことを言いますと、判事さんが亡くなりましたね。この方
は、統制の品物だけで生活していたんですね、配給の。だから栄養失
調になるんです。

飯尾 私どもは、もう一つ時代背景がわかりませんが、配給というの
はどういう仕組みになっていたんですか。そしてその取り締まりとい
うのは、それとどういう関係になっていたんでしょうか。

海原 全然環境が違います。食糧配給の方は市役所を通じてやりま
すね。農林省ですから。取り締まりというのは全然別です。

飯尾 取り締まりは、そちらの方から違反行為があるから、取り締ま
ってくれということですか。別々にやるわけですか。

海原 完全に別です。その話になりましたから、これは後で申し上げ
ようと思っただけですが……。次に私がやったことはマッカーサー司令
部に行ったことです。その食糧の取り締まりを指示している総本山に
行って私は、「私は今度警視庁の生活課長になった。それで闇の取り
締まりが重要な任務であるが、私は消費者の買い出しの取り締まりは
やらない」と言っただけです。「しない」と言っただけ。「現在政府が主食

の配給を遅らせたりして、遅配と欠配をやっている。一週間遅配するとか欠配するとか。こういう状況においては、警察官といえども非番の日は制服を脱いで、私服に着替えて、近郷近在に買い出しに行っている。それが現状だ。これは政府がきちんと配給をやらなければならないからであって、失政の結果だ。それを一概に闇だと言って取り締まるわけにはいかない。だから私は消費者の生きるための買い出しの取り締まりはやらない。ただし大口の、それを商売にしている連中は、これは経済の妨害だから、断固としてやる」と。その中には当時、中国人がいる、朝鮮人がいる。これは進駐軍にやってもらわないといかんと。「こういうことで私はやりたいと思う。この私の方針にあなた方が賛成しないなら、どうぞ総監に言って私を替えてくれ」と言ったんです。食糧配給の中心の課長に会いまして、私はこういう方針で、取り締まりをやりたいと言った。そうしたら、それでいいということになった。

だから私が課長をやっている間は、一切駅での取り締まりをやらなかったです。当時の新聞を見ますと全部出ていますが、例えば大宮でやったり、東京の手前でやっているんです。一回だけ丸の内ですることがあります。これは一回だけ。それは目的があつたんですがね。そういうことで、消費者の買い出しの取り締まりはやらないというのが私の方針でした。それでGHQの方では「それで結構である」ということになるわけです。

ですから、まず生活課長になったとたんによつたことは二つ。対外的には、闇はあくまで闇でやるべきだということと、司令部に対しては、都民の自営のための買い出しの取り締まりは一切やらないと。ただし大口の、それを商売にしているような人は徹底的に取り締まりたい。それについては警視庁だけでは無理だ。買って来る、供出してい

るところの地元での取り締まりが必要だ、それは私の権限ではないから、しかるべくやって欲しいと言いつたんです。そうしたら、「ミスター海原、おまえのポリシーでいい」ということになったんです。

伊藤 その大口の、というのはどうやって取り締まるんですか。

海原 これは大口と言っても、やっているのは小口なんです。その組織があるんです。今の麻薬の組織と同じなんです。だからボスを押さえないといけないんですね。

後で申し上げようと思つたんですが、その話が出たので言いますと、第三国人、朝鮮の人とか中国人、これには捜査の権限がないんです。後で交渉しまして、令状を出してもらったら、日本の警察官でもやれるようになったんです。

飯尾 どうして当時「捜査権限が」なかったんですか。

海原 それはわれわれが負けた国、戦敗国だからです。

飯尾 ということ、日本人以外については治外法権だったんですか。
海原 そうなんです。それに対してはCIDあるいはMP、どちらかがやる。ところが渋谷に、今でも覚えていますが、ガードのすぐ手前、右手のところに中国人の小さな店があるんです。そこで午前十一時から取り締まりをするという令状を、前の日にもらいます。それを持って、日本の警察、渋谷署の警官が行くんですが、十時五十分まで営業しているんですよ。そして十分前になったら戸を閉めちゃう。今で言うと、ブラインドを下ろしちゃう。これは当然通報されているな、と思つた。それで私は憲兵司令部に行きまして、自分でも何回も確かめたけれど、間違いなく誰かが通報していると。「そんなことはない」と憲兵の連中は言うんですね。だから一緒に来いと言って、将校を連れて、渋谷に行った。見ている、ちょうど時間だと。十一時からの令

状をもらっているんですね。十時五十分まではやっているんです。五十分になったら、スーツと戸を閉じる。「ああ、お前の言ったとおりだ」ということになった。

それで私は、「これはお宅の部内だ、タイピスト関係ではないか」と言っただけです。やはりタイピストでした。中国人、これが令状をタイプしますからね、場所と時間を。そういうことがあるんですよ。なかなか取り締まりといっても簡単じゃないんです。

飯尾 今の例ですと、令状の時間に現行犯でなければできないわけですか。

海原 そういうことですね。

飯尾 現行犯逮捕なのに、予め令状がいるという事態だったわけですね。

海原 そうなんです。そういう手間があったんです。というのは日本の警察関係は権限がないから。

飯尾 ということなので、それをする代わりに令状を、ということになるんですね。

海原 アメリカの方からの依頼を受けて、代わりにやっているんだということなんですね。そんなことなんですよ。

それからいま判事さんの話をしましたが、あの方は、本当に配給になるものだけでやっていたんですね。しかし統制外の品物がいっぱいあるんです。統制外の自由を買っていい物がある。それは知られていないんです。

その件について二つ申しますと、一つはある時に共産党の連中が警視庁の私の部屋に來まして、闇の話になって、「どうせ課長も闇でいろいろな物を食べているだろう」と言うんですよ。「私は取り締まる

立場だから、絶対にやっていない」と言っただけです。「しかし、そう言っただけであなた方は信用しないから、家に来てくれ。幸い二階は空いているから、何日でも、何人でもいいから泊まっていけ。その代わり食糧は全部持って来い。君たちの食糧までこっちは調達できない。だから君たちが食べる食糧を持って来い。二階は八畳と六畳が空いているから」と言いました。

飯尾 共産党の人たちが警察官舎で暮らすという……。

海原 そう、そう。どうぞ来てくれと。そうしないと、君たちはいくら言っても駄目だと。ああだろう、こうだろうと想像でいろいろおっしゃるけれど、見てくれと。私がどういう生活をしているか、一週間でも十日でも一カ月でもいい、と言っただけですよ。女房は嫌だと言うかもしれないけれど……。とうとう来なかったですね。そういうことがあった。

飯尾 それは闇ではなくて、統制外の物資を買っているということですね。

海原 そうです。例えば麩（ふすま）というのがありますね。動物の飼料ですが、あれも食べられるんですよ。ああいう物をみんな結構食べていたんです。それから同じ魚でも、塩乾魚に入るものと入らないものといういろいろあるんです。

これについて申し上げますと、朝日新聞がある時、大きな写真入りの記事を出したんですよ。これはちよつと調べてみたんですが、何月何日か思い出さないので。それに何と「銀座街頭を行く闇商人」という題で、堂々といかにも闇商人らしい人間が『和光』の前を歩いている写真があって、下に説明文があるんですよ。「いま警察は一所懸命取り締まりをやっているけれど、築地の場外市場にはヒラメや

タイなどの高級魚がうんとある」と書いてあるんです。それで「銀座街頭を歩く闇商人」という題です。この前も申し上げましたが、私は自分で写真を現像したりしたと言ったでしょう。軍隊でやっていましたから、わかるんです。これは完全に合成写真なんです。その頃の写真はあまりきれいじゃないですから、バックになっている『和光』や『服部時計店』の色と、前を歩いている商人の色が違うんです（一同笑い）。ちよつとした写真の知識や自分で現像したりした経験があれば、わかるんです。完全に合成写真です。それで朝日に電話をかけた。「誰がやった？ 出せ」と言ったら、いま（記者は）旅行中だと言う。「けしからん。朝日新聞がこんなことを書くから、俺は大迷惑をした」と。

そうしたらすぐ司令部、軍政部から電話がかかってきた。「何だ駄目じゃないか、朝日がこんなことを書いている。新聞が嘘を書くことはない」と言うんですよ。そこでまた議論になりまして、これは完全なる合成写真である。記事もでたらめである。嘘だと思ふなら、二日後一緒に築地に行こうと言って、二日後の朝、行ったんです。午前五時に。築地の外に「場外」がありまして、そこで統制外の物を売っていたんです。塩乾魚とか。全部それは統制外です。別にタイもなければヒラメもないんです。それが朝日新聞では堂々と売られていると書いてある。「わかった、銀座の記事は朝日新聞が嘘を書いたんだ」ということで、わかってくれたんです。

朝日は、そういうことを知りませんよ。軍政部は納得してくれた。収まらないのはこつちです。それで責任者を出せと、強硬に言ったんです。そうしたら旅行中だとか何だとか言って、言を左右しているんです。一週間して、総監からお呼びがありました。「君、いま朝日

に文句を付けているらしいけれど、もう勘弁してやってくれ」と言う（笑い）。「それは私は、個人でやっているんじゃない。警視庁の権威にかかわると思つてやったんだから、総監がそうおっしゃるならいいですよ」と言った。「朝日としては嚴重に処置するということになっているから」と。それで、私も「いやわかりました」と。そういうことがあつた（一同笑い）。

伊藤 朝日が外からやつたんですね。

海原 珊瑚礁の事件があつたでしょう。他にもありますよ。伊丹かあつちの方で、追放された幹部との対談をでつち上げたり。

伊藤 ああ、伊藤律の会見ですね。

海原 夕刊の紙面を半分使つて。あれは嘘でしょう。だから體質的にあるんですね。新聞をやっていると、そうなるんでしょうな。三回もあればね。最初は私の時ですよ。それで昨日図書館に行つて昔の記事を調べたけれど、古いですからよくわからないんです。こういうことがあるなら控えておけば良かったですけれどね。しばらくは、その写真を取つておいたんですけれどね。

飯尾 探してみます。それは冬のことでございましたか。

海原 いや、冬ではありませんね。春、冬が終わつてからですな。そういうことがありました。

飯尾 朝日も原紙にはあつても、文句が付くと、ひと月先に縮刷版にする時に、そこを白紙にしたりして（笑い）。

海原 保存版にはなかつたりしてね。これを調べてもないんですよ。

飯尾 替わりの記事を入れてごまかしたりするけれど、時々白地が残つたりしているんですね。

海原 ありますね。昨日も実は有栖川宮公園の図書館に行つて調べた

んですが、ないんですね。縮刷版でしょう。本物は、あれ「マイクログフィルム」で見るとでしょうね。あれはなかなか時間がかかりますからね。そんなことがありました。

もう一度整理しますと、生活課長として対外的には、あくまで堂々と挑発するような行為はやめると言った。それから進駐軍には、消費者の取り締まりはやらないと。この二つを出して、OKをもらった。

それに関連しまして、斎藤（昇）さんが警視総監になったんですが、しばらくしてから警視総監の斎藤さんがGHQに呼ばれたんです。私はお供をして行った。斎藤さんは昔、そういう連中と付き合っていたんですね。日比谷の「マ司令部」に行きまして、言われたのは、組の解散です。

伊藤 暴力団ですか。

海原 暴力団ではなくて、露天商同業組合、テキ屋。暴力団の方も前にあるんですが、それは保安課の関係なんです。きつかけとなったのは『ニューヨーク・タイムズ』の記事なんです。『ニューヨーク・タイムズ』は、これも調べたけれど、日にちを書いておいたメモをなくしてしまいました。日本で言うと一面で、長い記事が出ました。マッカーサー司令部がいろいろ取り締まりをやっているけれど、実は東京では、シカゴのアル・カポネのようなボスの組織があつて、それが組合を壟断している、ということが書いてある。それが元なんです。それで組の解散を言われた。調べてみたら、そういうことなんです。

あれは、みなさん方日本人の間にも間違いがありますが、当時は新宿の小津とか安田とか和田とかありましたね。あれは成り上がりなんです。戦後の新興ボスなんです。本当のテキ屋の組合は甲州屋何代目というのがあつたわけですね。斎藤総監が呼び出されて、こういうこ

とだ、本国からも言ってきたと。マッカーサー司令部はけしからん、取り締まれということだと。

取り締まれと言われても、取り締まりだけでは駄目だと思つたんです。私は、だから組合の解散をやつたらどうかと思ひまして、調べたら日暮里に甲州屋の何代目かの本当の親分がいるわけです。それに連絡を取つて「会いたい」と言つて会つたわけです。私は一人だけ証人を連れて行った。NHKの坂本君です。後に自衛隊に入りまして、最後は幹部学校の校長になりました。亡くなりましたけれどね。坂本君というNHKの人と私は親しかつたので、「お前、証人で来てくれ」と頼んだ。同時に私もちよつと怖かつたんです。甲州屋何代目か親分のところに行くわけですからね。それでコルトの私服用の小さい拳銃がありますね。それを身に付けて、証人として坂本君を連れて二人で行つたわけです。普通の新聞記者を連れて行くと記事になりますから。うるさいからね。坂本君ならNHKですし、よくわかつていますから、秘密は秘密にしてくれますから、連れて行った。

それで私が諄々と大勢を説いたわけです。こういうことだからと。しかし、こういう記事が出た以上はGHQはいくら言つても何ともならない。そう思っているんだからと。この際、今まであつた組を解散して、商法上の同業組合にしたらどうだという話をしたんです。お屋ですが、ご馳走をいっぱい並べてくれました。食べて話した。よくわかりました。幹部と相談しますということになりました。三日ほどして返事が来ました。「わかりました。おっしゃつたことはよくわかるから、これまでの組は解散いたします。新しく商法上の商業同業組合を作ります」ということで解散したわけです。それで一切今までの「組」はなくなつたんです。そういうことをやりましたね。

飯尾 GHQは評価しましたか。

海原 しましたね。

飯尾 解散したのは、どうやってわかるんですか。

海原 それはやはり向こうで調べるんでしょうね。後は知りませんけれど、CIDとかMPを使いまして、情報がありますから。

伊藤 その新宿の小津組なんていうのもそうなんですか。

海原 あの小津は成り上がりでして、自分の勢力下に何百人という露天商がいると、子分何百人になっちゃうんですが、子分でも何でもないんですよ。子分はせいぜい十人ぐらいなんです。

飯尾 シマに人が来ているだけだということですね。

海原 そうそう。それを『ニューヨーク・タイムズ』あたりでは、何百人となるわけですよ。だからアル・カボネになっちゃうわけですね。(笑い)。それはいくら言っても聞きませんからね。

飯尾 そうすると小津組なんかも、商法上の組合に入ったわけですか。

海原 そうそう。

伊藤 ああ、そうですか。

海原 その連中が挨拶に来ました、塩谷保安部長のところ。小津氏は、「実は海原課長の伯父さんには大変お世話になりました」と言うんです。海原清平ですね。

飯尾 久しぶりに名前が出てきましたね。

海原 これは前にお話ししましたか。海原清平は東京露天商同業組合の組合長を頼まれてやっていたんですね。その時、メートル法が施行になったんです。

飯尾 それは伺わなかったですね。

海原 そうですね。省略したんです。メートル法が施行になりました。

その時に伯父は、露天商だけは除外にしたんですね。というのは、今まで一間(いっけん)何尺でやっているでしょう。それをメートルに直しますと困っちゃうわけですよ。何十センチになって。彼らは一間(いっけん)がいくらとかやっているでしょう。だから、露天商には適用しないという除外例を伯父は運動して作ったんです。

飯尾 そんなことができたわけですか。

海原 そういうことがあったんです。海原課長の伯父さんにお世話になったと言いました。「メートル法施行の時に、われわれは大いに助かりました。その甥御さんに今度解散を命ぜられました」と言う。だから私は、「それも浮き世の流れです」と言ったんですけれども。そういうことがあるんです。

伊藤 今、『鳩山一郎日記』を編集しているんですけど、そこに海原、海原とよく出て来るんですね。これはたぶん伯父様ですね。

海原 この前申し上げましたように、「鳩山の懐刀」と言われていましたからね。

伊藤 もう、しょっちゅう出て来ます。

海原 そうですか。それで薫さんの共立学園の応援もやっていますね。

伊藤 そうですか。そちらの方も。

海原 娘が三人います。三人ともあそこの学校に入れています、父兄会の会長とか理事長みたいなことをやっていますね。それで最初にお見せした写真、胸像の話になるわけです。

伊藤 ああ、そうですか、わかりました。

海原 それには六代目の勲章の事件なんかは出てきませんか。叔父が鳩山さんの子分だということで見つかったことなどは出て来ませ

んかね。それは民政党の総監、丸山鶴吉さんが鳩山を狙ったんですよ。鳩山を狙うには海原を引っ張れと。海原を引っ張れば何か出てくるだろうと言われたんですからね。

伊藤 昭和十二年よりも後しかありませんからね。

海原 ああそうですか。それならありませんね。そんなことで、今は生活課長時代の話ですね。

伊藤 組の解散の話ですね。

海原 それで解散したんです。助かりましたね。形は商業組合になりましたからね。銀座の組合の方は、上田長清さんという名前も覚えていますが、この人は全然あっちの世界とは関係のない、本当の素人でした。

飯尾 やくざではない露天商なんですね。

海原 そう。これも賛成してくれましたね。上田長清さんも、海原課長の言うことはよくわかりましたと。協力者はありました。その時、事実上組合のボスみたいなことをやっていた人は古本屋を始めましたね。これが思い出ですね。何度も言いますが、法律に基づいた商業組合に編成し直したということです。警視庁での会議で、GHQから組の解散を言われたと言ったら、時の刑事部長、亡くなった藤田次郎さんですが、「海原君、君の英語の聞き違いじゃないか」と言いました。参りましたね。「向こうは警視庁が自発的に行動しなければ、命令を出す」と言ったんです。GHQは絶対的な権威がありますからね。「そこまで言ったのか、ああそうか」です。

伊藤 GHQは直接警視庁に命令したりするんですか。

海原 その時はそうですね。警視総監を呼び出したわけですから。警視庁を押さえれば、全国の警察もそれに倣うということでしょうね、

交通規制と同じで。何度も言ってくどくなりますが、『ニューヨーク・タイムズ』にそういう記事が出たというのが発端ですから。「マッカーサー司令部はいろいろやっているけれど、事実上取り締まりができていない。シカゴのようなものだ」と。それは、このぐらいの長い記事でした。これもどこかにあったはずですが、見つかりません。

伊藤 まだこれは内務省のある時期でしょう。

海原 そうです。

伊藤 でも内務省を通じてではなくて、直接に来るんですか。

海原 警視庁の取り締まりのことだからでしょう。

伊藤 そうですか。

海原 それは警察の中では警視庁はナンバー・ワンでしたからね。ですから当時の説明は、いろいろ背景とか条件がありますから、単なる活字だけではとてもわからないんですが、まあそんなことです。生活課長時代にはいろいろなことがございましたが、大きな点はそんなところですか。一課と二課に分けた。二課長に後藤田君に来てくれと言った。そうしたら後藤田君がちよっと待てと言って、俺には神奈川県長の話もあると。これは彼の本にも出ていましたね。神奈川県と縁があるんです。「そうか、それは神奈川県でも経済二課長でも、どちらでも君の判断だ」と言った。そうしたら、彼は二課長で来たわけですね。それが彼の警察との縁のつき初めです。

盟友・小佐野賢治との誓い

飯尾 先程のお話だと、内務省人事というのは一方的に来るんですが、この時は課を新しく作るので、海原課長も人事の口が出せる状況になるわけですね。それで知り合いに声をかけるといえることができるわけですね。

海原 そういうことですね。もともと総監に通しますがね。それからもう一つ背景を言いますと、当時の警視庁は水戸の勢力が強かったんです。水戸高校です。丹羽喬四郎氏とか、岡崎英城氏とかです。いちいち名前を言いませんが、私が警視庁に来ることになった時に、先輩から、警視庁に行くなら誰々に挨拶に行けと言われた。どこに行けと言われるわけですね。その時私は、「いや、そういうところには行かん」と言っただけです。「挨拶に行くのなら、全部の元総監のところに行かなければいかん。特定の人のところだけには行かない」と言っただけです。だから私は何処にも行かないんです。そうすると、先輩の顔を知らないでしょう。警視庁の廊下で会っても挨拶できません。そうすると、あいつは廊下で会っても挨拶もしないということになるわけですね。

それを助けてくれたのは丹羽さんでした。これはやはり水戸ですけれど、今の丹羽（雄哉）さんの親父さんですね。「海原君はこういう男だ」と庇ってくれたのです。それは保安部長の塩谷さんから、「先輩と飯を食わんか」と言われて、喜んで付いて行ったら、そこに丹羽

さんがいまして、その時にいろいろな話が出て、私はこういうことで「どこにも挨拶に行きません」という話をしたわけです。そうしたら、「わかった」と言うわけですね。それで丹羽さんが、海原というのはこういう男だと言ってくれました。

飯尾 他の人に言ってくれたんですね。

海原 そうです。

さて、警務課長の話になるわけですが、石井（栄三）さんが警務部長です。その時に、本来なら「後藤田氏より」私の方が先に「警視庁に」行っていますから、同期なんです。私が警務課長になるといえる考えもありますね。私はならないと思っていたんです。それは背景が違いますから。それで後藤田君が警務課長になるわけです。後藤田君は私より後に来て、経済二課長から人事を担当する警務課長になりました。その時に石井警務部長が私を呼んで言った言葉が、これはご参考になるかどうかですが、「海原君、君の方が先に警視庁に来ていたんだから、本来なら警務課長は君がなるべきであるけれど、歳が後藤田君のほうが上だから」と言うんですね。「部長、そんなことをおっしゃらなくても、私になったのでは駄目です」と言っただけです。「もちろん歳は私が三つ下だし、背景が違うから、同じことを私がやっても、私なら文句を言われる。後藤田君なら文句を言われぬ。その違いがあります。それは、警務課長で人事をやる以上は当然考えなければいけない。何も私がやることはない。後藤田君が後から来て警務課長になったということで、私は何とも思いません。私自身は不適だと思えます。後藤田君が警務課長になるのは正しいと思えます」と言ったら、「ああそうか」と言ってくれたんですね。「後藤田君の歳が上だから」と言われましたから（笑い）。

飯尾 いろいろ考えておられるんですね。

海原 後藤田君は、だからいろいろなことをやりまして、批判も出ましたけれど、批判が出ただけで終わりました。それはやはり背後に岡崎英城、丹羽喬四郎という諸先輩が付いていますからね。それは違います。

飯尾 思い切ったことをしても支えてくれるということですね。

海原 そういうことですね。誤解されないと言うことです。私がやったら、同じことをやっても「あの野郎！」ということになるけれど。

その時の背景を言いますと、正月、昔は今と違って年始回りがあるのでしよう。そうすると署長さんが新年の賀詞交換をやる、各部長のところに行くわけです。その時に、どこに一番行くかが問題ですな。それは刑事部長、保安部長等とありますからね。一番たくさん行くのは、藤田次郎刑事部長さんのところでした。これは将来の総監だということになります。西村(直己)さんのところは新米の人だから少ないですね。そういうことがありました。だから、最初の集まりは全部警視総監のところに来て、二次会でどこに何人行くかというのがすぐわかるわけです。

それを私は、後から考えると馬鹿なことをしたと思うんですが、係長諸君に、「私は警察に来てみて、警察に闊があるのでがっかりした。君たちは、警察講習所は同じじゃないか。ところが君たちはみんなハッピを着ているだろう。」⑤とか「⑥」とか「⑦」とか「⑧」とか「⑨」とか「⑩」は藤田、「⑪」は西村、「⑫」は絹川二郎、ですね)、みんなハッピを着ている。それじゃ駄目だと思ふ。君らはむしろ講習所何期ということとで団結すべきである」とか言ったんですね。それは全部伝わりますね(笑い)。私は警察にそんな派閥があるのはけしからんと思つたん

ですがね。それで言ったわけです。それが当然影響するんですが。

今度は警視庁からの転勤です。その日は国際興業の小佐野(賢治)君の事件で、私ら四人ばかり、警察は私だけですが、黒沢弁護士とか、元の京橋署長も入っていました。横浜のCIDと呼ばれた。それは小佐野が闇物資をどうした、こうしたということですね。当時は小佐野は強羅ホテルなんかをやっていた。「来てくれ」というのはCIDから来ましたから、当然私は「アメリカさん」だと思つて行ってみましたら、バラックの小屋の中に座っているのは日本人です、刑事が二人。私が入って行くと、いきなり話しかけますから、私が、「一体、あなた方は……。見たら日本人じゃないか。CIDだと言うから、当然アメリカ人だと思つた。あなた方はたぶん神奈川県警の人間だろう。私は警視庁の課長だ。警視庁の現職の課長を尋問するのなら、少なくとも警察官であるならば、姓名ぐらい名乗れ」と言つたんです。そうしたら「はいッ」と言つて立ち上がつて、「私は何署の何であります」と言うわけです。そういうのがCIDなんです。

要するに、小佐野は闇物資をいっぱい抱え込んでおる。それで悪いことをやっているけれど、彼は警察に顔が利く。日本の警察は何ともならない。だから米軍が取り締まりをしてくれ、という投書がいつばい来ているんですね。それで調べられた。その二人がいろいろ聞きますから、一体何を君たちは調べたいんだと言つたら、実はこうだというから、「そうか。私は宣誓供述書を書く」と言つたんです。

それに、「小佐野賢治と私・海原治は大正六年、同じ年の生まれである。小佐野は一月何日、私は二月三日、彼が何日か先であるけれど、同年である。それから、小佐野の秘書をしている石田君というのは私の中学の同期生である。それから、小佐野の会社のホテル部をやつて

いる部長は、私の伯父海原清平の運転手をやっていた。そんなことで、いろいろ知り合いがいる。そして小佐野という男は立派な男で、将来日本の経済を背負って立つ男だと思っているから、僕は付き合っているんだ」ということを書いたわけです。

それから刑事が、「供応があつたことはないか」と言うから、「供応とは何を言うんだ」と聞いたんですよ。そうしたら「一緒に食事をするのだ」と言うから、「そんなことは何回もある」と言つたんです。こちらもご馳走になるし、向こうもご馳走になるというか、家に来ているんですね。仲間であるから、供応なんていう言葉は妥当ではないと。そういうことを書いた。それで「小佐野は経済界で、私は官界で、お互いに戦いに敗れた日本という国をしつかりさせようということだ」と誓い合つた中である。盟友である」と書いたんですね。これでもいいかと言つたら、結構ですと言うから、それに判子を捺して出して帰つたんですね。結局、あの事件はくだらんことで、実体は何もないです。これをしゃべっていたら時間がありませんからね。

さて、横浜でそういう宣誓供述書を書いて戻つて来ます。そうすると午後一時を過ぎていきますね。警視庁の横の入り口がありますが、そこを入つて上がつて行つたら、ばったり会つたのが後藤田君なんです。警務課長です。それが「海原、お前、国警本部に替われ」と言うんです。「何だ、いま俺は横浜から帰つて来たばかりだ。それで国警の何をやるんだ」と言つたら、「国警本部の企画課長だ」と言う。「そうか、じゃあ考えさせてくれ」と言つたら、「別に考えることないだろう」と言うんですね。「そうか」と言つて、「俺はいま横浜から帰つてきたばかりだよ。お前が知っているように、帰つて来て、今そこで車を降りて上がつて来たんだ。いきなり替われと言われたって、俺も

考えてみたい」と言つたら、「なるべく早く返事しろ」と言う。

私はちよつとムツとしましたね。そういう状況下ですからね。だから、「ハハン」と思いましたよ。「ハハン」と思つたのは、海原が小佐野の件で米軍に調べられた。ひよつとして何か出てきたら、これは警視庁としてまずい。だから国警本部に替えようということを、ある部長が言つたんですね。部長会議でそうなつたんです。それで私は国警本部の企画課長に移るんですが、企画課長には、三輪（良雄）先輩がなつたばかりなんですよ。その日、彼は千葉かどこかに出張しているんです。そこへ私が行くわけです。

だから私は親父に、「実はこんな話があつて腹が立っているんだ」と言つたら、「もうお前も時期じゃないか」と言うので、「わかつた」と言つて、すぐに後藤田君のところに電話をかけて、「わかつた」と言つた。ということだ替わつたんです。

これはまた転勤ですね。しかし背後には、海原には何かあるに違いないと言つた人がいるんです。警察の中で、「海原は殊に小佐野と親しい。したがつて、小佐野からいろいろと便宜を受けているに違いない。今度「アメさん」から調べられたら何か出てくるかもしれない。そうすると、現職の警視庁の課長がそういうことでやられたら困る。どこかに出した方がよい」と。そういうところですよ、世の中は。

飯尾 しかし、これは栄転ですか。

海原 （笑い）形の上では栄転ですね。三輪先輩の後ですからね。三輪さんが会計課長に移つて、私が三輪課長の後の企画課長になるわけです。部長は柏村（信雄）さんですからね。それで柏村総務部長の下で、三輪会計課長、海原企画課長の三人は、「柏村一家」と言われたぐらい、よく飲んで騒いだ。まあ、栄転でしょうね。

伊藤 その間に内務省の解体があるわけですが、これは先生との関係はどうでしょうか。

海原 私は全然ありません。ああそうかと思っただけです。ただし、高知の部隊解散の時に私が作文を書いたことは申し上げてないでしょう。これは師団長が師団司令部の将校全員に、これからの日本のあるべき姿について作文を書けと言われた。それで一文を出したんです。私は、アメリカ当局は「3S政策」をやるだろうと書いたんです。その「S」というのは、スポーツ、スクリーン、セックス。占領国アメリカは、この三つの「S政策」を日本国内に広めて、これによって日本を弱体化させるという政策を採るに違いない。さて、これに対してどうするか。日本は歴史を見ても、アメリカの主導に対して、日本人の良いところを持っていて、これに対して反撃するだけの素質があると思う。歴史を見てもそう思う。だからアメリカの「占領3S政策」に断固屈服しないことである。その中心になるのは、軍服を着てお国のために死ぬことを決意したわれわれ元軍人である。理由はともかく、一切を捨ててお国のために死ぬという決意をしたんだから、それが日本復興の中心になるべきである、ということを書いたんですね。必ずアメリカは三つのS、スポーツ、スクリーン、セックスを広めて、日本を弱体化させるに違いない。これに断固対抗すべきである、と書いたんです。

そうしたら私の作文が第一席になりまして、師団長からお褒めの言葉をいただいた、賞品は図書(ずのう)です。今なら金一封ももらえるでしょうが、図書をもらいました。そういうことを考えていました。見ていると、実際にそうでしょう。やることは日本弱体化政策ですね。だから、これに対抗してやろうという気持を私は持っていました。し

たがいました、後で出てきますが、企画課長としてもアメリカに行つて、「あなた方は日本をどうするんだ」という話になるわけです。それは高知で終戦を迎えた時からの私の判断です。

そこで小佐野の事件の時、宣誓書にわざわざ「日本の復興のために、お互いに同年の小佐野と俺とで努力しよう、それぞれの分野で活躍しよう」ということを誓い合った盟友である」と書いたんです。しかしその、盟友であると書いたとたんに「お前、替われ」でしょう。だから「考えさせろ」と言ったら、「何を考えるんだ」と言うから、「いま突然ここで言われたって、まだ昼飯も食っていない」と言つて、相談した相手は親父なんです。親父は「お前もくたびれたろう」と言う。それで女房には「疲れたから今度替わる」と言った。企画課長が何か、私は知りません。とにかく国警本部に替われと。そうしたら企画課長だということ。それが警視庁と縁が切れる最後のところですね。

ですから、今までのご質問にありましたように、私の転任は全部本人の意思ではないんですよ。自然に、というのはおかしいですけど、そういうことで決まってしまうわけですね。

牧原 そうすると、内務省が解体するまでは内務省警保局があつて、それが国警本部に替わると言うんですが、警視庁にいらつしやったイメージとしては、そう大きく変わったという感じではないんですか。

海原 そうは思いませんでしたね。私が思っていたのは、後で申し上げますが、自治体警察ができてバラバラになった。これを何とかせねばいかん、ということだけです。それは全国で一千六十幾つかできましてね。後で当然、企画課長の時に話が出るんですが、公安委員会というのはどんなものかわからない。特に長崎の公安委員長なんていうのは、毎日警察に出勤しているんですから。公安委員長と警察署長と

同じだと思ってるわけですよ。それから北海道のどこかの警察の署長が、部下は六人しかいないのに、警視総監と同じ格好をするという（笑い）。そんなものですよ。いざとなると、本当にいろいろなことがあるんですね。

これも後で申し上げようと思ったんですが、「国家地方警察（ナショナル・ルーラル・ポリース）は間違いである、名前を変えろ」と警察隊長会議で発言した男がおるんです。私の同期です、もう亡くなりましたが。これは誤訳であると言っんです。「ナショナル・ルーラル・ポリースというのは、正しく訳せば、全国村落警察である」と言うんですね。その通りですよ（笑い）。だから、誰が国家地方警察と訳したのか。だいたい、国家と地方とは違うでしょう。誰があんな名前を付けたのか、わからない。

伊藤 これは非常に混乱する元ですね。

海原 だからその指摘をした人は正しいんです。これは誤訳である。全国村落警察に直せと言った。そういった男は、後でまた国警に入りますが、内務省の同期ですよ。それを堂々と警察隊長会議で発言するんです。

伊藤 自治体警察以外の警察は……。

海原 自治体警察が一〇六五で来たんです。一番いい例を言うと、東京と横浜です。それぞれ伝統と格式を持っている。警視庁と横浜では仲が悪いんですね。例を言いますと、これは聞いた話ですが、警察官が嫌がる事件というのは何だと思いませんか。川で溺れた水死体の確認ですね。

飯尾 竹竿で相手の岸へ押しやるという話ですね。

海原 そうそう。横浜と東京の間の多摩川で水死体が上がって来ます。

そうするとお互いにあっちにやる（笑い）。ことほど左様に、横浜市警と警視庁とは仲が悪いんです。管区の警備部長をした時に体験するわけですが、横浜市警から、当時共産党の日本の国内軍事行動についての情報が入るでしょう。本来、警視庁に言うべきでしょう。言わない。私の所に来る。私も各自治体警察の仲を良くしようと思って努力していますから、横浜市警の担当部長から電話がかかってきて、こういうことだと言われると、それは警視庁の管内じゃないかと言うと、そうですと言う。じゃあ、お前の方から直接言えと言うと、いや私に間に入ってくれと言うんです。それで私の部屋に、警視庁の刑事部長の古屋さんに来てもらって打ち合わせをする。共産党の軍事会議が下の町のことであるという情報を横浜市警が言うと、警視庁の方は、その情報を持っていない。「まさか」と思っているわけですね。ところが下見に行くと、どうもあるらしい。

それで初めて、共産党の第一回の軍事会議に集まった連中が捕まるわけです。新聞にも出ましたけれど、共産党の連中はびっくりしたらしいですね。横浜市警は直接警視庁に言わないんですよ。管区の警備部長の私に言ってくる。私が古屋さんに連絡をする。そして私の部屋で、両方の課長と、下の刑事達が会って話をします。一例を言うと、そんなことなんです。ことほど左様に、自治体警察は仲が悪いんですね。

伊藤 自治体警察同士も仲良くないわけでしょう。

飯尾 警視庁も自治体警察になっっているわけですね。

海原 いや、警視庁は、「俺が警察だ」と思っているわけですね。

飯尾 思っているんですが、立場としては、警視庁としては、そのままだったんですね。ほかの所はバラバラと自治体警察になった。ただ立場としては対等のような格好になったんですね。

海原 ですから北海道の警察も、警視総監と同じ制服で肩章を付けたのです。

飯尾 今のように仲が良くないんですね。

海原 大阪でも大阪警察警視庁と名前を変えました、一時は。

伊藤 ああ、大阪警視庁ですね。

海原 何で警視庁と名付けるか。そこですよ、問題は。そんなものなんです。だから管区というのができたから、その間を取り持とうとしたんですね。

飯尾 管区というのができたのは、ちよつと時間が経ってからですね。

海原 後で管区はできたんですね。直接は駄目なんです、管区なんて要らないと私は言ったんですね。柏村さんにも管区なんて要らないと思うと言ったら、そう言うが、とにかくできているから行けと言っていますね。そういうことになりました。その頃のことを話しますと、いろいろあるんですが……。

国警企画課長

——警察法改正に着手

伊藤 最初に企画課長になられたところで、五番目の質問「企画課長としての仕事の内容、警察制度の改革の検討内容」になります。

海原 どうもすみません、一回分が遅れて。

伊藤 いや、遅れるのはいいところに構わないですから。企画課長になられて、まず仕事の内容ということですね。

海原 私の企画課長としての最初の仕事は、先ほども言いましたが、警察法の改正があつたんです。警察官職務執行法というのが、私のなる直前に制定されるんです。その法律の説明に行くわけです。この法律の提出とかは関係ありません。それができて全国で施行された。その職務執行法の説明を全国でやるということです。それから、公安委員会というのはどんなものかということの説明する。この二つなんです。要するに先ほど言いましたように、公安委員長が毎日出勤するというのは、長崎の例にあつたように、わからないんですよ、公安委員会というのが何か。

飯尾 それは企画課長になられた時は、もうできているわけですね。

海原 できています。

飯尾 できているけれど、内容がわからないということで、説明に行くかたということですね。

海原 そういうことです。それで、後でアメリカの警察の視察に行くわけですね。

伊藤 それはすぐの話ですか。

海原 私が「企画課長に」なつたのは八月で、アメリカに行ったのはその翌年の十二月です。その間の、一年何をやったか。その間は、要するに警察法の改正運動です。国内で。

飯尾 じゃあもう、自治体警察では駄目だ、ということを指摘されていたんですね。

海原 要するに、斎藤昇さんが警視総監から国警本部長官に替わりますね。私は、その時に聞いたんです。どうしてお替わりになるんですか。そうしたら、GHQでは要するに国警というものを、国家地方警察本部を、アメリカのFBIのようなものにしたという意向があ

ると。私はそれに賛成なんだということで、それを受けて警察法の改正をやるというわけです。要するに各自治体警察がバラバラでは駄目ですよ。だから特定の重要な、いわゆる国家的犯罪、重要な犯罪については、国警がどこにでも行ける、と改めたいのです。

飯尾 国警本部が管轄権を持って、自分で捜査ができるようにしようというわけですね。

海原 そうそう。それが警察法改正の大眼目、目的です。それで、これまた脇の話になるんですが、国警本部で私は企画課長で、その方の担当の責任者なんです。部長は柏村さん。それで刑事部長には武藤（文雄）さんという有名な人がいる。そして長官が齋藤昇さんです。特定の犯罪については、国家地方警察は自治体警察の管内に入って捜査ができるという話になるわけですね。その時に、齋藤長官は、その犯罪事件については自治体警察の捜査の権限はなくなると言うんです。

飯尾 国警本部が取ってしまったら、後は残らないというわけですね。
海原 例えば伊藤さんのところに行って何か調べると、その調べている事件については、伊藤さんのところを所轄している自治体警察は入っていけないんだと言うんです。私はそれはおかしいと言ったんです。停止されるだけだと。要するに国家地方警察の方が権限が上で、自治体警察には捜査の権限はあるんだが、しかしそれは一時停止される。国警が捜査している限りは停止されるんだという主張をした。国警本部の部長会議で私がそういう説を述べたら、齋藤長官は反対なんです。齋藤長官は、自治警の捜査の権限は消滅するんだと言うんです。「長官、それはおかしい。国警が捜査をしている間は、その自治体警察の権限が停止されている。そういう状態だと私は思う」と、言い合いをするんですね。

ほかの部長諸君は、誰もどっちの味方もしないんです。最後は齋藤さんが、あの人は細かい人ですから、どういう質問をしたと思いますか。「海原君、君は東大で誰に行政法を習ったか」と言うんです（笑い）。それで私は「田中二郎先生に習いました」と言ったら、「そうだろう、田中先生に習うからそういうことを言うんだ」と言ったら（笑い）。私も笑いましたよ。

それで会議が終わってから武藤刑事部長に「どう思いますか」と言ったら、「君の方が正しい」と言うんですね。その後で柏村部長に「どうですか」と言ったら、「いや君の言うことが正しい」と言う。なぜそれを発言してくれないんですか（笑い）。そうしたら、「長官と課長が議論しているのに、われわれは君の方が正しいとは発言できない」と言う。「ああそんなものですか」と言ったんですが。

飯尾 それで結局どうなったんですか。

海原 結局、私の説が正しかったんです（笑い）。だって、法律解釈の担当の総務部長、捜査担当の刑事部長、二人とも僕の意見に賛成なんだから。

飯尾 その場はそのまま終わって、実際はそういうことになったんですね。

海原 「君なあ、長官と課長が議論しているのに、課長の意見が正しいと言えるか」と言われましたので、「ああそんなものですか」と言った。そういう話です。

伊藤 その国警本部というのは、各府県に組織があるわけですか。

海原 各府県にあります。例えば東京都の国家地方警察というのは、警視庁の管轄以外のところ、三多摩の山林を管轄しているわけです。それに対しては命令は出せませんが、警視庁管内については駄目な

んです。

伊藤 それは、東京には本部はないわけですか。国警の東京本部はあるんですか。

海原 あるんです。警視庁の建物の中にあるんです。

伊藤 警視庁にあるんですか。

海原 あるんです。三多摩じゃないんですよ。だからその辺は難しい。

飯尾 東京は警視庁だから特別だということですか。

海原 いや、そこに事務所があるだけの話です。

伊藤 では、それは例えば茨城だったら水戸にあるわけですか。

海原 そうそう。それはだって交通通信の中心ですからね。

飯尾 その水戸にあるところから、管内の各自治体警察に……。

海原 自治体警察には行かないんです。行けないんです。

飯尾 自治体警察の管轄のないところに行くんですね。管轄のない所

という、人員はどういうふう管理しているんですか。

海原 そこはほどほどに、ですよ。

伊藤 そうすると警察署というのは……。

海原 どっちかに分かれるわけです。そこで一九五一年の六月の法改

正で、自治警の廃止が認められますと、町村警察の九割が廃止しまし

たね。

伊藤 要するに自治体警察を持っていないところというのは、かなり

小さなところですよ。

牧原 人口が五千人以下のところですね。

海原 県庁所在地は全部自治体警察ですよ。

伊藤 ですから、そういう小さいところにそれぞれ署があるわけでは

なくて……。

海原 周りにあるんです。村落警察ですから。しかし本部は真ん中にあるわけです。

牧原 当時、国警本部の所管の管内での事件というのは、どのくらい起こったんですか。

海原 それはあまりないですね。ただ、後で出てきますが、共産党の山村工作隊なんていうのは、全部農村山村でやっていますから、それは当然国警になりますね。一般の事件は全部自治体警察の管内ですよ。

ですから、先ほど言いましたように、全国村落警察と名前を変えろと

いう意見が出てくるのも、それなりにもっともなんですね。

伊藤 警察官の人員から言ったら、自治体警察の方が多いわけですか。

海原 人員は、自治体警察の方が多くですね。ちょっと待ってください

い。お話をしている間に順番がだんだんと変わるので……。

伊藤 いろいろと質問をしますので、講演と違いますから。

海原 国警の警察官の人員は三万人、自治体警察は合わせて九万五千

人です。それから見てもわかるでしょう。

飯尾 やはり大都市があるので、人数は違いますね。

海原 ええ、違いますね。国警は定員が三万で、自治体警察は合わせ

て九万五千です。

伊藤 自治体警察は完全に独立しているわけですから、お互いの連絡

は直接にはないわけですか。

海原 ないです。一六〇五の自治体警察があったんですね。ですから

横浜市警は警視庁と連絡すればいいのに、しないで、管区の私のところ

に来るわけです。それがわからんところですね。

飯尾 管区は、後で自治体警察の方も入ったんですね。

海原 もちろんそうです。

飯尾 それができるまでは、全く「村落」の方と「自治体」の方はバラバラだったんですね。

海原 そこまで行くと話がややこしくなるんですが、追跡権というのがあるんですよ。追いかけて行って、何百メートルまでは行けるとか（笑い）。

伊藤 やっぱりそれがあるんですか。

海原 あるんですよ。三百メートルまでとかね。馬鹿みたいな話ですよ。それで私が企画課長になる前に警察官職務執行法というのができて、それでは現行犯については追いかけるという法制ができたわけです。その説明に回ったわけです。簡単に言えばそういうことで、どこまで追いかけるか、です。追跡ですからね。

飯尾 連続追跡であれば、ずっと追いかけるんですね。

海原 それはわかりますよ。三百メートル、五百メートルはいいけれど、それ以上は駄目だと。そんな理屈はないんだと。私たち昔の内務省警察を知っている者は、こんな馬鹿げたことはないと思った。アメリカのような大きな国と違って、日本はその一州と同じくらいの大きさでしよう。そんなところで分かれているのはおかしい、という気持ちが基本的にあるわけです。それがまた後で出てきますけれど、私たちは直そうと思った。先ほど言いましたが、私が聞きましたら、齋藤総監は「実は向こうにも警察がこれでは駄目だという意見もあるんだ。それで、アメリカのFBIのように、特定の犯罪については、自治体警察の管内に入っていけるといふふうに僕はしたいんだ」と言われる。「それは結構ですね」と言った。そういうことだったんです。

伊藤 これは警察官僚の全体から考えたら、やはり国警本部の方が中心だというふうに考えていたんでしょうか。

海原 それは非常に難しいですけど、一般的に言えば、大学を出た有資格者は、ほとんど全部の人が今のは駄目だと。しかし進駐軍の間は、軍にもっとも協力したのは内務省であるということで、内務省の解体です。その中でも警察が特高警察、治安維持法との関係で睨まれている。これはしようがない。しかし、これでは駄目だ。能率を第一にすれば、こんな小さなところ、カリフォルニア一州ぐらいのところ、そんなに分かれているのはおかしい。だから統一しないといかん、という気持はありました。しかし、それはすぐはできないことは知っています。そういうことですね。先ほど言いましたように、齋藤総監に私が質問したのもそういうことで、「総監、どうして警視庁にもう少しおられないんですか」と聞いたたら、「いや、国警本部に行けば、GHQの方もそういう統一の、組織的なものに改める気持があるんだ」と言う。現に当時GHQでは公安部（パブリック・セイフティ・リビジョン）は能率を主にしていました。そういう統一警察の必要性を認めていたんですね。それに対してガバメント・セクションは、日本の行政の中心をやっているけれど、ここは反対ですね。そういうふうに向こうも二つあった。当然日本側は、全部警察関係者は能率のことを言いますから、統一したいと思っていますね。

伊藤 さっきの人事の話ですが、海原先生は、警視庁におられたわけですね。この警視庁は自治体警察ですね。国警本部は田舎警察ですね。この人事異動は誰ができるんですか。

飯尾 一応、国家公務員ですね。

海原 一方は「国家地方警察警視庁命ズ」です。片一方は「警視庁警視庁命ズ」ですから、違うんですね。そこは話し合いです。

伊藤 その調整はどこがやるんですか。

飯尾 それは全く辞めて行った格好になるわけですか。警視庁を一応都合で辞められて、国警本部の方で採用になってということ、形の上げはそういうことなんですか。

海原 形の上でおかしい点は、最初にも申し上げましたが、私が軍隊に入る時に、二年ごとに切れますね。その時も召集解除、また復職、もうずっとそれが続いているんですね。しかし形の上では、復職を命ぜらず、またすぐ休職、になりますね。そういう一種の擬似行為があるんですね。

飯尾 形としては辞表を書かれたとかそういうことですか。

海原 ないですね。辞表は書きません。

伊藤 だけど、自治体警察と国家地方警察の間で、人事を動かすのに、どこが調整するわけですか。

海原 それは本部ですよ。話し合いです。

飯尾 やはりどちらかという国警本部なんですか。やはり昔の警保局が人的には生きている感じなんですか。

海原 そうですね。人のつながりですね。これは間違いなしに、人のつながりです。

飯尾 名前は変わっているんだけど、やっている人が同じようなものなので、つながっているわけですか。

海原 というのは、私がいきなり警視庁の警視になることも同じでしょう。高知県の地方事務官であったのが、どうして警視庁の警視になるんですか。

伊藤 それは内務省ですね。

海原 それでもおかしいはずでしょう。こちらは警察ですからね。片一方は高知県の地方事務官なんですからね。警察も含めて人事がある

とは書いてないんですからね。そういう意味ではおかしいことはいっぱいあるんです。そこはですから、何と言いますか、不文律と言いますか、慣習と言いますか。

飯尾 どちらかという、やはり国警本部というのはそれなりの何か

中心的な機能は担い続けるような形で……。

海原 担い続けねばならないという。

飯尾 権限はないけれども、実質上の調整はすると……。

海原 せめて、今の間は、もつとまとめておく必要があるという、一応の共通の認識と言ったらいいですか、それがあつたでしょうね。ですから事実は何もないんですけれども、形の上では、とにかくそういうことで、全国の警察の主要ポストの人事を考えていたということでしょうね。公安委員会がある以上、本当はおかしいんです。公安委員会があるなら、それをそこで全部やればいいので、本来なら公安委員会同士の間の話し合いになって然るべきですよ。

飯尾 それは、やはりやろうとしたところはないですか。

海原 ない。どこもないですね。

飯尾 そこは上手に、そんなことを言わせないようにするわけですね。

海原 歌舞伎ですよ、それは。私は日本人の社会の歌舞伎的性格を言うんですけれども、歌舞伎なんです。ちゃんと黒子がいるんですよ。黒子がいて、台詞をちゃんとつけてあげるんです。

河野 そういう実体はアメリカ側はわかっているんですか。

海原 だんだんとわかつたんですね。初めはわかりません。だって向こうは任期が短いんですから。初めに来た人は全部、内務省はけしからん、陸軍に最も協力した機構だと考え、治安維持法なんてけしからん、特高は叩き潰せ、というのが基本的な方針ですからね。

それでやろうとしたのに対して、今日はそこまで話がいきまきませんでした。『ユーズウイーク』のあの連中は、マッカーサー政治を批判するわけですね。ですから、短時間の間に、このいろいろな詳しい流れを的確に説明することは、まず不可能ですね。

ただ、私たちはその流れに乗って動いただけの話です。「警視庁に行け」と言われたら「はい」、「国警本部に行け」と言われたら「はい」ですね。どうして俺が行かないといけないのか、ですね。だから、行きたくないと言え、それはできたんでしようけれどもね。だから、「考える」となるわけです。考えても答えは決まっています（笑い）。

飯尾 その辺が、やはり電報で辞令が出ていた時代とちよつと違うところで、後藤田さんいきなりそうはおっしゃつても……。

海原 でしょうね。あの時はまだ、そこまで占領体制というものはできていませんからね。

伊藤 この国警本部の総務部企画課長というのは、本来何をやるポストなんですか。

海原 これがまた難しいところなんです。大体、私はわからなかったんですけども、「企画」というのは何を企画するんだ、と聞いたんですよ。よくわからないんですよ（笑い）。「警察制度の企画」だと言わんですね。警察制度と言つたつて、制度はいっぱいあるじゃないかと。公安委員会もその範囲ですね。それから権限の問題もあるでしょう。だから組織の問題と、それと行動の問題と、大きく二つに分かれますね。その両方についても、現状でいいのか、それともこれを直すべきなのか。直すとすれば、どこをどういうふうに直すのか。その理

由は何か。そういうことを企画するのが、企画課だと言う。

言われてみれば、ああそうかと思いますが、私は、「そんなものは各局があるじゃないか。各局に総務課があるじゃないか。そこがやればいい」と言つたんです。「何も企画課という特別の課を一つ作つて、そこで考えるというのは無理だ」と私は言つたんです。これは学生の理屈ですよ。刑事局も警保局もあるんですから、そこで考えた方がいいじゃないか。それを全部総括して、どう直すべきか、これでいいかどうか、そういうことについて企画しろというのは無理だ」と言つたんですよ。そうしたら、「いや、お前、そういう屁理屈を言うな」と。それで終わりですね。

伊藤 では、これは現場というのはないわけですね。

海原 ありません。だから、要するに法律と政令の範囲ですね。後は占領当局との交渉ですね。ですから、仕事も自ずから制限されるわけです。最初は、公安委員会制度の周知徹底と、その適正なる運用の実施の指導ということですよ。

伊藤 どういう指導をするかということですね。

海原 そういうことです。

飯尾 それについては、一応自治体警察の方ですけれども、企画課としては権限があるわけですね。

海原 一応は、ですね。しかしアドバイスですからね。

飯尾 やはりアドバイスになるわけですね。

海原 ええ。相手がそれを受けるかどうかは別問題です。

飯尾 ということになっているんですね。命令して、法律はこうなんだから、こうしろとは……。

海原 法律の他に、当時で言いますと、自治体警察連合会というのが

あるんですよ。

伊藤 連合会はやはりあるんですか。

海原 あったんです。警察法を作るには、その了解を求めなければいけないんですよ。だからこれも大変なんです。前なら内務省の中だけで決めたものを、いちいち連合会にかけて、あれではいけない、これではいけない、とやるわけです。そこへ行って説明するのも企画課長の責任になるんですね。そして、今度こういうふうに警察法を改正いたしますと言うと、じゃあその結果どうなるんだ、捜査はどうなるんだ、と聞かれますから、いちいち例を挙げて言わないといけないですね。そういうことをやっていたわけです。

ですから、結構三百六十五日も、済んでみれば、ああ終わったかと思えますよね。ですから、何をやったかと言われますと、警察法の改正の問題ですね。それから、それに関連してアメリカへ行きましてから、アメリカでもそれを言ったことですね。一に警察制度の改正問題ですね、私が企画課長としてやったことは。

伊藤 この企画課長の在任中に警察法の改正をやったわけではないんでしょう。

海原 やったんです。

飯尾 さっきの追跡権の問題とか、そういうものですか。

海原 いろいろね。一部ですけども、それはやったんです。これは細かい警察法制度改正についての論文がありまして、それを見ていただくとうわかるんですけどもね。警察庁にもあるはずですけどもね。私が言うのと、私なりの個人的な見方が入りますが、制度が変わっているんです。

後日、ある女子学生が、その制度の変遷についての取材にきました。

彼女が偉いのはアメリカの公文図書館に行って調べているんですね。

それで、どこに海原さんが発言したのがあるとかね。あなたは、提出された改正法については全部が反対であると言っているとかね。国警はこういうふうに対処であって、自治警はこういう意見だと、そこまで調べている。西村恵さんと言います。そこまで私は知りませんでした。これは調べるとなると、警察で調べなければいけないですね。そういうことがあります、いろいろあるんです。警察を強くしようというのと、そうでないというのが。アメリカにもありますし、国内にもある。

伊藤 国内にもあるんですか。警察の中にもあるんですか。

海原 あります。その一つとして、今日の話から外れますけれども、国警長官更迭問題が出てくるわけです。これは本にも書きましたけれども、斎藤昇を替えるという意見が強くなった。なぜかと言うと、斎藤さんというのは警保局系統じゃないんですよ。その前は、どこかの県の経済部長をやっていますから。そこで、その意見が出て来た。「斎藤を替える」と言うのは、対共産党取り締まりが手ぬるいと考えた昔の連中ですね。ある先輩が私のところに来まして、私の意見を聞く。こういう動きがあると言うから、私が言ったんです。「あなた、昔の治安維持法時代の警察と、今のこの占領下の自治体警察主体の警察では全然違うんだ。法律から何から。それを斎藤は手ぬるい、あいつでは駄目だ、誰にしるなんていうことを、あなた方はやっているようだね。」「しかし海原君、みんながそう言っているんだ」と言う。それが国警長官更迭問題なんです。時の官房長官が増田甲子七さんですよ。それで、首を切ろうとするわけですね。たまたま五人の公安委員会の

一人が出張していて、後の四人はOKになるわけです。

その話を私が聞いたものですから、これはおかしいと。警察の取り締まりが手ぬるいとかなんとかと、旧内務省の連中が言っているようにだけでも、今の現行法下において、それは不可能なことだ。そういうことをやることはよくない。政治にも悪いし、警察にも悪い。というので、「放っておいていいんですか」と、ある先輩課長に相談に行つた。そうしたら、「君、しょうがないよ。相手が相手だ」と言うんですね。相手というのは増田甲子七さんですよ。

それで私は、人に相談しても駄目だと考え、一人で行動するわけです。それは『大野伴睦回顧録』にあります。私の本にも書きましたけれどもね。大野さんのところに訪ねて行きました。最初は午後八時頃行つたら、まだお帰りではありませんと言う。書生さんが十時過ぎにならないと帰らないと言うから、改めて行くわけです、高輪に。行つたら、まだ帰つてなかつた。しかし待つているうちに、十分ぐらいたら帰つて来ました。

そして大野さんが「何だ」と言うんです。前から、伯父海原清平の関係で大野さんとは付き合っていました。時々一緒に飲んだこともありますから、そこで本にも書いておいたんですが、「大野さん、天下の一大事です」と私は言ったんです。そうしたら「何だ、天下の一大事なんか、そんなものあるはずない。今どき」「いや、本当に一大事なんです」ということで、「今、こういう動きがある。斎藤さんを替えようとしている。これに対して公安委員の四人が賛成している。もう一人が出張から帰つて来たら賛成するはずだ。後に来る人は良くない。だから、これに反対したいんだけれども、吉田総理に物が言えるのはあなたしかいない。どうですか」と言つたら、私の話を聞いて、

「君の言う通りなら、その通りだ」と言うわけですよ。「じゃあ、ひとつ総理に会つてくれ」と言いましたら、電話をかけた。そして、帰つて来て、「明日の朝会う。君の言つたことは全部事実として受け入れて話をするが、結果はわからんよ」と言うわけですよ。

その帰りに、私は渋谷の斎藤さんの私邸に寄つた。十二時をちよつと過ぎていましたけれどもね。まだ灯が点いていました。それで、斎藤さんに「こういうことで、いま大野さんのところへ行つて話をしましたから、絶対に辞表を書かないでくれ」と言つたんです。そうしたら、「わかつた」と言つて辞表は書かないということになった。

結果、翌日は土曜日ですが、午後「大野邸に」訪ねて行つたら、「海原君、君の言う通り言つてみたけれども、吉田さんは頑固でなあ、言うことは聞かんよ」と言うんですよ。「どう言われたんですか」と聞くと、「君、総理のやる人事には容喙してもらいたくないと言つた」と言うんです。「ああそうですか。それじゃあしやうがないですね」と言つたんですが、それで終わりとなりました。それでストツプしちゃつた。そういうことがあつたんです。

それまで斎藤さんと大野さんとの縁はなかつたんです。ところが、その後、非常に斎藤さんと大野さんとは親しくなつたということを、次長の溝淵さんが言っていましたけれどもね。そんな経緯もあるわけですよ。

大野さんのところに行くのに、最初私は先輩の課長と一緒に行ってくれと頼んだんですよ。「一人で行く」と私個人の考えのように思われるから、あなたが海原の言う通りだということを保証してくれ」と言つたんです。私の尊敬する先輩でしたが、何と言つたと思いませんか。「海原君、二人で行動すると徒党を組んで行動することになる。それ

はまずい。君の言うことは正しいと思うから、君個人で行動しろ」と言うんですね。これは参ったですよ。しかし、そういう考えもあることがわかりました。

結局、その人事はなくなりましたけれどもね。これについてはまだいろいろ余談もあります。大野伴睦さんの回顧録に「警視庁の海原治君」と書いてあるんです。これは間違いです。替わっているんですから。しかも「海原治君」の下に括弧書きしまして、「海原清平君の甥であるが養子である」なんて書いてあるんです。そんなことがありましたね。その理由は何かと言うと、斎藤は手ぬるい、あれでは取り締まりができない、だから旧警察局系統、治安維持法系統の経験のある、ある人を持って来いというのが一般の動きだったですね。

伊藤 それで、やはり警察制度を大きく変えていかなければいけないと考えているところに、アメリカ力行きの話があるということになるわけですね。

海原 そうなんです。その前に、さつきも言いましたが、PSD（公安部）は改正に賛成だったんですがね。週に二回ぐらい、三カ月位行きましたよ。案ができて、公安部はこれに賛成するわけです。いもののできたと言って。私が企画課長でいつも行っていますからね。それで、細かいことを言うと、海原はまるで「法律の刑事」だと言われましたけれども。それで、これでよろしいと。改正の用意ができました。問題はその後です。当然、それは向こうでやると思ったら、それを日本側から出せと言うんですね。PSD（パブリック・セイフティ・ディビジョン）のプリアムという大佐でした。いい大佐でしたけれど、「これで結構である。公安部は全面的に支援するから、この案を日本側でガバメント・セクションに出せ」と言うんですね。それが

らゴタゴタするわけですよ。こっちはPSDがOKすれば、当然GSに話をすると思っていたんですが、そうではありませんでした。

飯尾 さつきの横浜市警と警視庁みたいなものですね（笑い）。

海原 そういうこともありましたけれども、とにかく昭和二十六年六月の法律改正ができました。最初はそういうことでした。後で皆さんがご覧になって、一行か二行で済んでいるようなことでも、いろいろとあるんです。

伊藤 では、次回はアメリカへいらっしゃる話の前後から。今日の積み残しみたいなどころも多分あると思うんですが、そのことも含めて次回お伺いしましょう。どうも本当にありがとうございます。

海原 いえ、とんでもありません。私はつい、ご質問があると、それに答えているものですからね。

伊藤 いえ、いいです。私どもの方は、どんどん質問させていただきますので。

海原 皆さんの方で良ければいいんですけれどもね。余計なことを申し上げているんじゃないかと心配しているんですが。それで、この共産党の關係の文章は後でまた……。

「第十一師団司令部職員表を見ながら」この師団司令部に、こんなに経理部員が多いというのは驚いたでしょう？

飯尾 そうですね。基本的に主計少佐、主計大尉の「主」と付いている人は実は少なく、そうでない方もおられるわけですね。

海原 これは司令部ですからね。経理部が多いんだけれども、書いてないのは本科です。

飯尾 ということは本科の方も経理部に入っておられるわけですね。例えば、一番左側の門田（作次郎）さんのところには「主」が付いて

ないですね。

海原 ああ、これは「主」が抜けているんですね。

飯尾 あつ、抜けているんですか。

海原 はい。この表は他から取ったものですから。全部「主計」です。

飯尾 どうして、中尉だけが、と思いましたが。

海原 誤植です。その経理部員・水野（弘之）と書いてありますね。

これは俗称部長と言っていたんですが、部長という称号ではないんです。本来、部長は大佐なんですね。その時はもう少佐で上級職をとっているわけですから、部員ということになるわけです。これは間違いですよ。

飯尾 だから首席部員みたいな形で、少佐が実質上の部長であると。

海原 経理部員の吉村（真一）もやはり主計です。これでいかに、いろいろな人が来ていたかということがおわかりと思います。吉村君は大蔵省です。昭和十六年、今の鳩山（由紀夫）さんのお父さん（鳩山威一郎）と同期です。それで四国銀行の頭取もやりました。もう死にましたが。隣の都築（義信）君というのも死にましたけれども、愛媛の銀行の重役になりました。それから、その二人あとの中村啓成さん、これはいま東都水産という水産会社の会長をしています。そういうようなことで、各界の人が来ていました。吉村真一君は四国銀行の頭取の息子さんですが、いま言った昭和十六年の大蔵省採用で、後に大蔵省主計官（防衛担当）になります。そして吉村君が主計官であった時に、私は保安庁におりまして、電話して、「吉村君、君が主計官だから、俺は君のところを頭を下げには行かないよ、電話で済ますから勘弁してくれ」と言って、話を通じたわけですからね。いろいろな人、それぞれにみな優秀な人でしたね。

伊藤 定員外というものもあるんですね。

海原 編成表にはないけれど、採っているんですね。私が隊長を兼務した経理勤務班も編成表は五十五名なんです。しかし二百名余を持っていたからね。そういう編成もできたわけです。いろいろその辺は、ちよつと後から書類をごらんになる方にはわかりにくい点があると思いますが、以上のようなことです。

〈以上〉

海原 治 オーラルヒストリー

第5回

開催日：1999年2月9日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

飯尾 潤(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第5回 質問項目

前回は、先生が高知県から警視庁に移られ、また国家地方警察本部総務部企画課長となられたころのお話を伺いました。今回はその続きのお話を伺いたと思います。それについてお話をいただくなかで、関連した事項についてご質問させていただきたいと思います。

- ① 昭和 23 年（1948 年）8 月、国家地方警察本部総務部企画課長になられ、当時の日本の警察制度とその改革問題について伺いました。前回のお話の関係で、まだ触れていないことなどありましたら、お願いいたします。
- ② 昭和 24 年（1949 年）12 月末、3 カ月に及ぶ米国警察制度視察に渡米されています。その視察について、行程、内容、印象に残っていることなどお願いします。
- ③ このころ先生は、『ニューズウィーク』のパケナム氏と知り合い、パケナム氏からハリー・カーンを紹介されたということをインタビュー等で話しておられます。その経緯等について、繰り返しになるかもしれませんが、もう一度お願いします。
- ④ 1950 年 7 月 8 日、「マッカーサー書簡」が出され、警察予備隊創設に向けて動いていきます。先生ご自身、予備隊創設に関係され、非常に重要な仕事をしておられます。予備隊の性格について、当初はあまりはつきりしていなかったなかで、先生は、これは軍隊的なものだと見ておられたというお話もありますが、予備隊創設当時の状況をなるべく詳しくお願いします。

警察法の改正

——「法律の刑事」として

海原 私の今日のお話は警察法の改正ですが、最初の改正をした時の私の論文があるんです。それ「『警察學論集』という小冊子三冊を示す」を読んでいただくと、何をやったかがわかります。これがなかなかないんですよ。私はたまたま警視庁の警備部長を知っているものから、調べてもらったら、もうないんですね、古い物は。こういう物は警察大学校に行けばあるんでしょうけれども、あそこまで行く気がしませんしね。

警察の問題になりますと、前回お話しするのを忘れたんですが、大陸・独仏系と英米系では完全に違うんです。それを申し上げたかったんですが、話せば長くなりますからね。それは論文に書いてありますから。

とにかくいつもの口癖ですけども、老人はつい饒舌になりますから。

伊藤 饒舌を期待していますから。

海原 女房にそう言いますと、それはお世辞で言っているんだと言っています。人の言っていることをまともに聞くなと言う。これがやはり難しいもんですね。

ところで、それが出たのは何年になりますかね。

伊藤 昭和二十六年ですからね。私が大学に入った年です（笑い）。

海原 はあ、意気盛んなる頃ですね。

伊藤 「『警察學論集』の目次を見ながら」「世紀半ばにおけるアメリカの警察行政」というものがありますね。

海原 それは私が翻訳したもので、書いた人はニューヨークで小さな塾をやっているロバート・マクナ马拉さんです。彼が私に送って来たんです。いかにアメリカの警察がバラバラで何ともならんか、ということの論文なんです。私はアメリカに行った時に会っているんですが、その男が後から、俺はこういう論文書いたからと送って来ました。

飯尾 というものを送ってもらって、それを訳されたということですね。

海原 そうです。ニューヨークで塾みたいなのをやっています、そこで私はちよつと新聞に出たものですから、話を頼まれて行っただけです。それが縁になりました、「世紀半ばにおけるアメリカの警察行政」という論文を書いたから、これは参考になるだろうと言って送って来たんです。

それを当時の国警本部の次長の溝淵（増巳）さんに見せましたら、「いやあ、この男はなかなかよく警察のことをわかっている」と言っていました。溝淵さんというのは、大阪で巡査からずつと上がって来た人です。齋藤長官の下の次長です。そして辞めてから、今度は高知県の知事になりました。そういう人ですから、本当に生き字引ですね。その溝淵さんが、「このマクナ马拉という男はよく警察のことを知っている」と褒めたんです。それで、この『警察學論集』に載せたんです。こういう物はもうないんですね。いろいろ調べてみましたが、古い物ですから。

伊藤 この前のお話ですと、アメリカにいらっしやる前にも警察法を一部改正なさったようなお話だったんですが。

海原 いえ、取りかかったわけですよ。その話の続きを今日やりますから。

伊藤 では、そこから説明ください。この前のお話ですと、一応オナーを取ったにもかかわらず、民政局に持って行けど、こういうお話でしたね。

海原 それで、駄目になった。がっかりしたという話でした。そこまで話したんです。それもまだ後があるんですが、それが元になって昭和二十六年六月の警察法の改正ができたんです。それがこれ「『警察學論集』」です。

伊藤 では、アメリカに行って、お帰りになってから実現することですね。

海原 そうなんです。その間に、一年ばかりブランクがあるんです。その間のことも、実はいろいろありましてね。例えば全国村落警察という名前に変えろと言ったのは私の同期の松本良祐君、亡くなりましてけれども、大阪の市警の幹部として言ったんです。そういう話をあちこちでやるわけです。自治体警察連合会、自治体公安委員会連合会、そういうものがあるんですが、そういうところでの講演で松本君がやるわけです。それで、どうなったか。とうとう参議院で名前改正の法案が出たんですよ。

飯尾 ちゃんと誰かが出したわけですか。

伊藤 それは政府提案ではないんでしょう。

海原 それは成立しなかったです、参議院で。

飯尾 では政府で出されたんですか。

海原 いいえ、議員提出です。ことほど左様に、自治体警察連合会が運動したんです。その元凶が私の同期の松本君なんです。その上に大

阪の警視総監もいるんですがね。それが自警の連合軍なんです。ついに法案が出るんですよ。しかし、それは否決になりました。そんなこともいっぱいありました。しかも、その後の話がありますのは、後で自警と国警が一緒になるんです、警察法改正で。そして大阪の連中も引き受けるでしょう。そうしたら、たまたまその法案を書いた松本君にいじめられたのが、やはり同期の男なんです。私の親友なんです。玉村（四一）君です。これが絶対反対なんです。あいつは絶対、国警にとつてはいかんということですね。昔の恨みですよ。さんざん大阪でいじめられたんですから、大阪の警視庁に。

飯尾 大阪の警視庁、ですね（笑い）。

海原 結果どうなったか。また溝淵次長が私を呼びまして「お前、実は松本君が帰って来るについては、同期の玉村が反対しているんだ。管区の刑事部長だ（私は警備部長なんです。私と仲がいいんです）。お前は玉村と仲がいいから、ひとつ玉村を口説いてくれ。もう昔のこととは昔のこととして、制度は変わったんだから、恩讐を超えて。そういうことはお前しか言えないだろう」と言うんです。溝淵さんは、情に絡めるんですね。それで、「わかりました」と言って、私は部屋が隣り合わせですから、玉村と一緒に酒を飲みながら、「お前、もう昔のことは忘れろ。溝淵さんもこう言っているし、みんな心配しているんだから」ということで、ようやく彼「松本」が国警に来るわけです。そんないろいろな話がありましたね。やはり人間の恨みというのは、なかなかね。それは、その当時さんざんやられた人間は、この野郎、と思っっているでしょう。でも、もともとは同根でしょう。同じ内務省の同期なんですよ。

飯尾 その松本さんという人が、「村落警察」と言って回られるのは

どういうおつもりなんでしょうか。

海原 そういふ話になると、人柄や性格の問題になりますから。

伊藤 これは馬鹿にしているわけですか。

海原 威張っているわけですよ。

伊藤 いや、ですから、その村落警察だということ。

海原 そうそう。

飯尾 それで、馬鹿にする挙げ句に法案まで出したわけですか。

海原 そうなんです。それは自治体警察連合会、自治体公安委員会連合会というのがあるんです。その中心は大阪ですよ。だから、大阪の反乱ですね。それで、法案まで出たんですけれども、おかしいのは、前の警察法も社会党内閣の時に使っているんです。その時に使った名前が国家地方警察でしょう。それがおかしいからと言って、直すのもおかしいですね。

飯尾 名前だけ変えるという法案なんです。

海原 そうなんです。だから、今の皆さん方に申し上げても、そんなことがあったのかというふうなことですよ。

それから、この前ご質問がありましたけれども、東京の国警ですね。これは三多摩を管轄しているわけです。どこに事務所があるか。警視庁の中ですよ。おかしな話ですけどもね。そんなものは村山の方にはないんですよ。通信連絡の便宜上、警視庁の中におるんですけども、全然権限がないんですね。ですから、その頃の当事者の感じ、心境というのは、やはりやった者でないとわかりませんね。どんなことをしていたか。そういうことを言い出すと、もうこれは留処なくありますから。

これからがこの間の続きなんですが、GHQに通いましたね。それ

で、法案ができた。これでいい、ということになった時に、「お前の方からガバメント・セクションのところへ行け」と言う。何だ、思った。そこまで申しましたね。その後で、結局やるわけですよ。そのことが、西村恵さんの論文にも詳しく出ていますけれども、これがすったもんだするわけです。当時の新聞を見ていただければわかりますけれども、自治体警察連合会は「法案の改正、絶対反対」ということですね。

その改正で何をやったかと言うと、大きく分けると三つになると思います。一つは治安維持上重大な犯罪について、国警が入って行けるということ。それから小さな町村警察の廃止ができるんです。

伊藤 町村警察を廃止するということですか。

海原 町村警察は、町村の意思によって廃止ができる。

飯尾 廃止してしまつて、国警に入るということですね。

海原 そういふことです。そうしたら、その法律が成立した当時に、

何と約九〇%の町村の警察が廃止しました。

飯尾 これはもう財政的にもたないということですね。

海原 財政的にだけではなく、能率が上がりませんから。

伊藤 それができたというのは、この時の話ですか。

海原 ええ、その時です。だから目標にしてみました、重要な犯罪については国警が入って行けるといふこと。それから小さな町村警察の廃止ができるということ。それはできたんです。だから眼目は、一応その法律でできたわけですね。それが成立するまで、とにかく大変な騒ぎなんです。

飯尾 三つとおっしゃいました、もう一つはなんですか。

伊藤 眼目は三つとおっしゃいましたね。今、二つおっしゃいました

けれども。

海原 もう一つは、町村警察の定員を条例で決めるべし、とした。前は自治体警察全部で九万五千というのが決まっていたんです。それを条例でやることになったわけです。

そういうことで、捜査の権限が及ぶということ。廃止ができるということ。それから定員はその町村の条例で決めるということです。

飯尾 自分で決められるということですね。

伊藤 減らしたければ減らしてもよろしいということですね。

海原 そうそう。要するにゼロにしてもいいわけですから。だから十人だったものを五人にもできる。それも全部町村の意思である。そういう住民の意思によるものなんです。

その辺に関連して申し上げようと思ったのは、さつきちよつと言いましたが、英米法の警察と、大陸圏のドイツ、フランスのものでは全然違うんです。簡単に言いますと、英米系の警察というのは、今のアメリカでも「シェリフ」とかなんとかというのがありますが、もともとは夜警です。町村が自分たちで地域を守るんだということですね。夜番ですね。そういうのが英米法なんです。ところが独仏系は、国家の権力の執行機関なんです。ここで基本的な物の考え方が違うわけです。

したがってGHQに来ていたパブリック・セイフティ・ディビジョンの連中は、国家警察なんかの経験は全然ないわけですよ。小さな田舎の警察で拳銃の射撃を教えていたとか、せいぜいがロサンゼルス市警の警察官なんです。だから、国家というものの警察法がどうだこうだと言っても、わからないんです。そういうことで、その話し合いの時に非常に困難がありましたね。

そこへいくと、ガバメント・セクション、名前はセクションですが、本来はディビジョンの方が大きいんですね。これがまた難しいんですけれども、パブリック・セイフティ・ディビジョンは「公安部」と訳しています。ガバメント・セクションは、日本の方では「行政課」と訳しています。しかし、行政課の方が絶対に強いんですからね。両方ともトップはジェネラルですよ。しかしもう絶対的に、それはGS（ガバメント・セクション）が強いんです。そのことはいろいろなことでわかりますね。ガバメント・セクションはいろいろパージをやったでしょう、その中心ですからね。

そしてPSD（パブリック・セイフティ・ディビジョン）と「警察法改正の」話がついたので、やれやれと思って、これはいい案だとなつたら、「お前の方からGSに言えと言うんですから、これはもうがっかりしました。しかしそれから後、斎藤さんがいろいろと政治的に動くわけです。

伊藤 GSとの交渉は、海原さんがおやりになつたわけですか。

海原 それは私はやりません。その段階では、もう大橋さん（法務総裁）、それから斎藤長官、そのレベルです。幸い、斎藤長官は、前に「組」のお話をしたでしょう。その時申しましたが、彼はGSの上の連中を知っていたんです。ネーピアとかなんか、そういう連中を。

飯尾 GHQの人たちと知り合いだったんですね。

海原 ええ、GSのほうに。ですから、非常にその辺は都合が良かったですね。それから、ミスター・斎藤という人間がこういう人間だとわかっていきます。もちろん警察関係ではないですからね。これもこの前申しましたが、経済関係なんかやっておられた方ですから。ですから、GHQとしては変な先入見を持ってないわけです。それも良かった

たと思います。誠実な人ですから。そのことがあつて齋藤さんがいろいろと話をしまして、ごたごたしましたけれども、結局はその法律が成立するわけです。

伊藤 これは「アメリカから」お帰りになつてからですか。

海原 そういうことです。

伊藤 ずいぶん時間がかかりましたね。

海原 ええ、ですから「アメリカに」行く前の半年ぐらいが、まるでPSDの先生方の御前講演みたいな、試験勉強みたいなものですね。何の影響もないんですよ、GSに対しては。

飯尾 ただその当時は、PSDが決めると思つて一所懸命説明しておられたわけですね。

海原 そうなんです。

伊藤 そこ「PSD」の人たちとの関係はいかがでしたか。

海原 その辺のところは、先ほど申しましたように知りません。西村さんの論文を見ますと、GSと齋藤さん方が何回か会つて、やつていたんです。アメリカの公文書館に、当時の日本の状況を伝えた報告が保存されているんです。それは、私はもちろんわかつていたんですけれども、最終的に法律案になりましたものをGHQへ持つて行った時に、私が担当官に「この法案は、誰も喜ばない法案であるということを書いた」と書いてあるんですよ。それは公安局のスタッフからブリュム大佐に対する報告になつているんですね。メモランダム・トウ・ザ・チーフとなつていますからね。そんなこと言つたかなと思つてい

るんだけれど。

「ミスター・海原は、この法案は誰も喜ばない法案だと言つた。自治警の方は、そもそも自治警が廃止になるのは権限が奪われること

で反対である。国警は増員が充分でないということで反対である。社会党もまた党として、地方自治の原則が損なわれるとして反対である。関係者全員が喜ばない法案であると言つた」と書いてあると言つて

す。
しかし調べてみましたら、幸い私が解説を書いていたから。その前書きに書いてありますけれども、すつたもんだしたけれども、ようやくこういうことが決まつた。その改正の要点は、ということですよと書いてあるんです。だから、それ「『警察學論集』」はご参考になるかと思つています。そのすつたもんだの関係を言うと、いろいろとあるんですよ、先ほど言いましたように。

伊藤 では、海原先生はGHQと直接コンタクトをする時は……。

海原 それは最初PSDとの折衝の時には、全部私が行つた。そして細かい部分、しかし大雑把な法案ですが、向こうには先ほど申しましたように、国家的な見地に基づいて法律を書いた人がいないんです、一人も。こつちは、しかし法制局が相手ですからね。そこで、私が字句について文句をつけるわけです。これはどうということだ。そこで、この間もちょっと申しましたが、「お前は法律の刑事だ、ディテクティブ」だ。欠点を探す、アラ探しの名人だと言われました（笑い）。それは当り前です。先ほど言いましたようにね、彼らは知らないんですよ。ロサンゼルスとかキャンサスシティとかで拳銃の撃ち方を教えていたとか、小さな町の警察の人でしょう。大体、法律がどんなものか知らない人ですよ。

伊藤 FBIなんかに関わつたなんていう人はいないわけですか。

海原 いないです。一人もいないですよ。

伊藤 まあ、人柄としてはいいわけですね。

海原 みんな人柄は良かった。ですから、私が非常に惚れたロサンゼルス、日本でいうと警視さんですね。いい人ですね。いい人だけなんですよ（一同笑い）。いい人です、この人が了解してくれたら大丈夫だろうと思うと、大間違いなんです。

伊藤 力がないということですか。

海原 もう全くなかったですね。

飯尾 それは終わってみてわかりましたね。

海原 やっている途中でわかりましたよ。この程度の人か、ということとは。どういうことをやっているかは、GSの松方氏なんかが知っていますからね。何かやっているな、なんて。もちろん警察制度の改正です。そうしたら、向こうは地方自治なんです。だから地方自治と警察の効率、能率のバランスをどこに置くかということになるわけです。

それは後でお話ししますが、ダレスが来た時の晩飯の会で、ちょうど私の前に座っていたのがアリソンですね。その時も、その話ばかりでした、食事中。「それはミスター・海原、お前さんの言うことはよくわかる。問題は地方の自治と、警察の効率、これをどうバランスをとるか、そういう問題だ。だからお前の言うことはわかるけれども、警察の効率一点張りでも駄目だ」と言う。というのは、内務省すなわち治安維持法、特高警察とあるでしょう。

伊藤 そのイメージなんですね。

海原 そうですよ。ですから当時ガバメント・セクションでも言っていましたし、本にも書かれています、要するに内務省、しかもその中で一高・東大は絶対に「敵」になっているんです。そういうことがわかりましたから、私が初めて松方君に会った時に、「僕はあなた方の大嫌いな一高・東大だ」と言ったんです。「いや、俺たちはそんな

ことを考えてないよ」とか言う。しかし、本にはそう書いてある。一高・東大を中心とする内務省というものが、軍の次に悪い奴になっているんです。これは何ともなりませんね。いくらそれを説明しても、やはり外国ではそうなるでしょうね。

伊藤 先入観ですね。

海原 先入観というか事実関係でいきますとね。積み上げていくと。

伊藤 そもそも特高というものを秘密警察だと思っているところから始まっているわけですね。

海原 そういうことです。それはもういくら話したってね。残念ながら、こちら側は無条件降伏した国でしょう。

伊藤 みんなが見られる職員録の中にちゃんと特高と書いてあって、人の名前が出ているんですからね。

海原 それは、ちゃんと詳しく調べていますね。

伊藤 しかし、そんなはつきり出す秘密警察というのはないはずですよ（笑い）。

海原 先生とお話しするようにはいけませんよ。こっちは敗戦国の、しかも軍に協力したナンバー・ツリーの極悪人でしょう。それが何を言うかということになるわけですね。ですから、これまたお尋ねに出てるんですけれども、警察予備隊の時に、「ミリタリー・コートを作れ」と言われたわけですね。顧問団のノルトンという大佐から。「どうしてか」と言ったら、「警察予備隊は名前はポリスであるけれども、事実上はアーミーだ。アーミーはアーミーの秩序を維持するためにミリタリー・コートが必要だ」と言うんですよ。「そう言ったって、それはできないんだ」と言った。いくら説明しても頭が堅いからわからないですね。ノルトンという名前はドイツ系でしょう。私も腹

が立ったから、その場で、「ローマにおいてはローマ人のごとく行動せよ、When in Rome do as the Romans do. という諺を知っているだろう」と言ったんです。「もちろん知っている」と言う。「それなら日本に来たら日本人の言うこと聞け」と言ったんです。顔が真っ赤になったですよ。白い顔をしていたのが。

それで、「お前、怒ったな。怒ったのなら帰る。私はミスター・斎藤に言われて、警察予備隊の編成を手伝いに来ているのである。私は、真面目に言っているんだ。その私の言ったことに腹を立てるなら、来ても意味がないから帰る」と言ったんですよ。そうしたらノルトンは「いや、俺は怒ってない」と言うんです。しかし、白い顔が真っ赤になっていくからわかりますよ。そんなこともあるんです。

伊藤 そのPSDというのはどこにあったんですか。

海原 マッカーサー司令部です。日比谷です。あそここのところにPSDがあるんです。

伊藤 第一生命ビルの中ですか。

海原 はい。

伊藤 ではGSなんかと並んであるわけですね。

海原 階が違います、フロアが違いますから。

伊藤 そこに通ったわけですね。

海原 週に二回か三回か。

伊藤 あれは、入るのに通行証か何かいるんですか。

海原 そこまで覚えていませんけれども、しかし何かパスみたいなものをもらいましたね。入り口に兵隊が立っていますから。あるいは、また他のところでやっていたかも知れません。そこは、はつきりしません。

伊藤 でも、あそこに行かれたことは、行かれたわけですね。

海原 はい、行きました。いつからいつまでかということが、どうもそこまでわかりません。全部昔の警察のものは処分しちゃったんですよ。まさか警察のことを、こういうふうにお話することはないと思いましたがね。私は防衛庁に替わりましたから。だって警察には帰れなかったでしょう。もう昔のことで、そういうことが細かく書いてあった書類や何かは全部処理したんです。

伊藤 それは残念だ。

海原 それはもう要らないと思った。こんな昔話をお話するようなことになるとは思いませんから。ですから、ようやくこういうもの『警察學論集』を指す」が、わずかに残っていたんですね。しかもこんな色「セピア色」になって。しかし、これがあったのでお話ができたんです。私が書いていたわけですから。そうすると次から次へと思いついてくるんですが、間が欠落しているんですね。

別の話をしますと、警察法の改正でPSDへ通いますけれども、斎藤さんには一人特別な顧問が付いていました。森野政義さんという人で、ドクター・モリノと言っていましたけれども。この人の性格ははつきりませんが、とにかく米語はペラペラですね。それから経歴から言って非常に優秀な方なんです。この人を斎藤さんはプライベートな顧問として長官室の隣に一室与えまして、この人を使っているいろいろなやりかたがですね。ケージスとかとの折衝もやっていたようなんです。しかし、その森野さんが何をしたかわからないんです。向こうも言いませんし、したがってこっちも聞かない。そういうことですから、ひとまとめに言いますと、自分が接触した範囲でしかわかりません。後はどういうものであったか。

アメリカ視察でマッカーサーを「批判」

伊藤 ところで、アメリカに行かれたのは三カ月間なんですね。

海原 ええ、そうです。

伊藤 まあ途切れたと言っても、わずか三カ月ということですね。

海原 そういうことです。三カ月で。アメリカに誰が行くのかについては、私はPSDに行つてしよっちゅう会つていますから、一人はミスター・海原でいいと言ふんです。もう一人は、まだ決まっていな

いというので、そのもう一人を捜考するために面接をやりましたよ。国警の方から数人候補者を選びまして、そして中原英典君という警察大学の先生で、昭和十六年の、二年後輩の人が選ばれて、私と二人で行つたわけです。一人はミスター・海原、もう一人は誰か適当な人と言われたのです。

伊藤 それはPSDが選んだんですか。

海原 そうです。一応候補者を三、四人出して、その中から面接をした上で選ばれたわけです。

伊藤 警察だけではなくて、いろいろな分野の人ですか。

海原 いいえ、そうではありません。PSDが選んだのは警察だけです。

伊藤 二人だけですか。

海原 ええ。「人事交流計画」と言ふんですが、それにはいろいろな各方面の人が選定されていまして、一緒の船で行つた人々の中には勞

働グループがいました。その長は末弘巖太郎先生、末広博士が団長でした。

伊藤 組合の人もいたんですか。

海原 星加要さんと藤田進さん。お二人とも有名ですね。星加要さんの方が、むしろ当時は有名だったんですけども、この二人は組合代表として入つてきた。その他に法務省の人も入つていました。これが六人ぐらいいましたか、一緒の船でした。乗り合つてみて、「やあやあ」となるんです。

伊藤 船なんですか。

海原 はい。十日間、横浜からサンフランシスコまで。

伊藤 どんな船ですか。客船ですか。

海原 軍の徴用した普通の客船です。大きな船でした。二万トンぐらいありましたかね。そして一等船室ですが、私たちの船室は船尾なんです。スクリーンの上なんです。そうすると、航行状態によってはグラーツとなるわけです。先ほども言いましたが、戦争に負けたからしょうがないですけどね。一等船客は一等船客なんです。料理は立派なものでした。初めて食べるような料理ばかりですし、それから社交ダンスとかもあるでしょう。輸送船ですから、日本からの帰国者が乗つて行くわけです、十日間。それで、サンフランシスコに着いたら、埠頭でちゃんと軍楽隊が出迎えているんですね。どういう曲を演奏したと思いますか。クイズみたいなものですが、極東から帰つて来た、我がアメリカを代表する戦士を迎える曲は——「支那の夜」です。

伊藤 それはどういふわけですか。

海原 どういうわけか、私だつてびっくりしましたね。初めて太平洋

を船で行きましたから、いかに海が広いかというのがわかりましたね。飛行機で行っちゃうと、あつけないですからね。十日間、海の上でしょう。横浜を出て、大島を見た後は何もありません、島も。しかも何日か置きに海の色が変わってきますね。まさにこれが太平洋だと思いましたが。と同時に、こんな広いところで、よくまあ戦争をやったなと思いました（一同笑い）。真珠湾を攻撃するとかアメリカを攻めるとか、一体どうしたことだったんだろうと。

伊藤 アメリカの最初の印象は何ですか。

海原 最初の印象を申します前に、まずサンフランシスコへ上がりました。そしてサンフランシスコの警察に行きますね。当時ですから、日本人というのは珍しいですね。それは敵国人だから。日本の警察はどうだと、向こうは質問するでしょう。私は警視庁にいたと言う。警視庁にどれだけの人間がいるかと聞くので、警察官が約三万四千人だと言うと驚きます。

伊藤 多いのでびっくりしたんですか。

海原 多いのでびっくりするわけです。後藤田君が書いています。それと間違つてはいけないと思って、調べました。三四、一八〇人とあります。こんなにいたかなと思うんですが、とにかくそう書いていますね。びっくりしたんです、向こうは。多いと言っても、せいぜい千人以下だと思つていましょう。何でそんなにいるんだと言うわけです。それから、私の経歴を聞くわけです。だから大学で法律を勉強したと言うと、これまたびっくりするんですね。「なぜ大学で法律を勉強した者がお巡りさんになるんだ」と言うんです。これには、こつちもびっくりしますね。だから「アメリカではどうだ」と聞いたら、「弁護士になる」と言いました。お巡り、copと言うんですね。だから、大

学でわざわざ難しい法律を勉強した奴が、どうしてお巡りをやるんだと。お巡りと言えば、火の用心みたいなもんですよ。そこで、なるほど、物の考え方が違うなと思った。

それからずつと各地を回りましたけれどもね。やはり一応説明するでしょう。日本の警察、国警、ナショナル・ポリスがあると。それで警視庁の警察官がこれだけおると言うのと、そんなにいるか、と言います。それが、こういうことをやるんだということを話すと、それがなかなか理解できませんね。先ほども申しましたように、夜回り、火の番、自治体警察で上がってきた者と、国家権力を執行する立場とは全然違いますからね。

これは途中ででしたが、シカゴへ行きました。そうしたら、シカゴの市警察の、言うなれば代表的な署がありますね。そこを見に行つたわけです。その署の前に交差点があるんですね。赤信号が点くでしょう。見ていると通行人が平気で横断しているんですよ。それを私は質問したんです。「この警察の前に信号がある。見ていると、人がどんどん赤信号でも渡つて行くけれども、なぜあれを抑えないんだ。警察の前なのに」と。そうしたら、「赤信号が点いていることは知つてはいますよ。それを承知の上で行くんだから放つておけばいい」と言うんですよ（笑い）。ここですね。問題の考え方の違いが。

伊藤 自己責任ということですか。

海原 ええ。これは、なるほどこういうものだなあと思いましたね。なるほど赤信号というのは「注意信号」なんだと。日本では「止まれ」という命令なんですね。その止まれに従わない奴は、止まらせないといけないでしょう。向こうは、それはわかつてはいるんだけれども、赤信号でも行くんだから、行かせたらいいじゃないかと。それで、事故

が起きたらそいつが悪いんだと、こうなるわけです。ああ、そういうことかと思いましたがね。何を感じたかと言われますと、そういうことがありますね。大学で法律を勉強した奴がなぜお巡りになるんだと言われたことや、赤信号を無視する人は放っておけばいいと言われたことが印象的でした。

伊藤 それは向こうの人間が付いて、ずっと回るわけですか。

海原 そうではないです。ニューヨークに国際教育協会みたいなものがあります、そこがスポンサーになっていて、ちゃんと各方面に手配してくれるんです。

伊藤 希望は言うわけですか。

海原 いいえ、希望は言いません。どこどこを見ろと言われるんです。まずワシントンではFBIですね。それからペンシルベニア、ミシガン等の州警察。自治体警察では大きいところを見ろということで、ニューヨークとかロサンゼルスとかシカゴとか、そういうところを見るわけです。それからテキサスの州警察ですね。テキサス・レンジャーなんて言っていましたけれど、そこなんかも見ろということで。だから約九十日間で全米を回ったわけです。

伊藤 かなり強行軍だったわけですね。

海原 そうですね。強行軍と言いますと、とにかく言葉が流暢ではありませんから。それを見ていただくとわかりますがね。まず通じるかどうかとよつと私は心配だったんですが、やってみたら通じました。それから、一日十ドルという制限があるんです。ホテル代も入っているんですよ。ですから、なかなか厳しいわけです。向こうもそれは知っていますから、ちゃんとYMCAに手配してくれる。だから、行くところは全部YMCA。YMCAがないところは、それに似たよう

な施設がありますね。それからペンシルベニアでしたか、州警察の警察官の寮に泊めてくれる。そういうことで金が浮くわけです。きちっと毎日十ドルで、飯代から郵便代から全部それでやらないといけないので、だいぶ苦労しました。しかしそれで、お陰でいろいろ勉強にはなりましたがね。

伊藤 向こうに行っている間にハリー・カーンに会ったということですが。

海原 ええ、カーンに会ったのは向こうに行ってからです。

伊藤 パケナムに会ったのはその前ですね。

海原 前です。

伊藤 それはどういう経緯ですか。

海原 その経緯は、これはまた溝淵次長に呼ばれました。警察法の改正の前ですけれども、次長室に中村五郎君というのがいまして、これがパケナムの助手なんです。もう一人いました。そして「この二人が日本の警察についていろいろと調査したいと言っているから、海原君、警察の現状と将来の可能性を教えてあげてくれ」ということで紹介を受けたんです。どういう人か知りませんでした。感じて私は二世かなと思ったら、後でアメリカ国籍か居住権を取得したとかいうようなことを聞きました。

伊藤 それは中村という人ですか。

海原 そうです。中村五郎君です。これは本にも書いたんですが、私が興味を持ったのは、彼の奥さんなんです。私が非常に尊敬していた風見章子さんなんです。今でもおばあさん役でちよつと出たりしますけれどもね。当時『土』という映画がありましたね。これは長塚(節)さんの小説の映画化ですが、炎天下で川の水を柄杓で汲んで水田に運

ぶ。その姿に感激しまして、私は風見章子さんというのはいいなあと
思っていたんです。それが奥さんなんです。だから、風見さんを見に
よく中村君の家へ行った（笑い）。それでいろいろ付き合った。

そうしたら中村君がバケナムに紹介してくれたんです。私に「是非、
親分に会え」と言う。それまではバケナムを知りませんでしたけれど
もね。会ってみましたら、なかなか面白いおじさんで、聞いてみると
岸さんが英語を習っているとか、いろいろわかりますし、当時の『ニ
ューズウィーク』にいろいろな情報を送っているわけですから、話が
合うわけです。それがバケナムを知る初めです。

伊藤 その『ニューズウィーク』の事務所はどこにあつたんですか。

海原 事務所というよりも、行ったのはバケナムの家です。渋谷の古
い日本の代官屋敷か何かを買って、そこに住んでいましたね。

伊藤 松濤の辺りですか。

海原 あそこも名前がすっかり変わりましたからね。何丁目になりま
すか。

伊藤 後で、ドレスが来た時に会うのはそこではないんですか。

海原 そこで会ったんです。

伊藤 では、大きな家なんですね。

海原 一応の家ですけれどもね。そんなに大きな、ということではあ
りませんね。まあ、一般的に言えば、当時家がありませんからね。立
派な家でした。ただ、NHKでドレスとの夕食会を映していましたが、
それを見たら洋館になっているんですよ。それでテーブルの上にグラ
スが並んでいましたけれども、それは違っています。日本家屋です。
世話をする日本女性もいました。

それでバケナムに会うと、なかなか話が面白いんですね。話が合う

んですよ。ですから、私はバケナムに一所懸命陳情していたわけです。
バケナムは私の言うことがわかるわけですよ。こんな日本弱化政策で
警察をバラバラにしている、そんなものはいはずはない、将来の日
本を見た場合にはと。だからお前の言う通りだ、と言うわけですよ。
彼は神戸で生まれていますからね。それで大の日本鼻根で、部屋には
本人のですが、イギリスの軍服が掛けてありましたね。

飯尾 バケナムはイギリス人ですか。

海原 イギリス人です。神戸生まれですから、出生地主義なら日本人
ですけれどもね。イギリス人です。

伊藤 人柄はどうですか。

海原 人柄も私はいいと思いましたがね。それで、私がアメリカに行く
と言ったら、アメリカに行くのならニューヨークに寄るかと言う。寄
ると言う、それでは、そこでカーンに会えと言って、カーンへの紹
介状を送っておくと言う。ニューヨークに行ったら『ニューズウィー
ク』の本社に行つて、カーンに会えと。

サンフランシスコからワシントンに行く前に、まずニューヨークへ
行きましたから。そこに三日ぐらいいましたかね。その時に電話で連
絡して、それで『ニューズウィーク』に訪ねて行つたんです。彼は、
「お前のことはバケナムから聞いている。どういふことだ」と言うか
ら、「いや、今度こういふことで、いろいろな人に会いたいと思つて
いる、ついでに紹介してくれ」と言ったら、紹介状をくれたのがグル
ー他二人、キャッスルとアイケルバーガーですね。アメリカン・カウ
ンシル・オン・ジャパン（対日協議会）のメンバーでしたね。カーン
が事務局長みたいなことをやっていたんですね。

そういう経緯です。もう一度繰り返しますと、私が付き合ったのは

中村五郎君で、中村君を通じて親分のバケナムを知って、そのバケナムから、「アメリカに行ったらカーンに会え」と言われた、ということとです。

伊藤 それで、このお付き合いはずっと後まで続くんですか。

海原 ええ、続きます。バケナムが死ぬまでですね。カーンがこの前死にしましたけれども、彼も日本に来たら必ず電話をくれまして、話をしたわけですね。そういう経緯ですね。

伊藤 警察法の改正云々という話は、やはり日本における共産主義の脅威ということが背景にあるわけですね。

海原 もちろんそうです。あります。

伊藤 それについてはGHQの、さっきおっしゃったGSの辺りはそれほど感じていなかったということですね。

海原 感じてはいたようですね。この前もお話ししましたが、齋藤さんが総監を辞めて長官になるでしょう。その時、私は聞いた。そうしたら「いや、GHQの方でも今の警察では駄目だと。国警はアメリカのFBIみたいなものにすべきだという考え方がある。だから俺はそれに賛成して、行くんだ」と言っていましたから。齋藤さんはケージスとかと親しかったですね。ネーピアはもちろん知っていたでしょうがね。その経緯は私は聞いていませんけれども。要するに、ガバメント・セクションの方の上をよく知っていたわけです。だから、齋藤さんとしてはPSDとやって、そこでまとまったら、当然話をつけてくれると思ったに違いないと思いますかね。何だ、と言ってましたから。じゃあこっちでやろう、ということでした。その後は一応PSDのオーダーを取りましたから。それに対して自治体警察やなんかの反対運動がありましたけれども、それを抑えて警察法の改正になった。こう

いうことですね。

伊藤 それはやはりバケナムとかカーンとか、それからアメリカン・カウンスル・オン・ジャパンですか、そういう人たちの考え方に海原先生はかなり共鳴したということですか。

海原 そのACJの話は、私は実は知らなかったんですよ。

伊藤 会った時は、ですね。

海原 そうです。カーンが「会え」と言うから会ったというようにここで、後でわかったんですね。だから、知らないでそこへ乗っていたんですよ。

伊藤 そのグルーさんというのは誰ですか。

海原 元駐日大使のグルーさんです。グルーさんとは一月二十一日に会いました。念のために調べてみましたが。

伊藤 何でわかるんですか、そんなことが。

海原 日記を書いていましたから。

伊藤 日記があるんじゃないですか。

海原 日記といっても簡単なメモですよ。ミスター・グルーと書いて、一九五〇年一月二十一日に四十分ですね。それからアイケルバーガー、前の第八軍司令官、これは一月二十二日、三十分。それからキャツスル、元の日本大使ですね、これは一月二十五日、六十分と、こう書いてあるんです。それで、そのキャツスルさんが、「もう自分は引退した人間だから若い現役を紹介する」と言って、国務省の、日本的に言いますと日本課になるんですが、課ではありません、国務省の中で日本担当のマーシャル・グリーンとマックス・ピシヨップ、この二人を紹介してくれたんです。そこへ行って、私は二時間以上話しましたかね。これが私がワシントンで会った五人の人なんです。

そのために、私は予め自分の下手な英文でタイプを打って、三枚ばかりのペーパーを持って行って、それを渡しておいたんです。これは全部破りました。アイケルバーガーは「この通りだ」と言っています。だからね。言うなれば、今の日本の警察は地方自治を前提にした自治警と国警に分かれていてバラバラだと。こんなことでは犯罪捜査ができませんということ、治安維持に自信が持てないということ、これが一つ。もう一つは何らかのナショナル・フォースが必要であるということ。最低それが必要であると。それを置いて来たんです。ただし、そのことは私にとっては訪米の唯一の目的だったんですが、誰にも言っていないんです。柏村さんにも言っていないんです。

それはなぜかと言いますと、アメリカに「人事交流計画」で行く前に、司令部で署名させられるわけですが、その中に「米国においてはマッカーサー司令部の政策の批判をしてはいけない」と書いてあるんです（笑い）。

伊藤 そうすると、GHQに批判的なそういう人たちに会うということと自体も犯罪になるわけですね。

海原 でしょうね。犯罪ですかね。してはいけないことでしょう。痛切な体験がありますのは、先ほど申しましたように労働グループ、未広さんのグループと一緒に行ったでしょう。仲良くなりましたが、これが向こうに行ったら、未広さんが「今のマッカーサーの労働政策は間違っている」とやっただんです。とたんに、そこでストップされた。呼び返されたんですよ。三週間ぐらいの予定で行ったのが十日ぐらいで呼び返されたですからね。そういう話を聞きましたね。マッカーサー司令部のやっていることを批判してはいけない、ということも言わ

れていましたしね。だから、このことは、もう誰にも言いませんでした。

伊藤 自分の手元にも、その元の文書は残っていないわけですか。

海原 残っていません。

伊藤 じゃあ、キャッスルとか、そういうところの文書の中にはあるということでしょうね。

海原 そういうことでしょうね。

伊藤 じゃあそのうち探してみよう（笑い）。

海原 後でカーンが書いていますけれども、グルー元大使がカーンに寄越した手紙の中で、私のことを「ちよつとしたスフィンクスだ」と書いてあったんですね。どういう意味なんでしょうね、スフィンクスというのは。謎の人間ということですかね。それにはそう書いてありましたかね。

伊藤 そうですか。それはあるのかな。

海原 わかりませんが、私は本当に凶らずも、そういう人々に会えたわけです。その曰く因縁は中村五郎君を溝淵次長が紹介して、この人は日本の警察のことを勉強しているから、いろいろと君が事実を話してくれと。それが元なんです。そんなことですね。しかし、私としては会えたことは楽しかったですね。また、アイケルバーガーさんがちよつと日本から帰ったばかりでしたからね。お前の言うことは正しいと言ってくれたんです。何かお土産を持って行こうと思いましたが、アイケルバーガーの奥さんには鼈甲の髪飾りを持って行きました。それが思い出ですね。あと、良かったのはマックス・ピシヨップとマール・グリーンに会えたということです。

伊藤 これは後に影響がありましたか。

海原 ありましたね。ということは国務省は何も知らないんですから、マッカーサーが日本で何をやっているかということも。そこまでは知らないんですね。そんなことか、となるわけです。

伊藤 日本担当であるにもかかわらず、ですか。

海原 あるにもかかわらず。そんなもんですよ、それは。その頃の日本についての認識というのは、まずなかったでしょうね。何と言っても向こうは戦勝国でしょう。こっちに対しては恨み重なるパール・ハーバーがありますからね。

伊藤 この間、昭和二十三、四年ぐらいですか、キャッスルから牧野伸顕さんに来た手紙を見る機会がありました。そこでは、日本の状況を是非知らせてほしいと。そして他の人たちにも声を掛けて、是非いろいろな情報を送ってくれるように頼んでくれということを書いていました。そういった手紙がありましたので、やはり向こうの方もGHQのやっていることが充分によくわからん、という感じはあったんでしょうね。

海原 そうなんです。マッカーサーに一任しているんですね。もう一つ言いますと、日本という国は憎らしい国だけれども、まさかジャップがアメリカを超えるとは思っていませんからね。そんな国が負けたなら、それでいいじゃないかという程度ですよ、私が回った印象では。それはそうでしょうね。私が仮にそういう立場だったら、そうです。それも後でダレスと会った時のお話をしますと、よくわかると思います。要するに、上の方もそういうことで、日本なんてやつつけろ、あそこはもう天皇中心で凝り固まっている。「酋長を頭に」ですね。その当時の日本に対する言葉ですけれども、土人が教会で団結して怒っていると。今のフセインみたいなもんじゃないですか。そうい

う存在でした。

それから、これから先のアメリカにとってもマイナスだと思ったのが、例のACJの連中ですね。それで、財閥の解体を途中でやめましてしよう。あれが大きかったと思いますね。だから、そういう意味で私はふとしたことから、非常にいい人々を紹介してもらったということですね。それでカーンは結局、勲三等をもらったですかね。松平康昌さんと親しかったことも良かったんですね。松平さんが天皇と親しいですからね。私は、そういうことは関係なしに会っているんです。それで、もっぱらバケナムが日本の治安維持のことを心配しまして、配慮してくれた。そういうことでしょう。

伊藤 それは情報としてアメリカに流して、『「ニューズウィーク」でいろいろな形で紹介されたということですね。

その他アメリカにおいてになった時に、ちよつと前にもお話がありました。FBIとか、各レベルの警察をご覧になって、その印象はどうですか。帰ってこられてから、何かお書きになりましたか。

海原 帰って来まして書きましたが、他の人と一緒に書いたものもあります。アメリカの警察につきましては。毎日新聞に五回ばかり挿し絵入りで載っていました。「警察官のアメリカ見学」ということで。その後、当時はこういうもの『「警察學論集」』にも書いていました。法律についてはそれだけです。他にも見聞記みたいなものを書いたことがあります。しかし基本的に言うところ、まったく国の成り立ちが違いますしね。いいところもあるし、われわれが真似できないところもあるなと思いました。

伊藤 FBIはどうでしたか。

海原 FBIは、その時はフーパー全盛時代ですが、厳しい訓練に感

心しましたね。候補者の選定が難しい。ですからFBIに勤務していたということだけで、一般の会社に入る時には優先的に採用された。だからFBIの教育はどうなっているかということ、一応見ましたけれども、あれは形だけにしても大したものですね。もちろん法律も勉強します。それから実技として射撃とか格闘術とか、その他いろいろなことをやっていましたね。これはすごいところだなと思いました。伊藤 そういうところが州警察とは、やはり相当ギャップがあるわけですか。

海原 ありますね。それはもう完全に違いますね。日本で言えば、士官学校卒業と幹部候補生学校の卒業生の違いくらいありましたね。

伊藤 それで、こんど自治体警察へ行ったらどうなんですか。

海原 自治体警察は、これはもう千差万別でした。

伊藤 ああ、やはりそうですか。それは財政状態にもよるんでしょうけれども。

海原 そうですね。例えば、ロサンゼルスとかサンフランシスコみたいな自治体警察は立派ですけども、そうでない田舎の警察へ行きますと、やはり昔のお巡りさんですよ。まあ、それでいいんですね。その地方の秩序が保たれていますから。だってワシントンD.C.の中にも警察機関だと日本人が思うのは五つ、六つありますものね。公園にはパーク・ポリスがありますからね。

伊藤 別にですか。

海原 ええ、あるんですよ。それについてはこれ「『警察學論集』所収の論文」が詳しいです。それぞれの警察が、それぞれの沿革・歴史をもって作られていますから。これではいかんということで中小の警察の統合ということが、当時私が行った時のアメリカの大きな問題で

した。それから他に、例えば麻薬の取り締まりとの関係でどうするかですね。それは特別警察です。それとの関係なんかも摺り合せが必要ということでしょうね。しかし、あそここの国はいっぺんできますと、みんなそれぞれがそれぞれの、いわゆる縄張りを持っているし、支持者があるし反対者があるし、それは難しいところだと思いましたね。

伊藤 そういう点では、日本だってある程度同じところもある。

海原 ありますね。

伊藤 そうは言っても統一性が昔からあるんですよ。海原 ありますね。ですから当時の警察法改正は、一応これでもってケリがついたということですかね。斎藤さんの手で警察法の改正ができたわけですよ。

飯尾 取り敢えず、この制度自体はこの改正では変わらないけれども、実体的にだいぶ変わってきたということですね。

海原 そういうことですね。

秘密裡にダレス特使と会食

伊藤 では、国家地方警察が管轄している面積はずいぶん増えたということですね。

海原 増えましたね。もうほとんど大きな自治体警察を除いては、全部国警になりましたね。それから先ほど申しました治安上重大な犯罪ですね。これについては国警でやっていけると。知事の要請に基づい

て行くわけですね。そういうことですから、大いに権限が強化されましたしね。

飯尾 そうすると、国警の陣容は増やしていくことになったのですか。

海原 増えてはおりません。

飯尾 では、その同じ人数でやっていくということですか。

海原 温存していたんですね。

飯尾 ただ、やはり実働の部隊がいるんですか。

海原 実働の部隊は、当時管区がありまして、管区の学校に入っている学生なんかは定員外でおりましたけれど、これなんかが、言わば警視庁の機動隊みたいに使えるわけです。

飯尾 では、その管区でプールしておいて、出すということですね。

海原 そういうことですね。だから、東京警察管区の警備部長というのは結構偉いんですよ。管区学校にいる警察官が使えますからね。

飯尾 学校はそういう使い方があるんですね。

海原 あったんです。予備役のプールだったわけですね。いろいろなことを考えているんですね。それぞれにやっていたわけですね。ですから一応、あの時の治安が維持できたと思うんですけれども。

伊藤 それで、ダレス（当時、國務長官顧問）に会ったのは、その予備隊になる前でしょう。

海原 ダレスに会ったのは昭和二十五年六月十二日です。警察予備隊ができたのは二十五年の八月十日です。

伊藤 いえ、ダレスと会った話です。そのほうが前ですね。

海原 ダレスと会った話ですね。私がアメリカから帰って来まして、向こうでいろいろとカーンに世話になりましたね。パケナムから電話が来まして、「カーンが来た」と言うんです。アメリカで私が大変お

世話になったからということ、新橋の小さな料亭で、お札に一席もうけたのです。「アメリカでは大変お世話になりました」ということで食事しましたら、終わって散会する前に「あさつての晩は空いているか」と言うんです。「空いてます」と言った。そうしたら、「渋谷のパケナムのところへ来てくれ」「何ですか」「いや、来たらわかる」ということでした。それだけです。「わかりました」と言った。

ということ、その二日後にパケナムの家へ夜八時に行ったわけです。行きましたら、もうそこに先客が座っていたのです。先ほど申しました八畳ぐらいの日本間で、沢田廉三さんであるとか渡辺武さんであるとか松平康昌さんが座っておられた。「ありやつ」と思った。みんな錚々たる人ですからね。八時前ですが私が一番遅れて入りました。それで末座に座ったわけです。約十分ぐらい待っていましたら、そこへ入って来たのがダレス氏ですよ。アリソンさんを従えて。びっくりしました。

伊藤 顔を見てすぐにわかったわけですか。

海原 それはもうわかりました。それは、ダレスさんの顔はいつべん見たら忘れませんか（笑い）。びっくりしましたよ。パケナムの家に来たんですからね。その時のことが渡辺武さんの本に出ていますけれども、やはりご自分の関心の持ったことしか書いておられませんね。

伊藤 それは誰でもそうですよ。

海原 私が問題にしていたことは一つも書いてない。

伊藤 渡辺さんだって自分のことは一所懸命書いているでしょう。自分の発言だけで、自分だけが発言したみたいな感じで書いてありますね（笑い）。

海原 渡辺さんの話の中に出ていないことを申しますと、最初にダレ

スが入って来まして、座りました。そしてカーンが横へ座る。そしてアリソンがちょうど私の前に座ったんですね。日本座敷で、日本式の食事ですが。

伊藤 それでは座布団ですか。

海原 座布団です。それが、先ほど述べたNHKではテーブルになっていたんですよ。

飯尾 では、ダレスは床の間の方に座って、こういう「現在インタビュー」を行なっているような」座り方なんですね。

海原 そうそう。私の前にアリソンがいるわけですよ。私は末席ですね。後は沢田廉三さん、松平康昌さんが私の左側に座っている。それで、部屋はあれでも八畳ぐらいでしたかね。

飯尾 狭い部屋ですね。

海原 狭いです。

伊藤 では食事は終わってからですか。

海原 いや、まだそれから食事があります。遅い食事で、宮中晩餐会と同じです。八時からですから。

飯尾 これは何月頃ですか。

海原 六月です。朝鮮戦争の始まる直前ですね。それで、まずダレスさんが入って来て言ったことは、私の記憶では、「今日羽田に日本の新聞記者諸君がたくさん来ていた。しかし、誰一人質問しなかった」と言うんです。「なぜだろう。われわれは無視されたか」と言うんですね。そうしたら、沢田さんでしたか、松平さんでしたか、どちらか忘れましたが、「いや、それは質問は止められている」と言ったのです。そうしたら、途端にダレスがびっくりしまして、「マックはそんなことまで命令するのか」と言ったんです。「そうです。今日あなた

がおいでになることについては、質問は一切しないということになっているから、そうなったんです」。ダレスが言いました。「日本の新聞記者というのは質問しないのか」と。向こうとしてはがっかりしたのでしょね。大勢来ていたけれども、一言も質問しなかった。なぜだろう。そんな話ですね。それがきっかけで会話が始まったんですが、それから食事をしながらいろいろ話が出ました。

そこで本にも書きましたが、彼が言ったことは、「もしアメリカが台湾を放棄したら、日本人はどう思うだろうか」という質問ですね。これはなかなか難しいことを聞いたな、と思った。それに、一人一人日本側が答えていくわけです。日本からずっと台湾に至る島々が共産主義に対する防衛線を構成していると、当り前のことを言っているわけです。最後に私の番になりましたから、「私も結論は皆さんと同じである。ただし一つ言いたいことがある。それは、いま日本には日本自身を守るナショナル・フォースがない。これがあるかないかによって日本人の反応はずいぶん違うと思います」と、こう言ったのです。そうしたら、「うん」と言っていましたかね。それは食事の始まる前の話でした。あの時アメリカは、ある意味で台湾放棄まで考えていたんですね。その可能性と将来の危険性ね。日本人がどう反応するだろうかということ。それが最初の話題でした。それが終わってから、食事が始まった。食事の間は、アリソンが前に座っていますから、その時の話は先ほど申しました警察の問題になるわけです。

伊藤 じゃあ、もう自由に話しているわけですね。

海原 やっているわけです。

飯尾 ワイワイと、それぞれ話をしているという……。

海原 そうです。アリソンさんはご存知のように、どこかの石油会社

の社員で大阪にいたでしょう。だから昔の日本も知っているわけです。ですから、先ほどの警察の能率の問題と地方自治の問題を言うんですよ。そんなことはわかっている。そんなことはわかっているけれども、さて、それを前提にして、今はこういうことじゃないかということとを、私はしきりに言ったんですが、彼はもうそれ以上のことは何も言いませんでした。

ただ、カーンが書いている手記によりますと、これは読売新聞に書いていますけれども、食事の場で主たる話題を提供したのはミスター・海原だと。海原は今の警察法の下ではなかなか相互の捜査の助け合いもできない、国家警察が自治体警察に入っていけない、そういう警察では困ると、そういうことをしきりに主張したと書いてますけれどもね。私も印象に残っていますのは、それだけです。しかし、アリソンは最後まで、いやあ、ローカルオートノミーとのバランスをどうするかと言っていた。ああ、この人はこの程度の人だと思いましたね（笑い）。まあ、それだけでした。

伊藤 何時間ぐらいやっただんですか。

海原 あれで三時間ぐらいおりましたかね。ダレスが出て行った後、「しばらく皆さん帰らないでくれ。表には憲兵が待っているから」とか言われてね。結構、嚴重な警戒でしたね。だから、帰ってしばらくしてから、私たちも帰ってよろしいとなりましたけれども。あの頃はパケナムとかカーンとかいうのは、マッカーサー司令部から要注意人物として警戒されていましたからね。

伊藤 それと付き合いのある海原さんも危険人物じゃないですか。

海原 どうでしょうかね。私はちんびらですから。

伊藤 いやあ、ちんびらとは言えないでしょう。

海原 しかし、そういうことをおっしゃいますと……。どの程度私がマークされているかというと、私はアメリカのCIAの連中と付き合いがありましたから、日本にいる……。

飯尾 それはどういってお付き合いですか。捜査情報の交換みたいなことをしたんですか。

海原 ええ。時々一緒に食事をしたり。

伊藤 それはCIAですか。それはどういう形でいるわけですか。

海原 それは大使館とは全く別な形で、渋谷あたりに本部を持って動いていました。

伊藤 それは別に名乗っているわけではなくて。

海原 はい。そのうちに私に接触して来まして、話しているうちにわかりました。

伊藤 わかったと言っても、向こうが名乗ったわけではないでしょう。

海原 ええ、名乗りません。アメリカの機関だと言っていましたけれどもね。その辺のことは先ほど言った中村五郎君にちょっと頼むと、調べてくれるわけです。

伊藤 ああ、そうですか。

飯尾 では警察同士の付き合いというのはちよつとない。個人で付き合いということですね。

海原 そういふことですね。

伊藤 そのCIAとのお付き合いというのは、ずっと続くんですか。

海原 ええ、だいぶ長く続きましたね。キューバ封鎖がありましたね。あの時は、朝CIAの親分から家に電話がかかってきまして、今日の何時の進駐軍放送を聞いてくれと言うんです。大事な放送があるからと言う。これが要するにキューバ封鎖の問題でした。その頃からは

らく後まで私は付き合っていましたね。

伊藤 向こうの関心は何ですか。

海原 そこまで私も確かめませんでした。いったい警察はどうなるだろうかということですね。一つの、例えばつまらないことですが、私も、私に接触した男が言ったのは、ウラジオストックに日本の船が行く。その時にウラジオストックの港内のソ連の施設、これについての写真情報、そういうものを入手する何かいい方法はないかと言ってきましたね。それは下の方の人でした。私はそんなものは意味ない、横浜の港の倉庫の写真を写したって同じことだ。ウラジオストックの港の倉庫がどうであろうが、そんなことは関係ないよ、というようなことで私は断ったことがあります。その頃はアメリカの方は日本の週刊誌を全部翻訳していましたね。何でそんなことやるんだと言ったんですけれどもね。

伊藤 情報収集なんですね。

海原 そういう面で、いろいろな網があつたことは事実です。それに対して私はほどほどに、適当にあしらっておつたです。しかし、関係は切りませんでしたけれどもね。

伊藤 向こうから得られる情報もあつたわけですか。

海原 ありました。たまにはね。しかし、あまり参考になったのはありませんよ。

伊藤 参考になるような情報は流さないでしょうね、きつとね。

海原 それで関連して笑ひ話を申しますと、ずっと後の話ですが、中曽根総理がアメリカから聞いた情報だと言って、ソ連は中共が核兵器の開発を完成する前に砂漠の包頭ですか、あそこを爆撃する、攻撃するなんていうことを言いました。国防会議議員懇談会の席上ですよ。

私が、そのソースはどこですか、と聞いたたら、CIAだというわけですね。CIAもいい加減な情報がありますからね、と私は言ったんです。そういうことがありました。いろいろな動きはあつたと思ひますけれども、その時以来CIAについては接触はなくなりました。

伊藤 その警察法の改正の問題で、現実に当時の共産党、共産勢力の動きなんかについては、あまり注目されておられなかつたんですか。

海原 これは、その後の話です。企画課長の時はまだ共産党は関係ないんです。企画課長から、今度は私は東京警察管区の警備部長に替わりますね。それから後の関係です、対共産党は。それも突然の異動で、北海道へ私は講演に行く予定だつたんです。

伊藤 ちよつと待つて下さい。それは何年のことですか。

海原 一九五一（昭和二十六）年六月二十六日です。

伊藤 それはもう、警察予備隊をつくつた後ですか。

海原 もちろん、つくつた後です。

警察予備隊の創設

——人事を担当する

伊藤 警察予備隊をつくつていてる時の身分は何でしたか。

海原 その話はまだ全然していませんか。

伊藤 まだです。

海原 ああ、そうですね。したと思ひていました。警察予備隊をつくつていてる時は、私は企画課長です。

伊藤 企画課長のままでやっているわけですか。では企画課というのは、警察法の改正だけではなくて。

海原 この前そのお話がありまして、「企画課長というのは」何をするのかはわかりませんが、と言いましたけれども。

飯尾 前半は警察法の改正をしておられて、後半は仕事が変わってきたわけですね。

海原 そうです。

飯尾 それでは「企画課長時代の」後半のお話をお願いします。

海原 いろいろと、あちこちに話が飛びまします。今度は本物と言いますか、私がお後ずつと関わりを持つようになった警察予備隊の創設ですが、これは加藤さんの日記にも出ていますけれども、加藤陽三さんが総務部長です。ある日、帰ってこられて「大変なことになった」と言うわけです。「何ですか」と言ったら、「今度警察予備隊ができる」「それは何ですか」と言ったら、「よくわからん」とおっしゃるんです。彼の日記にも書いてありますけれども、私はすぐハハンと思いました。それは、アメリカでそういうことをやってきましたからね。そして、朝鮮戦争が始まりましたからね。

伊藤 朝鮮戦争の直後ですからね。

海原 朝鮮戦争につきましては、たまたま朝鮮戦争が始まるちょうど一週間ぐらい前ですか、GSの松方君のところへ私は行ったわけですよ。彼はちょうど朝鮮から帰って来たばかりでして、「実は朝鮮から帰って来た。いま南の方の防備は完全にできている」と言うわけですよ。それで、第一線を見て来ているんですからね。「仮に北が攻撃して来ても、断固として南がこれを撥ね返すだけの準備はできている」と言明するんです。「ああそうですか」と言って、私は帰って来た。その

一週間後ですよ。それが当時の、マッカーサー司令部の判断でしょうね。そう思います。

さて、朝鮮戦争が始まった。そうすると、日本にいるアメリカの四個師団のうちの三個師団が持つて行かれるでしょう。「ああ、これは何かあるかな」と思いました。そこへ予備隊の創設ということになります。それで国家地方警察が全部、その創設をお手伝いということになりました。加藤総務部長の部屋に集まる。これから大変なことになるということでやるわけですが、その時もまだ、一体それは警察の予備なのか、それともいわゆる軍隊的なものなのかわからないんです。誰も。私は黙っていたんです。しかし私の感じでは、「これは軍隊だな」と思いました。

そうしたら加藤さんが、「海原君、松方君のところへ行って、ひとつ聞いてきてくれ」と言われるものですから、私は翌日松方君のところへ行ったんです。そうしたら、編成表を見せて、こういう編成だと言おう。見たらすぐにわかりますよ。「ああ軍隊だな」と思った。それで、私は「これは軍隊です」ということを言ったわけです。軍隊的なものだと言った。そういうことがありますけれども。

最初はみんな何かわからない。加藤さん自身の日記に出ています、フィリピンのコンスタビュラリーと言うんですか、何か予備警察軍みたいなものですか、そういうものだと思ったと書いてあるんです。それで、面白いことが起こりましたのは、幹部をどうするかということになって、昔の内務省の人々が集められるわけです。しかし、しばらくすると、そのうちの二、三人が来なくなりましたよ。話を聞いているうちにだんだん、ああ、これは普通の警察じゃないということになりました。脱落していくんです。そういう状態が続きましたね。

その時に私は警察予備隊を創設するポツダム勅令、「ポツ勅」と言っていますけれども、「ポツ勅を書いてくれ」と言われて書くわけです。私は家で書いてました。蚊帳を吊りまして、応接間で蚊帳の中で書いていたら、NHKの坂本君が訪ねて来ました。その時のことを彼は本に書いていますけれども、「私が海原君の私邸に行ったら（倉町の官舎ですが）蚊帳を吊って、その中で一所懸命に書いていた」とあるんです。私はこれが漏れたら大変だと思ひまして、タイピストや関係者にも嚴重に注意しました。それで十箇条を書いたわけです。

それが私の警察予備隊との関係なんです。面白いことを申しますと、その時に、警察予備隊という組織の人間としての発令予定は増原さんだけなんです。あと誰もいないです。役所の起案文書には起案者という欄があるんです。そこに判を捺さなければいけない。私は警察の人間ですから、それは捺せないわけです。起案者は増原恵吉さんなんですよ。

飯尾 そして決裁も同じ。

海原 決裁は大橋武夫と吉田茂なんです。だから、このくらい珍しい文書はないと思うんですけれどもね。

飯尾 偉い人しか関係していない。

海原 発令が予定されていたのは増原恵吉だけなんです。しかも増原さんとの因縁がありますのは、満州で私がかつて増原さんをご指導申し上げたことがあるんです。それは、この前お話ししました「関特演」。あの時に増原さんは軍直轄の、確か防疫給水部関係の小さな部隊ですが、その主計将校だったんです。昔は何かお金を納めれば、それで予備役将校になれるという制度があったんですね。それで彼は予備役将校だった。虎林に部隊が集まって、しばらくして経理部将校の会同

がありますね。調べたら、増原大先輩がいるじゃないですか。それで私は「増原さんの後輩の海原です。御用があったら何でも言っておさし」ということで、一所懸命世話したことがあるんです。経理検査もやりますね。そういう時もちゃんと予め注意して、こうだこうだということをやったことがあるんです。これは二、三カ月でしたか。そのうちに彼は南方へ行くわけです。そういうことで満州で知り合っているんです。

そういうこともありまして、増原さんが香川の知事から出て来ましたね、吉田さんと呼ばれて。それをお迎えするのが私で、「海原、お前行って来い」ということで、東京駅へ迎えに行ったりしました。それで旅館は新橋の『本如月』という、後で料亭になりましたが、当時は旅館をやっています、そこへお連れしたんです。それで、「今度は大変ですね、増原さん」と言ったら、「いやあ、こういうことだからしょうがない。君にも世話になるかも知れないから」と言われてね。そういう因縁があるんです。それで、増原さんのところで、いわゆる人事が始まるわけです。

伊藤 ちょっと待ってください。その増原さんは一人任命されたと。

何に任命されたわけですか。

海原 警察予備隊本部長官です。「第六回で訂正。この時点では、増原氏はまだ「任命されていない」。

伊藤 それで、ポツダム勅令はできていたんですか。

海原 面白いですよ。ですから、その頃の細かいことは一ついつべん申し上げたら面白いですよ。発令されているのは警察予備隊の人間では増原さんだけなんです。

伊藤 ですけども、発令するためには勅令が必要なわけでしょう。

海原 何か出したんでしょね。

伊藤 勅令なしで、というのもおかしいじゃないですか。

海原 警察予備隊をつくるということですね。ですから予備隊令の発令の前ですね、それは。だから、どういう形で発令しましたか。私がその予備隊令を書いたのは、まだできる前でした。迎えに行く時も。それから、できてから正式に発令になったと思います。言うならば、私が迎えに行った増原さんは、その心得で来たんでしょね。

飯尾 心得か、準備ヲ命ズという辞令をお持ちだったんでしょね。

海原 それで迎えに行ったのは私で、『本如月』という旅館にお連れして、「ご苦労様でございます。また軍服を着るわけですね」と言っただ。十箇条のボツダム勅令は、当り障りのないことを書いたわけです。そういうことで、警察予備隊が発足するわけです。

伊藤 それで、増原さんはどこにおられることになったわけですか。

本部はどこにできたわけですか。

海原 まだ、本部はできていません。後で越中島に決まりますけれども、まだあそこは最初できてなかったです。

佐道 越中島はいつできたんですか。

海原 それは知りませんね。覚えていません。

伊藤 最初はどこで事務をされていたんですか。

海原 正式に予備隊令が発令された時に、商船学校、水産講習所のところが空いていましたから、あそこを使うことに決めて、そこに行っただんじやないかと思えます。その頃は結構空きがいっぱいあったんでしょ。品川の方にもありましたしね。私が記憶しているのは越中島です。

伊藤 それで、お一人が任命されて、準備は誰がやるんですか。

海原 警察がやるんです。国警本部が全力をあげてやるわけです。他にありませんから。しかも名前が「警察予備隊」ですから。創設時には、国家地方警察本部が全力をあげてやれということになるわけです。

伊藤 その中心になるわけですか。

海原 私は中心ではありません。それぞれの部局に応じて、例えば装備関係は装備課長というのがおりますし、教育関係は教育課長がおります。私は要するに基本的な法制の問題の担当をするわけです。そこで予備隊令の起案を命ぜられるんです。

飯尾 その準備本部みたいなものが国警本部にできたわけではないんですね。

海原 ええ、ありませんね。しかし一時、一部屋を用意しまして、そこへ人が来ていたことは事実です。それはいつからかは覚えていません。そこへ集まってくる人の数はだんだん変わるわけです。

飯尾 その時の問題になっていることに応じて、いろいろ人が集まってくるわけですね。

海原 それで、ご存知のように一般募集が始まりますね。それから、その教育をどうするかということになる。それで私は「S1」と言っています、人事関係担当を言われるわけです。私の担当した分野はどうしたかと言いますと、私の相手は顧問団のヘイゼンという大尉でしたが、自分で「平然」という判子を作っていました。奥さんは日本人なので、今でも付き合っています。

私の仕事は、G1の将校と下士官要員を教育することですね。「君は軍隊の経験があるから、朝起きてから寝るまでの、いろいろ規則その他を書け」と言うんです。これは私は、たまたま軍隊時代の「日朝点呼」とか「日夕点呼」の、そういう関係の文書を持っていましたの

で、記憶を思い出して書くわけです。それで教育をすると、こういうわけです。

それで越中島に行きました。その時はまだ下士官と将校と分かれていません。四十名ぐらいですが、教育をするわけです。「日朝点呼」というのはどういうことをやるとか決めて、それで二週間ばかり教育しましたが、終わって試験をやるわけです。そして七十点以上は合格で将校、それ以下は下士官と、こういうふうに分けるわけです。そして、各キャンプに送り出す。そういうことをした。そしてS1、G1の教育については、私が全部しゃべるわけです、日本語で。それをヘイゼンが通訳をつけて、後ろで聞いているわけです。だから全部私がやっただけです。

ところが、他所の係によつては米人の米軍の将校がしゃべって、それを二世が通訳するというようなことをやるんですね。その日本語がまずいものだから、ある係は講義が終わって試験をしたら全然わかっていないんです。そういうこともありましたね。それで、もういつべんやり直しということになるんです。いろいろなことがありました。それは創設期ですから。試験についてもいろいろな問題がありましたしね。私の場合は人事をやる人間、人事係がまず大事だということで、最初にそれを送り出した次第です。

伊藤 その四十人ですか。これは人事関係なんですか。

海原 人事関係です。各部隊のS1ですね。それは当時のことでは、坂本君の思い出話が面白いですよ。読売新聞が出しました『再軍備の軌跡』がありますでしょう。あれに出てきますけれども、初めは偉い師団長代理になった男が連隊長代理になって、中隊長代理になってと。

伊藤 降格ですか。

海原 そうなんです。それは後から旧正規軍人が入ってくるんです。

旧軍将校が追放解除になりますね。そういうことで、あの時はごたごたしていました。しかし、ともかくもそういう形は整えた。それには同じことを何度も繰り返しますが、国家地方警察の人間じゃないんです、教育する者は。それで一般的な教育は教養課長の柴田さんなんかが中心になってやっていましたけれどもね。会計関係は会計課長の三輪さんですね。そういうことで、基幹人間の養成は国警幹部がやりました。選別が終わると、今度は江田島へ行く。また、もういつべん向こうの人が教育するわけです。予備隊の方には石井栄三さんが警務部長で行く。後藤田君がその下で課長で行くわけです。彼は石井栄三さんの子分ですからね。そういうことになるわけです。

伊藤 それで、海原さんはそちらには行かれない。

海原 その時は行きません。

伊藤 来い、という話はなかったですか。

海原 それはないですね。ないと言いますか、さつきちよつと申しましたけれども、「ミリタリー・コートを作れ」という話で喧嘩みたいになった顧問団のノルトンという大佐から、「予備隊の人事部長に来ないか」という話がありました。逃げました。

その件に続いて思い出しますものが一つあるんです。旧職業軍人の一部が追放解除になりましたね。そして旧陸海軍の旧軍人が入ってくるわけです。そうしたら階級の調整が必要なんです。例えば海軍の大尉だったらどうするか。彼らはわからないでしょう。それで私に、旧軍人の階級と今の警察予備隊の階級との調整案を作れと言います。それで私は一案を用意したんです。それを彼に見せたら、これでいいと言ってくれる。

ところが、その三日後ぐらいですが、電話がかかってきまして、「すまんけど、すぐ来てくれ」と言うんです。それで越中島へ行った。そうしたら「お前の作った案を顧問団長に見せたら駄目だと言っている」と言うんです。「理由は何か」と聞いたら、「旧軍人は全部追放されている。ここに旧海軍の大尉とか旧陸軍の少尉とか書いてあるけれども、こんな者はいないはずだと言っているんだ。自分が説明しても駄目だ。だからお前が直接説明してくれ」と言うわけです。それで、しようがない。私は顧問団長のシエバードという少将(いい人でした)のところへ行った。そうしたら、彼がおもむろに机の引き出しから何かリストを出しまして、「旧帝国陸海軍人はこの表にあるように全部追放されている」と、こう言うんです。「だからお前さんが作ったこの階級表に旧軍の〇〇とあるけれども、これはいないはずだ」と言う。そこで私が言ったことは、「それは顧問団長、違います。そこに追放と書いてある人々は全部旧正規職業軍人のことです。それ以外の予備役将校については追放に該当いたしません。例えば私は旧陸軍の主計大尉です。それがちゃんと国家公務員なんです。だから、あなたのおっしゃる『旧将校は追放した』というのは間違いです」と言ったら、「ああそうか」と言うんですね。その辺はなかなか素直でしたね。「ああそういうことか。じゃあ、これは旧正規の陸海軍軍人の追放のことか」「そうです」「わかった」ということで、オーケーになるわけです。

伊藤 でも正規の軍人も追放解除になるわけでしょう。

海原 後でなるんです。

飯尾 でも、それは後の話だから、その時の話ではないんですね。

海原 ないんです。そういうことがありましたね。だから、先ほども

申しましたが、来ている顧問団員のアメリカ人もよくわからないのですよ。ノルトン大佐とは議論した後で、非常に仲良くなりました。私には是非予備隊に来说うんです。「俺が推薦する。だから、G1の長になるんだ。日本一若いジェネラルができる」と言うんです(笑い)。日本一若いジェネラルができるから、是非来いと言われましてね。

伊藤 心が動きませんでしたか。

海原 いや、どう答えようかと思いました。「お前は非常に優秀であるから是非来い、俺が推薦するとジェネラルだ、どうだ」と言うんです。それで私が言ったのは「あなたの好意には本当に心から感謝する。しかし、日本には慣習がある。私はミスター・斎藤の部下なんだ。ミスター・増原の部下ではない。私はミスター・斎藤に言われて予備隊をちゃんと発足させるように手伝いに来ている。だから私はここであなたにイエスともノーとも言えない。そういうことなら、ひとつミスター・斎藤にミスター・増原を通じて言ってくれ」と、こう言ったんです。そして帰って、斎藤さんに、こういうことですからよろしく願います、と言ったんです。

伊藤 よろしく願いますというのは、断ってくれという意味ですか。

海原 もちろんそうですよ。後になつてくると私も関係しますからね。

あの時なつておけば良かったかな、と思うこともありました(笑い)。

佐道 違う人生だったかもしれませんね。

海原 しかしまあ、そんなことがあるんです。それからすっかりノルトンとは仲良くなりました。いい大佐でしたね。「郷に入つては郷に従え、When in Rome do as the Romans do.」と言ってやった。彼も日本人からあんなことを言われたのは初めてでしょうね。そういうことがありましたね。

それで、国警の人間がお手伝いしたのは大体三カ月ぐらいですね。

その間にちゃんと予備隊の方の上もできていますから。内海君とか後藤田君のところですね。ちゃんとできるわけですね。それから私はもう手が放れた。

飯尾 それで、また元に戻られる。

海原 そういうことです。まあ、いろいろとあるんですよ。その時の思い出話は。面白いと言いますか、週刊雑誌的に言いますと、コンドームをたくさん買い込まされるわけですね。

飯尾 警察予備隊が必要だからということなんです。

海原 その関係の将校から、いくら買えとか言ってきた。要するに、彼らにしてみれば軍をつくるつもりなんです。だから後藤田君がどこかで言っていますけれども、朝鮮に攻めて行くつもりがあつたんじゃないかと。そんなことは考えないにしても、これは軍隊なんだと。その証拠には保安隊の編成に冷凍中隊というのがあつたんですよ。このことを彼は本で言っていますけれどもね。ある新聞で、こういうものを予定したから、彼ら米國は予備隊を朝鮮に持つて行くつもりじゃなかったかと言っていますが、私はそうは思わない。これは、向こうの編成表を示して、この通りやれと言っただけの話であつて、先ほど申し上げたように、来ている連中の知識水準はそんなに高くないんですよ。

飯尾 まあ、あり合わせのものを見せただけなんです。

海原 そうそう。それがずつと影響するんですが、ここで言うておきますことは、例えば後でアメリカの方が日本の陸上の兵力を三十二万五千とか三十八万にしろと言つた話がありますね。あれは私が調べたところでは、十個の単位が必要である。例えば師団なら十個師団、その十の単位をアメリカの軍の編成でいくと三十二万五千になるとい

だけのことなんですよ。

飯尾 師団に十を掛けただけなんです。

海原 そうそう。その程度の認識なんです。だからアメリカが言ったのは、要するに日本の防衛ということ考えた場合には、少なくとも『五のユニットが必要である』、こうなるんですよ。それを下の将校が単純にアメリカの編成を見て三十二万五千とか三十八万とかいう数にしたと思いますね。ということで、その予備隊の編成表に冷凍中隊、死体を冷凍して本国に送り返す、というようなことをやる中隊が入っていたとしても、それをやろうと思つたのではないのであつて、たまに参考としてアメリカの師団編成はこうだということ、「編成表を」渡したと、私は解釈する。しかし後藤田君はそれを根拠として、アメリカには「予備隊を」朝鮮に連れて行くつもりがあつたかも知れないと言っているんですね。それは、「かも知れない」。しかし、これは日本側の抗議で冷凍中隊はなくなりますけれどもね、保安隊になつた時には。そんなことがあります。

ですから、アメリカの編成表にあつたかということの後の人がおっしゃいますけれども、それは私がいつも弾（タマ）のことで言うんですが、そういうものであつたかということの判定が必要なんです。しかしともかく、日本が戦争で負けて何もかもなくなつて、これから先どうするかわからない時の出来事ですから、いろいろな誤解があるのは、これはやむを得ないでしょうね。

河野 先生がナショナル・フォースをつくるべきだというふうなことをペーパーに書いていらした時に、五万人ということで、数字もそこで入っていたわけですね。

海原 入れました。後で吉田総理が再軍備との関係でアメリカに渡し

たという旧軍の人のペーパーにも、五万人とあるんですよ。そこで、ある説をなす人は、海原があの時置いてきた五万人が復活したんだと言いますが、とんでもないことですね。たまたまそういう数字が符合したんであります。

佐道 先生の、その五万という数字の根拠は？

海原 私は感覚的に少なくとも、当初は最小五万人程度のナシヨナル・フォースということで出発することが必要だと思ふ、ということを書いておいたんです。それだけのものです。何も根拠はないです。もう、ヤマ勘ですよ。ただし、いま言いましたように、吉田さんが、会った時に五万という数字があったということは事実ですね。その関係は何もないんです。

伊藤 後藤田さんの話だと、後藤田さんはあくまで、これは警察だ、警察だということをおっしゃっていますけれども、先ほど海原さんは軍隊的なものだとおっしゃいましたね。そういう点は、あまり皆さん意見が統一しているというものではないわけですか。

海原 意見というよりも感じ方の問題ですね。後藤田君は、そんなわずかなものでは軍隊にはならんと思っているかも知れない。私は、そうではない。やはりナシヨナル・フォースという考え方で、外敵に当たるというものです。その部隊を性格的に言うと、それは軍隊的なものということですね。だから、これはもう見方の問題じゃないでしょう。それは、五万で日本の国を守れと言っても無理な話ですね。ですから、私が後に「郷土防衛隊」ということを言うのも、それがあつて、だから、五万程度のものでどうして国が守れるかとなると、それは軍隊的なものではないと言う。しかし編成を見れば、機関銃を持って、小銃を持って、大砲を持って、これは普通の警察ではないで

すね。

伊藤 高射砲も持っていたんですよ。

海原 そうそう。ここで高射砲というと、苦勞もするんですが。

佐道 さっき増原さんをお迎えに行かれた時に、軍服を着られるかも知れませんが、というようなお話をされましたけれども、実際、長官は文官なんです。最初はみんなそういう軍服を着るんですか。

海原 私もそう思いました。また、あんな本部が運転手を含めて二百名だとかいうのはわかりませんし、それから後で話が出てきますけれども、シベリアン・コントロールなんていうのも言葉としてはわかりませんが、これは、出てきたのはいわゆる警察の予備隊ですから、全部制服を着ると思います。それは最初、「背広の本部」というものを見た時はびっくりしましたよ。というのは、私たちは彼らの言うスタッフとラインとの関係がはっきりしませんからね。その辺のところはアメリカさんに教えられたことですね。スタッフ、考えてみると日本でもかつて陸軍省で参謀本部の職員が参謀本部部長と言われていましたね。それが今の内局の部長という言葉の元になるわけですが。なるほど、言われてみると彼らはスタッフであつて、ラインの間ではないわけですね。スタッフはそんなに要らない、というのが基本的な考えだったようですよ。

伊藤 今の段階になつても、そのスタッフとラインの区別が非常に不明確なんじゃないでしょうか。

海原 不明確というより曖昧ですね。それはまた曖昧の方がいいので、曖昧にしているのかわかりません。それは後でシベリアン・コントロールのことでお話が出てくると思うんですが、今の人の考え方でシベリアンがコントロールするという場合、まずそのシベリアンは何か、

何をコントロールするのか、その次はそれができるのか、という問題があるんですね。わからないですよ。

別の面を言いますと、行政改革で「政と官」という言葉が新聞紙上で踊っていますけれども、その区分が私にはわからないですね。この間もあるところで言ったんですが、「政」と言い「官」と言うけれども、一体その「政」は何で、「官」は何なんだ。問題は国会での政府委員の廃止の問題ですよ。それから副大臣とかね。そんな言葉を作って、それで「政」と「官」との問題を扱うのはおかしいじゃないかと言ったんです。

話は余談になりますが、政府委員の問題では、私が昔、二、三の総理大臣に直言したことがあるんです。国会の委員会、戦後は日本の国会の審議は委員会中心ですが、私たちが政府委員で行きますね。そこで討論するのは、野党の先生と政府委員ですよ。「これはおかしい」と言ったんです。当時は安保論争が盛んな時です。イギリスでは国会に行くのは次官だけです。次官は事実関係を説明する。後は全部与野党がご存知のような審議をやるわけですね。それが本来の委員会の審議じゃないかと。日本の委員会では野党と政府委員とが議論している。しかも規則の上では、政府委員は質問に対して答えるだけであって意見を述べてはいけないと、こうあるんです。そういう制約があるんですが、私たちは「せっかくの機会でございますから」と言ってみて意見を言うわけです。そういうことなんです。それが今の日本の委員会の審議だ。これはおかしい。役人と政治家との討論所になっている。だから政府委員は事柄を説明する、事実を陳述する。それについて与野党議員が議論を交わす。それが委員会のあるべき姿ではないかと、こう言ったんです。二、三の総理に。

そうしたら、何という答えが返ってきたと思いますか。「それは海原君の言う通りだ」と言うんですよ。「そうあるべきだ」と、こう言うんです。「しかし、もしそうだったら、社会党に負けるよ」と言うんです（一同笑い）。「それは社会党の先生方は勉強している。わが自民党の先生方は全然勉強していない。だから、もし君の言うようなことをしたら、それはもう委員会審議は社会党の圧倒的な勝利になる。だからできない」と、こう言うんです。「ああそうですか」と言いましたが、そう思いますね。

それはやはり「影の内閣」ということで、ちゃんと勉強した人が大臣になるといふようなしきたりがないと、いきなり凶らずも大臣になった人はとても駄目ですよ。いくら役人がご進講申し上げても。私は十数人の大臣にお仕えしたんですけれども、そのうちの一人の大臣は真面目な人ですよ。国会答弁を用心しますね。初めは書いて渡していたけれど、「海原君、すまんけれども、これを五通作ってくれ」と言うんです、複写して。どういう訳ですかと聞いたら、役所に一枚置いておく。家にも置いておく。それから自動車の中に置いておく。それからもう一通はポケットに入れておく。もう一通は予備だと言うんですね。だから、その大臣さんにはそれから謄写紙で書いたんですがね。真面目な人だから、そういうことを言うんですね。だから現状を前提にしますと、とても政府委員を廃止して野党の勉強している人との質疑応答はできませんね。

それから副大臣と言ったって、政務次官が副大臣となつて、どういふプラスがあるかですよ。これまた似たり寄ったりでしょう。

派閥盛んなりし頃は、大臣が甲の派閥で政務次官は乙の派閥から来た。それから人によっては大臣に持って行くと、「これは君、政務次

官には言うなよ」と、こう言ってくるのがいるんですからね。それが人間の現実の物の考え方です。それを前提にしますと、副大臣を設けるとか、政府委員制度を廃止することによって国会がどうこうというのは、私はおかしいと思うんですがね。しかし、どうも今の様子ですと、やるようすがね。

伊藤 やつてみてどうなるかですね。

海原 それはもう、やつてみることはいいことですけれどもね。

伊藤 元来はご主張ですから。

海原 しかしやると、いろいろ問題がありますよ。一番ひどい例は、久保田（円次）防衛庁長官ですよ。あの方は、たまたま福田さんと同郷というよしみで防衛庁長官になったでしょう。

飯尾 お辞めになりましたから。

海原 ええ、お辞めになって亡くなられた。それで、あの人の場合は時期が悪かったです。改造が暮れでしょう。予算編成の前ですね。そうすると各省と大蔵省との予算折衝で、ずっと詰めていきますね。最後に次官折衝とか大臣折衝を残すわけです。これは予め話をして、これはもうこうしましょう、となります。その大臣折衝には役人は付いて行かないことになっています。「歌舞伎」ですからね。ところが久保田さんの場合は、あの一人では話にならないから事務次官が付いて来いということになったんですからね。

伊藤 歌舞伎もできないということですか。

海原 わかりませんですよ、まず。そういう人を防衛庁長官にするのがいけないんです。それは、そうした総理が悪いんですね、私に言わせれば。他の大臣にしておけばいいんですよ。

伊藤 他的大臣でも……（笑い）。

海原 いや、防衛庁では知らないことがいっぱいあるんですから。外国語が多いでしょう。そういうことをわきまえない人がいきなり来てね。別の例を言いますと、ある大臣の時ですが、予算の前、予算案を経理局長が説明するわけです。書類を配りますね。そうしたら、その大臣が怒り出したのは、歳出という次に国債と書いてあるんです。それを見て大臣が怒ったのは、「防衛庁が国債を発行するのは何事だ」と言うんです。そこで経理局長は「いや、これは国庫債務行為の略語でございます」と言った。「ああそうか。なぜそう書かない」と、こう言った。その程度ですよ。だから、まあ話はだいぶ横に逸れましたけれども、そのところが大事なことでしようね。

旧内務官僚 VS. 旧陸海軍

伊藤 さつきおっしゃった二百人の警察予備隊本部、これは文官ですね。これと警察予備隊の部隊との関係というのは、どういうふうに構想されていたんですか。これはさつきおっしゃっていたシベリアン・コントロールの問題とかかわるわけですね。

海原 かかわりますけれどもね。警察予備隊本部と定められましたから、日本の行政組織の考え方で、そこでいろいろなことを決めると思っていたんですね。ラインの各省と同じように。ところが、そこはスタッフであって、その他にそれぞれ「制服」のヘッドクォーターがあるんだということを聞いて、ああそうか、となったわけです。言葉は

わかりましたけれども、さて、どうしていいかわからない。それをやったのが後藤田君、内海君等の人々ですね、石井さんの下で。しかし、創設期ですから第一線の部隊をつくり出す、つくり上げるといふことの方にほとんどの力が行っていますから、中央ではあまりどうこうということとはなかったでしょう。

ですから問題は、保安庁になる時に警察予備隊本部の内局がどういふふうな考え方をしたのか、どういう手当をしたのかです。保安庁法の制定が当時の内局としては非常に大きな問題だと思います。今になって、保安庁法を改正する時のことを読みますと、ある意味で五里霧中のですね。なぜこういうことをお話しするかと言いますと、シビリアン・コントロールとの関係があるわけです。保安庁法の規定に「内局の課長、局長等には制服の三等警備士、保安士等になった者は任命しない」と書いてあるんです。これが問題になりましたね。

伊藤 警察予備隊の時はそういうことはなかったわけですか。

海原 まだ、そこまでいっていません。警察予備隊令の時には書いてません。それが今度は保安庁法になるわけです。保安庁法になって初めてそういう組織の基本的なものが決まったわけです。したがって「保安庁法改正」という解説誌が出ていますが、それには当時の法案を書いた諸君がいろいろ解説しているんです。そして初めてシビリアン・コントロールが出てくるわけです。保安庁ができてから、私が後藤田君の代わりに行くわけですがね、いわゆるシビリアン・コントロールというのはそれからの問題です。

伊藤 それまで、そういうことはあまり問題になってなかったということですね。

海原 ええ、部隊の育成です。ですから具体的に言いますと、寄せ集

めの烏合の衆であったものに、どうしたら組織あるナショナル・フォースができるかということ、その関係で旧軍人の追放解除があるんです。そういうことがいっぱいでした。それで保安庁ができて、保安隊ができた時に、吉田総理が行って「新国軍の土台であるべきだ」という訓辞をした。あの辺からですね、問題は。その「新国軍」という言葉になりますと、旧軍の服部卓四郎さんを中心とした連中が、「これはあくまで警察の予備隊である。新しい国軍は別にできる」ということで、特に改進黨方面等に働きかけて、いろいろ運動するわけです。それとの関係で、いわゆるシビリアン・コントロールということが一般的な問題になるといふことでしょう。

もう一度申しますと、予備隊ができて保安隊になるまでの間は、どうやって実際の部隊をつくり上げていくか。その間に今度は海上警備隊がありますからね。それで海上保安庁との関係も出てきますし、そういうことで非常に忙しかったということでしょうね。

伊藤 そうすると警察予備隊は、幹部は旧内務省系の人々で構成したわけですか。

海原 当時はそうですね。それしかありませんから。人間を持って来る部門がないですから。

伊藤 これは軍隊で言えば、陸軍ですよ。海軍の方は今ちよつとお話になった別系統で構成されるということになりますか、これは全然無関係に伝わって来ているわけですか。

海原 それが全く無関係になりましたのは、服部卓四郎さんが言った言葉ですけれども、要するに警察予備隊から出発した保安隊、これは旧内務官僚による軍事の支配であるということですね。旧内務官僚、特に警察官僚。それに対抗して今度は海上警備隊、これは旧海軍の人々

が、野村元大將を中心とした人々がアメリカとの間で「新国軍」、海軍の建設ということをやっているわけです。その人たちの構想がそのまま海上警備隊になるわけです。そして後で両方が一緒になる。こういうことですから、もうできた時から考え方が違うんです。

私が保安庁に行った時に、当の旧海軍の人々の、俗称「Y委員会」というのがありました。Yは山本善雄元少将ですね。このグループは野村元大將、元アメリカ大使を中心とするグループで、そこで新海軍の建設計画を作った。それをアメリカ側に提示している。それに対してアメリカ側からの反応もある。それについての文書を私は持っていますけれども、それを見ても、明確に旧陸軍と旧海軍の対抗意識がはつきりしていましたね。

伊藤 アメリカ側に出したということは、もう占領下でそれをやっていたわけですか。ということはGHQとやっていたんですか。それとも……。

海原 アメリカの方の旧海軍軍人は別です。プリスコーという中将が中心ですけれどもね。それはこの前の『再軍備の軌跡』に詳しく書いてあります。

伊藤 そのことは当時知っていたんですか。

海原 私たちは知りませんでした。全然知りませんでした。何か旧海軍の人は旧海軍でまともって、米海軍と交渉をしているなどということは知っていましたけれども、そういう動きはあちこちにありましたからね。「新海軍計画」というものを作り、航空母艦四隻を入れ、巡洋艦一、駆逐艦四、潜水艦八をアメリカからもらう、という案を出していることは全然知りませんでした。

伊藤 そうですか。すると、その旧陸軍の人たちの動きと、この警察

予備隊というのはどういう関係でしたか。

海原 まず陸軍というのはバラバラなんです。人が多くて。かつて皇道派と統制派の対立があったでしょう。それからいろいろ出身地で薩摩、長州とかいうのがあります。派閥抗争が非常に強い。しかし一応中心は服部卓四郎さんがアメリカの方とも仲がいいということを中心になつていました。その服部さんは「新国軍計画」というのを持っていたでしょう。これは警察予備隊はあくまで旧内務官僚による警察の予備隊である、「新国軍」は別途旧陸軍の軍人が中心になつたものを作るべきである、という考え方です。これと同調したのが改進黨ですね。芦田さん、中曾根さんの系統です。

海軍の方はまともって、アメリカと直接やって「新海軍計画」を作った、そういう状況です。ですから、それが具体的に現れましたのは、旧陸軍の軍人が追放解除になりますね。あの時に士官学校の各期で議論になりました。期によって入るか入らないかを検討したことがあります。ある期は全然入らなかつたんです。それは「服部さんらが『新国軍』を別につくるんだ、そこへ俺たちは行くんだ」ということで、ある期がまるごと入らなかつた。しかし、それがだんだんどうも様子が違うということが変わりまして、後から遅れて入って来るわけです。そうすると、ちよつと問題が起こりましたのは、士官学校で先輩だった者が、後から入って来ると、入った時点でいくと下になり、困るということ、その階級がどうだこうだとありまして、しばらくごたごたしましたね。

そのうちに「新国軍」はできないということになるわけです。「新国軍」の計画ができなくなりまして、次に旧軍人方がやったことは、国防会議事務局を大きくし、そのの長を旧軍出身とし、多数の軍人参

加の運動を始めるわけです。国防会議事務局を数百名ぐらの編成にしまして、局長には旧軍出身者を当てるというのが服部さん一派の運動でしたね。それに対抗して、運転手を含めてわずか二十名ばかりの小さな事務局にして、初代の事務局長に広岡謙二さん（内務省昭和二年入省）を据えた。これは池田さんの構想です。そういう経緯がありました。

伊藤 出発当初は、そうすると全然関係がない。警察予備隊が出発する段階では、旧陸海軍の人たちとの関係はないということですね。

海原 ないですね。

伊藤 実際に応募してきた人は？

海原 追放解除の時にどういふ人を入れるかということで内海君や後藤田君が旧軍の人と話をして、どういふふうにするかということを決めた。その辺が折衝の始まりでしょうね。

伊藤 応募して来た人たちは、どういふ人たちですか。

海原 昔の人たちです。要するに、さっきも言いました士官学校の中でも各期ごとに分かれますが、入って来た人は自由意志で来ていたですね。

伊藤 追放にならなかった人たちですか。

飯尾 追放解除前の話ですね。

海原 追放解除前ですから。解除になってからは……。

伊藤 追放解除になる前は……。

海原 入る志望者は全部解除になるわけです。何期以降どうだと。

伊藤 そうですか。それは若い方ですか。スタートの時点ですか。

海原 はい。志願する時点ですね。それは防衛庁の方からちゃんと勧誘状が行くわけですよ、その希望者のところに。

飯尾 それで、勧誘しておいて、ご本人の希望があれば小口にどんどん解除していくわけですね。

海原 はい。

飯尾 じゃあ実質的に解除しているのと同じことですね。

海原 そういふことです。その時に一括で解除したか、それとも個別にやったか、そこは知りません。

飯尾 それはわかりませんね。

海原 知りません。知りませんが、たまたま、これは妙な話ですけども、銀座四丁目の小料理屋で後藤田君と内海君とが、旧軍の人三人ばかりと集まって会議をしていたことを私は知っているんです。ぱったり会いましたからね。ああ、やっているなと思ったんですが、それは要するに、誰を入れる、彼を入れるということですね。だから、いろいろな経緯があることはあるんです。

飯尾 ほとんど志願者というのは、旧軍に何らかの形で関係していた方ということですね。全く外から来るということはほとんどないということですか。

海原 まずなかったですね。それはどんなものかわかりますと、大体みんな、ああそうかということになるでしょう。

伊藤 でもやはり上の方だけではなくて、例えば二等兵だつて必要なわけでしょう。

海原 これはみな優秀なのが来ました。あの頃、退職金六万円ですか。これが非常に魅力があったわけです。

伊藤 これは誰のアイデアですか。

海原 私が言ったんです。それは警察官と少なくとも同等にすべきだと。できたら少し待遇を良くしたい。ところが毎月の月給を良くする

ことは、ある意味で不可能なんです。だから少しまとめて、二年間勤めたら退職金としてまとめてそれを出す、というような形にした方がいいのではないかと私は言ったんです。そのアイディアが採用されまして、退職金六万円ということ、あれが非常に評判が良かったんですね。だから警察官同等、できればもう少しいいものになりたい。

伊藤 その二年間が終わった時にどうなるんですか。

海原 それは継続もできますし、辞めることもできます。

伊藤 継続すれば、また退職金が増えるわけですか。

海原 その時はもう増えませんか。退職する時にいくらあるという計算です。

伊藤 それでは応募者は非常に多かったですか。

海原 多かったですね。

伊藤 そうなったら、かなり選択することができた。

海原 それは言えますね。

伊藤 後になりますと、いくら募集しても人が集まらないという事態になりますからね。

海原 そうでもないんですけれどね。あれは、日本の一般的な景気が良くなってからのことですか。あの頃は良かったですよ。

伊藤 そうすると、隊員の質などもだいぶ変わってきたということでしょうね。

海原 そう見るかどうかですけれどね。私自身は兵隊に行きまして、その経験から言って、それほど質がどうかということはないと思うんです。志願兵である限りは。私は徴兵制は反対していません。ということ、今は技術が要りますから、それを覚えるのに時間がかかるといいます。ですから、ようやく一人前になって辞めていくというの

では困るんです。したがって、諸外国でも徴兵制をやめて志願兵制度に切り替えたところが多いですからね。そういうことで、志願兵制度で、できるだけ自衛隊にいる間に、いろいろな技術、国家的な資格を与えられるような技術を教えることがいいんじゃないかということ、言ったんですね。

伊藤 警察予備隊ができた当初、これが将来の日本の軍隊になるとお考えでしたか。

海原 私はそう思っていました。

伊藤 ナショナル・フォースはまさにこれだと。その芽だと。

海原 芽というか、そういうものになるだろうと思いましたがね。なるだろう、というよりは、すべきだという考えの方が強かったかも知れません。

伊藤 それでその創設事務は三カ月で終わって、また元の企画課長に戻られるわけですか。

海原 そうです。あとは全部、予備隊本部、いわゆる内局の方がみんな活動していますから。

伊藤 それで警察法の改正をやりとげるわけですね。

海原 そうです。自治体警察の……。

飯尾 その面倒を見ておられたと。

海原 面倒を見るといふか、いろいろなことがあるんですよ。

飯尾 そんなことがございましたか。

海原 それは、けしからん、こんなものは地方自治に反するとかね。国警が昔の警保局になってどうするかとか、そういうことばかり言うんですから。先ほども言いましたように、同期の者ですらそう言うんですからね。いや、決してそんなことはありません、と言ったんです

けれどね。しかし公安委員になった人というのは、結構偉い気分になってるんですね。ですから公安委員会制度というのは日本に必要なのか、今でも疑問に思いますね。完全な名誉職ですから。何もやっていませんよ、そんなもの。

伊藤 実際上は名誉職でしょう。

海原 実際上は名誉職というか、待遇を調べてください。

伊藤 待遇ですね。それはもったいないな。

海原 ひどいですよ。ひどいと言うと語弊がありますけれどね。何もすることがないんですからね。週に一回ぐらい集まって報告を聞くだけでしよう。国家公安委員、地方の公安委員もそうですが、委員会というもの自体に意味があるんだから、名誉職で充分なんですよ。それを、あれは偉いところだと言うためには、俸給はどうあらねばならん、ということになる。その辺が私にはわからないんですけれどね。

飯尾 タダにして、毎回勲章をもらえるようにすれば(笑い)。

海原 こればかりは、それぞれの人の物の考え方がありますからね。私自身は「勲章は」いただいていないんです。私は昔から、政治家と国家公務員は勲章をもらうべきではないと言っている。国家から俸給をもらっているでしょう。その上、お前は良くやったからと言って勲章をもらうなんて、とんでもない話だと思います。一般の人がもらうべきです。そういうことを言っていましたからね。

伊藤 いえいえ、大丈夫ですよ。別に漏れるわけではないですから。

新聞記者に向かって話しているわけではないんですから。

飯尾 賞勲局がいろいろね。

海原 国防会議事務局長の部屋の隣が賞勲局長の部屋なんですよ(一同笑い)。それで私は昔よくいろいろな話を聞きましたよ。私の内務

省の先輩ですが、いろいろな話を聞かされました。

伊藤 しかし、みんな勲章というのは欲しいらしいですね。

海原 ある地方に講演に行った時に言われたことですけれども、生存者叙勲はいま七十歳ですね。あれを六十五歳、六十歳に下げてくれと言うんですよ、私に。私はそんなことは関係ないと言っただけで、あなたもお役人の一人だったからと言う。なぜかと聞きますと、会社の社長ではもらえないんですね。業界の連合会の会長だとももらえるんですね。

飯尾 公益に貢献したということになるんですね。

海原 そう。それまで頑張ると言うんですよ。

飯尾 早く辞めてもらうためには、早く勲章を出して上げないといけませんですね(一同笑い)。

伊藤 勲章は花道ですからね。

海原 わかりますけれどね、気持は。

飯尾 勲章退職勲章制度か何かを作らないといけませんね。

海原 私はだから、一般の民間の方が、それぞれの分野で立派なことをしたということで、いろいろな褒章をいただいている。そういうことは必要だと。しかし役人、特に政治家、なかでも政府の悪口ばかり言っておった社会党の先生方が勲一等なんて、何であの人が勲一等なんですか。

飯尾 悪口の功により、ではないですか(笑い)。

伊藤 元来、勲章制度はけしからんとか言っていた人がもらっていますから(笑い)。

海原 そうなんです。ある酒の席ですが、ある人が素晴らしい勲章をおもらいになった。旧軍人さんですよ。私は「あの人がなぜ、あんな

勲章をもらえたんだ」と聞いたら、「いや俺も参った」と言う。これは評論家ですが、その人も反対らしい。「そうか。じゃあ君は反対したのか」「反対した。それを時の総理大臣におかしいと言ったところが、君が行って、辞退するように言えと言われた。それで行って話した」と言うんですよ。そうしたら、「いや、お話の趣旨はよくわかった。しかし仮に私がそういう勲章をいただけたら、長年苦勞をかけた女房に対して、せめてもの恩返しになる」と言われた。

伊藤 泣かせますね。

海原 そこでですよ、問題は。「何だ、それは人情話じゃないか。それでどうしたんだ」と言ったら、「いや、奥さんの名前を出されたんじゃない、どうにもならない」と。何とも言えなかつたそうです。それをその通り、帰って総理に報告したそうです。そうしたら「うくん」と言つたそうです。という話があります。

伊藤 そういうことかもしれませんね。そろそろ時間ですが、企画課長からどこに行かれたんですか。

海原 東京警察管区の警備部長です。

伊藤 それは昭和二十六年ですか。

海原 ちようど日本共産党の火災瓶闘争華やかにし頃です。それは、ちようど私が先ほども言いましたけれど、北海道に、警察法の改正に関する講演に行くことになっていたんです。それで出張命令もちゃんともらつていらっしゃるんです。その時に、溝淵さんから呼ばれました。ちようど東京警察管区の警備部長が空席だったんです。それで「管区の部長に、君行つてくれ」と言われた。「どういうわけですか」と聞いたら、「いや今まで本部長が兼務しておられたが、とにかく忙しい。いろいろ火災瓶闘争などで、兼務ではとても駄目だから専任を寄越せと

いうことになって、君に行つてくれということだ」と言う。「それは結構ですけど、私は実は北海道に講演に行く決裁を先週いただきました」「北海道は、なつてから行つてもいいじゃないか」と言うわけですね（笑）。そんなことできませんよ。東京警察管区の警備部長が警察法の改正で北海道に講演に行くなんていうことはあり得ないですけど、そんなことを言うんですよ。それはなつてから行けと。「はい」と言つて、それで行つたんです。

伊藤 行つたことは行つたんですか。

海原 いや、警備部長になつたのです。北海道には行けませんよ。それでなつた途端に大変なことです。要するに、共産党の国内暴力革命闘争ですからね。そこで、この前差し上げました「五十一年綱領」ですね。後藤田君が本の中で言っていますが、その「五十一年綱領」ですね。あれは、いかに当時あの人たちが本気になつて武装闘争を考えておつたかを証明します。山村工作隊の訓練が大菩薩峠の方でありましたし、一時は新宿の西口で火災瓶闘争をやるといふので、私自身見に行つたこともあります。非常に殺伐たる時期でした。

伊藤 その話を次回メインにしてお話していただきたいと思つたので、よろしく願ひいたします。

海原 どうも今日は余計なことを言ひまして。

伊藤 今日はちようどうまい具合にいきました（笑）。

海原 これ「『警察學論集』」を読んでいただきますと、警察法改正の重点がわかると思ひます。その中のアメリカの警察行政というのはなかなか面白いですよ。とにかく冒頭で言ひましたけれど、国家権力を執行するという警察と、夜回り火の番の自治体警察とは全然考え方が違いますからね。

飯尾 「ポリツアイ」とか言って、何でも面倒見ようというものの違いですね。

海原 私もアメリカに行つて、いろいろな警察があるなと思いましたね。アメリカに行った時に、日本人というのは珍しいんですね。新聞に出ますから。テキサスのオースティンというところに行きましたら、大学の女子学生のクラスで話をしろと言うんですよ。私は何を話したらいいかと思つたんですが、たまたま『VOGUE』というファッション誌がありますね。あれを売店で買いました。そうしたら日本の女性の地位についての物語が載っていました。三従、「幼にしては親に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従う」という三従の教えについて書いてある。だから、日本の女性はきわめて哀れであると書いてあるんです。それを取り上げました。「今日、『VOGUE』を読んだらこう書いてあるけれど、表向きはこうだ。外国から来た人が日本で観察すると、なるほど日本の女性は虐げられている。小さい時は親の言うことを聞け、結婚したら亭主の言うことを聞け、年を取ったら子供に従えと、忍従の生活を強いられているのが日本の女性だと思うだろうが、違ふんだ」と言つたわけです。

「日本では『山の神』というのがある。山の神様はふだんは非常に静かな穏やかな神様だが、いったん怒り出すと大変なことになる。ちよつとアメリカで台風に女性の名前が付いているのと同じだ」と言うのと、みんな笑うわけです。「表ではこういうことかもしれない。三歩下がつてという言葉があつて、亭主が先を歩いて奥さんが後を付いて行く。three step behindですな。表向きはそうだ。家に帰ると途端に違ふ」と言つたんです（笑）。玄関を開けて中に入ったら、途端に奥様が絶対的な指導権を持つている。山の神様だ。財布は全部女房

が持つている、という話をしたら、みんな笑っていましたけれどね。そういう話をしました。ことほど左様に、日本のことについては何もわからないですね。形式的に、日本の女性は哀れである、虐げられている。「河野氏に向かつて」どうでしょうか？

河野 そういう意味で強い、というのを最近実感していますけれど。

海原 いろいろと私はいいい気になってしゃべっていますが、こんなことでいいんですか。

飯尾 後の整理はまた別でございませうから。とにかく思い出していただかないと始まりませうので。

海原 本当にいろいろ思い出します。

伊藤 いろいろ余分なことをどんどんお話しください。記憶が偏りますのでね。だから、そのとき思いついたことをどんどんお話しください。

海原 それでよければ。どうぞおっしゃってください。

伊藤 いずれ最終的にはきちんと整理することにいたしますけれど、お話しになる時には思い切り、「ここは記録しないように」などと言わないで、お願いします。

海原 そういふことが多いものですからね。

伊藤 別にここは新聞記者と話しているわけではないですから、どこにも漏れるわけではないですから。

海原 いや、漏れてもいいんですけれどね。漏れてくれた方がいいと思うこともあるんですけれど。

伊藤 その時はちよつとサインをください。いくらでも漏らしますから。

海原 そこで、ちよつとカーンとの関係で、カーンの書いた物を持つ

ておられますか。

伊藤 いいえ。

海原 そうですか。それでは置いていきますか「読売新聞・昭和五十四年八月十三日付「私と日本とのかわり」」。

伊藤 それでは貸してください、いろいろコピーを作りますので。

海原 それでは他にもありますから、持って参りましょう。カーンなんか大した男じゃないということを外務省の島内さんが言っていますけれど、島内さんは全然彼と関係していないからそういうことになるんだらうと思うんですが、私はカーンというのは、日本にとってありがたかったと思いますね。

伊藤 何かカーンとかパケナムの悪口を言うのが流行っているというか、あるんですね。

海原 結構ありますね。やはり人間ですから、いろいろな面がありますからね。

伊藤 でもあの人たちだって、自分の利益ということを考えないでやったわけではないんだから、当然だと思いますけれど。

海原 要するに石油関係でどうだこうだという話ですね。あの『フォーリン・レポート』という情報誌がずいぶん高いんですね。あれが一つの問題かもしれませんけれどね。大した情報も載っていないかっただと言うんですけど、それなら購読しなければいいんですね。そこでですよ、問題は。購読しておいて、あんな物でこんな金を取ったのはけしからん、とかね。私が最初に会った時に記憶にありますのは、高価な金側の腕時計を持っているんですね。これはサウジの王様からもらったと言っていました。王様の顔が付いていました。非常に情報詳しくかったですね。

たまたま私はACJの中に引つ張り込まれたんですけど、当時はACJを全く知りませんでした。

伊藤 ACJという存在自体もわからなかった？

海原 知らなかったです。

伊藤 それはだいぶ後になってから。

海原 ずいぶん後になってから、ああそうだったのか、と思いました。迂闊と言えば迂闊ですけど、中村五郎君の奥さんの風見章子さんにすっかり惚れ込んだものですか。

伊藤 中村五郎という方は、その後どうなりましたか。

海原 死にました。みんな亡くなりましたね。

伊藤 もう、カーンやパケナムの関係者というのは、ほとんどいないということですか。

海原 いないですね。去年、共同通信の春名幹夫さんにカーンを紹介しました。非常に興味を持ちまして、カーンの一代記みたいなものを書くと書いておられたんですが、それができませんでしたね。昔のことを知っているのは、もう最後でしょうね。先ほども言いましたように、こつちへ来ている連中は大したことがないんですね。トップは別ですよ。その下の人は……。力があるというか、いろいろ勉強している人は。私はカーンという人がおったので、日本の財閥の解体はあの程度で済んだらうと思うんですけどね。

伊藤 そうですね。すごくあの影響が大きかったと思いますね。

海原 そう思いますね。この前の速記録を置いていかないといけませんね。

伊藤 完全に直してくださいさなくても、また後で。

飯尾 当座のものを直していただければ、また二回、三回と完成させ

るまでありますから。取り敢えず、漢字が漏れているものとか、人の名前の間違いとかですね。

海原 読んでみると、こんなことを言ったかな、と思うんですが。どうも私はこの速記とかに弱いんですね。丹羽さん（速記者）のお顔を見るとちよつとドキッとするんです（笑い）。

伊藤 というところまで全部入っていますから。

海原 役人時代、国会の委員会は先ほどお話ししましたけれど、あの速記者はこわいですよ。しかし、私の言ったことは間違っていますかね。政治家同士で議論すべきだと私は言うんですけれどね。それを引き取って、政府委員がああでもない、こうでもないというのはおかしいんじゃないかと思うんですね。「それは海原君、君の言う通りだ。言う通りだけだな、それは駄目だよ」と言われたんですな（笑い）。

伊藤 でも制度を変えると勉強するかもしれない、ということなんですな。

海原 と思うんですが、ちよつと難しいでしょうね。というのは経験、知識が何もないでしょう。みんな図らずもなるわけでしょう。

飯尾 それを変えないといけませんね。

海原 そっちの方が大事なんですよ。「影の内閣」をね。

飯尾 副大臣制というのは、それにいくらか役に立つかと思うんですけれどね。

海原 立ちますかね。僕は名前を変えなければいけないと思うんですけれどね。

飯尾 答弁ができない人、副大臣が務まらなかつた人を今度大臣にしようという、やはりブレーキがかかるんじゃないですか。

海原 先ほど言いましたように、派閥というのは日本ではなくなりま

せんね。

伊藤 日本だけではないでしょう。どこにだって派閥はあるじゃないですか。

海原 いや、あれには言うな、と言うんですからね。「はい」ということになっちゃうでしょう。「どうしていけないんですか」と聞くと、「いや、派が違う」と言うんですからね。派が違うと言っても、同じ自民党の先生じゃないかと思うんですけれどね。厳しいですね、あの中は。

飯尾 最近は大いぶそれも変わっているんじゃないですか。

海原 そうですか。

飯尾 ええ。それは大いぶ緩んできていますね。

海原 緩むのなら、全部緩んでもらいたいですね。

飯尾 そこがなかなか難しいんですね。

海原 どういうものか駄目ですね。選挙制度ですかね。どうでしょう。

飯尾 選挙制度が変わったので、派閥は緩みましたね。

海原 緩みましたけれど、勉強会と称する派閥は残っているわけでしょう。

飯尾 それはそうですね。でも、相手に言うな、というようなことはなくなつたという感じではないですかね。それもさっきの話と違って、話題が変わりますから、野党の方が今度は質問が難しいんですよ。

海原 それはあるかもしれませんがね。それからもつと変わってもらいたいのは新聞だと思うんですね。

伊藤 新聞だって、しょつちゅう人が替わっているから駄目なんですね。

海原 それから、勉強していませんね。基礎知識が何もなくて、ノ

トを取るだけでしよう。それで記事にされるのはとんでもないことだと思っただけですね。

伊藤 しゃべったことが記事になって、これが俺の言ったことか、と思えますからね（笑い）。

海原 先生でもそういうことはありますか。

伊藤 いや、しょっちゅうですよ。それで見せろ、ともなかなか言えないしね。

飯尾 言いようがないですね。

伊藤 長い話の時は言うんですよ。

飯尾 短いというか、何も知らない時に載せられることもありますよ。他人様に言ったことを聞いてきて、こいつが言ったと新聞に書いている（笑い）。

伊藤 まあ、気を付けましょう。今日はどうもありがとうございました。

海原 いや、とんでもない。こちらこそお世話になりました。

伊藤 また長くお付き合いをお願いしますので、どうぞご健康にお気を付けてください。

海原 ありがとうございます。今日は風邪声で申し訳ありませんでした。どうもありがとうございました。

〈以上〉

海原 治 オーラルヒストリー

第6回

開催日：1999年3月9日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第6回 質問項目

前回は、国家地方警察本部総務部企画課長時代のお話を伺いました。今回はその続きのお話を伺いたいと思います。それについてお話をいたadenaなかで、関連した事項についてご質問させていただきたいと思ひます。

- ① 前回、当時の日本の警察制度とその改革問題、予備隊創設について伺いました。前回のお話の関係で、まだ触れていないことなどがありましたら、お願いいたします。
- ② 昭和 26 年（1951 年）6 月、国家地方警察東京警察管区本部警備部長になられます。このころ、「単独講和」反対運動が盛んになっていますが、ご印象に残っていることはありますか。
- ③ 昭和 27 年（1952 年）3 月、破防法が閣議決定され（国会提出は 4 月 17 日）反対運動が起き、第一波第二波併せて 200 万人が参加したゼネストが行われました。国家地方警察としてはどのように対応されましたか。
- ④ 3 月 29 日、共産党の山村工作隊が小河内村で検挙されました。また、東京ではありませんが、この年 1 月、札幌市警の白鳥一雄警部が共産党の札幌地区委員・村上国治に射殺されるといった事件も起きています。先生が保安庁に移られたころですが、8 月 7 日には元商工大臣の横川重次が襲撃され、共産党員が検挙されました。過激化する共産党の活動に対し、どのように対処されましたか。
- ⑤ 2 月 20 日には「東大ポポロ座事件」、5 月には「早大事件」など、学生と警察の間で様々な事件が続いています。当時、学生について警察はどのような対応をしていたのでしょうか。
- ⑥ 第 23 回メーデー「血のメーデー事件」が 5 月 1 日に起きています。また、5 月 30 日は全国で「5・30 事件記念集会」で荒れ、東京では新宿駅や板橋で火炎瓶が投げられ 3 人が死亡しています。さらに、6 月 25 日には新宿でデモ隊と警察が衝突し、30 人の逮捕者が出ました（「新宿駅騒擾事件」）。全国的に荒れた時代ですが、どのように対応されましたか。当時のことで印象に残っていることをお聞かせ下さい。
- ⑦ 昭和 27 年 8 月、保安庁保安局保安課長になられます。その前後の経緯をお聞かせ下さい。

自治体警察の連絡調整に当たる

——東京警察管区本部警備部長

海原 今日冒頭、謝らないといけません。前回、警察予備隊の起案のところ。昔のことになると、いろいろと思ひ込みがありましてね。増原（恵吉）さんが起案文書にサインしたくたりますが、その時に「増原さんは発令されておりましたか」という質問に、「はい、そうです」と言っただけですよ。そんなものは、発令されるはずがないですよ。何でそう思っただけかな。これは私の勘違いです。

当時、増原さんは香川県の知事だったでしょう。だから県議会の了解を取るわけです。辞職願いを出して、合意した日なんです。誰もまだ発令されていないです。しかし事実上、政府としては増原が予備隊本部長官だということで、それで増原さんが起案者に入っていた。その時に、ちゃんと伊藤先生から指摘されているんですよ。「ちよっと待ってください。その増原さんは一人任命された。何に任命されたわけですか」と言われているんです。それをわざわざ私は「警察予備隊の本部長官です」と言っている。そういう合意が成立したんです。つまり、口説き落としますが、この時期には発令はありません。まだ予備隊令ができていないんですからね。ただ、大綱はできています。それで増原さんが本部長官。江口（見登留）という人が、これは労働省の次官ですが、次長ということでしょうやく納得したのがこの時だった。そういうことをすっかりどこかに忘れていたんですね。前回の速記録を読んで、ありゃ、これはおかしいなと思った（笑い）。そ

れで調べてみたら、そんなはずはないんですね。

伊藤 でも、しゃべってみないとわからないことですね。

海原 そうなんですよ。『まだらボケ』ですよ。

伊藤 いや、どんどんお話ししてください。そういうことがだんだんわかってくるということですから。

海原 でも伊藤先生から「それはポツダム勅令できていたんですか」と聞かれて、「それでできていたんです。面白いですね」とか言っているけれど、こんなことはない。考えてみれば勅令は後なんですから。そんなことは、すぐわからんといかんでしょう。それが通っちゃっている。俺はこんなこと言ったのかなと思って（笑い）。無条件降伏ですね。この時は合意が成立したんですね。増原さんも初め渋っていたんですよ。しかし正式に合意が成立したのが、この時期なんです。その合意成立と、発令とがこんがらがっていましたね。ということで、これは全く私のチョンボです。

伊藤 いえ、とんでもない。お読みになって、他に抜かしているなどいうことは何かございますか。

海原 それはいいですね。抜かしているところは、またお話しできま

すから。

伊藤 この前は、最後の方で、昭和二十六年六月に国家地方警察の東京警察管区本部警備部長になられたというお話でございました。

海原 そうです。そこが最後でしたかね。

伊藤 その次からお話したくたこと、後はちよっと雑談になりました。この東京管区というのは……。

海原 管区というのは、それぞれ地方にありましてね。

伊藤 どれぐらいの大きさの管区なんですか。

海原 これは例えば関東で、一都何県になりますかね。

伊藤 各県ごとにですか。

海原 いや、そうではなく、地方ごとです。

伊藤 ブロックですか。

海原 ブロックです。東京警察管区、中国・四国警察管区、九州警察管区、そういう管区なんです。

伊藤 そうすると関東地方全体ということですか。それは、今の関東地方と大体びったり合うんですか。

海原 合うはずですね。

伊藤 よく、関東と言った場合、時々他のところが入ったりしますからね。

海原 それはありましようね。東京警察管区の区域は変わっていないと思いますけれどね。

伊藤 この東京警察管区警察本部というのは、どこにあったんですか。

海原 場所は警視庁の五階にあったんです。

伊藤 それでは、いつもおられる所は変わったわけではないんですね。

海原 警視庁は桜田門です。

佐道 部屋が移られただけですか。

海原 フロアが違う（笑い）。私が警備部長。

伊藤 本部長がいるわけですね。

海原 本部長は、後で宮内庁次官になられた瓜生（順良）さんです。

本部長の下に部があるわけです。警備、刑事、総務とか、そういう部があるわけです。

伊藤 この警備部というのは、どういう任務をされていたんですか。

海原 警備は、各県の警備関係というか、警邏交通と情報ですね。そ

の関係の、言わば指導ですね。それから話にありますように、自治体警察と国警との連絡役とか、そういうことをやるわけです。それから管区には学校がありまして、その学校におるのが、言わば予備役、それはこの前お話ししました。そういうものなんです。

伊藤 学校はどこにあったんですか。

海原 学校は小平にありました。私は「こんな管区は要らない」と言ったんです。「中二階」ですよ。例えば、軍で言いましたら方面軍ですね。今の自衛隊に方面隊というのがありますが、そういう「中二階」みたいなものなんです。その頃はまだ全般的な連絡がとれませんでした。管区というところで連絡調整をやらせようとしたんでしようね。

それともう一つは、管区警察学校の警察官は定員外みたいな格好ですから、それは何かの時に予備隊的に使える。そういうことがあったんです。

伊藤 そうすると、管区と言っても自治体のところは抜けるわけですから、まだら模様になっているわけですね。

海原 まだら模様というか、自治体も入れると抜けるわけです。しかし連絡はできるわけですよ。その辺が日本式行政組織でしょうね。人事の交流でうまくやろうということですね。

伊藤 自治体警察とですか。

海原 しかし、その人事の交流でも、後で出てきますが、大阪におつた私の友人が、同じ友人にいじめられて一緒になるのが嫌だとか、あいつは探るなとか、そんなことがあるわけです。要するに、人間模様が絡みますといういろいろ複雑になりますが、制度としてはすつきりできます。

伊藤 例えば東京で起こったいろいろな事案などは、直接には関与で

きないんですね。

海原 本来なら自治警同士の連絡が決まっていますから、やればいいんですよ。それをこの前お話ししたように、横浜の警察は情報を直接警視庁に送らないで、私のところへ送る。私が警視庁の刑事部長の古屋さんを引つ張り出して、両方を会わす。そんな役をするんですね。みんな独立国家なんです。独立国家の調停役みたいなものですかね。

刑事は個々の犯罪ですが、警備となると、どうしても集団になるでしょう。そうすると、「暴れる」という報告があちこちから来ますわな。だから連絡しないといけませんね。だから、どうだこうだということとは、すぐ連絡します。そういう連絡調整役ですね。ですから、あの時には必要であつたかもしれないませんが、私は管区なんて要らないと言っていた。そこに行かされたんです。

伊藤 それはご希望でも何でもなく、ですか。

海原 これは終始私が言ってますが、人事は突然来るわけです。予め内容を聞くなんていうことは絶対ない。それは旧内務省流ですね。

伊藤 それは言われたら、やはりイエスなんです。

海原 そうです。ノーと言う人もおるかもしれませんが。私は人生観としては、軍隊に行つたでしょう、それで帰つて来たでしょう。だから後は拾い物だと思つているから。もともと内務省というのは、これは前も申しましたが、浮き草稼業ですからね。

伊藤 浮き草と言つてもねえ（笑い）。桜田門のところでもウロウロしているわけですから。

海原 だから苦勞話を話し出しますと、時間が足りませんよ。いろいろありますからね。この前の速記録にも出ていますように、玉村と松本は同期でも仲が悪いから、松本は国警に入れるなと言うでしょう。

そういう時に、次長から「お前は玉村と親しいから口説け」と言われ、「はい」と言つた。いろいろなことがあるんです。ちょっと今の、この平穩無事な時には想像がつきませんね。

伊藤 日常業務はどういうことなんですか。

海原 平常の業務ですか。警備部長の下に、警備課、警邏交通課とあるんです。警備課の課長はみなさんご存知の川島廣守君です。いまコミッションナになりましたね。片一方の警邏交通課というのは稲留（確）君というのが課長です。両方とも本部長になりますけれどね。

そういう優秀な人がおつた。優秀なのを集めて、何度も同じことを言いますが、もつぱら情報の収集、連絡調整ですね。

伊藤 その場合の情報というのは……。

海原 共産党情報です。その頃は、もつぱら対象勢力と言えば、前にも申しましたように武装闘争ですからね。日本の革命をやるうとしているんですから。当然、それは日本共産党の動きになる。日本共産党の動きとなると、山村工作隊とかがありますから、大菩薩峠あたりでやるわけです。あちこちでやるわけですから、それが大事になるわけです。そういうものが全部集約されるのが管区の警備ですね。先ほども言いましたように、まさに連絡調整役としては、その面では意味がありました。

伊藤 その管区本部というのは、その下に各自治体警察でない部分の警察を管轄しているわけですね。

海原 管轄と言つていいんでしょうかね。それが難しいところですね。まあ、管轄ですけれどもね。

伊藤 でも、それは一応各地方、例えば茨城県なら茨城県で、そのなかに水戸なら水戸はたぶん自治体警察ですよ。そういうところを除

いたところの警察官は国警の警察官ですよ。

海原 それは直接、国警本部に行くべきなんです。ところが管区を通して行け、となっている。「中二階」になるわけです。だから非効率ですよ。

伊藤 そこはどうなっているんですか。警察署があるわけですね。

海原 警察本部と言っておりますね。

伊藤 いや、茨城県は茨城県で本部があるわけですか。

海原 茨城県国家地方警察本部がある。新任の警察官は県が採用しますから。

伊藤 その上に管区本部があるわけですか。

海原 そうなんです。だから「中二階」なんです。何度も言いますが、私は「こんな中二階は要らない」ということをしきりに言っておったんですけれどね。

伊藤 その県本部には学校はなかったわけですか。

海原 県本部にもあります。

伊藤 あるんですか。

海原 県で教育しているほかに、まとめて管区警察学校というのがあ
るわけです。

伊藤 一ランク上の教育をやるわけですね。

海原 そういうことですね。形としてはそういうことですね。集めて、
そこで集合教育みたいなことをやる。

伊藤 警備課というのは、もっぱら情報収集ということですか。

海原 警邏交通の方は取り締まりの実施ですね。警備が情報です。

伊藤 警邏交通と言うから交通かと思つたら、そうじゃないんですね。

海原 「警邏」という言葉があるんです。その辺が難しいわけです。

ですから情報を収集して、暴動があるかもしれない。じゃあ取り締ま
りをすると言つた時に、どこがやるかと言つたら警邏交通課なんです。
そこに「警邏」が入るわけです。だから、そこも難しくなるわけです。

伊藤 その警邏交通の「交通」は何なんですか。

海原 ただ「交通」とあるだけです（笑い）。

佐道 あまり実質的な意味はないわけですか。

海原 ないですね。それは現実の第一線では県がやっていますからね。
佐道 管区の警備課、警邏交通課には、それぞれ何人ぐらいいらつし
やつたんですか。

海原 そうですね、人員にするとどれくらいでしょうか。もし私の記
憶が正しければ、二十人前後ですかね。十五人〜二十人。多い時で三

十人いましたかね。管区によって違いますからね。

佐道 東京は多い方ですか。

海原 多い方ですね。それは何度も同じことの繰り返しになりますが、
大きな自治体警察があるでしょう。警視庁があつて、横浜があるでし
ょう。だからそれを、まあまあ、ということでもやるわけですからね。
直接本部がやればいいんですが、本部はそういうことをやりだすと大
変だということで、要するに「中二階」で一応まとめると。簡単に言
うと、そういう発想でしょうね。だから能率的に言えば、要らんじゃ
ないかと思つたんですけれどね。警備部長がそういうことをやるのに
もかわらず、専任がいなくて、瓜生さんという本部長が兼任だった
んですよ。本部長が警備部長を兼務しておつたんです。その本部長が、
とてもうるさくて大変だと。本部長の兼任では務まらないから、誰か
専任を寄せせということを強硬に国警本部に要求したんですね。それ
で私が、一応警察法の改正も終つたし、企画課としての仕事が済んだ

から、お前行けとなつたんです。

伊藤 やはり共産党の現状というものを、きちんと把握するということが、お仕事だったんですか。

海原 それと、共産党は武装闘争の時代ですから、その武装闘争に対して、警察は一致協力して対処しないといけないからと、そういうことですね。

伊藤 その当時の武装闘争はわかりませんが、海原先生はそれをどの程度の力だというふうに評価なさっていましたか。

海原 共産党がですか。私自身は、そう言うて怒られるかもしれませんが、騒ぎたい奴が騒いでいると思いましたがね。いわゆる革命には絶対ならない。それは私の持論ですが、日本人にはいまだかつて革命なんてないんですよ。せいぜいが一揆です。宗教の一向宗の一揆とか、佐倉惣五郎の百姓一揆とか、日本人は一揆ぐらいしかできないんですよ。外国のような革命なんていうのは、司馬遼太郎さんの言葉を借りますと、遺传的体質から言っており得ないと思っていましたね。しかしまあ、世の中ではガタガタ騒いでいますから、それに対応することは必要ですね。

伊藤 それほどの危機感ということではないんですね。

海原 ありませんね。質問にずっと出てきますが、相当な危機感を持っておつたように、みなさん方は思っておられるけれど、私自身も関係者も、そんなに危機感はありません。それは「汝臣民飢えて死ね、朕はたらふく食つてゐるぞ」という言葉があつたでしょう。あの筵旗が宮城に入つて大騒ぎになりましたけれどね。あれだけのことでですよ。私は日本では革命はないと思つていた。しかし、武装闘争で騒ぎますからね。この前もお見せしたようなことで、断固やるんだと言つてい

るから、それに対しての対応は必要ですよ。

伊藤 「五十一年綱領」ですね。あれは結局、中国やソ連が作つて与えた。

海原 真似ですよ。

伊藤 真似というか、向こうが作つたんじゃないですか。

海原 真似ですね。

伊藤 そういうソ連や中共の影響力、あるいは密接な連絡とか、そういうことまでちゃんと監視をしていたんですか。

海原 それは私ら警察はやりません。やりません、というより、できません。したいところですが、それだけの情報収集能力がありません。せいぜい共産党の組織の中に、「S」と言っていました。スパイを入れて、そのスパイからの情報をもろう。それで判断するということですね。

伊藤 それは報告書を作るわけですか。「日本共産党の現状」みたいな報告を。

海原 それは定期的の上まであげます。それに関連して面白い話があるんですよ。公安調査庁ができた時代でしょう。後でできましたね。そのスパイから聞いて、上へあげるわけですよ。その公安調査庁関係と警察関係とは、それぞれの段階で連絡会議があるんです。例えば警視庁レベルとか、その次はどうだとか、上とかね。それがお互いになかなか言わないんですよ（笑い）。そこである時、治安閣僚関係懇談会の一番トップレベル、大臣レベルで、警察の方と公安調査庁の方と、まったく同じものを出したんです。そういう笑い話がある。それは、情報提供者が同じなんです。そういう笑い話があるんですよ。みつとも

ない話ですがね。そういうことなんです。私なら私が公安調査庁の方と、警察の方と、違う名前と同じ物を出しているというようなことです（笑い）。

佐道 両方から収入を……。

海原 もらっているでしょうね。しかし、それが面白いのは、いま言いましたように、閣僚のレベルまで、間に二つか三つ連絡会議があるんですよ。突き合わせたら、まったく同じものが出てきた。これは笑い話ですが、そういうことです。お互いに縄張り意識と言いますかね。刑事さんもそうですが、自分の持っている情報を仲間に言わない。一人占めにして何とかという、人間の本能ですかね。そういうことがありました。

伊藤 その当時はまだ占領下ですよ。ですから、管区本部あたりはどうかわかりませんが、アメリカ軍との関係はいかがでしたか。

海原 軍との関係は、管区はありませんね。私は個人的にずっと米人と付き合っていました。CIAとかですね。軍との関係は第一線ではなしに、むしろ上ということですね。要するに、警視庁あたりには来ますが、軍政部との関係になりますね。向こうも、軍政部もあれば、犯罪捜査部もありますし、それから情報部もあります。いろいろあるんですよ。だから、これは一口にどうと言えないんですよ。向こうは向こうで、それなりに大事にしていることがありますからね。

伊藤 やはり情報収集をやっているわけでしょう。

海原 やっています。

河野 アメリカ軍の集めた資料が管区の方に伝えられるということはありませんか。

海原 私が管区の部長時代はありませんでした。ただ、その関係で

言いますと、時代は離れますが、私が防衛庁に行きました時、防衛庁ではいわゆるアメリカさんの機械を借りて、極東・ソ連の通信情報を取っているんです。私が調べてみたら、これは国会などでも説明しましたが、あちこち通信所があるでしょう。瀬谷とか、保土ヶ谷とか。どういうふうな情報を取っているかというのは、こっちはわからないですよ。要するに、機械が入ってきていますから。それは向こうに行きますね。向こうで英語に翻訳しますね。ところが、どういう情報をアメリカ軍の下請けとして集めているかというのは、全然わからないんです。私はおかしいと思っていて、在日米軍のその方面の責任者のところに押し掛けて行っただけですよ。「言うなれば、防衛庁、自衛隊はあなた方の情報活動の使役に使われている、作業員として。それはいいことなんだが、どういう情報が入ってきているのか教えたらどうだ」と言った。そうしたら最初に言ったことは、「気持はよくわかる。しかし、日本には秘密保護法がない。秘密保護法がないから渡せない」と。

「そうか」と私は言った。「秘密保護法が日本では時間がかかる。しかし、アメリカは嚴重な秘密保護法があっても、原爆の秘密はソ連に持って行かれたじゃないか」と言った（笑い）。「だから、これはマン・トウ・マンの関係だ。あなたと僕との個人的関係で、せめてどういう情報が取れたのか寄越せ」と言っただけですよ。そうしたから「いや、私の一存では駄目だ」と言うから、「もちろん駄目だろう。ワシントンに言え」と言っただけです。そうしたらやりましたね、ワシントンに。二週間後にOKになったですよ。それで「あなたの要求通り、ワシントンは渡してよろしいということだから、これから渡す」と言う。ただし英文になっているんですね。それは、こちらで翻訳し

てくれと。そのとき向こうが言った言葉は、向こうは空軍の大佐でしたが、「これはヨーロッパのNATOの同盟国に渡しているのと同じ程度の扱いだ」ということでした。「それはありがたい」と、私は感謝したんです。そういうことがあった。それはただし、私のおる間だけですね。

伊藤 個人の問題ですね。

海原 だからマン・トウ・マンでいこうじゃないかということです。それに関連して言いますと、例えばその頃、中国の核実験の問題がありましたね。核実験の問題は一体どうなんだと。CIAの人に、教えると言ったんですよ。そうしたら連絡したんでしょう。東京では駄目だと言っただけです。ワシントンに来たら教えると言っただけで、じゃあ行くと言っただけ、しばらくしてからワシントンに行きました。そうしたら、私一人のために五、六人順番に担当者が来まして、写真を見せてくれました。その写真を見たら、「外国人に見せるべからず」と書いてあるんです(笑い)。それで、どういう写真かと言っただけで、例えばこれが包頭(中国・内モンゴル自治区)としましょう。これが半年前だ。そのふた月後にこうなっている。道路ができています。またひと月後には、ちゃんと電柱が立っている。電線を張り巡らせている。順次、期間をおいての変化を示してくれたんです。これは明瞭に核実験のための施設である、こうなるわけですね。しかし、それを東京で言えとなると、駄目だと言っただけです。東京では言えない。ワシントンに来てくれたら、その時説明すると言っただけで、先ほど言いましたように、「外国人に見せるべからず」という注釈の付いたものを見せた。

海原 そういうことですから、ある意味で個人と個人の関係でしょうね。信用ですね。日本は言うなれば秘密保護法がないわけですから、向こ

うも官僚組織ですからね。何をされてもしようがない。だからお前の方には秘密保護法がないから教えられないと。それで先ほど言ったように、「何だ、お前のところは原爆の秘密を盗まれたじゃないか」と言っただけです(笑い)。まあ、それもそうだが、となるわけですね(笑い)。その時代は、ですから、割に組織と組織というよりは、プライベート、個人の付き合いが大事でした。その辺のところは、情報としてどうだと聞かれても、説明が難しいんですよ。

伊藤 向こうは、もちろん海原さんのことを徹底的に調べたでしょうね。

海原 もちろん、そうでしょうね。あの頃は、機関と機関との関係よりも、本当にパーソナルな信頼関係を維持してきたということでしょうかね。

伊藤 共産党の中に「S」を入れたりというようなことは、各県本部でやるんですか。

海原 県でやるんです。

伊藤 この管区本部自体では、そういう具体的な行動はしないわけですね。

海原 しないです。

伊藤 では報告を受けるということですか。

海原 管区には、そんな予算がないんです。そういう情報収集の予算がありません。それは第一線と本部ですね。それから内閣調査室。

伊藤 そういう意味でも「中二階」なんですね。

海原 そうそう。だから私は、何度も同じことを言っただけですが、そんなものは要らんとおっしゃるんですが、たまたま東京地方では、関東と地方を通じての共産党の闘争がありましたから、それはやはり

必要だったんでしょね。いきなりそれを本部が扱うとなると大変ですからね。そうかと言って、国警の東京警察だけでは駄目ですわね、警視庁がありますから。そういう入り組んだ関係がありますから、その時に管区の、少なくとも警備は必要だったでしょね。

伊藤 同じ関東地方の自治体警察の連合みたいなものはあったんですか。

海原 自治体警察連合会というのがあった。自治体警察公安委員会連合会というのがあったんです。あつても、それは結局名前だけですよ。

伊藤 連合会ですか。

海原 関東地方で言いますと、警視庁が断然強いでしょう。警視庁なんかに対抗できませんよ、横浜にしてもどこにしても。やはり腹が立つ、癪にさわるんでしょね。だから、そうなると管区を利用して、ということにもなる。そこは一口で言えませぬね。微妙な人間関係が基礎になりますね。

共産党の武力闘争の実態

伊藤 それでいよいよ占領が終わりに近づいて、その当時の問題は単独講和か多数講和かという問題になるんですね。その背後に、やはり日本共産党がいたと思います。

海原 おるにはおつたでしょうが、こと警察関係では何もありません。

伊藤 これは事案としては何もありませんか。

海原 何もありません。私自身は、そういう問題は警察が関与すべきではないという考え方を持っていましたからね。ご質問の中に、学園闘争その他がありますでしょう。これもそうです。学園というのは、一つの全然違った「天地」ですからね。しかも、東京大学の学長さんなんかも、警察が入って行くことは、ちよつとした泥棒を捕まえるのもいけないと言ってしまう。およそ警察官たるものは学校の構内に入るべからずということ、まるで差別ですよ（笑い）。私はおかしいと言った。かつての母校ですが、東京大学の構内に警察官が入っちゃいけないなんて、どういうわけだと。憲法上の四民平等に反するじゃないかと言ったんですが、しかし一般的な動きはそうでしたね。

今だったら、とても考えられないでしょう。警察官と言うと、まるで悪い奴だとなっていたんです。およそ、まともな人間がやっている仕事じゃない。そんなことです。学園紛争についてどうのこうのと「質問表に」書かれています。まったく関心がなかったですね。それは、要するに治安の妨害になるとか刑事犯罪になった時に、初めて出勤するということです。

伊藤 この質問に書きましたが、破防法の問題はどうですか。

海原 これも、そういう政治問題については、特に警察は「われ関せず」ですね。

伊藤 破防法自体は、警察と非常に深い関係のある問題ですよ。

海原 ありませんね。私はあるものには要らないと思つたんですよ。何故こんなものが要るんですかと言つたら、後で長官になる柏村さんも要らないと言つたんです。しかし時の流れで、こういうものができる便利なかもしれないというだけです。しかし、いまだかつて発動していません。オウム事件で、あれだけのことがあつても、

あれだけ犯罪行為をやっている宗教団体があっても、手は出せないんでしよう。そこは日本人というのは神経質だから、そんな破防法じゃ駄目だと言ったんですけれどね。そういう考え方ですから。どう言ったらいいでしょうか、まあやるだけやるんだな、という感じですよ。

伊藤 「抜かすの宝刀」と言つて。

海原 いまだかつて抜いてないじゃないですか（笑い）。

河野 ということは、これは現場というか、先生のようにまさに中心的なところにいらつしやる方は要らないと思つたけれど、どちらかというところの……。

海原 その時の政治の空気ですね。いわゆる世論というやつですかね。それがおかしいんですよ。

伊藤 世論と言つても、世論から、自ずから破防法が出てきたわけではないわけですから。

海原 一部の世論でしょうね。

伊藤 でも、どこがこれを立案したんですか。やはり警察関係じゃないんですか。

海原 そうではありません。全くありません。だって、われわれはみんなものには要らないと思つていたし、破防法でできる公安調査庁には、いわゆる警察の古手の人が行きましたね。何もやつてませんよ。情報も集められないしね。あれがどうしてできたか、それはみなさん方が特別にお調べになつたら面白いかもしれませんけれどね。

河野 当時の年表などを見ますと、一九五二年の年の初めというのは、ちよつどの質問表にあります通り、かなり山村工作隊の動きが盛んですね。

海原 山村工作隊ですか。これは現に活動していました。それは共産

党の、地区、地方ですね。それでわざわざ小銃を作つてみたり、拳銃をどこからか持つてきてみたりして、射撃の演習だとか、そういうことはありましたね。しかしこれも私に言わせれば、子どもの火遊びですよ。そんなものは組織になるはずはないと思つていた。そういう意味では、私は非常に達観してましたね。やるだけやつたらいいだろうと、そんなものは。いつべん、こういうことを体験するのも、日本の政治にとつては、マイナスももちろんありますが、プラスの面もあるんじゃないかと。いまだかつて体験していませんから。共産党の秘密文書でもつて、われわれは武装闘争をやらんといかんなんて言つていて、「五一年綱領」とか称して、真面目になつてはいるんです。だから、ごく一部の人は真面目に考えたでしょうね。しかし、それにくついている連中はワイワイ、ガヤガヤの連中ですよ。そう思いました。先ほど言いましたように、日本では革命は過去になかった。これからもないだろう。せいぜい一揆だ。昔の一向宗の一揆であるとか、佐倉惣五郎の農民一揆であるとか、箆旗を立てて騒ぐぐらいたと。だから、共産党の何とか闘争も、これは一揆の類だと私は言つていたんです。

伊藤 じゃあ警備部長として、何もやることがないじゃないですか（笑い）。

海原 ないんですよ。

伊藤 ないんですか。

海原 まあ、ないんです。そういうことを言つておつた。それからもう一つありますが、これは一般の人にはわからないけれど大事だったのは、火炎瓶闘争なんかは犯罪でしょう。そうすると刑事訴訟法を考えるわけですね、刑事は。そうすると証拠収集とかが大変なんですよ。

法廷闘争を考えると、全然違うんです。犯罪なんていうのは、集団でやるのは珍しいでしょう。まずあるのは個人の犯罪ですからね。せいぜい団体と言っても四〜五人でしょう。だから、そのための証拠保全だとか、状況をどうするとか、それはできますね。写真を撮ったりして。

ところが、こんな刑事犯罪対策では「警備」はできませんよ。私は警備部長として部下を集めて訓辞した時には、「警備犯罪」は要するに事態を治めればいいんだと。暴徒が集まってワイワイ騒ぐ。それを散らせれば、それで終わりなんだと。後で公判闘争でどうだこうだというようなことは、それはもちろん刑事の関係は言うだろうけれど、放っておけ、と言ったんです。法廷闘争は考えるな。そんなものではない。だって、やりながら証拠保全なんかできませんよね（笑い）。しかし建前から言うと、そうなるんですよ。犯罪だから、関係者、警察官は所要の証拠を出せと。そんなことができるはずがない。だから刑事犯罪の捜査と警備事犯の鎮圧とは全く性質が違くと。そんなことを言っても、刑法がすぐ直るわけではないからしょうがない。しかし法廷でどうだこうだということ、あまり考えるなど。要するに、その時に起こった騒乱を鎮める、それでいいんだ。後はどうでもいい、ということを示しましたよ。そういうことをやるのが警備部長の仕事ですね。それで誰か文句を言ってきたら、俺が責任を取ると言ったんです。

伊藤 その場合、現行犯で捕まえたのは？

海原 それは別ですね。現行犯というのは証拠がありますから。それ以外の、後ろで火を放ったと言っても、そんな者までできませんよ。後でヘリコプターが使われますが、ヘリコプターだって無理ですよ。

下まで降りてくると危ないですからね。だから上から写真を撮って。私は言ったんですが、ヘリコプターで放水して、色のついた液をかける（笑い）。そして、後で色のついた奴は全部捕まえると。そういうことでもしないと、とても犯人たちの特定ができないでしょう。ここが不思議なところで、そういう暴動とか、いろいろ関係の事件も、刑事犯罪と同じような捜査をやる。直さなきゃいかんでしょうが、ともかくそういう法令の下でやっているわけですから。だから何度も言いますが、われわれの対象はその場を一応治めればいいんだ。後の法廷闘争とか刑事がどうかは忘れろ、ということを私は指示しました。私とその責任を取ると言った。そういうことですね。

伊藤 そういう集団的な騒擾問題はそうだと思いますが、個々のテロとか、こういう問題にはあまり直面されなかったですか。

海原 ありません。個々のテロというのは刑事です。

伊藤 あつ、刑事になってしまってますか。

海原 例えば浅沼（稻次郎）さんが刺されましたね。あれは刑事です。刑事部で捜査一課、二課ですね。一課がそういう刑事犯罪、二課が思想犯ですね。それはもう刑事です。

伊藤 そうですか。では警備の方は、要するに事態を鎮圧すればいいと、こういうことなんですか。

海原 散らせばいいんです。だからその辺の考え方は一般の人にはわからないと思う。しかし、やり方が完全に違うんですよ。

伊藤 警備部長としてご在任の時に、何か印象に残るような出来事といますか、事件とかは？

海原 私はないですね。全くないですね。

伊藤 ないですか。それは幸せというか、残念というか（笑い）。

海原 あつちこつちで、例えば駅で投石事件があつたりしたでしょう。それは秦野君がやっていますよ、警視庁で。管区はそんなものは関係ないですよ。またやつたか、ですよ。ご苦労だなど。せいぜい、ねぎらいの言葉をかけるくらいですね。終つてから一杯飲んで「ご苦労さん」で、誰も慰めませんからね。

佐道 年表的に言いますと、いっぱいいろいろなことが起きたんですよ。

海原 これはまた難しい質問をいただいたと思つたけど、お答えするものは何もないですよ。ある意味では無責任かもしれませんがね。私は警備機関はそんなものだと思つていました。

それから同じことの繰り返しで恐縮ですが、日本では革命は成り立たん、騒いでいるだけだ。たまたま後藤田君の本を読んでいましたら書いてありましたが、例の宮城前の暴動で車がひっくり返りましたね。焼かれました。あの後で、吉田総理がどうだったかと言うと、吉田総理が秘書官に「日本人もなかなかやるじゃないか」と言つたと。あれを読んでハハンと思つた。まあその程度ですよ。

昔の例で言いますと、何の時でしたか、日比谷の交番か何かが焼き討ちされた事件がありますね。その時に、時の総理が言つた言葉は「あれでいいんだ。だから交番は焼けるもので作つておけ」と。これもやはり政治の一つのコツでしょうね。石造りじゃ駄目なんだと。巡查というものが国家権力の代表ですからね。これをやつつて、と来る。ひっくり返す、火をつける、ワツとやる。これが、いわゆる群集心理なんです。

伊藤 発散するわけですね。

海原 発散するわけです。そういうものなんです。だから交番を置

く時に、石造りの頑丈なものにしては駄目だと。これは言い得て妙ですよ。そういう考え方なんです。同じ警察でも、警備関係と刑事関係ではやはり違いますね。

佐道 東京管区で、各県とかの警備関係者を集めての警備情報交換とか。

海原 それはありました。それは後の保安庁に入る時の話に関係してくるんです。その話に入つていいですか。そういうことで当時は共産党があちこち狙うでしょう。今度は水力発電所を狙うかもしれないということになるわけです。東京警察管内の各県の警備部長を集めて、長野の軽井沢で会議をやつたんですよ。その時はなぜ長野かというところ、群馬県に水力発電所があるでしょう。だからこの水力発電所に、もしそういう闘争を彼らがやつたらどうということになるかということを想定して、まず水力発電の現場を知らないと困るでしょう。それで現場で研究会をやつたんですよ。

そして、帰つて来たら、「お前は保安庁に行け」となつたんですよ。それは、各県の警備部長を集めて軽井沢で会議をやつた翌日ですよ。行く前の土曜日に、これまた先ほどの話に関連するんですが、柏村さんから「今度俺は公安調査庁に行く。ついては、君も来てくれ」と言われたんです。私は柏村さんを尊敬していますし、好きな人ですから「喜んで参ります」と言つたんです。「時に何をやりますか」と聞いたら、「外事関係の課長をやつてくれ」と言われた。その時に「公安調査庁なんて要らないじゃないですか」と、私は言つたんです。そうしたら柏村さんは、「俺もそう思う。思うけれど、現にあるし、行って、どんなところか体験して、それから後で要らなければ壊そうじゃないか」という話をしたんです。それをやつたのが土曜日で、『新春』

という新橋の小さな料亭です。

その料亭のトイレで、たまたま内海君に会ったんですよ。そうしたら後藤田君と来ていると言うんですね。何だと言ったら、「いや、ちよっと打ち合わせがありました」と言う。後藤田もおるか。後藤田は今度帰ってくるんじゃないか」と言ったら、「さあ」とか言っているんですね。それで僕は「はーん」と思ったんですよ。

それで柏村さんに、「実は洗面所で内海に会った。どうも話の様子では、はっきり言わんけれど、後藤田が帰ってくるようだ。そうすると、後藤田の後任が必要になる。おそらく私が呼ばれるんじゃないですか」と言っただけです。保安課長は軍歴がないと難しいですからね。「ひよっとしたら、後藤田が帰ってくるについて、私が交代に行くことになりますよ。あなたが私に公安調査庁に来いと言っただけから、私は喜んであなたの下に行くけれど、保安庁に呼ばれるかもしれないから」と言うのと、「いや、そっちはちゃんと俺が手を打つ」と言っただけです。それが土曜日なんです（笑い）。

そして軽井沢へ行きましたね。月曜日に会議をやって帰って来た。帰って来たら、「お前は保安庁だ」となっていたんです。

伊藤 話がつかなかったんですね（笑い）。

海原 つかなかったんです。増原さんは、この前言ったように、昔、満州で知っているでしょう。後藤田の後任には、ぜひ海原が欲しいということになった。それで海原は駄目だと言っても、陸軍のことをわかった者が前後にいない、だから後任は誰でも欲しい奴がおっただけで、それを出すから、ということだった。私の替わりの交代要員ですね。それで秦野が行った。秦野君が公安調査庁に行つて、外事担当になった。彼は私の代理なんです。そんな経緯があるんですよ。

だから、これはいろいろと絡み合っていますからね。当時の事件、世相との関係ですよ。公安調査庁は差し当り、いかにも条文を見ると、大変なことをやるような役所なんです。ところが、果たしてこれができるか。どうやってやるんだ、ということをお見せすると、経験者ならわかりますよ、何ができるか。柏村さん自身も、こんなものは要らないと言っているんですからね。それから公安調査庁法も破壊活動防止法も、立派なことが書いてあるけれど、どうやって発動するんだと考えますと、難しい。いわゆる「伝家の宝刀」的な形になっていますよ。あれは抜けないですよ。今日まで一回も抜いていないですよ。しかし、あの時には、ああいうものが必要だと思われた、そういう世相でしょうね。いっぺん作ると残ってしまうんですよ。

そこで話は全く別になりますけれどね。私はテレビに出ている時に言っただけですが、国家公務員に年末年始の休暇があるでしょう。役所の「御用納め」と言う。一体「御用納め」というのは何ですかね。「御用」というのは何ですか。

佐道 お上の御用ですか。

海原 だって、お上なんていうものはなくなつたでしょう。言葉は残っていますね。年末年始、一定期間みんな休んでしまうでしょう。これは何で決まっていますか。根拠規定は？

伊藤 考えたこともないな（笑い）。

海原 たまには、こっちから質問しましょう。そうでしょう、わからないでしょう。

伊藤 何か根拠があるんですか。

海原 それが困るんですよ。根拠もないのに国民みんなが働いているのに、国民は三十一日まで働いているんですよ。役所だけ「御用納め」

という。大臣が訓示して、サヨナラでしょう。こんな馬鹿なものが残っている。根拠は何か。太政官布告です。明治六年か八年か忘れましたが、根拠はその頃の太政官布告です。その頃は「御用」だったんですよ。天皇の官吏ですから。

ところが、それがすっかり世の中は変わっているはずなのに、いまだに「御用納め」、「御用始め」でしょう。私は国民が働いているのに、役人、国家公務員だけが御用は納めたと言って一斉に休むのはおかしい。国へ帰るのはいい。それは年次休暇で行けばいい。こう言ったんですが、駄目ですね。それは防衛庁で主張したんですがね。防衛庁が、自衛官が範を示せと言ったんですが駄目でした。ことほど左様に、われわれの世の中は曰く言い難いです。

伊藤 いっぺん決めたことは、なかなか変えられませんから。

海原 いったん決めたことは、自分に都合のいいことだけは変えないんです。簡単なことですよ。アメリカあたりは十二月三十一日の午前中までやっているでしょう。一月一日を休んで、二日からもうやっていますからね。いろいろとありますが、だから家に帰るのはいいですよ。年次休暇を利用して行けばいいんですよ。それを役所が、「これで終りです」と言うのはおかしいじゃないですか。どうですか。

伊藤 われわれは利害関係がありますから（笑い）。

海原 ことほど左様に、人間というのはいい加減なものだと。理屈と
いうものは。

伊藤 先ほどちよっとお話しが出ました、「血のメーデー」の話ですが、ああいうことは関係ないんですか。

海原 関係ありません。あの時は私は警備部長ですから。田中さんが警視總監でしょう。私は警視庁の建物にありますからね。屋上で見た

んですよ。すこし離れて田中さんがいました。周りにいっぱい新聞記者がいるから話しませんでしたが、後で新聞記者から聞いたことでは、總監は「いや、もうすぐ終る。昼に腹が減るから大丈夫だ」と言っていたと。これは新聞記者の話ですよ。そういう感覚だった。ずっと向こうから行進して来ているでしょう。それで、あそこでやった。まさか、あんな拳銃を発射するようなことになるとは思っていなかったんですよ。それは幹部の判断が甘かった。だからあの時としては、そうでしょうね。あれはどうしてあんなに甘かったか、その後も何の原因の解明はされていませんね。あれは一種のワッシヨイ、ワッシヨイのムードでしょうね。それから、ついでに並んでいる自動車をひっくり返して、全部に火をつけた。

伊藤 あれは共産党の方はかなり計画的にやっただと思えますが。

海原 やったけれど、あそこまでやるかどうかの問題ですね。

伊藤 警備の方はそれだけやるとは予想しなかった。

海原 でしょうね。

伊藤 警備の方も、しかしあの広場でワッと来て、一体どういう対応したらいいのかというのはね。

海原 もうその時は手遅れですわ。もうしようがない。

伊藤 もうあそこに入れちゃったんですからね。

海原 それに入ったら、多勢に無勢でしょう。それから、これはいつも問題になるんですが、警察官がどう対抗できるかと言ったら、人間としてはむしろ向こうの方が強いでしょうね。数は多いし、身体は若いし。だから、もう自衛用の拳銃しかないですよ。これを発射したら人を傷つける。そうすると、むやみに撃てない。となると、当然行動が束縛されますね。ですから、警察官というものは非常に万能のよ

うに思われても、実際には動き方が難しいです。

それに関連して申しますと、私が保安庁に行った時ですが、ああいう時に自衛官を出せという要求が結構あるんですよ、自民党の方で。

警察は弱い、だから自衛隊を出せと言う。私はそこへ行って言うんですよ。「あなた方は『警察官は弱い、自衛官は強い』と思っているけれど、とんでもないことだと。自衛官は集団で行動するものだ、小隊単位で。それで鉄砲を撃つものだ。警察官は個人で動くんだ。だから、仮に自衛官を警察官のように扱ったらどうなるか。夜、鉄砲を持って警戒している。地理不案内の土地だ。そうしたら、私なら簡単にこれは鉄砲を奪いますよ。捕虜をたくさんつくるだけだ。決して警察は弱い、自衛官は強い、じゃないんだ」という話をする、みんな黙ってしまうんですね。

ところが偉い人は、何とはなしにそういうムードになるんですね。

「警察では駄目だ、自衛隊を出せ」ということになるわけです。そうすると、われわれは反対して、出なくて済んだんですけれどね。そういうことがありますね。だから警察官は個人でもって行動して処置しないといかんし、その訓練を受けているんですよ。自衛官は、集団でもって鉄砲を撃つために、その目的のための訓練を受けているわけですからね。個人としては弱いですな。

伊藤 この質問表に書いてありますが、新宿駅騒乱事件がありますね。これは火炎瓶が盛んに飛んで、ずいぶんたくさん人が集まってやったわけですが、ああいうのも警視庁管内だと、特に管区本部が出てくるようなことは何もないですね。

海原 全くありません。管区としては指示もできませんしね。指揮もできませんしね。ただ、何か参考情報があれば、こういうことだとい

うことを言うだけです。情報を送るだけです。それは警視庁の方がベテランですからね。

伊藤 やはり何かやりそうだなというのは、情報としてはわかるわけでしょう。

海原 それは各都道府県からも来ますから。そちらからの情報を総合するところなっているぞ、ということをお教えあげてあげますね。

伊藤 もちろん警視庁自体も情報収集しているから、情報収集力はかなり強いわけでしょう。

海原 しかし、これは情報収集といっても先ほど言いました「S」ですね。スパイの問題がある。この前、私は共産党の最初の軍事会議を摘発した、その情報は横浜からもらったと申しました。その時に申し上げたと思いますが、同じ線から、潜っている幹部の逮捕ということが問題になったことがあります。その一人の幹部が、渋谷の道玄坂の旅館街におるといふ情報が来たんですよ。それで島田（純一郎）君が捜査課長でしたが、前の情報が正しいから今度も正しいかと思った。

一応、警察官を動員して、渋谷の旅館街に用意したわけです。どうも感じが危ないということで、三十分前に中止したんです。そうしたら、良かったです、ガセネタでした。そのとき幹部はいなかったんです。もしやっていたら、円山町の旅館街に警察官が踏み込んでいますからね。それは大変な警察のマイナスになるわけです。

そういうことで、同じスパイの線からでも、いろいろと、正確な情報とそうでない情報があるんです。その判断が難しいですね。全部それをやって、失敗したら失敗してもいいというのなら別ですよ。そういうことがありました。管区の担当者としては。

伊藤 当然、今度は共産党の方からも警察に対して情報収集をやるこ

とになりますよね。

海原 でしょうね。

伊藤 対敵情報防御みたいなものは？

海原 しかし、私ども体験の限りでは、それほど真剣じゃなかったですね。同時に、私はそれほど共産党のその方面の能力は優れていると思いませんでした。ある意味で、不平分子の集団みたいなところがありませんから。お渡しした「孟子抄」なんか見たら立派なことを書いてありますよ。しかし、大多数がああなのかというと、そうじゃないですな。あれは特に選ばれた中心人物の心得でしょうね。私の高等学校の同級生の一人が共産党に入りました。何故あれが共産党に行っただかわからないですね。死にましたが……。いろいろな人がいますから。

立派なのもいますよ。別の例で言いますと、私は今週もまた『赤旗』の記者と頼まれて会いますが、取材するでしょう。それをどう新聞に載せるか。それをちゃんと報告するのは『赤旗』ですよ。「海原さん、一昨日のことをこういうふうにとまとめましたが、これでいいでしょうか」と電話が来るんです。立派なものですよ。「ブルジョア新聞」は全然やらないですから（笑い）。

佐道 それをやったら儲かる記事が書けませんからね（笑い）。

海原 だから、私はそういうことで、別に共産党だから云々という偏見は持っておりません。較べてみると、やはり彼らの方が、そういう意味では真面目ですね。

伊藤 その当時の共産党と今の共産党ではずいぶん違うでしょうね。

海原 違うでしょうね。あの頃、私知っていた共産党員というのは、やはりいい日本国家を創ろうという意味の革命意識を持っていました

ね。維新の志士みたいなところがあつた（笑い）。そういう時代だったでしょうかね。今は私も全然知りません。付き合いがありませんから。

佐道 先ほど、ちらつと「内調」ということをおっしゃっていました

が、「内調」はその時代、どの程度の情報を持っていたんでしょうか。

海原 内閣調査室でしょう。一応、防衛庁や自衛隊が取るところの通信情報、これは「第二別室」というところで取って、それは「内調」に行くわけです。それが、例の大韓航空機撃墜事件のところの後藤田君が言っているものです。これは、それなりの成果がありましたね。ただ、あの人たち、そういう情報収集している人は刑事と同じで、非常に秘密主義ですよ。仲間にも言わない、というと語弊がありますが、そういうことになるんですね。「第二別室」の情報というのは、誰がどう判断して扱っているか問題ですね。

伊藤 もちろん上には行くわけでしょう。

海原 上だと思えます。松橋（忠光）君という、私も使った男がいますが、これが『我が罪は常に我が前にあり』という本を出しました。ご存知ですか。あれを見ると、「内調」の中がよくわかりますけれどね。彼は何故あんな本を書いたのか知りませんが、あの本で誉められているのは私と富田君の二人だけなんです。本人は誉めたつもりでいるけれど、こっちは迷惑しているんですね（笑い）。後はみんなくだらんことをやっている、警察は。「内調」もそうだ。大した意味のない情報に大枚をはたいてどうのこうの、と書いてあるんですよ。そういうことを彼は書いていますが、私は本を出す前から彼と付き合い合っているの、聞くと、一種の思い込みがあるんですね。どういうことなんでしょう。これじゃいけないという気持があるわけですね。本

来、警察というものはこれじゃいけない。こうじゃなくちゃいけない。内閣調査室の情報というのは、こうあるべきである。ところが、実際はそうなっていない。これを何とかせんといかんと。そういうふうな気持ちでしょうね。

それが私たちになると、ほどほどにしておけということになるけれど、そのほどほどに彼はならないんですよ。ここは、ある意味で純真ですね。純真ですけど、世間知らずだと思う。というのは、彼は自分の同期が警察庁長官になりましたから、「同期の長官、お前がしつかりやってくれ」ということで本を出したんでしようけれど、これが単純なんです。松橋君がそんなことを言ったからといって、同期の男が、わかったと言つてやると思うのは間違いですよ。そういう意味ではちゃんと「牧師さん」が付いているんです。余計なことかも知れませんが、そんなことがありますから、いろいろ情報関係となりますと、どういう物差しで判断するか、それで違つてきますね。

何でもかんでも、とにかく集めておいて、それから必要ないものを選別するとなると、選別する者の能力になるんです。ところが、先ほど申しましたように、下の方でお互い連絡しないで、上まで行ってしまつて、同じ情報が出てくるということになる。それが現実の社会でしたな。お答えになっていませんが。

伊藤 要するに「S」というのは、そんなにたくさんはいなかったということですね。

海原 いまですね。また、それはあり得ないでしょうね。私のおつた時に「S」の線で成功したのは、せいぜい二つくらいですね。他は全部ガセネタです。それと、そこまでいかなない大したことのないものが大きく膨らんで、いかにも大事なことが行なわれたかのように作文し

てあるわけですよ。だから私は、これで飯は食えるなど思った。自分で作文して持つて行って、警視庁にも売り込む、国警にも売り込む、公安調査庁にも売り込む（笑い）。

佐道 その「S」が途中で共産党の中でバレたりとか、そういうことはありますか。

海原 それはあります。あつても、「ああそうか」で終わりですね。馬鹿なことをしたな、で終わりです。もうそれ以上何もありません。

伊藤 戦前だと、殺されたりしますけれどね。

海原 それは戦前とは違うわけですから。だから、そういう同じことがあるのは、警察だけじゃなくて新聞もそうでした。これは一時実際にありました。香港の情報です。あれは大新聞が、誰か情報提供者を使うわけです。それが言う通りに書いておつた。とんでもないガセネタだった。それは外国公館もそういうことでしょうね。

私もワシントンで勤務しまして、多少の体験はあるんですが、例えば東南アジアのタイへ行つた時に調べてみたら、要するに日本大使館でタイ語をしゃべれるのはいないんです。だから直接、いわゆる「S」を使えないんですね。その親分を使うわけです。これが適当な者を動員するわけです。それが合っているかどうかをチェックする能力もない。だから時々、外務省関係でおかしな情報が出るわけです。

伊藤 やはりクロスチェックができないと、何となく危ないような感じがしますね。

海原 そうですね。まず言葉ができないんです。英語が堪能でも、それではタイでは務まらないでしょうね。上の人とは折衝できません。

話が飛びましたが、日本の外務省の情報収集の問題もあるかもしれませんが。私は、日本は世界中に商社員が行っているのだから、この商

社員の協力を求めるということをしきりに言ったんですけれどね。なかなかそれは採用されませんでしたね。商社員ぐらゐ、あちこち情報を持っているのはいませんよ。問題は、その商社員に頼んで情報を集めて、先ほど申しました選別、あるいはフォロワーする、そういう組織にならんといかんですな。

伊藤 先ほどの話で、群馬県に発電所がたくさんあって、当時は「電産」が非常に強い組合で、共産党の影響下にあって、「電源防衛」ということを盛んに言いました。あれは中曽根さんの選挙区で、中曽根さんなんかは「電源防衛」とか何とか言って、盛んにやっていたみたいです。ですが、実際に発電所に行つて見られたわけですか。

海原 行つたんです。だって誰も知らないんです。水力発電はどうなっているんだと。やるとしたら何をやるかという、敵の計画を考えないとはいけませんな。そういう実地研修をやつたんです。そうしたら、こんなのはとても駄目だと思つたですね。

伊藤 あれは爆破のしようもないでしょう。

海原 何をやるかの問題ですね。止めるか何かですね。爆破と言つても、ちよつとやそつとじゃ、あのでかいやつは止められませんよ。せいぜい調整室がありますが、あそこに爆弾を放り込んで、一時機能停止するぐらいですね。だから、ここをしつかりしておけばいいとか、そういうことを実地研修したわけですよ。

伊藤 「電産」の過激派で、ちゃんと技術を持っている奴がやれば、それはできますよな。

海原 たぶんそうでしょう。しかし、そこまでやるかどうかの問題ですね。

伊藤 国鉄の職員がレールを抜けば、それは事故は起こりますよな。

海原 その通りですね。お話に出ましたけど、後でまた話そうと思つたんですが、鉄道ですね。中曽根氏が言つたので、当時の改進黨の要求になつて、私が行つた時には「鉄道連隊をつくれ」となつていたんですよ。そういう要請が来ましてね。

伊藤 それはいつの話ですか。

海原 私が保安庁に行つた時です。工兵部隊ができていますよ。その特別な部隊が津田沼にあるんですよ。それは要するに、国鉄がストライキをやつた時に対応するためだと言つたんです。私は津田沼に見に行きましたよ。涙が出ましたね。昔、鉄道連隊というのがあつたでしょう。だから、かつて軍におつた人々が召集された。鉄道三連隊とか四連隊というのが……。そういう人ばかり集めて、鉄道の機関車の講習をやっているわけですよ。兵庭に縄が張つてあるんです。これが線路だと言つたんですね。私は、まあ「苦勞さんと言つて帰つてから、言つたんですよ、「何故こんなことをやっているんだ」と。すると、「国鉄がストライキをやつた時に、自衛隊の手で動かす」と言うから、私は笑つて言つたんですよ。「機関車は動かせるけど、信号はどうするんだ」と。みんな黙つちやつた。十八万人全部が鉄道関係ならいいけれど、機関車は信号で動くんだ。機関車は動かせるけれど、信号関係をどうするんだ、と言つたら誰も返事ができない。こんなものはやめろと言つたんです。調べたところが、改進黨の中曽根さんが言つたようなので、俺が交渉してやると言つたら、いや、そこまでやらんでよろしい、と言つてやめたですよ。そういうことがある。

だから目的のため、任務のためにはとんでもないことを考えつきますからね。それが今のご質問の答えになるわけですね。要するに、自分の能力の限度を知らない。だから、中曽根氏が水力発電所をどうだ

こうだと言っても、そんなものを自衛隊の手でどうするんだということになっちゃう。各企業の防衛でしょうね。それしかないわけですよ。ところが、そういうふうには有力な政治家がアイデアを出しますと、「いや、それは」とは、みんな言わない。まさに「ご無理ごもつとも」なんです。その例として鉄道連隊の話を出したんですけれどね。

伊藤 それは保安隊の頃ですか（笑い）。

海原 そうです。それはお笑いになるけれど、やっている連中は一所懸命なんですよ。しかも私が、「信号をどうするんですか」と言わなければ、みんなやろうとしているんですから。困ったものですね。

今でもいろいろなことがあるんじゃないですか。例えば防衛庁が給油機をどうだこうだと言って、大臣が賛成しているでしょう。どういう時に使うんですかね。ある新聞にも書きましたが、給油機は何のために要るんですか。「考慮する」と大臣は答えた。何を考慮するんですかね。そういうことは、結構いろいろあるんですよ。

伊藤 僕は、先生が警備部長で、この時代いろいろ事件が多いですから、大活躍でもされたのかと思って、これでお話がいっぱいだと思います。何事もなく平穩無事だったので、ちよつと肩透かしを食ったみたいですよ（笑い）。

海原 私は、それで良かったと思います。何度も同じことを言いますが、私は本質的に日本人はそれほど野蛮人じゃないと思います。ほどほどを心得ているんじゃないですかね。「歌舞伎」ですよ。今の政治だって「歌舞伎」ですよ。

伊藤 運動も「歌舞伎」ですか。

海原 と思いますね。ですから、今に腹が減るよ、やったら治まるよ、ということになる。

河野 そうすると、警備部長の仕事として情報の収集はするということですが、その情報の分析というところまではいかがでしたか。例えば先生が前におっしゃっていましたが、「孟子抄」みたいな地下の文書が上がってきた時に、じゃあ一体何を考えていて、何をやるだろうというのは会議でやるんですか。

海原 会議でやります。例えば警備課長が川島（廣守）君ですね。川島君のところでも部を集めて、これはどう思うかとか、どういうことがあり得るかとか。これがあつたらどうするかとか、そういう会議があつた。

河野 それはあるわけですね。

海原 その会議の報告を、部長が聞くわけですね。その中で適当なものがあれば本部に送ると、そういうことですね。

佐道 まず警備課の会議があつて、それが警備部長に上がり、ということですね。

海原 そういうことですね。先ほど申しましたように、中間的な選別をそこで仕切つて、これは大事だから上に上げようとか、これは駄目だからもう少し調べるとか、そういうことをやるわけです。いきなりそれが全部本部に行きますと、大変ですよ。だから中間でもつて、適当に取捨選択をやつたというのが管区でしょうね。管区の存在価値としては。

それから、管区ですと割と地域が決まっていますから、わかるわけです。本部ですと、日本中でしょう。だからわからない。そういう面がありますね。

河野 先生が警備部長でいらつしやつた時は、比較的平穩だったというの、その分析と実際の警備がほぼ釣り合つていて、過剰でもなけ

れば手薄でもなかった。

海原 向こうも疲れたんじゃないでしょうか。共産党の人も、最初
のエネルギーの蓄積したものを発散しておったんじゃないですか。だ
から「五一年闘争」の後で、五五年七月の「六全協」で戦術を切り換
えるでしょう、「微笑戦術」に。これはやつても駄目だと思わわけで
すよ。

佐道 しかし五二年頃、まさに警備部長をなさっておられた頃は、最
も発散していた頃じゃないかと思いますが。

海原 いや、私はそうは思いませんね。たまたま表に出た派手な面は
ありますが、それはただ彼らのエネルギーの発散の状況であって、そ
れほど一般の公共の治安秩序には影響なかったということですね。先
ほどの派出所が木造小屋かコンクリートかの問題でね。そこで燃焼す
れば、それで一応治まるわけです。

保安課長の職務とは？

——保安庁保安局

伊藤 これはそこまでにして、先へ行きましょう。昭和二十七年八月
に保安庁に行かれるわけですが、保安局の保安課長というのは、どう
いうテーマでしょうか。

海原 これがまた、名前がおかしいんですが、要するに何でも重要な
方針は全部そこを経由しないとけない。保安隊、警備隊に関するも
のは、全部そこを通ることになっているんです。後藤田君の後任です

けれどね。

伊藤 保安庁は、保安局の他にどういう局があるわけですか。

海原 経理局もあります。官房もありますし、装備局もあります。そ
ういうものがあるわけです。

伊藤 そうすると、保安局は中心の局ですね。またその保安局の中の
保安課というのが一番中心になるということですか。

海原 そうです。だから何でも大事なことは私のところを通るように
なっているわけです。言うなれば保安課長というのが、保安庁に関す
る基本的な方針を必ず見るところですね。

伊藤 見るといえるのは、プランナーですか。

海原 そういうことです。

伊藤 調整ではなくて。

海原 「調整」とか「プランナー」とかいうのは、言葉の意味が難し
いわけです。何か具体的な例があるといいんですがね。一つ最も具体
的な例で申し上げますと、後年、一九五九年七月に「赤城構想」とい
うのがあった。これは赤城（宗徳）長官が札幌に行った時に、札幌の
宿舎で発表した「防衛力整備に関する基本計画」です。これを私は防
衛局長で全部壊したんです。仮にも大臣が随行記者団に、今後の四年
～五年計画はこうするんだということを発表した。その計画を全部ご
破算にしたんですからね。それは防衛局長の私ができなんです。そう
いうところなんです。

具体的なことを言いますと、まず「赤城構想」というのは赤城さん
が考えたものではないんですね。前の大臣は伊能（繁次郎）さんです
が、グラマンの問題で辞めた。その後に来て、二カ月前ぐらいですかね。
ですから、それまでの間、陸・海・空の幕僚監部でいろいろ勉強して

積み上げて、内局が最後に入ってまとめたものが「赤城構想」なんです。だからそれは、ある意味では当時の防衛庁の総意でできているものです。それを私と、私一人ではありませんが、私と志を同じくする下の者と数人でもって、全部ご破算にしたわけです。

一番大きな点は、一つだけ言いますと、「赤城構想」では、相当大きな武力進撃に対して三カ月は戦うようなことを考えていました。そういう前提で書いた。私は笑ったわけです。誰だ、相手は。ソ連だろう。ソ連相手に三カ月戦うというのはどういうことだと。何故三カ月が出たかというところ、弾薬のところは、「戦時所要三カ月分の弾薬を備蓄する」と書いてあるんです。そんなことは不可能だと。それは一番わかりやすい例で言ったんですが、ことほど左様に、旧軍人的発想ですつとまとまっているわけですよ。

それが防衛庁で発表されて、そして国防会議事務局に持ち込まれた。事務局長が広岡謙二さんという私の大先輩ですがね。そんな馬鹿馬鹿しい構想なものですから、国防会議事務局の方から見れば話にならないわけです。それで今の状態では、とても審議できないということから、私が局長になるんです。その結果、「赤城構想」は全部ご破算にしてしまった。その一例でもってわかりのように、「何をしましたか、何をするんですか」と言われても、その時、その時によって違うわけです。

もう一つ言いますと、私が国防会議の事務局の局長でやったことは、「中曽根構想」をご破算にしました。それは防衛庁がまとめたものを発表したのですよ。防衛課長、防衛局長もサインしているわけです。それをご破算にした。そういうことで、事柄の内容如何によるわけですから、おっしゃるように保安課長は何をするんだ、何ができるんだ

と言われても、ちよつと困るんですね。私は簡単にいつも言うんですが、「お前は何をやったんだ」と言われたら、いや、私は防衛庁では「赤城構想」をご破算にしました。国防会議事務局では「中曽根構想」をご破算にしました。共にそれぞれ大臣が決裁して、表に発表した。しかし、それは私から見れば全くの机上の空論なのでご破算にした、と申し上げるんですがね。そういうことです。組織の中の課長は何をしたんだと言われても、お答えのしようがないですね。

伊藤 警察予備隊というのは保安隊に変わるんですが、これは何がどう変わったんですか。

海原 その辺のところは私の持ち分じゃないですね。後藤田君、内海君のところですね。

伊藤 でも、最初に立ち上げの時にやりになったでしょう。

海原 それは簡単に言いますと、警察予備隊は旧内務省官僚が中心になってつくった陸の部隊ですね。と同時に海上警備隊、これは旧海軍軍人が中心となって「Y委員会」ができますが、それでできた部隊ですね。その二つを一緒にしたということです。

伊藤 ただ、それだけのことでですか。

海原 それだけです。その間に、陸・海の摺り合せは全然できていない。その陸・海の摺り合せを増原さんはやろうとしたんですが、できていませんね。それで、この保安庁ができるわけです。これを見ますと、昔のことがいろいろ書いてありますが、まだ内容は十分わかっていないんですね。もう一度繰り返し返しますと、陸上部隊、保安隊ですね、これはアメリカ式にできているんです。海の部隊、警備隊、これは旧帝国海軍式にできているんです。それを具体的にお示しできるのが、それぞれの「制服」の方の組織です。組織が全然、「陸」と「海」で

は違うんですよ「保安庁組織表のコピーを配布(資料3)」。

これが「保安庁組織表」と呼んでいるものですが、この違いがたぶんおわかりにならないと思います。大きな違いは、両方とも課があるでしょう。その課が、「陸」の方はまとめて幕僚長のところに線が行っているわけです、第一幕僚長のところに。例えば、総務、厚生と書いてありますね。その課の上に部がありますね。部長のところには線が行っていませんね。

ところが、第二幕僚監部、これは「海」ですが、全部、部の下に課が付いているんです。ここが問題ですよ。

伊藤 これは僕らには全然意味がわかりませんね。

海原 そうでしょう。これが問題なんですよ。「陸」と「海」とは、それぞれ別々につくられた。「陸」の方は、アメリカの陸軍式につくられていますから、要するに課という名前がありますが、これが部ではなくて、直接幕僚長のところに行っていますね。全部スタッフなんですよ。この管理部長、一部長、二部長、三部長、四部長というのは、下に課がないんです。下の課長は、それぞれ全部幕僚長に付いているわけです。これは特別幕僚と言っています。一部、二部、三部、四部、管理部、これは一般幕僚ですね。だから通信課長であるとか衛生課長であるとか、この直接の上司は幕僚長なんです。こういう組織は日本人にはわからない。

伊藤 そうすると、第一部、第二部、第三部、第四部は、これは課とは無関係なんですか。

海原 そんなんです、問題は。その辺がわからないですよ。一応その関係のことを上の方で掌握しているんです。しかし、部下ではないんです。その辺がわからない。

第二幕僚監部の方は、全部、部に課が付いているでしょう。これは日本式でわかりやすいですね。しかし「陸」の方の組織は、一般幕僚、特別幕僚というふうな呼び方になるわけです。これはアメリカの陸軍の組織なんです。

伊藤 「陸」の場合は、課長は部長を経由しない。

海原 直接幕僚長を補佐するんです。ただし、予め関係の部長の承認を受けると書いてある。しかし、直接の上は幕僚長なんです(保安庁第一幕僚監部組織規定)。アメリカは、こういう組織なんです。これは日本人にはわかりにくいですね。

伊藤 わかりにくいですね。

海原 しかし、これは向こうにしたら当たり前なんですよ。一般幕僚、特別幕僚と言いまして、そういうのが保安庁法に書いてある。ここにも書いてあるんですがね。ちよつとわからないでしょう。私も向こうから説明を聞いて、なるほどおもしろいと思っただけですが、この一般幕僚、特別幕僚の制度をやってみますと、どうもわからん。部長にしてみると、面白くないんですね。直接の部下ではないんですからね。だから、これはそのうち消えてなくなるんです。日本式に直つてしまふんです。

伊藤 やはり右「海」の方と同じになるわけですか。

海原 そうです。これを詳しくご説明すると面白いんですけれどね。

日本人の物の考え方とか何かで。

佐道 そこは是非詳しくお願ひしたいと思います。

海原 それはまた改めて。資料を用意しませんとね。

伊藤 大体、どんな感じになるわけですか。

海原 要するに、特別幕僚というのは、通信課長は通信については幕

僚長の補佐官なんです。ところが、その上に四部とあるでしょう。後方面担当の四部長も通信課長が何を考えているか、何を言っているか、ということは知らないといけないですね。そういう考え方なんです。

伊藤 この一般幕僚も幕僚長を補佐するわけですね。

海原 一般幕僚が直接の部下ですね。日本人にはわかりにくいんですよ。その事柄を担当するというだけであって、だからこれを読んでみてもおわかりにならないと思う。

伊藤 でも、これは警察予備隊の時から、こういうふうには。

海原 いや、警察予備隊の時は違うんです。

伊藤 違うんですか。保安隊になって初めてこういう組織になるわけですよ。

海原 「海」との対比ができますから。だから違うと申しましたが、警察予備隊の時からこういうことですね。

伊藤 こういうふうにはやっていたわけですね。やっついて、あまりゴタゴタは起こらなかったわけですか。

海原 どうも具合が悪い、と言っていますね。

伊藤 やはり具合が悪いんですか。

海原 日本人には馴染まないんです。それをそのまま保安隊に引き継いだ。部下ではないけれど、報告は受ける、とかね。だから日本式に言えば、二人の部下がおるようなものですね、幕僚長にしてみれば。だから、細かい技術的なことは課長が補佐をする。その技術的なものを踏まえた、全般的な行政的な面は部長が補佐する、というようなことになるんでしょうかね、わかりやすく言えば。これでもわからんかも知れませんが。とにかくこれを見たら、いかに「海」と「陸」とで物の考え方が違ってくるかわかるでしょう。

伊藤 考え方と言っても、これだけだと、アメリカのシステムだから、必ずしも十分慣れたわけではないでしょう。

海原 しかし、二年はやっただけでしょうからね。

伊藤 実際問題、どうやってやっていたのか。

佐道 警察予備隊の時代からだとすると、もっと長いですよ。

海原 そうです。まだ警察予備隊は内局が動くような時代じゃありませんからね。第一線の部隊の育成が先であって、中央でもってああだこうだというようなことは、まずないですね。あっても少ない。ところが、だんだん部隊ができてきますと、中央の働きが出てくるわけです。そうになると、部長と課長との関係がギクシャクするわけです。佐道 いかにそうなりそうなシステムですね。

海原 これを見ていただければ、いかに難しかったかということがわかると思います。拡大して見ればよくわかるんですが。

河野 一般幕僚を分けたことによって、どういふ点が良かったんですか。いいことがあったんですか。

海原 これは、いい面と悪い面とがあるんですけどね。大まかな方針を決めるのは一般幕僚、その下で専門的な具体的なことを決めていくのが特別幕僚ということになるかもしれません。しかし物によって違いますから、そう簡単に言えないですね。これが本当に私は困りました。まず最初わからない。日本人に馴染まない。

日本人に馴染まないという点で申しますと、これはわかり易いかもしれませんが、例えば技術研究本部という機関がありますね。そこに本部長がいる。次長が二人いますよね。そうすると日本ではどうしますか。必ず一人の次長が何を担当する、もう一人が何を担当すると書きますよ。その考え方でアメリカに来るんですね。ちょうど私がワシ

ントンにいる時に、その人が来たんですが、技術研究本部の上の人です。向こうの同じような組織の人と会った時に、向こうも長の下に次長が二人いるわけです。真つ先に質問するのは、どういうふうにこの次長は仕事を分け合っているか。どう決まっているかと聞くんですよ。聞かれたアメリカ人はびっくりするんです。「そんなのはわからん」と。それは本部長がいて次長が二人いる。この三人でもって運営するんだから、誰が来るかによって全部違うだろう。どういう人が来るか。だから、その三人の関係によって決まると、こう言うんですよ。これも一理ありますね。お前たちが言うように、二人の次長がいて、一人は何、一人は何、なんて決めることが不自然である。問題は、この三人でもって機関を運営する。人間というものは、全部持っている能力・性質が違うから、どう組み合わせることが一番いいかということを決めるのが本部長だと、こう言うんですね。そういう説明をアメリカがすると、日本側はわからんわけです。日本側は二人の次長を置いたら、一人は何、一人は何、と決めないことには気が済まないんですね。

河野 アメリカ式で言うと、もしその人事が変わった時には継続性とか、そういうことはどうなりますか。

海原 どんな組織でもプラス・マイナスがあるわけですね。だからどのプラスを取り、どのマイナスを我慢するかということを決まるわけですね。また具体的に言いますと、例えば、部隊で師団長というのがありますね。アメリカは初めから副師団長を置くんです。それは師団長が戦死した時は、その人がすぐ師団長になる。日本では副師団長というのは考えないです。師団長の下には参謀長がいる。それから参謀がいる。師団長が戦死したら、参謀長が代行するんです。そういうこ

とですね。それから参謀がたくさんおった場合には、任命の時期によって先任者が担当する。それが日本式組織原理なんです。違うんですよ。それぞれにプラスとマイナスがあると思う。ですから、組織表をご説明するのは非常に難しいんですが、変わっていることはおわかりだと思えます。私は一般幕僚、特別幕僚の制度を聞いて、それはなかなか面白い。しかし、これは日本人には馴染まない、と思ったですよ。とても日本では間接的に指示を受けるとか、間接的な使い方をするということは馴染まない。だから変わるだろうと思ったら、これは変わりましたね。今は部長の下に課長が付いている。

佐道 保安庁の時代が変わったんですか。

海原 保安庁の時にこうなっただけですね。その前は警察予備隊と海上警備隊ですからね。

伊藤 一応別の組織ですよ。

佐道 くっついて、この組織になったわけですよ。それで、保安庁というのは約二年続きますよ。その二年間の間に、これじゃあまずいということになって変わるわけですか。

海原 防衛庁になった時じゃないですかね。「陸」が変わったのは。

佐道 保安庁時代はこれでいくわけですね。

伊藤 こういう形だと、部長だと何となく宙吊りになったような感じですね。

海原 そうですね。何となしに何をしていいのかわからなかった。部下がいけないような感じですからね。だから、プラスとマイナスがあるんですが、伊藤先生でもおかしいと思われるでしょう。果して、うまくいくか。やっぱり課長は部長の下に付いているということにならないと。ですからシビリアン・コントロールの話に移るわけですが、こ

れも同じようなことですね。考え方はわかっても、それが馴染むかどうかの問題です。

そこでまた、この前の警察の話に変わりますが、警察法の改正にしても、ここを変えたいと言っても、すぐには向こうはわからないですよ。何故だと聞く。何でもMayです。それで私のように「When in Rome do as the Romans do.」と言つと、怒るわけです（笑い）。だから、後から見えた方が、活字だけではとてもおわかりにならないようなことがありましたね、人間関係では。この組織図を見ても。これを私が持つて来たのは、これをご覧になれば一目瞭然で、いかに物の考え方が違うかということですね。

伊藤 この「保安庁組織表の」点線で囲んだ部分が、軍人さんの部分なんですか。

海原 そうです。第一幕僚監部、第二幕僚監部とありますね。これは主として「制服」ですね。

伊藤 主として、ですか。

海原 もちろん文官中にもいますから。

伊藤 その点線から上の部分、これは完全に文官ですか。

海原 これは内局ですね。そこがシビリアン・コントロールになってくるのは、要するに「制服」は課長にはしないという規定があるでしょう。それが保安庁法の問題になるわけです。

伊藤 明記してあるわけですか。

海原 書いてあります。これは差し上げなかつたですか。保安庁法の第十六条ですね、ここは「長官官房および各局の職員」という欄ですが、この第六号に、「長官、次長、官房長、局長および課長は、三等保安士以上の保安官（以下、幹部保安官と言う）または三等警備士以

上の警備官（以下、幹部警備官と言う）の経歴のない者のうちから任用するものとする」と書いてある。

要するに「制服」は課長にはしないよと決めているわけです。これが大問題なんです。これがシビリアン・コントロールの原則だというふうに、この『保安庁法の解説』には書いてあるんですね。「本条中、特色のある規定は、第六項である。第六項は長官、次長、官房長、局長、および課長の任用資格に対する特別な制限を設けたもので、これらの官職には三等保安士以上の保安官、または三等警備士以上の警備官の経歴を有する者は、任用され得ないこととなっている」。これでですね。三等保安士というのは昔は少佐です。この解説で、「本条で特にこのような規定を設けた所以は、第十条の規定と共に、ひとえにこの法律の立法趣旨に淵源するものである」。難しいですね。「立法主旨に淵源するものであり、保安庁の如く、強大な実力部隊から成立している行政機関の管理、運営について、（この後が難しい言葉ですが）近代民主主義の原則を貫いて、政治の支配の原則を確立しようとする趣旨に基づくものに他ならない」。これが保安庁の解釈ですよ。この当時の人々が書いているんですね。

伊藤 つまり、それがシビリアン・コントロールの意味だということですね。

海原 そういうことです。そこで、「文官優位」という言葉になるわけです。あるいは「文官支配」。私は、こんな解釈は言いませんよ。

しかし、これは当初の人が書いたものですかね。

伊藤 それはもちろん、今日まで生きていますからね。

海原 そこでまた話があるわけです。防衛庁になる時に庁議の席上で、林敬三第一幕僚長が、防衛庁の法律案に、この規定は絶対に入れては

いけないということを主張するわけです。私が林敬三さんに質問したんです。「林幕僚長は、この条文というものを変えろと言うのか。制服自衛官を任命しろというのか」と質問したら、「そうではない。実態はこれでいいんだ。ただ、こういう条文があるのはいけない。『制服』にとつては、これは差別である。目障りである」と言つて、彼が例として出したのは、昔、中国の上海の公園にあつた制札のことで

「犬と支那人は入るべからず」。それと同じであると言つてですね。

これは「制服」を差別するものである。だから、これは絶対削つて欲しいと言つて。それで落ちたんです。防衛庁法には、これはありません。

伊藤 なくなつたんですか。

海原 はい。

伊藤 でも、実態は変わらないということですか。

海原 そうなんです。そこなんです、問題は。私がみんなの前で「幕僚長、それじゃあ『制服』を任命しろと言つてですか」と聞いた。「いや、実態は任命しない方がいい」「それなら置いておいていいじゃないですか」「いや、そういうふうの規定していることが目障りだ」と言つてですね。

伊藤 結局、不文律になつていくということですか。

海原 そうでしょうね。その後の話もこの間ちよつとしたかと思いますが、国会答弁でこの問題が出ることを予想しました。防衛庁法にはないわけですから。それについての国会答弁が用意された。こういう禁止規定があることがマイナスだ。だから、今度は置かないことにした。中の宥和の関係だ。しかし、実態は変わらない。任命しない。というふうに、一応、国会答弁ができた。官房長が書いて、私にいいかと言うから、結構ですと言つた。ところが、木村篤太郎長官は国会の

答弁で、「適材適所でいく」と言つちやつたんです。だから、どつちがいいか知りませんね。それで例えば、後から来た奈良県選出の政務次官が、「だいたい内局の武器課長、これは文官がやつている。おかしい」と言つてですね。私は前田（正男）さんに、「前田さん、じゃあ武器課長はどこから連れて来るんですか。陸や空や海、全部武器は違いますよ。それから一つの武器に精通しておつても、他のことはわからない。困るじゃないですか」と言つたら、「うん」と黙つてしまつた。時々、そういう問題が起こつたんですね。

伊藤 でも、武器課長として全体がわかるような人なんて、現実問題としては、いないわけでしょう。

海原 いないでしょう。だから昔の海軍でも、大砲屋と魚雷屋とかがあつたようなものですよ。

伊藤 では、文官では全部わかる人がいるかと言つたら。

海原 だから、何をやるかになるわけです。だから内局の武器課長になる者が何をやるか、何をやらすか、ということによつて決まるでしょうね。あるいは内局に、そんな武器課長なんて必要かという問題もありますね。しかし、これは伊藤先生に伺うんですが、現実の人間との関係が出てきますからね。簡単に規則では書けませんね。

伊藤 何でもマニュアルで済めば、それはこの世は何事もないわけですが、そうはいかないということだと思います。

海原 そういう経緯があるんですよ。だから幕僚監部の編制組織それ自体についても、いろいろ問題がありましたからね。これを後からご理解いただくような説明をするというのは、ちよつと難しいですね。佐道 保安庁法をお書きになつた中心の方は、どなたですか。

海原 さあ、それは知りません。死んだ麻生茂君（法規課長）じゃな

いかと思えますがね。今の人事院の内海君なんか関係していたかも知れませんがね。これだけの人が書いていますからね。加藤陽三さんが全部を監督したんでしょうが、犬丸、高瀬、渡邊、岡田、宮崎、小林、全部私は知っています、この中で誰かがまとめたということではないと思いますね。

私自身は、この『保安庁法解説』というのは、いろいろと問題があるなという気がしますね。しかし、これが言わば正式に近いものとして出ていますから、他にありませんから。だから昔のことになりますと、やはり後藤田君、内海君だけでは駄目で、死んだ麻生君、これは法規課長でしたが、非常に詳しいですから。加藤さんと麻生君とでやったんじゃないですかね。

佐道 お二人とも鬼籍に入られていますね。

海原 そういうことですね。解説を読んでみても、よくわからないですよ（笑い）。今の読み上げた文章、おかしいでしょう。立法の趣旨がどうだとか、使っている言葉自体が。私が仮にこれをやったら、こんなのを言っているのかわからんと言って、すぐ消しますね。解説だから、もつとわかるように書けと。敢えて批評するならば、一種の思い込みがあつたんでしょね。とにかく「背広」でないといけない。何となしに、そういう空気があるわけですよ。

伊藤 この防衛局計画官室というのは何ですか。

海原 それは後で計画官の部屋にあつたんです。

伊藤 それを借りてこられたということでしょう。

海原 そういうことです。計画官というのが、長期計画をやるわけです。私が「赤城構想」の長期計画を変えました。時の計画官は村上信二郎君という、今の村上誠一郎代議士（愛媛二区）の親父さんです。

伊藤 これは誰かの判子を捺してありますけれどね。

海原 ええ、それは昔の本で処分する時にです。

伊藤 処分したんですか。

海原 昔の本ですからね。それを私はもらってきたわけです。こういうのは古本屋にもないんですよ。

伊藤 ないですね。

海原 お読みになるなら置いて行きますから。しかし、今読んでもなかなか難しいですよ。思い込みがありますからね。思い込みが困っちゃうんですよ。みんながそう思っていたかどうかの問題ですね。

伊藤 保安庁に関わる保安庁配下の学校も、例えば保安大学校は保安庁長官に直結しているわけですか。

海原 付属機関ですからね。

伊藤 下の方に、学校、補給廠、病院云々とありますが、この学校は？

海原 いろいろな学校がありますからね。武器学校とか何とか。

伊藤 それは部隊の方になるわけですか。

海原 そうなんです。

伊藤 そうすると、保安大学校だけ特別なんですね。

海原 そうなんです。これは最初にできた時に吉田さんが、「英国型紳士を作る」ということですね。そして「同じ釜の飯を食う」ことで一体化を考えたのです。

伊藤 これは今の防大の基ですか。

海原 そうです。

伊藤 そうすると幹部学校は？

海原 これは陸大みたいなものです。

伊藤 これは、この時にはないわけですか。

海原 まだないですね。まだ幹部学校に入る人がいませんから。保安
大学校は楨（智雄）さんが最初校長になりましたけれど、これは吉田
さんの推薦で、英国型の紳士を作るんだということをやられたわけ
ですが、だんだん変わってきましたね。だから保安大学校の校長をどう
するかということも問題になるわけです。私は、二、三の人に、もう
いい加減に「制服」の先輩を据えたらどうだと言ったんですけれどね。
最初はそういうことで、いろいろな人を連れて来たけれども、と言っ
たんですけれどね。要するに自衛官の教育をやるわけですからね。自
分らの先輩はこういう人だということを示すことが必要じゃないかと。
何回も言ってみたんですけれどね。それは気持はわかるけれど、とい
うわけで駄目だった。

伊藤 この組織図で見まして、長官官房がございますね。そこに総務
課があつて、保安局に保安課があつて、先ほどのお話ですと、保安課
はかなり中心的な課ですよ。それと長官官房の総務課というのは？

海原 これは簡単に言えば雑用ですね。

伊藤 ああ、そうですか。

海原 雑用というか、国会関係とか、そういうことをやるわけです。
だから、部隊の関係は全部保安課が中心になるわけです。

伊藤 そこはいろいろ保安庁関係の法案の立案とか、そういうことも
そこでやる？

海原 法案の立案はそうじゃないです。長官官房の法規課があります
から。その法規課長が私と同期の麻生君です。これは非常に有名な、
いい男ですけれどね。これが法規については中心だったわけです。

伊藤 この時は、まだ防衛計画といったようなものはないわけですか。

海原 ないですね。

伊藤 でも、年度計画みたいなものは何かあつたんじゃないですか。
海原 それもまだありません。その話になると、また長くなるんでき
がね。まだそんな段階じゃないですよ。部隊の方から言つても、幕僚
監部でも、まだ十分できていない。

伊藤 ですが、一応、年度整備計画みたいな形のもの？

海原 それは私が行つてからの問題です。

伊藤 保安課長になつてですか。

海原 はい。

伊藤 それをやらなかつたら、今年はどういう装備を、どの程度にや
るかということ？

海原 それはアメリカからもらった中古兵器を、いかにマスターする
かということと精一杯です。中古兵器と言つても、われわれにとつて
は新しいですよ。だからアメリカの中古兵器を使いこなす。ああ、
こんなものかということを知る、慣熟の時期ですな。それが私が行く
までの間です。

任務至上主義の弊害

佐道 その一方で、旧軍人さんを基に制度調査委員会みたいなもので、
いろいろ膨大な報告書を書かれていますよ。その窓口は官房の方で
すか。

海原 いや、その制度調査委員会は私が行つた時にできるわけですが、

それは政治的には旧軍人対策もあつたと思うんです。それで内海君が調査課長ですね。そこで陸・海・空の旧軍人を集めて、制度調査委員会というものを作るわけです。委員会は両幕僚長と、次官の三人ですよ。たつた三人の委員会。その委員会事務局に旧軍の人が七、八人おつたですか。そこで制度調査委員会ということで勉強して、「制度調査委員会報告」ができるわけです。それがみなさんの言う、あの膨大な報告書になるわけです。これは何も、保安庁、防衛庁の計画じゃないんです。単なる制度調査委員会での一つの調査報告なんです。そこまでは調査課長の段階です。

私が保安課長になりました、そこで報告ができたから、これから先は具体的にどうやって部隊をつくるかということなので、私の担当になるわけです。それで私は制度調査委員会が作った第一回の報告書を見て、こんなものほとんどない夢物語だと。駄目だとは言わないですよ。これは置いておいて、「現状から出発して、例えば三年後、五年後にはどういふものができるかということ、計画を作ろう」ということを提議して、それでよろしいとつたんです。だから簡単に言えば、制度調査委員会で作つたものは旧軍人さん方の願望ですね。何の参考にもなりません。ただし、一般に出たところではそれが第一次案となっておりますが、全然違うんですよ。私は現状から行こうと言つたんです。こんなとんでもないヒマラヤの高い所へ一気に行くようなことを言うけれど、そんなのは駄目だと。今、われわれはここにおるのだから、今の現実の陸・海から積み上げよう、ということをやつたのが防衛力整備計画です。

ところが新聞記者諸君が書いたものでは、それが制度調査委員会なるものの第一次計画になつていてるんですよ。違つと、ずいぶん私は言

つたんですけれどね。そういうことで、何の参考にもなりません。

佐道 一方で、参考にはならなかつたとはいへ、旧軍人さんたちからしたら、かつての夢を求めてかも知りませんが、一応作つたわけですよ。それが反故にされた。メンツを潰されたという形になつて、当然、巻き返しが来る。

海原 だから、「あの野郎！」となるんですね（笑い）。「悪いのは海原だ」と。それは敢えて承知の上でやつたんです。それは今まで申し上げたように、私は旧軍の体験がありますからね。絶対に旧軍の馬鹿なことを繰り返してはいけないと思うものですから。だから、やるわけですよ。ただし、時々ご機嫌をとつて一緒に酒も飲みますよ。その時に私が勝つんです。何で勝ちますか？ クイズです。

伊藤 やはりそれは現実性の問題でしょう。

海原 何を現実にするんですか。

伊藤 この前のお話から当然、補給の問題でしょう。

海原 いや、そこまでいかないんですよ。全然別のことで勝つんですよ。

河野 予算ですか。

海原 違います。軍歌です。酒を飲むと軍歌が出るでしょう。絶対に私は負けないんですよ（笑い）。例えば、「ここは御国を何百里……」を、最後まで兵隊は歌う。「何ですか、みなさん方は。陸軍士官学校出身は。三番までしか歌えないじゃないですか」と言う（笑い）。そういうことで、常に私が勝つんです。

『橋大隊長』という歌があるでしょう。あれは第一節と第二節で調子が変わるんですよ。ご存知ですか。

伊藤 いや、それはわかりません。

海原 違つたんですよ。「♪歌う」全然調子が変わつちゃうんですよ。

それも知らない。私は最後まで歌うんですからね。だから絶対に「歌比べ」で勝つ。「よくまあ、それで正式な軍人だったな」と言うんです(笑い)。「予備役、しかも主計将校がこれだけちゃんと軍歌を歌っている。満州で鍛えたんだ。何ですか、あなた方は」と言うとき黙っちゃう。それが、私が絶対彼らに勝つ理由ですね。

その人たちは今、伊藤先生がおっしゃったように、細かいことを知らないんです。この前お話しした機関銃の撃ち方の問題、特色とか、いろいろな言葉だけは知っているんですよ。じゃあ、それはどうですかと聞くとわからない。例えば魚雷にしても、今はホーミング魚雷と言って、音を追いかける魚雷ができています。そうですか、その魚雷はどこでも使えますかと聞く。浅い所では使えないんです。水深百メートル以下の所では、音を出しても、それが下の岩とかに反響するでしょう。だから駄目なんです。深い所でないと思えない。ところが南シナ海とか日本のそばは、大体みな浅いでしょう。日本海だって浅いところでは駄目です。太平洋も。ところがみんな、ホーミング魚雷がありますから、目標を追尾しますと言うんですね。ちよつと待て、南シナ海あの辺のところの深度はどれくらいだ、と聞いても知らないんですよ。こっちは、そういうことはちゃんと調べた上で挑戦するわけですからね(笑い)。

そんなことで、私は「あの野郎!」と思われながらも、「仕事」が「務まったんです。それでついでにおもしろい話をしますと、西浦進さんとも「歌比べ」をしました、彼も負けましたすけれどね。

伊藤 西浦さんですか。

海原 ええ。そうしたら、半年ぐらいしてまた集まった。そうして、彼と最後までやったんですよ(笑い)。「西浦さん、あなたはどこで覚

えたんだ」と聞いたら、実はヨーロッパに旅行した。あの飛行機の往復で軍歌集を持って行って覚えた。あの人を私は好きでした。しかし最初は「参りました。軍歌では海原課長に完全に負けました」と言った。こういうことで、私も結構みなさんとは付き合っているんですよ。「そんな軍歌もろくすつば歌えないで、よくまあ軍隊の指揮ができましたね」と言った。

それから、常に言うことは、「私が間違っていたら言うてください。直しますから」と言うんですよ。そうしたら「うん」と言うんですね。「私は決して自分の考え方を押しつけようとは思っていない。しかし、私はこう考える。これにはこういう問題がある。どうですか」と言うと、相手が黙っちゃうんですね。先ほどの鉄道連隊みたいなものですよ。鉄道を動かすのは簡単ですよ。国鉄から機関車を借りてやっているんですから。昔、経験がある。しかし、鉄道を走らせるとなったら、問題は信号でしょう。さあ、どうしますと。そういう基本的なところを、どうして彼らは考えないか、それが私にはわからない。どうしてでしょうね、伊藤先生。

伊藤 昔の鉄道連隊はちゃんとやっていたんですよ。信号や何もかも。

海原 それは人が多いからですよ。だって、満鉄が走っている所を走るわけですからね。日本内地は違うんです。全部国鉄がストライキをやっているわけだから。そのストライキをやっている時に走らせると言うんですからね。そうしたら信号が大事でしょう。

伊藤 国鉄の職員がかなり協力しなければ、とてもじゃないけれどできませんよ。

海原 できませんよ。その話で関連して言いますと、最初に私が保安

課長でびっくりしたのは、第一幕僚監部から説明を聞いたら、対象勢力六百万と書いてあるんです。これは何なんだと聞いた。争議参加の労働者の数だと言うんです（笑い）。笑い話ですよ。君、自衛隊は何人おるんだと。六百万人を相手に何ができるんだ。これは、しかし笑えないんですね。

伊藤 保安隊の時の話ですか。

海原 そうですよ。任務至上主義になってしまってますね。だから昔の帝国陸海軍のあの計画も、思い詰めるとあなるんですね。全部、条件を積み重ねていく。

伊藤 保安庁として出発した段階では、まだ完全に武器は貸与されて、そしてちゃんとアメリカ軍の指導があつて、それを習熟するという形なんですか。

海原 そうですね。

伊藤 それはアメリカ軍顧問団みたいな感じで存在するんですか。

海原 そうですね。適当に向こうの方で、それぞれの専門家がいますしね。それから、まず入ってきたこつちの連中に能力があるんですよ。『再軍備の軌跡』の中に坂本君の体験がありますね。彼は江田島へ行った時に、まず教官が「旧軍の経験のある者は手を上げろ」と言ったら、全員手を上げた。それから「小隊長以上をやった者は手を上げろ」と。びっくりしちゃうんですね。そういうことで、みんな経験者なんですよ。そういう連中がいろいろとやったということですよ。そういうことは米軍は全然知らないんです。

坂本君が書いていますが、彼がびっくりしたのは、鉄砲を撃つでしょう。向こうはバラ撒くんですからね。葉莢はそのままですよ。日本はいちいち葉莢は後で勘定しましてね、一つ足りないというと、大変

でした。そういうことをびっくりして書いていますからね。ですから技術の程度は、最初はそう困らなかつたと思うんですね。ただし、吉田さんのところへ辰巳（栄一）さんなんか報告しているのは、「烏合の衆」であるということですね。だから旧軍人が入っていないといけない。そういう点もあつたでしょう。それからアメリカさんの勝手な指導でやっている。やはり昔の軍人が入っていないかんといいことをずいぶん言つたようですね。それで逐次入っていく、ということのようです。

伊藤 保安隊の頃はどうかつたんですか。やはりアメリカの軍人が、ただ武器の使用とかだけでなく、戦略戦術の点も。

海原 いや、まだそこまでいきませんね。というのは、坂本君は最初、司令官になつたのが、次に師団長になって、連隊長になって、中隊長になって、小隊長になってと下がつたんですからね。

伊藤 それはどういう意味ですか。

海原 逐次下がっていくんです。初めは中間司令部司令官（中将職）でやつておつたら、次に師団長、そして本式の師団長が来たので、連隊長代理になつたと。そして、また下がる。中将から一尉まで約三カ月で下がつたとあります。

伊藤 保安課長として、実際の部隊をかなり見ておられるわけですか。

海原 私が保安課長として最初になつた時のことを言いますと、発令が八月です。そうすると、官庁では予算編成時期でしょう。日銀政策委員になつた海堀洋平君という、これは非常に優秀な人ですが、昭和十八年の大蔵省採用で海軍でした。これがしきりに説明しているのを聞いて、立派な人だと思つたんです。後に私の部下にもなるんですが……。それはともかく、その時に保安課長として最初にやつたことは、

保安隊の編制ですね。連隊にこれだけの車輛がある。何故これだけの車輛がいるかということ、大蔵省の主計官に説明するわけなんです。それが私と同期の村上孝太郎君です。有名な男です。私は来たばかりなんだ。来たばかりで編制表も初めて見た。こんなことは当然、今で言うと陸幕ですが、第一幕僚監部の担当者が大蔵省の主計官に説明すれば、十分納得してもらえないかと思つたら、全員落第。「制服」も、内局も駄目なんです。残つているのは保安課長だけだと言ふんですよ。俺は来たばかりで何もわからんと言ふのに（笑い）。来たばかりで俺は何もわからんと言つたら、ちゃんと規定には装備の基本に関する業務と書いてあるんだ（笑い）。しょうがない。みんな落第しちゃつたんですよ、村上孝太郎君に。

私は考えまして、たまたま昔の師団の編制表を持つていた。それは馬の師団でしたからね、駄馬師団。その馬をジープに変えてみたんです。それで計算してみた。そうしたら偶然ですが、大体合うんですよ。馬が何頭いて、ジープなら何台でいい、人間ならどうすると。そういうことで大体合うんです。これでいくより仕方がない。破れかぶれですからね。来たばかりだし、向こうもそれを知っているわけですから。行って、村上君に、みんな今まで落第したようだ。俺は君も知つているように来たばかりだと。しかし、昔の帝国陸軍の師団の編制表を見ると、こうなつていると。これを全部ジープ、トラックに置き換えてみた。どれだけのものを積むかということ計算してみた。大体合つた。こういうことから、保安隊の必要車輛の編制の数は正しいんじゃないかと。もうそれ以外のことは言えない、と言つた。そうしたら、村上君も、要するに自分の頭で考えたものを持つて来いということなんです。それまでの説明を聞いてみると、米軍から

もらった編制表で、そうなつておりましたとか何とかということなんです。誰も自分で計算してみないんですね。私だけなんです。私は自分の頭で計算した。そうしたら彼はそれでいいと。それから、どこに補給点、どこに補給所があるか。補給点からの距離を一応設定した方がいいというようなことも教えてくれました。それでパスしたんです。それが私が保安課長になつてやつた最初の仕事です。

しばらくしたら、その点に関連しまして、私は演習をやつたんですよ。一個師団の、箱根までの輸送予想。現実に全部の連隊の車を出して、村上君にも見に来させた。そういうことをやつた。要するに私が行くまでは、「米軍からもらつた編制表にこうなつています」の一点張りなんです。それは編制はそうだとしても、実際に何をやるんだということが欲しかつたんですよ。そういうことがありました。ですから、私が保安課長として最初にやつたことは、編制表の車輛数の説明です。

伊藤 しかし、それは警察予備隊の頃からやつていたんだと思ひますが、そういう積み上げというのはなかつたわけですかね。

海原 ないんですね、残念ながら。それは他の例で言いますと、まだ保安隊の頃ですから、国内警備だけです。そうすると「警備実施計画」というのを作ると言ふんですよ。そうしましたら、これは本にも書きましたが、私が林敬三さんに言つた。まだその時は林さんは第一幕僚長でした。「そういう計画を作ると言つても、全部まだ基礎的な条件ができただけなんだ。だから、そういう計画は作らない方がいいんじゃないか」ということを言つたんです。そうしたら「海原君、それはそうだが、頭の体操になる。いつべんこういうことを勉強せんといかん。だからやらせよう」と言ふんですよ。「それは結構です」と

言いました。そして、その計画が出てきた。幕僚長まで決裁しているんですよ。「国内警備実施計画」というもので、このぐらゐの厚みがありましたかな。それを私が家に持って帰って読んで、問題点に全部付箋紙を貼っていったんです。百二十三枚あった。それで二日後に担当の第三部の元参謀ですが、それに「この実施計画には、幕僚長以下の判子が二十〜三十ある。僕が読んだら、これは全部問題がある。君、改めて調べてくれ」と言った。

伊藤 いや〜な課長ですね（笑い）。

海原 その一例を言いますと、特別幕僚の通信課長等がきちんと判子を捺している。立派な花押が書いてある。どういふことが書いてあるか。「現在の通信手の数は、平時の通信業務を処理するのにもやつとである。これが有事となつたら通信量は十倍になる。しかし、各員の努力によつて全部捌く」と書いてあるんです。これはおかしいんじゃないかということですよ（笑い）。

それから輸送課長の担当のところでは、北海道で事が起こると、列車が出るわけです。三十分ごとに東京から貨車が出て行くんですよ。そう書いてある。これは一体、青森はどうなっているんだ。途中の状況はどうなっているんだ。そういうことが全然書いていない。一事が万事ですね。そういうことに全部、付箋を付けていったんです。そして、第三部の元参謀に渡したら、「申し訳ありません」と言う。

これは信用されませんが、事実そうなんです。そういうことで計画を作るものですから、先ほど言いました「赤城構想」は、私が問題点を指摘すると全部ガラガラガラとなつちやいますね。「中曽根構想」もそうなんです。それが旧帝国陸海軍の作戦計画ですね。前にご説明しましたが、湿地帯の突破、そしてソ連の障地に取り付く。どう

やったらそれができるかを考えない、ということですね。

伊藤 要するに作文ということですね。

海原 そうなんです。それが事実なものですからね。そういうことばかりやっておつたら、いい話が出るはずがないですよ。

伊藤 課長として積極的におやりになつたことは何ですか。

海原 積極的をやつたということは、何でしょう。

伊藤 今のはチェックする話ばかりですよ。

海原 もちろんそうですね。積極的にやつたことは、あまりないですね。その頃は、まだチェックするしかないんですよ。積極的にやつたということになりますと、防衛局長になつてからですね。あるいは官房長になつてから。

官房長になつてからの話はわかりやすいと思いますが、まず私は映画を作つたんですよ。活動大写真『日米安保体制』というものです。これは後で私が頼んでなつてもらつたんですが、伊藤圭一君という広報課長が中心になりまして、アメリカにも話をして、日米安保体制がどういふふうにお互い動いているかということの説明したわけです。それは一般の映画館でも上映してもらつた。伊藤君に交渉してもらつて、松竹系で『科学の脅威』という名前に変えまして、ただしこちらの要件は、子供向けの家家庭映画と併映することです。一年間やりました。これは良かったと思えますね。その時、国会でもいっぺん質問が出ましたが、朝日新聞では「経費の無駄遣い」という報道をしていました。しかし、それを弁護してくれる人もいましたしね。

それから『中立国の国防』とかいふ映画も作りましたしね。あちこちで上映してもらうわけです。フィルムを地方連絡部に置きましてね。そういう広報関係をやりました。

伊藤 それは自衛隊になってからですか。

海原 もちろんそうです。

伊藤 自衛隊としてやったわけですね。

海原 そうですね。ですから保安庁の時代はそこまではいきませんね。何か具体的にやったことを言えと言われますと、婦人自衛官の採用なんかもやりましたしね。全部物事の始めは反対が多いんです。音楽祭あれもそうです。いま大変な人気がありますけれど。

伊藤 すごくですね。

海原 あんなものやって何だ、ということになるわけですから。それは官房長の時ですよ。ですから、保安課長として何をやったかと聞かれますと、さあ、あまりこれというのはありませんな。チェックするばかりで（笑い）。

伊藤 わかりました。今日は、もうそろそろ時間ですね。

佐道 かなり過ぎましたね。

伊藤 こちらが予想していたこととだいぶ違いました。ちよつと当てが外れたという感じで（笑い）。もう少し、「ちゃんちゃんばらばら」があったのかなと思っただんですが。準備どおりうまく進みませんで、誠に申し訳ございません。

海原 とんでもないです。その「ちゃんちゃんばらばら」もありませんか。

伊藤 次回は保安課長時代からまた補充していただくということで、よろしく願っています。

海原 くどくなりますが、学生のことをだいたい聞いておられましたね。あの頃は、警察はジーツとしていんです。先ほどもちよつと言いましたが、学園は正義の城であると。お巡りは入ってはいけません。

伊藤 わかりました。それは後で本当に大学紛争になってから、先生たちがどういふふうになったか、警察に頭を下げたとか（笑い）。

海原 そういうことになるまで動くな、というのが基本原則ですから。それでいいんです。昔も早稲田の「学生狩り」というのがありましたね。警察署長が集めて訓示したりしてね。昔の警察署長というのは、拘留するのは半月ぐらい平気なんですよ。たらい回しにするんです。だから、あいつは悪いとなったら、何かの理由をつけて引張って来るんです。それで留置所にぶち込む。それで正座をさせて、反省させる、というようなことも昔はあった。そういう警察を連想されたら絶対に駄目です（笑い）。どうもすいません。ご期待に添えませんが。

伊藤 いえ、非常にいろいろなことがよくわかりました。やはり勉強不足は駄目です。

佐道 仕切り直してもう一度……。

海原 それは当時の一般的な情勢の下において、警察は物を考えますからね。

伊藤 いや、われわれの方で「警備」ということがよくわかっていなかったんですね。

海原 当時は単なる警備と言っても、いっぱいあります。警備警察なんて言うとか、何か情報とか、スパイですね。電信柱に機械を取り付けて盗聴するとかね。もっぱらそっちへ行くんですね。これはテレビが悪いと思いますよ。そういうことは、したくてもできなかった。

佐道 警備ときて、騒乱が起きて、共産党の活動があるから、これはもう一連のドラマがあるんじゃないかと、完璧に思い込んでいましたね。

海原 あなたでもそう思うなら、ましてや一般の人がどう思われるか、

推して知るべしですね。しかし私も内務省に入る時には、私の親友に平井君というのがおりますが、これは後で建設省に行きますが、お互いに警察だけは行くまいと言っていたんです（笑い）。

伊藤 やっぱ差別していたんですね（笑い）。

海原 あんなサーベルを吊るのは嫌だとかね。それから犯人を捕まえて、どうだこうだと言うのは、そういうのはお互いに向かないと。だから警察だけは行くまいと言っていたんです。幸い、内務省入ったら、私は官房だし、平井は地方局ですしね。後藤田は土木局ですから、みんな警察に関係なかった。ところが日本が負けて、それから世の中が変わる。しかし、警察に入ってみますと、あの社会における人は、総じてみな純真ですし、真面目にやっていますよ。

伊藤 矢部貞治さんの資料をいただきましたので整理してありますから、国家地方警察何々県本部で、それぞれ『警察友の会』とか機関誌を出しているでしょう。そこに矢部さんが講演されたものが速記になって出ていて、引き続き機関誌を送ってくれているんですね。各地方のそういう警察の雑誌がいっぱい入っている。

海原 勉強はみんなしているんですよ。警察のことを「お巡り、お巡り」と言いますが、お巡りさんも結構、なかなか地方から出て来て、向学心のある人が多いですから、真面目でしたね。

伊藤 それを見ると、教養のこととか、そういう雑誌ですね。

海原 幹部も、もっぱらそういう方面を大いに強調しておったですね。しかしやはり一般的にお巡りと言うと、すぐ、何か自由を拘束するよな感じで。

伊藤 自由を拘束しないお巡りは困るんですがね（笑い）。

海原 それはやはり昔の特高警察との関連があるんですね。それも誇

大に言われているでしょう。必ずしも、そういうふうに行われていることばかりではないんですけれどね。しかし、ああ書かれますと、みなそう思ってしまう。

伊藤 一つの紋切り型みたいなイメージができると、なかなか壊れないですからね。

海原 すみません、今日はご期待に添えなくて。学生との関係は、できるだけ当らず触らずですね。敬遠しておったと言えますかね。この頃の社会情勢がありますから。学生さんの方が威張っておったでしょう。どうでしょう。「佐道氏に」あなたはお幾つだったですか。

佐道 私はまだまだ生まれていませんから。伊藤先生がちょうど学生の頃ですね。

海原 じゃあ、よく知っていらつしやる。

佐道 取り締まられる側ですから。

海原 私どもも、警察官というと、あまりいい感じを持ちませんでしたがからね。伊藤先生はその頃ご存知だから、伊藤先生からお話を聞いたらどうかと（笑い）。

伊藤 聞かれるとまずいこといっぱいありますから（笑い）。今日は、ありがとうございます。

佐道 また次回よろしくお願ひします。

〈以上〉

海原 治 オーラルヒストリー

第7回

開催日：1999年4月9日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

飯尾 潤(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第7回 質問項目

前回は、国家地方警察東京警察管区本部警備部長から、保安庁保安局保安課長になられたときのお話を伺いました。今回はその続きで、特に保安庁保安課長時代のお話を中心に伺いたいと思います。それについてお話をいただくなかで、関連した事項についてご質問させていただきたいと思います。

- ① 前回のお話の関係で、補足すべき部分があればお願いいたします。
- ② 保安庁設置後、駐屯地の位置および指揮系統を定める訓令や事務調整に関する訓令など、保安庁の組織や運営に関する決まりが早速制定されています。その当時のことで、ご記憶のことがあればお願いします。
- ③ 昭和27年(1952年)10月、保安庁にはそれまでの吉田首相の兼任ではなく、木村長官が専任で就任されます。木村長官はどのような方でしたか。何か印象に残ることはありますか。また、林第一幕僚長、山崎第二幕僚長(海上警備隊総監)についてはどのような印象をお持ちですか。
- ④ 誕生の経緯が異なる「陸」と「海」の組織が合体したわけですが、両組織の調和という点で、保安庁時代にご苦労されたのはどういうことですか。何かエピソードなどあればお聞かせ下さい。
- ⑤ 当時、ソ連機による領空侵犯がかなり問題になっていたと思います。アメリカとの協力など、保安庁側はどのように活動されたのでしょうか。また、この時期は、米艦の貸与、MSA 日米交換公文発表など、アメリカとの関係も具体的に進んでいます。海原先生は、当時どのような活動をされていたのでしょうか。
- ⑥ ニクソン副大統領が来日され、憲法について発言されたり、練馬部隊視察などをされていますが、何かご印象はありますか。
- ⑦ 昭和28年9月には、吉田・重光会談などで、軍備増強、自衛隊設置などの方向で話が進みますが、そういう状況をどのように見ておられましたか。また、このころ、日米六者会談で、日本の防衛計画が検討されると『防衛庁十年史』にありますが、それについてご記憶のことがあればお願いします。
- ⑧ 昭和29年6月、防衛庁設置法、自衛隊法、日米相互防衛援助協定にともなう秘密保護法が公布されます。海原先生は、すぐに防衛庁防衛局第一課長に就任されますが、組織作りという面で、それぞれの法案成立にどのように関与されましたか。また、それぞれの内容について、どのような感想をお持ちでしたか。また、防衛庁防衛局第一課長になられて、最初に手をつけられたのはどのようなお仕事ですか。

敬礼を巡る「陸」と「海」の対立

海原 ……この間の北朝鮮の船の関連で、三つばかりの新聞社から電話がかかってきました。「その記者は」若い人に決まっていますから、そこで昔話のついでに「李承晩ラインというのがあつただけだけでも、それを知っていますか」と言ったら、「知らない」と言うんですね。それを言い出すと大変なんです。無理もないんですけれども、私が言いたいのは新聞記者なんですから、ちよつと調べたらいいんですよ。朝日とか読売とか、それぞれ資料室があるわけですから、そこへ行ったらわかるはずだと思うんですね。

伊藤 検索すれば、いろいろデータが出てくるはずですからね。

海原 わかるはずですよ。今はいろいろ文明の利器が発達しているんだから。

伊藤 今日はどうなさいますか。そのお話から始めますか。

海原 いやいや。この前の話で、まず弁解をせんといかんのですよ。だって先生から怒られたでしょう。保安課長で何をやったかということ、ネガティブな話ばかりだったことですね。読んでみたら、ああそうだったなと思ひましてね。

ネガティブな話になった。それはまた後で申し上げるわけですが、そもそも何から始まっていたかというところ、保安課長として何をやったかということ、具体的に聞きたいのに、それを言わないということですね。しかし、保安課長は結構何年もやっていますから、いろいろな

ことがあるわけですよ。積極的に何をやった、起案したというよりも、それは駄目だ、駄目だと言うことの方が多かったのです。前回いきなり、何をやったかということの具体的な例として、防衛局長や官房長時代の話をしたんですね。「赤城構想」や「中曽根構想」を潰したという話をしました。ただ、それが一番わかりやすいですからね。

実はこの前も、シビリアン・コントロールのことで朝日の社会部の人と三回ばかり会つたんです。シビリアン・コントロールということが何かわからないんですよ。アメリカで言っているシビリアン・コントロールと、日本の人が考えたシビリアン・コントロールとは違うんだと。現に関係者の記述を読んでもみると、何だかわからなかつたど、みんな言っているんですから。だから、私の体験したシビリアン・コントロールはこういうことですよ、と言うんだけど、それが時間かかるんですね。第一、それは文官統制とか文官優位だとか言うでしょう。どうして文官が優位なんですか。全部国家公務員じゃないですか。じゃあ簡単に言えば、背広を着ていれば偉くて、制服を着た奴は駄目だど、そういうことですかと言うと、いやそれはそうじゃないと言う。だから、突き詰めると政治優位ということになる。その政治とは何かというと、国会だど。それは明治天皇の軍人に対する勅諭ですね。それにも、ちゃんと軍人は政治に関与してはいけないと書いてある。それを破つたのが旧帝国陸海軍なんです。そういうものだから、あなたはシビリアン・コントロールという抽象的な原則だけを追いかけていると、とんでもないことになる。それがわからないんですね。何かシビリアン・コントロールというのはこういうことだということ、ピシッとみんなが理解して、その通りやつたと思つている。

私はその時も言つたんですけれども、「赤城構想」を壊した。「中

曾根構想」を壊した。この「赤城構想」も「中曾根構想」も全部、「制服」も「背広」も入っていて作ったんです。しかも政治家の大臣が決裁したのです。外部に発表したものです。それを私がご破算にしちゃったんですね。これ、何て言うんでしょうかと聞いたたら、黙っちゃう。

伊藤 それは海原先生が……。

海原 そうなったら困る。シビリアン・コントロールと一口に言うけれど、「赤城構想」を発表させたのは誰かという、「制服」も「背広」も入っているでしょう。「中曾根構想」も同じですよ。だから、そういう基本的な野球のルールを決めるようなものですね。どういふ野球をやるか。七回か九回か、硬式か軟式か、準硬球か。そういう基本的なことが決まらないままに、すぐ本題に入るんですね。今の新聞記者諸君はそうですね。それで人から聞いて、その中で自分がなるほどと思ったら、その部分だけを摘むんですよ。それで自分が理解しないことは削る。削ったことの方に重さがあるんですね。

伊藤 大体そんなものですよ。

海原 だから余計こちらは説明がくどくなる。自分なりの思い込みがありますから。この間も保安課長の時の話を申し上げようと思いがながら、つい頭の中で考えて、「ああ、そうだ」ということで「赤城構想」にいきなり行った。「赤城構想」は、私が防衛局長時代の話ですから、防衛課長時代の何年かが飛んじやっているんです。これはいかなんと思つて、今日改めて申します。

保安課長としてネガティブなことばかりしかやらなかったか、という指摘がありました。それはそうではないんです。今日から以降は、細かいことでもどんどん申し上げます。なまじつか私が取捨選択して、「こんなことは……」と思うといけなわけですね。まず、そ

のお断りとお詫びです。

保安課長は基本をやる、ということを申しましたね。その根拠は保安庁法に書いてあります「保安庁法の一部コピを配る」。これは保安庁法に書いてある規定ですが、この第十二条です。ここに一号から七号まであるでしょう。この一、二、三が保安課長の担当なんです。それから四の必要な情報云々、これは調査課長です。それから五、六、七は教育課長になるんです。簡単に言えば、そういうことなんです。

これを見ていただくと、「一、警備に関する計画の基本及び調整に関すること」でしょう。この調整という話から入っちゃったんですね。「二、保安隊及び警備隊の行動の基本に関すること」、「三、第一幕僚

監部及び第二幕僚監部並びに部隊等の組織、定員、編成、装備及び配置の基本に関すること」ですね。全部「基本」は保安課長を経由することになっている。これは誰が決めたかという、大橋武夫さんなんです。あの人が、こういうような組織では途中できちんといっぺんどこかで整理しないと、大臣が困っちゃうと言ってますね。さすがに彼は経験者だから。そこで、どこかでまとめなければいけない。まとめ、交通整理ですよ。私がよく言いますが、祝田橋の交通調査は、もう前後左右から車が来るでしょう。それを右だ左だとやる。そういう整理をやるのが、この保安課長なんです。それで、何でも「基本」は全部私のところへ来るわけです。だから、この間、先生が言われませんでした。ネガティブなことばかりになっちゃうんですね、大きな事は。

伊藤 自分で発議するのではないのですか。

海原 それもあるんです。しかし、そっちよりもむしろ、やってくる方を抑えて、これじゃあいかんだろうということですね。私の人生観はこの前申し上げましたけれども、「私はこう思う」ということはこ

参考までに申し上げるわけです。「どうですか」と言ってみて、「そうですね」ということになったら、「じゃあ考えてくれ」と言うんです。「私のやり方、考え方が間違っているならそう言ってみて下さい、私は直します」と言っていると、そうは言わないですね。そういう話をしたら、ずいぶんずるいようなことをおっしゃいましたけれどもね(笑)。

所詮そんなですよ。だって「陸」「海」の部隊でしょう、まだ「空」はありませんから。しかもそれが、今日お話しするつもりですけれども、「海」は旧海軍がつくった。「陸」はアメリカさんがつくった。全然違うんです。この前も組織の表でお見せした通りです。それが保安庁で一緒になったわけでしょう。だから、ことごとくに「陸」「海」で反発する。その背後には旧陸軍、旧海軍があるわけです。それをこの前も申し上げようと思いついて、「何か具体的な例があればいいですね」と言いながら、自分がやった防衛局長時代の話と国防会議の事務局長時代の話を申し上げたんです。要するに防衛庁として決めて、外部に発表していた。それを全部ノーと言ったんですよ。これは大変なことなんです。そんな馬鹿なことをよくやっただと自分でも思うんですけれども。他にいませんからね。

それから第一回の時に申し上げましたように、旧帝国陸軍で、いかに当時の軍部の計画が馬鹿馬鹿しいものであったかということ、自分自身が体験しているでしょう。弾は何発だ。それが私の人生観なんです。そしてやってみる、いろいろ話を聞いてみると、幕僚諸君は、元軍人さんは元軍人の意識がある。そうでない人は何もわからない。一般から入って来たわけでしょう。だから、物が言えないんです。そういう中で、すべての基本にすることは保安課長が見なければいけないとなりますから、何度も出てきますが、「あの野郎」と思われる

わけです。私がいろいろ悪口を言われたのは、そこに原因があるんですね。しかし、それは誰かが交通整理をやらないといけないわけです。

伊藤 でも交通整理の結果、何かが出来上がるということになるのでは？

海原 ですから「赤城構想」を潰して長期計画になる。この間、冒頭で、制度調査委員会の話をしましたね。

伊藤 この保安課長の時代にはどうなんでしょうか。計画の基本は？

海原 基本と言いましても、いま申しましたように、ちょうど「海」の方で旧海軍のつくった海上警備隊と、それからアメリカさんがつくった保安隊とが一緒になった時期でしょう。その直後ですよ。だから、その摺り合せが大変なんです。その例を今日、冒頭に申します。ああ、なるほどと思いましたがね。旧陸軍、旧海軍というのは何ともならないですよ。その対立をなくすため、保安大学校というのは一緒にしたわけです。せめて同じ釜の飯を食べればいだろう、というのが甘い考えなんです。

伊藤 甘いんですか。

海原 甘いんです。それは保安大学校(今は防衛大学校)を出した後、この間ちよつと申しましたが、全部幹部候補生学校へ行くんです。幹部候補生学校では、保安大学校を出た者と、一般の大学から来た者とと一緒に教育するわけです。そうすると、「海」はどこへ行くかというところ、江田島でしょう。江田島は旧海軍のメッカみたいなものですね。そこへ行くと、旧海軍の偉い人の写真があったり、遺品があったりして、全部旧海軍式の教育になる。そうしたら、保安大学校で一緒だったということも飛んでしまいますよ。今日、それに関する話もします

けれども、その辺からやはり申し上げなくてはいけないと思いましたが。これはヒストリーですから、あまり細かいことを言ってはいけないかと思っただけでも、細かいことを言わないといけないということで、考え直しました。

そこで保安課長として何をやったかということ、年次は必ずしもいつからいつと言いませんけれども、申し上げておきます。いま申しましたように、あくまで旧陸軍・旧海軍の対立は生きていたということとは言えますね。これは、まだ申しでないかったですか、旧海軍の方々は米海軍と一緒にあって、いろいろ「新海軍計画」をやっていた。「新日本海軍再建案の載っている本のコピーを配る」。こういうことは、私はその時知らないんです。私が保安庁へ行って保安庁課長になりましても、彼らはわれわれの知らないところでやっているわけです。

伊藤 これは保安隊になつてからですか。

海原 そうです。これは年次も書いてありますが。要するに「帝国新海軍計画」というのは、保安庁になる二年ぐらい前からやっているものなんです。野村大将の名前で。そのレターも私は持っていますけれどもね。旧海軍は、まさに新しい海軍をつくろうとしているわけです。そこで、今お渡しした表があるでしょう。こういうものを持った海軍をつくろうということを当時、みんな考えていたんですね。航空母艦四隻ですよ。これはもちろんアメリカからで、括弧して「供与」と書いてあるでしょう。護衛空母四隻二万四千トン、潜水艦八隻八千トン、巡洋艦四隻二万四千トン、こういうものを持つというんですからね、こういう人が、先ほど申しました計画を作っているわけです。だから、とんでもない計画になるわけです。

それともう一つは、たまたま私は見つけましたが、増原さんが自民

党の憲法調査会でしゃべっている言葉の中に、「五年もしたら憲法の改正ができる」と実は思った」というものがある。それが一部の人の考えなんですよ。私は当時、憲法改正なんか絶対にないと思いましたが。自分の間できない。しかし、増原さんはそういうことをちゃんと語っているんです。自民党の憲法調査会で、「五年もすれば憲法は改正になるということを、私は実は思っていた」と言っている。旧帝国海軍の人も、やはりそういう考えがあるんでしょうね。それからアメリカの海軍とやり取りしているでしょう。ですから、しばらくしたら自分の希望するような新海軍ができると思うでしょう。当然、服部卓四郎さんの方にも、そういうことが伝わっていきますね。それが影響して、警察予備隊から保安隊に移る過程では、いろいろな問題があったわけです。新しい国軍ができるんだという考えが出てきます。

その最後のあがきといいますか努力が、国防会議の構成になるわけです。国防会議をつくるということとは防衛庁法に出ているんですね。ところが、それに関しての細かいことは「別に定める」となっているんです。そうなっているのは、その内容が決まらないからなんです。それは、まず改進黨の方から民間人を入れろと言っただけです。要するに、役人ばかりでは駄目だ、民間人、有識者を入れろと。この中には当然旧軍人が入りますね。それから服部卓四郎さん一派は、警察予備隊の後の保安隊はあくまで旧内務官僚のやっていることだ、新国軍は別にできるんだ、と言っていたわけですね。服部さんはウィロビーという米軍の方と接触している。そういうものが周りにいっぱいあったんですね。そういうことは私はいちいち調べる気にもならないし、調べてもしょうがありませんから、問題に仕なかつたんです。

そこで「めくら蛇に怖じず」という言葉がありますが、いろいろな

ことをやったわけです。そこで保安課長として最初に私がぶつかったのは旧海軍の、その思想なんです。それは、「海上交通の安全の確保が新しい海上自衛隊の最大の使命だ」と言うんですね。それで、私、つまり保安課長に、将来の海上自衛隊のあるべき姿を説明するというので、私と関係の部員が行って聞いたんです。将来の構想を大きく表にしてみました。昔の帝国海軍の思想ですよ。それを具体的に言いますと、「A、B、Cの三つの航路を守るのが海上自衛隊の任務である。そのためにはこういう船が要る、こういう組織が要る」と言うんですね。私はびつくりしましたね。「航路A、B、Cとは、どこですか」と聞いたら、A、Bは横浜からサイパンへ行つて、そこからアメリカの方に行くのに北と南に分かれると。Cは台湾の横を通つて、ずっと中東の方に行くという。このA、B、Cの三つの航路の防衛、防護をやるのが海上警備隊の将来の任務だ、と言うんですね。私はまさにびつくり仰天しましたよ。

それで二回目ですか、何回か続けた時に、「この前、あなた方の希望というか願望というか、こうあるべきだということを伺つたけれども、一体それは何年経ったら、そんなことができるんですか。現在ただ今は、これだけしかないじゃないか。いつのことを、あなた方はしゃべっているんですか」と言つたんですね。そうしたら黙つて返事をしないんですね。今の空母を持つような考え方は、その時には言わないですよ。いや、われわれにはこういう考えがあるんだと言わなんです。これは後で私が調べただけです。そういうことは一切黙っているんです。それで、自分たちが米海軍とやり取りしていることも言わない。

そこで私は私なりに、先ほども言いました「めくら蛇に怖じず」で、

「そんなこと言つたつて、現在の警備隊の勢力はこれだけしかないじゃないか。しかも国力はこうだ。そんなことをやるためには、どれだけの勢力がいるんだ。とんでもない勢力がいるでしょう。私は、そんなことはどうしてできることではないと思う。一体何年経ったら今の日本の国力が、あなた方が願望しているような力に回復するかかわらない。わからないけれども、この十年間を見れば、とてもそんなことはできない。そういうことよりも、現状からできることをやりましょう」と、こういうことを言つたわけです。

そうしたら、海上自衛隊の幕僚長の山崎（小五郎）さんがいる前で、副長の長沢（浩）さん、これは旧海軍のトップですが、彼が言ったことは、これは私も本に書きましたけれども……。 「じゃあ、海原課長はわれわれに、『どぶさらい・小運送』をやれと言うのか」と言うんです。私はまさに啞然としましたね。これは正式の会議の席ですよ。長沢さんが「どぶさらい・小運送」と言うんですよ。「いま幕僚副長は『どぶさらい・小運送』と言われた（今の警備隊の内航護衛とか港湾の防衛とか、そういうことを言うんです）。私は、この四つの島が生きていく、そのために何ができるかということを考えるのが、ただ今の最大限のことだと思う。『どぶさらい・小運送』なんていう言葉は私は嫌いだけれども、幕僚副長がそうおっしゃるなら、その言葉を敢えて使いますが、私は『どぶさらい・小運送』しかできないと思います」と言つたんです。そうしたら黙つちやつた。しかし、その「どぶさらい・小運送」なんていう言葉は引つ込めませんよ。

そこで私は自分の本に書きましたけれども、ここです、問題は。「彼らが考えているのは」日本の四つの島が生きていくために何ができるか、何をするかということじゃないんですよ。やはり軍艦マーチに乗

って太平洋に出て行く、これが夢なんです。それは今でも生きています。私だけでしよう、敢えて言いますが、そんな海上交通の安全の確保なんか絶対できないというのをずっと言い続けていますのは。私以外にそういうことを言う人はいない。しかし、彼らはそれをやるんだと言うんですね。それは井上（成美）さんが昔、上申書を出しました。その時の帝国海軍は、艦隊決戦によってアメリカの海軍をやっつけて、そこで勝利が訪れる。あるいはアメリカ国内で厭戦思想（戦いなんてくだらん、つまらんといい思想）を醸成する。アメリカの婦人は強いから、アメリカの婦人がもう戦争なんかやめろということになる、それを待って交渉するんだ、ということをやっているんですね。すごい構想です。だから、後から考えると本当によく抵抗したと思いますよ。繰り返しますと、『どぶさらい・小運送』なんていう言葉は適当でないと思うけれども、幕僚副長がお使いになつたんだから、それを使いましょう。私は、それがいいことだと思つた。それから、それしかできないと思つた」と、こう言つたんですね。それに対しての反論はないんです。そういう時代ですからね。先ほど言いましたように「保安課長はノーとばかり言つていた」ということになつちゃうんです。

その次に、彼らと戦つたのは「空」の統合の問題です。これも詳しく申し上げますけれども、要するにまだ一緒になつたばかりでしょう。別々にできたものでしょう。別々の思想で物を考えているでしょう。それをひとまとめにするのが大変なことです。その大変なことの例を言いますと、保安課長の所掌ではありませんが、ある時、会議室に呼び出されたんです。連絡が来まして、「すぐ会議室へおいで下さい」と言う。「誰が言っているんだ」と言つたら、「増原次長だ」と。「何

の会議ですか」と聞いたたら、「敬礼の統一だ」と言うんです。「そんなことは僕の所掌外だ、人事局の誰かが行っているはずだろう」と言うのと、「とにかく、すぐおいで願いたいと言っています」ということなんです。それで行つたですよ。保安課長の職責外ですよ。

伊藤 ここ「保安庁法」には書いてない（笑い）。

海原 それは狭い会議室で、人だかりが一杯で、立っている人がいるんです。私は、「おいで」と言うから真ん中の席に座りました。そうしたら増原さんが言うんですよ、「海原君、いま敬礼の統一が問題になつているんだ」と。ですから、「それは私の担当外です」と言つたんです。「いや、担当外はわかるんだけど、君の意見を聞きたい」と言うんです。

隣に林第一幕僚長が座っているんですね。どういふことですかと聞いたたら、「海」は昔の日本式で、室内では頭を下げる「お辞儀をする」。「陸」の方はアメリカ式ですから、室内でもこうやって「右手を額の脇に挙げて」、帽子はないんですが、敬礼するわけです。これをどうするか。林第一幕僚長は、アメリカ式がきちつとしていいと言つた。頭を下げるのは卑屈だと言つた。日本人は特に背が低いので、ちよこつと頭を下げると卑屈な姿勢になる。だから、室内でもきちつとアメリカ式に挙手の礼をやるのがいいと言われるんです。

困つたな、と思つたよ。意見を言えと言つてから。しようがない、私は「こう言うとお叱りになるかも知れませんが、とにかく私の意見を言えとおっしゃいますから申します。あのアメリカ式の室内の敬礼はよくありません」と言つたんです。そうしたら、林さんが、とたんに顔色が変わつて、「なぜだ」と言うんです。「なぜだと言つたつて、皆はどうしていますか。室内では「コンチハ」という格好で

「挙手をしながら」腰をかがめて敬礼していますよ。そうすると、何か侮辱されたような感じになります」「そんなことはない、海原君。それは間違いだ。みんなきちんと、きちつと姿勢を正して背筋を伸ばして敬礼しているんだ。だから帽子をかぶつていなくても、あれがいんだ」と言うんです。私は笑って言ったんです。「それは幕僚長の前ではきちつと規定通りやっているでしょう。それは幕僚長室だからです。私たちのところでは、「コンチハ」という「挙手をしながら腰をかがめる」格好ですよ。絶対そうです」。

そうすると、みんな黙っているんですね。どうも自分の旗色が悪いと思っただけでしょうね、幕僚長の林さんは尊敬する大先輩ですが、私の話を聞いたたら、隣の増原さんに言うんです。「次長、どっちがいいかということが決まらないなら、数でいきましょう。『陸』の隊員の数が多から、『陸』の方にしましょう」と言うんですよ。

それで私は「ちよつと待ってくれ」と言ったんです。「そんなのはおかしい。一緒になつたばかりだけれども、隊員の数で決めるのはおかしい。しかし、決めなくてはいけないことの理由を言いますよ。それは保安大学ができました。私が学生だとしましょう。教官室に入っていく。そうしたらまず教官に礼をするのに、どなたが専任ですかというのを聞かなければいけない。専任が『陸』だったら陸式の、『海』の人だったら海式の敬礼をするんですか。みつともない話だし、そんな敬礼の統一もできないようでは、これから先、いずれ『空』の部隊もできると思うけれども、陸・海・空というものを昔のような陸・海の喧嘩をさせないで、一つの統一体として育てることは不可能です。敬礼も統一できないようなら、やめたらどうですか」と言ったんです。みんな黙っている。

そこで私は、「では私は、案を言えということですから言いますが、日本式の礼式はどっちかということを決めたらどうですか。どこでやっているか知りませんが、私の感じでは文部省あたりで聞いて、日本人の礼式としては室内ではどうあるべきであるかということをお聞きになって、一般の日本の礼式に従ってお決めになるのはいかがでしょう」と言ったんです。そうしたら、増原さんが「よし、そうだ。そうしよう」と言って、それで決まったんです。そういうことなんです。

伊藤 日本式のというのはあつたんですか。

海原 海式ですよ、それは。あつたんでしようね。あつたかどうか知りませんが、とにかくそういう礼式を決めるところがあるはずだと言った。

飯尾 日本式というので畳に手をつけて、というのも(笑い)。

海原 いやいや、畳はないですよ、隊舎ですから。それで、保安課長が呼ばれるんですよ。何か揉めたら、「海原どう思う」と言う。呼ばれたら、こつちも行かなければいけないでしょう。私の所掌ではありませんけれど、しようがない。こつちも覚悟を決めていますから、言うだけのことは言おうと思っている。そんなことがある。これが一つの一歩いい例でしょうね。敬礼の統一もできないんですよ。「海」と「陸」で頑張つちやつて。それで、最後は林さんのような良識のある人までが、数で決めましようと言うんですからね。そういう時代なんです。まあ、いろいろなことがありますね。そういうお話をしないと、どんなに「旧陸」と「旧海」とが仲が悪かったか、それが後を引いているか、わかりませんからね。

それに関連して申しますと、やはりどういふものができるかについ

ては、それぞれ関心がありますね。海軍は山梨大将がトップです。それから野村（吉三郎）大将、日本の大使もやられた人ですね。具体的には野村さんの名前で米海軍とやり取りしていますから。その辺が総本山なんです。

「陸」はご存知のように、統制派と皇道派で争っていたでしょう。数が多いでしょう。そんなにまともじゃないんですよ。ただ、敗軍の混乱状態からどうするか。新国軍ということを言っていたのが服部さんなんです。それで服部さんのところへ集まる連中が多いわけですね。それが大体、今の保安隊、保安庁は旧内務官僚の軍事支配である、あんなものはあくまで警察の予備軍である、新国軍はわれわれの手でくるんだ、ということなんです。これが「服部思想」です。それができなくて、旧軍人が追放解除で入って来ますね。そうすると服部さんはどうしたかと言うと、もう保安庁は諦めたんですね。今度できる国防会議を、わが手に収めようとするんですね。

ところで、新国軍の建設に熱心なのは改進黨でしょう。芦田さんや中曾根さんと接触するわけです。それで、国防会議事務局の編成は、少なくとも二百人ぐらいの構成で、しかもその大部分は旧軍人で、という運動をやったんです。それに対して、実際にできたのは運転手三名を含めても、わずか二十名ぐらいの小さな国防会議事務局だった。こういうことで、話がまとまらない。それで、防衛庁設置法の際には、国防会議をつくるということまでは決めましたが、その構成については別に定めるといふことで延びちゃうんです。

なぜかと言うと、いま言った争いがあるからです。それで結局は、民間人は入れないとなります。何となれば国家機密に関係することであるし、民間人を入れるとどういふことになるかわからん、というこ

とで小さく絞ったんですね。あくまで考えるスタッフで、そこでいろいろ考えて、それを内閣総理大臣に報告する、というものにしたんです。そういうことがあるものですから、なかなか統一と言ったって決まらないんですよ。

しかし、こんな法律は珍しいですよ。国防会議をつくるということを決めておきながら、その構成は別に法律で定めるなんていうのは、いかに当時の世の中の物の考え方が混乱していたかということがおわかりだと思ふ。私はもうなるべく、そういう渦中には入らないようにしていた。嫌ですからね。くだらんことを喧嘩しているんですよ。

それで制度調査委員会のことをちよつと申しましたけれども、そこでやっていたのは旧軍人でしょう。増原さんまでが「五年もたてば憲法改正があるだろう」ということを考えているわけですからね。だからその人たちは、また自分たちがやる時期が来るということ、ああいう計画になるわけです。私は、そんなものは一つの願望であることがわかる。しかし、そこへ行くまでに一体どれだけの道程が必要か。それは皆さん方でどうぞやって下さい。それでも結構。私たちは中で、今ある陸・海の力から何をつくるかということをやりましたよということ、そこで大転換をやるわけです。これが保安課長としては最初の仕事ですね。編成用の車両の数字を説明していますからね。それ以外に大きな方針の転換としては、そんな夢をみることはやめようということ、現状から出発する計画を作ったわけです。

伊藤 じゃあ、一応計画は作られたわけですか、保安課長の時代に。海原 ええ。やりました。保安課長の時代にやって、岸さんの時に国防の基本方針と、それから長期計画を作りました。案を、これはアメリカに持って行くわけです。それも今日お話ししますが、その時私が

お供して行くわけです。だから岸訪米ということによって一つの区切りが過ぎましたね。岸さんが訪米するについては、アメリカに対して日本は何をするかという将来の構想を持って行かないといかん、ということと長期計画をまとめるわけです。ですから、その長期計画をまとめるのにも、先ほど言いました「応援団」が巨大でしょう。それで、言いかけて途中でやめたんですけれども、全部報告に行くんですよ。

伊藤 直接ですか。

海原 ええ。それは後で気がつきました。庁議には、旧海軍にいた人も入っているわけですね。内局にも文官が入っている。そういう人が、ちやんとこう言うことでしたと言って報告に行く。週に何回か集まっているんですよ。そこへ行って報告しているんですよ。

伊藤 それぞれが、ですか。

海原 ええ。ただ、「陸」はないです、そういうことは。

伊藤 「陸」は服部さんのグループですか。

海原 それは服部さんのグループです。服部グループがあつて、これに対抗する力はないんです。他は全部バラバラなんです。しかし旧海軍は結束しているんですよ。こういう新海軍の建設という夢がありますからね。それで、野村さんという旗印があるでしょう。それを受けているのが長沢さんやら、「Y委員会」の山本善雄さんなんかの連中ですから。だから、そこへ全部報告に行くんです、現在保安庁ではこういうことをやっていますと。そういう中で仕事をするんですからね。これは私はいい経験をしたと思いますよ。なるほど、これは難しい。昔の帝国陸海軍が、物資の割り当てで担当参謀が殴り合いをしたというのがわかりますよ。

「陸原」と呼ばれて……

伊藤 そして現実に今、この時点で持っている軍備というか装備で、どれぐらいのことができるか、ということは？

海原 何もできませんよ。それはまたずっと後になりますが、国防会議の事務局長で四次防をまとめて、アメリカへ行って説明しました。そのことについて大きく日本の新聞で、「日本の海上自衛隊は沿岸警備隊並み」だとか、「海原の説明を聞いて、アメリカの連中がみんなびっくりした」というのが大きく出てくるんですよ。そこまで、まだ時間がかかるわけです。それは私が役人を辞める直前で、四次防の話ですけれどもね。

岸（信介）さんの時に長期計画を作るまでも、中でいろいろと摺り合せが必要です。それは保安課長の私一人ではとてもできません。前から申し上げていますように、同志がいるわけです。その時の同志は誰かと言うと、計画官です。これは死にました。村上信二郎君、今の村上代議士の親父さんですね。大蔵省の村上孝太郎君の弟です。この信二郎君と、その前に海堀洋平君という、後に日銀の政策委員になりましたが、大蔵省出身の頭のいい人がいるんです。この二人がやってくれたんです。それで、ようやく一応の計画ができるんです。

伊藤 それは年次計画ですか。

海原 年次計画です。六カ年計画とか五カ年計画とかいろいろ出ましたけれども、最後には五年計画にしたわけです。それを持って、岸さ

んがアイクに会いに行くわけです。

伊藤 この保安庁ができた段階で、この前は予算要求云々というお話がございましたね。そういう毎年の計画なしには、予算要求が……。

海原 いや、毎年の計画と言つても、その時は長期計画がないんです。ある意味で、行き当たりばったりですね。ということは、要員の教育に時間がかかるんです。特に「海」の場合は何年間かかるでしょう。「陸」は速成でできますけれどもね。昔の私たちが軍隊に行つた時は一期の教育というのは三カ月。だから営門に入つた時は何も知らない奴が、三カ月兵隊で訓練されると、訓練精到で第一線へ持つて行けるという簡単な教育だったんですよ。それが、いろいろなところへ影響するわけですけれども。

例えば、ちよつと話が飛ぶようですけども、長期計画を作りました。その時に新聞が批評したのは、『陸』偏重である」と。「海原」というのは陸原だ」というのは、それからなんです。もうこれは誤解も甚だしいんです。それは、私たちはまず首都東京の周辺にアメリカの陸軍の兵隊がうろうろしているのはいけない。だから、まず陸軍の兵隊を先に「アメリカに」返そう。それは速成教育ができますから。ということ、で、「陸」の方が早く養成できるし、早く養成して米陸軍に帰つてもらおう。これが基本方針だったんです。「海」の方は、とにかく水兵さんは一人前になるのに時間がかかるんですよ。それは一年ではできませんからね。どうしても時間がかかる。そういうことを新聞記者諸君がわからなくて、「海原が作っている長期計画は『陸』偏重だ。あいつは陸原だ」と書く。また、その「陸原」と言ったのが、私の内務省の後輩の課長なんです。それはすっかり有名になりましたね。「陸原」というのはアメリカにまで伝わっているんですよ。で

すから、保安課長の最初の一年ぐらいは、地均しが大変でした。

もう一度言いますが、敬礼の統一もできないんですよ。それはもう、「陸」だ、「海」だで喧嘩になるんだから。そこで私が日本式と言つた。日本式の礼式でいくには、室内ではどうすればよいか。だから日本人として、日本の礼式として、室内ではこれ「拳手」をやつたほうがいいのか、それともこれ「お辞儀」でいいのか、ということだね。どこがどこまで担当するか知りませんが、役所では文部省あたりじゃないですかと言つたら、増原さんもホツとしたんじゃないかな。「よし、そうしよう」と、すぐ裁決したんですが、そういう時代なんです。要するに混乱状態の中ですからね。

もう一つ、当時混乱状態だと言いますとね、その頃保安隊の隊員に對して、どういうことを女子青年団は言つたか。「保安隊員にはお嫁に行かない」、そういう決議をした婦人青年団があちこちにあるんですよ。保安隊員にはお嫁に行かない。その次は「税金泥棒」。これが隊員に對しての罵り、罵声ですね。そういう時代なんです。一種の対外的な混乱状態ですから、それを落ち着かせるのに時間がかかりましたね。

それで、あちこちで展覧会をやつてもらつて、そこでいろいろ武器を展示したり、パンフレットを配つたりもしました。それが後で私が官房長になつてから、映画を作る起源になるんですね。あちこち何か催し物があるでしょう。そうすると、そこへ保安隊のパンフレットを作りまして、それを配る。それから模擬演習をやつたりする。そういうことをやるわけです。ですから、その頃なぜそんなことだったのかと思われられるかもしれませんが、ガタガタするんですね。

そういう状態ですから、新聞も必ずしも、今のようにな、一応存在を

認めるとかは言いませんね。旧軍に対する反感もありますから、**「抜く」**わけです。ちょうど保安隊、警備隊ができる頃で、なぜかある新聞がいつも早く記事にするんですね。まだ決まってもいないことを出す。今、こういうことを研究していると言う。それで、おかしいなと思つて、私はあるところへ行つたわけです。二つしかありませんけれども、特に**「海」**が出ますから、海上幕僚監部の総務課長のところへ行つたら、総務課長が机の前に立っているんですよ。何か書類を読んでいるんです。そして、机の上に書類が置いてある。それを一所懸命、新聞記者が写しているんです。私は目撃したんですからね。書類を見せているんです。その総務課長さんは後に幕僚長になりますよ。その人とその新聞記者の義理の親父さん、彼は偉い人ですが、そういうわけで親しみがある。それで、その新聞にいつもそっちの記事が載るといのがわかつたわけです。敢えて両方とも名前は言いませんけれども、新聞記者の方はもう死にましたけれどもね。

そこで私は、ああ、これはいかんと思つた。こういうことでお互い新聞同士の競争があると駄目だと思つて、記者クラブで皆の前で言つたんです。「どうも最近、いろいろ保安隊とか警備隊について、現在こういうことが考えられているとか、あるいは将来こういうことになるといふような観測記事がいつばい出る。これは困る。そこで私から提案がある。私が皆さん方にバックグラウンド・ブリーフィングをやる。毎月一回か二回。今、こういうことが考えられている。こういうことをやろうとしている。ただし、それがすぐ表に出ては困る。あくまで皆さん方のバックグラウンド・ブリーフィングといふことでやりたいが、どうだろう」といふことを申し込んだんです。

それは前に申し上げたように、内務省での経験がありますからね。

そうしたら、しばらくして返事が来まして、駄目だと言ふんです。要するに**「クラブとしてそういう約束はできない」**と言ふんです。といふのは、いろいろな人が入っているでしょう。地方紙も入っている。私は、**「じゃあしょうがない。しかし、君たち困るだろう」**と言つたら、**「クラブとしてはできないけれども、私のところだけとやつてくれ」**と言ふんですね。そう言ってきたところが三つありましたよ、大新聞で。だから私は**「それはできない。クラブとの話し合いで、あくまで皆さんのバックグラウンド・ブリーフィングとして、こういう問題がある、こういうことがある、こういうことをやりたいと思つているといふことを、ご参考までにやるのであつて、それを特定の新聞社とだけやることはできない」**とお断りしたんです。そういうことなんです。その頃は何でも記事になればいいんですね。それがどんな影響を与えるかなんて考えないですよ。そういうこともありました。といふのが当時の世相です。ですから、そういう中でいろいろ仕事をしますから、地均しが大変なんですね。

伊藤 その目撃された場合のことですが、何を抜いているわけですか。
海原 単に部隊の建設とか、どこへ何ができるとか、そういうことですよ。船を何隻造るとか、簡単に言えばくだらないことなんです。

伊藤 それは、実際のプランの話ですか。

海原 そうです。それを推測記事にしちゃうんですね。だから以前に申し上げましたように、国民総動員計画ですね。あれを二人の記者が書きまして、片一方はぼかして書いた。片一方はちゃんと書いた。そういう違いがあるわけです。その内務省の時は、朝日と毎日でしたがね。その時の経験がありますから、やはりこうかと思つた。彼らの気持になるとわかるわけです。当時は、抜きっこですから。抜いたって

どうということはないんだから、決まってからでいいじゃないかと言っても駄目なんです。決まってから予算要求もしなくてはいけない。事柄が決まってから、その事柄の意味を報道するのが新聞じゃないかと言ったら、いや、それはお前さんの言うことは理屈だけれども、そうはいかん、ということでした。そんなことがありました。ですから、何となく落ち着いてもらうのに時間がかかりました。

それから、もう一つ当時の世相についてに言います。いま二つ言いました、もう一つはあの頃、新しく部隊を置くでしょう。どこへ置かかが問題になるわけです。「来てくれ」というところもあるわけです。もちろん、地域の振興のためにですね。ところが、「来てくれるな」というところがあるわけです。それは旧陸海軍の部隊がいて、良くなかったところでしょうね。これは後で防衛庁長官になる人が、反対の先頭に立って来ましたよ。それは、その人のところへ置いてくれるなどというわけです。陳情に付いてくるんです。ああそうですか、と言っておいた。そうしたら、後に大臣になったら、私は昔から自衛隊のことはやっていますと言う。

佐道 確かにやっていたんですね（笑い）。

海原 やっていた。どう、やっていたかです（笑い）。本当にいろいろあります。そういうものです、世の中は。

伊藤 誘致もかなりあったことですか。

海原 ありました。それは「部隊が」行きますと、結構お金がくるでしょう。交付金か何かが。それから隊員がお金を落としますね。ですから、結構来てくれというのがありました。

伊藤 やはり昔、良い師団があったとか連隊があったというところですね。

海原 その昔おったところは、来てくれというのと、来るなどというのと、両方あるんです。例えば徳島は私の本籍（今はもう移しましたけれども）で、徳島へ航空隊をつくらうとした。絶対反対ですよ。それは終戦の時の航空隊の逃げ方が大変なんです。高知もそうでしたがね。航空隊ですから給与はいいでしょう。結構いろいろな酒なんかも持っているわけですよ。そういうやつを全部持って逃げるわけです。それで、高知などでは飛行機に乗って高松まで飛んで、そこで飛行機を降りて、あと荷物を持って逃げちゃった。そうなっているんですね。

徳島の航空隊もそうでした。だから徳島へ航空隊を置くとなった時に反対に来た人間に、「何であなた方は反対か」と聞いたら、「あの終戦の時の混乱状態を、私たちは身をもって体験している。あんたは知らないだろうけれども」と言う。私は当時高知にいたから、知らないわけではない。「あんなものだ。私たちは帝国海軍の部隊があんなにだらしないものだと思っていなかった。昔の軍隊ですらそうだ。ましてや今の警備隊は……」と言うわけです（笑い）。しかし、徳島に航空隊をつくらうということで、私は地元に通じかけました。ここへ飛行場をつくれれば、いずれそこへちゃんと民間の飛行機が乗り入れるようになる。だから海上自衛隊でつくらうじゃないか。その方がいい。阿波踊りも、みんな飛行機で見に来るようになるよ。その通りになりましたね。阿波踊りの時は、大阪からちゃんと飛行機で来るわけですよ。そういうことですから、そういうことでも反対、賛成、いろいろあるわけです。そういう時代です。それが私が保安課長になった頃の姿でしたね。

伊藤 どこに設置するかという「基本」に関することは、「保安課長の」任務の中に入っているわけですね。

海原 入っています。経理局も、もちろん関係します。金を出すところですよ。それから具体的に設計するところですね。当時は置けるところに置いてきたということです。だから、後で皆さんが考えられるように、決して防衛の観点ではありません。例えば将来の脅威は日本海寄りでしょう。だから日本海沿いに飛行場を造るのはおかしいですよ。源田さんもそれを指摘しましたけれどもね。脅威は向こうだ。そうすると、航空基地は例えば伊勢神宮のそばとか、あっちへ引っ込んでいかなないと。それを日本海側に造ったという。そんなことはわかりきっていますよ。しかし、そこしか造れないから造った。だから置けるところへ置いてきたということですね。日本防衛のためなんて、基本的な計画に沿ってやるような余裕はゼロです。だから後から見ると、何であんなところへあるかとなるわけです。そういう時代ですからね。とにかく保安隊ができた時の姿というのは、もうまさにどうなるか五里霧中です。

そういう時代を凌いできたのが、やはり増原さんのトップレベルの確固たる方針でしょうね。背後に吉田さんがいましたしね。あの時の吉田さんの力というのは、そういう隠然たる力ですね。旧海軍に対しても陸軍に対しても、結構持つておられましたからね。特に陸軍は辰己さんがアドバイザーですからね。良かったと思いますよ。

そういうことで陸・海が喧嘩をしないように、保安大学というものをつくった。その続きで申しますと、その時のアメリカの顧問団長はシェパードという少将です。なかなかの紳士でいい人でした。私が後でトルコへ行ききました時に、トルコの顧問団長でした。それで私は、いやあ久しぶりだと握手したら、彼が何を質問したか。「保安大学の制度は依然として残っているか」というものです。「防衛大学校と

して残って、そこで教育している」と言ったら、「あれはいいですよ。俺たちもアメリカでやろうと思っただけでできなかった。だから絶対あれは残せ」と言う。

それで今日のお話の、「空」の統合の問題になるわけです。シェパード少将はトルコの顧問団長の時に私に、「ああ、それは良かった。やはり若い時に一緒に同じ釜の飯を食うということは大事なことだ。アメリカはそれができなかった。だから絶対にあれは崩すな」と言いましたね。帰って、私はもちろん総理にも報告しましたけれどもね。それで、形は残っているんですが、先ほど言いましたように幹部候補生学校で、みんな引っくり返っちゃうんですね（笑い）。それは処置なしですね。だから、その頃の「創業の精神」はもうどこかへ行っちゃったんです。

伊藤 でも、やはり多少は違うんじゃないですか。

海原 後で申しますが、それは違いませんね。例えば「海」にしてみれば、昔からの立派な人の肖像がいっぱいあるところで海軍精神を叩き込まれると、保安大学あたりで英国紳士を養成するような方針の下にやってきたのは駄目ですよ。それをどこまで残すか、ですね。

佐道 保安庁法の第十二条三号は「第一幕僚監部及び第二幕僚監部並びに部隊等の組織、定員、編成、装備及び配置の基本に關すること」ですね。その「陸」と「海」の組織が違う。海原先生はそれが違うのがおかしいと、最初からずっと言っておられたわけですか。

海原 おかしいし、どっちがいいかと考えたら、アメリカの言う一般幕僚、特別幕僚は理論的には正しいと思いますけれども、日本に馴染まないと思った。だから、おそらくこれは海式に、部長は課長を自分の部下に置かないといけないだろうと思いましたがね。結局そうなっ

やいました。この前、特別幕僚、一般幕僚の説明をしましたが、この関係は保安庁法にちゃんと書いてあるんです。どういふふうに書いてあるかと言いますと、「課長は予めその事項に関係のある部長の承認を受けるものとす」と書いてある。幕僚長の直接の下の課長、その課長さんというのは予め部長の承認を受けるんですからね。となると、部長がノーと言おうとどうなるか、ですね。そうなれば、最初から付けておいてもいいじゃないですか、となっちゃうわけです。やはり人間というのは不思議なもので、部下に課長が三人いるというのは気が持たないですよ。部下は部長ばかりだというのは違う。これはやはり何ともなりませんね。だから、すぐにこれも直っちゃいましたね。一般幕僚、特別幕僚というのはいいじゃないか、と私は言ったんです。大いにこれは見習うべきである。これを大いに宣伝しよう、と言ったんですけれども、駄目でしたね。

ここまでは一応、この間のおさらいみたいな、追加みたいなことを申しましたが、改めて申すことにします。いろいろと考え方が違うというだけで、知っていただきたい。

さて、そこで敬礼の統一は片付きました。その時にかにいろいろと馬鹿馬鹿しいことがあったかということですね。それから高射砲の説明はしましたか。

伊藤 伺っていないですね。

海原 これは要するに、「陸」の方は古い高射砲をもらっているでしょう。これを新しくしたいわけです。

伊藤 それはアメリカからもらったものですか。

海原 そうです。みんなそうです。ですから保安隊、警備隊ともに、装備品はアメリカの中古兵器です。それを大事に扱ったということでは

すね。その中古兵器もだんだんと新しいものが出てくるでしょう。例えば高射砲はミサイルが出てきますね、地对空のミサイルが。その前に、この高射砲が入ってくるわけです。それまで高射砲はなかった。ミサイルの問題は後に申し上げますが、高射砲の問題で、私がまた次に呼ばれたわけです。「海原、国会答弁を考へろ」と言うんです。「何ですか」と言ったら、「今度、『陸』が高射砲をもらいたいと言って、オーケーになったようだ。高射砲をもらう理由を書け」と言うんです。

国会答弁、どうしますか。高射砲というのは飛行機を撃つものでしょう。飛行機というのは飛んでくるわけですね。どうにもならないわけですよ、保安隊、警備隊では。国内治安ですからね。それしかないんです。国内治安の維持しか任務ではない、責任はそれしかないのに、高射砲はどう使いますか。あなたなら、どういうふうの説明しますか。いかに馬鹿馬鹿しいことであつたかということの、これは証明になるわけです。

伊藤 それはアメリカからもらうわけですね。

海原 もらうわけですね。

伊藤 アメリカは、当然日本の保安隊というのは軍隊だと思つていられるわけですね。

海原 そうです、もちろん思つていますよ。だって、こつちからくれと言っているんですからね、実際は。

伊藤 それは「陸」の方ですね。

海原 はい、「陸」の幕僚ですね。それで渡そうということになる。その、「くれ」と言った連中は、そんな内局の保安課長が答弁で苦労するなんて思いませんよ、何も。

伊藤 思わないですか。

海原 思いません、全然。

伊藤 水平に撃つとか（笑い）。

海原 理屈を考えてください。私ばかりしゃべってもしょうがないから。「三百代言」という言葉がありますね。私はこの答弁を用意した。私は東京帝国大学法学部の出身だけれども、こんな三百代言の説明は初めてです。何と書いたか。「まず第一に高射砲というのは侵入敵機を撃つものである。第二、しかしわが保安隊は、外敵と戦う義務はない、責任はない。三、ではなぜそんなものを持つか。それは国内治安維持のためである。すなわち暴動が起こった場合に、暴徒に対して砲を水平にして、ゼロ射撃をする。威嚇のために使う」。それしかないですよ。そういうことを言っています、次長に「こんな三百代言の説明は大学を卒業して初めてだ。ついては、こういう質問はないようにしてくれ。社会党といえども、ちゃんとそれはわかるんだ（私はいろいろ知っていますからね）。話をして、その質問はないようにしてくれ。それが一番いいですよ」と進言したんです。そうしたら、結局その通りになった。だから質問ゼロですよ。質問があつたら、赤恥かくでしょうね。だから社会党といえども、ちゃんとわかってくれている。日本的に言うと、武士の情けというものです。

私は昔から社会党の人とは親しかったです。成田知巳さんとか今の横路（孝弘）さんの親父さん（横路節雄）とかね。絶えず私は連絡を取っていました。よく私のところへ外国人が来ましたが、その外国人に、「あなた方は日本社会党というと、安保反対、自衛隊反対、それしか頭にないだろう。そうじゃない。私の判断では、個別的に付き合つて知っているけれども、六割までは少なくとも現状肯定だ。ただ

し、それを社会党员として言えと言つと、言わない。そういうものなんだ。日本には歌舞伎というお芝居がある。お腹に刀を突き刺したまま三十分ぐらいいしゃべっているんだ。建前と本音があるし、そういう複雑な心情を持っている。だから今の社会党员、あなた方は文句なしにこれは安保反対、武装反対、日米安保反対だと思つていらっしゃる、そうじゃない」と言つたんですね。その通りでしたね。私が増原さんに、これはちゃんと手を打つて、いじめるようなことはやめさせてくださいと言つた。それで出なかつたですよ。だから、これは済んだんですけれどもね。

もう一つ済まなかつたのは、「軍隊」でした。これは木村（篤太郎）さんに私が答弁を用意しまして、その時に調べましたが、軍隊の定義が国際法的にないんです。これは不思議なんですが、ないんですね。要らないですよ、そんなものは。要するに、国家の主権として外敵に対して武力行動をするものは軍隊なんです。ただし正規軍ということですよ、ゲリラ部隊は別です。制服を着て抵抗をする。それが軍隊なんです。それを言いました。「木村長官、軍隊という定義はない。だから国家の権力を代表して、そういう武力行動をやる。それを軍隊と言うならば、間違いなく保安隊、警備隊は軍隊である。そう答弁されたらどうですか」と言いました。そうしたら飄々とやつたですよ。第十五国会ですがね。「軍隊というものについての定義はない。しかし、軍隊というものは一般的、客観的に言つて、国家主権を発揮するものとして、外敵と戦う。そういう存在を軍隊と言うならば、保安隊、警備隊、これは軍隊である」と、ちゃんと答弁しました。

伊藤 保安隊はやはり軍隊なんですか。

海原 軍隊です。能力はありませんよ。ありませんけれども、言葉と

して、軍隊か軍隊でないかと言ったら、軍隊だとその時ちゃんと言ったんですよ。ところが、この数年間、軍隊か、軍隊でないかとやっているんですからね。いかに人間の世界はくだらんことで騒いでいるかと思うんですがね。

佐道 その時の発言は、そのままスツと通ったんですか。

海原 通りました。別に問題ない。それは先ほど言いましたように、向こうも心得ていますから。相手は新聞記者よりもよっぽど常識がありますよ(笑い)。そういうことですね。それが高射砲の導入でした。

そこで一番問題を起こしたのが「空」の統合なんです。「空」の統合問題。『自衛隊十年史』を見ますと、何も書いてありませんよ。もうまったくあつげらんとして、何も問題がなかったように皆さん方はお取りになると思います。これはアメリカ側の意見も分かれるんです。

どうであったかお話をしますと、まず、増原さん以下全部内局の幹部は「一軍思想」で統一だったんです。それは、昔の陸海軍が大変な喧嘩をした。あれを再現させてはいけません。保安隊はその思想でできましたからね。それで、こんな狭いところで、面積はアメリカのフロリダ一州とほぼ同じですけれども、陸・海・空なんて三つの部隊は要らない。一つでいいじゃないか。私は賛成した。それで「空」の準備室ができる時に、われわれは「一軍思想」でやろうということになった。それに断固として反対したのは、また「海」です。「海」は要するに、それぞれが持つべきであると言っていますね。

伊藤 海軍航空隊と陸軍航空隊ですか。

海原 はい。これは飛行機が欲しいんですね。こんなちっぽけなところでね。その一番いい例が『自衛隊十年史』です「その中の一ページ

のコピーを配布する」。これを見ると全く何の問題もなかったように書いてあるんです。T6という飛行機の写真が出ていますが、このT6というのは「陸」の方の操縦教育の練習機です。初級練習です。「海」は全く同じ物がSNJと言っていますね。

伊藤 同じ物なんですか

海原 同じ物なんです。これは写真が出ていますがね。これを見るとおわかりになると思います。左にT6とあるでしょう。それで私たちは、まず「一軍思想」を出した。初級練習機で最初の操縦教育は一緒にやっつけていいじゃないかと。というのは、「空」はT6と言いつ、「海」の方はSNJと言う。全く同じ飛行機なんです。ですから、飛行機を飛ばすだけでしよう。一緒に教育したらいいじゃないかと、当然思いますね。

伊藤 じゃあ、初めは「陸」「海」がそれぞれ持ったんですか。

海原 それはそうです。一番初めに持ったのは「陸」ですから。「陸」が早くから持っていましたから。小さい練習機みたいな、観測機を。大砲の着弾を観測するとか、あるいは写真を撮るとか、それはありました。それから今度は「海」が対潜哨戒機を持つわけです。それで、今度は「空」をつくる。「空」にはいろいろ本格的なものができますね。だから「空」ができるのなら、およそ飛行機はそこへ全部統合しよう。イタリアがそうですから、そう考えた。それで、われわれは「一軍」ということを言ったわけです。それに対して断固反対したのが「海」なんです。

伊藤 それはアメリカの影響もあるんですか。

海原 アメリカなんです。これはまた別に申し上げます、こんがらがりますから。アメリカと言いますと、アメリカの空軍は統合しると、

こう言う。私が直接統合参謀本部議長のトワイニング大将に会って聞きました。統合だと言う。ところが「海」の方が手を回した。面白いことに、空軍の方の意見は米極東空軍司令官のワイランド中將から木村大臣、保安庁長官宛に来たんですね。ところが分離して持たすべきだという意見が、米極東軍司令官のハル大将から総理大臣宛に来たんです。それは三つ、それぞれ別々にしろと言うんです。トワイニングという統合参謀本部議長は統一しろと言うのです。向こうも真つ向から分かれている。それは背景説明です。

その前にこれをどうするかということで、私はまず一緒になるべきだと言った。その前に初級操縦、練習機ですね。それは全く同じ飛行機なんだから、一緒にやっつけていいじゃないかと言うと、駄目だと言うんです。

どこが違うと思いますか。同じ飛行機なんです。乗せている計器がいろいろありますね。これも同じなんです。ところが、その計器の配列と順序が違う。高度計とか速度計とかあるでしょう。それから見る順番も違う。なぜか。それはアメリカの海軍は、航空母艦が最後の目的なんです。そうすると、航空母艦には横の方にちよつと施設みたいなものがあるでしょう。あれが邪魔になりますから、それを避けるような形で必ず旋回して入って来るんですね。だから、入って来る方向が違うわけです。その次は着艦しようとして降りて来て、駄目な時はすぐまた飛び上がらないといけない。そうするとエンジンは切れないんです。自動車で言えば、ふかしたままの状態で降りないといけない。ところが「空」は大きなところにいるんですから、「エンジン」切ってもいいわけです。ここで違いが出てくるんです。そこで計器の配列の順序も違うわけです。高度計とかスピード計とか全く同じ

飛行機なんです。

その頃はまた航空自衛隊はありません。準備室があるだけで、私が代弁するような格好になるわけです。それで彼らとやるわけです。そこで私がびっくりしたんですが、「海」の方は何と言ったと思いますか。相手は部長さん、少将閣下です。何と言ったか。「もし、統一するのなら、米海軍はあの練習機SNJを全部引き揚げるでしょう」と言うんです。私はびっくりしましたけれどもね。笑ったんですよ。今は別々だからくれてるんだ。一緒にやるのなら米海軍はいま日本がもっているやつを引き揚げると言うんです。私は笑い出して、「どういうわけでそういうことを言うのか知らないけれども、それは内局に任せなさい。私は交渉相手になります。もし米海軍が引き揚げるといふなら、引き揚げさせてもいいですよ。そんな、同じ飛行機なんだから。それで、計器の配列の順序が違う、それを見る順序が違うといふのは、要するに『海』の方は航空母艦が目標だけれど、『空』の方、『陸』の方は広い大地へ降りて来るわけだから関係ない。そこに私は違いがあると思う」と言ったら、「そうだ」と言うんです。「だからいいじゃないか、そうなら」「じゃあ、課長は航空母艦は持たせないつもりですか」と言うから、「いや、持たすとか持たせないとか、私はそんな権限ないけれども、当分航空母艦なんかありませんよ。難しいよ、航空母艦は」と言った。ちゃんと、向こうは「新海軍計画を」出しているんですからね。先ほどの話じゃないけれど、「めくら蛇に怖じず」ですよ。そんなものを出しているのなら、言いようがありませんね。私は全然知らないから、「海上警備隊が将来航空母艦を持つなんていうことはちよつと考えられない」と言った。「どうして、そういうことを言えるか」と言う。結局、その初級操縦を統合できない

んです。

伊藤 できなかつたんですか。

海原 はい。「同じところでやっつけていいじゃないか。そんな初級だから。同じ飛行機を使うんだから」「駄目だ。ノー」で、結局バラバラになりました。ことほど左様にそうなるんですね(ことほど左様に、というのの昔の英語の翻訳の言い方です)。

そこで、ついでに話しましょう。統合参謀本部で、トワイニングという大將がいたわけですね。岸・アイク会談の時ですが、岸首相は概要だけ説明して、後は海原課長を置いておくから、海原の説明を聞いてくれということ、私が米三軍に話をするわけです。その時に言ったんです。東京では、旧陸軍と旧海軍がいまだに喧嘩をしている。それだけなら、まだ僕は捌きやすい。背後に米海軍、米空軍があるんだと言ったんですよ。トワイニング大將に私が会ったというのは、準備室をやっていたルベリーという大佐がおるんですが、それが手配をしてくれたのです。一課長が統合参謀本部議長に会うんですからね、よっぽど大事だと向こうも思ったんでしょう。

「今、こういうことで問題になつている。あなたはどう思いますか。それぞれ後ろに応援団がついている。これが強力だ。米海軍、米空軍がいなければ、一応捌けると思うんだが、どう思うか」と言ったら、「それはもちろん統合がいい」と言うんです。トワイニング大將はなかなか感じのいい人でした。立派な部屋でした。「それではお願いがある。あなたのレターを出してくれ、統合参謀本部議長も統合がいいと言つて欲しい」と言つたんです。「それは出せない」と言うんです、「それは私の権限内にあるとしても、そういうことは内政干渉になる。日本政府があるんだから、あなた方がやっているんだから、背

後の応援団と顧問団が何を言つても、日本政府の判断でやれ」と言うんですね。「それは理屈はそうだが、そうはいかんです。背後の応援団の方を気にしているんだ」と言つたら、笑つて「頑張つてやれ」と言うんです。

彼は、「あつ、そうだ」と言つて、何を言うかと思つたら、「イタリアへこれから行くだろう」と言う。「行く」と言つたんです。「イタリアは統一している(あそこは法律で、およそ飛行機なるものは全部イタリア空軍に統一しているんです)。ところが海軍は、海軍用の飛行機を自分で持ちたいということ、猛烈な運動をやっている。だからイタリアに行つたら、イタリアがどうかということを聞くことも参考になるかもしれん」と言つてくれました。

それでイタリアのローマに行った時にアメリカの顧問団長に会つて、トワイニング大將がこう言つたから来た、と言つたら、その通りだと言ふ。形勢はどうかと言つたら、いま統一してやっていると。ところが、イタリア海軍は大変な運動をやっていると。それで私は笑つたんですね。どこでも同じだなあと思つて(笑い)。

トワイニングさんに、イタリアを見て来いと言われた時に、今に、全世界的に海軍対空軍の争いが起こりますね、と言つたらアハハハと大笑いしていましたよ。

そこで、「あなたが直接できないのなら、この問題については顧問団は発言するなということをやつてくれないか」と言つたら、「駄目だ、それもできない。それは私の権限外のことである」と言うんです。そういうことです。そんなことで揉めるんですからね、結構時間もかかるでしょう。保安課長として何をやつたかと言われてもね(笑い)。

伊藤 それで結局、航空自衛隊ができたわけですね。

海原 できました。それはとても駄目だということになるわけです。これまた話が長くなりますが、詳しくは私が『this is 読売』に書いたものに出ています。米空軍の方は統一しろと言っている。しかし、その宛名は木村さん宛です。その一カ月後ですかね、吉田総理宛に米極東軍司令官ハル大将から来たんですね。それは分割させろと書いてあるんです。どうしますか、これは。「海」の方が一枚役者が上だ、と私は本に書きましたがね。しかも米極東軍司令官は、これについては、米極東空軍司令官が適切なアドバイスを与えるだろうと書いてあるんですよ。そういう状態です。結局これは駄目だ、諦めましょうと言ったんです。そうだな、そこまでやって駄目ならもうしょうがない、ということ、別々になるわけです。

航空自衛隊、海上自衛隊、陸上自衛隊がそれぞれ別の飛行機を持っています。教育も全部別になっています。だから、私は改めてカナダというのは偉いと思いますね。あれは「一軍」になりましたからね。もちろん「一軍」にすることによってのプラス・マイナスはある。しかし「一軍」がいいということをやったわけです、日本はそれはできませんでした。

こんなちっぽけなところで、陸・海・空が威張っていてもしょうがないと思うんですけれどね。また、司馬遼太郎さんの言葉を私は引用するんですが、「日本人の遺伝的体質」ですよ。『自衛隊十年史』には、そんなこと何も書いてないですよ。平穩無事に、滑らかに書いてある。航空自衛隊発足に伴って、当然決めなくてはいけないことなんですよ。ところが決められない。ですから飛行機の分属問題は改めて決めることにして、とにかく航空自衛隊は発足したわけです。まだ、できたばかりですからね。それに似た話はあちこちにあるんです。そ

うなると、先ほども言いましたが、保安課長が新しくできる航空自衛隊を代表して言うわけです。

その時に、何でこんな馬鹿なことを言うかという例をもう一つ言いますと、海上自衛隊の防衛部長、これは鈴木という、昔で言うところですよ。断固として別だと言う。この人は鈴木貫太郎さんの縁戚なんですよ、甥か何かなんですよ。だから結構偉いんですね。それが会議で発言するんです。「海上自衛隊の航空機、対潜哨戒機は、下の護衛艦と一体にならないといかん」と。「二位一体」ですかね、船と哨戒機と。そこまではわかりますね。「だから」と彼は言うんです、「おおよそ艦長たる者は全部パイロットの経験がなくてはならん」と言うんです。どうやってそんなことができるんですか。「おおよそ護衛艦の艦長たる者は全部パイロットの経験者をもって充てる、そういうふうにしなければならぬ」と私は思います」と発言したら、誰も反対しないんですよ。そういう時代です。そんなこと、できっこないじゃないですか。パイロットの訓練と艦長の訓練とは全然コースが違うでしょう。そういうことを平気で発言する。そこに幕僚長が座っているんだから、「ちよつと防衛部長」と抑えればいいでしょう。やらないんですね。

伊藤 なぜ抑えないんですか。

海原 どうして抑えないか、私に聞かれても困るんですが、それは鈴木貫太郎大将の縁戚だということもあるんでしょうね。それから防衛部長というのは、昔で言えば作戦部長ですね。それが言っているんだから、もう口出しはしないということでしょうね。その両方があったと思います。先ほど申し上げたように、海上交通の航路の確保、A、B、Cの三航路あると。そんなことがよく言えたものだと思うんですけれどね。それぞれの幕僚長とか長官がどんな人格であったか、それ

は言えないですよ。その時には幕僚長は山崎さん、これは元海上保安庁だから民間人でしょう。その座っている前での副長の発言が、「われわれに『どぶさらい・小運送』をやれというのか」と言うんですからね。これにはびっくりしましたね。『どぶさらい・小運送』という言葉は私は不適當な言葉だと思うけれど、しかし大事ですよ。どぶが詰まったらどうなりますか。小運送ができなかったらどうなりますか。これを考えたら、『どぶさらい・小運送』が大事だと思う。特に自分は、四つの島の交通の確保が最優先すべきであろうと思う。そうならば、国内海上交通の安全の確保、あなたがおっしゃった、『どぶさらい・小運送』、それが最重要ではありませんか」とまで言ったんですよ。しかし、返事をしない。そういう時代です。

話は元に戻りますが、シビリアン・コントロールと言ったって、どうなっているんでしょうかね。私は、後藤田君と内海君には、君達、どういふふうに捌いたんだと聞きたいんですがね。全然出なかったのか。おそらく彼らの時代には出なかったんでしょうね。部隊をつくるということに一所懸命で、私が行った頃から、さあどういふ装備を持つつか、どう行動するかということが問題になったんでしょうね。しかし、いま話していてもだんだん興奮してきますよ。何で『どぶさらい・小運送』という言葉を使うかと思っただすね。そういうことは言っただけじゃないことでしょう、幕僚副長が。

どうしますか、あなたが保安課長だったら。イエス、サーとやりますか(笑い)。私はノー、サーですよ。そこで「海原天皇」という名前が出ちゃうわけですね。何でも反対は海原だと、あいつは陸原だと。伊藤 じゃあ、「陸」からはよく思われたわけですか。

海原 それも「陸」に言ったんですよ、「陸」の三部長というのに。

昔の作戦部長でしょうね。「私は『海』には評判が悪い。しかし陸原だと言われるから、もって瞑すべしと思う」と言うのと、とんでもないと言われたのです。そこで私が「そうか、俺は『陸海空治まらず』かと。しかしそういう人間がおつてもいいだろう」と言っただすよ。そういうふうに言われたら、それで通すよりしようがないなと思っただけでしたね。とうとう通しました。

ずっと後になりまして、国防会議の事務局長になった時です。官房長官は保利茂さんです。この人も私に対する悪口をいろいろ聞いておつたようです。当初は、海原は悪者だと思っておられたらしい。そうでないということを確認させたのは、朝日、読売、毎日の三人の新聞記者ですね。保利さんに、「海原はしぶん悪口を言われているけれど、決してあいつはそんな者ではない」と言ってくれたんです。そうしたら、事務局長になってから三カ月も経っていますかね、官房長官から話に来てと言われて、行つたわけです。それまでは会わないですよ。辞令をもらっただけです。ああ、ここにはいろいろ「噂や悪口が」来ているな、と思いましたよ。

そうしたら、「いやあ、海原君どうも。君が来てから時間もなかった」と言う。まあ時間もなかったかも知れませんが、「時々、話を聞きたいから聞かせてくれ」と言っただけです。「時に、佐藤総理が言っておつたけれど、君は海・空には冷淡だそうだね」と言うんですよ。ハアーツと思いましたが。私は笑い出しました。官房長官、あなたも誰からそんなことを聞いたんですか。それは六本木では有名な話で、あいつは陸原だ、『海空治まらず』だとなった。しかしそれは、いろいろ言っただけで、私の言うことが間違っておつたら、私は考え直しますよと、ちゃんと前に言っただけ

んだ。しかし彼らは、自分たちがやろうとしたことを、ことごとき、
と言うと語弊があるけれど、私が潰してきたと思ってるかもしれない。
それはそんなことはありません。私は決して海・空に冷淡だと思
っていない」「いや、佐藤総理はそう言っておった」と言うから、誰
かが佐藤総理に言っているんですね(笑い)。そういうところですか、
永田町というのは。しかし保利さんはさすがに聞いてくれましたから、
良かったんですねども。

池田・ロバートソン会談

——公電を暗記する

伊藤 さつきからのお話をずっと伺っていると、新聞記者は天敵のほ
ずだったのに、その時は良かったんですね。

海原 何人か、私を防護してくれたんですね。

伊藤 そういう新聞記者もいたわけですね。

海原 それが朝日、毎日、読売に一人ずついました。それは助かりま
した。今、あなたは天敵だと言われたけれど(一同笑い)。例えば朝
日は、園田剛民君。これは奥さんのお父さんが、緒方さんですね。毎
日にも読売にもそういう人がいまして、そういう人が弁護してくれた。
弁護の機会があればいいけれど、なければ、「あいつは」となっちゃ
うんですね。

伊藤 敵もあれば味方もあるんですね。

海原 あるんですね。まあ、味方は少なかったですけれどね(笑い)。

とにかく佐藤総理まで、海原は「空」と「海」には冷淡だと言う。何
でそんなことを言うのかと思うんですね。それは最初にちよつ
と申しました長期計画で「陸」をつくることを優先したということだ
ですが、それは極めて単純な理由なんですね。要するに、東京にアメリ
カの兵隊がうるうるしてはいけません。「陸」は早く養成できる。
だから、まず陸上部隊を養成して、そして米陸軍には帰ってもらおう
というだけのことなんです。それはちゃんと説明したんですよ、記
者クラブには。それには同意してくれないんですね。それで「あいつ
は『海空治まらず』だ」と言ったのは、なんと私の後輩の堀田君とい
う内局の課長さんですよ。「あれは『海空治まらず』だ、陸原だ」と
言ったのが伝わっちゃったんです。

伊藤 「陸」を充実させた場合、東京近辺にアメリカのキャンプがた
くさんございましたね。そういうところを入れ替えていくということ
ですね。

海原 そういうことです。と同時に、何度も同じことを申し上げて恐
縮ですが、早く養成できますからね。昔は三カ月で一人前にされたわ
けですから。「海」「空」は、そうはいかんわけです。それは何年もか
かるわけですから。だから早く陸上部隊を養成して、そして米陸軍に
は帰ってもらってということですね。それで米軍の他の部隊について
も……。

例えば、私がずっと後の防衛局長になってからですが、例の成田空
港を造る前に問題になったわけです。次官会議とかが関係閣僚会議の
下にできるでしょう。そこで私は横田基地を返還させようじゃないか、
と言ったんですよ。横田にはアメリカの輸送機が来ている。あれはど
こにいてもいいんだ。東京のそばでなくてもいいはずだ。例えば三陸

の仙台のそばにおつてもいいじゃないか。だから横田なら成田とはずいぶん違うじゃないかと発言したんです、関係局長会議で。

そうしたら、それに反対したのは運輸省でした。それでは米軍が言うことを聞かないだろうと言うから、いやそんなことはない、外務省が交渉すればいいんだ。外務省が嫌なら俺がやると言ったんですよ。東京周辺に何か所あるか、と言ったんですよ。四カ所もあるじゃないか。そんなに持つ必要はない。東京周辺にいらなくては何もない理由が一番薄いのには横田じゃないか。横田は、別に日本に補給に来る輸送機のためではないだろう、アジアの拠点じゃないか。それなら何もあんなところにいる必要がないと言った。そうしたら外務省の局長が、そんなことはアメリカは認めないと言う。認めないというよりやったらいいじゃないか、あなたが嫌なら俺がやってやるよ、と言ったんですよ。まあ、外務省は反対する、運輸省は反対する。

私は言ったんですよ。一体、成田までここから何時間かかるんだと。今でも、道路はいっぱいだ。どうしても成田だと運輸省が主張するなら、東京から成田に行く線を一本つくれと言ったんです。それをつくるという条件なら話は別だけれど、道路はそのまま成田に飛行場ができたらどうなるか、大変だ。同じことを運輸省が管轄しているんじゃないか、と言った。

その時たまたま、河野一郎さんが東京周辺の米軍基地の縮小を言っていたんですね。だから、たまたま私が言うことと河野さんが言うことが合っちゃったんですよ。それも原因して、「海原は河野派だ」ということになっちゃうわけです。最後は、海原は河野派で代議士になると言われたんですから。私は河野さんのところには三回しか行っていませんけれどね。それは説明に行かされました。河野さんは無任所

大臣をやっていましたからね。あれはうるさいから、君行って説明してくれ、と言われて行ったんです。そういうことで三回しか会っていません。

別の例を言いますと、認証官という問題があった。これは林さんがしきりに言いまして、方面隊司令官あるいは幕僚長は少なくとも認証官にすべきだということです。私は認証官の権威をそれほど認めませんが、一般には認められているんですね。例えば検事または外交官では。それがなぜできなかったかという、加藤さんが強硬に、統幕議長と事務次官とは全く同格にしなければいかん、ということを主張していたわけです。そうすると統幕議長が認証官になったら、事務次官はどうですか。認証官ではない。関係ないと思うんですが、加藤さんは同列だと思っているんですね。事務次官と統幕議長は同列、同格だと言っているものだから、結局できないわけです。

私はたまたま河野さんに説明することがありました。大臣に言われて、説明して来いと言うから、行った。その話のついでに、「河野さん、あなたは大変力がおありのようだから、少なくとも方面隊司令官、幕僚長、これは認証官にしたらどうだ。検察官なんていうのは結構下の人もなっている。私は認証官は偉いとは思わないけれど、他の省との釣り合いから言えば、方面隊司令官は認証官であって然るべきだ」と言ったんです。「河野さんは」「わかった。しかしそういう問題は、海原君なあ、中でやっちゃ駄目だ」と言うんです。中というのは役人仲間ですね。上から行かないと駄目だと言うんです。それで「お願いします」と言ったんですよ。そうしたら「やってやる」と言ったんですね。

その後で三矢研究騒動になったわけです。そうしたら河野さんが「こ

んなことになっちゃったから、もう駄目だ。三矢騒動でこれだけ揉めた後だから、認証官問題は当分通らん」と言いましたよ。河野さんは認証官問題に賛成していましたね。私は今でも検事さんなんかを見てると、「方面軍司令官、幕僚長は」認証官になってもいいと思うんです。ただ外務省も大使は認証官でしょう。外務次官は認証官ではないですよ。それでいいと思うんですよ。

いろいろ言ってきましたが、保安課長時代にやったことは、そういういろいろ揉めていること、衝突する物の考え方の整理ですね。それが全てですな。これでよろしいですか。前回、何をしたか、と聞かれました、なかなかいろいろなことがあったんだということを申し上げた次第です。

さてそこで、池田・ロバートソン会談、これは昭和二十八年ですから、私が保安課長になった翌年です。これを今度調べてみて、とんでもない過ちを発見したんです。宮沢（喜一）さんが本に書いているんですね。「防衛庁と充分相談した上でやった」と。相談ゼロですよ。それを、宮沢さんは自分の思い出で平気でそういうことを書いていますね。あの時に行った人は池田さんで、当時は自由党の政調会長です。それで吉田首相の「私設」特使なんですね。ロバートソンは国務次官補なんですよ。宮沢さんはその著書の中で、「保安庁の方と長時間、充分に協議した上で一応の案を作って持って行った」と言っています。

増原さんが私に、「海原な、いま池田さんがワシントンで防衛問題で何かやっているようだ。何をやっているか、君、アメリカ大使館に行って調べて来てくれ」と言うんですよ。私はびっくりしましたよ。

「増原さん、あなた何も聞いていないんですか」と言ったら、「いや

何も聞いてない。池田特使が行くことは聞いているけれど、一体何を話すのか、現に何を話すか、何も連絡ない」と言うんです。

しょうがない、私はアメリカ大使館公使と親しく付き合っていましたから、電話をかけてから行った。「何だ」と言うから、「実はいま池田さんが総理の特使として、ワシントンでいろいろ防衛問題をやっているようだ。ついてはまことに情けない話だが、保安庁は何も知らない。何を話しているかも知らない。これでは困る。ここへは当然ワシントンから電報が来ているだろう。それを見せてくれ」と言ったんです。そうしたら、しばらく考えて「わかった、見せよう」と言うんです。「読むのはいいが写してはいけない。何時間かかってもいいから、ソファアに座って読め、記憶して行け」と言う。しょうがないですね。それでワシントンから来ている公電を見せてもらいました。読みました。一所懸命覚えましたよ。その頃は、まだ頭が柔らかかったんですね。覚ええましたよ。こつちがどういう提案をしているか。

簡単に言いますと、池田さんは防衛の専門家ではありませんね。財政通であつても。しかも、それは吉田さんの「私設」特使でしょう。そういう者は向こうは相手にしないんですよ、プライベートな者は。しかも誰も防衛関係者は入っていない。全部大蔵省だけ。そんな者と防衛問題をやってもしょうがないと言って、アメリカの統合参謀本部は初めは相手にしなかったんですね。ところが、こちらから電報が行って、これは吉田さんの特使だということで、話が始まったわけです。そんなことは一言も宮沢さんは書いていませんよ。書いていない代わりに、逆に保安庁とは充分打ち合わせの上で行ったと書いてあるんですからね。よく、まあ……。善意に解釈しますと、村上孝太郎君が付いて行っているんですね。彼は一高の友人ですけど、同じ時期に

彼は大蔵省、私は内務省に入った。彼のところにはいっぱい情報屋も
行けば、旧軍人も行く。主計官ですから、防衛庁も呼び出しがかかる
と行く。そういう連中といろいろ相談していたんでしよう。その連中
といろいろ打ち合わせをして、案を作ったんでしよう。

保安庁は何も知らないです。それで向こうから来ている電報を読ん
だら、ああこういうことかとわかりました。数字がいっぱい出ている
でしょう。それを暗記しまして、ああ、これを覚えて帰らないといか
んか。書きちゃいけないと言ってますから、しようがない。それで一
所懸命覚えて、帰ってから覚えていたことをサーツと書きました。そ
れを報告したんです。

それをたまたま私は読売の堂場（肇）君に聞かれましたから、この
間、こうして調べてきた。こっちは何も知らないんだと言って、堂場
君に渡したんです。そうしたら「堂場文書」と言って、青山学院大学
に渡した文書の中にそれが入っているんですね。いろいろ昔のことを
書いている人が、「堂場文書」によると日本側の提案はこうだ、と書
いていますけれどね。そういうことなんです。こっちは全然関係が
ない。

数字がいくらか、ということにつきましては、私が調べた限りでわ
かったのは、要するにアメリカは「十の単位を置け」と言ったんです
ね。北海道から九州を考えて。その「十」をアメリカ式に計算します
と、一個師団が三万二五〇〇だからということで、十倍して三二万五〇
〇〇なんです。その一個師団三万二五〇〇の中には「冷凍中隊」も
入っているんですよ。それはアメリカの師団の編成表で計算すると、
そうなるというだけの話なんです。それだけのことなんです。とこ
ろが宮沢さんは、保安庁と充分打ち合わせの上、まとめたんだと書い

ている。とんでもない話ですね。保安庁は全く知らない。ところが、
それが一八万となっているのが、最後まで尾を引くんですね。私がい
るときに、一八万と言っても常に欠員が三万ぐらいあるんです。集ま
らないんですよ。だから思い切って定員を減らせと、私は毎年一回言
いました。法律で減らせと。そう言うと、絶対反対が林さんです。「こ
れは日本のアメリカに対する公約である」「誰が公約したんですか」
「池田・ロバートソン会談だ」。その池田・ロバートソン会談で一八
万というのがどこから出たのか、誰にもわからないんです、いろいろ
聞いてみても。そういうことです。そういうことが多いですね、日本
の政治には。

いろいろと申し上げましたが、そういうことがいっぱいあって捌く
のに一所懸命で、あつという間に五年間の時間が経ちましたな。

伊藤 それを五年間ですか。

海原 例えば他の例で言いますと、航空自衛隊が本格的に訓練を始め
る。そうすると海に出て行くでしょう。そうした時に、救助の問題が
ありますね。ヘリコプターも用意した。じゃあヘリコプターで救助に
行く。「海」も「空」も連携がないんです。私がアメリカに行く前の
三十二年ですが、三十二年になってそういうことを知ったものではな
い。いよいよ航空自衛隊も本格的な訓練が始まる。日本の周囲は全部
海だ。そういう場合の救難態勢の整備が必要だ。ついてはその救難は
一元的に「空」が指揮か区処か、「空」が面倒を見る必要がある。こ
れはないかと言うと、「海」が絶対反対なんです。これまた、他所の指
揮は受けない。区処という言葉がありますが、それも受けないと言
うんです。私がちょうどアメリカに行く前、それが昭和三十二年十月
です。それで私はアメリカに行った。しかし早く決めなければいけな

い、もう始まるんだから。冬の海で落ちたら、せいぜい三十分ですね。それ以内にやらないと危ない。それが前提でヘリコプターを入れるわけですから。ところが喧嘩している。なぜか？ 波長がないと言っています。波長がなければ、どこかで工面したらどうだと言つて、米国に行きます。

私はアメリカに二年いて、帰つて来た。調べてみると、まだ喧嘩していて駄目なんです。よく調べてみたら、一つだけ「海」の教育用の連絡のための波長があつたんですね。これはしかし教育訓練用の波長だから使えないと言つて、「海」は反対していません。そういうふうな両方の部長がそれぞれ言うものだから。そこで私が言ったんです。「わかりました。二年前に私はあなた方にこう言うことが必要だと言つてお願いして行つた。ところが私がワシントンに二年いて帰つて来てみると、まだこんなことで喧嘩している。他所の指揮を受けないとか何とか言つて。指揮でも何でもないじゃないか。お互いの協力じゃないか。私は、これを明日長官に報告する。そして、両方がこういうことで喧嘩して、いまだにできませんと言います。だから、あなた方は帰つたら、すぐ幕僚長にそれぞれ報告してください。明日、海原が大臣にそういうことだと報告する。大臣は直接両方の幕僚長を呼ぶだろう。それを予め言っておきます」と言つて、帰したんです。そうしたら途端にOKになつちやうした。その「海」の方の波長を使うと。そんなものなんです。情けないというか、何というか。

だから外部の人が想像される以上に、旧陸・海軍の反目はきついですね。今のコソボの軋轢みたいなものです。人命救助ですよ。片一方の教育用の波長を使つても、どうつていうことはないじゃないですかね。しよっちゅうやつていないんだから。それをやら

い。それで私がいけない間、結局まとまらない。最後に私が「今までの経過を大臣に言います。大臣はすぐ幕僚長を呼ぶでしょう。どういふことになるか知りませんよ、しかし報告だけしますから」と言つた。これは脅しです。すると、すぐ決まる。ことほど左様に、お互いの恨み、旧陸軍、旧海軍はひどいものです。そんなことがあつたといふことを申し上げておきます。

いろいろそれに類したことがあるんです。その頃の世情を知つていただくために言いますと、いつだか時期は忘れちゃけれど、いま春になると自衛隊が出て行つて、流水観測をやるでしょう。あれをやれと言つたのは私なんです。それは海上自衛隊にも対潜哨戒機が入つた。それまでは陸上の偵察機しかない。そこで、北海道では流水がいつ流れてくるか、地元の人にとっては大変な問題だ。いろいろとプラス・マイナスがある。そういうものを対潜哨戒機なら偵察できるだろう。やろう、と言つたんです。

そうしたら、そこで反対が来た。これは「海」が反対したわけではないんです。内局の部員です。何と言つて反対したか。流水の観測のために対潜哨戒機を飛ばすことについて反対するんですが、理由はソ連を刺激すると言っています。今まで北海道の方で何もなかったのが、日本の自衛隊が流水観測だと言つても、あの周辺は入り交じつていてから、ソ連を刺激すると言つて、「ソ連がそんなことで刺激を受けるとは思わない。しかし心配するなら、予め外務省を通じて言っておけ。こういうことで何月何日から定期的に時間を決めて流水観測をやるから、了解してくれと出せばいいじゃないか」と、私が言つたので始まつたわけ。それ以来当然のことのようになっていきます。だから流水観測をやるうじやないかということでも、内局の部員が反対する

んですよ。ソ連を刺激すると言つて。

そういうことを言い出すと切りがない。南極観測にいま海上自衛隊が船で行っていますね。あれに私が協力しろと言つたら、「海」は絶対反対。なぜか？ 大体、学術会議の偉い先生方は自衛隊に反対している人がほとんどだと。しかも南極に船で何カ月も行っているなんていうのは、そういう先生のための勤労奉仕じゃないか。そんなことはする必要がないと。そういう意見が出るんですよ。私は、「その実態は知らないけれど、もし先生方が今の自衛隊に対してそういう感情を持つているなら、その感情を和らげること、仲間にすることが私たちの仕事じゃないか」と言った。この前も申し上げたと思いますが、敵を中立にする、中立を味方にする、そういう努力が必要だと思つて。だから南極観測に一月以上一緒にいるということ自体、お互いの認識になるだろう。いいじゃないかと。それであの南極観測に、わざわざ法律改正して入つたんですよ。

それから護衛艦、練習艦は、アメリカからもらったPF（パトロール・フリゲイト艦）でやっていたわけです。海上自衛隊の初級幹部の初めての航海はPFでやっていたんです。ところがあれはボロ船ですから、私は練習艦を造れと言つたんです。日本は当時、船の建造では世界一だった。だから新しい将来の海上自衛隊の幹部養成のための練習艦を造るのはいいじゃないかと言つたら、まず反対したのが海幕ですよ。どう言つて反対したと思ひますか。その理由付けです。一隻でも多く護衛艦を持つべきである、と言つてんですよ。そんな将来の幹部の養成のための練習艦に、新しい船を充てるなんていうのはもったいない。そんな金があるなら護衛艦を造つた方がいいと。まさに旧軍的発想でしような。

私はそこでまた笑つたんですよ。当分大丈夫だと。日米安保体制がある以上はそんなバチバチはない。それよりはPFみたいなボロ船で、将来の海を背負う士官候補生が行くなんていうのはみっともない。行つた先でも、例えばハワイあたりでは日本人の一世、二世ががっかりしますよ。日本から練習艦が来ると、何だ、アメリカのPFじゃないか。現にそうじゃないか、調べてご覧なさい。私はいろいろ聞いて知っているけれど。日本は造船では世界一と言われている。だからピカピカのいい練習艦を造ればいいと思うんだ。大丈夫、当分戦争はない、と言つたんですよ。それで最初の練習艦ができたんです。

その後があるんですが、最初の船が出た時に、私は国防会議に替わつていました。そうしたら、そこへその時の幕僚長、内田君から電話がかかつてきた。その内容が面白いですよ。「海原さんが言い出してできた海の練習艦が今日鹿島発ちをしました」と言うから、「君、そんなこと電話でいいのか」と言つたんですよ。「今日行くのなら、なぜそこに俺を呼ばないんだ」。そうしたら、「どうもすいませんでした」と言うけれど、内田一臣幕僚長というのは旧海軍ですよ。それが電話をかけてくる。「それは内田君が言つてくれるのはありがたいけれど、電話でそう言われると、何となしに馬鹿にされた気がするよ。君たちがあんなに反対したのに、俺が強引に押し切つたわけではないけれど、僕が提案したんだ。『それは間違っているだろう。護衛艦の一隻よりは、将来の幹部のために世界をずっと航海できるような船を造つた方がいい』と言つたのは俺だ。そんなに感謝の気があるなら、なぜ今日出航する前に言わないんだ。そうしたら俺も行つて、手を振るよ」と言つたんですよ。そういうことですからね（笑い）。

伊藤 やつぱり「陸原」じゃあ駄目なんですか（笑い）。

佐道 海原先生から言われたというのが、やっぱり癩に障っていたんでしょかね(笑い)。

海原 そういうことを言い出すと、保安課長はいろいろやっているんですから。しかし、こんなことをいちいち言っていると本当に切りがないものですからね。

伊藤 いや、切りがないことを言っていたかどうかと思っっているんです(笑い)。

海原 まるで自慢話をするようなので今まで遠慮していたんですが、これ「前回の速記録」を読んでもみるとまるで私が……。

伊藤 拒否権発動だけ、と(笑い)。

海原 ネガティブなことしかやっていないように取れますから、これはいかんと(笑い)。これは一つ、名譽挽回しておかなければいけないと思っ書いて来たんですけれどね。

流水観測があつたでしょう。練習艦があつたでしょう。それからこれは保安課長ではなくて、後になってからですが、婦人自衛官をつくれと言ったのは私なんです。この前もちよつと申し上げましたか、その時に言いましたかね。たまたま私は明治神宮の奉賛会か何かで頼まれてお話に行つたんです。そうしたら隣に婦人自衛官一佐(大佐)の人が座つた。そしていろいろ話して、そうですね、あなたは一期ですか、もう大佐になりましたか、という話から、実は婦人自衛官制度をつくらうと言ひ出したのは私なんですと言つたら、エツと言つて私の顔をじつと見ているんです。まあ美女に凝視されたわけですから、びっくりした。「実はこの間、十年祭か十五年祭でお祝いがあつたんです。その時に来た人の中に三人、俺が婦人自衛官をつくつたと言つた人がいた」と言うんです。私は、「それはあなた、おそらくその三

人は、例えば規定の文書を起草した、あるいは宿舍を準備した、それから募集その他をやつた。それぞれ婦人自衛官制度を発足させるのにいろいろ受け持ちを持つてやつたんでしょ。それが三人いるんですよ。しかし、そもそもつくらうと言つたのは私なんですよ。しかもその時は猛反対。まず最初に『陸』でやつただけで、陸・海ともに反対。それを抑えてというか、一所懸命説いて、実現させたのは私なんだ。だから私個人としては、婦人自衛官制度をつくつたのは自分だと思っている」と言つたら、本当に目を丸くしてびっくりしてしましたね。

その私には一声もお呼びがかからない。さっきの練習艦と同じですね。ああそうですか、と言う。それは生き証人がいるんだ、ということも言つたわけです。これもこの間ちよつとお話ししましたかね。たまたま、陸幕長以下全員反対でしたが、私がうるさいものだからというので、幕僚が一人指名されてアメリカに行くわけです。「ワシントンには」松金君という旧軍の人が防衛駐在官でおつた。「派遣された幕僚はその松金君に」実はこういうことで来た。海原がうるさいから、とにかくアメリカの婦人自衛官制度を調べてこいということて来ました。しかし幕僚長以下全員反対です、と言つたんですね。それをこの松金君が、それは間違つている、絶対必要だということで、来た幕僚を洗脳したんですな。それでアメリカの婦人自衛官制度をいろいろと見て回つた。それで「派遣された幕僚が」帰つて報告して、やっぱり必要だ、ということになつちやつたんです。そういう経緯がある。

それも、なぜ私がそんな婦人自衛官制度が必要かと思つたのは、たまたま私が埼玉県にある補給廠を見に行ったんです。航空自衛隊だったか陸上自衛隊か忘れましたが、その頃ですから「陸」ですか。そう

したら大の男が補給廠の中で物を整理しているんですね。大の男ですよ。そんな者がやっては駄目だ、これは女性がむしろまいし、精密だ。特にこの前の戦争では婦人挺身隊がずいぶん活躍したでしょう。だから、いざという時には活動させられるし、特にそういう補給廠あたりでは、大の男は表で機関銃を担いで走り回る。婦人が整理をする。そういうふうになるべきだと、そこで思ったんですよ。

たまたま、アメリカの空軍の少将が来ていました。奥さんも将官でした。その二人にある席で、「海原さん、どうして日本では婦人自衛官をつくらんのか」と言われたんです。アメリカでやって良かったという話もあります。私自身の判断と、両方あったものですから、言ったんです。そうしたら先ほどから言っていますように、幕僚長以下絶対反対です。いろいろあるんですよ。しかし松金君がワシントンの防衛駐在官でおって、それが、海原の言うのが正しいということで、絶対反対の返事を持って帰るはずの派遣幕僚を洗脳したおかげで、きたわけですね。

その後がありますのは、「陸」ができた。「海」「空」はまだやっていない。その時には、私は今でも付き合っています。私の後輩に伊藤圭一君というのがいて、私が官房長時代の広報課長です。これがやろうとしたんですね。そうしたらまた「海」「空」から反対されたんです。「陸」はいいだらうが、「海」「空」は違うんだということ、その時初めて、私がどんなに苦労したかわかったというようにことを『朝雲新聞』に書いていましたけれどね。私の名前は書いていません。某局長が非常に苦労した話を私は聞いていた。私自身も『海』と『空』の婦人自衛官をつくる時には大変苦労した」と。しかも防大で女子学生を採用したでしょう。その流れです。しかし私たち

がそんなに苦労したということは、誰もいま知らんでしょね。

そこでこれでやめますが、要するに保安課長も結構いろいろなことをやったんですよ（笑い）。ノー、ノーと言っていたようにしかかかっていませんから、敢えて自己防御をしたわけです。

そこで、先ほどちょっと言いましたが、制度調査委員会の案はご破算にしまして、それから一次計画を作った。これは実際に作ったのは、海堀洋平君です。大蔵省から来ていた。彼が計画官として全部やってくれまして、海堀君に付けた村上君が今度、二次防をやるんです。そういうことで私は将来を考えて、全部そういう人によってもらったんです。決して私がやったわけではないし、防衛課長の久保（卓也）君がやったように書いている人がいますが、そうではないんです。計画官がやった。最初は海堀洋平君。その次が村上信二郎君ですね。こういう人がやってくれたんです。

それで一応保安課長時代の話は置いておきますかな。問題はこの間、調整とプランナーとはどう違うのかとご質問がありましたね。

歴史の「語り部」として

伊藤 お渡しした質問事項はご覧いただいていますか。

海原 質問事項は、今日はそこまで行かないと思ひましてね。

伊藤 では、この次にいたしましょう。

海原 ちよっとくだいんですが、何をやったかと言われて、ああこれ

はいかなんと思つて。やはりヒストリーですからね。細かいことを言わないといかんと思ひましてね。

伊藤 それは全くその通りなんです。

海原 こっちはどこかで書いたたり喋ったりしているでしょう。同じことを申し上げるといふのは、何か悪いような気がしましてね。

伊藤 それはいいんです。これはこれで完結したものですから。

海原 そういうことでしようね。そういうことで、今日は前回の補足だけになりましたが、何をやったかということですよ。

伊藤 どうもありがとうございます。

海原 それは何と何とをやつたと書いて来たんですよ。

伊藤 まだ言い残していることはありませんか。では、この次はこの質問要項にしたがつてお願いします。

海原 はい、今日は前回の補足ということですよ。

佐道 一つだけお伺いしたんですが、堂場さんのお名前が出ましたけれど、戦後の防衛関係の記者の中では本当に有名な方ですね。

海原 有名ですね。私の親友でもありました。それで先ほどちよつと言いましたように、各紙に一人ずつ私は本当に友人がいたんです。朝

日は篠原君、読売は堂場君。

伊藤 篠原宏さんですか。

海原 これは旧海軍です。ホンチャンの旧海軍です。ご存知でしょう。彼が朝日では親しくしていました。堂場君というのは、私は個人的に付き合っています、個人的にも良く知っています。堂場君は大学に行きましたね。「君、今の学生に真面目に教えても駄目じゃないか」と言つたんですね。青山学院大学の話を聞くと、こうだと言うから。彼は真面目なんですよ。「海上交通の安全の確保」なんていう論文を

書きまして渡しているんですね。彼は真面目過ぎたと思いますね。私も実は役人を辞めた時に、どこかの大学の講師になりたいと思つたんですよ。日本の社会では大学の先生でないと相手にしてくれない。それで堂場君に、「どうだひとつ東海大学に、君は松前さんと親しいよ。だから、紹介してくれ」と言つたんですよ。それで堂場君に連れられて霞ヶ関ビルに当時「松前さんの事務所が」あつたので、行きまして、松前さんに会つた。そうしたら、「ああ結構です」と言われたんですけれど、「私はいい。国際部長に会つてくれ」と言うんです。

それで降りて来て、堂場君に、「僕は大学の学長の松前さんに会つていいと言われて、もういっぺん面接か。そういう難しいところは私は嫌だから願ひ下げだ」と言つて断つた。それでしようがない、評論家になつたんですよ。私は大学の講師という肩書きが欲しかつたんですよ。それを世話してくれたのが堂場君なんです。その分ずつと付き合い合つていましたね。それで例の『日本の安全保障』は堂場君と一緒にやつたわけですね。ですから彼が死ぬまで、です。

最期はご存知か知りませんが、鵜沼の家のそばに、いつも行つていくレストランがあるんです。そこで昼飯を食べようとして、座つていく姿勢のままで亡くなつたんです。だから最期は、どうでしょうね、苦しまなかつたんでしょうね。昼飯をそのレストランで注文をして、食事が来たら、その時もう息がなかつたんです。そういう最期なんです。私は本当に堂場君と知り合つて良かったと思ひますね。あの人はいろいろなことを詳しく説明していましたよ。

それで堂場君の話になりましたから、「ある時、堂場氏は」私の前で、ちよつどいま伊藤さんの位置で、しきりに文書を見て何か言っているんですね。それで「何だそれは、堂場君」と言つたら、戦闘機の

改造計画なんです。ジェット戦闘機T33を入れたでしょう。その後でどうするかということが問題になった時に、もう一つ同じエンジンを付けるという案なんです。どうしたんだと言ったら、「俺のところに「情報」来るんだ。海原さん、防衛庁ぐらゐ取材しやすいいところはありますよ」と言うんです。黙っていても来るんだと言うんです。それは悲しいかな、歴史のない官庁ですね。とにかく新聞記者が別に取材に歩かなくても、読売の堂場ということになると、自然に来るんだと言うんですよ。ちょっとそれを寄越せと言うと、それは駄目だと言う。「新しい戦闘機を造る必要はない。T33にもう一つエンジンを載せればいいんだ」という案が、堂場君のところに行くわけです。だから彼は詳しいわけです。ちょっと一端を申し上げましたが、とにかく信頼できる人ですしね。

佐道 先生がご覧になっても、堂場さんの取材内容というのは他の方よりもかなり正確ですか。

海原 そうですね。しかし正確かどうかということになると、いま言ったように、投書で仕入れた知恵と実際はだいぶ違いますね。それは一部の幕僚がこうしたらいいと思っただけで、別に航空幕僚監部としてそういうものを主張する段階ではありませんでした。いろいろな考え方があつたというところはわかるわけです。こっちは知らないんだ。次の「一〇〇シリーズ」をどうするかということをやっているわけでしょう。

伊藤 さつきからのお話を伺っていると、保安庁あるいは自衛隊でもいいですが、自分の考えをどんどんリークして、新聞で書き立ててもらつて、ということですか。

海原 そうです。また新聞記者諸君もそれを求めるものですから。何

でもいいから、ワーツとやるということですね。そういう一般の空気でしたね。また、ある意味ではそれでいいのかもしれないけどね。伊藤 他の官庁もある程度は新聞記者の操縦というのは、そういう形でやっているんじゃないですか。

海原 と思います。規模は違うでしょうし、材料は違うかも知れませんが、似たところがありますね。それで冒頭、新聞記者との関係という、内務省に入った時の経験を申し上げたわけです。それで今日も言いましたが、記者クラブとオフレコでやろう、背景説明で。そうしたらそれはクラブとしてはできない、しかし俺のところとは、となるわけです。こういうものだと思ひましたね。そこで個人的に、自分なりの判断でいろいろやってきたということでしょうな。

河野 池田・ロバートソン会談の内容は、アメリカ大使館で記憶していらつしゃつたものを、バツと堂場さんにお渡しになつたんですか。

海原 それはすぐではないですよ。後です。彼も他を取材して、防衛庁が協力したと言うから、協力はしていないと言つたのです。増原以下何も知らないの、私は増原さんから命令されて、アメリカ大使館でワシントン発の電報を頭で記憶して、それをメモしたのがこれなんだと言つた。これは文書でも何でもない、「海原メモ」なんだけれど、この「海原メモ」ができた背景はこうなんだ。「宮沢さんは行く前に勉強してから行ったというように言っているけれども、それは全く違う」ということで渡したわけです。

伊藤 それは後になつてからですね。

海原 ええ。

河野 だいぶ後ですか。

海原 だいぶ後と言うか、帰つて来てからですね。帰つて来てから宮

沢さんはあちこちで話しているんですね。どうしてそれを言ったのか。先ほど申しましたように、誰か防衛庁の昔の軍人さん、当時の「天川情報」ではなかったか。ちよつと名前が出てきませんが、情報を買って歩いている人がいましたな。そういうものがありました。村上孝太郎君は防衛担当の主計官ですから、あちこちから売り込みもあるわけです。それだけのことですな。しかし、宮沢さんが書いておられるのでちよつとびつくりしましたね。充分に保安庁と打ち合わせをしたと。

この前申し上げたでしょう、経団連の千賀鉄也君。あれを見てびっくりしましたよ。計画は出せなかったんですからね、それを書いてない。五分ばかり喋ったらそこで打ち切りになった。その前の日には、安川君と私が、そんな経団連の作った案なんか、アメリカでは問題にしませんよ、と言ったら、「わかりました。じゃあこれはもう言いません」とわれわれには言いました。そう言っておきながら、翌日私が行くと、私のいる前で……。いないところなら、また話は別ですよ、私が案内して、私がいる前で堂々とやるんですからね。しかもちゃんとして読売新聞では、「私たちが作って渡した、しかしこれにはあまりアメリカは興味を示さなかった」ということになっているでしょう。示さなかったんですよ、受け取らなかつたんです。受け取り拒否なんです。それを、あれには写真入りで、経団連の千賀事務局長がこういう案でしつとっているわけですからね。世の中はそういうことが多いんですな。だから私たちはそういう真相を、皆さん方が知っていたたく機会があつたらありがたいと思つています。

伊藤 どんどんそういうことをお話してくださつた方がありがたいんですが。よろしく願ひします。

海原 この前、なるほどこれはいかな、と思つたんですよ。こつち

があまりそういうことを言うと、それだけで時間が経ちますからね。そう思つて全部大したことはないということをやつていたんですが、そんなことです。

伊藤 われわれも最終的にはお話をちゃんと系統的にまとめていきたいと思つております。

海原 それはどういふふうにご利用されてもいいですが、要するに『自衛隊十年史』なんて、これだけなんですからね。すらつと書いてある。皆さん方が事実を知るのは、これだけしかないでしょう。何もありません。極めてスツと事が運んだようですが、とんでもないですよ。アメリカの統合参謀本部議長トワイニングまで引っぱり出したんですからね。しかも向こうからのレターが、トップの二人で違うでしょう。増原さんの話は今度資料を持ってきました。これは憲法調査会で喋っているんですね。なるほどと思ひました。五年ぐらゐすれば憲法改正ができる。そういうことで制度調査委員会の諸君もやつたんですよ。あれは、そういうムードです。服部さんあたりがね。改進黨は特に、そういう面では激しかったですから、「新国軍」の建設が可能だと思つた。しかし、私はそんなことは夢物語だと思つた。そこで、小さく足下から堅実なものをつくつていこうじゃないかということをやつたんですけれどね。今はどうなつているか知りませんよ。

もう一度言いますが、「調整」という言葉の意味と、プランナーというものについてお聞きになりましたから、なるほどそういうふうに分分析されるのかと思つてね。これは難しいなと思ひましたね。極端なことを言うと、ほとんど毎週何か採めごとがありましたよ。

伊藤 その当時は、ご自分では記録を作つておられませんでしたか。

海原 全然作つていません。私はその頃は、日記なんていうのは書く

気がありません。また、それだけの余裕がなかったですね。

伊藤 忙しくて、ですか。

海原 そういうことです。忙しいと疲れるんですよ。

伊藤 でも会議などで手帳をつけられるでしょう。

海原 せいぜいメモですね。それもしかし、私も防衛関係と縁を切つてずいぶんなるでしょう。評論家としての生活上必要な物は置いておりますが、それ以外の物は全部、誰にということもありませんし、子供はいませんし、整理しちゃったんですよ。

伊藤 捨てちゃったんですか。

海原 ええ。だって、こんなことになるとは思わないですから（笑い）。こんなことになると思っていいたら全部残して置いてね。

伊藤 思い出すようになりますからね。

海原 人間の記憶が駄目だと思うのは、例えば林敬三さんについても、最後は統幕議長ですが、それまでに第一幕僚長をやっているんですね。しかし、記憶では時々、時期が前後しちゃうんですよ。だから、あつ、まだこの時は統幕議長になっていなかったな、ということがあるんですよ。そういうことがあります。

それで伺いますが、「他人の不幸は密の味」という言葉があるんですか。私はそれを知らなかったですよ。それを体験した。どういうことか。特に女性の方に伺いますが、三月十日は何の日でしょう。

伊藤 海原先生の奥さんの誕生日だったりして（笑い）。

海原 そうじゃない、公の問題です（笑い）。三月十日、すぐ出てきませんか。そうですか、無理もないです。それは敢えて伺ったんです。陸軍記念日です。三月十日は昔は陸軍記念日だったんです。そこで、三月十九日にある有名な評論家が『ジャパンタイムズ』に、その三月

十日のことを書いています。名前を言ったら、みんな知っていますよ。

伊藤 いつ頃の話ですか。

海原 今年の話です。今年の三月十九日の『ジャパンタイムズ』です。それにどういことが書いてあるか。「自分は毎朝NHKのラジオを聴く」。それは、政治評論家です。「三月十日の朝のNHKのラジオを聴いた。そうしたらアナウンサーは東京大空襲の日であるということとは言った。それだけだ」と言うんです。「自分はがっかりした。私たちの年代（その人は私より二つぐらい年下ですかね）では、三月十日というのは昔の陸軍記念日だ」。そこまではいいですよ。「それが絶対に忘れられない記憶だ。ところがNHKともあるうものが、単なる東京大空襲の日、だけで終わってしまった。まことに、これは残念である。情けない気がする」。ここまでもいいです。その後です。「陸軍記念日は（と言って説明するんですね）、乃木司令官が奉天に入城した日である」と……。ね、驚くでしょう。総司令官は大山元帥ですね。ところが、総司令官乃木希典中将がロシア軍を破って奉天に入城した日であると。その後で、敵の大将はクロバトキンで、これと歓談をしたと。場所は、水師営だと。完全にこれは間違っている。奉天と旅順と一緒になっちゃったんです。

さあ、私は見てびっくりしました。びっくりしたけれど、彼もどうとう俺と同じように、「まだらボケ」になっちゃったなと（笑い）。NHKの放送を批判して、けしからんと言って、われわれの時代に絶対に忘れないのは陸軍記念日であると言って、その後で陸軍記念日というのは、日露戦争の時に乃木総司令官が奉天に入城した日だと言う。どうしますか。水師営の名前が出ているんですよ。私もよく知っている人です。私のお客でテレビにも出た人ですけど、本人に、何でお

前、あんな間違つたことを書いたんだと言うと、大ショックだろう。言うべきか、言うべからずか考えましたよ。やっぱりあいつもボケたかと思いました。

それで私の結論。やはり本人には言わない方がいい。それで『ジャパントイムズ』に電話した。しかも総務部に電話して、実は三月十九日のこの人の論文を読んだけれど、事実が違っている。こんな違つたことを『ジャパントイムズ』が掲載するのはおかしいと。あれは日本語で渡すんですね。それを翻訳家が訳す。しかし、誰かが読んでいるはずだろう。三月十日の奉天入城の日と、一月一日の旅順開城の日を完全に混交している。そんなことぐらい、『ジャパントイムズ』ともあろうものが、誰かがチェックする段階でわからんといかんと思うんだがと言ったら、「失礼ですが、どなたですか」と聞くから、「いやいや、名前は言えない。一読者である」と言つたんですけれどね。

私は、訂正の記事が出るかと思つたんです。新聞社として出すか、本人が出すか。しかし、全然出ない。こういうものか。みつともなく出せないんですね。同時に悲しくなつたですよ。旅順開城と奉天入城と間違えて、しかもNHKに文句を言っているんですから。これがなければまた別で、単なる思い違いだけけれど、けしからんと言っている。これは参つたですね。これはどうして直さないんでしょうね。私にはそう思つて、新聞に直させるのが一番いい。新聞自身が訂正するか、それとも本人の訂正談を入れるか、いずれにせよ、訂正は『ジャパントイムズ』がやる方がいいだろうと。一晩寝て、そう考えたんです。その後毎日『ジャパントイムズ』を見ていますが、全然出ない。頼破りですね。

伊藤 やはりそれは、『ジャパントイムズ』が本人に言つて、本人が

思い違いをしたということにすれば……。

海原 そういうことを、『ジャパントイムズ』の総務部の人があつてくれると思つたんですね。

伊藤 やればいいんですね。だって、放つておけば後々恥になるでしょう。

海原 そうですよ。だから本人に言うのは、いきなり伊藤先生に電話するようなものですよ。『あれ駄目ですよ』と言つたつて、びつくりしちゃうし、恥ずかしいと思うだろうから。その人は政治評論家で、今でも活躍している人ですからね。だから本人に言うつて、ちよつとショックが大きいからね。間接的に『ジャパントイムズ』の方から、「先生、あれはちよつと内容が違つていませんか」「違つていました」ということを言わせようと思つて電話したんです。今はなかなか活字になつた事柄というのは訂正できませんね。どうですか、私の判断は間違いましたかね。

伊藤 いや、それが一番いいやり方だと思いますね。それをうまく新聞社の方がやつてくれればね。やっぱり書いた人だつて、「私、ボケました」と。

海原 僕が言つたら、余計「ああつ」となつちやいますね。家族ぐるみで知つていますからね、奥さんも娘さんも。本来、真の友情なら俺がかけるべきか、かけざるべきかと考えたですよ。

伊藤 結構悩まれるんですね（笑い）。

海原 悩むこともあるんですよ（笑い）。その話をしたら、女房が言つた言葉が「他人の不幸は密の味」ということなんです。

伊藤 そこに落ちるんですか（笑い）。

海原 そうか、そういう言葉があるのか、なるほどなと思ひましたよ。

こんな世捨て人みたいな生活ですけれども、いろいろなことがありましてね。

伊藤 世捨て人ですか。

海原 世捨て人と言うより、世捨てられ人ですよ。世の方から捨てられている。わずかに先生方に相手にしていただいている。

伊藤 何をおっしゃるんですか。

海原 今度また一高の古い連中に話をする事になっていきますけれど、もういなくなっちゃうんです。今の一高を出た若い連中が何も知らんから、先生、安全保障の話をしてくれと言う。北鮮の問題もありましたからね。あんなTMDなんてできっこないと言ったんです。昔のSDIというのを知っているかと聞いたら、知りませんと言うから、じゃあそんな話でもしますか、と言ったんですけれどね。「語り部」という言葉がありますが、その心境ですね。

伊藤 ずっと健康を保たれて……。

海原 いや、健康の方はいいとして、頭がだんだん……。

伊藤 それも健康のうちですから（笑い）。この間の北朝鮮のあの問題を、ちゃんと解説してくださいとさるところまでお願いしますよ。

海原 それができませんのは、私はもう直接防衛庁や運輸省に電話できないんですよ。知っている人がいますけど、私が聞いて書くと、みんな嫌がるんですね。要するに取材の元は新聞じゃないんです。

伊藤 それで、どういうふうに判断なさるんですか。

海原 ついでに言っておきますと、今度のこと、新聞に「防空識別圏」という言葉が出ましたね。ずっと見ていると、あれに誰も文句を言わないですね。防空識別圏になったから船は引き返したと言う。おかしくありませんか。防空識別圏ですよ。海の上の話じゃないんです

よ。ところが、どの新聞を見ても、防衛庁がそう言ったんでしようね。これは外国の飛行機が日本に来る時には、防空識別圏を越える前に通報しないといけない、それだけのことなんです。それを通報しないで入って来たら、待機している自衛隊の飛行機が、敵か味方かということ、不明機に対して飛び上がって聞くわけです。それだけのことなんです。ところが今度のこと、新聞に防空識別圏という言葉が出てきまして、これを突破することはやめた。そんな意味はゼロですよ。私は、そこで今の新聞の知識を疑うんですね。あれをご覧になったら、防空識別圏というのが海の上にもあつてね。

伊藤 海の上にあるような気になりますね。

海原 そうでしょう。そうなっていますね。とんでもないです。それからずっとテレビも見ていますが、誰も言わないんですね。だから、どうなっているんだろうかと。

佐道 ある国の領海に逃げ込んだと言うのなら、わかるんですけどね。

海原 テレビを見ています、防空識別圏と言うから、エツと思つたんです。防空識別圏を越えるから、そこで追跡を諦めた。何の理由もないですよ。ということ、国会で誰かが質問をするかという、誰も知らない。私を知る限り、いわゆる軍事評論家でそれを問題にした人はいませんね。そうすると、防空識別圏というのは海の上にもあるように思いますね。

伊藤 ちゃんと地図に書いてありましたから（笑い）。

海原 そう、書いてありましたね。あんなものは空の上にあるだけですね。ついでに言っておきますと、それに関連して、ニクソン元大統領のメモワールが間違っていたんです。それには、日本が一九八六年に領空侵犯を三五〇回されたと書いてあつた。そんな日本じゃ困ります

ね。それは、日本の防空識別圏に入って来る飛行機に対して、通報がないものだから航空自衛隊がスクランブルをかけて、飛行機が飛び上がった回数なんですよ。

伊藤 領空じゃないんですね。

海原 領空じゃないですよ。それを領空侵犯したと書いてある。読売新聞に掲載されたものですが、今度持って来ましょう。こういうふう

に新聞の活字になったのは、みんな本当だと思うでしょう。

伊藤 それは独り歩きますよ。

海原 しますね。今度、防空識別圏を見たら、海の上に書いてありましたね。

伊藤 新聞は立体的なものではないですからね。

海原 それでハアーツと思っただんですけれどね。

伊藤 そうですね。全然気が付きませんでした。

海原 これは申し上げて良かった。何でも私は申し上げますから、要らないものは全部後で削ってください。

伊藤 何でも言ってください。

海原 私は、こんなことを言ってもしようがないと自分で思っちゃうものだからね。速記の方がご苦労されるからと思つてカットしちゃうんですが、後で考えてみると「ああそうかな」と思いますね。これはオーラルヒストリーだから、実際にあったこと、体験したことを全部申し上げた方がいいと。うるさければ、先生方の方から「それは要らん」とおっしゃるだろうと。そういうふうな考えを変えましたから。

伊藤 是非、その精神で、今後ともお願いします。

海原 今日の収穫は防空識別圏ですか。

佐道 いや、他にもいっぱいあります。

海原 困りますね、活字になったものは。「三月十日」には参りましたよ。

伊藤 「密の味」というのが、どこに行くのかと思つていましたが。

海原 私が心配したのは、あれは外国人が読むんですね。そう思っちゃいますよ。

伊藤 あれは、かなり有名な出来事ですからね。

海原 文句を言った人が間違えているんですね。文句がなければ、私も電話して、「おい、お前さんボケたんじゃないか」と言えますけれど、その前に文句を言っているんですからね。私もだんだんボケますから……。

佐道 どうもありがとうございました。

〈以上〉

海原 治 オーラルヒストリー

第8回

開催日：1999年5月13日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第8回 質問項目

今回は、前回の保安庁保安局保安課長時代のお話の補足と防衛庁防衛課長になられたときのお話を中心に伺いたいと思います。それについてお話をいただくなかで、関連した事項についてご質問させていただきたいと思います。

- ① 前回のお話の関係で、補足すべき部分があればお願いいたします。
- ② 保安庁設置後、駐屯地の位置および指揮系統を定める訓令や事務調整に関する訓令など、保安庁の組織や運営に関する決まりが早速制定されています。その当時のことで、ご記憶のことがあればお願いします。
- ③ 昭和 27 年（1952 年）10 月、保安庁にはそれまでの吉田首相の兼任ではなく、木村長官が専任で就任されます。木村長官はどのような方でしたか。何か印象に残ることはありますか。また、林第一幕僚長、山崎第二幕僚長（海上警備隊総監）についてはどのような印象をお持ちですか。特に林氏は昭和 29 年に初代の統幕議長になりますが、二代目は昭和 39 年に杉江一三氏が就任されます。この間 10 年ですが、この事情についてお聞かせ下さい。
- ④ 当時、ソ連機による領空侵犯がかなり問題になっていたと思います。アメリカとの協力など、保安庁側はどのように活動されたのでしょうか。また、この時期は、米艦の貸与、MSA 日米交換公文発表など、アメリカとの関係も具体的に進んでいます。海原先生は、当時どのような活動をされていたのでしょうか。
- ⑤ ニクソン副大統領が来日され、憲法について発言されたり、練馬部隊視察などをされていますが、何かご印象はありますか。
- ⑥ 昭和 28 年 9 月には、吉田・重光会談などで、軍備増強、自衛隊設置などの方向で話が進みますが、そういう状況をどのように見ておられましたか。また、このころ、日米六者会談で、日本の防衛計画が検討されたと『防衛庁十年史』にあります。それについてご記憶のことがあればお願いします。
- ⑦ 昭和 29 年 6 月、防衛庁設置法、自衛隊法、日米相互防衛援助協定にともなう秘密保護法が公布されます。海原先生は、すぐに防衛庁防衛局第一課長に就任されますが、組織作りという面で、それぞれの法案成立にどのように関与されましたか。また、それぞれの内容について、どのような感想をお持ちでしたか。また、防衛庁防衛局第一課長になられて、最初に手をつけられたのはどのようなお仕事ですか。
- ⑧ 昭和 29 年 12 月、鳩山内閣が成立します。再軍備を主張する鳩山内閣の誕生は、防衛庁内の空気に何か変化をもたらしましたか。また、海原先生は、首相在任中の吉田総理と数人で会食した折、独立後の国防問題について吉田首相に尋ねられたとのことですが、どのような折に、どのようにお聞きになり、どんな答えだったのでしょうか。
- ⑨ 鳩山内閣誕生後、防衛庁長官は昭和 29 年から 30 年にかけて、第一次、第二次、第三次鳩山内閣の成立に対応して大村清一（29 年 12 月）、杉原荒太（30 年 3 月）、砂田重政（30 年 7 月）、船田中（30 年 11 月）と、ほぼ 4 ヶ月おきに交替します。特に杉原長官は国防会議法案不成立の責任をとって辞任したわけですが、各長官についてどのような印象を持っておられますか。
- ⑩ 砂田重政長官は、伊勢神宮参拝、部隊視察のため西下する途中記者会見し、新防衛方針構想を明らかにしました。それは、(1)国防省設置、(2)郷土防衛隊予備幹部自衛官制度、(3)元陸海軍権威者による防衛庁長官の顧問会議、といったものです。その他、国防会議法流産にともなう防衛閣僚懇談会設置なども行われます。それぞれについてご記憶のことをお願いします。

人事異動の舞台裏

伊藤 前は、保安庁の保安課長の時代のお話を伺いましたが。

海原 最初は、言い残したことがないか、ということですね。それから入りますが、その前に、忘れないうちに、ちょっと関係ないことを伺っていいですか。先生、どなたか法学の先生がお友達におられますか。

伊藤 法律ですか。僕はほとんど知らないけれど、あなた「佐道氏」なら知っているんじゃない。

佐道 ええ。

海原 知っていますか。では急ぎませんけれど、いつべん聞いてください。私はもう誰もいないものですから。それは例えば成田の滑走路の問題があるでしょう。反対があつて動かない。その前に沖繩の一坪地主の問題がある。あれは、私たちが法律の勉強をした時には「権利の濫用」だと教えられたんです。その「権利の濫用」という考え方が、今あるのかないのか知りたいんです。権利だからといって、それを濫用してはいけないんです。「一坪」なんていう地主はないですよ。それを「一坪地主」と称して、それが何千人もいて、その中に国会議員もいて、それでどうだこうだと言うんでしょう。米国あたりでは、例えば公のために土地を取得したい時には、行ってすぐに一ドルで押さえちゃう。日本にも土地収用法というのがあつて、全くと生きていないですね。なぜそうなつているかというところ、いつとき「土地収用

委員会」委員の人がやられましたからね。だから身の危険を感じて、誰も委員にならなかつた。その意味で臆病なんですね、日本人は。残念だと思ふんだけど、またまた成田の滑走路で、反対があつて駄目だから計画を変更するとか、日本の国際的な約束を変更するとか新聞に出るでしょう。そう書く新聞が、どうして「権利の濫用」ということを言わないのかと思う。今、その「権利の濫用」という観念はなくなつていのかどうか、それだけ一つ聞いてください、急ぎませんから。

私は東京帝国大学法学部法律学科の学生の時に、最初に教えられたのが「権利の濫用」ということです。権利の行使には義務が伴う。公序良俗というものがあるんだと。これは俺の権利だと言つて主張したのでは、世の中何もできない。そういうことを嫌と言うほど教えられたんですけれどね。末弘さんとか、民法の穂積さんとかからね。今は平気で、国会議員まで沖繩の一坪地主でしょう。一坪の土地を持つていて、それを地主と言えるのか、と言うんですよ。しかもそこに住んでいない。要するに、反対運動のための手段でしかないわけですね。公然たる政府の施策に対する反抗ですよ。一体、そんなものを認めていいいいのか、ということ、ある新聞に書きたいんですけれどね。

伊藤 書いちゃつたらどうですか。

海原 「権利の濫用」なんていうのは昔の観念だ、と言われれば駄目ですから。今でもあるのかどうかということ、ちょっと教えていたいただきたい。

伊藤 法律があつて機能してないと言つても、死んでしまつたわけではないはずだと思いますけれどね。

海原 しかし法律で「権利の濫用」というのが基本的な原則だという

教えが、あるかないか、なんですよ。それを守るか守らないかは別の問題ですよ。そういう教えを大学でやっているかどうか。くどいようですが、私たちはそれを最初に言われましたね。権利というものは決して絶対的なものではないということを。「権利の濫用」ということを考えろと。なるほどと思ったんですけどね。まさに成田の問題なんか、滑走路ができないと言っているんですよ。それで計画を変更すると言っているんですよ。どうかしているんじゃないかと思うんだけど。それをよっぽど書くこうと思ったけれど、待てよ、いまそんな考え方は死語になってしまっていて、学校で教えられているかどうかを知りたいと思うのです。

伊藤 もしそれが死語になっていたら、書かないですか。

海原 いや、書きますよ。

伊藤 だったら別に問題ないじゃないですか。

海原 その場合には、死語になったことが問題だ、ということを書くんですよ。

伊藤 実際問題、死語になりかかっている。だから、そうになっているわけですからね。

海原 そうでしょうね。

伊藤 あまりいろいろお考えにならないで、どんどんお書きになった方がいいと思いますよ。

海原 いや、この歳になるといろいろ考えるんです(笑い)。

伊藤 もうこの歳になったら、むしろ考えないんですよ(笑い)。

海原 それはおっしゃる通りの考え方もありますね。本当にあんなことでもいいかと思うんですね、日本の将来は。

さて、これが制度調査報告の文章です「佐道氏にコピーを渡す」。

それを見ますと、増原さん自体が、憲法改正は五、六年すればあるんじゃないかという考え方ですね。それで「新国軍」なんて言っているんですからね。それは一部だけです。厚いものですから、関係のところだけ持って来ました。

伊藤 やはり補足すべきことはいろいろございますか。

海原 そうですね。速記録を読んでいると、いつも反省するわけですがね。もうちよつとこう言えば良かったなと思うんですがね。

伊藤 いや、そのためにお話をさせていただいて記録を取っているんですから。

海原 この前、これはもう絶対に速記にはしないでくださいと言ったことも書いてありますから、まずいことは言うべきではない(笑い)。

成田の土地のことですけれどね。

伊藤 いいんです。これは外に出るものではありません。ですから、そうおっしゃりたければ、そうおっしゃっていただいて、しかし速記録には載る。ただ、表に出そうということになった時には、それは全然別ですから。

海原 いや、出ても構わないんですけれどね。そういうことがあったということを知っていただきたいということですね。

伊藤 ですからこれは、いずれ先生とちゃんと契約をしなければならぬんですが、いつ、どういう形で公開できるかということですね。

海原 私はみなさん方のお役に立てばと思って言っているわけですからね。自分の整理にもなりますしね。

伊藤 ですから、いろいろ憚るところもしゃべってください(笑い)。

海原 もう憚るものは何もないんです。それこそ怖いものはないんですよ。昔から怖くはなかったですけれどね(一同笑い)。

佐道　ますます怖くなくなつたんですね。

海原　もう、ますます。誰も助けてくれないけれど、身を縮めて生きていくこともないですからね。そう言うとお前みたいに勝手なことを言っていて、という奴がおるんですね。そいつは決まって「君なんか好き勝手なことを言う」と言う。「冗談じゃないよ、言うべきことを言っているんだ。好き勝手なことを言っているんじゃないんだ」と言うんですね。それはわからんですね。

そこで「前回の」補足をします。まず第一は、ニクソン元大統領の領空侵犯「発言」の問題ですね。これは読売新聞に出ていました「一九八八年三月三十日付読売新聞の一部コピーを配る」。そこに赤い線が引いてあります。「……ソ連はその腕力を誇示し続けている。一九八六年にソ連の軍用機は日本の領空を三百五十回侵犯しており、八七年にはさらに回数が多いと見られる」。こういうことをアメリカの元大統領が言っているわけですよ。この『戦争なき勝利』の中に書いてあるんですね。この記事を見た時に、私は当然日本の防衛庁や外務省の人が読んで、異議を申し立てるんじゃないかと思つたんです。だけど、全然そんなことは何も言わないんですね。それが私はちよつと不愉快ですね。

一体、外務省や防衛庁の関係者が不勉強なのか。読売新聞だって、これは？と思わないか、ですね。見てください、日本の領空侵犯の回数、この間は間違えましたが、ソ連の軍用機が一九八六年には三百五十回も領空を侵犯していると。そんなに領空侵犯をされて、それを黙って見ているのでは、日本という国は情けないですよ。完全に間違いです。これは緊急発進の回数なんですよ。緊急発進でスクランブルをかけた回数と、領空を侵犯した回数とをアメリカの元大統領が一緒

にしているんですね。誰かが書いたに違いないです。それを見た日本の新聞、読売新聞も、誰もそれに対しておやつ？と思わない。この辺が私にはちよつとわからんですね。これが一般の人の気持ですかね。

しかも、そのニクソンは次に、「八六年にソ連は千島列島で、軍事演習を行ったが、それは北海道侵攻の模擬演習だった」と書いてあるでしょう。これはどういうことか。この根拠となっていますのは、私の推測ですけども、当時、竹村健一君が『世相巷談』というのを、日本テレビでやっていました。私も週に二回出ていましたがね。その席に栗栖元統幕議長が来たんです。有名な栗栖弘臣君で、内務省では私の後輩ですが、よく知っています。いい人です。この人に対して竹村君が、何か最近変わったことはないですか、と聞いたわけです。それは放映の前に一応打ち合わせをするんですね。今日はどういうことを話しますか、ということ。だから竹村君が聞くわけです。そうしたら栗栖元統幕議長が、「いや、実は」と言つて話したのが、このことではないかと思うんです。その根拠は間違っているんですね。栗栖君が言ったのは、最近ソ連が千島列島付近で大演習をやつたという情報がある、ということですが、これは二つの情報が一緒になつちやつたんです。ソ連が太平洋の南の方の海洋で演習をやつた。これは事実なんです。それが引き揚げて行つた。ウラジオに行くんですね。それと、北海道の北、千島列島のところをたくさん船が横切つた。この二つが一緒になつてしまつた。横切つた船は、別に演習帰りの船ではないんです。それをどうしてか、統幕議長の栗栖君と一緒にしちやつて、ソ連が北海道で演習をやつた、となつちやつたんです。

私もたまたまそのテレビを見ていたんですね。おかしいと思つて、防衛庁の伊藤圭一君という私の後輩に電話したんです。そうしたら「い

や、あれは間違いです」と言う。二つのことを一緒にしちゃったと言う。「それならそれでちゃんと取り消しをしないと困るだろう」と言ったんですね。それで後で防衛庁は国会の委員会です。訂正したんですね。しかしその訂正というのは、新聞や雑誌には出ないんですね。栗栖君がしゃべったことが、そのままアメリカの元大統領によって引用されている。これは存在しない演習です。こういうことが多いんだ、ということをご参考までに申し上げておきます。

しかし、この前申し上げたように、そういうものがいつぱい出て活字になると、ちよっとこれは訂正のしようがないですね。また栗栖君は、仮に外国の軍隊が攻撃してきた時には対抗する根拠がない、だから個人の正当防衛でどうだこうだと、あるところで言ったことがあるんです。そんなことではなくて、国としての対応ができるはずですよ。なぜそれを言わないか。個々人の正当防衛の権利というか、それを集合して行動するなんて、そんなことはあり得ないですよ。そういうことで、非常に困ったことを栗栖君はいろいろなテレビで言ったんですが、その一つがこれです。これはご参考までに、ということですよ。北海道で「ソ連が」演習をやったと書いてあるでしょう。とんでもないですよ。伊藤君が後で、国会の委員会等で説明をして訂正をしたんですけれど、そういう訂正は出ない。残ったのがこっち「栗栖発言」の方だけなんです。これが前回の補足の一つです。

ご質問に、保安庁でいろいろ訓令ができています、それに私がどう関わったか、というお尋ねがございましたが、訓令自体は後藤田君の時なんです。保安庁で法律ができて、部隊ができますね。その時に作ったのがいろいろ訓令で、私が行った時には、そういうものは一応済んでいるわけです。ですから、差し当って訓令その他について決め

るものはありません。と同時に、法規課長に私の同期の麻生（茂）君がおりまして、これが非常に詳しい。保安庁の法制局長官だと言われたぐらいに真面目な人です。ですから訓令その他のことで、何をやってたかというご質問に対しては、私が行った時には、訓令というものは一応全部済んでいたということをお知らせします。

それから、個々の人についてどんな感じを持っているかということでしたが、これは人間ですからいろいろな違いもありますし、いろいろな面があります。一言で言えば、例えば木村（篤太郎）さんは真面目な方でしたね。もともと弁護士さんでしょう。政治家ではないわけですよ。しかし吉田さんが非常に気に入って据えたわけですからね。そういう意味では非常に真面目な人ですね。いわゆる政治的な野心もなければ、何もなし。その意味で私は良かったと思うんです。私たちが申し上げることを素直に、その通りに受け入れてくれて、そうか、ということでした。その代わり、昔の侍みたいな人なんです。断固としている。そういう志士的な面がありました。ですから保安庁長官としては、あの時にあの人がおったということは良かったと思います。

それで、九州に出張した時に、木村さんは向こうで記者会見をやって、警備六カ年計画をしゃべって、そこで吉田総理から呼び返されたら、そういうふうには『防衛庁』という本には書いてあるんです。新聞記者が三人で書いた。そんなことはないですよ。あの頃は、大臣が出て行くと、新聞記者はそろそろ付いて行くわけです。大臣は東京ではしゃべらないことを旅先でしゃべるんです。後の例が「赤城構想」なんです。そういう一種の習慣がありました。東京では言いにくいことも、旅先で、宿も一緒の時に、一杯飲みながらしゃべるとい

が新聞記者に対してのサーピスなんです。これはいいか悪いかわかりませんが、そういう風習があったことは事実なんです。そこで、お供が付いて行く。そこで木村さんが九州で語ったことは事実です。それが総理の逆鱗に触れて呼び返されたと本に書いてあるんですが、そんなことはないですよ。私が直接聞いたら、「いや別に。総理は笑っていたよ」と言う。そういう人ですね。ですから、過去の出来事を後から意味を確かめようと思うと、難しいですね。木村さんという方は真面目な弁護士会の長老ですね。吉田さんの信任が厚かった。ちょうどあの時期にああいう人がおつて良かったな、と思います。

それ以外の方につきましても、どうかということですが、いろいろその人の問題がございますからね。

林（敬三）さんについてですね。この方はもともと内務省の昭和四年組の人なんです。宮内庁の次長をやり、それから来たわけでしょう。軍隊の経歴はゼロですよ。そこが一つの問題なんですけれど、そういう人でないと、当時いろいろ説明しましたような旧陸軍と旧海軍の争いになりますね。だから、どちらから採ることは不可能なんです。だから全く無色透明な人を統幕議長にした。その統幕議長は当然仕事はないですから。ただ、一応そういう組織を作ったから、その長として据えるには、まさに無色透明です。親父さんが有名な軍人さんですからね。そういうことで、どんな人だったかと言うと、夏に私宅を訪ねて行くと、夏の着物の上から袴をはいているんです。一回は、浴衣のようなもの、浴衣じゃないんでしょうけれど、袴を着けているんですよ。夏、そういう人は珍しいですね。それが新聞記者諸君に対する威圧にもなったんですよ（笑い）。そういう人です。しかしこっちがお宅に伺って、いろいろお話をする時に、夏に袴を着け

て出て来るんですから、こっちもかしこまっちゃうでしょう。そういうことでおわかりのように、真面目な人ですね。

それから「林さんは」増原（恵吉）さんとは内務省で一年違いで、非常に友人的な関係ですね。私はあるとき増原次長に、「あなたは統幕議長に対して議長として扱っていませんよ。『林君』じゃないですか。それは困る」と言っただけですね。この前お話しした敬礼の時の問題もそうですね。とにかく「林君」が言っているんだから、ということになっちゃう。それは駄目だ。そこだけはきちつと、「くん」ではなしに、「林第一幕僚長」あるいは後では「林統幕議長」ですけれど、そういうけじめを付けて欲しいと。「これは私が言っているだけじゃありませんよ。みんながそう言っていることを、私が取り次いでいるんですから」と言った。それでわかりのように、増原さんにとつては「林君」でしたね。それで一緒になつて苦労しているわけですよ。極端な言い方をすれば、後は周りは全部知らない人でしょう。旧陸軍・海軍でしょう。だから増原さんも一人ではできないですね。それで「林君」になる。それから上村健太郎さんですね。これも内務省の「林、増原氏にとつての」後輩ですね。見ていると、その三人は一つの仲間でしたね。そういう人でした。それで結局十年も務まったんですよ。

私はあるとき酒の席で、「林さん、あなたは結構長くやっておられるけれど、もうそろそろお辞めになったらどうですか」と言っただけですね（一同笑い）。理由は簡単ですよ。「制服」の最高のポストなんです。最高ポストなんていうのは、そんなに長くやるものじゃない。「八年やれば四人分務めたことになる。だから、あなたのおかげで、なれる人がなれないという事実がある。それは私たちの耳には入

ってきますよ。あなたのところには絶対に行かないけれど、もうそろそろお辞めになったらいいんじゃないですか」と言った（笑い）。そういうくだらんことを言ったことがあるんですよ。それは林さんのことを考えて、ですけれどね。

伊藤 どういう反応でございましたか。

海原 「うーん」と言っていましたけれどね。

伊藤 それでどうなったんですか。

海原 辞めたですよ。「それはいろいろお考えになっていっていることでしょうが、もうやっぱり、最高のポストで、一応道がついて、陸・海の人々がそれぞれ幕僚長に座って、納まることができれば、その人たちに譲ってやらないと。そうでなくとも今の保安庁（それから後の防衛庁）は、旧内務官僚の軍事支配だと言われているんだから、それを裏書きすることになると私は思います」と。そうしたら、「うーん」と言っていましたね。怒りませんけれど、決していい顔はしませんでしたね。

伊藤 それで制服組になるわけですか。

海原 しばらくしてから、ですね。ここになぜ十年も務めたか、と書いてあるでしょう。そういうことなんです。あの頃はやはり林さんでない座りが良くないんですね。みんな周りが、例えば旧海軍が来ると、そっちに行くんじゃないかと思うし、旧陸軍が来ると、陸軍でも統制派と皇道派とあつたしね。どっちに行くかという派閥争いになるでしょう。そういうバックグラウンドがあるんです。後で私は余計なことを言ったな、と思ったんですけれどね。林さん、そろそろ時期ですよ、と言っちゃったんですね。ただ、それは私が言っているんじゃない。そういう声を出している人がおる。単数ではありません。だから、

ら、お考えになったらどうですかと言ったら、「うーん」と言っていましたね。そういうことがあるんです。

それはあとから来た人は、わからないですよ。なぜ十年もやったか。一つには替わる人がいなかった。一応きちんと納まるところに納まって、道がついたというところで、林さんは退いたんですね。そういうことです。しかし私もくだらんことを言ったな、と思いますね。何かの時に使われるんですよ。

それから山崎（小五郎）さんについてどうかという質問がありますが、山崎さんは普通のお役人の、これまた真面目な方ですね。しかし、警備隊は旧海軍でつくったでしょう。それに対する力はゼロですよ。旧海軍は、この前もご説明したように団結していますからね。山梨大将、野村大将の下に「Y委員会」があつて。そういう人たちに對しては、もう全然力がない。ただ海上保安庁でつくったから、その海上保安庁を代表して来た。言わば、お目付役と言いますかね、何をやっているかということのお目付役と、相談相手になるということですね。だからこの前申し上げた幕僚副長の長沢さん、後に幕僚長になります。それが会議で、じゃあ海原保安課長は、われわれに「どぶさらい・小運送」をやれというのか、ということをやった時に幕僚長がおるんですよ。ふつうなら抑えていいでしょう。抑えない。抑える力がない。じつと様子を見ている。そういう方でした。これまたあの当時ですから、海上保安庁、運輸省としては、あの人しかいなかった。しかしその人が何をやったかという、それは何もありません。そういう時代です。

伊藤 できない、ということですか。

海原 できないです。それは、とにかく片一方は、山梨海軍大将や野

村大將がいて、野村大將の名前で『新日本海軍建設案』が出ているでしょう。それでやり取りしているわけですからね。そういうところで、部外者が乗り込んで行っても、何の役にも立たないですね。だからある意味では気の毒なお立場だったでしょうね。しかし、それをちゃんと心得ておられて、じっと見ておられて、会議ではなくて一対一の関係で何かいろいろ注意はしておられたようです。それは私は聞きまじたけれどね。

伊藤 お役人として、そういう立場に置かれたら、それしかないんでしょうね。

海原 そういうことなんです。

伊藤 海原さんだったらどうされるかというのは、また違うでしょうが。

海原 いやいや、私はならないんですよ。私はなれないことは承知の上でやっていたわけですからね。もともと上に行こうという気は本当になかったですよ。自分のことを宣伝して申し訳ないんですけど、後藤田君も私も軍隊に行つたでしょう。その時に軍隊に行つた連中は、生きて帰るか死んで帰るか、それもわからん時期ですからね。それが無事に帰つて来た。後は余生ですよ。

伊藤 儲けもの、なんです。

海原 そういうことですね。そういうふうに観念していましたから。私の場合は、越中島に後藤田君の替わりに行きましたね。後藤田君が二年で替わつたんですから、私も二年ぐらゐ務めたら誰か先輩が来ると思つたんですよ。「昭和」十六年「入省」ぐらゐの奴が。そうしたら、来ないんですね。二回前の時もお話したと思うんですが、海原は防衛が好きなんだというデマを流されてね。もう警察に帰つて

来る気がない、ということになった。

私は警視庁の官舎に入っていたんです。碑文谷に警視庁の官舎が十軒程あるんですが、その一号官舎に入っていたんですよ。交通課長ですね。そうしたら警視庁の会計の方から、「もう警察に帰つて来ないなら、空けてもらえませんか」と。それは直接ではないですよ。間接的に伝わって来るんですよ。

伊藤 私が言っているではありません、と言うんですね（笑い）。

海原 ああそうかと思いました。今までは、まだ警察に帰つて来ると思つて貸していたわけでしょう。ところがもう帰つて来る気がないんだということ、それならいつまでも「いられない」。家がない時ですから、官舎に置いておくわけにはいかんということになる。それも直接は言つてこないんです。間接的に、私の耳に入るように来るわけです。しかし結果的にそれは良かったんです。

というのは、その話を聞きましてから、ああそうか、そういうものなら官舎を出て行かなくてはいかんということになった。たまたまそのころ東食という会社がありました。この前倒産しましたが、その二代目の社長さんが力石さんという方です。この人は三井物産の食料部の部長さんでしたが、私が仕えた内務省の先輩の親戚なんです。それで紹介されて知り合つたんです。その力石さんと酒を飲みました時に、力石さんが、「役人は拠点、家が必要だ」と言う。「そんなことを言つても私は金がないんだ」と言つたんですね。「それは借金してもいいから、家を持ちなさい。そうしないと家に縛られる」と言われたんです。ああ、そういうものかと思ひましたね。片一方では出て行けという話があるでしょう。

それで、これこそプライベートな話ですが、母が死にました後、へ

そくりが残っていたんですね。それを私は力石さんに渡して、力石さんに株を買ってくれと言ったんです。何でもいいから。そうしたら、その力石さんが若干金を足して、三菱電機と三菱化成の株を買ってくれた。その株が暴騰したんです。それで高いところで売ったわけです。その金で、今の家が建っている土地を手に入れたんです。官舎のすぐそばです。官舎から五十メートルしか離れていないんです。兼（ふすま）町と言いまして、あそこは稗叡村ですよ。ヒエのふすまですね。昔はヒエしか夜具にする材料がないような閑散とした農村だったんですね。その稗叡村で土地を手に入れました。女房が調べてきましてね。こんなことを話してもしようがないですが、世の中のいろいろな因縁というのがありましてね。

伊藤 あれは今は一等地でしょう。

海原 それは今はいいですよ。今、一等地になりましたけれど、それはオリンピック公園ができたからです。駒沢オリンピック公園ができるまでは、あの辺は一面畑ですし、あそこは練兵場の跡だったんです。それでゴルフ場があつたんです。ですから春、四月頃になりますとモンsoonですよ。バーツと風が吹いてくる。戸を閉めていても、細かい砂が入ってくるようなところだったんです。そういうひどいところだったんですが、オリンピックがあそこで挙行されるということで、整備されたわけです。だから今は一等地になっているわけです。タモリさんなんか来ていますし、有名な人があそこに来ているわけです。しかし私があそこで土地を買った時には、練兵場みたいなどころだったんです。まあ、昔話になりましたけれどね。

佐道 かなり広いんですか。

海原 四〇〇平方メートルです。だから一一五坪ぐらいですかね。「買

った時には」全部の額が二〇万円ですよ。それが高い時には、一坪六〇〇万円だった。

伊藤 それはバブルの時ですか。

海原 バブルの時です。今は下がりまして、坪、大体二〇〇万ぐらいですけれど。

伊藤 それでも大変ですね。

海原 大変です。全部で二〇万でしたからね。ですから、いかにインフレというか、物価騰貴のひどさを具体的に体験しましたよ。その家を建てることのできたのは、力石さんと知り合ったおかげで、力石さんが役人というものは生活の拠点が必要だと言うわけです。そんなこと言ったって、私は金もないし。そうしたら、貯金して、株を買う金を集めなさいと言われて、ああそうかなと思った。そうしたら母が死んだ後、へそくりがあつたんですね。それでその金を持って、力石さんに一つこの株でもいいからいいのを買ってくれと言ったら、二種類の株を、ちよつと足してくれて買ってもらつたんです。そうしたらそれが暴騰するわけです。

伊藤 それはラッキーでしたね。

海原 そういうことがあるんですね、世の中というのは。だから、わからんです。

伊藤 それがなかったら、やはりずっと官舎住まいをされていたと思いますか。でも、どこかで家を持つと思うんでしょうね。

海原 私は力石さんにいろいろなお話を承りまして、世の中の事情を聞かされて、ああなるほどなと思った、それがあから考えたんですね。それまでは、役人には家なんか付いて回るものだと思つたんですよ。内務省の意識がありますからね。どこに行っても官舎はあると。

伊藤 鉄道と同じですね(笑い)。

海原 そうそう。ところが防衛庁に移ったら、先ほど言いましたように、もう警察に帰って来ないなら、出て行ってくれと。ああ、それもそうだと。初めはずいぶん非情な話だと思いましたがよ。しかし向こうの立場になって考えてみると、それは警察官のための官舎ですからね。

伊藤 警察に帰りますと言ったら、どうなんですかね。

海原 いや、帰りますと言っても、先ほど申し上げたように、海原はもう帰って来ないんだ、防衛が好きなんだ、ということをおのれ後輩とも流しているわけですからね。それを聞くと、帰る気がしないんですよ。

伊藤 帰って来るな、という意味なんですかね(笑い)。

海原 そうなんですよ。なぜかと言いますと、前に説明したように、同じ内務省に昭和十四年に入ったでしょう。そこに徳島出身が三人おるんですよ。後藤田、平井、海原と。後藤田君はご存知の通り。平井君も徳島中学の開校以来の秀才と言われていたんです。私は徳島の籍がありますが、籍があるだけで、縁はないんですけれど、とにかく徳島出身が三人で同期でいるとなると、これは最後は結局誰かがなるわけですよ。それを考えると、ああそうか、俺が警察に残っていたら、あいつらと競争するんだと。私はそういう競争を好みませんからね(笑い)。それで、みんながそんなに嫌がるのなら、どこに行っても月給は同じだということで、もう留まる決心をしたんです。

伊藤 保安庁とか防衛庁は、官舎はないんですか。

海原 その頃はありません。まだできたばかりだから、とても手が回らないでしょう。それから、防衛庁の「制服」の方は若干ありますよ。しかし内局の方、いわゆる背広組の方は全部各省から出向して来

るでしょう。ですから、それぞれの親元での官舎に入っているわけです。それはとても、できたばかりの保安庁で、部員のための官舎を用意するなんてできません。それはトップの幕僚長とか統幕議長の官舎すらない時期ですからね。それはある意味で非常に惨めですよ。ちゃんと歴史のある、大蔵省とか外務省の生活と比べると、本当に哀れなものですよ。植民地生活ですから。本来は植民地の生活はいいんですよ。何もないところで植民地生活ですから。そういうことでしてね。何から、こんな話になりましたかな(笑い)。

佐道 官舎が整備されてきたのは、いつ頃からですか。

海原 そうですね、防衛庁になってから四、五年してですね。官舎と言っても、共済組合が用意する官舎と、国の予算で用意する官舎と両方あるんですね。共済組合はできたばかりでしょう。まだ何もありません。そういうものが整ってきて、だんだん出てくるわけです。もう一つ、一歩踏み込みますと、官舎のことをどうだと言うのは論理的におかしいということになるわけですよ。骨を埋めるつもりで保安庁に来たんじゃないか、ということになるわけです。そんな時代でした。しかし大雑把に言うと、二年ぐらいたら適宜帰って行く。各省ともリレーですね。それが人事の方針でしたね。それから「制服」の方は、追放された連中はいろいろな形で自分の生活根拠を持っている人たちでした。だから、必ずしも官舎が欲しいということはないんです。「制服」の方の人も、初めは偉い人、幕僚長とかという人の対外接待用のものですね。

伊藤 公邸みたいなものですね。

海原 そういうことですね。そういうものを整備した。そんな時代です。

伊藤 その官舎を出るといふことは、警察には戻らないぞ、という意思表示でもあるわけですね。

海原 そうです。間接的な無言の表示ですね。だって、そんな嫌われているところに帰る気がしないですよ（笑い）。

伊藤 別段嫌われたわけではないでしょう。

海原 大体、あいつは帰って来る気がない、なんて余計なことを言うぐらいたから。昭和十六年の組というのは、内海（倫）君とか、死んだ高橋（幹夫）君の組ですよ。それは自分の上がいなくなると楽なんですよ。それはまあわかるでしょう。一年下の十五年のクラスは割にみんなおとなしいんですよ。そんなにいい。しかし十六年クラスに侍が多かったんですよ。十六年のクラスに侍が多かったのは、十六年組を採用した内務省の人事課長が町村（金五）さんなんです。今の町村信孝さんのお父さんですね。この人がとにかく、一芸に秀でた者、物の考え方がしっかりしている者を全部採ったんですよ。必ずしも学校の成績にこだわらない、そういう採り方をした。そこで昭和十六年組というのは、いろいろおるわけですよ。

伊藤 多士済々なんですね。

海原 ええ。そんなことです。何から始まったんですか。

伊藤 二番目の追加質問のことでしたが。

佐道 人物評を伺っていました。

海原 ちょうど林さんのことを申し上げましたね。それから木村さんも申し上げました。その後になりますね。

伊藤 統幕議長の二代目の話になりますね。

海原 杉江（一三）さんですか。この方はまともな、要するに昔の軍人さんですよ。

伊藤 この人は制服組ですね。

海原 林さんが十年やって、一応準備して、いろいろな人を整理して、さあ、後はどうぞ、ということになるわけです。

伊藤 それを選任する場合、非常に難しい問題になりますね。

海原 それはあるんです。それはこの前申しませんでしたけれど、追放された軍人を採用した時の基準がどうかということですよ。これは後藤田君や内海君がやったわけですからね。上も下も採らないんですよ。出来過ぎ、というのは採らないんです。大体、ちよつと上の方の人を採る。

伊藤 トップクラスは採らないですね。

海原 優秀なのを採ると、うるさいと（笑い）。だから「陸」「海」の特に優秀な人、癖のある人は敬遠されたんですよ。敬遠されていたけれど、やっぱりあいつは来なくては駄目だということであつたのが、例えば「空」の「源田サーカス」と言われた源田（実）さん。彼なんかそうですよ。癖がある、あれは駄目だ、と一応措いておくんですね。しかし、いよいよやっていくと、やっぱり必要になるんですね。

その時の人事方針、最初に誰を採るかということにつきましては、これまた偶然の小説の材料になるんですが、銀座四丁目に『新富寿司』という寿司屋があつた。今でもありますが。たまたま私はその親爺さんとか奥さんと馴染みになりました、そこを愛用しておつたんです。その『新富寿司』が小料理屋のようなことをやっています、そこに行つた時に、後藤田君や内海君がおるわけです。誰が来ているかと思つたら、旧陸軍の連中の主だった人々だつた。ははあと思ひましたよ。何も聞かないですよ。人事をやっていたんです。誰を採るか。要するに、旧軍の人に、これはどうだ、あれはどうかと聞いているわけ

すよ。それで先ほど申しましたように、上のいいのは採らない、下も採らない。ほどほどにいいのを採るということで、最初の人事は行われたようです。そういうことと言うと、源田さんなんかは外れていくわけですよ。あれは癖があると言って。しかし癖があるけれど、やっぱりあいつが要るとなるわけです。そういう者が出て来るんですな。

伊藤 この杉江さんという方は「陸」なんですか。

海原 これは「海」です。

伊藤 最初の統幕議長が「海」だというのは……。

海原 格別の意味はありませんね。たまたま、「海」が団結しているわけですよ。旧海軍として誰を推薦すると。例えば伊藤先生を推薦すると、なるわけだから。そういうのが陸軍にはないわけですよ。

伊藤 陸軍は推薦できないわけですね。

海原 できないんです。服部グループがありまして、それは他のグループからは敬遠されているでしょう。だから「海」のように、旧海軍全体として推薦するのはこれだ、ということがないんです。だから、こちらの方で選ばないといけない。だからその点では、ある意味で「陸」は気の毒でしたな。

伊藤 それは、しかし自然の成り行きということですか。

海原 そういうことですね。それから「陸」の場合は、付け加えますと、装備品はアメリカの中古のタンクとか高射砲でいいでしょう。「海」の場合は、新しい船が必要になりますね。船を造るといいうのは、当時、日本は商船はできますけれど軍艦はできないんです。そうなるのと、どうしてもアメリカからものをもらいたい。その場合、この前申しましたように、「新日本海軍では空母四隻」に象徴されるように、アメリカからの立派な船をもらって新しい海軍をつくるという計画が

ありますからね。そこで海軍として団結するわけですよ。「陸」はそれがありませんよ。団結しようにも中心がない。服部さんを中心とするグループと、そうでないグループとがある。例えば吉田さんとロンドン時代の古い付き合いのある辰己さんのグループとかね。これは他と良くないでしょう。違うんです。そういうことで「陸」は人が多過ぎて、しかも皇道派と統制派で昔喧嘩したでしょう。いろいろな会を作りましたね。そういうことも影響がありました、団結しないんですよ。しかしある意味では、それで助かったんですよ（笑い）。

伊藤 「陸」が団結したら大変ですね（笑い）。

海原 大変ですよ。もう一つには一般的に言って、日本を亡ぼしたのは「陸」だというふうに思われているわけです。海軍は途中まで反対しておった、絶対にアメリカなんかとは戦争はできないと言っておった、それでもどうとう「陸」に引きずられたと。だから結論を言うと、悪いのは旧帝国陸軍であるということですからね。それが当時の一般的な世論の判決ですよ。

伊藤 「陸原」としてはいかがですか。

海原（笑い）。それはこの間の速記録にも出ていますが、名前を言いますと、私の後輩の課長というのは、亡くなりましたが、堀田政孝君と言うんです。これが新聞記者に言ったんですね。なかなか面白い人でした。私が付き合っていたいい人で、山形から出て来た人です。堀田君が、「いや、あれは陸原だ。『海空治まらず』だ」と、新聞記者に言ったんでしょう。そこで私が、「陸」の第三部長、作戦部長になります、その人に、「どうも僕は『海』と『空』には絶対に駄目だ、しかし陸原と言われているから、もって瞑すべしだと思おう」と言ったら、「とんでもない」と言ってますね（笑い）。

伊藤 こんでもない、ですか(笑い)。

海原 それで私は笑って、「ああそうか、じゃあ、私は『陸海空治まらず』だな」と言った。「陸海空治まらず」ということで、防衛庁から出ちゃうんですよ(笑い)。これは笑い話ですけど、事実なんですよ。創作ではありません。

伊藤 出来過ぎですけど(笑い)。

海原 しかしそういうことで、いろいろ苦勞もありましたけれど、あの意味で楽しかったですね。というのは、敗軍の将が集まって、これからどうするかということを一所懸命みんなで考えた時代ですよ。俺たちは、要するに世の中で陰の存在だと。陰の存在はみんなお互いに手を結ぼうではないかということ、その親睦のために、私は機密費もありませんが、警察から来る時に若干の賤別をもらっていますから、それを使って時々飲んだりしましたよ。

伊藤 持参金みたいなものですか。

海原 そうそう(笑い)。例えば私は、管区の警備部長から行ったでしょう。そうすると、管区に各県がありますね。東京であるとか、神奈川県であるとか。その各県の警備部長から賤別が来るわけです。それがどこから出ているかは知りませんよ。装備費か捜査費から出ているかもしれないけれど、例えば十県あれば、十集まるでしょう。これはありがたいと思ってもらうわけです。それを持って行って、保安庁で時々「軍歌会」をやるわけです。先ほど申し上げた『新富』の二階で軍歌をやる。その軍歌をやって、私は常に勝つんです。これも申し上げましたね。大体、後で私が威張るわけです。どうです。あなた方は大本営の参謀閣下じゃないですかと。

伊藤 嫌みですね(笑い)。

海原 「帝国の参謀が軍歌も歌えん。陸軍の歩兵二等兵・海原治がお

しまいまで歌うのに、何ですか、参謀は」と言っただけです。この前申し上げたのは西浦さんですが、彼は参ったと言いましたね。「ここは御国を何百里」で。そうしたら、第二回目は、これも申し上げましたが、彼も最後までやるわけです。これは欧米に出張した時に、飛行機の中で覚えたという(笑い)。そんなことをやりまして、お互いに努力したんですよ。要するに、俺たちはみんな日陰の存在だと。しかし、国家にとって大事な存在であることは間違いない。いずれみんな認める時期が来るだろう。それまではあれだけの戦争をやって、あなた方が無一文にしちゃったんだから。できもしない戦争をやって勝つんだ、必勝の信念でもってソ連の戦車をやっつけろと言われた。それではしょうがない。要は、まさにあなた方が戦犯だ、とか言いましたよ。だから今しばらくは隠忍自重しろ。それでいいものをつくらうじゃないかということをやったわけです。その方が保安課長としての仕事は多かったですね。

時々、防衛庁で変な人がだまされて、クーデターだとか何とか出ましたけれど、クーデターをやるには中心が必要なんです。「陸」では田中兼五郎、彼は死にました。それから「空」では田中耕二、これも死にました。この二人が、もし革命をやるとすれば、中心の人物だと思いましたがね。その二人と私はよく付き合っただけです。その二人とは死ぬまで仲良くしていましたからね。お互いに世の中の陰の存在だから、陰の存在は陰の存在で、手をつながないといかん。それを、中で喧嘩しては駄目だということをやっていたんです。その意味では楽しかったですね。

伊藤 物事を何か新しく創るといいますか、それは一番面白い仕事だ

と思いますね。

海原 そういうことですね。ただ私の同期の親友ですが、「何だお前、海原、再軍備の手助けをするのか」というような公式論があるんですね。手助けをするよ、と言ったんです。私は軍備は必要だと思っ。要は軍隊も警察も同じだ。それ自体に色はない。これをどう使うかが問題なんだと。だから、誰が悪いと言え、政治家が悪いんだ。軍隊や警察には、それ自体には色がないんだと言った。ところが今や、まさに軍隊は悪だと。およそ軍事と名の付くものには全部反対だというのが朝日新聞でしょう。そういう世の風潮に対しては、われわれは断固抵抗すべきである。消極的抵抗をすべきである、とやったわけです。今から考えると若気の至りですな。

統合幕僚会議の設立に反対する

伊藤 いや、若気の至りではないですよ。もっとおやりにならなかつたことが、今日の災いの元なんですから（笑い）。人のことについては、そんなところで結構でございます。

海原 そういうことで、みんな初代のそれぞれの幕僚長さんは、それなりのいい人が選ばれました。周りがみんな気を遣いましてね。今のあれはどうだこうだ、とやるわけです。私は幕僚長の人事で失敗したなど思うのは、後で出てきますが、新しい戦闘機問題です。センチュリー・シリーズと言いましたね。ロッキードの空中戦。堂場君が「一

千億の空中戦」ということで派手に宣伝した。あの時に現れますね。

今一つだけ言っておきますと、佐藤（毅）という幕僚長がいた。これは海軍です。この人は、F104は駄目だと言ったんです。安全でない。ところが後の源田さん、これも海軍です。ご存知の航空でしょう。F104がいいと言う。こうなっちゃうんですね。これはいろいろ理由がありますけれど、最初の間は、そういうことにならないようにした。とにかく旧帝国陸海軍がお互いに喧嘩をした。そういう轍を踏まないようにしようというのが、当時の上の増原さん以下の判断でした。そのためには、林さんのような無色の人間を「床の間の飾り」に置いておく必要があったんです。後は大体路線ができたから、誰が来てもいいということで、旧軍の人々が採用された、ということでしょうね、大雑把に言いますと。ですから、その長い時間の一コマ一コマには、それぞれの思いがあるわけです。それにタッチした人は、そのことだけで物を言うわけです。だから通して物を見ない。いろいろ読んでみますと、書かれていることが本当の一面しか言っていないなど思うことが多々ありますね。

伊藤 多くの場合はそういうことですね。

海原 そうなりますね。私自身も、これはいかんと。各省から出て来て、二年経ったら里子が帰るようなものでは駄目だと。それで、先ほど言いましたように、どこにいても月給は同じなんだから、「よし、俺は」と思ったことは事実です。それはもう決心しました。初めは増原さんに、「増原さん、満州以来の因縁ですね。私も一所懸命やりますから」と言っ、やったわけです。まあ、ある意味ではつまらん決心をしたかもしれないけれど、それなりに楽しんだことは事実です。ということで、いろいろな方との関係を総括して申し上げたわけです。

人事のことはここまでですね。これは言い出すと切りがありませんから、私の持論なんですけれど、どんな人でもプラスとマイナスがある。どのプラスに注目して、どのマイナスを我慢するか。そんな百点満点の人はいませんよと言っているんです。だからそれぞれの特徴を持った人を適当に組み合わせ、チームとして運営する。それが長たる者の責任だということをやったわけです。私たちは、いいと思つたことはどんどん言います。それがいけなければ、いけないとおっしゃってください。ただしその時に、いけないという理由を言つてください。往々にして日本では理由を言わない。駄目だという一言になるから、そうなる困る。今から「陸」「海」「空」をつくっていくわけだから、とにかく「制服」の、それぞれ誇りを持った、経験を持つた人を相手にものをつくつていかなければいかんのため、理屈で負けないようにしないといけない。理屈が対等であつたら、こつちは負けますよ。それではシビリアン・コントロールは成り立たない。それは本来は政治家が捌くべきだけれど、過去の日本を見ると、政治家はみんな軍部の言いなりになる。操り人形みたいになつたんだから、ああいう者には期待できない。だからやるのはわれわれがやる、こうなる(笑い)。

そこで旧軍人からは、今の組織は、旧内務官僚の支配だ、とこうなるわけですね。私が向こうにおつたら、やっぱりそう言いますね(一同笑い)。今はそういうことを笑いなから言えるわけで、ある意味で幸せですね。しかし先ほど言いましたように、私は懐柔するために時々「軍歌会」をやったわけです。

そして領空侵犯の問題をちよつと申し上げます。加藤陽三さんの本に出ていましたが、ソ連機が北海道の上空を侵犯しているという情報

が入つて来るわけです。私は米空軍の防衛部長に、どういう状態か教えると言つたんです。「領空侵犯と言葉では言うけれど、外務省に対して連絡もあるようだけれど、どういふふうな具体的な侵犯があるんだ」と電話で言つたんです。そうしたら「来い、来たら見せる」と言う。

それで行きましたら、ちゃんと地図を広げまして、何月何日にソ連の飛行機が札幌の近くまで来ていると言う。たくさん来ているんです。「こういう状態だ。これに対して何とかしなければいかん」と言う。何とかせんといかんと言つたつて、こつちは対応策はないわけだから、あなたの方、米軍でやつてもらわなくてはいかん。そう言う、「日本の方、外務省の方から、領空侵犯に対処することは米空軍に頼むという一札が欲しい」と言う。ということ、あの文書になるわけです。外務大臣から、「領空侵犯はアメリカに頼む」という依頼をするわけです。それに対して、アメリカの方は「心得た」ということになるわけです。そういうことがあるわけです。こつちはやると言つても、何の手段もないですね。現に地図を見たらグーツと航跡が書いてあるんです。北海道の真ん中まで入つて来ているんです。そういうことが航空自衛隊の建設を促進する一つの理由にもなつたと思ひますけれども。

伊藤 アメリカ空軍は、それをやられても直接には何も……。

海原 これは非常に微妙な問題なんです、アメリカは、というと語弊があるんですが、アメリカの担当部局では、それほど日本のことを重要視してはなかつたということなんです。朝鮮につきましても。だから初めの間は、あんなことになつたと思ひます。なぜ私がそんなことを言うかという、私はワシントンに行きました。保安課長、

防衛一課長でワシントンを訪問しました。その後二年間日本大使館の参事官をやりましたが、その時に私が、この前お話ししましたか、日本の方は上村健太郎さんが総務庁の副長官をやっていたと思うんですが、小笠原・沖繩の返還問題を打診してみたいです。私が直接行くよりは、ハリー・カーンに頼みまして、「お前さん、顔が広いから、ちよつとアメリカの海軍や空軍はどういうふうに考えているか調べてくれ」と頼んだんです。

その結論を言いますと、米空軍は小笠原にはそれほど関心がない。「陸」ももちろん何も「関心がない」。ところが海軍は、もし日本がニュートラルになった時には、あの島々は非常に大きな意味があるということ、日本に還そうとしないんだということがわかったわけです。沖繩はまだ当分重要でしょう。ところが小笠原の方は脈があると思つたから、私は私信で上村さんに言いました。こういうことだから、日本が中立になった場合のことを考えて、米海軍はあの島を手放そうとしない。しかし、そんなことはまずないんだから、ひとつ交渉して小笠原の返還をやりなさいという手紙を出したことがあるんです。

これは一つの例ですが、アメリカは、といつても、アメリカの陸軍、海軍、空軍で全部違うんです。日本というものに対しての認識とか期待とか、希望とか。そういうことで、別に統一的なものはありません。それに適応してこちらは手を打てということをやったんです。それは外務省だけでは無理だから、防衛庁がアメリカの軍と連絡を取って、後ろから応援をしなければいけないということも私は言つたんですね。そういうことでやつたんです。

ですから、そういう意味でなるほどと思つたね。それで幸いなことになるわけですが、あの頃は米軍人がずいぶん日本に来たでしょ

う。日本に来た連中は、帰ってからそれぞれ上に行くわけですよ。これが非常に違つたね。私があちこちに行つてみたら、俺は日本のどこにおつた、ということをもみんな言うんです。その頃はそうですが、今は誰も知りませんよ。大体においてその頃、アメリカの軍の指導部は、ほとんどの人がかつて日本にいた。それで日本人と付き合つた。その感じは総じて良いんですね。日本人の特徴をよくつかんでいます。日本人はあまり物を言わない。タマエとホンネがある。本心は何かということを確認せんといかん、というようなことをちゃんと知つてゐるんです（笑い）。そういう意味では、彼らがたくさん日本におつたということは良かったと思つますね。

私がたまたま一人でアメリカを旅行した時に、南部の方に行つて、ワシントンに帰るのですが、その接続の飛行場で、乗る予定の会社がストライキになつてゐるのです。これは困つたな、と思つて、何回も受付のところに行つて話していたら、いきなり「シンパイライナイ」と言われた。びっくりしましたよ。日本語で言われたんですから。

伊藤 白人ですか。

海原 ええ、白人。それで、お前さん日本語わかるのか、と言つたら、俺は日本では大阪に行つていたからだと言う。そういうことがあるんです。だから日本に多数の米兵、将校がおつたということは、それなりのプラスがありますね。今はそれが無いから、かえつて難しいですな。日本人というのはどういふものかということの説明しなくても向こうは知つていたんですよ。

伊藤 大体、みなさんの話を伺つてみると、日本に駐留した連中は、上下を問わず、日本に対して好意的になつて帰つて行つたと言われま

海原 言われますね。私の体験を言いますと、少なくとも不愉快な思いをしたことは一つもないですね。一回もないです。だからアメリカから来て日本を占領したということが結果的には、日本を知ってもらえて良かった。日本人の物の考え方を知ってもらえて良かったと思いますね。しかし今はそれがいいですね。いま向こうの上の方はたいていヨーロッパでしょう。日本なんかにはいませんよ。そうすると日本人が一体どんな人間か、ということになるわけですね。タテマエとホンネがあつて、物をはつきり言わない、日本人のイエスはノーである、ということになっちゃう(笑い)。妙なところに話が行きましたね、そういうことでしたね。

そこでMSAのことをお聞きですが、私はMSAには全然関係していません。これはもっぱら大蔵省、それから防衛庁では経理局、装備局の問題です。ですから、私たちはただ物をもろう方向でやっているだけで、MSAには一切関わりはありません。

その次に、ニクソン副大統領が来られた時にどうだったかということですが、来られたときは、ああ来たか、というだけの話で、何も直接関係はありませんね。

そして、この前の保安課長時代の話と関連しますと、最初に海上警備隊が船を受け取りました。これをお話ししていませんでしたね。日米の船舶貸借協定というものができまして、その第一回の受け渡しをやったのが、昭和二十八(一九五三)年一月十四日です。木村保安庁長官の時です。この時の話を少し申し上げますと、木村保安庁長官が挨拶するでしょう。その英訳を誰がするかということなんです。私は当然、通訳がいますから、通訳にやらせろと言ったんです。そうしたら麻生という法規課長、内務省の同期ですが、彼が「向こうはアメリ

カ軍の肩書きのある、日本で言えば局長の人が日本語でやるということになるとこっちも、誰か肩書きのあるのが英語でやらなければいかん」と言う。妙な論理ですね(笑い)。それで白羽の矢が立ったのが私なんです。私は日常会話は適当にやっているけれど、それは公のセレモニーですよ。しかも、当時ありました進駐軍放送で流れるんですよ。だから嫌だと言ったんです。ノーサンキューだ、そんなことは保安課長の仕事ではないと言った。敬礼の時もそうでしょう。呼ばれましたね。何かというと人を使うから、じゃあ月給を少し増やすか、ボーナスでも寄越せばやると言ったんですけれどね。加藤さんなども頑強に主張しまして、向こうが日本語の通訳は肩書きのある人がやるんだから、こっちも肩書きのあるお前が英語でやれと言うんですよ。結局、そういうことで私がやることになっちゃった。

普通の日常会話はやっていますけれどね。しかしこれはオープンの本当のセレモニーでしょう。アメリカから船をもらう。PF六隻、それからLSSL上陸支援艇四隻、それが第一回で、横須賀で引き渡されるんです。それに対して木村長官が日本語で挨拶される。それを私が英語で話すわけですね。とうとう私がやることになった。

伊藤 でも事前にその原稿が来るわけでしょう。

海原 いや、木村さんの原稿も私が書いたわけですよ。日本語で二通り書いた。なぜ二通りかというのと、砕けた話し方と、日本式に「日本は海に囲まれているので、何百キロもの海岸を守らなければいかん」というような話し方があるが、どちらをやりますかということをお願いしたんですよ。そうしたらやっぱり「式」だから堅い方がいいということでした。堅い方はくだらんですね。それを私が通訳することになった。困ったな、ということになったんですが、しょうがない、そうい

うことになっちゃったから。

伊藤 通訳ではなくて、挨拶の文章を作るのは職務のうちですか。

海原 それも私の職務ではありませんよ。何かというと、海原来い、と言つて増原さんが呼ぶわけですからね。木村さんもそうです。

伊藤 じゃあ愛されていたんですね(笑い)。

海原 こちらは愛されたくないですね(笑い)。ボーナスでもいいのなら別ですよ。何もそういうことはない。使い放題ですからね。

それで私は何をやったか、クイズです。当時売り出されたテーブルコーダーがある。大きなやつです。それを買って来ました。

伊藤 あれは高かったんじゃないですか。

海原 高いですよ。しかし必要だと思つたから、買ったんですね。これぐらい大きかったものを「両手を五十〜六十センチ広げる」。それに自分の英語を吹き込んだんです。そして、私が長く付き合つていた顧問の将校の家に行つたんです。すると、その奥さんも出て来た。

これは今度俺がしゃべるんだけれど、これで話を通じるかどうか、英語で聞いてくれと言つたんです。そうしたら聞いてくれました。これから先が非常に微妙なんです。付き合つている方の男の中佐はOKだ、と言う。本当か、と私は聞いたんですよ。お前、簡単にOKだと言うけれど、間違つたら困る。俺も大臣の通訳をするんだし、進駐軍放送に流れるというんだから、と言つた。私がそう言つたら、奥さんが、「あなた本当に、あなたの英語のおかしなところを指摘していいか」と言う。私は、それを頼んでいるんだと言つた。

そうしたら、やられましたよ。まず、カントリーですね。「あなたの発音を聞いているとカウントリーに聞こえる。カウントリーではない、カントリーなんだ」と。その類ですね。そこで僕はもうしょうが

ない。奥さん、ひとつそれをやってくれ、原稿があるからと。そうしたら、やつて上げましょうということ、ちゃんと吹き込んでくれた。それを家に持って帰つて、家でそれをやるわけですよ。駄目ですね、いくらやつたつて。自分でもカウントリーに聞こえるんですね。旦那の方は、意味を通じるからいいと言うんです。それで一所懸命練習してましたら、家内がやめなさい、と言う。そんな付け焼き刃をやつたつて、いざとなつたら飛んじやうから、とにかく旦那がわかると言つたのなら、それでいいじゃないですか。言われてみればそうだなと思つた。馬鹿馬鹿しい、いくら寝ないでやつても直らないですよ。なるほど難しいものだと思ひましたけれどね。それでももうやめました。従来の、言わばブロークンの海原式英語でやりましたよ。

それで横須賀で大臣がしゃべつた後でやつたわけです。その後で、ちよつと知り合いの軍人さんにわかつたかと聞いたら、わかつた、ヴェリ・グッドだと言うんですね(笑い)。いい加減ですね。そんなことがありました。

伊藤 多少、訓練の効果があつたんじゃないですか(笑い)。

海原 それはないですよ(笑い)。しかしこの英語につきましては、前にお話ししたかもしれないけれど、高知に進駐軍が入つて来たでしょう。その時に私は、俺はブロークン・イングリッシュしかできないんだと言つたら、「ミスター海原、そんな言い方はやめろ」と言われた。「お前さんがブロークンなのは当り前だ」と言うんですね。日本の中学の英語の先生の話を通じないんですからね。外国にも行つていないんだから。「お前のイングリッシュがブロークンなのは当り前だ。しかしそれでも通じるから、そういうことを気にするな、わからなかつたら必ず聞き返すから。自分でブロークンだと思つたら、まず

ます良くならない」と言われまして、ああそうかな、と思いましたがね。ですから私はずっとブロークンの英語を通したわけですが、そんなことがあったんです。

その艦艇引き渡しの際に、旧海軍の人がたくさん来ますね。長沢さんなんかも見えていました。しかし、PFなんて向こうの輸送艦みたいなボロ船ですね。それに作戦室があるんですよ。そこにもちゃんとレーダーがあるんですね。それを見て、旧海軍の連中がびつくりして、「あつ、こんなところにもちゃんとレーダーがある」と言う。その先は言いませんよ。「これなら負けるはずだ」ということですね。日本の軍艦は必ず煙幕を張るわけでしょう。煙幕を張ればわからないと思つた。向こうはレーダーがあるからよくわかつていたわけです。そういう時代でした。こういうことを話していると切りがありませんから、もうやめますけれどね。

伊藤 それは海上警備隊が持つた最初の軍艦なんですか。

海原 そうです、最初です。

伊藤 それまでは、なし、ですか。

海原 なし、ですよ。ですから、実体も何もありません。そこで初めて船が来て、それからいわゆるセーラー、水兵の教育が始まるわけですね。そういう時代ですから、話が元に戻りますが、林さんが統幕議長をしていてもいいわけです。別に作戦をどうこうということはないですからね。それから「空」が出てくるでしょう。だから「陸」「海」「空」の摺り合せが出てくる。そういうことで一段落するまでは、無色透明な、みんなが人格的に尊敬している林さんが座る必要があったでしょうね。その頃は、先ほど言いましたように、早くていい加減に辞めなさいなんて私は言ったんだけど、辞めないで良かったんです。

十年も続く必要性があったんですね。しかし私は単純に、十年もあれば五人も議長さんになれるわけでしょう。後の四人分をあなたは排除しているんだと言ったんですね(笑)。

さて、ご質問に、私が「すぐに防衛局第一課長になられますが」とありますが、保安課長がすなわち防衛第一課長なんです。第一課長になつてからもやることは変わりません。保安課長が防衛第一課長になつても仕事は全然変わりませんが、そこで申し上げたいと思うのは、防衛庁法ができる時の問題です。

これは最初の頃に申し上げたと思いますが、二つあったんです。一つは統合幕僚会議の設立。これに私は庁議の席上で反対したんです。もう一つは自衛艦隊をつくるということ、これも反対したんです。統合幕僚会議と言つても、その頃アメリカの統合参謀本部についているような資料があつたんです。それを私は全部読みました。結論的に言うと、統合参謀本部は機能しないということです。

伊藤 アメリカでも、ですね。

海原 アメリカです。アメリカは戦争中なかつたんですからね。戦争中になかつたために、陸・海・空・海兵、この四つの調整がとれなかつた。これではいけないということで、戦後に統合参謀本部ができたんです。ところが、それがうまく動かないという論文がいっぱいあるんです。絶対に動かない。それで一番簡単な表現が、帽子を三つか四つ持っていると言ふんです。まず制服の帽子、「陸」なら「陸」。それから国防長官の補佐官であるという帽子。それから「制服」の四つを統合するための帽子。そんなものを一人の人間がかぶれるはずがない。簡単に言えばみんなそういう調子なんです。だから統合参謀本部は機能しないという批判的な刊行物、論文が出ているわけです。

ほとんど私は目を通しました。そして、アメリカでもこうなんだから、そんな機能しないものをつくる必要はないじゃないかと。それが「制服」の最高のポストになる。その意味はあるだろう。しかしそれを機能させようと、帝国陸海軍の喧嘩をなくそうということを考えたら駄目だと。現にアメリカではこういう文献があるじゃないか、ということとを説明したんです。

それから自衛艦隊、これも艦隊と名前の付くものができるか、と言ったんです。これは私の持論ですが、日本は地方隊、つまり舞鶴、大湊、佐世保、呉、横須賀の地方隊がしつかりすべきだと。それから大事なところは、太平洋よりもむしろ日本海だ。将来の日本の脅威は日本海だろう。となると、私の持論では、舞鶴、大湊がナンバーワンのポストだ。それから佐世保、呉、横須賀がその次のポストだ。そうなるべきである。ところが海上自衛隊の人事を見ると、ナンバーワンは横須賀なんです。これは旧海軍の郷愁がありますから。それから米海軍の隣組になるわけです。立派な米海軍の船が入って来ると、自分の船が来た気持になるんですね。わかりますよね。人間としてはわかるけれど、それでは駄目なんだと。それをやっている、海上自衛隊の関心は太平洋にあるということになる。しかし、これからの日本の防衛を考えれば、どうしても日本海が大事だと。だから舞鶴がナンバーワン、大湊がナンバーツー、佐世保がナンバースリー、呉がナンバースフォー、そして横須賀がナンバースファイブとなるべきだと、みんなの前で言ったわけです。そうしたら反対はないですよ。でもやっていることは違う（笑い）。反対するのなら反対と言えればいいじゃないですか。

例えば地方に回るでしょう。地方に行つて大湊の総監部に行つて、

大湊の総監にその話をすると、おっしゃる通りだと言うんですよ。舞鶴に行つてもそうですよ。その通りだと言う。その人たちが東京に帰つて来るでしょう。全然言わない（笑い）。こうも変わるものかと思いましたね。それが作戦上の考えだと言います。

その次に、施設がいつばいあるわけです。大湊にも舞鶴にも旧海軍の用地がある。これは利用できるわけです。そういうものを早く利用しないと他に取られちゃうわけです。それもあるから、ちゃんと手を付けてわれわれが利用すべきである。そうしたら地方総監は、みなその通りだと言うんですよ。ところが東京に来て防衛庁の海幕に座ると、やっぱり横須賀なんです（笑い）。そういうことがありまして、大湊に行つてもいろいろな土地があるわけです。舞鶴でも旧海軍のいろいろないいものがあるんです。それがみんなむしり取られますよと、ずいぶん言いましたね。言いましたけれども、やっぱり旧海軍、帝国海軍の郷愁は横須賀ですな。太平洋を見ているんです。軍艦マーチが常に頭の中で鳴っているわけです。

だから話が飛びますが、今度の日本海の事件。「北朝鮮の船が」領海、領域を侵したということで追つて行く。あんな情けないことになぜなるか。それは日本海が大事だと言いながら、それをやらないものですか。船もいいのは全部横須賀や太平洋側にあるわけです。だからあつちには二流の船しかない。スピードが出ませんよ。入つて来る方は、ちゃんとその覚悟があるから、エンジンも強化しているでしょうし、時速にすると五五キロぐらい出るでしょう。しかし日本の海上保安庁も、わが自衛隊の護衛艦も五〇キロのスピードを出せません。出せる船はあるけれど、それは横須賀にある。大湊や舞鶴にはないわけです。そうすると、来たといつても追いかけれない。陸と違つて

海の上でしょう。だからノットの違いは大変なものです。「領域」という言葉は私はよくわかりませんが、最近みなさん使っていますから言いますが、そもそもが「領海」から来ているでしょう。それに對しては警告射撃をやつて、当たつたつていいんですよ。外国はやるわけですから。そこまで決心できないんですね。もし乗組員に当たつたら大変なことになるといふものですから、遠慮しながらやるわけでしょう。舵に網をかぶせるとか（笑い）。そんなことをやっているうちにどんどん逃げられて、防空識別圏に入ったからもうやめると。

これについては、あの朝日新聞にある人が、こんなみつももないこととはないと書いています。そこで引き返した。そんなことは通らない。日本の領域というか、日本の主権に基づく行動なんだから、日米安保も何も関係ない。なぜ向こうの領海まで行かないんだと書いていますね。朝日新聞の中には、そういうことを言う人もいますね。ところが社説になるとそうはいかないですね。朝日自体があの事件では、三人ばかり意見が違いますよ。それを今度の『文藝春秋』に書いてあるんです。「新聞閻魔帳」というのがあつてでしょう。あれに、朝日新聞の論理がこんなになつていとあります。朝日新聞というのはどういふ新聞なのか（笑い）。

伊藤 それはやつぱり、あれだけ大きくなつたら、コントロールが利かないんですよ。

海原 だつて、困るんですよ。日本の人は朝日の記事をほとんど無条件に信用しますからね。

伊藤 そんなことはないんじゃないですか。

海原 いや、私はここに来て言いましたが、朝日がいかにでたらめを書いてるかと言つても、そうは言つても、新聞が嘘を書くはずがな

いと言つては、やつぱり活字には弱いですね。

この話はしませんでしたか。山形に行った時に、日本に核が来ているかどうかという話になりました。日本に核が来ておつたという意味の、武村（正義）さんが取り上げた毎日新聞の記事がありました。あれについて私は、日本には核は来ないということをやつたんです。一時間半ばかり講演しまして、いろいろ理由を言つて、こういうことだから、日本には絶対に核は来ない、来るはずがない、だからあの毎日新聞の報道にはいろいろと前提があるけれど、間違いでないと、そういうことを一時間半ぐらい言つたんです。そして、終わつて講演会場の階段を降りて行く。聴きに來ている人と一緒にいる。私が降りて行く後ろで、その人たちが話をしていふんです。どういふ話をしていたかと思ひますか。「海原さんはああいうふうに言つていふけれど、それは君、日本には核は來ているよ。新聞が嘘を書くはずがない」と言つていふんですよ。私は振り返りませんよ。大きな声でしゃべっているから聞こえるんですよ。「海原さんはいろいろ言つたけれど、新聞が嘘を書くはずがない。アメリカの核は來ている」と言つていふんですよ。「そうだな」と言つていふんですよ。何のために一時間半しゃべつたのか（笑い）。それで、ああこれは駄目だ、と思ひましたね。新聞の活字には勝てませんね。

そんな思ひ出があるものですから、声を大にして言つてくれれば、やつぱり一般の人は活字をそのまま信用しますね。それから普通の家では三紙も四紙も取りませんね。一紙でしょう。しかも地方だったら、地方紙が多いでしょう。地方紙は、そういう広い世界的なものを取り上げませんね。そういうことがありまして、これまた何ともなりません。しかし、と思ひながらやつているわけですからね。新聞倫理綱

領に書いてある新聞人の責任を果たせ、と言っているんだけれど（笑い）。

さて、その後には砂田さんが出ていますね。

佐道 その前に、いま統幕議長、統幕会議をつくる時の話をされましたが、海原先生は反対をされた。でも実際はできるわけですね。

海原 ええ、できます。それから自衛艦隊もできました。その理由を申し上げるのを忘れていました。それは、私は自衛艦隊と言っても艦隊と呼ぶにふさわしい船がどこにあるんだと言ったんです。それから海堀（洋平）君が計画官でいまして、大蔵省から来た頭のいい、優秀な人で日銀政策委員になりましたけれど、彼が言うんですよ。彼は元海軍にいましたからちゃんと知っている。そんな艦隊をつくって、そんなものを集めたって何の意味もない。それより海原さんの言うようにそれぞれの地方隊を強化すべきであると。全く「私と」同意見でした。そういうことでやるわけです。

ところが海軍は、この前もちよつと申しましたが、「小運送」や「どぶざらい」をやらぬという気持がありますから、軍艦マーチが鳴っているわけです。それでどうしても艦隊というものにはしたい。そこでどうしたか。前後はわかりませんが、改進黨に働きかけた。改進黨はご存知のように別個に五年計画とかを作っているでしょう。芦田さん、中曾根さん、こういう勇ましい方がいました。吉田さんに言わせますと、これは後で申し上げますけれど、「将来国軍は必要だ。しかし軍隊を持つためには、まず経済力をしっかりせんといかん。その経済力が整わないのに軍備を持つと、それはかえってマイナスになる。その面は芦田がしきりに言っているから、彼に任せておく」と言っているんですね。それが吉田さんの意見でしたが、改進黨では芦田さんも中

曾根さんも勇ましいわけです。そこで国軍のために、ということを考えるでしょう。この人たちが自衛艦隊をつくれ、統合幕僚会議をつくれ、この二つをつくらぬなら防衛庁を認めないということになった。それが改進黨の要求ですよ。おかしなものだと思いましたがね。しかしそうなる、それは防衛庁としてはイエス・サーですよ。私もこれ以上抵抗は無駄だと思ったから（笑い）。

伊藤 無条件降伏ですね。

海原 そこで引き下がらないとね。勝てない戦いをやってもしょうがないですから。

伊藤 そうですね。

海原 だから私は反対だったけれど、判子を逆に捺しましたけれどね。それはできちゃった。自衛艦隊と統合幕僚会議が。そういう経緯があるんです。

佐道 そうすると、質問項目に書いたんですが、二十八年九月に吉田さんと重光さんが会談して、それで軍備増強とか自衛隊設置という方向で話が進むということですが。

海原 これがどういふふうになっているか知らないんです。いろいろ書かれていますけれど、はつきりしないですね。私自身は知りません。この間も申し上げましたが、私は外のことには無関係にしていたんです。外のことを糺そうとしますと、誰に聞いたらいいかわからないんです。だからもつばら外のことには放っておいて、自分は、中で自分のできる範囲、接する範囲でやろうということをやったから、この両者の会談で何があったか知りません。

佐道 今の自衛艦隊と統幕会議は、改進黨の意見だということですね。

海原 これが認められなければ、防衛庁の法律を認めないというわけ

です。

佐道 このあたりから、改進黨系の意見というのは……。

海原 それは必ずしも私は感じませんでしたね。前に中曾根さんの鉄道連隊のことを話しましたね。あれも改進黨の意見で、具体的には中曾根議員の意見ですね。それで鉄道連隊をつくると。それで私が、通信をどうするんだ、信号をどうすると言ったら、誰も答えないでしょう。そういうことで、個々に言ってきたことはハネましたけれど、改進黨は党として五年計画を作りましたからね。それにしたがって保安庁の方に要請が来ますと、これはノーとは言えませんね。私もしようがないと思った。それならそのまま、そういうことでやるよりしようがないと思った。

しかし私は、あれができて良かったかどうか、本当はわからないと思います。というのは統合幕僚会議が機能しないということは、その議長をやった五人が『国防』という雑誌の座談会でしゃべっているんですから。統合ということをやろうとしたけれどできなかったと書いてあるんですね。みんなが。それでは統合は何なんだ。陸・海・空の自衛隊はわからないですよ。それはまさにアメリカの統合参謀本部が機能しないということが、その通りに出ているわけです。それなら直せばいいでしょう。ところが誰も直そうと言わない。

私は批判するだけではないんです。例えば加藤さんがしきりに言っていたんですが、統幕議長と、方面隊の「陸」の司令官、これを認証官にしろと言うんですね。私は認証官というのは何か、初め知らなかった。調べてみたら名譽職みたいなものですね。そうしろ、と言う。なるべきだと言う。それはそうでしょう。検事さんもなるわけですから、外交官もなりませんね。ところが、ここで障害になったのは、加藤

さんの持論ですが、統幕議長と次官は同級同列同格でなくてはならんと言います。そうすると統幕議長が認証官になれば、次官も認証官にならなければいけないですよ、加藤さんの説に従うと。防衛庁の次官だけがどうして認証官になれますか。そういうことがある。ところが頑として加藤さんは聞かない。シビリアン・コントロールの一つだと思っているんでしょうね。議長が認証官で事務次官が認証官でない、議長の方が偉いということになるんでしょうな。「偉い」という言葉の意味はよくわかりませんが、これは、前にお話ししましたか。

私はこのことについて、実は河野一郎さんに頼んだんです。私ほもつともだと思おうし、私自身は認証官がどうかとは思いませんが、そういう希望があるし、検事さんも認証官になるわけだから、統幕議長や方面司令官が認証官になってもいいと思うと。ということ、たまに河野一郎さんのところに三回ほど話に行ったことがあるんです。

伊藤 前から知っているんですか。

海原 いや知らないんです。当時の内閣の無任所大臣なんです。うるさい人でしょう。河野がうるさいから、説明に行け、と私が言われるわけです。それで説明に行っただけです。その時に河野さんに頼んだんです。実は認証官の問題があると。そうしたら河野さんは、「そういうことが必要だという主張もわかる。しかしそういうことは役所の中で、下から出してきても駄目だ。上に出てこない。上の方から政治家がやらないといかん」と言うわけです。それはそうでしょうな。それで私は、河野さんに「お願いします」と言っただけです。そうしたら「わかった、うん」と言っただけです。

ところが、そのすぐ後で三矢事件が起こっちゃった。それで大騒ぎになるでしょう。それでまた河野さんのところに説明に行くんですが、

その時、河野さんが「海原君、この間、君から頼まれた認証官問題、俺は努力すると言ったけれど、三矢問題でこれだけ世の中が揉めている時だから、あの認証官問題は出せない」と言うんですよ。それで私も、わかりましたということ、それは「おじゃん」になった。その後は誰も言いませんね。今も。そういうこともあるわけです。しかし認証官というものが必要であるならば、何も次官が合格であるべきだということはない方がいいんです。ところがどうしても、事務次官は統幕議長と同格であるべきだという説を譲りませんでしたね。それで、「加藤さん、私はそれはできませんよ」と言ったんです。

さて、ここにいろいろな方の名前が出ていますが、砂田（重政）さんに関して記者会見のことは新聞に出てはいるんですか。

佐道 これは『防衛年鑑』に載っていた記事です。

海原 そうですか。私はこの砂田さんという人は短期間でしたが、いろいろと考えた人だと思っんです。この方が「郷土防衛隊構想」を言ったんです。それを受けて私は今でも言っているんですけどね。その具体的な郷土防衛隊の組織の構想を作文したんです。しかしその時、「陸」「海」は、自分たちの部隊の方が先でしょう。そんな民間の郷土防衛隊よりも、何個師団をつくる。その何個師団分の装備をアメリカからもらおう、そっちの方が急務ですから、防衛庁の部隊の建設の方が先だということで、誰も興味を示しませんでした。それで沙汰やみなんです。

次の船田（中）長官も砂田さんが言ったことは、自分が継承してやると言った。それはこの郷土防衛隊と国防省の問題なんです。この二つとも砂田さんが言ったことだけれど、彼は短期間で、四カ月半ぐらいで辞めますが、「私は賛成だからやる」と言った船田さんも結局で

きなかった。そういう経緯があるんです。

それで私はせつかく砂田さんがいいことを言っておられるんだから、ということ、その後も私一人になっても、郷土防衛隊ということをお願い続けた。今でも言っていますけれどね。そういうことです。だから惜しかったと思います、砂田さんが短期間で辞められたことは。本当に、もうちよつと欲しかったですね。

そのことがあるものですから、私はその後の総理大臣三人ばかりに、防衛庁長官は「伴食大臣」と言われてよく替わるけれど、替えないでくれということを陳情したんです。防衛庁長官になる人は、政治的な野心のない人で、少なくとも三年か四年かはじっくりと腰を据えて、防衛庁の部隊建設の面倒を見る。そういう人を据えて欲しい。ところが、来る人は平均九カ月で替わっちゃうでしょう。中には半分で替わる人もいる、それでは困りますと言うと、それはそうだ、と言うんです。歴代の総理が私にそう言うんです。言うんですが、やらないんです。

伊藤 できないんでしょうね。

海原 最後にならざらと、閣僚の人事の振り回し方である人が多い。残念ですね。私は砂田さんについては、なるほどこの方はいろいろ将来を見て、考える人だな、と思いました。ということは、話がまた元に戻りますが、吉田さんが私に言ったことで、兵器の国産の問題があります。これはお話ししていいでしょう。それはおそらく辰己さんあたりが進言したんじゃないかと思いますが、聞くところによると、と吉田さんは言いました。自衛隊の装備は全部米国の物だと。体格も米国人に合わせてある。だから銃を撃つ場合にも、日本人の体に合わないということを知っている。それではまずいだらう。だから日本は

兵器廠になるべきだ。何のか。アジアの兵器廠になるべきだと。日本で兵器を作れば、当然アジアの人々、すなわち中国とか東南アジアの人々もそれを使うだろう。だから日本はアジアの兵器廠になるべきだ、日本の自衛隊、防衛隊だけの需要だけでは成り立たないだろうということを書われました。それは後で申し上げますが、木村さんのお供をして、私が長期計画の説明に行った時に吉田さんが直接私に言ったことなんです。

幻の防衛道路建設計画

伊藤 吉田さんに直接会うというチャンスは、そんなにいろいろあったんですか。

海原 それは木村さんが長期計画を作らう。それができたら、これから総理のところに行きから一緒に来いと言って、私だけ連れて行くんです。次官も行かない。そういうことですから、機会はあつたんです。

その前に、例の「将来どうしますか」という私の発言の時の、顔を言いますと、実は吉田さんの秘書官をして、吉田さんから非常にかわいがられた人にわれわれの先輩がいるんです。村井順さん。今は亡くなりましたが、総合警備保障(株)の初代の社長をやった人です。この村井順さんは昭和十年採用ですが、この方が総理のところにお飯を食いにいこうということで、先輩の三輪(良雄)さんと小杉(平一)さ

ん、と私に声がかかりまして、白金の迎賓館に行くわけです。そこで食事が終わった後で、ベランダに出ますね。ここで村井さんが、せっかくの機会だから何でも質問しろ、と言われた。吉田さんは元々役人が好きなんです。自分が官僚出身だから、ということもあるでしょう。それから村井さんを秘書官として非常にかわいがっていたんですね。

みんな遠慮してなかなか物を言いませんから、私は一番若輩ですが、「それではせっかくの機会ですから、総理にお伺いします。来年日本は独立します。さて、独立国日本としての国防はどうお考えになりますか」とピシャツと言ったんです。そうしたら怒られるかと思つたら、ここにこ笑いながら、「それは君、独立国である以上は国防は大事なもので、必要だ。しかし、経済がしっかりする前にそれを言つたら駄目だ。経済がしっかりしてから、その条件ができてから初めて本格的な国防の問題を考えるべきだ。まず日本としては戦後の弱い経済の建て直しが先だ。幸い(と言いましたよ)、芦田がしきりに国防のことを言っておるから、そつちの面は芦田に任せておく」と言うんですね。さすがだと思いましたね。そういうことがあつた。

その後、長期計画ができた時に木村さんのお供をして行くでしょう。向こうも一応覚えておられた。それで、この計画とは直接関係なしに、「聞くところによると、自衛隊の武器は日本人向きではないというけれど、日本は将来アジアの兵器廠になるべきだ」ということを言われたわけです。後にも先にも、そういうことを言つた総理大臣は吉田さんだけです。三木さんに至っては武器輸出三原則を作つてしまった。日本が東南アジアの国から練習機の輸出の引き合いがあつた時に、外務省が反対した。その理由が面白いんです。練習機に機関銃を積めば

戦闘機になると言う。そういう理由付けで、武器輸出三原則がデンとあるわけです。したがって、そういうことを前提にしますと、吉田さんというのはさすがだと思いますね。「聞くところによると、アメリカ製の武器というのは、全部アメリカ人を前提にした基準になっている。あれでは具合が悪いだろう」と言うから、具合が悪いです、と言うと、それなら一つ日本は兵器廠になるべきだと。どこの？「アジアの兵器廠になるべきだ」ということを言いましたね。これは同じことの繰り返しになりますよ。後にも先にも、そういうことを言った総理は吉田さんだけです。吉田の「なし崩し再軍備」とかいろいろ言われていますけれどね。しかし、将来を見ながら物事を考えていたんでしょな。

将来について吉田さんが言ったことがあるんです。防衛道路を造れと言うんです。どういうことかおわかりですか、防衛道路。日本の部隊が移動するためには道路整備が先だと言うんです。しかし、日本の道路は全部海岸沿いに東京から地方に向かっていただけだ。太平洋側から日本海側へ抜ける道路はないわけですね。この整備が必要だと言うんです。ただし、さっきの議論に関係しますが、日本は財政的にそういう能力がない。だからアメリカから金を出させる。ついては防衛道路建設計画を作れ、となったわけです。そこで私がまた増原さんから言われて、建設省に相談に行きました。建設省では道路建設五カ年計画があつて、全部それは海岸沿いに、東京から北に行く、西に行く、ですね。太平洋と日本海とを結ぶという発想はゼロです。部隊の移動のことを考えていないから。そこで急遽、防衛道路建設計画というものを作ってもらったんです。自衛隊でそれを利用するわけですが、防衛道路建設計画ということで、五カ年間で総額三、二〇〇億円という

ものを用意するわけです。これを持って吉田さんは出かけるわけです。「俺がアメリカで交渉する」と言つて。ところが、その時にはもう退陣の時期ですね。帰つて来て辞めるでしょう。だから、もうご破算です。

佐道 昭和二十九年ですね。

海原 そうでしょうね、退陣の前ですから。この防衛道路建設計画というのは、ちゃんと作つて、まとめて差し上げたんですよ。日本では、木村防衛庁長官からハル極東軍司令官宛に通知を出したんです。しかし直接吉田総理が持つて行つて、アメリカで交渉することになってたわけです。全部ご破算になった。その後、こういう計画は全然出ませんね。それはいろいろ用意してあるんですよ。重戦車三五トンを前提とした戦車の移動のためには、幅七・五メートル、長さ六、五〇〇キロ、軽戦車は二〇トンのものに対して、幅六メートル、長さ二、五〇〇キロ、ということになるわけですね。そういうことをちゃんと建設省と話し合いをしまして、用意したんです。では、これでお願いますと言つて、吉田総理に渡したら、「うん」ということになるわけですね。

その前に、吉田さんが「トルコはちゃんとアメリカから金を出させて、防衛道路の建設をやっているから、トルコを見て来い」ということになるわけです。それで、私がお前に欧米に出張して、ついでにトルコに行くわけですね。

伊藤 それは何年の話ですか。昭和二十八年ぐらいですか。

海原 二十九年です。一九五四年です。

伊藤 どのぐらいの期間、行つてらしたんですか。

海原 トルコには五日ぐらいですね。そのトルコに、たまたま東京で

よく世話になったシェパード少将が顧問団長でいるわけです。向こうも覚えていまして、やあ、久しぶりと言って握手をして、最初にシェパード少将が聞いたことは、「あの防衛庁の防衛大学校、三軍の候補生と一緒に教育していたが、今でも残っているか」ということです。イエス、サーと私は言ったんです。そうしたら、「絶対にあは残すべきだ。陸・海・空の若い連中が同じところで最初の教育を受ける。日本式に言うと同じ釜の飯を食う、これは絶対に必要なんだ。アメリカではそれをやろうと思ってもできなかった。ところが日本では、防衛大学校でみんな一緒にその青春時代を過ごすことができる。それは将来のために非常にいいことだ。是非、将来ともそれを続けて行け」と言ったんですね。そういう人でした。

しかし、この防衛道路建設計画というのは、本当に吉田さんがもう少し残っていたら実現したでしょうね。太平洋と日本海とを結ぶ道路ができますと、産業経済面でも非常にプラスになりますよ。しかも、金はアメリカから半分以上出させると言うんですからね。俺が直接交渉すると言うんですからね。そういう人でした。その後の総理でそういう発想を持った人は一人もいませんね。

伊藤 今のトルコの話にこだわりますが、その時はトルコだけにいらっしやったわけですか。

海原 いや、イギリス、フランス、イタリーを回って行ったわけです。

伊藤 その話を少ししてくださいよ。时期的には、この時期ですね。

海原 その時期なんですかね。

河野 今おっしゃった防衛道路のことは、吉田が自分の『回想十年』の中で書いているんですね。ただ、先生がおっしゃったように、きちんと建設省とお話をしたというような裏付けは、今までどなたもおつ

しやっていませんでした。ですから、吉田は自分で書いているけれど、どこまで現実的な話だったか、これまであまりはつきりしなかったんですね。

海原 それは私が言われまして、私が防衛庁を代表して建設省と話をして、建設省で具体的な計画を作って、その作る間には防衛庁の意見も入れたわけです。

河野 しかも、そのためにわざわざ海外出張をされて、防衛道路を造っている国を視察なさったわけですね。その話を是非お願いします。

海原 そういうことで、トルコで防衛道路を見まして、トルコで聞いたら、アメリカの金で防衛のための道路の建設をしたと。トルコというのは広いでしょう。移動が必要ですね。部隊の移動のために絶対に必要な道路ということで、防衛道路になるんです。日本の場合は、一般の産業開発のための道路建設計画とほぼ一致するんです。違うのは、日本海と太平洋を結ぶ道路で、これは一般産業の道路にはないんです。

伊藤 トルコの場合、全額アメリカがお金を出すということですか。

海原 いくら出したかは直接聞きませんが、吉田さんはトルコがうまいことをやっている。アメリカから金を引っぱり出して道路を整備した。日本もそれをやるべきだ、と言われました。それ以上は調べていません。だからトルコでも聞きませんでしたね。

伊藤 ヨーロッパにも行かれたわけですね。

海原 行きました。

伊藤 それも道路の問題ですか。

海原 いや、そうじゃないんです。それは「空」の統合の問題があるわけです。それはちょっとこの間もお話ししたけれど、ワシントンでトワイニング統合参謀本部議長に会った。空軍大将ですね。それは日

本の空軍の建設を担当していたルベリーという大佐が手配してくれたんです。そうでなければ、一課長がアメリカの統合参謀本部議長と会うなんていうことはあり得ませんよ。それでかれこれ三十分ぐらい、統合参謀本部議長室で私は会いました。その時に日本の実状を説明したんです。私のブローケンな英語で。いま東京では防衛庁はみんな一軍をつくらうということをやっている。ところがそのための一番大きな障害が顧問団だ。具体的な例を言うと、航空自衛隊ができることについて、その持っている飛行機をどうするかということでも採めている。防衛庁内局は全員が一軍思想である。これに対して特に反対しているのが、日本海軍、海上自衛隊である。その背後には米海軍がいる、と言ったわけです。さてそこで、と私はトワイニング大將に言ったんです。あなたは統合参謀本部議長なんだから、日本の「陸」「海」の顧問団に対して、空軍の建設、所属飛行機の配属については、一切口を出すなということを通知してもらいたいと。

伊藤 この前、それはちよっとお伺いしましたね。それはトルコに行った話と同じ時なんですか。

海原 同じ時期です。昭和二十九年の七月です。ワシントンから私はヨーロッパへ行くわけです。

伊藤 ヨーロッパに行つて、それでトルコに行くわけですか。

海原 はいそうです。

伊藤 その出張の目的は何だったんですか。

海原 それは色々な問題の回答を得るためにいっぺんまた見て来い、ということで行ったんです。だからアメリカではトワイニングと会つて、「空」の統合問題をどう考えているか、と聞いているわけです。そうしたら、統幕議長トワイニング大將は空軍ですが、「日本のよう

な小さな国では、三つがバラバラに「飛行機を」持つことは無意味だ。一つが持つことが絶対に正しいと思う」とはっきり言うわけです。「あなたがそう言うなら、そういう指示を出してくれ」と言った。「それはできない。それは日本の内政問題に直接アメリカの統合参謀本部議長が介入することになるからできない。だから駄目だ。しかし日本政府は日本政府としての判断ができるじゃないか」と言うわけですね。

そこで、「いや日本政府としてはそうしたいんだけど、後ろにそれそれ応援がある。米海軍と米空軍と。特に米海軍が反対だ。だからこの問題については、顧問団は口を差し挟むなという意味のアドバイスをしてほしい」と言った。それも駄目だと言うんです。「そういうことを言うのは、私の権限内じゃない」と言うんです。二つとも駄目なんです。しかし、と彼は言うんです。それは顧問団がどう言おうが、日本政府の独自の判断で実行したらいいではないかと言うんですね。それで私は、理屈はまさにそうなんだが、現実には日本では、米海軍、米空軍の後押しが一番大きいんだと言ったんですね。駄目か、と言つて私のはがっかりしたんです。

そうしたらトワイニングが言ってくれたことは、今度お前はヨーロッパに行くらしい。イタリアにも行くかと言うから、行きますと言つた。そうしたら、イタリアは全部統一していると。だからイタリアの事例が参考になるだろうと言ってくれました。それで私はイタリアに行った時にローマで、米顧問団長に聞きました。あそこは法律で、およそ飛行機と名の付くものは全部空軍なんです。海上自衛隊の対潜哨戒機までそうです。しかし、イタリアにいるアメリカの顧問団長が私に言ったことですが、これに対してはイタリア海軍が絶対反対して、何とかして対潜哨戒機は自分のものにしたいと思つてやっていると

うんです。今のところそれは成功していないと言うんですね。そういうことがわかりましたけれどね。

ですから、いろいろな努力をしたんです。しかし駄目でした。ついに三つがバラバラになるわけです。この前も申し上げましたが、『自衛隊十年史』には全然そういうことが書いてない。大変な問題だったんです。それで結局統合は失敗しました。

伊藤 ヨーロッパでは他には何をなさったんですか。

海原 他はないですね。イタリアだけです。

伊藤 他の国もいらつしやったんですね。

海原 例えばドイツは、「海」は大したことがないんです。イギリスは別ですね。「空」を統一しているのはイタリアだけです。だから日本も真似をすべきだったと思いますが、駄目でした。

伊藤 他の国はいらつしやらなかったわけですか。

海原 行きましたけれど、その問題には関係ありません。

伊藤 また別の任務なんですね。

海原 例えばドイツでは、小さい海軍を持っていますけれど、掃海その他をやっているかということを知るとか、戦車をどうするとか、そういうことを調べました。英海軍では、その時参謀長に聞いたんですが、海上交通の安全の確保、シーレーンのことを聞いたら、笑って私に言いました。シーレーンの安全の確保ということの意味は具体的にわからんけれど、海上交通の安全ということになると、ドーバー海峡のような狭い海域での安全の確保は可能である。しかし大西洋となるとインポッシブルだ、だから考えない、と言うんですね。そこでですよ、問題は、ところが日本で今でも問題になっているのは、海上交通の安全の確保でしょう。「中曽根構想」がそうでした。そんなこと

は不可能だと私は言うんだけど、面と向かって誰も討論しようとは言わないんですよ。私は、誰とでも、どこへ行ってでも話をやるから、討論しましょうと言うんだけど、駄目なんです。

NHKでもその問題を取り上げる番組があつて、検討の段階で私が呼ばれて行って、六人ばかりにご説明しました。海上交通の安全の確保というのは具体的にはこういうことです。最後に、私個人としてはこう思うということも言ったんですけれどね。さて、いざ放映ということになると私を呼ばない。そういうものなんです。なぜ、そんな夢を見るかということなんです。いまだに海上交通の安全の確保ということ、日本の国の方針として約束したことになっている。鈴木氏、中曽根氏がそうですね。これは困った問題だと思えますけれどね。私は個人は夢を見るべきだと言うんです。しかし、組織が夢を見たら大変なことになる。大日本帝国が大変馬鹿な夢を見たのと同じだと言っているんですが、駄目です。しかし面と向かって誰も私とそういうことについて論戦しようとは言わないんですよ。あいつは変わっている、海原は駄目だ、あいつは陸原だと言うんです（笑い）。

伊藤 そのヨーロッパとかトルコの訪問は、これが初めてですね。

海原 トルコは初めてです。

伊藤 ヨーロッパは、その前に行っているんですか。

海原 行っていません。一九五四年が最初です。それはドイツの再軍備の前に行ったんです。担当部局が赤煉瓦の建物の中でドイツの再軍備の計画をやっている時に行ったんです。

伊藤 それは課長の時代ですか。何の命令で行ったんですか。

海原 それは、イギリス、ドイツ、フランス等に出張を命ず、です。状況視察のため、ということですよ。

伊藤 そういう時には報告書を書くんですか。

海原 書きます。簡単に書きまして、あとは全部口頭です。

伊藤 その簡単な報告書は持っていらつしやいますか。

海原 もうないですね。

伊藤 どこに行つたんですか。

海原 とにかく昔のことですからね。こういうことになるのなら、この前も申しましたが、全部置いておくんでしたね。

伊藤 それは神代の昔というわけではないですか。

海原 メモワールを書くかと思うなら置いておきますけれど、それはしました、と思います。いっぱいあるんですよ。ドイツの話はいろいろありまして、私はもともと第一高等学校で独法ですから、若干ドイツ語ができるわけです。若干ドイツ語ができるから、通じるなど思つたら、全然駄目でしたな(笑い)。ボンの駐車場のすぐ裏のちっぽけな宿屋に泊まつたんですが、下から電話がかかつてきて、誰か日本人が来ているからと言う。すぐ降ります、と言いたいけれど、すぐ降りますと言えないんですね。英語で出ちゃうんです(笑い)。しかしその時に、ドイツの再軍備の研究をして来ました。それはまた別に書いたものがありますから、今度持つて来ましょう。

ちようどドイツの再軍備をフランスが認めるかどうかということが大きな問題でした。それもあつて調査に行つた。『ニューズウィーク』にも連絡しておきましたら、パリの『ニューズウィーク』の支局長が会つてくれました。フランス人はどう考えているかという質問をしたら、ちようど『ロンドンタイムズ』の特派員が三カ月回つて調査した結論と同じことだと言うんですね。フランス人はみな、個人としてはあのドイツ人が再軍備をして鉄兜、長靴を履いて堂々と行進する姿は

絶対に見たくない、と。二度もやられていますからね。だから、フランス人は絶対にドイツ人が再軍備した姿は見たくない。これは事実だ、これが第一。第二は、しかしソ連の共産主義の攻撃、共産主義の脅威、これに対しては、ドイツの五〇万人の武力が絶対に要る。これは完全に二律背反する。そうしたらどうするか。結論、ドイツの再軍備は必要悪である、ネセサリー・イブルであるとして、フランスは再軍備を認めるだろうと言うんですね。先に言いましたが、『ロンドンタイムズ』の記者が三カ月ドイツ国内を回つて得た結論と同じでした。ああ、そうだな、と思いました。これがヨーロッパの情勢だな、と思いましたね。

物の考え方が、基本的に日本人と違うということです。このことを私は日本ですつと講演して回りました。ドイツは再軍備したいと言っている。フランス人はドイツの再軍備は絶対嫌だと言う。しかし、あの軍事力は必要だ。ではどうするか。必要悪である、ネセサリー・イブルである。そういう考え方は日本にはないと。

河野 その時にアメリカの存在というものがあるわけですね。

海原 もちろんありますけれど、アメリカの存在は言わば二義的なんですね。直接的ではないんですね。今度持つて来ますけれど、第三次世界大戦の予想なども出ていましたからね。

伊藤 予想が出ていたというのは何ですか。

海原 『ニューズウィーク』に出ていました。東ドイツが突破して、ライン川まで一週間というのが出ています。第三次世界大戦を戦うにはどうするか、当時はいろいろあつたんです。そういう時代です。だから面白い時期でした。たまたまドイツ、フランスの後で、最後の日曜日にライン川の船遊びを楽しんだんです。そこにドイツの

青年がいましたから、私の下手なドイツ語で話しかけたんです。青年諸君は、再軍備をどう思うかと。その時の結論は、第一に、戦争は懲り懲りだと言うんです。第二に兵隊には行きたくないと。しかし第三に、今のヨーロッパの情勢ではドイツの軍隊は必要だと言うんです。

これが私が聞いた、ドイツの若い人たちの答えですね。ところが日本では、一番も二番も同じでしょう。結論が違う。戦争はごめんだ、兵隊には行きたくない、だから反対だ、となるんです。しかしドイツは、一と二は同じだけれど、結論は違って、しかし必要だ、となる。

ここに日本人とドイツ人の物の考え方が明瞭に違うということがおわかりでしょうと、講演で言うわけです。さあみなさん、どっちを取りますかと。日本人の物の考え方とドイツ人の考え方の違いだということとを、講演して回りました。それであちこちに行ったわけです。だから、そういうことを申し上げますと切りがないんですね。

伊藤 切りはなくてもいいんです。

海原 そういうことで、帰ってからですいぶんやりました。新聞記者協会での講演もやりました。私はヨーロッパに行つて来た。ドイツの再軍備を見て来た。向こうでは、こう言っている。明確に、理論と感情と具体的なプログラムを分けている。日本人にはそれができない。必要悪という考え方は日本にはないだろう。悪は悪だ。しかしそれは必要なんだという考え方は残念ながら日本にはない、そこが問題だということが、私の当時の講演の材料でしたね。だから、トワイニングに会ったのもその一コマなんです。ぐるっと回りましたが、国によって問題の対象が違うわけです。

伊藤 ではその課長の時代には、二回くらいヨーロッパにいらっしやっているわけですね。

海原 課長の時代は一回です。

伊藤 いらっしやった時に、いまおっしゃったように、私はドイツに行つて来ましたということと講演なさるといことがあつたわけですね。

海原 講演は防衛庁の官房長になつてからです。広報を担当しますから。国防会議事務局長は暇ですからね。

伊藤 日常業務というものが無いわけですね。

海原 当時、官房長官は保利茂さんですね。私はあちこちで、防衛庁でも講演しました。保利さんに、国防会議に来るとちよつと暇だから、いろいろ講演の呼びかけがあるが、行つていいですか、と聞いたたら、「ああ、それはどんどんやってください」ということで、ちゃんと許可を求めてやっていたわけです。だから、その頃の講演集がいっぱいありますよ。

伊藤 それは記録がありますか。

海原 あるものもあります。それは、ご必要なら差し上げます。

伊藤 欲しいですね。

海原 持つて参りましょう。ですから結構あちこちでお話したんです。新聞記者協会でもお話ししましたね。それから四次防をまとめて、役人は辞めています、その時にこうであつたというお話もしました。後はもっぱらPRですね。それが役人を辞めてからも、いわゆる評論家として、テレビを通じてやることになつたということです。いま読んでも、ああ、おれはこんないいことを言っているか、と思うことがあるんです。もうすっかり忘れていましたね。

河野 国防会議事務局長として講演される時には、ご自分のメモか何かをこらになつてやっているんですね。

海原 問題点はメモ程度のことを書きましたね。

河野 ヨーロッパに行かれた時のメモを手元に置かれて、なされたんですね。

海原 そうです。もう問題点だけで、後は思い出す限りでやりました。そういう講演の会で配ったものもあります。代議士諸君にぜひぶん渡しましたよ。

伊藤 それは見せてください。

海原 それじゃあ持って来ます。私は、あまりそういうことは不要かと思ひましてね。話は飛びますが、私が最初に出した本は、『戦史に学ぶ』という本なんです。これは私の役人としての最初の本ですが、国防会議の事務局長の時です。この間、持っておられましたね。あれを出した理由は何かというと、国防会議事務局長の上は総理大臣なんです。今の安全保障室長と違うんです。今の室長の上は官房長官でしょう。その上に総理がいるわけです。しかし国防会議の事務局長は、総理大臣の直接の部下なんです。だから私は総理と結ばれているわけです。それで私が『戦史に学ぶ』という本を出して、昔の陸海軍が馬鹿なことをやったということを書いて、今の「陸」も「海」もそうだと、問題点を書いたわけです。これを出せば、当然野党の諸君が問題にするだろうということで、何百冊かを配りましたよ。

そうしたらある日、あの有名な榎崎（弥之助）先生が来た。私の本を持っていくわけです。赤い線をいっぱい引いている。私は親しいから「榎さん」と言うんですが、「榎さん、それを今度の国会で質問してくれ」と言ったんです。「駄目だ」「なぜ駄目なんだ。あなたは読んでくれて、赤線をいっぱい引いてある。だから私と総理とを呼んで、これはどうだ、ああだという質問をやってくれ」「駄目だ」と言う。

なぜ駄目かと追及したら、「これでいくと、もっと防衛をやれということになる」と言う（笑い）。これは実話です。そういうことで『戦史に学ぶ』は私が書いた最初の本なんです。

そういうことをやりまして、一冊出すと、あとはずっと三、四年ごとに一冊ずつ出すわけです。二、三年前に出した本が十冊目です。『治に居て乱を忘れず』。昨日も、それであるところで講演して来ましたがね。

伊藤 追い追ひ、この時にこの本を出したということをお話してください。

海原 そうですか。そういうことになると延々となりますから。

伊藤 いや、延々とやりましょう。それでもう時間なんです。昭和二十九年に鳩山内閣ができて、鳩山内閣はとにかく再軍備、再軍備と言っていたわけですね。

海原 これは私は全然問題にしなかった。

伊藤 空論ですか。

海原 空論です。お経を読んでいるようです。私は鳩山一郎さんは個人的に知っていますから。というのは海原清平、伯父が鳩山さんの子分ですから、知っています。あの人はああいう人だと思っっています。何の力もない。「ポッポッポ、鳩ポッポ」です。息子もそうでしょう。

伊藤（笑い）。今いるのは孫ですよ。

海原 ああ、孫だ。息子さんは威一郎さん。彼は知っています。主計局長をしている時に付き合った。力にならない。孫もそうです。もうしようがないですな。近衛さんと似ていますね。そういうものなんですよ。だから橋本龍伍氏は良かった。その息子は駄目ですよ。ま

あ、それでいいのかもかもしれませんけれどね。結構いますね。

伊藤 そうですか。じゃあ、その時に鳩山内閣になったからといって何の変化もないわけですか。

海原 影響ないです。私たちは無視していた。そんなものにいちいち構っておれない。それはそうですよ。中曽根君自身もいい加減な男です。そういうことをみなさんは知らんから偉いと思うけれど、私は十四年「の採用」、中曽根は十六年。私が警視庁の課長時代に監察官で来て、それからずっと知っているんですよ。どういう行動をとったか。そういう人柄は変わらんですよ。

佐道 こういう人にかかったら、ちよつと（笑い）。

海原 しかし、そういうことになる個人批判になるから言わないだけのことです。ここでは構わないから言うんですが、あんな信用のできない男はないですよ。

伊藤 鳩山内閣ができて、防衛庁長官としてやって来る人は、張り切ってやって来るという感じではないんですか。

海原 ありませんね。防衛庁長官で何かをやりたいと思って、現実に私たちに具体的な指示をした人は、砂田さんだけです。郷土防衛隊等ですね。

伊藤 だけ、ですか。

海原 だけです。あとは西村（直己）さん。あの人は私たちの内務省の大先輩ですから昔から知っています、あまり評判が良くないですね。「巾着切り」というあだ名だった。それほど、すばしっこいという意味ですね。これが政治家仲間の評判なんです。しかし私から見ると、やっぱり立派でした。今まで溜まっているものを全部整理した。だから滞貨一掃したのが西村さんです。それで次の長期計画構想、こ

れは私が反対したので駄目になっているんです。そういうことで、大臣になった人が、何ができたか、できるか、ということは、それまでの条件があるんですね。一口にどうだこうだ、とは言えませんけれどね。

伊藤 そうですね。役人の方だって、大臣をどう扱うかというのはまた一つの大きな問題でしょう。

海原 扱うか、というより、扱えるか、ですな。みんな真面目に仕えたい。役人というのはそれは従順なものですよ、しもべですよ（笑い）。役人自身が言うんだから間違いない（笑い）。

伊藤 そこが信用できないんです（笑い）。

海原 そんなに信用ないですか。あなたまでそう思いますか（笑い）。私ぐらい信用が厚い者はないと思っていきましたけれど、役人はみんな従順ですよ。

伊藤 いや、大臣が何を言おうが全然聞かないと。

海原 そういうのもありますよ。そういう面もありますよ、私なんかね（笑い）。

河野 やっぱりそうですか（笑い）。

海原 そういう面もあるというだけで、それが全てではないのであって、人間というのは多面体ですよ。私の持論はそういうことです。ですから、多面体でいいと思うんですが、いいところが出ればいいんだけれど、出ないと駄目ですね。

話は大飛躍しますが、私が防衛庁を追い出されたでしょう。それは私がおつたら、ミサイルがどうなる、飛行機がどうなる、みんな思ってたんですよ。誰が思ったか。岸、佐藤ですよ。それは証拠もある。そんなものなんです。私は、それはしょうがないと思っっているんです。

その時その時で、私は「歌舞伎」だと思つていますから。役割です。何を言うかは、背景があるんです。その背景が冬なのに、夏のことを言つてもしょうがない。そういう順応性はありますね。また、それが必要ではないですかね。そう思つていますね。

伊藤 「書割」との関係もありますね、確かに。

海原 ありますね。人によつてその表し方も違うでしょうしね。それでいいと思うんです。ところが最近一番困つたことは、「政」と「官」とを対立させて、「政」が「官」を抑えろというのが新聞の論調でしょう。そんなことはできないと私は言つているんです。抑えるべきではない。

伊藤 おつしやるとおり、できないんでしょう。

海原 できないんですよ。だつて能力がないですから。その一番いい例は、最近流行りの副大臣とか、政府委員の廃止、これはぜひぶん私も三人ばかりの総理に言いましたよ。私は局長になつて、政府委員になつて感じたんだけど、国会で議論しているのは、野党・社会党の闘士と政府委員じゃないですか。これはおかしい。政府委員は野党の議員と議論すべきではない。事実関係を説明するんだ。その事実に基づいて、与野党の議員が討論する。それが国会の委員会でしょう、と言つたんです。そうしたらみんな、そうだと言つてますよ。それは海原君、君の言うとおりでと言つてます。じゃあ、そうしてくださいと言つて、駄目だ、と言つてですね。なぜ駄目か。単純なんです。社会党はみんな勉強している。自民党は誰も勉強してない。だから事実関係を政府委員が説明して、さあそれに基づいて賛成か反対か、理由は何かということをやらせたら、自民党は全部負けると言つてます。だから駄目だと。それが今までの日本の政治家の姿ですね。ここにき

て、何の準備もないのに、政府委員を辞めさせる、副大臣だ、なんて何を言つているかと思つてですね。

伊藤 負けるわけですかね。

海原 どうなるか。やつてみて、これはいかんと思うか。選挙制度がそうでしょう。私は比例小選挙区がなぜいいかということをも多くの人に聞いたんです。そうしたら、あれは絶対にいいと言つてですね。こういう効果があると。しかし必ずマイナスがありますよ、と言つたんです。今、そのマイナスが出てきていますね。それで今度は中選挙区がいいと言つて。その調子ですよ、日本人は、と言つて自分も日本人ですけれど。

伊藤 日本人ばかりじゃないでしょう（笑い）。

海原 物の一面しか見ない。私は敢えて、これは独法で育つたからですが、弁証法ですよ。右と言えば左、それを考えてみる必要がある。夏目漱石がそう言つているじゃないですか。陽の当たるところには必ず影が差す。それが世の中の道理なんだから、あなた方は陽の当たるところしか知らない。その反面はどうなんですか。それに対してどうするんですか、これをちゃんと決めておいてから言いなさい、と言つと黙つちゃうんだな。これは日本人の体質ですかね。

伊藤 日本人と限らない方がいいんじゃないですか。

海原 司馬遼太郎さんがよく使つた言葉、「遺伝的体質」です。

伊藤 いや、あれはちよつと使い過ぎです。

海原 私はあの言葉が好きで、書く時には、司馬遼太郎氏曰く……。

伊藤 それは評論家としての発言だと思いますね。

海原 それはそうでしょうな。それで評論家で今まで来ましたから、もつて瞑すべしです。

伊藤 それでは次回、今日落ちこぼれた問題をまた洗い出しましょう。

海原 私自身も整理になりますから、ありがたいと思っっているんです。しかしつい、自分の好みでしゃべってしまっって申し訳ないです。

伊藤 それはしようがないことですよ。

佐道 聞きたいことは、こちらもどんどん口を挟んで伺いますので。

伊藤 やはり言いたいことが言えないのでは話にならないですからね。

海原 残念だと思っるのが、いろいろ本を出しておられますが、やはり一面的なものが多いですね。『再軍備とナショナリズム』（大獄秀夫著）にも、私の名前が出てきますからね。ですが、例えば私が一時間お話をしても、そのなかの五分間を摘んでいるだけなんです。その摘むのは自分の好みで摘むんですね。これもしようがないですね。

朝日の社会部の記者が、この前シベリアン・コントロールのことを書きたいからというので、話したんですよ。それがまた明日来るというんですね。その時に私は、シベリアン・コントロールというのはどういう意味なんだ、と聞いたんです。わからない。それが今の若い人ですね。シベリアン・コントロールというのは辞典を引くと例えば、文官優位、文官統制と書いてあるけれど、それは何を言うんですか、と聞いた。例えば私は、毎回同じ話をしますが、「赤城構想」をご破算にした。「中曽根構想」をご破算にした。「赤城構想」「中曽根構想」は、「制服」も文官も全部入って、最後は政治家である大臣が決めたことなんだ。それを壊したのが、極端に言えば私なんだ。これは何と言えればいいんですか。黙っちゃう。シベリアン・コントロールということは何もないじゃないですか。何が正しくて何が間違っっているかということなんだから。それで何ができるのか、何をしたいのか、それはできるのか、そういう簡単なことなんだ、防衛というのは。そ

のことを考えられないのが日本人の体質なんだと。

伊藤 宿命論に過ぎないんじゃないですか。

海原 歳をとると駄目ですよ。私は昔から言っっているんですが、私は新聞を大事に思っっていると。新聞こそ、日本を指導できる人である。満州国事件を君、知っっているかと聞くと誰も知らない。日本中の新聞、百二十三社が共同声明を出しましたよ。ご存知ないですか。

伊藤 その当時ですか。

海原 日本の新聞全部が共同声明を出した。「満州国の成立は正しいことである。どんな理由があつても、これを否認するようなことは断じて許さんと言論機関の名において宣言する」と書いてある。これはご存知ないですか。今度持って来ますよ。それを新聞記者が知らないんですよ。あなた方は軍部が日本を誤らせたと言っけれど、軍人とか軍隊というのは別に色は付いていないと言っんです。それをどう使うかの問題です。それは『軍人勅諭』にある通りで、誰があんな馬鹿な戦争をやらせたか。新聞も責任がありますよ、と言っんだ。国民大衆は、新聞が書けばその通り、それがいいと思っ、という話をするんですよ。その声明は持って来ますよ。日本の全新聞が出したんですよ。「日本の言論機関の名において」と書いてある。ご参考になると思っしますので、今度持って来ます。余計なことを申し上げて、私も楽しんでいます。

伊藤 私どもも楽しく拝聴させていただいております。

海原 そう言っただくと嬉しいですよ。私がお願いした「権利の濫用」について、電話でいいですから、そういう考え方があるかないかだけでいいんです。私には、知人がいないものですからね。昔は橋本公亘さんという、内務省の後輩で中央大学の有名な法学部の先生が

いましたが、死にましたので、外にはないんです。どうしてもおかしい。「一坪地主」と言って、一坪持つて何ができるんですか。これは地主と言っただけではないでしょう。

伊藤 まあ、土地を持っていれば地主だと言え……。

海原 それは小学生の話ですよ。大人の社会人としての価値観で言えば、「一坪地主」は成り立たないですね。戦時下で庭で野菜を栽培しているのと違うんですよ（笑い）。

佐道 それはその通りですね。

海原 そうでしょう。それを私は山形新聞に書きたいと思って。すみませんが、そういうことは法律の基本的な観念として、いま言わないのか、ということですね。

伊藤 そういうことは、ないことはないと思いますけれどね。

海原 ないことはないと思いますね。この間も話が出たけれど、私たちはいい時期に学校に行っていたと思うんですよ。東大の先生はみんな立派でしたね。宮沢（俊義）さんでしょう、牧野（英一）さんでしょう、末弘徹太郎さんでしょう。

この話はしましたか。大学の先生にこう言うのは申し訳ないんですけど、最初の講義が一番いいですね。後は全部、前の年と同じですよ。私がいまだにさすがだと思っっているのは、穂積さんが言われた言葉ですね。法律を勉強する場合、比喻を使っただけじゃないんですよ。「天網恢々疎にして漏らさず」、それは天の網だからいいと言っただけです。天の網だから疎でも漏らさないんだ。人間社会の網、法網は疎であつたら駄目だと言っただけです。ところが人間はそういう比喻に弱い。「天網恢々疎にして漏らさず」というと、人間の作る網も疎でいいと思っちゃう。とんでもない。

そういうことを言われました。

それから牧野先生は、法律を勉強すると、法律書生は概念の定義に夢中になる。概念なんか定義できない、と言っただけです。それは言葉が不正確だ。その不正確な、いろいろな意味を持つていている言葉で一つの概念を規定する。そんなことは不可能である。では概念とは何か。それで言われたことが、あんなほどと思っただけです。机の引き出しみたいなものだという。物を整理して入れておくにはいいと言っただけです。それだけのものだというんです。だから法律を勉強すると法律書生は概念の定義に夢中になる。そんなことは不可能である。はあ、と思っただけです。そんなことで、私たちが勉強した時の大学の先生はみんないいことを言いましたな。

一番傑作は末弘さんですよ、労働法。講義の最初の時間。みなさんがた先生だから、敢えて言うんですが、俺の労働法は随意科目だと。必須と選択と随意とあるんですね。随意科目は、甲乙丙、優良可に関係ないんですよ。だから講義は聴きに來い、試験は受けるな。なぜか。お前たちの下手な字で、訳のわからん答案を読むのが苦痛だと言っただけです。しかし講義は聴きに來てくれ、と言っただけです。はあ、と思っただけです。妙な話になりましたが、楽しい時間でした。

伊藤 どうもありがとうございました。

〈以上〉

海原 治 オーラルヒストリー

第9回

開催日：1999年6月15日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第9回 質問項目

前回は、防衛庁防衛一課長時代のお話を伺いました。今回はその続きを伺うなかで、関連した事項についてご質問させていただきたいと思います。

- ① 前回、砂田長官の郷土防衛隊構想については少し伺いました。そのほか、元陸海軍権威者による防衛庁長官の顧問会議というのはいかがでしょうか。
- ② 上の質問とも関連しますが、昭和 30 年代、防衛庁の国防省昇格がずっと議論されています。国防省昇格をめぐる、機構改革が論じられたりしていますが、この問題についてはいかがでしょうか。
- ③ 昭和 30 年には、国防会議設置をめぐる国会が紛糾します。結局、国防会議法は不成立となり、2 年後ようやく国防会議ができるわけですが、この間の経緯等についてお願いします。
- ④ 前回のお話では、砂田長官は印象に残っておられました。あとの方はあまり印象がない様子でした。杉原長官は外務省出身で、鳩山内閣の外交を支えた重要な人物であり、実際、国防会議成立のために奔走したわけですが、杉原氏の防衛庁でのリーダーシップなどはいかがだったのでしょうか。また、船田中氏は、後に防衛装備国産化懇談会の会長を務められたり、防衛問題との関係を深めていくと思いますが、船田氏についてはどのような印象をお持ちでしょうか。
- ⑤ これまでのお話の中でも、制度調査会の件や旧軍人の動きなど、軍備のあり方をめぐっていろいろな案が出ていたことを伺いました。長期計画策定にあたって、軍備計画の方針については、いつごろ、どのような形でまとまったのでしょうか。軍備のあり方については、防衛庁内部でも様々な意見があったと思いますが、いかがでしょうか。
- ⑥ 防衛六カ年計画が策定されます。この具体的な経緯等についてお願いします。
- ⑦ この時期、砂川事件をはじめ全国で反基地運動が高揚します。防衛庁としても対応に苦慮されたと思いますが、どのようなことをご記憶ですか。
- ⑧ 昭和 32 年 2 月、岸内閣ができて安保改定に向けて動き出します。岸訪米にも同行されたのではないかと思います。当時の状況についてお願いします。
- ⑨ 昭和 33 年、米国大使館に参事官として赴任されます。この経緯をお願いします。

「日の丸」と「君が代」

伊藤 「海原氏から『this is 読売』（一九九七年十一月号）の「こんな防衛白書でいいのか」のコピーを示されて」……こういうものを書かれると、防衛庁はどんな顔をしていますか。

海原 何も影響ないですね。私たちの時は、一応先輩には敬意を表して連絡をしたものです。今は絶対に誰も来ないですね。私のかつての部下で、今でも元気な伊藤圭一君が、『朝雲新聞』に「もはや、海原さんは過去の人である」と書いていた。お前さんから、そういうふうに使われるとは思わなかった、と言うんですけれどね。まさに、考えてみると過去の人なんです。私が何を書こうと、何も反響がないですね。不思議なものです。やはり歴史のない役所の運命と云いますか、性と言いますかね。それにもかかわらず、同じことを言い続けています。

伊藤 その方がいいですよ。

海原 いや、哀れなものですよ。

伊藤 いつかボデイ・ブロウのように利きますから。

海原 いやいや、利きませんね。私は全然期待していません。例えば私が「この人は」と思って、いろいろ考えていた人が数人いるんですが、それが次官になったりした。一人は死にましたけれどもね、何も関係ないです。

伊藤 やはり先輩とか前任者というのは、嫌なんですよ。

海原 前任者といってもだいたいお上ですよ。私はずいぶん鍛えたんですけどもね。私にはわからないんです。先輩の言うことの、いいところを取ればいいんです。悪いところはノーと言えればいい。それをやらないですね。でも、嫌なものです。伊藤先生にそう言われたら、ああそうですかと言わざるを得ないですね。

伊藤 この前お話しくださった時代は防衛庁の防衛第一課長時代なんです。それから、昭和三十三年に米国大使館に行かれるまでの間、ずっと第一課長でいられたんですか。

海原 そうです。

伊藤 結構、第一課長の時代は長いわけですね。

海原 そうですね。それで、この前いろいろ申し上げましたが、言い忘れているところがありますので、先に補充をさせていただきます。私が課長でヨーロッパに行きましたね。これが最初なんです。その後何回も行っているんですが、それは局長時代の話です。

伊藤 その後、何回もいらっしゃったんですね。

海原 ええ、そうなんです。何回も行っています。それで、昔のものがあつたら持つて来いとおっしゃいましたので、持つて参りました。講演集みたいなものですが、これが『わが国の防衛について』です。その最初のところで、ヨーロッパ、ドイツに行った時のことをしゃべっているんです。それは官房長になってからのものです。新聞協会です。四十一年にしゃべっていますが、そういうものがあります。それは置いて行きます。それから、他にもいろいろ置いて行った方がいいですね。

伊藤 コピーさせていただきますので。

海原 いろいろあるんですが、いかに広報に努力したか、ということ

ですね。これは具体的な例ですけれども、少なくとも伊藤先生にはご認識いただかなければ……。

伊藤 先生はお書きになるのがお好きなんですか。

海原 どちらかというところ、嫌いじゃありませんね。これまた自分のことで恐縮なんです、それが意味で私の仕事だと思ってるんです。父親譲りですけれどもね。ですから、原稿用紙に向かうことは決して苦痛ではないんです。

伊藤 今でも原稿用紙にお書きになってるんですか。

海原 はい、書いています。

伊藤 いや、ワープロかなと思つて。

海原 あれは入った時から関係しないんです。女房はやっていきますけれどもね。

伊藤 やはり原稿用紙に向かった方がいいですか。

海原 マスを埋めていくのがいいんです。考えるんです。それで、直せるでしょう。ワープロのように間違つたら消すのなんていうのはどうもね。

伊藤 でも、あれは直しやすいですよ。

海原 それはそうでしょうけれども。プラスの面もわかりますけれどもね。女房にもさんざん言われましたけれども。

話が途中になりましたが、『わが国の防衛について』です。これは「月曜会」となっていますけれども、新聞記者諸君の集まりです。今の読売の社長の渡邊恒雄、ナベツネさんですね。彼がまだ一新聞記者の頃のもので、そこへ行ってしゃべったものの写しです。そういうものもございいますから、何らかのご参考になるのではないかと思います。

伊藤 こういうものは、後で本に入れられているんですか。

海原 ただ、要点だけ入れています。

伊藤 そうですか。この形のままでは出していないのですか。

海原 出していません。それは私のものじゃありませんから。「月曜会」のものですから。

伊藤 まあ、そうでしょうけれども、しかし、お話しになったのは先生ですからね。著作権はあるわけです。

海原 まあ、そうですが。しかし、これは新聞記者諸君の勉強会で、ナベツネ君が一番真中に座つて、いろいろ質問するわけです。そういう古いものです。いま彼は威張つていますけれどもね。それから、これが公務員を辞めて初めて毎日新聞に載りました対談です。それが私のいわゆる「現実的防衛論」の基になるんですがね。それも置いておきます。そういうものが要るんでしたら、いろいろあるんですけれども。

伊藤 こういうものを、全部コピーさせてください。

海原 そうですか。大変ですがね。最近のものでは、加藤寛さんがやっているものを書いたんです。『ロシアとどう付き合うか』、これもあります。

伊藤 これは比較的新しいものですか。

海原 ええ。これはつい四、五年前ですよ。それはもう本になっていますが、その一部分です。これが表で一般の人にしゃべったベトナムの問題です。その黄色のものは、私が自分でもよくできたと思ってるんです。

伊藤 『極東の軍事情勢とわが国の防衛問題』ですね。これは事務局長時代の話ですね。

海原 そうです。いろいろずっと長いものですから、私は役人を辞め

た後で、こういうことをやったということ、まとめてお話ししよう
と思っていたんですが、「しゃべったものがあるなら持つて来てくれ」
とおっしゃるものだから、持つて来たわけです。

伊藤 ありがとうございます。これは全部コピーさせていただきます。

海原 はい、構いません。余部があれば差し上げるんですけども、
ないものですから。

伊藤 大体こういうものは、ふつう余部はないですよ。

海原 今でも私は内容については変更する必要はないと思っ
ています。このついで、というのはいけないんですが、せっかく話し始めた
ので話します。

いま「日の丸」と「君が代」の問題がありますね。これは最近のも
ので、今年の六月に山形新聞に書いたものです。「平成十一年六月一日
付の山形新聞の「なぜ『日の丸』法制化」のコピーを示す」。何で「日
の丸」の法制化をそんなに問題にするか、ということですね。これに
は慣習法というものを皆さんご存知ないのをおかしい、ということを書
いたんです。価値観が変わるといことが最後にありますけれども
ね。つい二、三日前の新聞を見たら、「君が代」の「君」は天皇だ、
という解釈になったようですけれどもね。いろいろな解釈があるでし
ょう。もちろん天皇を意味する場合がありますし、「君」ということ
で国民一般ということにもなりますね。

それとの関係で、「さざれ石の巖となりて苔のむすまで」について
ご存知ですか、そういう事実があるのは。

河野 つまり、小さい石が岩になるとい事実があるんですか。

海原 はい。しかもそれも、残念ながら年次を書いていないんですけ
れども、わが朝日新聞が書いているんです。「年不明三月二十日付の朝

日新聞の記事「白地に赤く」のコピーを示す」。これは石灰岩の石なん
ですね。わが朝日新聞がこういうのを書いた。

伊藤 文部省の庭と書いてありますよ。

海原 昔の、です。今はどうなりましたか、その後の消息を知りませ
んが。嘘ではないんです。これは名古屋のそばの川の名前。これに書
いてあるかも知れませんが、逐次ずっと下流に流れていく、そ
の過程でだんだん小さな石が大きくなっていく、最後はこの写真の
ようなものになっていく。だから「さざれ石の巖となりて」ですね。
苔はむすかどうか知りませんよ。「巖となりて」までは事実なんです
ね。そういう事実があつて、あの和歌ができています。そこから「君が
代」が作られたんです。ということを知っている人はまず少ないです
ね。だから、あんな架空のことをどうだこうだ、と平気で言う人がお
りますけれども、そうじゃないんですね。そういう事実に基づいた、
わが国歌であるということです。

私が山形新聞に書きましたことで、もう一つ。いろいろ新聞等で「君
が代」の文句について、こうしろ、ああしろなんていうことを言う人
がいるんです。そこで、そういう人のために、日本人が一番一般的に
知っていると思われるフランスの国歌「マルセイエーズ」、あの歌詞
は知っていますかと書いたんです。まず私の友人でも知らない人が多
いですね。そういうことがあるんです。その昔ですが、朝日と読売が
「マルセイエーズ」の歌詞の一部分を紹介した文章があるんです。「わ
れわれの行く手に残忍な敵の兵隊の血がいっぱい地面に満ちる」とな
っている。われわれの「前」か「後」かで、訳が違っているんです。
朝日と読売で。私は気が付いた。私はフランス語はわかりません。英
語の訳を見ますと、前も後もないんです。「Fetidsに残忍な敵兵の血

が満ちる」と書いてある。戦場でしようね。野原と言いますか、そこに満ちると書いてある。それを日本では、朝日が「前に」、読売は「後に」と書いてある。そんなことに興味があるのなら、これを持って来ます。ことほど左様に新聞の記事もいい加減だということですね。

これは私も調べてみたんです。そんなことで、こんな岩があるということはおそらくご存知ないでしょう。これは具体的な例ですよ。もう一度言いますが、朝日新聞がそれを書いているんですよ。ということを、今いろいろ言ってる朝日新聞の記者は知っているかどうか、ということになります。そこが問題ですけれどもね。これは何年かちょっと忘れておりますが、書いておかなかった。この下を見ますと、「今から一〇八五年前に編集された『古今和歌集』と出ているので、ここから逆算すると大体年次がわかりますね「速記者注：『古今和歌集』は九〇五年に編纂」。

そんなことで、まあご参考までにといいことです。くどくなりますが、こういう大事なことを学校で教えないんですね。だからほとんどの方がご存知ない。そういうことを嘆くばかりなんです。

それからこの前言われました、新聞の共同宣言。これは伊藤先生がご存知ないので、ちょっと私はびっくりしたんですけれども、こういう文章です「昭和七年十二月十九日付の新聞社の共同宣言のコピーを示す」。ちょっと読んでみてください。

私が言いたいのは何かということ、昔のことになると、軍人が悪い、軍部が悪いということしか言わないですね。その時、一体新聞人は何していましたか、新聞はどういう態度をとったんですかということですね。こういうのが全国、「外百廿社」ですからね。ここに十二あるでしょう。百三十二社が同時に昭和七年に出したんです。しかも「日

本言論機関の名に於て茲に明確に声明するものである」というので、これを批判する人はいないでしょうね。ところがその肝心要は、私に言わせると、新聞人の責任だ、新聞の責任だということです。少なくとも責任の半分ぐらいあるんじゃないか。私は全部と言いたいんですけれどもね。それを言うともまた語弊があるので、怒られますから。これを今の若い新聞記者が知っているかという、まず知りませんね。新聞がこういうふう、「日本言論機関の名に於て茲に明確に声明する」と書いた。この文句がすごいですよ。「苟くも満州国の嚴然たる存立を危うする如き解決案は、たとひ如何なる事情、如何なる背景に於て提起さるゝを問はず、断じて受諾すべきものに非ざることを」となっています。これを日本の新聞が全部書いたんですからね。これでは国際連盟からの脱退は当然でしょうね。後はずっと一直線に対英米開戦ということになるわけです。

伊藤 なかなか勇ましくて、説得力がありますね。

海原 私は日本人の特質だと思っんです。大昔からの歴史を見ても、そのとき勇ましいことを言っている奴がもてるんですね。勇ましいということの中に、格好がいいことがありますね。近くは細川総理ですよ。私は個人的に知っているものですがからね。彼が朝日新聞の記者から「参議院議員に」なりたての頃、「初めて参議院で質問するから、海原さん、すまんけれども、防衛問題の問題点を教えてくれ」ということがありました。この話はしましたか。

伊藤 いいえ。

海原 それで、どこかでご馳走してくれると思ったら、赤坂のちゃちな「鳥屋」の二階ですよ。なぜちゃちかというのは、最後に彼がそう言っていたからです。「海原さん、私はまだ議員になりたてで、ペえ

べえなんだ。今日はこんなところでお話をお聞きして、誠に失礼だと思ふ。ついでは今度改めてまともなところで」と言いながら、その後全然ないんです(笑い)。その時私が教えた防衛の問題点の中から、彼は摘んで参議院で質問したんです。朝日新聞記者から国会議員になった最初の国会の質問の材料は、私が「ここが問題ですよ」と教えたことです。「これについてどう解釈するかはあなたの判断だが、問題点はここにあるんだ」ということですね。「いやあ、今日はいいいことを教えていただきました」と言つた後で、「今日はこんなちやちな『鳥屋』の二階で失礼だけれども、そのうちに私も何とかなりたいと思ひますから、その時に改めて」と言つて、全然改めて来ない(笑い)。

敢えてこういうことを言っていますのは、いかにいろいろな人が、客観的に社会的に偉いと思われる人がいい加減なことを言っているかという証拠ですよ。その代表が中曽根康弘氏ですけどもね。中曽根君をはじめとして、私がいろいろお世話になつた小池百合子さんなんかは、まさにその細川に惚れていたんですね。女性というのはちよつとそういう弱点がありますね。いや、あなた「河野氏」が謝ることはないんです。

私は小池百合子さんが科学技術庁の政務次官になつた時に、次官室へ訪ねて行つたんですよ。どんな立派な部屋に座っているか。立派な部屋ですね。そこで三十分ばかりしゃべつたんですね。「小池さん、あなたも国会議員になつた以上はこの社会で、それなりのことを努力してください」と言つた。私はもともと小池百合子さんには「お前さんはずっとテレビでやれ」と言つたんです。日本人で、英語とアラビア語と日本語の三つを正しく喋れる人は他にいない。たまたま参議院議員になつた。それが彼女が衆議院に替わるという話を聞いたもので

すから、私は「衆議院なんか行くな。参議院は六年間ちゃんと保証されてるんだから、その間にあなたは外務委員会に籍を置いて、日本の小池議員というのはこういうものだということを確立しなさい。それが私の見る政治の世界での、あなたの唯一の資産だ」と言つたんです。そうしたら「はい、そうします」と、その時は言つた。

「それからいろいろと政治の世界というものは、あなたが見たり聞いたりしているのとは違う、別の意味の難しさがあるから」と言つて、僕は後藤田君を推薦したんです。私と彼女の番組に後藤田君も来ましたからね。後藤田君もよく知っている。「彼に聞きなさい。私が頼んでおくから。政治の世界というのは、あなたの頭で想像するようなものじゃないんだから、アドバイザーとしては彼が適任だと思ふ」と言つたら、「はい、そうします」と言つて、全然しない。

私は、「あなたは参議院でやりなさい。六年間の間に日本に小池百合子ありということを確立できる。こないいいことはないんだ」と言つたんですが、私にはもちろん無断で、まあ断る理由もないでしょうけれども、衆議院に鞍替えしちゃつた。

それで、これから先は私の想像なんです、彼女のお父さんが昔、立候補して失敗したんですよ。お父さんは石油関係の、ガソリンスタンド関係のことをやる人で、ちよつと政治的な関心があつたんですね。それで兵庫で立候補して、落選しちゃつたんですよ。これは聞いた話ですが、借金が払えないということであラビアへ行つたというんです。それが、彼女が向こうの大学に入つて勉強するきっかけになつた。そういう親父さんの恨みといひますか、兵庫県選出の『下院議員』になりたいと思つたのが、なれなかつた。それを、自分の代で晴らしたいと思つたんでしょね。それもわからないわけではない

すけれどもね。

私は「下院議員」になると、もみくちゃになる」と言っただけです。「あの世界は僕の知っている限りは大変な世界だ。だからあなたは、参議院でしっかりとした小池百合子の世界を築きなさい」と言った。そうしたら、「はい、そうします」と言っていた。

その前に、ちよとテレビでやっている時ですが、お母さんが自分の跡を継がそうと思つた。それは何かというと、カイロの日本料理屋の跡継ぎです。親父さんは先ほども言いましたが、選挙で失敗したものですから、債務のこともあつて日本を逃げ出して向こうにいたわけです。それで、カイロで日本料理屋を開いた。その時は小池百合子さんはカイロの料理屋に、こちらで材料をいっぱい仕込んで送つていたわけです。そうしたらお母さんが百合子を自分の跡継ぎにしたいというので、私に相談があつたんです。それで「君はどうなんだ」と聞いたら、「私は料理屋の跡はやりたくない。やはりこちらで働きたい」と言うから、「それなら僕がお母さんに会つて話してあげる」ということで、私がホテル・オークラでお母さんと二人で食事をした。「お母さん、あなたは百合子さんに跡をやらせたいというお気持ちのようだけれども、彼女はせっかくの貴重な材料なんだ。言うなれば、ダイヤモンドの原石みたいなものだ。カイロの日本料理屋のマダムじゃちよつとかわいそうです」と言ったら、「ああそうですか」と言うんですね。その時は私のアドバイスを聞き入れてくれて、料理屋の跡継ぎはやめたんですね。

こんなこと話すとまた時間の無駄になりますが、そんなことがあるものですから、私は特別彼女にはいろいろ一方的に好意を持ってアドバイスをしていた。しかし、兵庫から衆議院に立候補することは一言

も連絡がなかつたです。ああ、そうかと思つた。私に連絡すれば、おそらく私がやめると言うと思つたんでしようね。前からの、そういう事情がありますから。だから、彼女はそういう意味では賢いわけです。それで、当選した時にテレビ見ていたら、変な帽子みたいなものをかぶつてやっていますよ。それで手を振っていた。何でこんなことをやるのかと思つた。

その前に、ご存知のテレビ東京で経済関係の番組をやっていましたね。外国と英語でやり取りしていた。その前にアメリカのある偉い人に惚れられて、その人との話がどうかこうかという話だった。まあ、いろいろなことがあるんですよ。なぜ、こんなことを言い出すかという、老人の癖で、どうしてもつい、一つのポイントだけ言うのではなくて、背景まで言っちゃうわけです。そうしないとポイントがご理解いただけないと思うという「老翁心」ですね。これで終わりますが、伊藤 やはりそれは兵庫ということなんですか。

海原 そうなんです、兵庫です。地元ですね。さあこれからどうするんだと思いますがね。細川さんに惚れましてね。小池さんは今度は小沢一郎氏に乗り換えたでしょう。ああ、気の毒だな、と思うんですよ。これを言うと女性がおられますから、ちよつと差し障りがあるのでやめますが。

河野 じゃあ私は、席をはずしていますから。

佐道 あと中身は速記で読むとか。

海原 速記で読むのと聞くのとは違いますよ。どういうわけか、女性というのは最後は情にほだされるんですね。まあ、それでいいんでしようけれどもね。そういう場合には、マイナスになりますね。小池さんもあれで終わりだ。よりによって小沢一郎氏がいいと堂々と書いて

いるんですものね。あの人でなければ日本は良くならない、というようになこと言っている。どうしてそんなことを……。それまでは、細川さんでなければ日本は良くならないと言ったでしょう。

伊藤 ずいぶん、違いますね、細川さんと小沢さんでは（笑い）。

海原 細川という人は、最初に申しましたが、その後ずっと見ていると、その都度変わりますね。なぜ変わったか言わない。もうあれで終わりですね。もう自ら政界には出ないということを宣言したでしょう。また、何であんなことを言ったのか私もわからないんですけれどもね。さて、本題に行きますか。今までは雑談でした。

階級の称呼に関して

伊藤 では、この前のことで補充なさるところがおありでしたら、最初にお願いします。

海原 あります。それを一つ申します。自分で速記録を読んでいましたら、あつちに行ったりこつちに行ったりしているものだから、今日はちよつと箇条書きみたいな形で整理して来たんです。箇条書きするのにも、またこれを足したりあれを足したりすることになります。

この前申し上げましたのは、ちょうど防衛庁法の時ですね。私が統合幕僚会議と自衛艦隊をつくることに反対した。しかし改進黨の方から、これを入れなければ絶対改進黨は防衛庁法を認めないということ、私自身はこれには勝てないということで、泣く泣く反対をやめた。

その時にいろいろな問題がありましたので、整理してみます。

もう一つ、直前直後の問題として、こういうことがあったんです。いよいよ保安庁が防衛庁になるということで、これは今でもたまたま誰かが書いておられますが、要するに陸・海・空自衛隊隊員の階級の問題です。どういう問題があったかご存知ですか。

伊藤 合わないでしょう、階級の作り方が。

海原 その合う、合わないは別としまして、まず旧軍の人は、「防衛庁になる。今まで保安庁は国内警備だった。それがいよいよ外敵のため存在になった。この際……」ということ、いろいろ問題が出て来ました。ある日、私の部屋に五、六人がどやどやと入って来た。事前の連絡も、了解もなしで、来たんです。私は誰が来ても、すぐ会います。

そうしたら私に向かって、「いろいろと聞いてみると、君が今度の陸・海・空自衛隊の隊員の階級の称呼について反対意見を言っているようだ。どうして大将、大佐、大尉という昔の呼び方を使わないんだ」と言うんですよ。

私は笑ったですね。「私は別に一人でそんなこと決めるものじゃありません。大体、私自身の保安課長の職責として、そういうことまでどうこう言うことはない。これは私の主義です。それは『制服』の問題だ。だから『制服』の方が決めなさい。言うならば、保安隊、警備隊の人々が今度自衛隊になる、ついでには階級をどうするかということ、その人たちの問題だ。私どもは『背広』だから階級は何もないんだ。しかし、私は注意はしていますよ。仮に昔の称号を使う。大将、中将、少将というものを使おうとしたら、どう言うんですか。陸上自衛隊大将ですか。ずいぶん長いですね。これがそのまま使えるでしょ

うか。私が陸・海・空の人に言っているのは、必ず、新聞が略語を作るといふことです。どういう略語を作るんですか。陸大将ですか。海大将ですか。空大将ですか」と言っただけです。

「うくん」と言うんですね。それで「それはわれわれが作るんじゃないんです。一般の人が陸上自衛隊大将、航空自衛隊大将とは言わずに、必ず略語で呼ぶ。略語はどうしますか。何かいい略語を考えなさい」と言うと、みんな黙ってしまふ。「私はそれを言っているんだ。昔の階級の呼び方を復活しようという気持はわかる。もし『軍』という言葉を使えば陸軍大将、海軍大将、きわめて簡単なんだ。しかし、その『軍』は使わない。あなた方も『軍』という言葉は使わないでしよう」と言うと、「『軍』は使わない」と言う。「その場合は、陸上自衛隊大将。略してこれは何と言うんですか。『陸大将』となることはまず間違いない、と私は想像します。それでいいのならどうぞお使いください、と言っているだけです」と言ったら、六人ばかりの連中は、黙っちゃった。

もう一度申しますが、「私は別にそういう昔の階級、大将、中将、少将、大佐、大尉、そういうものを使うなと言っているのではない。それを付けたために、どういうふうにならぬ人がそれを呼ぶだろうか。その時のプラスとマイナスを考えておく必要がある。それが私たちの幕僚と言いますか、スタッフとして物を考える時の基本的態度だと私は思います。特に私の場合は昔、高等学校で弁証法なんかを習ったものだから、右ということを考える場合には左を考えておく。その結果、ということになる。ところが皆さん方は、何か知らないけれども何かをやりたいと思うと、もうそこへ夢中になっていく。私に言わせると猪突猛進する。足をすくわれますよ」と言っただけです。

そうしたら、「ああ、そういうことですか」と言って、引き下がっちゃった。それっ切りです。こういうことが多いですね。その後、階級の称呼がどうだこうだとは出ませんが、つい去年、誰かが書いていましたね、有名な方ですけれども。「自衛官に一つの使命感を持たせるための手段の一つとして、いわゆる階級称呼、今の一佐とか二佐とか一尉とか二尉ではわからない。これを改める必要がある」と書いていました。よほど私はその人のところへ、私の言っていることを書いて送ろうと思った。やめましたけれどもね。余計なことだから。現にそういう人がいるんです。これが申したかったことです。だから防衛庁になる時に、陸・海・空自衛官の階級の呼び方を昔風に復活しようという要請が、いきなり私のところへ来た。これにはびっくりした。「聞くところによると、君が一人で反対している」と言われていた。そういうふうを受け取られましたね。

佐田 呼称の原案はどこで作られたんですか。

海原 それは保安庁の時ですから、私には関係ないですよ。後藤田君や内海君の頃に作ったものです。

伊藤 その時に作ったものを、そのまま踏襲したわけですね。

海原 そうです。一等保安正、警備正とかありましたね。その後も、そのままにした。最初は警察官でしょう。だから警察的な称呼。その変化をずっと調べてもいいですけども、それがあつた。それにしたがって用意しているわけです。それに対して、一部の軍の復活を希望する方では、「この際やれ」ということになった。こんなことも、運動になると結構広がっていく力が大きいんですね。

結論は先ほど言いましたように、「悪いのはお前だ、お前が一人で反対しているそうじゃないか」ということになってしまう。私はそれ

で笑ったですよ。「私は別にそんな、一人で反対してどうこうするとうことは無い。私の呼び方ではない。皆さん方の呼び方なんだから、どういう名前にするかは皆さんでお考えください、というのが私の態度です。それは変わっていません。ところが一部に大将、中将、少将という呼称に変えたいという意見があるが、それについてはこういうことを考えなさいよと言っているんです。どうぞ皆さん好きなようにやってください」と言った。みんな一言も反論できませんでしたね。どうしてそういうふうに分の考えていることが正しいと思ひ込むか、それが私はおかしいと思うんですけれどもね。

伊藤 いや、正しいと思うと言つて来たのだから、もう少し頑張つたらよさそうなものですが。

海原 そんなですよ。しかも一人じゃないんですよ。五、六人で来て、衆を頼んで、悪いのは海原だと言いに来たわけでしょう。伊藤先生のおっしゃる通りです。来る以上は、何かきちんとした根拠がなければならぬでしょう。

伊藤 言われたら、すぐ切り返せばいいわけですからね。

海原 考えていないから、予期もしないことを言われたら全然駄目なんです。誰がその略称まで考えるかということになつちやうんです。だから、「軍」が使えれば一番いいですよ。陸軍、海軍を使いませうかと言つたら、「うん」とか言つてる(笑)。そういう前提ならそういう前提ですね。旧陸海軍の皆さん方から「軍」ということに直してもらつて、階級も大将、中将、少将ということなら、それで案になります。誰か代表者になつてください。「いやいや、まあ、それはちよつと、『軍』はいま使えないな」と言う。そうでしょう。じゃあ陸上自衛隊大将になる、航空自衛隊少将になる、空少将になつちや

う。

伊藤 実際に今はどう呼んでいるわけですか。

海原 今は別に何も言いません。省略しようがないから。それこそ先生が史学会におられるんだから調べさせたらいいんです。どう呼んでいるか、略称を。今はみんな制服を着ていますから、一佐とか二佐だけですよ。

伊藤 それだけですか。陸・海・空は言わないんですか。

海原 言わないですね。言う時にはちゃんと、陸上自衛隊一佐と言う。問題は略称ですよ。新聞はいちいち「陸上自衛隊」なんか付けません。そういうことが、物事をああでもない、こうでもないということの一つの具体的な例です。それが防衛庁に変わる時の話であり、階級名の問題です。

それからこの前、統幕は機能しないということをお申しましたね。それで統幕会議などつくるな、と私が言ったことも申し上げました。ところが、とうとう改進黨からの要求でつくるようになった。その具体的な例を申し上げます。これは申し上げませんでしたから。

統幕僚会議ができましたから、私は増原さんに言ったんです。長期計画、防衛力整備計画、これは全部、内局の防衛局でやっていたでしょう。そこで私が長官、大臣に言ったことは、「今までは防衛局、具体的には防衛一課でそういう長期防衛力整備計画の案を作ってきた。しかしせっかく統幕僚会議事務局ができて、しかもそこには陸・海・空からの優秀な人が来ているはずだ。だから長期計画はこれからはそこでやらせましょう」と言つたんです。増原さんは賛成した。そして大臣に言った。そこで大臣から文書で正式の指示書が出るわけです。統幕僚会議議長、その時の議長はもちろん林さんです。林議長は陸・

海・空についての将来の整備計画を作って、もちろん案ですけれども、その案を提出せよというものを文書で出した。

そういうことを、私はやってみようと思ったわけです。当然でしょう、統合幕僚会議ができる以上は。今まで内局の、それこそ元内務省の軍事支配だとか、法学士が軍事を支配したとか言われているわけですから、そんなことは一切もう縁が切れるということにした。

もういっぺん言いますが、文書で出したんです。これは大事な、言わば歴史的な文書だから、大臣名で統幕議長宛に文書で出した。それはそうですよ、これは大事なことから。私らがいつまでもおるわけではないんだから。その時にはどうしてそうなったかということを確認する必要がある。だから文書で、大臣名で統幕議長にそういう指示を出していただきたいと言って、「わかった」ということで出したんです。そうしたら、どうしたか、これが問題です。

さつき、「統幕機能せず」と言ったでしょう。陸・海・空が集まっているだけなんです。そこで林さんもそれを心配しまして、統合幕僚会議の勤務者に統幕会議の特別の記事を作ったんです。それを付けた。そうすることによって、統合幕僚会議事務局に勤務する連中は、出身地である陸・海・空のことは一応措いておいて、三軍を統合する立場で物を考えようという発想ですね。だから統幕記事というものを作った。でも記事を作ったくらいでは、人間の性格は変わらないですよ。そこまでやるなら、チャーチルがイギリスでやったように統合幕僚会議事務局は制服を脱がせないといけない。チャーチルはそれをやったわけですからね。陸・海・空の優秀な人を集めて、制服を脱がせて背広にして、そこでウォー・プランを作った。それに倣えばいいんですよ。そうなる内局というのがあって、それとの関連もあるものだから、彼らもなかなか踏み切らないでしょうね。

さあ結論はどうなったか。四カ月ほどして統幕議長が「誠に申し訳ありませんが、できません、残念ながら。おおせにしたがつて（四カ月でしたか六カ月ですか、記憶がはつきりしませんけれども）、陸・海・空の統合された防衛力の整備計画案を作ろうとしましたが、できません。だから、やはり防衛局でやっていただきたい」と口頭で言ってきました。しかもその際、「ご参考までに、陸・海・空幕僚監部が出してきたそれぞれの案を添付いたします。それをどう調整するかは内部の部局でやって欲しい」。これが統幕議長の答申です。

私はその時に議長にも言ったんですけれども、長官名で出したのは、れっきとした文書なんです。それを受けた統幕議長が何カ月か経って、答えを持って来たのが口頭である。おかしい、そんなものは。それをちゃんと文書にさせなさいと言ったんです。そうしたら、「うん」と言う。この前の速記録に書いてありますように、増原さんにする。「林君」なんです。林統幕議長「林第一幕僚長」じゃないんです。「林君」なんです。だからそれはやめなさいと、私は何回も増原さんには言ったんだけど、できない。だから、命令をもらったのは「林統幕議長」だけれども、その答えを持って来たのは「林君」だったわけです。

だから、それを文章にしろとは言えないんです。そこには曰く言いがたいという日本人社会の独特な物の考え方があってしょうけれどもね。私は頑強に主張したんです。「仮にも大臣名ではないか。命令違反だ。将来の参考にもならない。これはまた防衛局でやると、必ず防衛局の私どもが文句を言われるんだ。そうでなくとも今日までの過程において旧内務官僚、現警察官僚の軍事力支配だと彼らは言っている。

そんな気持は毛頭ないのに、彼らはそういう人たちなんだから、その人たちに対しても一つの答えにもなる。だから、そういう大事なことを大臣が命令を出しているのに、命令違反じゃないか」と、私は言ったんです。「それは後になって、こうだと言っても誰も信用しない。まさかと思うだろう。まさかあの林さんが、そんなことはないだろう、ということになるから、そのためにも絶対に文書でもらわなければいけない。林さんがそう言っているのを、『やめろ』とは言えないが、それは口頭で受けてはいけません。文書を残してくれ」と言ったんです。そうしたら、みんなから寄ってたかって口説かれて、そうできなかった。これだけはやはり私も頑強に言って、文書にしておけば良かったと思うんです。そこでしようがないから、防衛局、具体的には防衛一課で、長期計画をずっとやることになるわけです。そういうことがあるんです。どこにも書いていないでしょう、そういうことは。

『防衛庁』という本「朋文社・昭和三十一年九月刊」も今日持って来ました。この新聞記者諸君、書いた人々を全部、私は知っていたんです。読売の堂場肇君でしょう。それから朝日の園田剛民君。この園田君は、奥さんが緒方さんの娘さんなんです。それから田村祐造君です。読売新聞は堂場肇君と田村祐造君、朝日新聞は園田剛民君。この三人は全部私の家へよく飲みに来たんです。

話が雑談になりますけれども、この本が出る前に、私のところへいろいろ聞きに来るわけです。出たら、この本をくれました。読むと、当時の防衛庁の人物評がある。それを見ますと、私は悪者。隣のページに私の同期の麻生君が載っている。これは完全な神様。善悪を対照して出しているんです。私はこの三人が本を出すというので、出版祝賀会をやったんですよ。何を書いてあるか知らない。何を書いたかと

いうことは、この三人とも知っていますから、いかに私がいいかですよ。馬鹿馬鹿しい。どんな本なのか読めば良かった。ゲラ刷りでも見れば、君たちが書いたのは間違いだと言うのに、お祝いまでやったんですよ。それで、送ってきたものを見たら、海原は悪人の代表になつていて。同期の麻生君は善人、神様みたいになつていて。

私はまあどうつていうことはないんですが、女房がカンカンになつて怒った。「何ですか、あの人たちは。毎晩のように替わりばんこに家に押しかけて来ておきながら」と。私がない時は女房が相手をして。だから、飲まない酒も飲むようになったでしょう。「あれだけいろいろあなたが材料を提供しているのに、あなた、糞味噌じゃない」と言う。そして何をしたか。小さなバラックの家ですけれども、表の戸のところに女房が墨で書いたものを貼った。「この三人は絶対お断り」。一カ月ぐらい貼つてありました。とにかくこの三人は何だ、というところで、わが「山の神」は怒り心頭に発して、面会拒絶の貼り紙を書いた。そういうことがあるわけです。

佐道 でも堂場さんとは関係を修復するわけですね。

海原 そこで問題なんです。みんな分担しているんですね。人物評のところは、読売の田村君の担当です。彼は社会部の人です。彼が一杯飲んで、いい気になって書いた。後で聞いたらそうなんです。他の連中も何を書いたか読まなかったんですね。これは読んでもいいですけどもね。

佐道 もしよろしければお貸しく下さい。

海原 いいですよ。じゃあ、これは置いて行きます。全くもう善悪対比。麻生君がそんなに偉いと思うのはいいけれど、俺はこんなにまで悪くはない。何のために夜な夜な接待したか。先ほど言いましたよう

に出版記念の前祝いまでやったんですからね。おでん屋ですけれども。

佐道 田村さんにだけ待遇が悪かったんじゃないですか(笑い)。

海原 それにしても連名で出しているんですからね。ふつう仁義があるでしょう。そういう時はグラ刷りというものを持って来るものでしょ。

伊藤 グラ刷り持って行ったら、断られちゃうから(笑い)。

海原 まあ、それはあるかも知れませんが。せめてもの救いは私の悪口を全部書いていますけれども、最後には「しかし、こういう男もいなければ、創設期の防衛庁はやってこれなかったかもしれない」と書いてある。私が怒ったのは、上官にあたる年上の人間を「海原は」あごで使うと書いてある。そんなことしたことないですよ。

伊藤 ないですか(一同爆笑)。

海原 ないですよ。伊藤先生までそう言うんですか(笑い)。

伊藤 いや、せっかくそう書いてくれたから(笑い)。

海原 全くもう、そういう話があるんです。人物評は必ず出るんですけど、麻生君は、私は好きな人ですよ。内局を背負う人々ということで、誰が誰だと出ている。ちよつと読んでみましょうか、ご参考まで。皆さん方いっぺんには読めませんから。

「海原と増原の関係は警察予備隊の発足以来始まっているが、海原が実際に防衛庁に乗り込んだのはずっと遅れて昭和二十一年の八月、警察予備隊が保安庁に変わった直後だった。海原はその時保安局の保安課長で入り、それから今の防衛庁防衛局第一課長になって約五年間、防衛庁の枢機に参画してきた。また、防衛一課は昔の参謀本部第一課と同じ。今の防衛六カ年計画は全て海原の手で編み上げられたものだし、年々の防衛庁業務計画、陸・海・空の年度の増勢計画も結局は海

原のもとで編み出されている」

私が、統幕でやってもらおうと思ったのができなかったということ、この連中は知らないんですね。それが問題です。その次に私の人物評です。書いてあるから読みますけれどもね。

「海原という男は一高、東大出身のバリバリの内務官僚で才幹に溢れている代わりに、人を人とも思わぬ傲岸な面魂を持っている」と書いてある。「面魂」ですからね。これはちよつと文句が付けようがないですね。これが「傲岸な態度を取っている」というのならやれますけれども、「面魂」だと見方でしょう。やっぱり新聞記者ですな。

「陸・海・空の課長班長はもとより、自分よりずっと年かさの部長クラスまで、時としてあごで使うような態度を見せる(まあそれは、そういうふうに映るのはしょうがないですけどね)。防衛庁の若手ホープと言えば、誰しもまず海原に指を屈するが、それだけに実力部隊からも反感も強い。(その次ですよ、先ほど言ったのは)。こういう男がいなければ、あるいは創設期の防衛庁はやってこれなかったのかも知れない」と書いてある。

伊藤 まあ、それほどの悪口でもないですね(笑い)。

海原 そこだけ読めばそうですけれども、その前ですよ。「傲岸な面魂」というから。

伊藤 いやあ、立派な褒め言葉だと思います。

佐道 なるほど、とか思ったり(笑い)。

海原 これだけ見れば別にいいです。その次に麻生君のことが書いてあります。

「麻生法規課長については、筆者は特に特筆大書したい。麻生はいわゆる官僚陣営のホープというような方ではないが、この人の存在が

どれほどか防衛庁内部の文官対旧軍人の険悪な空気を和らげていることか（これがわからないですけれどもね、険悪な空気というのが）。人は麻生を防衛庁の法制局長官と見、また防衛庁の聖と呼んでいる」と書いてある。この辺はわかりますよ。私はこの「防衛庁の聖」ということは聞いていなかったですね。

「麻生は終戦直前の広島原爆を身をもって体験した。彼の顔面は頭から唇まで見るも無惨なケロイド症に覆われており、手先の指数本も原爆でやられて、いまなお曲がって伸びない。麻生はその時のことをめったに人に語らないが、ごく親しい友人にかつてこう語ったことがある。『防衛庁という役所は本当から言えば私の性に合わない仕事であるが、私のこの顔が対米折衝に少しでも役立つ、アメリカ人の心底を揺すぶる機会でもあればと思つて入つてきたのですよ』。麻生はいつでも防衛庁の法規課の一隅でこつこつと法律書を読んでいる。時には『バイブル（聖書）』や親鸞の『歎異抄』を繙いていることもある（「本文で括弧書き」善人すら往生す、況わんや悪人においておや、という絶対帰依の心境は原爆に身を焦がれたこの人の今の心境に何か通ずるものがあるであろう）。防衛庁のある旧軍人が言った。麻生さんのような人が防衛庁にいますと、何か救われたような気持ちになる」

これが麻生君の評ですね。それはいいですよ。これは全部認めます。その前にある私のとは、あまりにも対照的なんです。これは『防衛庁』の二二〇ページと二二一ページです。こう書かれたら、私もやはりさすがに憤慨したですね。

これは三度繰り返し返しますが、出版祝いでやってやった。私ならゲラ刷り持つて来て、「おい、これはこう書いた。ちよつときついかも

知れないけれども勘弁しろ」と言えば、それで終わりですよ。一言も言わない。それで、この本は著者からの謹呈本みたいになっているんです。「謹呈 著者一同」になっている。私はああそうかと笑ったんですけれどもね。しかし、先ほどから言いましたように女房は絶対に許さない。何ですか、ということ、当分この連中は出入り禁止になった。まあそういうことがあるんです。これも置いておいていいです。

いろいろなことがあるんです。麻生君は高等学校で私より一年先輩ですけれどもね。本当に神様みたいな人です。広島でやられたことでもあります。そういうことで私心を超越した人で、「法制局長官」でした。それは間違いありません。それはそれでいいんですが、それと私を比較した。「人を人とも思わぬ傲岸な面魂」と書いてあるでしょう。俺はそんな面魂かなど。「面」だけだったら文句を付けられますけれども、「魂」が入っていますからね。こうなると文句付けられない。

伊藤 やつぱり褒めているような気がしますけれども。

海原 そう言う人もいますよ。「これは海原さん、あなた怒るかもしれないけれども」と。そう言われると、ああそうかなと思う。だから出入り禁止は約一カ月。それで、その貼り紙はなくなりました。なぜそんなことを話すかということ、ことほど左様にみな一所懸命だったということ。何とかして、せつかくできたものを、という気持ちですね。この前も話しましたが、日陰の存在ですよ。保安隊員にはお嫁に行かないなんて言つて、女子の青年団で決議したりするでしょう。「税金泥棒」と言われますね。そういう中でみんな一緒にあって、共通の同志として目的達成のために努力しようということですね。そ

れなりの背景がありましたね。それを追加します。

伊藤 にもかかわらず、やはり陸・海・空は一致団結できないんですね。

海原 それはもう無理ですね。人間というのはそういうものじゃないですか。私自身の体験を見ますと、まず旧制中学の頃はそれほど人間形成に関係ありませんけれども、高等学校、旧制高校の三年となりますと、その時の生活態度にもよりますが、あの頃に大人人間の基本ができるでしょう。だから、そうは変わりませんね。この間も確か申し上げたと思いますが、例えば今で言えば防衛大学校、保安大学校で陸・海・空の連中を一緒に勉強させる。それはいつも言いますように、同じ釜の飯を食べるということでしょう。それでいいと思うと、その時はそれでいいんですよ。それから防衛大学校を卒業して、今度はそれぞれ幹部候補生学校に行くでしょう。これも申し上げましたが、例えば「海」では幹部候補生学校は江田島ですよ。あそこへ行つてごらんになるとわかりますけれども、もう旧海軍の伝統がずらつとあるでしょう。帝国海軍の伝統はこうだった、いいところはこうだったと全部教えるわけですね。「陸」は久留米に行くでしょう。そういうことで防衛大学校で一応教育を受けましても、上で旧陸海軍の教育を受けますと、変わりますね。

それを具体的に私が立証できますのは、ある時、防大の一期生の連中が、一期生の仲間と直接海原さんと話をしたいと言う。いつでもいいよと言った。われわれは昼間は忙しいから夜でいいか、「はい、結構です」ということで、防衛庁のそばで防大一期生の連中、まあ代表格と会うことになった。その時に「海」は来ないんです。「陸」と「空」しか来ていない。私は防大一期生が私と話をしたいというから、当然、

陸・海・空の出身者だと思えますよね。行つてみたら、どうも「海」がないようだから「何だ、『海』は来ていないのか」と言つたら、「来ていません」と言う。「陸」と「空」だけ。それは「陸」と「空」は日本の防衛でしょう。「海」はアメリカとの共同作戦だから。前に申しましたが、A・B・C航路の防衛。その頃から、もうそうですからね。海原と飯を食うな、と上からちゃんと指示が出ていたんでしょ。それほど、昔の陸・海・空の対立は厳しいですね。

日米安保体制の問題点

伊藤 対立は今でもあるようですか。

海原 あると思います。ありますとは断言できませんが、あるようですね。それは敬礼の統一もお話ししましたね。陸式にするか海式にするか。そんなことでも採決できないんですよ。最後は林第一幕僚長が人数で決めると言った。陸式にやつてもらいたい。およそ林さんらしいくない言葉ですが、それが出てくるということは、結局組織を背景にした意見でしょうね。

話は変わりますが、政治の世界もそうですよ。尾崎弴堂氏は「わが国では政党というのは育たない。みな徒党である。親分子分の関係が今でも生きている」と、昭和初期の政治を批判しましたが、全くその通りじゃないでしょうか。ということ、**「日の丸」と「君が代」**に
関連しまして、山形新聞に書いておきました**「先ほどの山形新聞・平**

成十一年六月一日付の記事の「コピー」。「なぜ日の丸法制化」という見出しですね。その一番下をちよつとご覧ください。「近衛総理が大命を拝して」と言つてラジコ演説をした。そのことは皆さん方、おそらくご存知ないと思います。一番下だけ読みますと、「日本の政党は、あるいは自由主義をとり民主主義をとりあるいは社会主義をとり、これは国体に悖るものである」。反するものである、と言つてゐるわけです。とすれば、今の日本の、この平成十一年の各政党は、全部国体に悖るじゃないですか。もつとも、今は「国体」という言葉がないですからね。

伊藤 ないです。国民体育大会ですから（笑い）。

海原 これが私はい例だと思ふんですよ。それで今まで無事にやつてきたんでしようね。世界第二の経済大国になったのも、そういう極めて融通無碍な意識のせいじゃないかと思ふですね。昔、日本に仏教が入つた時には、外国では当然宗教戦争になつてゐると思ふんですよ。日本では神仏習合でしょう。昔は神仏混淆と言つていましたね。どちらでもよろしい。私の家にも、神棚と仏壇と両方あります。先生のところはどうか。

伊藤 みんな同じですね。

海原 それで宗教事典では、日本の人口は二億五千万になるんですよ。八百万の神なんて、外国では絶対に通じませんからね。しかしそれで日本は、皆がそれぞれに生活してゐるんですね。これは何ともならんでしよう。いかにそれに順応して生きていくか、ですね。この話は余談みたいですが、大事なことですね。

クリスチャンもそうです。なぜキリスト教で女性の司祭を認めないんですか。英国国教会は認めたくんです。つい数年前、三十二名、認め

ました。ローマのカソリックの大本山は絶対に認めない。おかしいじゃないですか。私は司祭というものがどんなに偉いか知りませんが、その理由が面白いんです。女性に伺つてみましょう。どうしてでしょう。

河野 存じません。

海原 これがまたおかしいんです。キリストの最後の晩餐の時に高弟がいるでしょう。全部男性です。女性は一人もいない。これがローマのカソリックの大本山で言う理由です。あの頃の女性と今の女性では、社会的地位も能力も全然違いますね。それがいまだにローマでは生きてゐる。ところがイギリス国教会の方は、ちゃんと三十二名の司祭を認めた。こういうことは直らないですね。いくら言つても駄目だと思ひます。話は余談になりましたが、これは非常に大事なことです。

そういうことで、私は統合幕僚会議ができた以上は、その事務局で防衛力整備計画を作りなさいと言つて、大臣名で指令を出した。それに対して「できません」と言う。なぜなら、陸・海・空が全部ばらばらだから、それを調整することは、統合という名前が付いてゐる統合幕僚会議事務局ができません、と言ふんですからね。しかし、これを知つてゐるのは私だけでしよう。あと、知つてゐる人は全部死にました。だから私は文書で出させる、と言つたんです。だから、海原はあんなことを言つてゐるけれど、どこにその証拠があると言われたら、もうそれで終わりです。それでやむなく私たちは防衛局で長期計画を作つたんです。これが申し上げたいことの一つです。

最初が階級の問題でした。それから統合幕僚会議が機能しないという話でした。その次に、米国が当時どう考へてあつたか、これは申し上げていません。最初に、アメリカに替つて、北海道に自衛隊の

部隊が行きました。それは日本で自衛隊ができた以上は、北の守りは日本人だというのが当然のことでしょう。そのきっかけになったのは、林統幕議長が米軍の演習を参観したんです。その時のことです。仮にソ連が攻めて来るとしたらどこに攻めて来るか。北海道です。米軍は撤退するという想定なんです。北海道では戦えない。米軍は東北地方に撤退、後退する。それで白河の関、昔関所がありました。あの辺が地形から言ってもいいから、北海道から撤退して、白河のあたりに防御陣地を造る。これが、仮にソ連が攻め込んで来た時にどうするかという米軍の作戦です。それを林さんが見学した。そういう報告を受けた。これを知っているのは、内局では局長クラスです。

林さんは非常に憤慨するんです。「けしからん、アメリカは北海道を放棄するのか」と言う。「それは、林さん、当り前ですよ。北海道のどこで戦えますか。陣地も何も無い。地形から言っても。ソ連が攻めて来たら、アメリカは北海道を放棄して、東北に逃げる。東北の南の白河で陣地を造る。当り前でしよう。かつて朝鮮戦争で、米軍は釜山まで追い落とされた。しかしマッカーサーは仁川に逆上陸して、それから勝った。それが当り前でしよう。だからソ連が攻めて来たら、一応米軍は敵対する能力も条件もないから、東北に引き揚げて、白河のあたりに陣を布く。これは当然だと思います」と言っただけです。そうしたら「うーん」と言うんですね。

しかし、それは日本人ならできない。アメリカ人だからできる。北海道の人々を見殺しにすることである。そういうことがあって、自衛隊ができた時に第一陣はどこに行くか、北海道だ、となるわけです。この経緯も『自衛隊十年史』には出ていません。これを知っているのはわずか数人だと思います。私は、林さんがけしからんと言って大い

に憤慨するから、「憤慨される気持ちもわかるけれど、当り前でしょう」と言っただけです。「アメリカにしてみれば、自分たちの命をかけて日本を守るだけの義理合いはない。かつてこちらは『鬼畜米英』と言っただけじゃないですか。アメリカは鬼だ、イギリスは畜生だと言って、真珠湾を奇襲したことは間違いないんだから、それは当り前ですよ」と言ったら、私の言うことを否定しないんですね、「うーん」と言う。そういうことで自衛隊ができた、第一陣がどこへ行くか。ハルが声明を出した。それは昭和二十九（一九五四）年七月九日です。自衛隊ができた以上は、日本の防衛は日本人の手でやる、当り前である。木村さんも立派な声明を出された。それで退いたんです。

その時のことを、この前お話ししましたか。あの時に私は次長に言われまして、国内でアメリカ軍の様子を探りに行っただけです。それまでは増原さんはアメリカの顧問団長と話していたんですね。ワトソンという將軍ですが、いい人なんです。「何でも言っただけ、俺がやってやるから」と言うので、週に一回顧問団長と増原さんとの定期会談があった。ある時私が増原さんに呼ばれて、「海原、お前ちょっと様子を探ってくれ」と言われた。「何ですか」と言ったら、「顧問団長には数カ月前から〔自衛隊は〕北海道に行きたいという話をしている。米軍がいま頑張っているから、退いてもらって、その後自衛隊が行く。これをワトソンに話したら、『ヴェリグッド、オーケイ、よし俺がやってやる』と言った。ところが全然答えない。ちょっと調べてみたら、顧問団ではなくて、昔の占領軍司令部、在日米軍司令部だ。そっちに行つて調べてくれ」と言う。「はい」と言っただけ、私は四部長のところに行つた。

「実は私は、肩書きは一課長であるが、大臣の代理で来た」と言っ

た。こつちもちよつと偉そうにしないといけないから。「ついでには増原さんが顧問団長に前から話をしているが、どうなっているか」と聞いたら、四部長は、全然聞いていない、と言う。四部長が、施設などに責任がありますからね。三部長が作戦、二部長が情報、一部長が人事で、これは日本と同じ。日本が向こうを真似たわけです。四部長が、全然聞いてないと言う。聞いてないと言っても、顧問団長さんは、「何でも言つてこい、全部俺が取り次いでやる」と言つていた。それで週に一回会つてゐる。それでこういう申し入れをしていると。それでも「聞いてないことは聞いてない」と言うんですね。「大体、顧問団長にそんな権限はない。施設管理の責任は俺にある」と言うんですね。

「ではどうしたらいいか」と言うのと、「文書をくれ、おたくの大員から在日米軍司令官宛に書いてくれ」と言う。わかりましたと言つて、これまた私が自分で書いたんです。事は秘密ですからね。

それでアメリカに出す前に外務省に断つた。たまたま私の昔からの知り合いの一高同期の安川君が担当課長だった。安川君のところに行つて、これはこういうことになつて、こういうことで行つたんだが、行つたら文書を寄越せと言われた。秘密事項だから俺が書いた。「読んでみてくれ」と言つた。彼は読んで、「この文章はまずいよ」と言うんですね。意味はわかるだろうと言うと、わかると言う。その前に私は予め四部長のところに行つたんです。これでいいかと言つたんです。そうしたら、これでいいと言つたんです。だから安川もいいと言つうと思つたら、「この英文は誰が書いたか」と言う。「俺だ」と言つたら、「そうか、わかつた。お前は独法だから英文が下手なのはわかる。これは駄目だ。外務省ならこんな文章は書かない」と言うんです。「そう言うけれど、俺が四部長に会つたら、これでいいと言つたんだ。

外務大臣の文章じゃないんだから、木村さんの文章なんだからこれで勘弁してくれ」と言つたら、「うん、そうか」ということでオーケイになつたんですね。そういうことで、私の書いた英文を木村さんの名前で出したんです。

そうしたら二週間ぐらいで、返事を出すから大臣に来てくれと言われた。それで行つたのが、大臣と増原さんと私の三人なんです。局長は行きません。その時に私が感心したのは、司令官のハル大将が真ん中にいるでしょう。両隣にブラツと偉い幕僚が並んでいるんです。こつちは三人です。そうしたら最初にハルさんが言つたのは、「北海道から撤退することについては、中で相談したら、私の幕僚は全員反対をした。その理由は、北海道には立派な演習場がある。それから隊舎も一流のものがある（進駐軍兵舎ですね）。私たち軍隊は演習が大事だ。それが日本の内地に引き揚げたらどうなるのか、ということが問題になつた。そうして全員が北海道がいいと言う（惚れ込んだ）やつたんですね、島松演習場その他に）。However、しかし私は北海道を撤退することに賛成である」と言うんです。幕僚が全部いるんです。さすがだと思ひましたね。「その理由は、あなた方が言つている通りである。日本人自身が日本の国を守ることなら、まず最初に北海道を考えるのは当然だし、それをどこに配置するかというと、北海道で米軍の肩代わりをするのは正しい方策である。そこで幕僚全員の反対に拘わらず、私は合意する」と言つたんです。立派だと思ひましたね。これが司令官だな、と思ひました。

そうしたら、「ただし」と言うんです。これが後まで尾を引く。「ただし、私たちの幕僚が反対する最大の理由は、内地に引き揚げたら充分な演習ができない。北海道は島松演習場を中心として、アメリカ軍

らしい演習ができる。それが内地ではできない。それは彼らが心配するのにも当然だ。そこで条件がある。私たちが演習を充分とは言わないまでも、まあまあできる程度に条件を整えてもらいたい」と言う。こつちも「イエス」と言う。これは断れませぬね。それが富士の演習場なんです。

伊藤 北富士演習場ですか。

海原 ええ。これが経緯です。「米軍が北海道を引き揚げるのについて、内地で充分に演習ができるような条件を整えます」と。それは木村さんが「私が大臣でありますから、それはやります」と言った。『歌舞伎』みたいなものですよ。このやり取りを聞いていまして、面白いな、と思いました。しかし、内地の演習場と言っても大丈夫かなと思いましたが、しかし、そんなことに私が口を出す理由はありません。それで北富士の演習場になった。あそこを使う理由は、アメリカが日本に来て、すぐにあそこでやる。一種の米軍の作戦行動にもふさわしいと言うんですね。そういうことがありました。そこで北富士の演習場の整備が、最後まで日本にとつての大きなマイナスの条件になるわけです。しかし米軍にしてみれば当然ですね。こういう経緯がありました。これは初めて話しましたか。

伊藤 初めです。

海原 そうですか。そういうことがあった。だから米軍は、演習の条件を整備してくれると言ったじゃないかと。ところが演習をやると弾拾いの人が入るとか、命が危ないからとかが問題になるのです。それが米軍の作戦、引き揚げることとの関連で申し上げなかつたことです。伊藤 結局、アメリカ軍の作戦計画では退くわけでしょう。ところが日本の自衛隊は北海道を死守するわけですね。

海原 死守するわけです。ここが違うんですね。違つて当り前です。そういうことがあるんですが、私の見る限りではどこにも書いてないんです。これは歴史的な意味合いがあることではないかと思ひますね。伊藤 北海道で、自衛隊が守れるだけの施設はあるんですか。陣地を構築したり、ですね。

海原 陣地がないんですよ。

伊藤 ない、というのはどういうことですか。

海原 それはまた後で言いますが、私は、幾たびか、いま土地が安い間に陣地予定地を演習場として買つておけ、と言つたんです。後で陣地を造ればいい。後になつて陣地を造るために土地が必要になつたら大変だ。いま安いんだから、いまのうちに演習場予定地ということ、手を打つておけ、と何回言つたかわかりません。ところが「陸」に、陣地という考えがないんですね。西浦進さんがしきりにそれを言つていましたけれどね。本にも書いています。先輩の西浦進さんの言うようなことは聞かないんです。これが情けないことなんです。そういうことを言い出すと切りがないんですが、一端を言いますと。北海道には要塞がありません。こんな国は珍しいでしょうな。

伊藤 どうやって守るつもりなんですかね。

海原 それは史学会で調べてください。だから、たつた四万人の自衛隊しかいないんです。守れるはずがないと言ふんです。彼らは守れると言つて、聞かないんです。

伊藤 どこから上陸して来るかわからないわけですね。

海原 それは数カ所しかありません。極端に言えば一カ所ですね。なぜそこで陣地を設けないか。これは後で申し上げようと思ひましたが、話が出ましたので申し上げます。陸上自衛隊の幕僚が演習をやり

ね。その時の想定が「大甘」なんです。航空自衛隊については申し上げました。敵の空襲があっても地上の施設に被害はない、通信施設も被害はないという想定になっていくんです。そんなことがあり得ますか。それと同じです、陸上自衛隊は。敵は上陸する前に、予め艦砲射撃をやる。爆弾を落とす。それが少ないんですよ。私は、一体どういうことをやっているかと調べたんです。数字も持っていますから、今度持って来ます。私の記憶が正しければ、たった四、五百トンです。

「おいおい、これはノモンハンとか、太平洋のサイパンその他の先例を参考にしているのか。沖縄で敵は何トン撃つたのか」「知りません」と言う。調べていないんです。上陸する敵が、わずか四百トン前後の爆弾しか落とさない。この数字はあとで訂正するかも知れませんが、それが彼らの前提なんです。だから陣地なんて考えない。その大本には、「日米安保体制があるから大丈夫だ」ということがある。これは同意します。「アメさん」がおる限りは絶対大丈夫、だからそんなことに金を使うのは馬鹿馬鹿しい、ということですよ。

「馬鹿馬鹿しいかも知れないけれど、そういうことをきちんと言わなければいけないんじゃないか。将来の方々のために」と言っても、「そうおっしゃいますが、理屈はその通りであります」と言ってもやらないんですね。消極的抵抗ですね。私も幾たびかやりましたが、諦めています。だから陣地がない。今頃になって、応急予備自衛官なんていうのをつくって、何百人でどうなるんですか（笑い）。それで済んでいるのは、一にも二にも日米安保体制です。

河野 この時の日米安保体制は旧安保で、改定前の安保ですね。

海原 そうです。

河野 素人の質問ですが、旧安保における在日米軍は、条約上は日本

の防衛義務を持っていないわけですね。

海原 ありませんよ。

河野 であるにも拘わらず、それでも防衛当局は日米安保を……。

海原 それは法律論だと言うんですね。アメリカは絶対に放さない、引き揚げないと言っているわけですよ。

河野 では、条文には書いてなくても守ってくれると思っていいたんですね。

海原 そうです。信仰です。

河野 そういうことですか。甘いですね。

海原 それは、おっしゃる通り甘い。日本人は甘いんですよ。

河野 ということは六〇年の改定で、岸は条約の中に防衛義務を入れることを力説したわけですが、実質的にはあまり意味がなかったんですね。

海原 あまり意味がないんです。

河野 ということは、もう防衛義務はあるということできていたわけですか。

海原 それよりも政治的に意味があったのは、内乱、騒擾の時に米軍が出る。一方的なんですね。こっちが要請して出るのではない。その方がむしろ直接的なんです。

河野 内乱、騒擾の条文がありますね。

海原 その方が日本にいるアメリカ人にとって身近なものなんです。それは共産党が「五一年綱領」でやっているでしょう。ソ連が出て来るということより、国内の方が問題だという認識でした。皆が皆とは言いませんが、一般的に言えばそういうことです。だから案外日本人は建前にこだわるんですね。日本の国において内乱、騒擾がある時に、

アメリカが勝手に出て行って、こっちがどうするわけではない。おかしいじゃないか、ということですよ。おっしゃられたことは、事実関係で見ればおかしいですね。それがその当時の空気だったことは間違いない。問題を感じなかった。ということは、自衛隊は戦う力もないのに、われわれはこういうことをやるんだということ、『防衛白書』に立派な文字を書き連ねているんですから。私はそれが「虚構の作文」だと言いつつ続けているんですが、いつこうに彼らは反省しない。これは何ともならないですね。だから私の本に書きましたが、「在日米軍が全部引き揚げた時に初めて日本人は、祖国の防衛をどうするかということを考えるだろう」ということです。ずっと書いていますけれどね。

この間、あるところに行つてその本を配りましたら、読んだ一人が、あの中で言つておられることは、あそこが一番いいと言ってますね。国を守るのは国民全部の問題だ。別に「アメさん」の義務でもなければ、自衛隊だけの問題でもない。国民がどうするかという問題だ。政治がそれを避けている。偉そうなことを言うけれど、全然やらない。偉そうなことを言う最右翼は中曽根氏だった。しかし、それは言葉だけだった。事実上は何もしない。それが日本人なんだ、と書いてあるわけですからね。

おっしゃったようなことではおかしな点があるんですが、どういふふうに日本人をご覧になるかによつて答えは違つてきますね。それはいずれ申し上げようと思つたんですが、日米安保体制、一九七〇年の問題がありましたね。自民党の有名な政治家が何と言つたと思ひますか。自民党は、当初は「縛れ」と言つていた。十年と書いてある。それに対して、今の自動延長がいいとわれわれは言つた。小坂徳三郎外

務大臣もいいと言つた。それに対して、自民党の一部の右翼的と言われる人は、「縛れ」と言う。新しい条約では期限を付けると言う。その理由がおかしいんですね。その時にお話ししようと思つたんですが、期限を付けておかないと、仮に日本が社会党政権になつた場合、アメリカは俺は知らんと言ふかも知れないと言ふんですね。しかし十年間は期間があると言えば、仮に自民党政権から社会党政権に替つてもアメリカはその義務を守るだろう。だから期間を付ける必要がある、というのが彼らの言い方です。私は意見を言えというから、言いました。そんなのは、あなた方は世の中を知らない。知つたような顔をして言っているけれど、知らないんだ。もし日本が駄目だと思つたら、法律が残つてもやりませんよ、そんなものは。お互いの信義の問題と同じで、日本を仲間と思うか思わないか、それによつて決まるんだ。だから「縛れ」ということはあり得ないことだ。「縛れ」という考え自体が間違つているということを、自民党の安全保障部会で言つたんです。そういう経緯があつた。

その時に私が笑い出したんですが、縛るか、自動延長にするかを決めるのは、一九七〇年の検事総長の判断だと言ふんですよ。意味がわかりますか。ある人がそう言つた。私は何を言つているのかと思つたんです。わからない。日本の国内の治安情勢がどういふ状態かということをも具体的、客観的に知るのは検事総長だ。だから、その時の情勢如何によつて決めるべきである。誰が言つたか。増田甲子七議員です。われわれの大先輩です、死にましたが。そういうことを堂々とおっしゃるのが自民党の長老議員なんです。私は笑つていました。結局は私たちが言つたように自動延長になつた。小坂さんも自動延長論ですね。いろいろなことがあるんですが、この話はよろしいですか。

佐道 北海道進駐に関して一点伺いたいんですが、米軍には北海道にソ連が攻めて来たら北海道から退いて白河で守るという防衛戦略があった。日本人として、それは駄目だということで、北海道に自衛隊を送ることになった。日米防衛協力という問題で、陸・海・空で話は違うと思うんですが、海上自衛隊は最初から米海軍への協力・補完ということで話を進めてきた。陸上自衛隊の場合の防衛協力はどうか。そもそも防衛構想が違うわけですね。

海原 おっしゃる通りです。それが一番大きな問題なんです。それが統合幕僚会議でも問題になるんですね。要するに、統合された防衛政策はないんです。今でもないんです。それはいまおっしゃった点なんです。というのは、「空」も日本の防衛でしょう。「陸」も日本防衛でしょう。だから「空」と「陸」とは、日本の四つの島が防衛の対象範囲なんです。「海」は太平洋だと言う。合わないんです。そういうことがあるので、私が大臣に言つて命令を出してもらったけれど、長期防衛力整備計画について答えが出てこない。すなわち日本をいかに防衛するかという防衛構想がないんです。

一時議論されたことがあるんです。源田さんが空幕長。源田さんの名前を取って出しましたのは、みなさんご存知だから。「源田サーカス」の源田実ですね。源田さんが統合幕僚会議で言ったんですね。「空」が破られれば終わりだと。そうしたら、「陸」が、「空」なんていうのはいくら金をかけても破られる。だから日本の防衛は陸上防衛だと言ったんですね、杉田（一次）幕僚長が、全然違うでしょう。「海」はどう言ったか。「海」は適当に両方の間を調整しようなことしか言わない。海上交通の護衛には外航護衛と内航護衛と二つある。それをできる範囲でやるんだと言うんです。それで統合幕僚会議議長がい

ても、こうだと言えないんです。いまだにないんです。

それは『国防』という雑誌で、元統合幕僚会議議長だった人が集まって話をしていますが、「できない、できていない。私も努力しましたができませんでした」と、みんな言っているわけです。これは統合幕僚会議の設立に私が反対した理由でもあるんですけれど、そういうこともあるんです。おっしゃるように、まさにないんです。いわゆる「統合防衛構想」の六文字について、各幕僚長が議論したのが、源田さんがいた時の一回だけです。その前後を入れましてね。「空」が破られれば終わりだ、いや「陸」だ。「海」がその間でああでもない、こうでもないと言つて、統合幕僚会議議長が裁決できない。爾来、今日まで一回もやっていません。

伊藤 そういう議論を、ですか。

海原 はい。だから『防衛白書』にも書きようがないんです。それぞれ陸・海・空が何をするか、何をすべきかということが書いてあるだけで、「統合」という文字はあっても、統合防衛構想はゼロです。一体、それでいいんですか、と私は言っているんですけれどね。何回も申し上げた事例が示すように、統合できないんです。特に日本人の場合はどうでしょうね。

伊藤 アメリカでもできないと言っていますから。

海原 そうです。だから統合幕僚会議というのはつくりなさんな、と声を噓らして言ったんですよ。

佐道 統合防衛構想すらできないのですから、ましてや米軍との防衛協力というのは……。

海原 日本の防衛に対していかに日米は行動すべきかという、日米統合防衛構想ですね。それができなくなった理由は、まさにそれが一つ

大きな問題です。同時に、もう一つあるのは、誰が司令官になるかです。私はそれは当然「アメさん」だ、と言ったんです。断然反対したのは、林敬三閣下です。日本人ですからね。けしからん、日本を防衛するのに、その日米部隊の司令官がアメリカ人であるのはおかしいと言う。林さんがおかしいと言っても、実力の差があるからしようがない(笑)。ヨーロッパにも例があるでしょう。イギリスのモントゴメリーがアイゼンハワーの下にいた。これほどの屈辱はないとモントゴメリーが告白しているけれど、感情的にはそうだろう。しかしそれはしようがない、力の問題だから。「林さん、あなたのおっしゃっているのはその時と同じだ。日本防衛と言っても、米軍の力がはるかに大きいんだから、その司令官は米軍でいいじゃないですか」と言う、「いや、海原君、それは駄目だ。君は日本人かね」と言うんです(笑)。

伊藤 いえ、違います、とか(笑)。

海原 いや、違いますとは言いませんよ。「私は国際人です」と言います。日本に生まれましたけれど、思想的には国際人ですと言ったら、黙っちゃいましたね。そういうことがあるんです。だから、みなさん方が聞いていて馬鹿馬鹿しいと思うようなことが、関係者にとっては大変重要なんです。だから、いまだに日米統合防衛構想はありません。できませんよ。一時委員会を作ろうという話があった。ところがその委員会を作るについても、林さんは、当然指揮者は日本人だと言うし、アメリカはお前たち何を持っていうんだと言うでしょう。それが一つ。もう一つは日本側の委員会に防衛局長、文官を入れるというのが林さんの立場。加藤陽三さんもそうでした。私はいけないと言った。防衛局長はふだんは必要だけれど、そんな作戦をどうするかにな

ると、昔の例があるでしょう。「長袖兵を論ず」という例がある。戦うのは軍人さんなんだから、お公家さんがああだこうだと言うのは間違っている、と言ったんです。

それで私がスイスに行った時の例を言ったんです。私はスイスで、それを聞きました。今もそうでしょうが、あそこは平時はジェネラルはいないんです。戦時になるとジェネラルができる。その一番偉い人に会って、私はシベリアン・コントロールの話を知りました。そうしたら彼が極めて簡単に言いました。「戦争をするかしないか、戦うかどうかを決めるのはシベリアンだ。しかし戦うと決めたら、どう戦うか、それを決めるのは『制服』だ。それでいいんだ。シベリアンはそんなことを決める知識も経験もない」と。「その時シベリアンはどうするか」と言ったら、「湖に行つて魚を釣っている」と言いました。これだな、と思いましたね。これが私がスイスで聞いたシベリアン・コントロールです。

ところが日本では認証官の問題ですね。加藤陽三さんがしきりに主張されて、事務次官は統合幕僚会議議長と同じだと言おう。そんなことは駄目だと言っただけで、聞かないですね。それがシベリアン・コントロールじゃありませんよ、と言って、スイスはこうでした、という例を言ったんです。質問をしたら、戦うかどうかを決めるのが政治家も含めたシベリアンだ。しかしいざ戦うとなったら、どう戦うかを決めるのは「制服」の諸君だ。背広を着ている連中は、場所がないから釣りにでも行くさ、という笑い話をしたんですが、駄目ですね。これは伊藤先生に伺いたいんですが、これが日本人の心理と言うんですかね。何でそんなに譲つたらいけないと思うんですかね。日本の防衛であるから、当然司令官は日本人であるべきだというのが、彼ら

の信念ですね。

伊藤 海上自衛隊は米軍と共同演習をやっていますね。

海原 それは太平洋に行きますからね。

伊藤 陸上は、やっていないわけですか。

海原 やりません。たまにミサイル部隊がアメリカに行つて撃つとか、たまに向こうの部隊が来て、北海道で演習するとか、極めて部分的なものですよ。

伊藤 戦略的なものではないんですね。

海原 はい。

伊藤 「空」はどうですか。

海原 「空」はもつと簡単ですね。アメリカ第五軍が持っている空域がある。その中で日本の航空自衛隊がどこをやるかというだけの話です。それは広いですし、行動が自由ですからね。一番違うのは、戦うのはパイロットなんです。「陸」はザーツと広がっているでしょう。「海」は船ですね。この違いがあるわけです。だから日米両軍の共同戦闘と言つても、その様相は全部違うわけです。ですから、話し合いの内容も違ってくるわけですね。今、そういうきちんとしたものはありません。私はなくてもいいと思うんですが、おかしいと言えればおかしい。

伊藤 アメリカ軍の方は、あるんですか。

海原 向こうは向こうで考えているでしょうが、私が接した範囲で、その後は知りませんが、アジアにはそれほど重点を置いていません。日本にも朝鮮にも。朝鮮戦争があんな形になったのも、ある意味で朝鮮についてのポリシーがなかったからでしょうね。「北」と「南」に分かれましたのは、それは私が昔晩飯を一緒にしましたが、ダレスが

来た時の向こうの気持ちもわかりますから。日本とか朝鮮とか、その頃の経済情勢を見るとわかります。日本なんか芥子粒みたいなものでしよう。まさか日本が世界第二の経済大国になるうとは全く思っていないから。そういう背景も私たちは理解しなければなりませんね。

それから、アメリカがフィリピンから撤退するとは思いませんでした。ずっと持っていると思いましたが、しかしアメリカの中もいろいろ情勢が変わってきますから、極東だけではなくいろいろなる見なくてはいけないということが変わるわけですね。お互いが変わっている。数学的に言うと、相関的に変わる因数みたいなものです。きちとしたものではないですね。今もそんなものではないですか。

言えることは、日本を弱くしようと思つた占領直後の考え方がすっかりなくなつて、日本は大事な国だということだけがわかつた。しかし日本だけではなくて、その周りにはチャイナがある、コリアがある。それでどうするのかということ、向こうはゴタゴタしているんですね。しかも今、世の中から共産主義の脅威がなくなりましたから、自由な議論ができるわけですね。したがつて向こう側にも、昔のようなきちんとした物の考え方、日本という「構想」がないですね。それは事実です。これを文学的に表現すると、あるいは「星雲状態」と言う人もいるかもしれませんが、それは事実ですね。

それをまとめていくのは、日本側に、吉田さんのような立派な政治家が出て来ることが必要ですね。ところが日本の政治の世界はお粗末もいいところでしょう。今までで今が一番マイナスじゃないですか。

伊藤 しかし、昔に比べれば防衛問題が公然と議論されるという点ではかなり前進したでしょう。

海原 そこは進みましたね。そこまでは一般の人々の知識が上がつた

ということですね。それにつきましては、世界各地でいろいろなことが起こりましたからね。それによる判断がありますね。インドやパキスタンで核実験をやるとか、北朝鮮がミサイルを撃つとか、中国がどうしているかということが逐次わかってきますからね。さあ、これからどうするか、ということでしょうね。

伊藤 こういう議論をやるようになったのは、海原さんあたりがいろいろと論じられてきた結果だという面もずいぶんあるでしょう。

海原 ないかあるかわかりませんが、客観的に見ていかなないと。しかし当人としては、若干の功績があったように思いますね。特に私の場合は、政府の決めていることに対して遠慮なく物を言っていますからね。そういう意味では私の後に続いてくれる人がいないのが残念ですね。ずいぶん私の部下を教育したんです。それで当時、新聞なんかから「海原学校」と言われましたが、その「海原学校」というのは、私が防衛庁から国防会議に追い出されると微塵に碎けましたね。人も亡くなりました。私の一番の子分は死んだ有吉（久雄）君で、これは久保（卓也）君と同期です。久保君はちよつと私と違いますが、有吉君は完全に私と同じ意見でしたね。これは昭和十八年組です。そういう人々がいなくなりました。その下になりますと、自分で言うのもおかしいんですが、ちよつと離れていると、日本では怖いんですな。

伊藤 煙りたいんですよ。

海原 そういうことですね。怖いより前に煙りたいんですね。それがありますね。おかしいと思うけれど、そうですね。こればかりは私の不徳の致すところだと言えればそれでいいわけですが、それだけではなない。私たちの場合は、考え方が違って、その人に話を聞きに行きました。そういう努力がないですね。

伊藤 それは非常に残念なことですね。そこでどうしましょう、今日の質問に入っていないんですが、そろそろ時間ですね。

海原 私は時間はいいんですが、ついでに言っておきますと、もう一つ問題になりましたのは、自衛隊が軍隊かどうかという問題なんです。これにつきましては、木村さんに衆議院の内閣委員会で答弁してもらいました。それは私が書いたんです。それは、軍隊という定義を調べてみると、国際的でないんです。要するに、国を代表して国家の利害を守るために武力を行使する組織で、制服を着ている、それを軍隊と言う。それだけなんです。軍隊とは何かとは書いてないけれど、解釈していくとそういうものになる。そういうものだとすると、まさに自衛隊は軍隊なんです。それを木村さんに言ったら、「わかった」ということで、内閣委員会で答弁してくれました。軍隊という定義はないんだけれど、そういうものを軍隊と言うのなら、自衛隊は軍隊である、と言ってもらったんです。ですから、この問題には一応終止符が付いているんですね。さっきの階級の称号の問題にも影響してきますからね。そんなことですね。これがこの前の補足で申し上げるところでした。速記録をみますと、いろいろ落としていると思つて、今日追加したわけです。

伊藤 いや、この間、お話を伺わなかったことが出て来たな、と思つたんですけれどね。

海原 この間を見たら、「細かいことを言え」と言われましたね。切りがないですよ、と言ったら、「切りがなくてもよろしい」と言っておられますから。それはそうかと思ひまして、私なりに解釈していたんです。

伊藤 今日の質問要項は、この次の要項にしておきましょう。

海原 そうですか。じゃあそういうことに。私も間違いましたのは、私がお家を持つていることについて、親父が死んだ時にへそくりがあったと言ったんですが、母なんです。これ「前回の速記録」は直しておきました。大体、へそくりと言えば女性でしょう。男がやるものではないですね。それを親父と言ってしまった。

佐道 ずいぶん持つておられたんですね。

海原 その時は安かったんです。値段は言いませんでしたけれど、そんな額ではありません。買った株は三菱電機と三菱化成を、それぞれ千株ずつです。その三菱化成は力石さんに買ってもらったんですが、一株三〇円前後でした。そんなに安かった。それが何と一年間で千五百円まで行ったんです。それを私は千三百円のところ売った。力石さんの秘書に電話をかけて……。三菱電気は一株が三株になった。その株、三菱電機と三菱化成のおかげで今の家が建ったということですね。それはひとえに力石さんのおかげで、今は亡くなって、奥さんと付き合っています。私にとって恩人なんです。そんなことがあります。

この間の補足を話しました。自衛隊は軍隊だと申しました。階級称呼のことも申しました。それから砂田さんのことで批評がありました。

伊藤 郷土防衛隊のことですか。

海原 郷土防衛隊ではなく、国防省、防衛省の問題があった。それから顧問会議がどうだったか。顧問会議は私は聞いていませんが、それを船田中さんが引き受けたんです。ところが、船田さんでもできませんでしたね。彼は砂田さんほどはつきりと物を考えておりませんでしたね。砂田さんは郷土防衛隊、国防省、顧問会議を言われたんですね。

顧問会議のことは知りません。どこで調べられたのかわかりませんが、私は全然知りませんでした。新聞記者との話でされたのではないかと思えます。

佐道 『防衛年鑑』に名前入りで出ているんです。次回持つて来ますが、昔の將軍たちの名前がずらずら出ているんです。

海原 昔のことを言いますと、いろいろな人がおつたんです。あの人たちはすぐ文章を書いて配ったり、仲間がいつばいいるんですが、それほど確固とした組織ではなかったですね。私はなるべく昔の人がどうだった、ああだったということは言わないですね、特別な場合以外。顧問会議は、私がかもし聞いていたら、反対したでしょうね。しかし、私には何も話がなかったですな。

伊藤 それで、その砂田さんのことというのはどういうことですか。

海原 何か三つくらい書いてありましたね。私が後を受けてやっておりますのは郷土防衛隊、それから国防省。顧問会議のことは、私は全然知りません。

国防省への昇格ならず

伊藤 国防省の問題はどうですか。

海原 これはまた長い話になるんですが、最初に出したのが砂田さんですね。それを船田さんが受けた。それがずっと後まで行くんですが、一時、途中で国防省案が用意されたんです。官房長官が黒金（泰美）

さん。この時に国防省案ができたんです。防衛省かな、名前は別としましてね。それは閣議で決まったんです。閣議で決まったものが国会に送られますね。ところが、その時は送られない。そういうことがあった。閣議では「件名外」で決まったんです。

伊藤 「件名外」というのは何ですか。

海原 その日に何を決めるかという予定表がありますね。それに載せないで。

伊藤 次官会議は？

海原 バイパスして。それで閣議に出しちゃうんです。閣議では「件名外」ということで決めましたね。

伊藤 決めたことは決めましたか。

海原 決定。これが不思議なんですよ。調べてみてください。閣議で決定した。しかし、黒金官房長官が押さえちゃった。ついに閣議で決定された防衛省案が国会に送られていないんです。そういうことがあり得たんです。これに関連しますと、いろいろあるんです。当時自民党の中に国防部会がありました。その国防部会でいろいろと勇ましい議論が出るんです。中には旧軍の人が中心になっているものもあります。そういうことがあったか。私も出ているところで、「国防問題はこれから大事になる。だからこれから先、総理総裁になる人は、どういう国防構想を持っているか、われわれが聞かなくてはいけない。だから総裁予定者は国防部会に来て、防衛論をやらせるということにしようじゃないか」と、誰かが言う、みんな「賛成」と言うんです。それだけです。やらない。そういうところで、国防部会は。

伊藤 やらないというのは、やれない、ということですか。

海原 やれない。だって閣議で決まったのに、黒金さんが押さえちゃ

った。これは黒金さんが押さえたんじゃない。池田さんが押さえろと言ったんじゃないか。

その時は佐藤派が「黒金は弱い」ということで政争をしていたわけです。佐藤派対池田派の戦いだった。黒金さんが官房長官で池田さんの子分で、言うなれば幹事長ですね。それで閣議で決定しながら、それが送れない。お調べください。そういうことがある。考えられないでしょう。

伊藤 次官会議を経ないで閣議に回るといっても異例ですね。

海原 正確には知りませんよ。次官会議と称するものできちんと決まったのか、そういうことにしたのか、それがわからないんです、あの頃の内閣官房とか法制局は。

伊藤 それは池田さんの時の話ですか。

海原 池田さんの時です。というのは、池田は弱腰だ、けしからんと行って反対したのは佐藤さんなんです。佐藤派の連中が突き上げたんです。

伊藤 池田さんは閣議決定したんだから、池田さんもちろん賛成したわけでしょう。

海原 と思うでしょう。それがわからないんです、池田という人はどういう人か。伊藤さんは、極めて単純ですね。そんなことで赤か白かで決めるわけではないんです。いろいろあるんです。難しいですね、あの頃の時代の動きは。黒金さんが途中で失脚するでしょう。なぜ失脚したかお調べになってください。よくわからないけれど、失脚する。しかし黒金さんは池田さんの一の子分ですからね。池田さんが、閣議では決定するが、国会に送るなど言ったに違いありません。そんなことを黒金さん一人の考えではやれません。それがわかっても、そ

れを追及できないのが当時の自民党の内部事情ですね。

その当時の佐藤派が、池田はけしからん、といって息巻いているのを私は目撃しているんです。その佐藤が総理になったあとどうかと言ったら、全然駄目ですよ。

それで私の前の国防会議の事務局長の北村隆さん、大先輩ですが、「池田さんの次の総理は佐藤さんだから、佐藤さんに防衛問題を教育しなさい」と言ったら、「よし、わかった」と言っただけで、わざわざ北村さんが軽井沢の佐藤さんの別荘まで行って、講義しているんです。その後で佐藤さんは東南アジア各国を回りました。それは北村さんに私が、「いま佐藤さんは暇だから、東南アジアでも見てきて、各国が何をやっているか勉強させてください。そうしたら佐藤さんが総理になれば、今の池田さんと違うことになるでしょう」と言っただけで、北村さんが佐藤さんに講義した結果なんです。

そこまでの佐藤さんが総理になつて何をやったか。問題は防衛省です。これもおそらくご存知ないと思うんですが、ある年の卒業式に防衛大学校に行つたんです。その時に気軽に彼は学生と話をし、「質問したいことがあつたら質問しろ」と言つたんです。そうしたら一学生が立ち上がつて、「一体、防衛庁はいつ省になるか」という質問をした。佐藤さんは「防衛庁を省にするのは政治家の責任である」と言明したんです。あの団十郎張りの目で、はつきりした声で。そうしたら大学生は喜んで、大変な拍手喝采だった。そう言われたら、みんなそう思うでしょう。

さて、それから一年経つた。前の年に行つたのは卒業式だと思つたんですが、次の年は新入生の入学式だった。防衛庁法案が参議院で審議されている最中だった。私が、「防衛庁の慣習もあつて、防衛大学校

の式に大臣が行くことになつていて。ついでには委員会の方は政務次官に替つてくれ」と言つたら、駄目だと言う。そんなに委員会を軽視するのなら、防衛庁法案を通さんと言う。改正案ですね。それで結局行けなくなつた。その後で防衛大学校の学生が何と言つたか。佐藤総理は来られるはずがない。去年あれだけはつきりと、「防衛庁を省にするのは政治家の責任である」と言つておきながら、一年経つて何をしたら、何もしていないじゃないか。あれだけはつきり何でも質問したまえ、と言つて質問したら、それに答えて言われた「政治家の責任」が全く果たされていない。来られるはずがない、というのが、総理が行かなかつた時の防衛大学校の学生の反応ですね。

伊藤 それは国会にそれを出した場合、社会党が反対して、非常に困難になるといふことで躊躇したということですかね。

海原 そうだと思います。私は本人に聞いていませんからわかりませんが。

伊藤 省への昇格問題については、海原さんは是非そうすべきだといふお考えですか。

海原 是非、というよりも、当然そうなるべきだということですね。抱えている人間の大きさとか、予算の大きさとか、対外的な関係とか考えれば、省になるのは当たり前だ。自治省が省で、なぜ防衛庁が庁なんだ。庁の下に庁があるのはおかしいじゃないか。

防衛庁長官がアメリカに視察に行つた時の話をしましたか。最初に防衛庁長官がアメリカに行く時、それは西村さんがアメリカと掛け合つたらしいんですが、西村さんの時には実現しないで、志賀（健次郎）さんの時に実現するわけですが、アメリカの大使館にいた阿嘉さんから電話がかかってきたんです。この阿嘉さんは一番親しい、今でも付

き合っている間柄です。阿嘉嘉弘と言うんですが、誰でも知っている有名な人で、後に勲三等をもらいました。その阿嘉さんが電話で、「海原さん、防衛庁長官は国務大臣ですね」と言うんです。私は、「そんなことをなぜ今頃聞くんだ、あなたは当然知っているはずだと思う」と言っただけです。そうしたら「実は極東軍司令部からだ。今度の防衛庁長官がアメリカに行くが、軍では防衛庁長官は国務大臣ではないと言っている。宮内庁長官とか、あちこちに長官がいるでしょう。それと同じに扱っている。『それは違う。あくまで国務大臣だ』と言ったが、念のために聞いたんだ」と言う。「なぜ聞くんだ」と聞いたなら、向こうの待遇が違いますね。向こうで言えば国防長官ですから、大臣が行くと専用機が付くわけです。アメリカ中を回るわけです。防衛庁長官が、単なる宮内庁長官や施設庁長官と同じであれば、専用機は出さない。そういうことがあって、極東軍司令部が防衛庁長官は国防大臣ではないと言っていた。「そういう議論があつたから、念のためにあなたに電話したんだ」と言う。だから「絶対に間違いはない」と言った。

それで私は大臣に、Minister of Defence Departmentと書かせて、それを持って行ったんです。そんなことがあるんです。だからアメリカの極東軍司令部からも問い合わせが来るような状態で、紛らわしい。それはそうでしょう。防衛庁の下に施設庁があるんですから。庁が庁を抱えているんですよ。宮内庁長官と言えば大臣ではない、警察庁長官も大臣ではない。

河野 対外的にはministerで通っているわけですか。

海原 私はそうさせました。その時の判断です。

伊藤 北海道開発庁担当国務大臣というのもあるわけでしょう。それ

と同じだけれど、その場合、Ministry of Defenceとか言えるのかな、という気もしますけれどね。

海原 私が大臣に使させたのは、Minister of Defence Departmentという名刺です。そうしないと間違えるから。

佐道 ふつうはagencyですね。

海原 私はそういうふうに使わせました。何の話からこうなったんですか。

伊藤 国防省への昇格問題ですね。これは結局、この間の行政改革でも省になることができなかった。

海原 私は当然だと書きましたけれど、長い歴史があるんです。なぜ「省」になれないのかわからない。私は防衛庁が庁を抱えているのはおかしい。防衛庁の下に防衛施設庁があるでしょう。どう違うのか。なぜ自治省はあんなに小さいのに省なのか、わかりませんね。法制局の連中はいろいろいますけれどね。法制局の連中だって、みんな元はどこかの役人ですからね。わからないですよ、いまだに。わざわざ防衛大学の学生たちに対して、佐藤さんがそう言ったのに。

伊藤 政治が責任を果たしていないと。

海原 それからアメリカの話はしましたか。この先になりますな。時代が飛びますが、ついでに言ってもいいですか。アメリカの日本大使館の参事官の時です。読売の『再軍備の軌跡』という本がありましたね。あれに千賀君が出て来るんです。間違つたことを書いています。どういふことがあつたかと言いますと、経団連から来たのが、保科善四郎、松村秀彦、前田正男。保科さんというのは海軍でしょう。前田さんは奈良県選出の代議士、松村秀彦は陸軍です。この三人が来た。私が参事官で外務省からの連絡があつたから、会つた。

その時の他の参事官は安川君や小川君、後で米国と中国の大使になりましたが、この人達が一緒でした。それでこの三人に会って話を聞いた。その時に千賀君が付いて来ていた。「明日何を話したいんだ」と聞いたら、「実は経団連で防衛力整備計画を作った。これを説明する」と言った。それには私も安川も反対した。「経団連が作った計画を、あなた方が説明するのは間違っている。もし自民党が作ったのなら別だ。経団連というのは、あなた方は重要だと思っっているかも知れないけれど、ワシントンでは一経済団体に過ぎない。そんなところで作った防衛計画を説明すること自体がルール違反だ、おやめなさい」と言つて、私と安川と二人とも反対したので、みんな「わかりました、しません」と言つたんです。

これから先が政治家ですよ。翌日、とにかくペンタゴンに行く。そうなるが僕が案内するわけでしょう。昨日、日本大使館で会つて、三人には縷々アメリカの事情を話した。それで私がお供してペンタゴンに行った。向こうでは、国防次官補代理のシャッフ氏が会つてくれたんですね。そして何を話すかと思つたら、末席に座つた経団連事務局長の千賀君が説明し始めた。経団連の作つた防衛力整備計画を。昨日、「説明しない」と、私と安川君の二人に言つていたのに、私が案内してペンタゴンに行つて、その三人を国防次官補代理に紹介したら、その説明を始めた。

さあ、どうなつたと思いますか。五分ほどしたら、アメリカの国防次官補代理が、「ちょっと待ってくれ、どこの計画か」と聞いたんです。「いや、これは経団連という経済団体の作つた計画だ」と答える。次の質問、「防衛庁はどの程度関与しているか」。「全然関与していません」という答え。そうしたら、シャッフ氏の方は、「防衛庁が全

然関係していない計画をわれわれは聞く立場にない」と言う。それはそうでしょうね。「われわれが相手にするのは、ワシントンの日本大使館か、東京の防衛庁かどちらかである。それは経団連という団体がいかに日本で有力であるか知らないけれど、そういう民間団体の作つた防衛力整備計画を聞く立場にない」と言つて終わりですね。

あれにはそう書いてない。どうしてですかね。いかにも向こうで検討したけれど駄目だった、というように書いてある。検討も何もしてないですよ。五分間で終わります。前日、そう言つたんですよ、もう説明しません、わかりましたと。アメリカの事情がよくわからないので持つて来たけれど、千賀氏もはるばる付いて来たけれど、そういうことなら説明はやめまうと言つたのです。安川君から「海原、お前案内をしてあげてくれ」と言われて、私はペンタゴンに道案内で行つたんです。

さて、五分で終わった。そうしたらその後で、シャッフ氏がどう言つてきたか。「防衛庁はいつ省になりますか」。ああ来たな、と思ひましたよ。それに対してどう答えるか。三人の方々は「私たちは自民党という政党が初めて寄越した正式の対米訪問団である」ということで、自分たちのステイタスを説明したわけです。そして省昇格問題については、「岸総理に会つて、私たちは質した。岸総理は今度の国会に省に昇格する法案を出すと言う。今国会は、わが自民党は多数を占めている。出発する前に質した岸総理の言葉がそうだから、今度の国会で間違いなく防衛庁は省になります」と言うんです。私は途中で、「洋服を」引つ張つたんですけれどね。しようがない、そう言つちやうた。「そうか、それは結構なことだ」と言われた。そういうことは一言も書いてないですよ。

このように、日本からワシントンに來た人は、自分勝手な手形を出しているんです。困ったことに、それは全部向こうに録音されているわけです。しゃべった方は何も持っていない。ワシントンに來た人々は何をしているか。ハガキをたくさん書いて選挙区に送るんですよ。私がお供をして行って感心したのは、飛行場で階段に腰掛けて一所懸命宛名を書いている代議士さんがいた。他の代議士は、全部大使館に置いて行くわけです。宛名を書いておいてくれと。だから駐在武官が一所懸命書いています。それが日本の政治家の行動。いずれにしても、アメリカに対しては岸総理が次の国会に防衛庁の省昇格の法案を出すと言った。わが党は多数を占めているから、今度の国会で必ず省になる。それが自民党を代表してワシントンに來た三人の自民党議員の証言なんです。

これが多いんです。中曽根氏がどう言ったか、調べてください。いっぱい空手形を出しているんです。そこで、「日本人は嘘つきだ」になるわけです。「日本人の言うイエスはノーである、気をつけろ」となる。それはそうでしょう。私が向こうの立場に立てば、そう思いますね。その一つが省昇格問題です。

伊藤 空手形ですね。今日もなおかつ、ですか。

海原 その前に憲法改正があるでしょう。中曽根氏が何を言ったか、何をやったか。憲法改正の歌を作っていたというのは申し上げましたね。国民の直接選挙で総理を選ぼうと。もう何も言わない。中曽根氏が総理になった時に外人記者クラブに配った英文を持っていますか。あんなものを配るんですからね。いかにきざかわかるでしょう。外人記者クラブに自分の政治家としての信条を英文で送る。何をやったか、何もやらないんです。

そこまでで、今日は前回のおさらいでした。何かご参考になったかと思えます。

伊藤 この前伺わなかった話がたくさん出ましたので、大変満足しております。

海原 ああ、もう一つ付け加えることがあります。これは次回になりますか。ドイツの再軍備の問題に関連したNATOの話。あれは『タイム』と言いましたが、『ニューズウィーク』でした。直しておきましたけれどね。

保安課長の時に、岸・アイク会談でお供をして行ったことは申しましたね。

伊藤 何の時ですか。

海原 岸・アイク会談です。

河野 何年の話ですか。

海原 アイゼンハワーとゴルフをやった時の話です。私が保安課長の時です。だから言うのを忘れていたんですよ。

伊藤 まだ、そこまで行っていません。

佐道 今回の質問項目に入っているところですから、次回伺います。

海原 岸・アイク会談で、私が青山学院大学の渡辺昭夫さんにしゃべったものは持っておりますか。

佐道 あります。

海原 あれに出ていることです。あれを用意していただけるといいんですが。岸・アイク会談の触りですね。岸さんは当時どう言っていたかご存知ですか。これは行く前に国防の基本方針を決めて行きましたね。それを用意して、防衛力整備計画を決め、国防方針を決めて、アメリカに行つてアイクに会うわけです。それが岸・アイク会談ですが、

岸さんが、当時日本でどう言われていたか。『中央公論』か『改造』か忘れましたが、総合雑誌のある号で、日本の政治家十人のグラビアが出たんです。岸さんはその真ん中に出ていた。下の説明に、「両岸外交の名手」と書いてある。これをつかまえられたんです。そのお話は次にします。これはどこにも載っていません。

伊藤 それは、その段階でお聞きします。

海原 岸・アイク会談の触りのところは、公式の速記録から落とされたんです。しかし、これはアメリカ人が日本を見る大事などころです。言いかけてましたので話します。「両岸外交の名手」と書いてあるんですね。それは困ると言ったのは誰か。米軍統合参謀本部議長ラドフォード。隣にダレスが座っているんです。その隣でラドフォードが発言して、最近の世界情勢を説明した後、「私たち軍人は、敵か味方かはつきりしてもらいたい。聞くところによると、岸さんは『両岸外交の名手』と呼ばれている。われわれにとつては一番困る。もしヤンキー・ゴー・ホームというのが日本人の気持であるならば、この席でそれをおっしゃってください。そうしたら、全米軍を明日引き揚げる」と言ったんです。私は岸さんの後ろで、外務省の課長二人と筆記していません。びっくりしましたね。その前にダレスは、「ミスター岸はヒアリングはオーケイだ」と言っていた。パケナムとかに習っていないからね。だから時間の節約のために、こちらの言うことは翻訳しない。しかし、日本語の方は間違えるといけないから翻訳する。日本からも国会議員が三人ぐらい来ていましたが、これはわからない。「われわれは明日全軍を引き揚げる」と言いました。wouldという言葉を使った。ああ言わせているな、と思った。どう返事をするかと思った。私の前で、岸さんの背中しか見えない。顔はわからないです。

この時の岸さんは、結論から言うのと立派だと思いましたね。返事をしない。じつと隣に座っているダレスの方を見ている。ラドフォードが言ったんですが、返事をしない。しばらくしてダレスが、まずいと思ったんでしょうね、その問題は別にして、次の話題に移ったんです。この時にラドフォードが言った言葉が、アメリカの軍人さんの全部が考えていることでしょうね。敵か味方かはつきりしてもらいたい。ヤンキー・ゴー・ホームが日本人の気持であるなら、今、この席でそれを言つて欲しい。そうすれば、明日全米軍を引き揚げると言うんですからね。これ、一種の恐喝ですね。脅しです。ダレスが言わせているな、と思ったけれど、これに対して岸さんがどう答えるか。僕は個人的には岸さんは好きではありませんが、この時の岸さんは立派でした。返事をしないで、ダレスの顔を見ているだけです。ダレスは、さすがに外交官ですね。もうその問題に触れない。

さて終わった後で、日米双方の事務方が連絡をして、アメリカ側が、あのくだりはなかったことにして、と申し入れて来ました。日本側は返事をしていませんからね。そういうことで理由がつくでしょう。だから正式の議事録に載っていないんです。私はその席で、岸さんの後ろで書いていたから。

伊藤 書いたものはどうしましたか。

海原 持って来ましようか。

伊藤 それは非常に面白いですね。

河野 それは貴重です。

伊藤 是非持って来てください。

海原 貴重なら、対価を要求しますよ（笑い）。

それから私がアメリカで五万人のナショナルフォースがいると言い

ましたね。一回目か二回目ですが、これが吉田の再軍備の時の五万人と数字が合うんです。「読売新聞・平成十年十一月二十六日の「二十世紀はどんな時代だったのか・吉田茂の選択(下)」のコピーを示す」。それで私が作ったんじゃないかということをお聞きしますが、全然私は関係ありません。たまたま結果的に、吉田さんが言った五万と、私が向こうであちこちに置いてきた五万と合っちゃった。これは偶然の結論だと言ったんですけれどね。

伊藤 では、次回またよろしくお願いします。

海原 今日は進歩しなくてすみません。

伊藤 途中で足踏みしても一向に構わないですから。どうしても今日までにここまで行かなければならないということはないですから。

海原 そうですか。そう言っていたかとありがとうございます。この「日の丸」の記事を見ていただいて、いかに価値観が違うかということですね。

それからもう一つ、これは昔出た新聞ですが、冬季五輪があった時に、一時ワーツと出たんです。朝日は「マルセイエーズ」を訳して「行く手に」と書いてあるでしょう。読売の方は「われらの後に」なんです。どうしてこう違うんですか。原文は何か。書いてないです。勝手に新聞が「前」とか「後」を入れちゃったんです。それが何でわかったかと言うと、英訳があるんです。「マルセイエーズ」の英訳のコピーを示す」。これは調べるのに時間がかかりました。ここに来ると、話をしっかりしないといけないので、調べないといけない。これがある人に見せたら、その人がいいました。海原さん、中国の国歌を知っていますかと言うので、ああ知っていますよと言ったら、じゃああなたには説明しなくてもいいと言った。ご存知ですか。そういうも

のを集めた本はないですかね。

伊藤 メロディはわかりますけれど。

海原 抗日の軍歌で、日本をやっつけろという歌です。それを日本人が神妙な顔をして聞いているんです。そういうことを、「君が代」をどうするかという議論をする人は知っているかということですね。何かの時に注意してください。もうそんなことをやる元気がなくなりましたから。

伊藤 元気がないなんていうことはないじゃないですか。

海原 伊藤先生、そう簡単に私の元気を測定されても困るんです。

伊藤 声の大きさとか。

海原 これは軍隊で鍛えられました。

佐道 ずっと変わらぬ面魂で。

海原 本当に私は抗議しようと思っただけれど、「面魂」と書かれたらしょうがないですね。「態度である」と言われたら抗議しますけれどね。

伊藤 褒めているんです。ありがとうございます。

〈以上〉

海原 治 オーラルヒストリー

第10回

開催日：1999年7月15日

開始時刻：14時00分

終了時刻：16時30分

開催場所：政策研究院
政策研究プロジェクトセンター

出席者：伊藤 隆(政策研究大学院大学教授)

河野康子(法政大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

第10回 質問項目

前回は、防衛庁防衛一課長時代のお話でしたが、今回もその続きをお話しただくなかで、関連した事項についてご質問させていただきたいと思います。

- ① 資料（『防衛年鑑 1956年版』コピー）を同封いたしました。防衛庁長官の顧問団というのはご記憶ありませんか。昭和30年9月28日に第1回会合があったようですが。
- ② 昭和30年には、国防会議設置をめぐる国会が紛糾します。結局、国防会議法は不成立となり、2年後にようやく国防会議ができるわけですが、この間の経緯等についてお願いします。
- ③ 上の質問とも関連しますが、国防会議法案流産を受けて「防衛閣僚懇談会」設置が決定しました。これについてお願いします。
- ④ 前回伺えなかったことを、改めてご質問いたします。杉原長官は外務省出身で、鳩山内閣の外交を支えた重要な人物であり、実際、国防会議成立のために奔走したわけですが、杉原氏の防衛庁でのリーダーシップなどはいかがだったのでしょうか。また、船田中氏は、後に防衛装備国産化懇談会の会長を務められたり、防衛問題との関係を深めていくと思いますが、船田氏についてはどのような印象をお持ちでしょうか。
- ⑤ 昭和30年8月、重光外相は訪米シダレス国務長官と会談、日米安保改定について申し入れをしています。結果は拒否されたわけですが、この時期の日本側の安保改定の動きについて、防衛庁サイドとしてどのように見ておられたのでしょうか。あるいは意見を求められるなど、関係しておられましたか。
- ⑥ 鳩山内閣の政策の大きな目玉は日ソ国交回復でした。ソ連を仮想敵として防衛計画を立案されていたお立場だったわけですが、日ソ交渉の進展およびその内容についてどう見ておられましたか。
- ⑦ これまでのお話の中でも、制度調査会の件や旧軍人の動きなど、軍備のあり方をめぐっていろいろな案が出ていたことを伺いました。長期計画策定にあたって、軍備計画の方針については、いつごろ、どのような形でまとまったのでしょうか。軍備のあり方については、防衛庁内部でも様々な意見があったと思いますが、いかがでしょうか。
- ⑧ 昭和32年6月、一次防が国防会議で決定されます。この具体的な経緯等についてお願いします。
- ⑨ この時期、砂川事件をはじめ全国で反基地運動が高揚します。防衛庁としても対応に苦慮されたと思いますが、どのようなことをご記憶ですか。
- ⑩ 昭和32年2月、岸内閣ができて安保改定に向けて動き出します。岸訪米にも同行されたのではないかと思います。当時の状況についてお願いします。
- ⑪ 昭和33年、米国大使館に参事官として赴任されます。この経緯をお願いします。

国防会議事務局を巡る争い

伊藤 それでは始めさせていただきます。今回の質問要項をお渡ししてあると思いますが、大体これにしたがってお話しただきたいと思いますが。

海原 最初に、いただいた『防衛年鑑一九五六年版』のコピーにある問題ですね。これは防衛庁長官の顧問団の話ですね。結論的に言いますと、全然知らなかった。

伊藤 知らなかったですか。

海原 ええ。ということは全然存在価値がなかったということですよ。ということは、あの頃、前にもちよっと申し上げましたが、旧陸軍、旧海軍がいろいろ団体を作って、改進黨や何かに働きかけているでしょう。自由党、日本自由党があつて改進黨があつた。それに対する上の方の配慮なんですよ。

伊藤 なだめているということですか。

海原 そうです。そのために作ったんです。野放しにしておく、みんなそれぞれ、日本自由党から改進黨まで、いろいろ言うでしょう。それから服部さんなんか音頭をとるわけです。うるさいからということ、上村さんなんか知恵をつけたんじゃないかと思う。そういうものを作って、そこで話を聞こうと。それだけのことでですよ。だから、私たち実務をする者にとつては何の関係もないのです。

伊藤 ここ「『防衛年鑑一九五六年版』一六五ページ、防衛庁顧問団

の設置」に並んでいる顔ぶれで、ご存知の方はたくさんいらっしゃるかと。下村(定)さんとか。

海原 下村さんは知っています。後でちよっと引用しようと思つています。

伊藤 それから今村(均)さんとかは？

海原 今村さんもわかります。それぞれ一、二度会つたことがありますね。

伊藤 沼田多稼蔵さんとか。海軍では沢本(頼雄)さんなどは？

海原 下村さん、今村さんは知っていますけれども、後は知りません。安田(武雄)、沼田、菅(晴次)、原(乙未生)、綾部(橘樹)は、全部知りません。会つたこともありません。

海軍では沢本、和田(操)は知りません。福留(繁)さんは知っています。会つたことがあります。名和(武)さんは知りません。小沢(治三郎)も知りません。富岡(定俊)は知っています。久保田(芳雄)も知りません。

伊藤 知っています、というぐらゐのところですか。

海原 そうです。全然会つたこともない人が半分以上です。ですから、あの頃の状況を、今の平和な時代になつてご説明するのは、いつも私が言うんですけれども、芝居の背景が全然違うんですね。まず、旧陸軍が残っているでしょう。それから今日お話しすることに關係するんですけれども、増原さんまでが自民党に行つて「五年も経てば憲法改正ができると思つた」と言っているんです。それから、この前お渡ししたようないろいろな旧軍の人々の計画です。その背景があるわけです。だから再軍備、国軍の建設は別にやるんだということが、あの人の大きな目標なんです。今の自衛隊、当時保安隊ですが、これ

は警察機関だと思っている。新国軍は別につくる、その新国軍の中核になるのは俺たちだという、はっきりした決まりもないけれど、何となくそういう気分でしたことは間違いないですね。

特に「海」は前にも申しましたように、直接アメリカと相談しているでしょう。「Y委員会」や何か、空母を四隻もらうんだなんて言っているでしょう。そういう状態ですから。

それで、先ほど申しましたように、知恵をつけようと思ったんですよ。野放しにしているとうるさいから、保安庁もそういう人たちに時に会って、意見を聞いたらどうだ。聞く聞かないはお前さん方の判断だが、とにかく保安庁が知らんという態度を取っていたらまずい、ということをやったんでしょね。私はそのように想像します。私には全然相談はありません。まだ課長ですから、相談があるはずはない。私は一回も会ったことがない。そういう存在ですから。

伊藤 それはよくわかりました。前からのお話とずつつながってきます。

海原 今になって自分のことを言うのもおかしいですけども、よくもあんなところにいたなと思うんですよ。私の内務省入省同期のあたりから、あんなところで苦勞するのもいい加減に、ということをやられたことがあるでしょう。だから当然替わりが来ると思ったんです。二年か、三年で交替する。後藤田君の時は二年で替わったんですから、私も二、三年すれば誰かに交替すると思っていたら、この前申し上げたように、「あいつは戻って来ない、防衛が好きなんだ」ということで、官舎にいられなくなって、家まで建てた話をしたでしょう。そんな雰囲気なんです。ですから、もうとても今の平和な状況下では想像できませんね。とにかく、特に旧軍の人は内務省が嫌いでした。だけ

ど、こちらも別に喧嘩する必要ありませんしね。ですから、最初のご質問をいただいた時には、何のことを言っているのか全然わからなかったです。そんな状況です。ですから、その後どういふふうに関係したかは全然わかりませんね。

伊藤 その次に国防会議の問題をちよつと伺いましょう。これはまさか、知らなかったということはないと思います。

海原 その前に、ちよつといろいろ持つて来ましたから。防衛庁設置法で国防会議を置くということを決めているんですね。置くと言った以上は、当然それについてきちんと書いてあるのが本当ですよ、法律としては。それがいいでしょう。「別に定める」と言っているだけです。いかに、その頃のいろいろな意見の調整が困難であつたかということを具体的に証明するものですね。

それから質問に書いてあるように、それから二年して国防会議の構成等に関する法律ができたんですね。ですから、その間ですよ。いろいろと、また例によつて政党の方でも、改進黨に勇ましいのもあるし、それから自由党、日本自由党に接触する人もいて、意見が分かれるんですね。そこで調整できないんです。その調整できないということが、二年後になって、一応こうなるんですね。「『防衛年鑑一九五五年版』九二ページのコピーを示す」。これは『防衛年鑑』に出ているものです。『防衛年鑑』に書いてるのは全部新聞記者なんです。これは防衛庁の公の者は関係していません。それは何かの時に書いてありましてたけれどもね。

これで見ますように、「これに関しては五月二十八日に行なわれた自由、改進黨、日自、三党の」とありますね。ここで一応妥協が成立するわけです。改進黨は例によつて激しいことを言っていたですね。そ

れに対して「民間人も入れろ」という意見はどこから来たか。これは旧軍です。服部さんですよ。要するに自分たちが乗り込んで行って、戦後の再軍備をやるんだと言ったのに、できなかった。その次の狙いが国防会議事務局なんです。それで、国防会議の事務局を大きくして、数百人とか言っていました。二、三百人のものにして、そこへ俺たちが乗り込んで行くんだ、という構想があった。国防会議は上にあるわけですから、そこへ民間人ということで自分たちの関係者が入れられる道を開かないといけない、ということでしょうね。それはもう見え見えですから、自由党が賛成しませんね。改進黨、日本自由党とこの三者の協議で、こういうちよつとわけのわからないことになったんです。

伊藤 文面の上では「改進黨の主張も認め」と書いてありますね。

海原 これは新聞記者が書いていますからね。実はこの間に法律案があるんです。「国防会議等の構成に関する法律」の原案があるんです。

それを私は探したんですが、なかった。それを見ると、民間人も入れるようなことになっていたんですね。ところが現実にはきた法律では、第四条ですが、構成委員は全部大臣でしょう。ここへ民間の有識者という言葉が入っていたんです。どういう有識者を入れるかということ、また別に決めることになっていましたね。それを巡って三党は喧嘩しているわけです。私たちは、そんなことをやっているなど思っていないだけです。そんなことに関係したら大変ですからね。それは自由党が多数だから、まとめてくれるだろうと思っっているわけです。

伊藤 自由党との連絡もやっていないわけですか。

海原 それはやっています。それは上の方です。官房長がやっています。

伊藤 課長クラスでは？

海原 やりません。私なんか言われても行きませんよ。馬鹿馬鹿しくて。くたびれもうけになるだけで、後で悪口を言われるだけですからね。今までの経験から言ってもそうです。だから防衛庁の中でやるならいいけれども、外へ出しやばって出て行って、あいつはこうだとか、どうだとか言うともう袋叩きになりますからね。だから一切、私人はもう触らないことにした。そこで、結論として何も知らないということですよ。

伊藤 原案では、民間人を入れるというようなものがあつたんですね。

海原 あつたんです。それを調べたんですが、もうどこにもないです。

伊藤 それはどのレベルで落としましたわけですか。

海原 それは議員修正です。これがまた面白いんです。ちよつと調べてみるといいと思います。国会の中で修正になったんです。

伊藤 出た案にはそれがあつたわけですね。

河野 その案はどこから出たんですか。

海原 政府から出たんです。

河野 それが国会で修正されて、民間人の登用が落ちた、ということですか。

海原 民間有識者みたいなものが入っていたはずですよ。私はその法律がそういうことで揉めて、国会の中で話がついて、それが議員修正でなくなったということは知っていましたけれどもね。その原案がないんですよ、昔のことですから。

伊藤 その時に働きかけたというようなこともないわけですね。

海原 ありません。先ほど申しましたけれども、私自身は、一切そういう表（おもて）のガタガタした、いわゆる政争の中にはなるべく近寄るまいということだったんです。ですから、この『防衛年鑑』がも

う少し親切であれば、原案がこうであった、それが三党の修正でこうなった、と書くべきですね。書いていないんです。私は何かあったんだと思って、できるだけ私の持っている古い書類を調べたんですが、ないですね。それは国会内での修正だったんです。

そこで、くどくなりますけれども、もう一つ整理しますと、要するに服部グループを中心とした旧軍の方々が、国防会議の事務局を俺たちの手で、という気持を持っていて、国防会議の構成そのもの、それから事務局の構成についていろいろと意見を言っていた。全部それを撥ねのけたんです。それは誰がやったかというところ、結局池田（勇人）さんでしょうね。初代の事務局長は広岡（謙二）さん、私らの内務省の大先輩です。この広岡さんは非常に池田さんと親しかったです。私がたまたま、夜、広岡さんのところへ遊びに行った時、「おい、これから池田のところへ行こう」と言うんです。四谷の広岡さんの家のすぐそばで、歩いて十分ぐらいのところですよ。行ったら、池田さんはおられない。ちようど選挙の時でしたかね、忙しい時でした。いきなり茶の間に上がり込むんです。ちようど奥さんがおられました、奥さんは何をやっているかと思ったら、一所懸命選挙区と話しているんです。ああ、なるほどな、政治家の奥さんはこういうものかと思つて、しばらく感心して見ていましたかね。なかなか帰って来ない。「もう帰って来るはずですが、どうぞお上がりください」ということで上がったんですが、なかなか帰って来ない。それで、「しよがない、海原君、帰ろう」ということで帰ったんですけれどもね。それほど広岡さんは池田さんとは親しかった。いつからそうだったかは聞きませんが、広岡さんとは親しかった。いつからそうだったかは聞きませんが、先輩だった。非常に尊敬されていた人ですね。その人を事務局局長に据

えることで収まった。これはやはり池田、広岡のコンビですね。それで、広岡さんが長くやられた。

その後は北村さんがやられた。この方も大先輩です。しかもこの人は、昔の総力戦研究所の研究員でもあったんです。そういうこともあって、なつたんでしょうけれども、この前の速記にありますように、私が、北村さんがいろいろ将来を考えているから、「今の池田さんは駄目だ。この次は佐藤さんだ。佐藤さんにひとつ防衛問題をあなたが教え込みなさい」と言ったら、「わかった」と言つて軽井沢まで行つたんですからね。あまりその甲斐がなかったと思うんですが、そういうことで、二代続いてそういう大物が座つたわけです。三代目が私なんです。

私が行くについては、当時は北村さんが座っているでしょう。北村さんに了解を求めているんです。いかに当時慌てていたか。北村さんが辞めないで私はなれないでしょう。そうしたら北村さんが、俺には辞める理由はないと言つて反発したという話があるんです。これは直接本人に聞いていませんから、本当かどうかわかりませんが、夜遅く、わざわざ官房長官が北村さんのところへ行つて、「ついでにひとつ辞表を出してもらいたい」と言ったら、「どうしておれが辞めないといけないんだ」というやり取りをしたという話がある。それは、事務局の方に私が行ったら、実はこういうことがあったんですよ、という話でした。私が北村さんの後に来るについては、そんなことがあったんです。就いてみると何もできないんですけれども、形だけはいかにも立派なところですから、事務局をどうするかということで旧軍の方々が猛烈な運動をされたわけですね。それに改進黨が乗つたわけですよ。

当時はすべて政党同士の争いなんですよ。政党同士の争いになるとメンツに関係するでしょう。他のこととの、ギブ・アンド・テイクの材料にされちゃうんです。だから結果的に見ると、一体何をやったんだと言われることが多いんですね。

伊藤 でもこの事務局の構成というのは、その先生方のお考えの通りになったわけですね。

海原 でしょうね。行ってみてびっくりしました。運転手三名が入っているんですよ。それで二十名ですから。私は、これはアメリカ式のスタッフだと思った。だから局長の下に各省から参事官、課長クラスが来ているわけですね。その下にまた補佐がいる。全部、物を考えるスタッフだ。ラインは要らない、という考えです。これはシビリアン・コントロールの時に申し上げましたけれども、なかなか日本人は飲み込めないわけです。それこそスタッフだから、物を考えるわけだ。材料は、命令すれば、要求すれば、どこからでも来るじゃないか。そういう考え方なんです。それがこの国防会議事務局にも現れているわけです。

佐道 ちよつと確認したいんですけども、審議の経過については政党と政争の争いだから立ち入らなかつた、関わらなかつたということですが、その国防会議の構成自体については、海原先生に相談とかは全くないんですか。

海原 全くないです。

佐道 じゃあ、もう政争の争いで……。

海原 もちろん防衛庁だから、さすがにそこら辺は増原さんも心得ているわけです。ちゃんと自分たちだけでまとめる。増原さんが相談したのはおそらく林さんと加藤さんでしょうね。それから上村さん。そ

の辺ですね。

伊藤 本場にトップのところをやっているということですか。

海原 ええ。何度も同じことを繰り返しますが、事が政党がらみですから、政治的判断が必要ですね。

佐道 いただいた資料を読むと、政争と政争の争いの他に、旧陸軍関係と旧海軍関係とありますね。

海原 ええ。もちろんあります。旧軍人が入って来たら、どっちが入っているかですよ。当然そうなるでしょう。それでなくても、前にもご紹介したように、今の保安庁の組織は旧陸軍が旧海軍を支配する体制である、ちゃんと書いてあるんですからね、野村大将の名前で。そういう雰囲気ですから、とてもこれは今のような穏やかなジェントルマンのいる時に、ああだこうだと言っても、ご理解にならないでしょうね。

伊藤 海軍は、民間人は入れるべきではないと言っているんですね。

海原 そうなんです。だから、そこでもまたあるわけです。それこそ、旧陸軍だから、旧海軍だからと、すぐ皆さん方は分類をされるようですけれども、必ずしもそうではないということですね。旧陸軍の中にもいろいろあるわけです。例えば辰巳さんのような人もいます、それから服部さんのところにいく人とか、反服部とか有末とか。とにかく旧統制派、旧皇道派が残っているわけです。遺恨十年ということもあるでしょう。あの時、お前は、という。

伊藤 ちようど十年ですね(笑い)。

佐道 その中で、この旧陸軍関係というのは、さつきおっしゃった服部グループが中心だということですね。

海原 ええ、中心ですね。まとまって物を言っている人。そういう人

は、事実、アメリカの方と接触がありますから。

佐道 旧海軍関係で、それには反対だというのは？

海原 「Y委員会」ですね。

佐道 それにつながる人たち、ということですね。

伊藤 どうせ入っても、また陸軍がやる、ということですよ。

海原 そうです。当然そうなります。数から言ったらつてね。まあ、いろいろの思惑があったことは間違いないです。いろいろの思惑が、お互いにお互いを消し合ったんですね。

伊藤 良かったですね。

海原 どうせ、これは放っておいても潰れると思った、本当の話。だから下手にその中に入ってああたこうだと言つても、それこそとんでもないとばかりを受けるし、思いもかけない手傷を負う。黙って見ておれ、ということですよ。そんなものは絶対にまともりっこない、と私は言ったんです。そんな状況でしたね。

伊藤 わかりました。国防会議事務局ができたのは昭和三十一年ですか。三十二年ですか。要するに三十年には流れるわけですね。

海原 まだ、まともらないわけでしょう。ようやく打ち合せができたのが二十九年の三党協議ですからね。それでまだこたこたするわけですからね。他の問題も関連して出てくるということですよ。ですからその辺の過程は、私もし国防会議事務局にいたら整理しておくんですけども、ちよつと聞いてみたら、昔の書類は誰ももう持っていないですね。こちらは、そんなことに関係したら、かえつてとばかりで大変なことになると思いましたから、黙っていた。そうしたら最後は、民間人を数人を入れるということまで決まって法案ができたんですが、その法案は確か衆議院の段階で、議員修正で全部いまのようになった

んですね。だから、これの前の案があるはずなんです。ないかと思つて調べてみましたが、ありませんでした。

伊藤 まあ、国会の議事録を見れば出てくるでしょう。国防会議法案がいつべん流産した後ですね。

海原 その流産する経過も調べたら面白いと思うんですね。どういうやり取りがあつたのか、経緯があつたのか。

伊藤 その辺はいかがですか。

海原 私ら関係ないです。余計なことに口出しをして、何かプラスになるならそれはいい。一所懸命そのときき使つておいて、後になると悪口を言われるのがオチですから、もうそういうのには一切関わりなし。ご苦労さんと帰してくればいいけれど、お前は帰さんというのでは困るし（笑い）。

伊藤 そこに防衛閣僚懇談会という問題があるんですが。

海原 これは治安関係閣僚懇談会を真似たんですね。警察の公安関係の閣僚懇談会があるでしょう。あれを真似したんですね。だから一応そういう閣僚懇談会をやる。これはお茶を濁すという程度です。

伊藤 やはりそういうものですか（笑い）。

海原 そういうものです。ずるいものですよ。一口に言つと、私がいろいろとお付き合いをした政治家の体質というのはそうですね。偉そうなことをおっしゃるけれども。

それこそ、前に橋本首相が「火だるまになつて」と言いましたね。彼はならないでしょう。私は、ある新聞に書いたんです。「自分が火だるまになつてどうするんだ。内閣総理大臣が焼身自殺されたら困る」と書いた。ああいうことを言つと、もてるんですね。困つた国ですけれどもね。こちらはそういうのを見て、馬鹿な真似はしてはいけ

ないと思つていたんです。

伊藤 では、次にいきます。

海原 その前に省の問題は出ませんでしたか、この間ちよつと言つたでしょう。

伊藤 この間、省のお話はだいぶ伺いましたね。

海原 あれについて、その原案はないんですけれども、その決定の案文です「資料を示す」。

伊藤 これは自由党ですか。

海原 そうです。

伊藤 政策審議会と総務会ですね。

海原 そういうことです。今で言えば自民党ですね。ちゃんとあるんです。それで、今日は……。

平均七カ月で替わる長官たち

伊藤 まず、長官の印象の話です。

海原 それで、そのために持つて来たんですけれども、新聞の切り抜きみたいなものを。これをちよつと見ていただければわかりますように、当時の新聞の重要な事項を切り抜いているんですが、名前が出てくる人と出ていない人がある。誰が活躍したかということになると、私一人の好みで言うといけませんからね。

そこでまず申し上げたいことは、大臣になられて、一般に在任何カ

月と言われますが、いつ「大臣に」なるかが問題なんです。たいてい、「内閣」改造は十二月にありますね。そうすると予算は、もうほぼ各省で大蔵省とも折衝が済んでいるんです。八月初めに出して、何回もやっているでしょう。いつも大蔵省とやるんですけれども、これは大臣折衝まで残す、次官折衝まで残す、これはもう局長レベルで決めよう、となるわけですからね。それはもう芝居の型ですよ。ところが、たいてい大臣が就任するのは十二月でしょう。その時になって何ができるかです。これは一般の方はあまりお気づきにならない点なんです。第一に、すでに予算の骨格は固まっている。

第二に、着任する大臣が何も知らないんですね。まず用語から説明しなければいけないということは、この前申し上げましたね。「歳出と国庫債務の国債」と申し上げましたね。ほとんどあれですよ。だから有名な例では「追加予算」のことを「オイカヨサン」と読んだという人がいる。知らん顔で読むんです。それも知らんかと言うと、それも知らん。そういう人が大臣になるわけですから。

これに対してどうするか。防衛庁の場合はご進講しなければいけない。みんな言葉を知らない。陸・海・空の自衛隊を知らない。英語が入るでしょう。それは内局の次官だけでは駄目なんです。各幕僚長からもご説明があるでしょう。そういうことで、就任されてからしばらくは儀式ばかりです。それから勉強、だつてわからないですからね。それこそ昨日まで勉強していれば別ですよ。勉強していないんですからね。しかも軍の体験がない人が多い。せめて陸軍でも海軍でも行つていれば話が進みますけれども、今までそういうことに全然関係ない人は、述語がわからないですよ。そこで、そういう大臣にご進講するところが大変なんです。しかも、すぐ国会でしょう。国会で失言した

ら大変でしょう。そこで私らは大臣答弁を用意するのが大変な仕事でした。

ある大臣さんは非常に真面目な方でした。前にも話しましたが、国会の答弁要旨ですね。私が呼ばれて、「すまないけれども、君、四通作ってくれ」と言う。四通って、複写するでなしに、どうするんですかと聞いたんです。「どうなさいます、大臣」と。そうしたら「いや、一通は僕が持つ。一通は秘書官に渡す。一通は家に置いておく。一通は車の中に置いておく。それで勉強する」と言うんです。だから、真面目なんです。どう答弁するか。要するに、セリフをどう言うかということ勉強するのに、なった人はもうほとんど全精力を費やすんですよ。それが実態ですよ。だから、どれがいいとか悪いかということを判断する余裕なんかゼロです。しかも平均年月は九カ月と言いますけれども、それは平均した年月が九カ月で、ほとんどの人はそう長くいませんからね。私はずっとお付き合いをした方々、直接お仕えた大臣は、平均七カ月程度です。

伊藤 でも、十二月だと翌年度の概算要求ぐらまではやっていますよね。

海原 そこまで行っておりません。だいたい概算要求の前に、もう替わっちゃうんですよ。三月とか六月とかに。「その資料を」持って来れば良かったですね。そういうこともあるので、おなりになる大臣の経歴の問題ですね。それから、どの程度知っておられるかということの認識の問題等がありますから、各省大臣のようにはいかないんですね。それから、あっちこっちの訪問があるでしょう。米軍に対する儀礼訪問、それから初度巡視と言って、陸・海・空の部隊をちよっと見て回るとか、大変なんです。

伊藤 結構多忙なわけですね。

海原 しかも頭が固いでしょう。難しいですよ、お付き合いするのが。一番いい例は、先ほど申し上げたように四通、想定質問と答弁の答案とを書いて渡したんです。それでも、いざとなるとどこかに行っちゃうんですね。どっちのポケットに入れたか忘れちゃう。

その代表的な例。これは引用しても差し支えない。亡くなった赤城（宗徳）さんです。私は赤城さんにずいぶんいろいろ親しく指導していただきましたからね。赤城さんはちゃんとタイプで打つてある答案用紙を、飛ばして読んじゃったんです。それで、ひと通り終わった後で注意されて、「ただ今、私は一ページ飛ばして読みました」と言った（笑い）。

伊藤 正直ですね。

海原 それで、みんな笑って拍手で許してくれる。だから人柄が大事ですね。

伊藤 やはりそういうものだと、みんなわかっているわけですね。議員さんたちも。

海原 そうなんです。この前申し上げなかつたですか。私が増田さんが大臣になった時に石橋（政嗣）さんのところに頼みに行った話。

増田甲子七さんは内務省の大先輩ですが、この人が「防衛庁長官に」なった時に増田さんの私設秘書がやって来ました。当時私は官房長ですが、「官房長、今度うちのオヤジがお宅の大臣になったけれども、増田さんというのは非常に難しい人だ。自分がいろいろなことを知っていると思ってるから、なかなか難しいけれども、よろしく願います」と言うんですね。今でも英語で『タイムズ』を読んでいると分りますよ。後の話になりますが、なるほどと思いましたが、予算折

衝の時に、「予算は俺と総理の談判でもって、防衛費はいくらという大枠を取ってくる。だから下の者が行って大蔵省の主計官補佐などに説明するのはいかん。一切行っちゃいかん。まずは俺が総理と話をし、予算の大枠を決める。それから行け」と言っんです。びしゃっと、誰も大蔵省に行っちゃいかんと言っんです。二、三日してから困っちゃうんです。大蔵省の方もなぜ来ないんだと言っんですね。しかしそう言われたから、次官命令で一切行っちゃいかんです。そうしたら次官は三輪（良雄）さんでしたが、私が三輪さんに呼ばれました。警察の先輩、私が警察で親しかつたですからね。「どうも、大蔵省に説明に行っちゃいかんということ、みんな困っている。君、何とか増田長官に、せめて説明だけでもさせてくれと。何を取る取らんということとは全部言わないで大臣に任せますが、差し当り用意した案の内容の説明だけはやらせてくれ、と話に行ってくれ」と言う。私が「次官、行つてらっしゃい」と言つたら、「いや、お前が行け」と言う。それで私は増田さんの神宮前のお宅へ伺つたですよ。

伊藤 それはどういわけなんですか。次官でなくて官房長が行くというのは。

海原 それは、三輪さんというのは警察から来ましたから、いろいろな話をあまり知らないんです。私は三輪さんのことを「兄貴だ、兄貴だ」と言っていましたからね。だから彼にしてみれば、自分があまり知らないで、いろいろ質問されたら困るからというので、「海原君、頼む」といわけです。

それで私が増田大臣の自宅へ行つたんです。「いや、お願いがありますよ」「何だ」「大臣のご命令で、誰も大蔵省に行つてはいかんとということなので行つておりません。しかし、それでは実際困るんです。

どれを下ろすとか下ろさないとか、その取捨選択については大臣のご指示をお願いします。取り敢えず用意した案はこういうことだ、このためにどのくらいの金がかかるかと、ということまで下の方で小さい詰めをやらせてください」と言つたんです。しばらく考えてから、「うん、それならいい。しかし何をやるか決めておいて、それを大蔵省から言われてやめる、なんていうことをしてはいかん。まず大蔵省からどれだけの予算をもらうということを決めてから、後で防衛庁が自主的にやれ」と言う。理屈はそうですよ。

伊藤 それは総額で取ってくる、という意味ですか。

海原 それがよくわからないですよ（笑い）。だから悲しい辛さがあるんです。「わかつた。説明に行くのはよろしい」。それでいいんですよ。「よろしい」という言葉ももらったんですから（笑い）。それから皆が説明に行つた。そういうことがあるんです。たまたま例に増田さんを出しましたが、私は増田さんが来たら大変だなと思つたんです。私設秘書から、非常に理屈っぽくて議論が好きだから、あなた方は迷惑すると思うと言われたんです。それで私は考えまして、社会党の石橋さんのところへ行つたんです。

伊藤 それは官房長になられてからですね。

海原 そうです。

伊藤 その頃は政治的にいろいろと動いておられたんですね（笑い）。

海原 いま関連して申し上げているんですが、石橋さんに「今日はお願いがあつて来た」「何だ」と言うから、「実は今度来た大臣、あの人は党内では『理屈こね七』と言われていろいろ理屈が好きなんだ。そういう人が来た。あなたが国会で質問したら、とんでもない答弁をするかも知れない。それに対して『二の矢』は勘弁してくれ。今から

ご進講しても、そういう自信満々の大臣にはとても了解していただけないと思う。一所懸命努力はするけれども、国会の委員会で石橋さんが質問して、それに対して増田さんが変な答弁をしたと思っても、追及は勘弁してくれ。「二の矢」は私たちが引き受けるからお願いしまし」と言っただけです。そうしたら石橋さんも「わかった」と言う。あの人もよくわかるんです。私は社会党の勝間田（清一）とか石橋とかいろいろな人に頼みに行きましましたからね。

伊藤 それは前からの話ですか。

海原 そうです。私は『朝雲新聞』に書きましたけれどもね。私は実は社会党の先生方には昔から接触していまして、仲が良かったんです。ご存知ないですか。

伊藤 そんな左翼系だとは知りませんでした。

海原 社会党に行つていふん抗議もしましたしね。だから、私は歌舞伎の世界だと言っているんです、国会は。もうやり取りは決まっているんだ。答えは決まっているんだから、上手にやりましようと言っていたんです。それもあつて頼みに行ったらオーケーになったんですね。そんなこともあるんです。それで、その通りやつてくれました。だから石橋さんが質問して、増田さんがとんちんかんな答弁をしても、「二の矢」は継がないで、勘弁してくれた。そしておかしいと思つたら、「事務的なことになるから、ひとつ政府委員に聞く」と言つて、こつちに聞いてくださる。そういうことがあるんです。

ところが、私が石橋さんのところへ行つた、という情報がちゃんと大臣のところへ入っているんです。どういうことを頼み込んだとか、何をしゃべったかは知らないですよ。それはおそらく部内でしょう。私は石橋さんに会いに行くのに、一応国会の政府委員室に三人ばかり

いますから、その人を使って、都合を聞くでしょう。これは官房総務課の所属ですが、それで、そのことをおそらく聞かれて答えたんでしょうね。

大臣が呼びだと言われ、行きますと、「海原君、君、きのう石橋のところへ行つたか」と言う。「はい、行きました」と言った。「何しに行つたんだ」と言う。「何しに行つたと言つたつて、国会が始まるから、官房長は前もつて儀礼的にお伺いして、よろしく、お手柔らかにお願いしますんです。これは慣例にもなっていますし、私は必要だと思ひます」と言つたんです。そうしたら、渋い顔をしていましたけれどもね。「わかった。これから君が社会党に行く時には前もつて俺に連絡しろ。俺の許可を求めてから行け」と言う。これが増田さんですよ。「はい、そういたします」と言いました。

いろいろな大臣さんがいるんですよ。だから、いろいろな大臣さんがいるということ、まずご認識いただきたい。こういう人は結構多忙なんです。勉強することでも多忙だし、あちこちの挨拶回りでも多忙ですね。だから着任してもすぐには使い物にはなりませんよ。それですぐ国会でしょう。出られるでしょう。だから国会答弁で、多くの問題をわかつていただくのも大変なんです。

伊藤 大臣は議員でもあるわけだから、選挙区の問題もあるでしょうね。

海原 ありますよ。それはいっぱいある。わが代表が大臣になつたというところで、それは大変ですからね。当然選挙区から陳情が来ますし、陳情が来たら、会つてやつてくれと言われますしね。それからこういうことはどうなんだ、ああなんだということですね。だから、大臣になられる方が多忙であることは間違いない。したがって、物事をちゃ

んと理解して適正な判断を下すような知識を身につけられるまでには時間がかかりますね。それがあるといふことを是非ご認識いただきたい。そこで平均九カ月でしよう、「大臣に」なつて辞めるまでが。その期間を考えますと、無理です。赤城さんのように「すみません、一ページ飛ばして読みました」で、笑つて勘弁してもらえ人がいれば大丈夫だということですね。

一番不可思議の代表が久保田さんでしょうね。この前もちよつと申しました。福田さんの時になつたわけですけども、答弁できないんですから。やはりそれでは駄目だということで、三カ月で交替されましたかな。

伊藤 答弁できないというのは、答弁資料があつてもですか。

海原 わからないんです。お年をおとりですからね。七十いくつですから。

河野 資料を作られる時は、それで一応レクチャーをされるわけですか。

海原 もちろんそうですよ。

河野 レクチャーしてもわからないんですか。

海原 いざとなつたらね。委員室へ行つて、質問があつてワーツとなつたら、もうそれはわからないです、意味が。特殊な雰囲気ですからね。それは皆さん方が一度あそこへ立てばわかるでしょう。何度も同じことを言いますが、歌舞伎の舞台ですね。舞台に立つて、照明が当たるのです。その照明だけで、もうびつくりしちゃう。

伊藤 証人喚問で喚ばれた人なんてそんなんでしょうね。

海原 そうです。その証人喚問のことで私の意見を申し上げますと、私は、証人喚問で真実を調べ出すのは無理だと言ふんです。私は証人と参考

人と両方行きましたからね。証人で来いと言ふから、その時私は「書類を持って行く」と言つたら、事務局が「駄目だ」と言ふんです。「ちよつと待て。だつて質問する方はいっぱい書類を用意して、その書類に基づいてああたこうだと言ふ。答える証人の方も事実に基づいて言わないといけない。間違つたら偽証罪になる。だが事実に基づいてと言つても、昔のことだから、全部日記とかいろいろあるんだから、書類を持って行つてはいけないか」「いけません」「何で決まってるんだ」「慣習です」。それが衆議院、参議院です。

待機している部屋があるんです。そこまでは持つて来ていいと言ふんです。そこへ置いておく。いちいちそこへ取りに行きますか。だから、こんなことで私は絶対に真実はわからないと思う。証人はどうするかという、必ず「記憶にない」と言ふ。そういうことなら、それで終わりですからね。間違つたことを言えば偽証罪になる。間違つたことを言つてはいけない。さあどうだ、となつたら、「忘れましたが」、**「忘れませんでした」**ではおかしいから「記憶にない」となるわけです。それしかありませんよ。

小佐野君の場合、全部「記憶にない」と言つたのはそれですね。そういう仕組みになつていふんです。質問する方はいっぱい書類を持って来てるんですよ。あれはわざと脅すために書類を積み上げてくるんです。それに向かつて、立つて答弁する証人、参考人は何も持つて来ちゃいけないと言ふんですから。国会の事務局というのはおかしなところですね。「何で決まってるんだ」と聞いたら、「これは慣習であります」と言ふ。そういうところなんです。だから一般の人が「記憶にございません」と言ふのは、当たり前ですよ。それしか答えようがないですよ。余計なことになりましたが、これもご参考までに申し上げ

げておきます。

伊藤 まして大臣だって、自分が焦点になってワーツと質問された時に、落ち着いて答弁するなんていう具合にはいかないでしょうね。百戦錬磨の人なら別かもしれませんが。

海原 そうです。赤城さんみたいな人だったら、「すみません、一ページ、二ページ飛ばしました。ワハハハ」で済むんですがね。なかなかそういう度胸のある政治家は来ませんね。凶らずも大臣になる人が多いわけですから。

伊藤 この前、砂田（重政）さんの印象をお話になりましたが、杉原（荒太）さんはいかがですか。

海原 杉原さんについては、外交問題で活躍された、と書いてあるでしょう。これはどういふことか私にはわからないんですよ。外交というのは知っています。活躍と書いてある。鳩山内閣を支えて活躍したと書いてあるでしょう。

伊藤 あれは日ソ国交回復の問題ですね。

海原 そっちの問題でしょう。防衛庁関係じゃないでしょう。ですから防衛庁は全然関係ないんです。もうそっちにかかりつきりです。

伊藤 そういう意味ですか。

海原 しかも期間が四カ月から五カ月じゃないですか。

佐道 短いです。三カ月からいすね。

海原 三カ月ですか。ですから、先ほど言いましたように、まず防衛庁長官というのは、防衛庁長官の椅子に座ってもらうまでの間にいろいろなことがあるということを知っていただいて、その短い間に、とても防衛問題について何かをする暇はないんです。

伊藤 まだ、勉強が終わらないうちですから（笑い）。

海原 終わらないです。わからないうちに替わっちゃったですからね（笑い）。それは日ソ国交回復の問題をおやりになったことは知っていますけれども、おそらくそれにかかりつきりになっていましたね。だって防衛庁のことはやるのが何もないんですもの。やってみても、そんなもの何の役にも立たないと思われたかも知れません。とにかくそっちが鳩山内閣にとっても大問題だということであるのなら、それだけをおやりになるのは当然でしょうね。とても、わが防衛庁に関することについて何かをしたとかという印象は全然ないですよ。

伊藤 戦前だと、政党の党人として活躍する人が、よく通信大臣とか鉄道大臣とか、とにかく任せておけばいいところの大臣になりましたね。だけど、防衛庁長官というのはそういうポストではないはずでしょう。

海原 ないですね。だって、ちようどつくっている最中ですからね。後でまた出てきますけれども、国産、国産というのが一方にあるわけです。それを捌かないといかん。アメリカから物はもらわないといかん、金はもらわないといかん、国会からもOKをもらわないといかん、そういうことですから、うまみはないですね。

伊藤 ああ、うまみがないんですか。苦労は多いけれど。

海原 そういうことです。骨折り損のくたびれもうけという言葉がありますけれどもね。いささかそういう面があると言ってもいいでしょうね。

伊藤 防衛庁長官になるのはあまり嬉しくないということですか。そうでないでしょう。

海原 これは非常に難しいんですけども、大臣ならどこでもいいという人もいますよ。その代表が上林山（栄吉）さんですね。あ

の「上林山元帥お国入り」、私はそれで苦勞したんですから。あれは一本釣りで内閣へ入ったんです。あの人のとっては大変ご満足でしようけれども、他の人のとっては面倒なことだな、ということですね。

それから事前に興味を持っていた人は松野（頼三）さんですね。これはたまたま三矢小委員会が委員長をやつて、その後で防衛庁長官になるわけです。その後始末があるからという配慮もあるんでしょうが、俺がやつてやる、ということでも松野さんは話を聞いている間にいろいろと興味を持ったんでしょうね。

そこでどういふことがあつたかと言つと、まず大臣が来られますね。そうすると先ほどちよつと申しましたけれども、陸・海・空のそれぞれの幕僚長が説明申し上げる。そのご説明、ご進講がまだ済まないうちです。たまたま、幹部と大臣との懇親会をやつてもらつたんです。そうしたら、その席でまた言う方も言う方なんですけれども、「空」の部長、将ですが、「松野新長官にお願いがあります。ひとつ今度長官におなりになられたわけだから、（飛行機の名前を言ひまして）この件が懸案になつておりますから、よろしくお願ひします」と言つたんです。その「よろしくお願ひします」ということの意味はわかりませんよ。いろいろな意味がありますけれども。それに対して松野さんがどう答えたか。「ああ、あれは伊藤忠だろ、駄目だよ」と言つちやつたんですよ。ということとは、事前にいろいろ教えられて来たということなんです。そういう人もいる。だから、ここは難しいところなんです。全然何も知らないで来るか、それとも予め興味と関心を持つて、何をどうしようと思つて来るかどちらかですね。松野さんはそういう意味では大変個人的な興味を持つて乗り込んで来た人ですね。

「国産化率」の実態

伊藤 まだ、この段階では防衛族のようなものはないですね。

海原 防衛族というのはありません。

伊藤 今でもですか。

海原 今でもありませんね。弱いだけ、烏合の衆ですよ。これもこの前申し上げたでしょう。国防部会の連中が、総理総裁になる人に、予めその人の防衛についての考え方を聞こうではないかと言つたら、みんなが賛成と言つた。その程度ですよ。防衛族と言つて新聞が書くほど強い力を持ったものはないですね。

伊藤 それほど勉強している人もいないですか。

海原 いないですね。それは興味がないんです。それほどうまみがないですね。何かありそうな気がしますが、例えばポカッとどこかに線路を敷くのと違ふんですから。線路なら細かく、その線路は何で造つているんだ、どこがどうなつてゐるんだ、ということになりますからね。

飛行機にしたつて日本では、今日お話しするつもりでしたが、国産、国産と言つても組み立てだけです。それを知らない人が多い。その点については、私は新聞が悪いと思うんです。「国産化率」という報道がありましたね。これをやめると言うんです。おそらく伊藤先生もご存知ないと思いますよ。F104の国産化率は六〇%であると、仮にそういうことを言つたとします。これをどう解釈されますか。F1

04、二百機の国産化率は六〇%だと言う。どうお考えになりますか。これが、「国産」という防衛生産の内容を示すものだと思うんです。六割は国産にしたというのは、どういうことだと思われませんか。

河野 部品のことですか。

海原 その部品の六割を日本が造ったと言うんですか。

伊藤 まあ、普通はそう考えますよ、そう言われれば。

海原 これはお金なんです。六割は円で払ったということです。後はドルだということです。四割はドル、六割が円。それを通産省が国産化率と言っちゃったんですね。それを受け継いで、もう装備局が国産化率というのをそういうふうにしちゃったんです。私はこれはやめろと言ったんです。誤解を生ずるし、それはまずい言葉だから。例えば、F104、二百機を造るのに幾らかかった。それを円で払った割合は六割だ。したがって国産化率は六割である。こういう言い方をしているけれども、これは誤解を生ずると同時に危険である。だからやめろと言っても、どうしてもやめませんでしたね。もう、いっぺんそう言っちゃったら、通産省がからんでいますから、通産省の顔になるんですね。しかし、ご覧になった皆さん方は、六割は国産したと思うでしょう。そうすると、おっしゃったように部品の六割は日本で造った。そんなことできませんよ。これがまかり通っている。今でもそうでしょう。

河野 その円で支払った先は日本企業ということですか。

海原 いやいや、それは両方合わせて。日本もアメリカもありますから。ドルで払ったものは四割。円で払ったものは六割ということで、それが国産化率になる。

河野 その円で払った方にもドルで払った方にも、それぞれ外国メー

カーと日本メーカーが入っているんですね。

海原 もちろん入っている。両方入っている。日本の会社には能力がないんです。

河野 日本のメーカーには払わないわけですか。

海原 払っているわけですけども。

河野 払っているけれども、非常に少ないということですか。

海原 そういうことです、事実上は。

河野 非常に少ないということは、六割、四割とかいうのではなくて、例えば〇・何%ぐらいとか。

海原 それはわからないです。物によって全然違う。

河野 物によって違うんですか。

海原 違いますよ。それから間に商社が入っていますから。いろいろな契約の形態が違ってくるでしょう。だから一概に言えないんです。とにかく、いま言ったように六割が国産化率だということを聞いたら、みんな、六割は国産した、と思うでしょう。ここにとんでもない間違いがあるんです。

佐道 ライセンス生産という問題がありますよね。向こうからライセンスを受けて日本の工場で造るといふ。

海原 もちろんそうです。それに対して、どれだけ金を払うかはまた別問題です。それはそれぞれケース・バイ・ケースで決まりますからね。

河野 そのライセンス料を円で払うか、ドルで払うか。

海原 それもあります。それからどれだけを払うかという問題もあります。これは非常に込み入っているんですよ。それはそれぞれの物についての契約の内容で違ってきます。

河野 さきほど、この時期、課長時代の先生は、国産にするかどうかということを中心にお仕事をなさったとおっしゃいましたね。その国産というのは、今のようなお仕事をやっていたのですか。

海原 そうです。それは防衛局長の頃、防衛課長の時もそうですけれども。「国産、国産」と言いたがるんです、日本人は。政治家でも業界でも。結局はできないんです。それをやかましく言ったのは中曽根さんですけれどもね。中曽根大臣の頃から、しきりに国産と言っていましたけれども。やろうと思ってもね。

例えば飛行機の国産と言います。対潜哨戒機の国産ということをしきりに言いました。「新明和」が中心になりましたね。「川崎」も中心になりました。やっただんですが、それは私たちの当時の言葉ではドンガラ、容器を造ることはできる。機体ですね。その中に積み込む必要な機器は、全部がアメリカ製です。日本には能力がないんです。そのアメリカ製の機器は、今おっしゃったロイヤリティを払って造る物と、アメリカからできた物を買ってくる場合と、いろいろあるわけです。だから、例えばP2Xの国産と言っても、いろいろな形があり得るわけです。それと、それに時間がかかるんです。

伊藤 ブラック・ボックスの物もあるわけですか。

海原 あります、もちろん。大事なところは全部ブラック・ボックスです。ブラック・ボックスは開けてみてもわからない。できませんしね。それから信頼性の問題もありますしね。ブラック・ボックスが結構多いんです。それがその頃の国産の非常に難しい問題でした。

伊藤 それは今でもそうですか。

海原 多分そうですね。現状を私はつかんできませんから、知りませんが、その後変わったということは聞きませんから。しかし、物によ

ってはその後日本で実際に国産で造って、現にきている物はありますね。精度を別にすれば、例えばアメリカ製の兵器「の精度」を一〇〇として、日本製の兵器が六〇「の精度だ」として、それで我慢すれば国産はできるでしょうね。

それで一番いい例は、後のことになるんですが、国防会議で中曽根通産大臣もいましたが、田中角栄総理がしきりに国産とおっしゃいますから、今のようなお仕事を私は話したんです。「一つの例を言いますよ。航空自衛隊の戦闘機の使うミサイル、サイドワインダー、これと全く同じ物を日本で国産にしようと思つて、会社がやった。結果がアメリカから買う六倍の値段になった。しかも性能は劣る。性能は六割程度でしかない。それしかできないんです。しかし、こういう物を国産にしますか」と私は言ったんです、国防会議懇談会で。すると、田中さんは、「ああ、それは駄目だ」となる。これが多いんですよ。国産、国産という言葉に踊って、何でも日本で造ろうと思うのは大間違い。それは当時の『文藝春秋』に「日本は技術の三流国だ」という論文が出ましたよ。そこに書いてあることが全てに当てはまるんです。そういうことを知らないで「国産にしろ」とおっしゃる方が多いんです。これは困ったですね。

佐道 話は最近のことになるんですけども、現在も自衛隊の装備は非常に高い。例えば最新式の90式戦車など、同程度のアメリカのレベルの戦車に比べると倍近くの値段ですが、これは国産にしているからですか。

海原 それは適切な解説が出ないからであり、日本の新聞も悪いです。私が現職の時に言いましたけれども、当時は、今の戦車の三代前の戦車ですか、それを造った。新聞がこれは世界で一流だと言いますから、

とんでもない、世界の三流だと私は言ったんです。問題は戦車だと、日本人は単純に片づけるけれども、私がドイツに行つて戦車工場で聞いた時に言われたんです。いっぱい模型がありましたので、「一体どの戦車がいいんだ」と聞いたら、「あなたの質問は間違っている」と言う。「僕のどこが間違っているか」と聞いたら、「戦車は、それぞれどう使うかによつて違ってくるんだ。ヨーロッパ大陸で機動戦をやる場合の戦車と、どこかを防衛するための防御戦用に使う戦車と、山のような坂道が多いところで動く戦車と、みんな違うんだ。だからどういう状況の下で、どういうふうに使つかが決まらないことには、それに対していいとか悪いとか言えない」と言いましたね。その通りだと思う。ところが日本ではそういうのを一切抜きにして、どこの戦車がいいかとなるわけです。だからそういう意味で言えば、例えばイギリスで造る戦車、スイスで造る戦車、ドイツの戦車、アメリカの戦車、全部違うんです。

これはまた後に影響しますが、いわゆる戦闘機の国産問題の時に、ちようど私はアメリカに参事官でおりました。今日の話にも出てくると思いますが、たまたま東京でいろいろごたごたしていることがわかりましたから、私が空軍省の参謀次長のところへ聞きに行つたんです。この人は非常にスマートでいい人ですが、「ミスター海原、一体、どういう状況の下で、何をやるために、その飛行機を使うかが問題だ。（これは私が後で言い直したんですが）『弁慶の七つ道具』みたいなものはない」と言うんですよ。高高度戦闘機、邀撃戦闘機、中高度のあらゆる目標に対して格闘戦闘をやるもの、低高度の爆撃をやるもの、全部違う、と言うんです。その全部を一緒にしたようなものを欲しがるのが日本人だ。しかも、その日本人の欲しがる一番大事なものはス

ピードだ、と言うんです。その通りなんです。マッハ二、音速の二倍のものが、当時の東京での目標みたいになっていましたからね。音速の二倍と言えば東京・大阪間を十分です。東京・大阪間を十分で飛ぶようなスピードなんて、どこで飛ぶかが問題になるけれども、すぐには出ないんですよ。それもわからない人が多いんです。あの一千億円の「空中戦」が混乱した原因はそこにあるんです。

「全天候戦闘機」という言葉が、当時ずいぶんよく使われました。これでどうお考えになりますか、「全天候」というものを。この三つの文字の意味が専門家にわかつていないんです。全天候、オールウエザー。この全天候という言葉が、当時の日本のマスコミを風靡し、まかり通りましたが、これは天気が悪い時に飛べる、嵐の時でも、どの程度までの風なら飛べるかということ。それから、雲の中、太陽を背にした目標に対しても戦闘行動がとれるということ。その二つの意味があるんです。サイドワインダーというミサイルは赤外線を追尾しますから、目標が雲の中にある、あるいは太陽を背負っている場合には撃てないんです。ミサイルがそっちへ行っちゃう。だから赤外線で見えなくて使用不可能。そういう場合はレーザー照準のミサイルでないと駄目なんです。全然方式が違います。ところが、この違いを日本の人は全員わからない。ここにあの悲劇の原因があるんです。

しかも全天候型の戦闘機は要らなかつた。要するに、約一万一千メートルから上空は全然雲がありませんからね。三六五日晴れていますからね。高高度の戦闘機であるならば、全天候型である必要はないんですよ。F104という戦闘機は高高度の邀撃戦闘機ですから、全天候型じゃないです。ところが日本人はそれを全天候型にしようと思つ

たんです。それで、わからない人がその全天候型を造ると言った。それがあの混乱の原因です。また技術者もそれができると思った。できないです。

河野 日本人はおっしゃるのは、例えば「富士重工」とかそういう日本のメーカーですか。

海原 メーカーですよ。「三菱」とか。

河野 メーカーのエンジニアがそう言ったということですか。

海原 そういうことです。だから「全天候」という言葉にだまされちゃったんですね。日本では全天候戦闘機の必要はなかったんです。というのは、加藤さんが防衛局長、私の前任者ですよ。この加藤さんが国会で答弁していますが、「六万フィート、マッハ二で入って来る敵機に対抗する戦闘機」と言っているんですから。そんなもの「全天候」である必要はないです。もう、上ですから。「全天候」というのは、いま言いましたように、一万一千メートルより下ですね。雲のあるところ、それから太陽を背景にした目標、それに対しては全天候型が必要なんです。その場合はサイドワインダーでは駄目なんです。レーダー照準のミサイルを使わなければ駄目なんです。

そこで最後に国会で決まった時には、社会党の議員が念を押します、それではお前たちが造ろうとしている戦闘機の価格はいくらで、しかもレーダー照準のミサイルが搭載できるな、と念を押しています。それに対して防衛庁は「はい、そうです」と答えている。駄目です。できません。そんなものはできるはずがないですよ。

それを私が米空軍省の参謀長に聞きましたら、「もしそれができるのなら、われわれもそれをやる」と言うんですね。「アメリカだって、無駄遣いをする金持ちではないんだ。もし、それができるのなら、わ

れわれはやる。それはできないんだ。高高度戦闘機と中高度の戦闘機とはそれぞれ任務が違うし、性能が違う。だから別の飛行機を持つ。それを組み合わせてウェポンズ・システムとして運用するのが、われわれの考えである。武器体系として、高高度はA、中高度はB、低高度はC、そういうふうに分けて、三種類の飛行機を持つ。それは全部戦闘機と称するけれども、その三種類を持つ。ところが日本人はその三つを一つのXにまとめた。それは、われわれだってそうしたいですよ、ミスター・海原。俺たちだって無駄に金は使いたくない。だからそういうことができるなら、わが米空軍もそうしている。だけど、できないんだ。だから金はかかるけれども、A、B、C、三つのタイプの戦闘機を持つて、それをどう組み合わせるか、それがいわゆるウェポンズ・システム、武器体系ということになる」と言うわけです。それを私は東京に書いて送りましたが、駄目です。わからない。

そういうことです。ちよつと話が逸れましたが、将来に関係がありますので申し上げます。そこで、当時は、みんなわけがわからずに国産、国産と言っていた。

佐道 ちよつと一点だけ確認です。海原先生が田中さんとかの前で、国産をやると値段が急に高くなるぞ、とおっしゃったということですが、そうすると海原先生が国防会議の事務局長の時代は、例えば防衛庁が購入する兵器とかに関しては、諸外国と同じレベルの購入費で買っていたということですか。

海原 そうではないですね。できません。そういうことは不可能です。少し高いですよ。二割か三割高い。

佐道 それでも二割、三割ぐらいのレベルですか。

海原 購入する数量に影響されます。いろいろ後でまた出てくると思

いますので、国産について申しますと、日本でCXという輸送機を造りました。それはYS11の後の飛行機ですね。このYS11を造った時、これは通産省の赤澤（璋一）君が課長でした。その後も、いろいろ活躍しました赤澤君です。そのYS11という飛行機を日本で造ってみた。これが日本の航空機産業の戦後の復興の始まりですが、あれを通産省は各国に売り込もうとするわけです。その時、航空自衛隊が買うかどうかということになる。そうしたら会議では航空自衛隊は反対なんです。あれは駄目だと言う。せっかく造った飛行機ですよ。

航空自衛隊は、あれから隊員が飛び出す、隊員がパラシュートで降りる、そのための入口というか出口というか、開閉口ですが、それが横にあるのは駄目だと言うんです。後ろになければならぬ。たいていそうです。それまで使っていた飛行機は、古い分をもらったC46です。これは横に付いています。それを使っていた。しかし、新しく造るのなら……。今度日本で通産省が造ろうとしているYS11は、やはり前のC46の日本版なんだ。入口が胴体の横に付いている。われわれは後ろに付いている飛行機がいい。こういうことを言ったんです。

そこで私が装備審議会で言ったことは、パラシュートでどう降下するかということを考えれば、出入口が横にあるよりも後ろにある方がいいことはわかり切っている。しかし、それはいま言ってもしょうがない。日本の防衛庁が使わないような飛行機なら外国は買いませんよ。もし私がセールスマンで売り込みをすれば、これは防衛庁もちゃんと使っていますというので、初めて外国は購入するんだから。もし防衛庁や通産省がそのYS11の国産に反対なら別だ。賛成したのだから。それは多少不便はあるだろう。しかし、今までのC46だ

って出入口は横にあるんだから、使えないはずないだろうと言ったんです。そうしたら黙りましたけれどもね。ということで、あれが防衛庁に採用になるんです。それで、また各国にも売れました。

さあ、今度はそれを新しくCXにするわけです。その時に私は、こられた装備審議会と言うんですが、そこで話しました。「将来のあなた方が要求している事柄を実行するためには、いまアメリカにC130があるでしょう、あれがいい」と言っただけです。そうしたら、航空自衛隊の連中はみんなどう言っただけか。「あれは古くて駄目だ。しかし、今度できるやつはこういう特徴がある」と言う。私は「その通りであればいいよ」と言っただけですが、その時どういう宣伝をしていたか。今度国産する新型輸送機CXは不整地（コンクリートの滑走路ではない普通の野原、具体的に言うところの運動場など）からも飛べる。そういうところにも降りられる。そういう特徴を持ったものだ、と言うんですね。さあ、いろいろいいことが書いてあるわけです。そこで、「ずいぶんいいことを書いてあるけれども、こんなものができるのなら、アメリカでも造っているだろう」と言っただけです。そうしたら、「いやアメリカは、われわれが使うような小さい面積のところ、そういうことを考えていないから、今でもあの古いC130を使っているんだ」と言うわけです。私が「アメリカのC130を買え」と言ったら、「駄目だ」と言った。それで新しい輸送機ができた。

できた後で、空幕がどう言っただか。「こんなものではなかったはずだ」と言うんです。駄目なんです。私に会議で説明した、その不整地からの離着陸はやっていけないんです。できないんです。それからまたいろいろな装備がないと使えない。あれは失敗した飛行機です。そしていま航空自衛隊はC130を買ったんです。それは私が三十年前

に買えと言ったものなんです。それは駄目ですと言ったやつを、いま使っている。

こういうことでおわかりになるように国産、国産と言う、その国産の内容が果たして具体的にどんなものかということを引きつと決めておかないと、とんでもない高い、出来損いのものを作ることになるんです。それが日本における国産問題の一番大きな問題点ですね。しかし造る時はみんないいことを言いますよ。その点はこうします、ああしますと言いますよ。

伊藤 向こうはセールスマンですからね。

海原 今までずっと言ってきましたのは、たまたまいろいろと、将来出てくるような問題に関連があるからです。いわゆる「国産」という言葉、たった二つの文字ですが、内容がいろいろなんです。

河野 内局は、かなり早い時期から国産に対して非常に消極的だったということですか。

海原 その場合には、別に内局は関係ないです。私一人ですから、言っているのは。

佐道 海原先生だけですか。

海原 それは装備審議会というのがあるんです、別の組織で。私はその委員の一人ですから。だから、そこでしゃべっているのは防衛局長ではなく、装備審議会の委員としてしゃべっている。そういうことですね。

伊藤 それは防衛局長の時代なんですね。

海原 その前、課長から続いています。

伊藤 課長の時代からですか。

佐道 まわりはみんな国産、国産と言っている時ですね。

海原 それはだつて、政治家がそう言っていますから。

河野 防衛庁の内部ではどうですか。

海原 私が外のことを話していますのは、それが全部中に影響があるということなんです。来ている人には全部そういう人の影響があるんです。だから、いずれまた局長時代になればその話がですが、防衛庁の中でやった会議で、私がどこに座っていたというのがちゃんと伊藤忠の報告書に出るんです。信じられますか。海原が絶えずこういうことを言っていたとかね。この時には海原はこの席に座っていたとか。それは、その会議に出た連中がちゃんと連絡しているんです。だから当時の防衛庁の関係者は、言うなれば各会社の目であり耳であった。各関係会社してみれば、防衛生産というのは非常に魅力がありますからね。それはいったん納めれば親方日の丸でしょう。船にすれば、前払い金がもらえる、途中で金がもらえる、できたらもらえる、心配がない。これほど安全な投資はない。広告料は要らない。そう考えますと、防衛生産をやることは非常にいいんですね。

検討されなかった郷土防衛隊構想

伊藤 そのことに関連しますが、船田さんは後で防衛装備国産化懇談会の会長を続けられますね。

海原 その頃はまだ何を国産するかわからないでしょう。わからないんですね。

伊藤 船田さん自身が、ですね。

海原 わかっています。みんながやろうと言って、祭り上げるわけだけども。

伊藤 これは政治家としての仕事なんですね。

海原 そういうことですね。そこで、今まで申し上げましたことを整理しますと、まず防衛庁長官の顧問団、これについて私は具体的に全く知りません。しかも、それが力があるとは思いません。

第二に、国防会議の構成の問題ですね。これは先ほども申しましたが、旧軍人方の意見というものがいろいろな政党に影響して、それで自由党、改進黨と日本自由党、この三党の折衝になって決まった。それで、具体的に事務局をどうするかになった。局長は広岡さんがなつた。そして運転手を含めて二十名です。たつたの二十名。この構成にはみんなびっくりしたらしいですね。何をやるどころだと。スタッフだということもわかりません。それはちょうど警察予備隊の時に、警察予備隊本部が全部で二百名だと言われてびっくりしたというのと同じことです。国防会議はその一割ですからね。後は各省を使えということですね。広岡さんは池田さんと大変に個人的に親交があった。それから広岡さんの後は北村（隆）さんという私の内務省の大先輩がなつた。そして三代目に私が行つた、ということですね。

そういうことでおわかりになると思いますが、その防衛閣僚懇談会も治安閣僚懇談会と同じで、単なる大臣方の懇談会で、そういうものを作つた、そこで検討します、というだけのものです。

私は砂田さんについては非常に記憶があるけれども、他の人については曖昧なんです。どういうふうに行動されたかということですね。「新聞の見出しを抜粋した本の一九五六年前後の部分のコピーを

示す」。これは各新聞の見出しになつた防衛問題の抜粋なんです。これを見ると、出てくる頻度は、砂田さんが多いんですね。それで船田さんは全部のことを言っておられるんです。一九五六年の直前にありますね。通常国会に国防省設置、郷土防衛隊設置、国防会議構成三法案を出すと。これは船田さんの発言ですね。それは砂田さんの考え方を受けているわけです。だから砂田長官の時に、それが出ているわけです。この左の頁の下から何行目ですか、チェックしてありますが、「防衛庁では砂田構想の一部である郷土防衛隊の設置について……」と書いてあるでしょう。具体的にここまで進んでいません。

それで郷土防衛隊につきましては、もし必要ならば資料を置いて行きますが、これは四案（資料4）で書いています。A、B、C、Dの四つでできているんです。これは内閣と書いてありますから、わかりますね。四つの案を作つた。事務的には、そこまで具体的にないた。しかし、砂田さんがわずか三カ月で替わられましたから。七月三十日に就任して、十一月二十一日に辞めていますから、三カ月と三週間ですね。ですから、砂田さんはいろいろとアイデアをお出しになつた。船田さんは砂田前長官の考え方を引き継ぐと言っていたんですが、結局は何もできなかった。そういうことですから、他の方々についての印象というのを聞かれましたも、ないわけですね。

伊藤 この「三法案を提出の意向」というところで、結局提出しなかつたんですね。

海原 いや、できません。なぜ大臣がこういうことを言つたか、それは知りません。一種の観測気球かも知れませんがね。

特に、防衛省の話になりますと、ここ「一九五五年八月、十月あたりを見出しを示す」にも書いてありますが、この辺からもうすでに

ているということなんです。遠い昔の時から、省になるのは当たり前だと。少なくとも自由党の国防部会では考えていた。法案まで用意した。しかし、何もやれなかった。

伊藤 この「法案を提出の意向」という時には、これは法案はある程度できていたという話ですか。

海原 いや、これは新聞の見出しですから。まだできていません。固まっております。ですから草案ありません。

河野 提出の意向になっているのは鳩山内閣との関係はあるんですか。

海原 ないですね。鳩山さんという人をどうみるかというのは……。

河野 鳩山さんではなくて、鳩山民主党内閣というものができたということ。吉田の時代が終わって鳩山になったということですね。鳩山個人ではなくて。

海原 いや、それも含みましてね、鳩山内閣になったからどう、ということはないですね。全くないです。それはあの頃の政治家で、本当にこういう大きなことをやる人は吉田さんの後にはしばらく出ないわけですね。しかし私たちは、砂田さんがいろいろと真面目に物を考えておられるから、やってくれと思いたかった。しかし、なぜ砂田構想は実らなかったかと言うと、彼は短命だったんですね。三、四カ月では何もできませんよ。

伊藤 三、四カ月の間によくやったということでしょう。

海原 そういうことです。だから印象に残っているわけです。私は少しオーバーな言い方をしますと、砂田さんのおっしゃったことが正しいと思う。その後を継がなければいけないということで、郷土防衛隊、郷土防衛隊と言っているわけです。だから、私が考え出したものではないです。それに砂田さんには、よく言えば、一種の国土的風

貌がありましたからね。言っていることは正しいし、私もそれは必要だと思う。なぜあの時、防衛庁が郷土防衛隊に乗ってこなかったか。理由は簡単なんです。「おっしゃることは正しいことだ。しかし、まず自衛隊の育成が先だ」ということです。陸・海・空自衛隊にしてみれば、われわれをどうするかということが先であって、国民をどうこうするなんていうことは自衛隊ができてから後のことになってくれ、というのが当時の一般的風潮でした。だから砂田大臣のおっしゃることは正しい。そうあるべきである。しかし、その前に陸・海・空の自衛隊を立派なものにしなければならぬ。そういうことです。

河野 郷土防衛隊の考え方というものは、アメリカによくあるような、いわゆるミリシアみたいなものなんでしょうか。

海原 ですから、先ほど見ましたように四案も用意したんです。砂田さんのおっしゃっているのはどれか知りませんよ。四案用意したけれども、四案のどこが違うかと言われても私もよくわからない。しかしそれぞれ担当の者に、お前ら考えて、と言ったら四つ案ができた。それから本当なら整理するはずですが、整理しないんです。だからどこくなりますが、陸・海・空の自衛隊をきちんと整備することが先であって、そんな郷土防衛隊みたいなものは必要ではあるが、いまわれわれの取り組むべき命題ではない、というのが当時の防衛庁の考え方ですね。

河野 ちょっとくどいですが、どうしてこれが出てくるかという背景について、「必要ではあるが」というのはどういう意味ですか。

海原 要するに、国を守るということを考えた場合に。

河野 何か具体的な脅威があるということですか。

海原 いえ、脅威は……。そこまでききますと、要するに日本という

のはどこが脅威かということになる。それは特別な質問がありました
が、国会で「仮想敵を言え」と言うんです。私は答弁したんですが、
「仮想敵はありません」と言った。

河野 ないのに、何でもこういうものを……。

海原 どこが来るかわからない。しかし、日本の周囲にいる国はわか
っている。だから防衛というものは、安全保障というものは、最悪の事
態を考えて最善を尽くす。これが基本的な課題である。いま具体的に
中国が怖い、ソ連が怖いじゃないんだ。要するに、最悪の事態になっ
た時に何をするかということを考えておくのが防衛の本義である。そ
ういうことを言った。だから昔、大日本帝国の時代には仮想敵国を決
めていた。米・英・ロシアと。それは公には言っていない。そういう
ものなんだということでは私は答弁しましたがね。だから皆さん方が言
っているような仮想敵国はありません。ましてや日本は外に攻めて行
くだけの力はありません。どこかが攻めて来たら、それに対してどう
抵抗するかという防御的な能力しかあり得ない。

河野 その防御的能力の一環として、予備的にこの郷土防衛隊という
ものを考えたわけですか。

海原 予備的ではないです。私に言わせればそれが主体です。

河野 主体ですか。

海原 ええ。だから私が言っているのは、そこが大事なことなんです
が、歩兵は国民が……ということなんです。昔で言うところ砲兵とか飛行
兵、これは自衛隊。歩兵とか輜重兵は国民。こういうことだということ
を言っているわけです。そういうことなんです。ただ、私以外には
郷土防衛隊のことを言っている人は一人もいませんでした。防衛事務
次官の経験者はいっぱいいますけれども、誰も言わないです。

佐道 この「砂田構想」というか、この時の郷土防衛隊構想が崩れて
しまつて、それ以降おっしゃっているのは海原さんお一人ですか。

海原 崩れたというよりも、それを実現するための具体的な検討がな
いということですね。何度も言いますけれども、今の自衛隊をつくる
ことがまず先決。その背景として日米安保体制がある間は絶対大丈夫
だと言うんです。これはもうその通りなんです。政治家もそうです。
これも同じだと思えますけれども、自民党の各派閥へ行くと、勉強会
があるでしょう。私は行きました。そうしたら「海原君、何とかなる
んだ。今まで大丈夫だったし、これからは大丈夫だよ」と言う。これ
が自民党の各領袖の哲学ですね。だから私は、「今までは何とかなっ
た。しかし、これから先も何とかなるかわかりませんよ。十年前の日
本と今の日本とは立場が違う。アメリカの民意も違う。だから今ま
で何とかなつたからといって、これから先も何とかなる、ではあまり
にも無責任でしょう」と言うと、「いや、君の言うことはわかるけれ
ども、しかし、まあ、大丈夫だよ」と言う（笑い）。

河野 それはいつの話ですか。

海原 これは自民党の各派の勉強会です。

河野 いつの時代ですか。

海原 時代ですか。その頃です。田中さん以下の時です。あの頃全部
各派がいますから、金丸派もあるしね。それこそ具体的にどの派と
言われても、あちこちで勉強会みたいなものをやるでしょうが。来て
話をしてくれと言うから、行って話をする。

河野 では、それはお辞めになった後の話ですか。

海原 まあそうですね、大体ね。しかし、現職で国防会議の時にも行き
ました。その辺は曖昧で、いつどこに行つてやったかと言われてもわ

かりません。しかし、どこへ行っても同じ受け取り方しかしいですね。

伊藤 そうすると、この郷土防衛隊のような構想というのは、この時にそれを防衛庁がある程度具体化すれば、国民の側に受け入れるような雰囲気があったでしょうか。

海原 とは思っていないですね。その時はまだ駄目でしょうね、何度も同じことの繰り返しですが、保安隊員にはお嫁に行かないという女子青年団の決議があつたぐらいですから。

伊藤 その時と今とを考えてみて、やはりその時の方がまだ受け入れられやすかつたということですか。

海原 さあ、それはわかりませんね。

伊藤 そうですか。

海原 ただ、しかし、私はもうずっと同じことを言っていて、「般若心経」を上げているようなもので、ずっと上げ続けているんですけれども、その感覚から言うと、ちつとも変わりませんね。

伊藤 大体同じようなものですか。

海原 ええ。お前の言うことはわかるけれども、何もいま慌ててそんなことを言うことないよ、ですよ。日米安保体制は当然ある。アメリカが日本をいつまでも面倒見るか、なんて言っているけれども、大丈夫だよと言う。これですよ。これは私は日本人の、司馬遼太郎さんの言う「遺伝的体質」で、何とかなるよという楽天的な体質のおかげでしょうね。

伊藤 まあ楽天的でいいこともあるんですけども（笑い）。

海原 だからそれを自覚するのは、政治家が自覚しないといけないでしょう。しかし、その政治家諸君は、この次の選挙で落ちるかどうか

ということだけしかありませんから。それと自分がいつ大臣になれるかということでしょう。今度はまた政府委員を廃止して副大臣にするとか、ゴタゴタ言っているでしょう。何を考えているのかわからないですよね。

佐道 繰り返しになるんですけども、砂田さんがこの郷土防衛隊を着想されたという言い出されたことの背景というか、砂田さんにこういうものがあるよという知恵をつけた人はいませんか。

海原 それはわかりません。全くわかりません。当時、私はそんなことを調べる気もなかつたですからね。いいことをおっしゃるなど、当然のことですけれども。何度も同じことの繰り返しですが、砂田さんというのは非常に期間が短かつたけれども、印象が強いのはそこなんです。船田さんは、前任者の言ったことは全部俺が継承すると言つただけです。あの人は私が「高文」を受けた時の法制局長官ですよ。だから、そういう人でしょう。だから別にあちこち手分けして、自分が努力してどうこうというのはないですね。それは前長官の言つたことは全部正しいから、これを継承してやるというスカツとした人ですね。

佐道 スカツとですか（笑い）。

海原 作新学院の院長先生だから。

佐道 江川（卓・元巨人軍投手）の後援会のね。

伊藤 そのあと何もなしですね。

海原 なしです。そんなことで、自分が汗をかいて非難を受けても何かをしようという人ではないですね。わかる人です。わかる人ではないけれども、じゃあ俺がやろうという人ではないです。と私は見えます。

伊藤 頭のいい人じゃなかつたですか。

海原 それは頭が悪くてわからんような人でも、しかし、わかったら、俺やるという人はいますからね。どっちがいいかということは(笑い)。

佐道 さっきの防衛装備国産化懇談会の会長も政治家のお仕事としてということですね。

海原 そういうことですね。お遊びですね。

佐道 陰に陽に防衛庁に何か言っているとか、そういうことはなかったでしょうか。

海原 ないでしょうね。あの人はそういうことができない人でしょうね。私はできる人だとは思いません。

伊藤 ただ、担がれているだけということですか。

海原 そういうことです。お神輿になるんですね。そういう人ですね、分類すれば。悪いという意味ではないですよ。

伊藤 いい悪いの問題じゃないですね。

海原 どちらかと言えばそういう人だと思う。しかし、よく防衛庁の幹部を集めては「赤坂をどり」に招待してくれましたね。そこで赤坂の「かわさき」との因縁がでてくるわけですね。というのは、船田さんの彼女がどうだこうだとなるわけですからね。それを言うと、話が人間的になるんですけれどもね。どうして「赤坂をどり」に、こんな局長諸君を招待してくれるのかびっくりしたんです。今はもう「赤坂をどり」はなくなりましたね。数年前になくなった。しかし、その頃は盛んでしたよ。三日ぐらいやっていますからね。それに全員招待ですよ。

佐道 長官時代ですか。

海原 ええ。どうして船田さんが「赤坂をどり」かというので、私は興味を持っていた。私はそっち方面に興味があるから。そうしたら「か

わさき」ですよ。そういう点は、ちゃんときちつとやってくれる人でしたね(笑い)。

伊藤 先へ進みますか。

海原 進みますか。杉原さんについて全然私は記憶がないんです。先ほど言いましたけれども、杉原さんは外交の方でやっておられたから、そんな防衛庁関係のことは実際小さいでしょうね。私はあの人はいいと思いますからね。

佐道 国防会議が流産した時に彼が防衛庁長官だったんですよ。それで一応責任をとって辞めようということになったんですけれども。

海原 それはわかりません。そうですね。

佐道 『防衛年鑑』等々によると、そう書いてあります。

海原 それはわかりません。しかし多分そういうことでしょう。なかなかそういう意味ではきちつとした人ですからね。リーダーシップはどうかと言われますから、リーダーシップはあるんでしょうけれども、役人的表現をしますと、それを発揮する時間がなかったということでしょう。

伊藤 なかなかお上手ですね。

海原 「リーダーシップは」あったんだと思いますが、それを発揮する時間がなかった。それ以外にないです。

伊藤 大変勉強になりました。

海原 勉強になったって、伊藤先生にそう言われたのではどうもね。

佐道 答弁はかくあるべしという。

海原 私はもう、そう言われると。辞めてから、国会で言われました、「海原さんはまだ政府委員の癖が直らない」と。私はその通りだと思えました。あれだけ政府委員をやらされたら、役人を辞めたからとい

つても、場所が国会でしよう。なかなか政府委員の癖が直らないというのは当然じゃないかと思えます。

伊藤 政府委員ですけれども、課長時代から政府委員ですか。

海原 いや。

伊藤 局長ですか。

海原 はい。

日米安保と日ソ国交回復

伊藤 じゃあ、先へ進みます。重光葵外相が訪米して安保改定の話をお願いしますね。

海原 これですね。安保改定だったかどうかわかりませんが、この時に申し出をしたということは何に書いてあるんですか。安保改定の申し入れをしたということは何か具体的にありますか。

伊藤 いや、あるんです、これが。

海原 安川（壮）君が付いて行った時ですか。当時安川君が外務省の安保関係の課長をしていましたからね。私はちよつと知らないです。ただ、私は安川君から聞いたら、重光さんがしきりに言っていたのはイーコル・フツティングということ。立場を同じにする。それをしきりに重光さんが言うので、それを言ってもできませんよということ。飛行機の中で、しきりに安川君が重光さんに「講義」したけれども、なかなかわかってくれずに困ったと言っていました。

伊藤 いや、もう固い信念ですからね。

海原 そうでしょう。しかし、われわれ官僚はイーコル・フツティングだとうなるかということを考えますからね。だから、とてもできませんよということ言っていて、安川君が苦労したということは聞きましたけれどもね、当時。だから固い決意があったんでしようね、重光さんとすれば。しかし、それにしてもあまりにも一本調子ではないかと思うんですけれどもね。

河野 重光さんがダレスにこの申し入れをしたというような話には、全く関心がなかったのですか。

海原 なかったです。というのは、そういうことができるとは思っていませんから。私自身の判断に予断を持っていますから。

河野 重光さんが言ったようなイーコル・フツティングはできないと。

海原 ええ。

伊藤 だけど安保改定の問題は、また数年後に現実の問題になるわけですから。

海原 ですから重光さんが行って、そこでどうこうということにはならんだろう。そういうムードができる一つの段階だとは思っていませんけれどもね。あの人もなかなか個人でスタンドプレーがお好きな方のようなことから。

伊藤 でも安保の問題については何かお考えがありましたか。

海原 ありません。何もありません。安川君の方からも連絡もない。

伊藤 いやいや、一般的に、防衛庁の課長として。

海原 防衛庁の課長としましては、そういう外の問題は……。

伊藤 それは外ですか（笑い）。

河野 安保があるから、防衛や国産はこのくらいでいいとおっしゃっ

ているわけだから、やはり安保がどのくらいのものかということとは……。

海原 それはただ、アメリカさんがいるというだけでいいんですよ。私は本にも書いていますけれども、十万だ、五万だ、三万だと、とにかくアメリカの軍隊がいて、日本とアメリカとの間に条約があればそれでいいんですよ。

河野 内容はさておき、ということですか。

海原 ええ、そうです。内容なんて何もありませんもの。だから、その内容の問題になつてくると、沖縄の問題で核の問題になつてきますからね。私が田中角さんのところへ行つて、沖縄に核は要らないということを言った。それが元で沖縄の核は「本土並み」が実現したのは事実ですけどもね。

河野 それは後のことですね。この時は？

海原 だから、そんな時にはまだ……。例によつて私は政治家というもの、海原清平という伯父を見て批判しますからね、その時その時で何か都合のいいことを言っているだけで、大体やる気がないと思つていますからね。やる気というか、可能性はまだ残っていますからね。

伊藤 要するに安保条約があつて、アメリカ軍が日本に駐屯しているということであれば、外国からの攻撃は多分ないであろうし、あつたとしても、アメリカ軍がやつてくれるであろうと。

海原 そういうことです。だつてそれしかないでしょう。

伊藤 そうですね。他に選択肢があるわけがないですから。

河野 それはもちろん選択肢としては間違つていないんですが、ただ、この時の旧安保の時代というのは、日本の国内は基地問題で揉めましたね。それが安保に対して一種、弱みになつてくるというような

ことまでは全然お考えにはなりませんでしたか。

海原 考えませんね。

河野 ということは旧安保は、特に変える必要は感じていないわけですか。

海原 これは当分続くと思つていますからね。

河野 例えば内乱条項とかも含めてですか。

海原 内乱条項というものは、それは直せばいいと思つていました。直さねばいかんということではないです。

河野 直せば直したい、ということ、それほど切実なことではないと。

海原 ないですね。それを無理矢理に、「アメさん」がその気にもならないのに、こつちからどうこう言うことはないだろう。その辺になると、ずるい「熟柿主義」で、柿が熟さないと駄目だということですね。何も今ここで慌てて何をしてもうどうということはない。要するに問題はアメリカとの間の具体的な信頼関係だ、という考え方を持っていますからね。

河野 確かにそうなんですけれども。

海原 政治家は得てして、自分がいる間に何とかしたいと思うのがみな癖ですよ。私も政治家ならそうしますからね。俺がこうした、ということにしたい。しかし役人はそんなことに振り回されずに、その時にそう動けばいいだけだという話で、ある意味では極めてずるいと言いますか、冷めた気持ですね。

伊藤 この時はお役人なわけですね。

海原 そうですね、全くお役人。いや、初めからお役人です。

伊藤 その前に国土であるかなと……。

海原 国士なんか全然、夢にも考えません。

伊藤 そうですか。

海原 これは大事なところですが、私とか、後藤田君もそうだと思うんですけれども、軍隊に行った時に、もうこれで死ぬと思いましたが、無事に帰って来たでしょう。だから、これはもう本当に第三の人生みたいなものですね。これから後どうするかということはいんですから、そんなにどうこうということは考えませんでしたね。日米安保というのは半永久的に続くと思いましたが。それはアジアの情勢からいってアメリカは手放さないとと思う。これは日本にとってはチャンスですから、この花魁、鬼畜米英しつかり……。

伊藤 抱きついて離さない。

海原 そうそう、そういうことですね。そのためには日本人の考え方を向こうが理解してくれないといけない。得てして日本人というのは物の考え方をはつきり言いませんからね。それで誤解されますから。

伊藤 やはり愛しているということをはつきり言わなければいけない。

海原 そういうことですね。困るなら困ると言えればいいんです。「ええ、どうでも」というのでは困るんです。そんなことですね。

伊藤 安保の話なんですが、一方、日ソ国交回復という問題があるわけでしょう。これは防衛庁の立場としてはどうということなんですか。

海原 防衛庁としては別に関心を持ちませんでしたね。少なくとも私の周囲では。ああそうかということですね。まあ、いいことですよ、もちろん悪いことではない。ソ連が敵だということを私は考えていなかったんです、初めから。しかし、どこが怖いかと言えばソ連ですね。世界を共产化するのが自分たちの理想だと言っていましたしね。近い

世紀には資本主義を打倒できるんだ。世界は全部共産主義になるんだ。ソ連ですらまだ共産主義じゃない。一步手前の社会主義だというのが公式の説明でしょう。ですから、中共と喧嘩していても、あんなものは兄弟喧嘩みたいなものですからね。まあ、そんな感じでしたね。いちいちその時その時の情勢で右往左往することはなかったですね。

伊藤 やはりソ連の軍事力というものは非常に大きなものであって、それは日本にとって脅威だと。

海原 その後、脅威はなくなったということをごさんおっしゃいますけれども、私はなくなっただと思っていないんです。

伊藤 なくならないでしょうけれどもね。

海原 ですから、何をもって脅威と言うかということが問題なんですね。

伊藤 だから、国交回復が行なわれように行なわれまいと何も関係がないと。

海原 ええ。それで、ソ連との関係で次に出てくるのは北方四島です。これは前から表で言っていますけれども、国際司法裁判所に提訴しろと。向こうが応ずるか応じないかは別として、とにかくいつまで経っても、俺のもんだ、お前のもんだではない、じゃしょうがない。それで、日本は国連尊重主義なんだから、国連の機関である国際司法裁判所に提訴して、ソ連が応訴して、そこで裁いてもらう。それが一番いい、と言っているんです。相手が応じない時はどうするか。それは次の問題になってくる。提訴しない。じゃあ買うか、売るか、ということも一つの道だということをやったんです。

話が出ましたから言いますけれども、例えばソ連の学者との会議がありました、産経新聞の主催で。

伊藤 それは最近の話ですか。

海原 いいえ。それはその頃のことです。今から十年ぐらい前ですか、調べてみないとわかりませんけれども。産経新聞の主催で確か三回目か四回目ですか、北海道であった。その時日本から学者は十四、五名出て来ましたかね。青山学院大学の寺谷（弘王）君なんか来ていましたからね。その席でも言ったんですが、その時ソ連側の先生が「日本は中国と南の島の問題でやり合っていたが、その問題は子孫の代に解決させるということで、一応棚に上げて国交回復したじゃないか。同じことがソ連に対してもできるじゃないか」と言われた。そうしたら、わが方の日本側の学者は反論しないんですね。私は学者じゃないですから、様子を見たんですが、誰も反論しないのはおかしいんです、ああいう国際会議で。私は皆が発言しませんから、私が立って言ったんです。「私は学者じゃない」と断って、「一評論家に過ぎないが、ソ連が、中国と同じように扱われたいと言われたことについてはおかしいと思う。南の島、北の島、同じく島である。その島の所有権、領有権の問題でソ連と中国と、日本は喧嘩していた。南の島については領有権の問題、所有権の問題は子孫の代ということであるのなら、北の島についても同じように子孫の代に解決することにして、国交回復ができるはずじゃないかと言う。形式論理はまさにそうだ。形式論理的にはあなた方の主張を認める。しかし実際の人間社会の事柄としては一つの絶対譲れない事項がある。それは何か。それは南の島には墓がない。あれは単なる岩礁であって、日本人は住んでいない。北の島には日本人が住んでいた。一万数千名が帰って来た。その島には墓がある。現にあなた方はビザなしで、去年墓参を認めたじゃないか。墓があるかないか。それが、日本が南の島と北の島の扱いを同じにでき

ない理由である」と言ったんです。

そうしたら向こうは黙っちゃったですね。黙っていることは認めたことになりません。そうしたら、極東研究所の人で、私も知っているんですが、日本語の流暢な人がどう言ったと思いますか。これは面白い話ですよ。今まで話さなかったでしょう。「海原さんは島の帰属の問題について、住んでいたかどうか、それに墓があるかどうか、墓のあるなしで島の帰属を決めるお話をされた。それであるならば、われわれは言うことがある」と、こう言うんです。「九州の長崎にはロシア人水兵の墓がある」と言った（爆笑）。笑わせるでしょう。「だから、あそこを寄越せというようなものだ」と言うんです。立って言うんですよ。ペトロフという日本語ペラペラの人ですがね。私は面白いから大きな声でワツハツハと笑ったんです。他の連中はどうしているかと思ったら、みんな下を向いてハハハと笑っている。それがソ連人の論理なんです。それで、その話は終わりましたけれどもね。

伊藤 やめたら認めたことになるじゃないですか。

海原 墓のあるなしではないと、もちろん私も反論しましたけれども、その問題は一応お互いが言いたいことを言っただけの話でした。ソ連人というのはそういうことを言う。ソ連だけじゃありませんけれども、ああいう国際会議みたいなところで黙っちゃうと負けになるんですね。負けになると、後が大変なんです。だから、とんでもないことが言われるんです。そういうことなんです。私は前から言っているように、国際司法裁判所で裁いてもらおう。決着がつかないなら、日本は買う。売って欲しい。それもできなければ共同管理もある。いろいろな方法があるじゃないか。ただ、返せ、返せ、俺のものだ、お前のものじゃない、なんて言っているだけでは、これは永遠に解決しない。本当に

日ソ双方が友好関係を回復するためには、そういう具体的は手段を選べと言っているんです。ずっと言っているんですよ。

そのことを言っていましたら、この間、あるところでソ連関係の団体の人が私に言いましたよ。なぜ、国際司法裁判所に提訴しないんだと聞いたら、ひよつとしたら負けるかも知れないということが日本側の学者にあると言うんですね。それは負けてもしようがないだろう。負けるか勝つかやってみなければね。そんなことを、負けた時は困るということでもいつまでも喧嘩しているのは、私は愚の骨頂だと思つたら、黙っちゃったですよ。そういうことですよ。

伊藤 国連尊重主義なら、負けたら負けたですからね。

海原 そうなつたらしようがない。ソ連研究者の優秀な人がそう言うんですよ。海原さん、あれ負けるかも知れない。負けたら負けたでしょうがないから。じゃあ、負けた後どうするか。売ってくれ。共有にしよう。それもあるじゃないかと言っていますが、そういうことです。表でそういうことを話していますけれどもね。

伊藤 重光さんから、今度は日ソ国交回復の問題ですね。国交回復した後でも別段ソ連の軍隊との間の交流とか、そういうことはないのですか。

海原 何もありません。何を交流するかですよ。新聞あたりが、よくお互いに訪問して、どうだこうだと言ってくれるけど、あんなもの交流でも何でもないですよ。

伊藤 でも一応格好がつくじゃないですか。

海原 格好がつくと思うだけで、それはもう皆さんには逆らいませんが、どうということもないと思うんですが、私は。

河野 この国交回復後、北海道の防衛についてこちらの具体的な態勢

が変わつたということもないんですか。

海原 ないですね。全然変わっていませんよ。北海道の防衛なんて口で言うだけで、陣地がないんですから。

河野 もし国交回復したら陣地がなくてもそれでいいんじゃないか、ということにもなりますね。

海原 それは誰も言いませんね。そういう問題についてはもう考えないことにしているんです。私はそこに日本人のおめでたいところがあると思うんです。今の防衛庁がなぜそういうことを真面目に考えないかと思うんですね。それから政治が本当に責任を果たすということなら、国会や内閣委員会ですら、そういうことを議論すべきなんです。秘密会にすればいいんです。ちゃんとそういう規定があるんですから。秘密会で、一体、日本に対しての脅威は何があるんだと。今は何がある。今はいいとして、十年後はどうなるんだ。じゃあ、日米安保体制がなくなつた場合どうなるんだ。そういうことを全部考えるのが政治家なんです。国会に防衛委員会を置かないといけません。それを置かない。だから、一番さぼっているのは私は政治だと思つている。政治がさぼっているのに、私たち官僚が一所懸命、ここまでやつたんですよ。その官僚がやつつけられているから不愉快なんですがね。

伊藤 そうですか。やはりまだ官僚だ。

海原 元官僚として。

佐道 ちよつと細かい話になりますが、ソ連と国交回復をすると、大使館が開かれますよね。大使館が開かれると同時にソ連の人たちも入ってくる。そうすると、いわゆる機密保護の問題とかが出てくると思うんですが。

海原 ちよつと待つてください。機密保護というのは何を言っている

のかわからないですよ。

河野 でも、この当時日米間でいろいろなやり取りを見ると、アメリカ側は日本に対して機密保護が非常に甘いということをしつば言いますね。

海原 甘いというより、日本にはないと思っています。その話はしませんでしたか。瀬谷とか沖繩に施設がありますけれども、陸上自衛隊が情報収集をやっています。「二部別室」というのがあります。これはその関係をやっているわけですが、陸上自衛隊の陸上幕僚監部の第二部の別室というのがあります。私が防衛局長になった時にアメリカ側の責任者に真っ先に言ったんです。日本の自衛隊員があなた方の施設に行つて、いろいろ下請けをやっている。いろいろな通信の傍受を機械で受けている。どういう情報が手に入っているのか、日本側には何の連絡もない。おかしいと思う、と言ったんです。だから、日本の自衛隊は要するに米軍の使役労働をやっているだけである。どういう情報がそれによつて入つたか、全く知らない。おかしいと思わないかと言つたんです。そうしたら、それはちよつとおかしいと言つてます。そう思うなら入手機報の内容を寄越せと言つたんです。われわれの働きでどういう情報が取れているのか、通信情報ですね。そうしたら、それは自分の判断では言えないと言つて。それはいい、もちろんワシントンと相談してくれと言つたら、十日ばかりして連絡がありました。

向こうの担当者は大佐ですね。言つたことは「日本には秘密保護法がない。秘密保護法がない国に対しては、アメリカの秘密は提供できないというのがワシントンの判断だ」と言つて。それで私は「おっしゃるとおりだ。アメリカには大変嚴重な秘密保護法がある。しかし原爆の秘密はソ連に盗まれたじゃないか。だから、法があるかないかとい

うことが判断の基礎になるのはおかしい。われわれはそんなに重大なことを要求しているんじゃないんだ。現にわれわれの隊員が働いて手に入れた情報はこういう内容のものか、ということだけを知りたいのであつて、それを寄越さないというような関係はおかしいと思う」と言つた。「うくん」と言っているから、「もういっぺんワシントンに言え。それでは単にわが自衛隊員は使役だ。おかしい。秘密保護法がないことはよく知っている。しかし秘密保護法があつてもソ連に盗まれる。ということは、問題は人間に対してのマン・トゥ・マンの信頼関係だと思つて。俺とお前との関係でどうだ。もういっぺんワシントンに照会しろ」と言つた。そうしたら十日後に返事が来ました。「オーケー」だった。

それで、私の時にはちゃんと英語で来ました。ザーツと書いてある。その時に彼が言つたのは、「この、わが方が提供している情報は、ヨーロッパの同盟各国に対するのと同じ程度の扱いである。日本には秘密保護法はないけれども、ユーとミーとの間のパーソナルな信頼関係に基づいてこれを提供する」ということで、私が防衛局長をしている間はすつともりましたね。

伊藤 後にはつながらないですか。

海原 知らないです。私は聞かないですから。

河野 その時に入つて来た機密情報が、日ソ国交回復を通して、例えばソ連側に……、というような懸念は全く考えられないですか。

海原 考えられませんね。ということは、まずソ連をどう見るかという問題があるんです。ソ連の情報関係がどのように動いているだろうか、という問題ですね。ソ連という国は、例えば戦後の日本に来て、どうした、ああしたという話がありますけれども、それほど関心を持

ってやっていると思いませんね。

河野 それはソ連が秘密情報一般に関して関心がないのか、あるいは日本に関して関心がないのか。

海原 日本です。日本の秘密なんてないですよ。

河野 ソ連から見ても、あまり価値のあるような情報が日本にはないということですか。

海原 ないですね。というのは、何でもかんでも「アメさん」に頼っているでしょう。外国での原子力の実験で灰が飛んできましたね。灰の分析だって日本ではできないものだから、アメリカに頼んでやってもらっている。それを待っているだけです。ソ連の原子力潜水艦の行動なんかも、アメリカからもらっているだけなんです。日本オリジナルのものはないんですよ。

河野 ただ、オリジナルなんかなくても日本がアメリカから受けた情報を、日本を通してソ連が取るということはないですか。

海原 それはまた別の問題ですね。そうなるかと……。

佐道 現に戦後何件かソ連がらみで逮捕事件にまで発展した機密漏洩事件がありますね。

海原 ありましたね。それは極めて些細な問題ですよ。

佐道 そこで漏れたものは別に大したものではない。

海原 端末の問題、特に榑崎議員あたりが時々暴露しましたけれどもね。私は大したことではないと思いますね。それを言い出すと、これは切りがないんですがね。何を情報と見るか。私がびっくりしたのは、ワシントンへ行って調べてみたんですけども、日本の週刊誌を全部翻訳しているんですよ。こんなものは何の情報のためなんだと言うんだけれども、翻訳しているんです。それはあらゆる情報を扱いたいん

ですね。

東京での話で、私のところにCIAの担当者が来まして、いろいろ話をした際に言われたんですけども、当時、日本からウラジオに多くの日本船が行く。ウラジオ港内のいろいろな倉庫の状況とか何とかを教えてもらいたいと言う。「そんなもの意味ない」と私は言ったんです。あなたは意味ないと思うかも知れないけれども、われわれにとつては意味があるんだと言うんですね。「そんなことは防衛庁に言ってくるな」と言ったんです。「船会社に言え」と言ったんです。船会社に行つて、社長に会つて、どこかに行つた時に写真でも撮つてもらつて、それでいいじゃないかと言つた。そうしたら、それはそうだとつて、そういうことになったんですけどもね。向こうもずいぶんいろいろな人がいるんです。だから、そういうウラジオの倉庫がどうなつているか、そういうことを集めるのが情報活動だと思つている人もいますね。これはしょうがないですね。

伊藤 もしかしたら、重要な情報かも知れない。

海原 かも知れない。しかし、およそ今までの経験から言いますと、大したものはないですね。

伊藤 自衛隊には、やはり情報収集機関というのはあまりないわけですか。

海原 能力がないです。

伊藤 能力の問題ですか。やる気の問題ではなくて。

海原 それは何をやるかの問題ですね。その話になりましたから、私の駐米大使館時代の話に関連して申しますと、私だけで一切終わらなんです。あのアメリカの参事官というポストは、海原参事官が最初にして最後なんです。

佐道 防衛庁から行ったのは、ですね。

海原 それは一応問題になっていましたからね。まず、アメリカ大使館の参事官職は初めてなんです。これを出すことについては、大蔵省との間の話で予算が付いたんです。それまで陸・海・空から一佐以下が行っていました。大佐のアタッシェですね。その上に一人参事官職、ジェネラルを置きたいということで、防衛庁と大蔵省と話し合いがあった。ところが、「制服」か文官かどっちが行くかでまとまらないんです。

大蔵省の当時の局長は石原(周夫)さんです。後の次官、前の防衛庁の経理局長ですね。それから主計官は村上孝太郎君。大蔵省は文官を出すべきだ、というのは私のことです。それから防衛庁の方は、私の上司の林局長は「制服」と言っているんです。喧嘩しているんです。それで、予算は付いたけれども、「制服」か文官かということは預かりということで、延ばしていた。その後で、結局大蔵省の言う通りになって、文官ということで、私が行ったんです。そういう経緯があるんです。その陸・海・空の防衛駐在官の上にジェネラル級を置きたいというのが「制服」の意図。それに対して大蔵省の方は、いや、そこは文官がいい。それで私が行った。

これはどういうことになったか。向こうに私が行って初めて気がついたんですけれども、これは非常に良かったんです。というのはワシントンには世界中から「制服」のアタッシェが集まっているでしょう。あちこち行かれると困るんです、ペンタゴンは。それで全部、各国のアタッシェは情報を取るなり何なりで、陸・海・空の軍人その他に会おうとすれば、陸軍省の第二部長の下にそういう担当があるんです。向こうの陸軍の第二部長の下、その担当を通じてしか、各国の武官

はペンタゴンにコンタクトできない。そういうルールがある。私は、その外なんです。一般の政治担当の参事官ですから。安川君や小川君と同じなんです。それで、政治担当の中で防衛関係事務をやるんですね。ということは私はそういう規則の中に入りませんから、誰にでも会えるんです、電話一本で。私が例えば空軍省の参謀長に会いたいという時には、私が電話をかける。その時に「空」のアタッシェを連れて行くんです。そういう意味で行動の自由がある。私の制度は、結果的に非常に良かったんですね。そこまで大蔵省の方が最初から知ってはいなかったんですけれども、私が現地に行ってみて、なるほど面白いと思った。アメリカは、さっそく真似をしましたね。アメリカの日本大使館に私と同じようなポストを設けました。私は、ですから大使の部下ということで行ったわけです。

伊藤 外交特権を持っているわけですね。

海原 正式の外交官。アタッシェと違うんです。そこで私が二年勤めて帰って来るでしょう。後が来ないんです。

伊藤 予算がないわけではなくて。

海原 予算は付いている。誰を充てるかが決まらない、東京で。自薦、他薦が殺到して、防衛庁でもって海原の後を誰にするかというのが決まらない。その時のアメリカの日本大使が朝海(浩一郎)さん、朝海大使が私に言ったんです。「海原君、君の後任が決まらないそうだが、もし後任が来ないようなら君がもう一年やれ」と、こう言うんですよ。私も「それでいいですよ」と言った。そういうふうには朝海大使は言うんですよ。「海原君、君のポストは非常にいいポストだ。防衛庁はわからないんだ。もし君の後任が決まらないのなら、お前さんがもう一年やったらいいじゃないか。二年でも三年でも同じだから」と。

私は「そうします」と言った。

そうしたら東京ではどうだ。私の予算で、トルコに「海」の武官を出したんです。おかしな話なんです。なぜトルコに武官が行くか。当時の「陸」の第二部長、昔の情報関係の軍人ですが、この人が頑強に言ったことは、昔帝国陸軍はソ連の情報をトルコで取ったと。トルコというところは昔からソ連とは仲が悪いんですよ。そこで、あそこからいろいろ入って来た。だから、トルコに是非駐在武官を置け。そういうことですね。どこにどの武官を出すかというところは陸・海・空でずっと順番が決まっているんです。それで今度はトルコの武官で「海」の番だと。トルコに海上自衛隊から武官を出すということになったわけです。ところがトルコには海軍は、まずないと言っているでしょう。

伊藤　そうですか、ないんですか、あそこは。

海原　いや、ありまして、ほんのひとかけらのものなんです。だからトルコにおける陸・海・空の力関係から考えれば、「海」の武官が行ったって駄目なんです。そういうことになっちゃった。だからワシントンの日本大使館での参事官職は私限り、私が初めて終わります。

伊藤　もう、今日までそうなんですか。

海原　ええ。馬鹿馬鹿しいことだと思うんですがね。

伊藤　珍しい職につかれたものですね。空前絶後の職ですね。

海原　こんなことをお話ししてもわからないでしょう。私から言えば、馬鹿なことが現に行なわれていたんです、防衛庁で。そういうことですから、いろいろと問題点を出しておられますがね。

伊藤　さつきちよっと話が出ましたが、砂川事件をはじめ各地で基地

反対闘争というのがこの時期うんと盛り上がりますが、いろいろと苦慮なさったのではなからうかと思えますが。

海原　これは全く関係ないです。

伊藤　防衛庁としては関係ない。

海原　ありません。

伊藤　これは警察の問題だということですか。

海原　そうです。その辺は、はつきり私たちはピシッと分けていました。簡単に言えば余計なことに口出しや手出しをしても歓迎されません。警察には警察の、それなりの物の考え方があるでしょうしね。あるんです、結構ね。

佐道　古巣だけによくわかる。

海原　そうそう。あるんです。

伊藤　余計なことに手を出して火傷してもね。

海原　向こうから頼まれたらやる。それは馬鹿みたいな話を言いますと、例えば、初め防衛庁には自動車とかがないでしょう。私は「いざという時に困るので、警察から借りろ」と言っただけです。「警察はいっぱい車両を持っている。だから運転手ごと借りたらいいじゃないか」と言ったら、法規課長が麻生君です。「法律に規定がない」と言うんです。だから、「おいおい、お互いに政府の機関じゃないか。それが共通の目的のために、一応警察が第一線、防衛庁、保安隊が第二線だけれども、お互いに一緒の行動をやるのだから、回してもらったらいじゃないか。官庁間の便宜供与というのがあるだろう」と言っただけです。「うん」と言うんですね。「君がそんなに疑問を感じるなら、法制局に行つてこい」と言っただけです。行って、私のように言ったらオーケーになったんです。官庁間の便宜供与です。警察にはい

っぱい車があるし、運転手もいるのに、民間のトラックを借り上げないといけない。そういう議論があるんですよ。これは例なんですけれども、そういうことが、お互いに警察との関係となると非常に神経質になりますね。

それからもう一つついでに言いますと、これも時々出てくるんですが、警察は弱い、だから自衛隊を出せ、と言うんです。特に上村さんまでが、そういうことを言いましたから。あの頃いろいろありましたね、騒動が。

伊藤 ええ、安保の時ですね。

海原 ええ、その時です。だから自衛隊を出すと。私は言ったんです。「上村さん、まず警察官は個人でどうするこうするという教育を受けて、能力もある。自衛隊は部隊で行動するものです。一個中隊でもって弾を撃つか撃たないかということだ。各個人が判断してどうこうするのではない。これが第一です。第二、他所から自衛隊を連れて来て夜間歩哨に立てる。地理が全然わからない。そんなものは簡単に敵の捕虜になりますよ。だから自衛隊を持って行ったら警察の補充ができるかと言ったら、大間違いだ。警察は普段からその辺の地理も知っているし、人的関係その他もちゃんと手に入れている。そういう基礎案件がある。何も知らない保安隊員が行って、警察と混ぜたら絶対できません。ところが警察は弱い、保安隊は大丈夫だというふうに政党も、国防部のあたりが思っているようだけれども、とんでもないということ、あなたが教育してください」と言ったんですね。しかし、そういう考えですね。警察では駄目だと言う。

河野 ということは、国内治安に関しては、防衛庁はもう別だということ、ボリシーとして考えていらっしやった。

海原 そうですね。

河野 それは先生だけではなく、防衛庁全体がそう考えていたんですね。

海原 そういうことです。最初は一部に、警察は弱いから保安隊が出て行かないといけない、なんて煽る人はいましたよ。

伊藤 中ですか。

海原 ええ。だから、それは間違いだと言っているんです。まず中で、のそういう認識をきちんと統一するのも苦労しましたね。

伊藤 これは、出て行ったら敵を殲滅しなければならぬわけでしょう。

海原 そういうことです。出て行ったら、撃つんですよ。弾を撃たなければ駄目なんです。警察はそうじゃないんです。弾は最後の手段なんです。それまでに、ちゃんと警棒もありますしね。それから肉体的な格闘もある。最後の手段として拳銃の発射になる。自衛隊の方は、まず行って並んで発射する。だから基本的に違うんですよ。

それから当然、裁判が前提になりますからね。「自衛隊の方は」証人保全なんて何も知らないんだから。その前に地理も知らないですよ。田舎の部隊を連れて来て麴町あたりに置いて、どこがどこかわからないですよ。

伊藤 大体、司法警察官ではありませんからね。

海原 そういうことです。それを、しかしきちんと整理するにも時間がかかりましたね。そういう時代だったということです。ですから、今にして昔を考えて、何でそんなことをやっていたかと思われるかも知れませんが、なかなか認識を統一する、事実の認識を同じものにするにも時間がかかりましたね。

岸訪米に同行

——「第一次防」を説明

伊藤 アメリカにいらっしやる前の年に岸内閣ができて、岸さんが安保改定の問題で訪米されますが、これには同行なさったんですか。

海原 アイゼンハワーとの会見でしょう。あれは付いて行ったんです。外務省から言われましたね。

伊藤 その時は課長の時代ですか。

海原 保安課長でした。順序をきちんと整理しますと、まず岸さんの訪米に当たって、国防の基本方針を決めました。これは五月二十日です。それから第一次防衛力整備計画、これは六月十四日に決めました。これは両方とも岸さんの渡米のお膳立てです。行ってアメリカと話し合うについては、日米安保条約があるけれども、その下で具体的に日本はどうするんだということをきちんとしないといけないだろう。それは全部の意見ですね。それで国防の基本方針を決め、それからまた第一次防衛も決めて、それを持って行くわけです。そこでその第一次防衛の説明に私が行くわけです、一緒に。

伊藤 ということは、要するにその策定過程の中心になられたということですね。

海原 そういうことです。それで、岸さんが向こうでダレスと会った。「岸さんは」その時に「今度私たちが作った第一次防衛については海原保安課長を置いておくから、彼から充分話を聞いてくれ」ということを、きちんと言うわけです。それで私が残るわけです。残って向こう

の陸・海・空の担当者已全部説明した。

それまでに、いわゆる長期計画の案というのを何回も向こうに渡しているんです。堂場さんの本は持っておられますか。堂場さんの本にあります。例えば重光さんが行く時も一応長期計画の案を持って行っているんです。その過程で六回ばかり向こうに渡してあるんです。

伊藤 その策定も、先生は関わっているわけですか。

海原 ええ。

伊藤 重光さんが行かれる時も。

海原 ええ、そうです。それは整理して持って参ります。それは私が全部やりましたから。堂場君の本に細かく書いてあります。そこには、誰がいつ誰に渡したということも書いてあります。

伊藤 次回は、そこから伺ったほうがいいですね。今日の残りの時間で伺うよりも、この次そこからお願いできますか。

海原 じゃあ、そこは整理して申し上げます。

伊藤 はい。その長期防衛計画の流れと、さっきおっしゃったアメリカへのその説明ですね。それから、また向こうの反応といいますが、そういうことを教えていただきます。岸訪米の時の話ですね。

海原 それで大使館で何をやったかということ。

伊藤 はい。今度はその翌年に大使館に行かれるわけですから、大使館で参事官として何をなさったかということ、次回に一連の動きとしてお話し願います。

海原 整理しますと、先ほど言いましたように、国防の基本方針は五月二十日に決めました、政府で。それから第一次防衛というのを六月十四日に決めました。この二つを決めて、それを持って岸さんが訪米した。それで共同声明を出したのが六月二十一日ですね。そのあと私は

数日間ワシントンに残って、第一次防衛力整備計画の説明をした。それで帰って来た。こういうことなんです。

伊藤 それをもうちよつと歴史的に遡って、お話しいただきたい。

海原 はい。実は岸さんが持つて行く前に、三回ぐらい、こういうものをやっているということを連絡したんです。それに区切りをつけたということですね。だから、重複しますが、国防の基本方針も、第一次防衛力整備計画も、ともに岸訪米のお膳立てをするために、この時期までにきちんとやろうと。そこから話に入ろうということですね。それが一般的な話の進め方なんです、なかなかそれが細かく書いていないんですよ。『防衛年鑑』にも書いていないんです。もちろん、岸さんとか上の方の政治的な関係できちんとしていた。それでなければ、こういうふうになかなかうまくいきませんよ。だから私はその意味では、岸さんというのはきちんとしてよく整理されたなと思います。

伊藤 その過程でも岸さんとはずいぶんお話しされたんですね。

海原 もちろんしています。

伊藤 そういうことも含めて今度お話しください。

海原 はい。ずっと整理して持つて参りましょう。

伊藤 お願いいたします。今日はどうもありがとうございます。だいぶお疲れだと思います。

海原 いやいや、別に疲れはしません。整理しながらこうだったな、ああだったなということで、参考になるんです。

伊藤 そうでしょうが、そう簡単にこれだけ複雑なことを整理はできないと思います。

海原 だから間違えたらいけないと思ひましてね。それから一つ提案があるんですが、一〇分ばかり雑談の時間を設けていただけませんか。

伊藤 ということは速記なしですか。

海原 もちろんそういうことです。

伊藤 これ「録音機のテープ」は回っていますから。

海原 それはいいですよ。だから書くのをやめて、一〇分ばかり。ということ、一つその例を言いますね。

伊藤 その話があるわけですね。

海原 ええ、一つ。どんなことかと言いますと、私がお話ししたいのは、「『情と理』の中で」後藤田君が平井学君のことをちよつと言っているんです。あれは取材をされたんですか。

伊藤 はい、私がやりました。

海原 平井学、私の同期で親友ですが、これが反軍的であるということ、どうこうと書いてあるんです。それだけ書いてあるんです。その具体的な事実を一つも言っていないんです。皆さん、どなたも質問しなかつたんですか。

伊藤 いや、聞き流したんですね。

海原 『情と理』に出てくるんですけれどもね。それを知っているのは私だけなんです。

伊藤 そこまで話されたんだから、今日はちよつとそれを最後に……。

海原 雑談ですからね。

私は経理部の幹部候補生を受験するわけですね。平井学君というのは、私の友人の中では一番古い友人なんです。私が一高の一年の時、入ってまだ入学式が行なわれる前ですが、東寮五番という部屋に入る。私が東寮の五番室にいたら、「海原君はいますか」と言つて入つて来たのが平井君なんです。どういふことがというと、平井君は徳島中学の開校以来の秀才と言われていた。私の中学の校長は四宮茂という人

なんです。つい、この間も申し上げた。この四宮さんは徳島の名家の出なんです。そこへ当然、平井君が挨拶に行った。そうしたら「第一中学から海原君が入学したから、友だちになってやれ」ということを言われたんですね。それで平井君が東寮五番の私の部屋を訪ねて来た。それ以来の付き合い。だから昭和七年の四月以来、今日までの付き合いです。

伊藤 私が生まれる前だな(笑い)。

海原 そうですか。まだお生まれになられていない。

伊藤 いや、もうじきですが(笑い)。

海原 昭和七年以来……。同じ連隊、徳島から満州に行く。連隊が同じでも彼は第九中隊、私は第二機関銃中隊で、離れていますから、全然顔を合わせないんですよ。初年兵ですからね。日曜日は酒保が利用できるんですが、そこでもなかなか会わない。経理部の幹部候補生だけで、幹部候補生隊というのがつくられまして、その隊長は教育隊長というので士官学校出のバリバリ少尉なんです。たまたま師団演習があった、八月に。そうすると幹部候補生ばかりで一つの隊をつくるわけです。その時に平井君と会ったんです。

彼が私に「おい海原、ちよつと心配がある」と言っています。「何だ」と言ったら、「この間の試験で、実はちよつと俺はいたずらをした」と言うんですね。試験というのは、例えば各連隊から幹部候補生の資格者を集めて教育されますね。それを甲乙に分けるわけです。甲というのが士官、乙は下士官。そういう試験を師団で最後にやるわけです。その試験の時に、平井君が「俺は実はちよつといたずらした」と言うんです。平井君はいま申しましたように「徳中」の秀才ということですから、四十三連隊の中隊長はほとんどが「徳中」の彼の後輩なんです。

す。みんな知っているわけです。だから「平井候補生は白紙を出しても甲に通る」というのが、もっぱらの評判なんです。

前にも少し話したかも知れませんが、その頃、われわれの仲間では甲になれば五年、乙なら三年、というのが通り相場でした。平井君は早く帰りました。郷土に事情がある。お母さんを一人残して、弟はやはり兵隊になつていますからね。しかし、平井は白紙を出しても甲になるというのが定評だったんですね。そこで事件が起こるわけです。

白紙で出す気だった、本当に。だけど平井の頭では、白紙を出しても乙になるのはまだ怪しいと思つたでしょうね。そこで答案に余計なことを書いたんです。

師団司令部を一番怒らせたのは、師団の経理部長は部隊の施設、営繕関係の予算の執行については陸軍大臣にいちいち伺いを立てる。師団長の決裁では駄目なんです。師団長の決裁にすると、勝手なことをやられるわけですね。そこで陸軍省でそれをコントロールする意味で、営繕に関しては陸軍大臣に直隷しているんです。営繕というのは建物の建設とか補修です。

伊藤 もちろん、ある程度以上の金額のものですね。

海原 ええ。ですからそういう質問が出るわけです。「なぜ営繕事務については師団経理部長は陸軍大臣に直隷しているか」という質問です。どう答えたと思ひますか。びっくりされますよ。「海軍大臣に直隷してはいけなから」と書いたんです(笑い)。

それから、夜間四時間以上の演習をやった場合にはおやつが出るんです。小夜食という。「小夜食を説明せよ」という質問が出た。そうしたら、「あんぱん、饅頭」と書いた。「夜間演習をやつて四時間で

上経った時には」と書けばいいのに書かない。そういう答案を書いたんですね。

それで、師団で担当の将校が集まって会議をやりませうでしょう。その時、一人の将校が「私の非常に至らぬせいでありますしようが、実は平井候補生からこういう答案を書かれました」と言ったんですね。そうしたら、五人ぐらいいるんですが、みんなが「俺も、俺も」となつたんです。みんなに、そういう答案を書いちゃった。一番怒らせたのは海軍大臣云々の答案ですね。そこで、われわれが演習に参加している間に、師団の経理部で採めるわけです。しかし、その時幸いだったのは身分は全部各連隊単位です。私たちは四十三連隊員。だから、師団の経理部ではないんです。師団経理部長から四十三連隊長宛に平井候補生はけしからん、こういうことがある、と言ってきたんです。

そこで私が教育隊長に呼ばれるわけです。「お前は平井と親しいということを知ったから聞くが、仮にお前が内務省の人事課長で、こういう試験問題を出して、志願者がこういう答案を書いたらどうする」と言つて、私に一枚一枚読むんです。参つたですね、これは。そうして師団司令部はカンカンになつてゐるわけ、みんな。それで内務省に通報すべきだと言ふ。

それを抑えてくれたのが連隊なんです。先ほど言いましたように、身分は連隊にありますから。四十三連隊長は村田孝生大佐。その副官の土井中佐という方が非常に温厚な方で、ビルマで戦死されましたが、この土井さんという方が奔走したんでしょう。師団には断つて、将来見込みのある人間であるからということ、軍法会議とか内務省への通告を全部抑えた。ただし幹部候補生は資格剥奪、ただの一等兵になるわけです。そういう理由なんです。連隊では平井というのは偉いと

いうことを知っていますし、そういう事件があつて、今まで幹部候補生、上等兵だった男が星二つになるでしょう。だから本隊には置いておけない。第一線の監視所に出しました。国境の監視所では、ソ連の鉄道をずっと監視して、今日は何両車両が通つたかということ報告するんですね。そういうことで、彼は元の一兵卒に下がつて、その後順当に上がりまして、結局軍曹で帰りました。

後藤田君の本を読むと、あいつが一番早く帰つたと書いてある。その事実を説明しないで、彼は反軍思想だから問題を起こしたんだと書いてある。後藤田君は、これを知らないはずなんです。だって、私しか証人はいない。だから、どうしてあんなことを彼が言ったのか知りませんが、そういう事件があつたんです。

平井君とは昨日も電話で他のことで話したんですが、いまだに付き合つています。まあ、いろいろとあつたですよ。連隊では理由もわかつていますから。私たちの身分は幸い連隊長村田孝生大佐が持つていまして、師団からは、「反軍思想だから、嚴重処理をしろ」という連絡が行くわけですが、それに対して抵抗して、幹部候補生を剥奪ということ、結局彼は早く帰つたんです。これは話しましたね。

伊藤 良かったと言えれば良かったですね。

海原 それは良かったです。三年ちよつとで帰りましたね。

佐道 所期の目的は達したわけですね。

海原 そうです。これはしかし、今だから言えるのでね。しかも、これは本人は否定するんですが、私は葉書を受け取つたですから忘れません。彼は内地に帰つて、どこかの地方県庁の課長になるわけですね。そこから寄越したんですけれども、「海原、いつまでくずくずしているか。俺は一子をもうけたぞ。早く帰つて来い」という葉書が来たん

です。よくこんな葉書が届いたと思いますね。検閲を突破した。本人は否定します。俺はそんなもの出した覚えないと。しかし、私のところに来たんですからね。

これがその『情と理』の部分です。「『情と理』四九ページのコピーを示す」。線を引つ張つたところですよ。「彼は幹部候補生の試験を受ける羽目になったんですよ。それで受けた」。これはおかしい。周りがどうだこうだということはないですよ。それから、「反軍思想だということ、内務省の役人にあらざる奴だと、軍の師団司令部から内務省に連絡をしようとした。そして、内務省を辞めさせる、なんていう事態になったんだ」。これではわからないでしょう。そういうことがあつたんです。

伊藤 まあ、お話の時は、往々にしてこういうことはありますよ。

海原 そうですか。私はこれを言っておかないと。こんなことでは反軍思想の持主と思われる。

伊藤 今、おっしゃっていただきましたから、ちゃんと記録に残ります。

海原 そういうことですが、特に私が言いたいのは軍隊に入っていますと、特殊な意識になりますね。平井君は先ほど言いましたように、白紙を出しても甲になるとみんなが言うものだから、本人もその気になったでしょうね。俺もやはり早く帰りたいんだと。だから幹部候補生は受ける。しかし、乙で三年で帰りたい。そういう気持だったんですね。

伊藤 それを書けば乙になるだろうという感じなんですよかね。

海原 要するに、一定の状況下においてはそうなるということです。

伊藤 はい、わかりました。他にもまだそういうことがありますか。

海原 まだ、いいですか、ちょっと持って来ましたから「『再軍備の軌跡』三二九ページとその前後のコピーを示す」。この千賀（鉄也）君が、嘘を言っていること。『再軍備の軌跡』という本は持つておられませんか。あれに出てくるんです。経団連で作った防衛力整備計画をペンタゴンに堂々と出した、ということをやっているんです。しかし、事実はそうではないんです。要するに、私と安川君が行って反対した、この事実は前回お話ししたでしょう。それを彼は堂々とそう書いています。これが私にはわからないんですがね。

伊藤 これは本人が書いたことではないんでしょう。

海原 ええ。「談」を取っている。

伊藤 だから、その「談」を取った人がどういうふうを受け取ったかにもよるんじゃないですか。

海原 ちゃんと「提出があつた」と書いてある。「この試案は、極秘に駐日米大使館を経て、米国防総省に提出された。日本政府と保安庁へは、非公式に渡されている」。とんでもないことなんですよね。こういうふうには読売新聞に書かれますと、これが残っちゃうんですね。それから統合の問題はこの間お話ししましたね。統合なんかできないということ。

伊藤 はい。伺いました。

海原 それの具体的な例です。統幕議長経験者の座談会「海原氏の『日本防衛体制の内幕』の一八二ページ前後のコピーを示す」。これを見ただくと、いかに彼らが統合ということについては何もできなかつたか、しなかつたかということがはつきりしますね。

佐道 この文章自体は海原先生が作られたものですか。

海原 この文章は私が書いたんです。そこに、この『国防』の座談会

の記事を引用したわけですから。これは名前は書きませんでした。あまりにおかしなことを言っているからやめたんです。

伊藤 それで「別の一人は」という書き方なんです。

海原 ええ。こういうことを座談会では堂々とおっしゃるんですからね。そこで、統合幕僚会議の設置に私が反対したのは正しかったということになるわけですね。それより私は今、あまり毎日が面白くないのは、やがて『防衛白書』が出ることです。また作文でしょうね。いつまで皆さんあんなことを認めておくんですか。

伊藤 僕は認めていない。

佐道 認めない、と言っても。

海原 だって、私がいくら書いても駄目なんです、もう。この前一高の向陵懇話会というのがあります、そこでお話をしたんですが、その時には『白書』に出ている図面、極彩色のものを全部に配りまして、こういう『白書』が出た。これは全部絵空事だと言ったんですがね。今日はアメリカ大使館「の話」まで行くと思いましたが。当時の小切手帳を持って来ました。これで、銀行から借金をするんですよ。それで払っていくわけです。当時の私の月給が、ああ、こんなにもらっていたかと思つて。一、〇一ドル。一ドル、三六〇円ですからね。約四十万ですよ。それでも、いきなり行くともないでしょう。だから銀行から借金をするわけです。借金しておいて、それを返していくわけです。そういう話をしようと思つていたんです。

ところが日本からいっぱい人が来て、必ず大使館へ来るわけです。例えば、伊藤先生の紹介の名刺を持って来る。伊藤先生とはそれほど馴染みがないのに、「この人が行くからよろしく」と書いてある。そのよろしくとは何かというと、当時ワシントンはニューヨークと違つ

て商社がないでしょう。誰もいないんです。その名刺を持って行くと案内してくれる。それから一席ご馳走してくれる。それで、全然知らない人から紹介状をもらうんです。これは日本式のいいところだけでもね。もらった人は当然なんとかやっつけてあげる。

伊藤 それでやっただんですか。

海原 やったですよ。金がないんですよ。機密費があるのは大使と公使だけ。他はなし。

伊藤 だいぶ時間が過ぎましたね。どうもありがとうございました。

〈以上〉

政策研究大学院大学(政策研究院)

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

〒162 - 8677 東京都新宿区若松町 2 - 2

Tel : 03 - 3341 - 0458 Fax : 03 - 3341 - 0446

(無断転載禁)